トラ・オブ・ラビリンス

ガーネスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トラ・オブ・ラビリンス

【Ｎコード】
Ｎ１６１４Ｔ

【作者名】
ガーネスト

【あらすじ】
迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
ガーネとトラは、迷宮に来る前の自分に関する記憶は、名前以外ありません。
また、彼らが居る、この迷宮には、道と階段しか存在しません。
これらは、迷宮全体に広がっています。それ以外は、暗黒の闇に覆われています。
この迷宮に広がる道の横には、時折、ドアが現れます。

そのドアは、迷宮の旅人を、別世界へといざないます。
旅人は、自分の世界に帰るドアを見つけるために、迷宮をさまよっているのです。

第1話「大玉乗り。」（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第1話「大玉乗り」では、迷宮のドアより、別世界に行ったガーネと猫のトラが、

そこで開催されている村のお祭りを楽しみます。
ガーネは、そこで、大玉乗りに挑戦する事になるのです。

第1話「大玉乗り。」

第1話「大玉乗り。」

そこには、道がありました。
それは、どこまでも、どこまでも続いていました。
普通の道もあれば、階段になっている道もありました。
真っすぐ伸びているもの。上に伸びているもの。下に伸びているもの。
らせん状に伸びているもの。枝分かれしているもの。
さまざまな道が、見渡す限り、その空間には広がっていました。
そして、これらの道以外は、暗黒の闇に覆われていました。

この道をさまよう旅人がいました。
旅人が、その道から足を踏み外しても、別な道に降り立つ事が出来ました。
旅人が、その道を歩いて行くと、道のすぐ横に、ドアが現れる事もあります。
そのドアを開けて入ると、そこには、別の世界があります。
旅人は、その世界で、ドアが現れるまで、時間を過ごすのです。
そして、現れたドアを見つけて開くと、またこの空間に戻ってくるのです。
旅人は、いつか自分の世界に帰れると信じ、旅を続けるのです。
この空間の事は、迷宮（ラビリンス）と呼ばれていました。
そして、そこをさまよう旅人は、迷宮の旅人と呼ばれていました。

ガーネは、この階段を歩いていました。
どこまでも続く階段をただ、ひたすら歩いていました。
「私は、どこに行けばいいのだろう。

どこが、私の世界であり、そしてこの旅の終点なのだろう。」
ガーネは呟きました。
自分がどうして、ここにいるのか、どうやって来たのか、憶えていませんでした。
気が付いてみたら、ここにいました。知っているのは、それだけでした。
ガーネはため息をつきました。
そして、考えあぐねていました。
すると、右のポケットが、がさごそと物音を立て始めました。
しばらくすると、そのポケットから可愛い顔が現れました。
「おはよう。トラ。」ガーネは声をかけました。
「おはよう。ガーネ。」トラは元気そうに答えました。
「ここはどこなの？」
「まだ、階段ですよ。」ガーネは答えました。
トラはポケットから飛び出して、ガーネの右肩の上に、ちょこんと座りました。
「まだ、ドアは見えないの？」
「３０分ほど、歩いているけれどまだですね。」
「階段ばかりじゃ、疲れるんじゃない？」
「いや、この空間では疲れを感じた事は無いですね。むしろ、ドアの中に入った時の方が、感じますね。」
「もう、少し眠って居た方が、よかったのかしら。」
「いいえ、ドアが現れない限り、歩いているだけなので、退屈なんですよ。
話し相手がいた方がいいですよ。」
「そうね。」
ガーネとトラは話をしながら、歩いて行きました。
階段が普通の上りから、螺旋状に変わりました。
その後まもなく、ドアが現れました。
「あっ、ドアよ。」

「じゃ、入るとしましょうか。ただ、歩いているのにも飽きましたからね。」
ドアが現れたからといって、入る必要はありません。
ですが、もしかしたら、そこが自分の世界なのかもしれません。
そう考えたら、つい、足をそちらに向けたくなってしまうのでした。
ガーネはドアを開けました。
そこには、別の世界がありました。
緑の草原が、そこには広がっていました。
小さな花が、あちらこちらで、咲き誇っていました。
「ワーッ。」トラは大喜びで、その草原を駆け回りました。
階段では、味わえない自由を、そこに感じていたのです。
ガーネは思いっきり深呼吸をしました。
「うん、おいしい空気だ。」
その時、遠くから、何か物音が聞こえてきました。
「ボーン、ボーン。」この音が、バラバラに不規則に聞こえてきました。
ガーネはそちらに目を向けました。
すると、大玉が、こちらへ向かって来ていました。
「トラ、トラ。」駆け回るのに、夢中になっているトラを呼びました。
トラは、立ち止まって、ガーネの方を見ました。
そして、ガーネが指さす方向に、目を向けました。
大急ぎで、トラが戻ってきました。
「あの弾みながら動いている、大きいボールは何なの?」
「判らない。でもスーパーボールみたいですね。」
「スーパーボール?」
「地面に振り落とすと、ゴムの力で、かなり弾むボールの事ですよ。
でも、それはすごく小さいボールなんです。あれは桁違いです。
真上に落ちてきたら、私もひとたまりもないでしょうね。
とりあえず、ここでじっとしてれば、安全だと思いますよ。」

「そうね。そうしましょう。」
その大玉は、ガーネたちから、少し離れた場所を、通過して行きました。
「よかった。通り過ぎましたよ。」
「そうね。でも、一体あれは何だったのかしら。」
トラは首をかしげました。
「まぁ、ここで考えていても、どうしょうもありません。
もう少し、歩いて見ましょう。何か判るかも知れません。」
「はい。」トラは答えると、ガーネの右肩に飛び乗りました。
「では、行きますよ。」
ガーネは歩きだしました。

しばらく行くと、また大玉が、近づいてきました。
「あ、またボールですよ。」
「本当ね。でもさっきのボールは緑色をしていたわ。
でも、今度のは。」
「ああ、そうですね。肌色だ。さっきとは違うボールみたいですね。
でも、あれは、一体何なんでしょうか。」
「ねぇ、あのボールの後ろの方を見てよ。」
「えっ。」ガーネは遠くの方に目をやりました。
そこには、幾つもの、色の違う大玉が、向かって来ていました。
「ねぇ、こちらへ来るのかしら。」トラは心配そうに聞きました。
「うーん、直接、こちらに来そうなボールは無さそうですね。
でも、注意して歩いて行きましょう。」ガーネはそう言いました。
これらの大玉も、ガーネたちに危害を与える事も無く、通過して行きました。
しかし、その直後、雪崩のように多くの大玉が向かって来るのが見えました。
「駄目だ。よけられません。」
ガーネは、急いでトラを地面に下ろしました。

そして、トラを大玉からかばうようにして、かがみこみました。
「ボーン。」軽い衝撃が、何回か、ガーネを襲いました。
しばらくして、音が聞こえなくなったので、恐る恐る顔を上げてみました。
前方には、ボールの姿はもう、１個も見当たりませんでした。
ガーネは、服に付いた土を払いながら、立ち上がりました。
後方には、おびただしい数の大玉が下っているのが、見えました。
「トラ、どうやら終わったみたいですよ。」
ガーネは、しゃがみ込んで、顔を下に向けているトラに声をかけました。
「もう、大丈夫なの？」トラはガーネを見上げて聞きました。
ガーネが頷くと、安心したらしく、トラもやがて立ち上がりました。
「怪我は無い？」トラは心配そうに、尋ねました。
「平気です。どうやらあれは、中身がほとんど空気らしいですね。
ボールの素材も柔らかくて、クッションが効いていました。」
ガーネは微笑みながら、トラに答えました。
その時、上の方から、声が聞こえてきました。
「おーい。そこの人。大丈夫ですか。」
高台から、人が下りてきました。
「はい。大丈夫ですよ。」ガーネは、大声で、手を振って答えました。
その人は、ガーネの元にまで、駆け寄って来ました。
「お怪我はありませんでしたか。
私は、この上の高台にある村の人間で、ナザレといいます。
今日は、村の祭りの日なのです。ご迷惑をおかけしてすみませんでした。」
「いえ、特に怪我は無いようです。」ガーネは言いました。
「本当にすみませんでした。旅人の方でいらっしゃいますか？」
ガーネとトラは、顔を見合わせました。
ガーネはトラにうなずいた後、ナザレさんに言いました。

「そうです。と言っても、旅を始めたばかりなんですけどね。」
「それでしたら、今日は、村に泊まって行ったら、如何ですか。是非、旅人さんにも、村の祭りを、楽しんで頂きたいです。」
「とは言っても、ここで泊まる予定も無かったもので。御好意は嬉しいんですけど、またいつか別の日にでも。」
ガーネはナザレさんの申し出を、辞退しかけました。
「そうか、残念ですね。今日は、祝祭なので、お食事も無料で、しかも食べ放題ですのに。泊まるホテルも、今日のお詫びとして、無料サービスとさせて頂きますのに。」
それを聞いた途端に、ガーネは、ナザレの両手をしっかりとつかみました。
「と、思ったのですが、折角のお心遣いを無駄にするわけにはいきません。今日は、この村に泊めて頂く事にしましょう。」
ガーネから漂う異様な気迫にたじろぎながらも、ナザレさんは答えました。
「そ、そうですか。村人も、久しぶりの旅人なので、歓迎すると思います。では、私の後について来てください。」
そう言って、ナザレさんは、ガーネたちを村の方に案内しました。
ナザレさんが前を向くと、ガーネとトラは顔を見合わせました。
そして、互いに喜び合いました。

村に着くと、村長さんの方に、ガーネたちは案内されました。
ナザレさんから、訳を聞いた村長さんは言いました。
「それは、申し訳ない事をしてしまいました。村でも、出来るだけの、おもてなしをしたいと思います。どうか、ゆっくりと楽しんで言ってください。」
「では、お言葉に甘えさせて頂きます。」ガーネはそう答えました。

「お祭りを見に行く前に、まず、ホテルに休養されては如何でしょうか。
それでよろしければ、私がご案内しますが。」
ナザレさんは言いました。
よろしく頼みます。とガーネは答えました。

ナザレさんは、ガーネたちを村の1つのホテルに、案内しました。
ホテルに入ると、ナザレさんは、窓口の係りの人に言いました。
「君、この方たちは、私の大事なお客様です。
一泊して頂くので、そそうの無いようにお願いします。」
ナザレさんは、係りの人と、何かを話し合っていました。
その後、その人から部屋のキーを貰っていました。
「では、こちらへ着いてきて下さい。部屋へご案内します。」
ナザレさんに連れられ、部屋に到着しました。
入って見ると、村の様子に似つかわしくないほど、立派な部屋でした。
部屋は広く、家具もベッドも、そしてテーブルも上品なものばかりです。
テーブルの上に置かれてあるティーカップも美しいものでした。
ガーネは言いました。「ナザレさん。あなたは一体。」
ナザレさんはお辞儀をして、答えました。
「申し遅れました。私がこのホテルのオーナーです。
先ほどは、私たちが主催したイベントで、危険な目に合わせてしまいました。
お詫びの意味も込めまして、今晩はこのホテルでごゆっくりおくつろぎください。
もちろん、料金は無料ですので、お気になさらずとも、結構です。
しばらくしましたら、お迎えにあがります。
それまでは、ごゆるりとお茶でもお楽しみください」
そう言った後、ナザレさんは部屋のキーを、ガーネに手渡しました。

そして、もう一度、お辞儀をしてから、部屋から出ていきました。

ナザレさんが、ドアを閉めると、ガーネはベッドの方に向かいました。

「ヤッホー。」ベッドへ後ろ向きでジャンプして、背中から降りました。

「このベッドでなら、快適に眠れるます。」ガーネは言いました。

「はしたないわね。でも、私も。」トラも、ベッドに飛び乗りました。

ぴょんぴょんはねた後、満足したように言いました。

「これは、ガーネにはもったいないわ。私専用のベッドにしたいわ。」

「何言っているんです。さみしがり屋のくせに。」ガーネは言いました。

「何よ。」「何です。」

1人と一匹は、嬉しくてたまらないように、ベッドの上を転がっていました。

しばらくして、落ち着いた後、ガーネはトラに言いました。

「迷宮での時間が、長かったからですね。この有難さが身に染みます。」

「本当にね。

あそこは、疲れる事も、お腹が空く事もないけど、やっぱりつまらないわ。」

トラも嬉しげです。

ガーネは、用意されていたポットのお茶をついで、飲みました。

そばにあった、小さなお皿に、ぬるめにしたお茶を注ぎました。

トラも、それをペロペロと最後まで、舐めてしまいました。

「たまには、こういうのも悪くないわね。」トラは言いました。

それからしばらくして、約束通り、ナザレさんが迎えに来ました。

ガーネはトラとともに、祭り見物に行きました。
ラッパを鳴らす音、太鼓を叩く音。さまざまな楽器から聞こえる音色や音楽。
それらが、祭りを盛り上げていました。
屋台もいろいろ出ていました。
お好み焼き、たい焼き、たこ焼きなどの粉物を始め、
そば、うどん、ラーメンなどの麺類。
お肉や魚介類などの焼き物も並べられていました。
お菓子も、チョコバナナや綿菓子など、いろいろ用意されていました。
遊びも、鉄砲やヨーヨー釣りや、金魚すくいなどがありました。
それらは、みんな、村の人たちの手によって作られていました。
あらかじめ、買い物券を購入する仕組みになっていました。
その買い物券と引き換えに、食べたり、楽しんだりしていました。

ナザレさんは、ガーネに、その買い物券を手渡しました。
「これを使ってください。今日いっぱい楽しむことが出来ると思いますよ。」
「有難うございます。遠慮なく使わせて頂きます。」
ガーネはお礼をいいました。
「私は、これから主催しているイベントの準備をしなければなりません。
後は、お二方で、ご自由に遊んで下さい。」
ナザレさんは、ガーネたちにそう言って、去って行きました。
「よかったわね。」トラは言いました。
「そうだね。じゃあ、何をしようか。」ガーネは尋ねました。
「私、あそこで焼いているお魚が食べたいわ。」トラが言いました。
「私は、焼きそばが食べたいですね。
じゃあ、まず、腹ごしらえから始めますか?」
「そうしましょう。」

ガーネたちは、鯛の焼き物と、やきそばを購入しました。
お茶のペットボトルも売っていたので、ついでに買いました。
お祭りには、食事のためのテーブルも、用意されていました。
ガーネたちは、そこで、食事を楽しみました。
「トラ、その鯛ほんの少しくれない？」ガーネは言いました。
「いや。」トラはそっけなく言いました。
「この焼きそば。少しあげるから。どう。」ガーネは尋ねました。
「要らないわ。」トラは相手にしません。
「まぁ、欲しければ、後で買えばいいんだし。」ガーネは諦めました。
食べ終わると、今度は甘いものが欲しくなりました。
「チョコバナナを買いましょうか。」ガーネはトラに尋ねました。
「私は、あの大きい飴を舐めたいわ。」トラが答えました。
ガーネはチョコバナナを、トラは飴を購入しました。
トラがテーブルで、大きい飴と格闘中に、ガーネは屋台を見回りました。
鉄砲をやってみましたが、景品を手に入れる事が出来ませんでした。
ヨーヨー釣りは、なんとか1個だけ、手に入れる事が出来ました。
飴を舐め終わったトラは、ガーネを探しに行きました。
「まぁ、可愛い。」
道行く大人や子供たちが、かわるがわるトラの頭を撫でていました。
少し歩いただけで、トラはその村の人気者になっていました。
それを、少しうっとおしくなったトラは、走り出しました。
それを、追いかけてくる子供たちもいました。
トラは、やみくもに走りました。そして誰かにぶつかってしまいました。
「おっと、危ないですよ。」
「御免なさい。急いでるんです。」
ぶつかった人と、トラの目が合いました。
「おや、トラさん。」「なんだ、ガーネじゃないの。」

トラは、ホッとしてガーネによじ登り、右肩に座りました。
「血相、変えて走っていたけど、どうしたんですか？」ガーネは尋ねました。
「私のファンが、私を襲って来たのよ。」
「はぁ？」
ガーネは、トラが走って来た方を見ました。
追いかけてきた子供たちが、こちらを遠巻きで、ちらちら眺めていました。
「さすが、どこへ行っても人気者ですね。トラさん。」
「急に、さん付けしないでよ。何も出ないわよ。」
「それは、そうですね。」ガーネも同意しました。
「それより、これを見てください。」
ガーネはテーブルに戻り、トラの目の前で、ヨーヨーを動かしました。
興味が出たのか、トラはしきりに、前足でちょっかいを出していました。
ガーネたちは、その遊びに熱中していました。
不意に、祭りに設置してあるスピーカーから、大きな声が聞こえてきました。
「ただいまより、グランドホテル主催の大玉乗りを始めます。参加御希望の方は、お祭り中央の会場にお集まりください。」
「グランドホテルって、あたしたちが泊まっているホテルよね。」
トラはガーネに尋ねました。
「そうなんですか？」ガーネはトラに逆に聞き返しました。
「あなた、ホテルの名前も知らないで出てきたの？」トラは呆れました。
「いやー、あのホテルの立派さと、買い物券に我を忘れていました。私って駄目な子ですね。てへ。」ガーネは自分の頭に、げんこつを当てました。
「ガーネ。止めて。可愛くないし。」

何故か、トラが後ずさりし始めました。
「それにしても、大玉乗りって、どんな事をやるのかしら?」
「そうですね。見に行ってみましょうか。」

ガーネとトラは、大玉乗りの会場に行ってみました。
既に、参加者でごったがえししていました。
「ねぇ、あれって。」トラがガーネに囁きました。
「そうですね。私たちに向かって来たボールです。」
ボールは、大きいばね仕掛けのしてある、台の上に乗ってました。
そして、その上には、人が馬に乗るように手綱を携えて、乗っていました。
頭には、ヘルメットを被っていました。
その時、アナウンスの声が響き渡りました。
「これより、大玉乗り競技を始めます。
1番目の方の準備は・・・。既に終了しているようです。
いいですか。行きますよ。
では、スタート。」
ポーッ。競技開始の音が鳴り響きました。
すると、台の上の大玉が、ばねの力によって、少しだけ高く舞い上がりました。
次に大玉は、ゆるやかな下り坂になっている、地面へと降りていきました。
地面に着地した大玉は、またその反動で、高く舞い上がりました。
そして、また降りてきました。
その繰り返しをしながら、大玉はどんどん坂を下って行きます。
坂には、色違いのボーダーが幾つも、引かれていました。
ある色のボーダーの手前で、競技者は、落ちてしまいました。
競技者の安全を確認する人や、記録を確認する人が集まってきました。
競技者はすぐに立ち上がりました。どうやら怪我は無いようです。

しばらくして、アナウンスの声が聞こえました。
「ただいまの記録は、緑と判定されました。」
会場の見物者からは、「おおーっ。」という声と、拍手が沸き起こりました。
「盛況ですね。このお祭りは。」ガーネは感心しました。
「確かに。近くでみると、迫力があるわ。」トラも興奮しています。
「さぁ、次は2番目の・・・。」
そんな、アナウンスが聞こえたところで、ガーネの肩を叩く者がいました。
「えっ。」振り返ると、そこには、ナザレさんがいました。
「どうです。私たちが主催しているこの大玉乗りは?」
「競技自体の迫力もすごいですが、観客の歓声もすごいですね。人気のアトラクションなんでしょう?」
「はい、この村のお祭りのイベントでは、一番人気ですよ。これを見たいがために、遠くから来る人も、いっぱいいます。もちろん、参加者も毎年、ウナギ登りです。」
ナザレさんは、自慢げに話しました。
ガーネは、ためらったものの、思い切って聞いてみる事にしました。
「でも、実際、安全性というのは、どうなのでしょう。ヘルメットは被っていますが、高いところから真っ逆さまに落ちたら・・・。」
ナザレさんは、答えました。
「ええ。実は最初の頃、死者は出なかったんですが、怪我人は出ましたね。
そこで、いろいろと改良をしました。
ボールの軽量化、弾力性の低減、手綱などの安全性の強化。
ジャンプ台の、ジャンプ時の高さの調整。いろいろあります。
でも、特に気を使ったのは、坂の一番上から下までの安全性です。
どこから落ちても、怪我が最小限で済むよう、工夫をこらしてあります。

ボールを弾ませる地面が、人工のものだと言う事を気が付かれていましたか？」

「そうだったんですか。」ガーネは驚いて、尋ねました。

「あたしは、知っていたわ。」トラは、言いました。

「ここに、初めて来たとき、はしゃぎ回っていたの。すごい柔らかい弾力を感じたの。なんか包まれるような感じだったわ。」

「さすがは、トラさんですね。実は、この坂の上には、土の上に、特殊な素材を使っています。それが、上から来る衝撃を吸収してくれるのです。」

「えっ、でもあそこにある、草花は一体。」

「もちろん、人工で作られたものです。といっても、ただ本物に似せただけではありません。あれ自体にも、上からの衝撃を、吸収出来るように作られているのです。」

「そうなんですか。驚きました。」ガーネはとても感心しました。

「私たちが、雪崩のようなボールに会った時も人が乗っていたんですか。」

「あの時は、本当に申し訳ありませんでした。いえ、あれは、大玉が坂を下る際の、安全性のテストをしていたのですよ。ですから、人は乗っていません。」

話をしている最中にも、競技は進められていました。

「これは、誰でも参加できるんですか？」ガーネは聞きました。

「基本的にはそうです。ただ、初心者の方に関しては、1～2時間ほど、練習して頂いています。安全性に配慮しているといっても、何が起きるか判りませんからね。乗る人にも、最低限の技術は、習得してもらいたいのです。」

「それは、いつやるんですか。」

「参加者は、前もって申請して頂いています。
初心者の方には、本番の数日前に集まってもらって、練習をして頂いています。」
「そうでしたか。」少しがっかりした口調で、ガーネは言いました。
「ガーネさん。
ひょっとしたら、この競技に参加なさりたいんじゃないんですか？」
ナザレさんは、聞きました。
「はい。実は、そうなんです。」
ナザレさんは、腕組みをしてしばらく考えこんでいました。
やがて、笑顔で、ガーネに言いました。
「いいでしょう。実は、この競技は明日も、午前と午後の2回でやります。
今、明日の競技に参加する人で、練習している人たちがいます。
その人たちに交じって、練習してみてください。
その様子を見て、明日参加出来るかどうか、考えようじゃありませんか。」
「有難うございます。」ガーネはお礼を言いました。
ガーネとトラは、ナザレさんに連れられて、練習場に行きました。
「大丈夫なの？」心配そうに、トラはガーネに聞きました。
「ちょっと、不安ですけどね。でもやってみたいんですよ。」
ガーネは楽しそうに、答えました。

やがて、練習場に着きました。
「ここが練習場ですよ。」ナザレさんは指さしました。
既に、数人が練習しています。
「君。ちょっと来て。」ナザレさんは近くに居る係りの人を呼びました。
この人が、明日、あのコンテストに出場したがっているんだ。
ここで、彼らと一緒に、練習させてくれないかね。」
「判りました。」係りの人は答えました。

「では、私は、他に用事がありますので、失礼させて頂きます。」
ナザレさんは、そう言って、その場を立ち去りました。
係りの人は、練習台の一つに案内しました。
「まず、これで練習をしてください。」
それは、会場にあるのと同じ大きさの大玉でした。
地面に固定されている台とは、ばねで繋がっていました。
「体を上下左右に揺らして、乗っている感覚をつかんでください。」
「判りました。やってみましょう。」
ガーネは、その練習台に飛び乗りました。
そして、体を揺らして始めました。
「あっ、危ない。」ガーネはバランスを崩してしまいました。
練習台から、落ちるかと思われましたが、なんとか踏ん張りました。
元の体制に戻ると、今度はゆっくりと、体を動かしました。
徐々に大きく、そして速く動いて、こつをつかんでいきました。
1時間ほどでしたが、かなりうまくバランスが取れるようになりました。
次に、もう1つの練習場所に案内されました。
そこには、会場にあるものの、ミニチュアが用意されていました。
といっても、坂の長さは、会場の半分ぐらいありますから、本格的でした。
大玉やジャンプ台は、若干ですが、小さめでした。
そこでは、数人の人が順番待ちをしていました。
30分ぐらい待ったでしょうか。順番が回ってきました。
大玉にまたがり、用意していると、すぐに合図の笛が聞こえました。
次の瞬間、ジャンプ台から、大玉が高く舞い上がりました。
ガーネは、バランスをなんとか、保っていました。
大玉はバウンドを何回か繰り返し、坂の最後まで、降りていく事が出来ました。
ガーネは、初めてでしたが、何とか、成功しました。
その後も、練習終了時刻で、何回か並んで、この練習を繰り返して

いました。
練習が終わると、ガーネは、係りの人にお礼を言いました。
そして、トラを探しに会場の方へ行きました。
実は、練習の間、ナザレさんのホテルの人に、トラを預かってもらっていました。
これは、全て、ナザレさんのご厚意によるものでした。
会場の方の「大玉乗り」も、今日はもう、終了していました。
お祭りは、夜に行われる花火大会の準備をしていました。
また、昼間よりも、多くの屋台が、軒を並べて、準備をしていました。
「どこに行ったんだろう。」ガーネは首をかしげていました。
そこへ、トラを預かっていたホテルの人が、ガーネの元へやって来ました。
「あ、済みません。先ほど、うちの猫を預かってくれた人ですよね。」
「はい、そうです。トラさんは少し前に、ホテルへ御戻りになっていますよ。」
「そうですか。有難うございます。」
ガーネは、ホテルの人にお礼をいって、一緒にホテルへと戻りました。
ホテルへ到着したガーネは、自分の泊まる部屋へ、入って行きました。
ドアを開けた途端、トラの声が聞こえました。
「あっ、お帰りなさい。ガーネ。」
「ただいま、トラ。」にっこり笑って、ガーネはそう答えました。
トラは、ガーネが練習している間、何をしていたかを話始めました。
それが、終わると、ぐたっとベッドに横たわっていました。
ガーネは笑いながら、言いました。
「それだけ、遊んでいれば、疲れて当然ですよ。」
ガーネも、隣のベッドに横になりました。

「ガーネの練習は、どうだったの？」トラは尋ねました。
「うん。本番でも、何とかやれそうだよ。」ガーネは、自信を持って答えました。
しばらくして、部屋の電話が鳴り出しました。
受話器を上げると、夕食の案内でした。
「お食事の用意が、出来ましたので、レストランにおいで下さい。」
受話器を置いて、トラの方を向きました。
何故か、トラは、両耳がいつもよりも、立っていました。
「夕食ね。待ちかねていたわ。さぁ、行きましょう。」
トラはガーネを誘いました。
「地獄耳だね。大したものです。」ガーネは感心しました。
夕食は、食べ放題と聞いていましたので、ガーネたちは期待していました。
ガーネたちは、部屋のドアに鍵を閉めて、最上階にあるレストランへ行きました。
そこには、さまざまな食材からなる、和洋中華の料理が、並べられていました。
ガーネは、右肩に乗っている、トラの求めに応じて、お皿に料理を載せました。
そして、自分も、欲しい料理をお皿に盛りつけました。
好きな飲み物も選んだ後、指定されたテーブルで食事を楽しみました。
お皿が空になると、何度も料理をもらいに行きました。
そして、心行くまで、その味を堪能したのです。
お腹いっぱいになったので、ガーネとトラは、レストランを後にしました。
しばらく休んだ後、室内にあるお風呂に入りました。
トラの体を洗った後、自分も頭や体を洗いました。
汚れていないとはいえ、久しぶりのお風呂のお湯です。
時間が経つのも忘れて、のんびりと浸かっていました。

お風呂から上り、飲み物を飲んだ後は、急に眠たくなりました。
２つのベッドで、ガーネとトラはいつの間にか、眠ってしまいました。

翌朝になりました。昨日と同様、いい天気になりました。
「今日は、祭りの最終日。でもいい祭りになりそうですね。」
ガーネはトラにそう言いました。
朝食も、食べ放題でした。
ですが、ガーネは、競技の事もあり、控え目にしました。
トラも、朝はそれほど、食欲はないらしく、少なめに食べていました。

「ボーン。ボーン。」祭り開始の合図が聞こえてきました。
ガーネたちは、部屋の鍵を置いて、部屋を出ました。
「もう、この部屋に戻る事はなんですね。」
ガーネはトラに言いました。トラもなんだか寂しげでした。
ホテルのカウンターへ行きました。
そこには、ナザレさんもいました。
「お早うございます。ナザレさん。一晩泊めて頂いて有難うございました。」
ガーネはお礼を言いました。
「お礼には及びません。こちらが頼んで、泊まって頂いたのですから。」
ナザレさんは、そう言いました。
「あ、昨日、係りの者から聞きました。
ガーネさんは、今日のコンテストに出場しても構わないそうです。」
そう言いながら、ナザレさんは、番号のついたＴシャツを手渡しました。
「これを着て、会場に入れば、午前中の競技に出場出来ますよ。
後、それが終わったら、一度ホテルに戻っていらしてください。

お昼の食事を、用意しておきます。
もちろん無料ですので、遠慮なさる必要はありません。」
ナザレさんは、ガーネたちにそう言いました。
「有難うございます。ナザレさん。お心遣い、感謝します。」
ガーネもトラも心から、ナザレさんにお礼を言いました。
「さぁ、早く行ってください。まもなく競技が始まりますよ。」
ガーネたちは、その言葉に従い、競技会場に向かいました。
「よかったね。お昼もサービスしてくれるんだって。」
ガーネはトラに言いました。
「そうね。あそこの料理はとても美味しいんだもの。よかったわ。」
トラも喜んでいました。

ほどなく、競技会場に着きました。
「いよいよね。大丈夫なの?」トラはガーネに聞きました。
「もちろんですよ。」
会場には、競技の参加者が集まっていました。
やがて、午前の競技が始まりました。
1時間程待ってから、ガーネの出番が回って来ました。
ガーネは大玉にまたがり、手綱を引き締めていました。
準備は既に、完了しています。
ポーッ。競技開始の音が鳴り響きました。
ガーネの乗っている大玉が、舞い上がりました。
そして、ゆるやかな下り坂になっている、地面へと降りていきました。
大玉はバウンドを繰り返しました。
ガーネは、何とかバランスを保っていました。
ですが、坂の半分以上を過ぎたところで、バランスを崩してしまいました。
ガーネは、あっという間に大玉から、落ちてしまいました。
「残念ですね。でも頑張ったから、よしとしましょう。」

立ち上がると、トラが、勢いよく、走ってくるのが判りました。
「ねぇ、大丈夫なの？」トラは心配そうに聞きました。
ガーネはトラの頭を撫でて、こう言いました。
「ああ、大丈夫ですよ。でも残念でした。」
しばらくして、アナウンスの声が聞こえました。
「ただいまの記録は、青と判定されました。」
会場の見物者からは、大歓声が聞こえました。
「青色なら、買い物券がもらえますね。」
ガーネはトラに言いました。トラも喜んでいました。
さぁ、賞品を受け取ろうと、坂の下に目をやりました。
次の瞬間、ガーネは、体が硬直したように、立ちすくんでいました。
そんなガーネの様子に、トラは心配そうに聞きました。
「ねぇ、どうしたの？」
ガーネは何も言わず、前方を指さしました。
トラも、ガーネが指さした方に、目をやりました。
そして、同じように硬直してしまいました。
ガーネが指さした、その先には、あの迷宮のドアが現れていました。
「やっぱり、ここも、私の世界では無いのですね。」
「あたしの世界でも無かったようね。」
ガーネとトラは、目を合わせました。
トラは、思い出したように言いました。
「ねぇ、ナザレさんが、ホテルでお昼を用意してくれるって行ってたわ。
せめて、それを食べてから、ここを去らない。」
悲しげな表情で、トラは訴えていました。
「駄目だよ。見てごらん。」そう言って、ガーネは自分の左腕を見せました。
その腕は、既に緑色に光っていました。
「トラ、あなたの前足ももう、緑色に光り出して来ましたよ。」
ガーネもつらそうでした。

その時、「ガーネさん。トラさん。」と叫ぶ声が聞こえてきました。
その声のする方に振り向くと、ナザレさんが駆け寄ってくるのが、見えました。
「お怪我はありませんでしたか。」
ガーネたちの元に着くと、ナザレさんは心配そうに言いました。
ガーネは首を振りました。
「大丈夫ですよ。ナザレさん。」
そして、ナザレさんに別れの言葉を告げました。
「どうやら、私たちが、戻らなければならない時が来てしまったようです。」
「でも、お昼の食事の用意ももう、出来ているのですが。」
「申し訳ありません。」
そう言って、緑色に輝く、自分の左腕をナザレさんに見せました。
「それは、一体。」
「ここにいれば、私たちの体は、消滅してしまうでしょう。
あなた方の住んでいる、この世界が、私たちの世界では無かったからです。
私たちは、迷宮に戻らなければなりません。」
「迷宮に？一体、あなた方は。」
「私も、そして、このトラも同じです。
私たちは、迷宮をさまよい、自分の世界を探しています。
ナザレさん。短い間ですが、あなたに感謝しています。
本当に難うございました。」
ガーネとトラは、ナザレさんに別れの挨拶をしました。
そして、頭を下げました。
ナザレさんは、あっけにとられていたようでした。
ガーネとトラは、顔を見合わせ、うなずき合いました。
そして、急いで、迷宮のドアの前まで行き、ドアを開きました。
ガーネの目の前には、あの迷宮の道が現れました。
ガーネとトラは、迷宮へと、戻って行きました。

「戻って来たと言いたいけれど、ここはドアを開ける前の場所じゃないですね。」
辺りを見回した後、、ガーネはそう言いました。
「そうね。全然違うわ。」トラも同意しました。
自分たちが、戻ってくるのに使用した、迷宮のドアも消えていました。
「あの世界は、住み心地がよかったですね。」
「そうだったわね。」
「さて、想い出に浸っていても仕方がありません。
また、自分たちの世界を探しに行きましょう。」
「そうね。行きましょうか。」
ガーネとトラは再び迷宮の道を歩き始めました。

ナザレさんは、ガーネとトラが向こうの方へ走って行くのを、見ていました。
立ち止まったガーネは、右手を前方に、差し出していました。
そして、次の瞬間、ガーネとトラの姿は、一瞬にして、消えていました。
「あの人たちの言う事は、本当だったのかもしれません。」
ナザレさんは、そう思いました。
その時、会場の方から、ホテルの従業員が下りてきました。
「オーナー。こちらでしたか。
あれ、ガーネさんたちは一緒じゃなかったんですか。
お昼の食事の時間が過ぎているので、お迎えに上りました。」
「あの方たちは、急ぎの用で、先ほど旅立たれてしまわれたよ。」
「そうなんですか。残念です。ホテルの者に伝えましょう。
オーナーもすぐに会場にお戻りください。
午後のコンテストの打ち合わせをして欲しいとの事です。」
「そうか、判った。すぐ行くよ。」

ナザレさんは、会場に向かおうとしました。
でも、すぐにガーネたちが消えた方へ、体を向けました。
「お客様。ご宿泊、有難うございました。
またのお越しを、心から願っております。」
そう言うと、ナザレさんは、頭を下げて、礼の姿勢をとりました。
後ろから、自分を呼ぶ声が聞こえてきました。
「判っている。これから行くところだ。」
そう言うと、ナザレさんは、会場の方へと走り出して行きました。

第1話「大玉乗り。」（終）

第1話「大玉乗り。」（後書き）

このお話は、道や階段のみが存在する、迷宮をさまよっているガーネとトラの物語です。
迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラは、迷宮のドアが現れると、そのドアから、別世界に行く事が出来ます。
今回は、村のお祭りに参加したガーネとトラを書いています。
その楽しい雰囲気が少しでも、読者に届く事が出来たら、いいなと思っています。
旅は、始まったばかりです。
これからも、ガーネと猫のトラの旅を楽しみにして頂ければと思います。

第2話「ある旅人との出会い。」（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。

第2話「ある旅人との出会い。」（ラビリンス・ロードにて）のお話です。

この回では、迷宮に入ったばかりのガーネが、同じ旅人のバードと出会います。

ガーネは、バード自身が初めて行った世界「ぬかるみの地」の話を聞かされます。

第2話「ある旅人との出会い。」

ある旅人との出会い。（ラビリンス・ロードにて）

その人は、自分が進む路上の直ぐ先に見える階段で、座り込んでいました。
黒い帽子を被り、喪服みたいな黒い服を着ていました。
寝ているようです。
起こさないように、通り過ぎましょうか。
ですが、ガーネは今、自分が置かれている状況を知りたがっていたのです。
多少、迷いましたが、意を決してその人に声をかけました。
「もしもし、もしもし。」ガーネはその寝ている人の肩をそっと叩きました。
「うん。」
しばらくして、その人は帽子をとりました。
そして、寝ぼけ眼で、ガーネの方を見ました。
「お休みのところ、申し訳ありません。少し、聞きたいことがあるのです。」
ガーネはお辞儀をして、その人に問いかけました。
その人は、目を擦った後、珍しいものを見るかのような顔をガーネに見せました。
「久しぶりだな。この迷宮の道で、人に会うのは。」その人は言いました。
「迷宮の道？」ガーネは聞き返しました。「一体、あなたは・・・。」
「失礼、まだ名前を言っていなかったね。私はバード。君は？」
バードはガーネに手を差し出しました。
「私は、ガーネと言います。」ガーネはその手と握手をしました。

「で、何か私に用でもあるのかな？」バードは尋ねました。
ガーネは、自分の事を、バードに話し始めました。
自分が気が付いた時には、この世界に居た事。
自分の名前以外、何も思い出せない事。
これからどうしたらいいのか判らない事。
ガーネは、これらの自分が抱えている悩みを、バードに打ち明けました。
バードは、ガーネのいう事を、いちいち頷いて聞いていました。
ガーネの話が終わって、しばらくしてから、口を開きました。
「話は、大体判ったよ。多分、君は私と同じ状況なんだと思う。」
バードは言いました。
「私が、ここに来たのは、だいぶ前の事だ。
といっても、ここでは時間の流れは全く判らない。
自分の記憶から、それが判るぐらいでしかないんだよ。
君は、もうドアの向こうに、行った事があるのかい？」
「ドアの向こうって？」ガーネが聞き返しました。
「どうやら、君はここに来て、まだ間が無いようだね。」バードは言いました。
「僕にも、ここの事は、こうなんだと、はっきり断言出来るものは無いんだ。
ただ、今までの経験から、こうなんじゃないかと思っているだけなんだ。
そんな話でもよければ、話すけどね。どうする？」
「是非、お願いします。」ガーネは答えました。
「周りを見ても、判ると思うが、ここは道と階段しかない世界だ。
後は、暗闇が広がっているだけだ。
たまに、君のように自分と同じ目に遭った人を、見かけるぐらいだよ。」
「他にも人が？」ガーネは聞きました。
「本当に、たまにだけれどね。

まぁ、それは置いといて、先に私の話を続ける事にするね。
どのくらいの時間、歩いたのか判らない。
ここでは、疲れる事も、お腹が空く事も無いんだ。
自分の体の調子で、時間の経過を知る事も出来ない。
まぁ、そうやって歩き続けたわけだ。
そうやって、歩き続けているうちに、ある変化が起きたんだ。」
「変化って言いますと。」
「道の片側に、それまで無かったドアが、いきなり現れたんだよ。」
「それって一体。」
「判らない。ただこのまま歩いていても、何のあても無かったからね。
不安だったけど、思い切ってそのドアを開いてみたんだ。」
「それで、どうなりました。」
「ドアを開けると、その向こうには、光に満ちた世界があったんだよ。
今、私たちが歩いている、迷宮の世界。それとは、まるで違う世界が見えたんだ。
嬉しかったね。私は走り出そうとしたよ。」
バードは話を続けました。

ぬかるみの地にて。

バードは、1歩1歩と前に進んで行きました。
しかし、思うように歩く事が出来ませんでした。
足元をみると、地面がぬかるみになっており、それに足がとられていたのでした。
「早くここから、逃げ出さなくては。」バードは走り出しました。
ですが一歩一歩進む度に、体は、地面の中に引きずり込まれて行きました。
バードの体は、ほとんど埋まってしまいました。

かろうじて、腕の1／3ぐらいが、外に出ているだけとなりました。
息も出来ません。「もう駄目か。」
意識が薄れる中、バードは自分の手が、誰かの手に握られたのを感じました。
そして強い力で、引っ張り上げられているのを感じていました。

気が付くと、バードは、船の上に、引き上げられていました。
バードを引き上げたのは、漁師のようでした。
その小さい船の上には、釣り上げたであろう、魚が何匹か横たわっていました。
「危ないところでしたね。」その漁師は言いました。
「なんで、あんな所に居たんです?」
バードは、どう説明したら判ってもらえるか、途方にくれました。
「まぁ、言いたくないなら、無理に言う必要もありません。さぁ、帰りますよ。」
漁師は、そう言って、船を漕ぎ出しました。
しばらくすると、ぬかるみの地の上に、建っている家々が現れました。
「水上住宅みたいなもんなのかな。」
見慣れない、その光景にしばし見入っていました。
船は、桟橋と思われるところに、到着しました。
「おかあさん。帰って来ましたよ。」その漁師は大声で叫びました。
「さぁ、降りて下さい。あとは母が、面倒を見てくれますから。」
バードは漁師さんにお礼を言って、桟橋に上がりました。
漁師のおかあさんらしき人が、走ってきました。
「あれまぁ、どうしてこんなに泥だらけなの?」おかあさんは言いました。
「ぬかるみに浸かってしまって、身動き出来なかったんです。
そこをあの漁師さんが、通りかかって助けてくれたんです。」
「家の息子が、人助けをねぇ。

判ったわ。とりあえずその格好じゃあ、どうしようもないでしょう。
シャワーを浴びて、服が乾くまで、ここにいなさい。」
おかあさんの申し出を断る理由はありません。
バードは喜んで、ご好意に甘える事にしました。
おかあさんに、家に連れて行ってもらいました。
バードは、その家で、シャワーを浴びる事が出来ました。
その後、戻ってきた漁師とともに、食事も、ご馳走になりました。
食事を終えた後、おかあさんは、バードに尋ねました。
「それにしても、どうしてぬかるみの中なんかにいたの？」
漁師から聞いたのでしょう。おかあさんは尋ねました。
バードは、うまい説明が思いつきませんでした。
仕方が無く、本当の事を話し始めました。
「信じてもらえるかどうかは、判りませんが、実は。」
バードは自分の経験した事を話し始めました。
話終わると、おかあさんは、バードにお茶を勧めました。
そしてバードに言いました。
「なるほどね。とても、信じられない話ではあるけれど。
でもそれで、息子が見た情況と、一致するわ。
息子はね。あなたが溺れそうになっていた場所で、いつも漁をしているの。
あの時もそうだったのよ。
息子の話では、漁の間、誰も近くには居なかったって言っているの。
あそこは、ぬかるみの深い場所で、慣れた漁師しか絶対に近寄らないわ。
それなのに、あなたが突然現れて、しかも溺れていたって言っていたわ。」
おかあさんは話を続けました。
「それに、あなたの服はここでは、見たことが無いような服よ。
考えにくいけど、あなたの言っている事は、嘘ではないみたいね。
あなたは、この世界の人間では無いのよ。」

おばあさんはそう言いました。
バードはうなずきました。
「ちょっと、こちらの部屋に来て頂戴。」おかあさんは言いました。
おかあさんの連れられて、ある部屋に入りました。
「この写真を見て。これが私の夫よ。
数年前に、泥の津波に襲われて、亡くなったわ。」
おかあさんは、話を続けました。
「その夫が、私に喋ったことがあるんだけれどね。
あなたと同じような人に、会った事があるらしいのよ。
その人は、道と階段しかない迷宮を、さまよっていたんだそうよ。
突然、現れたドアの向こうへ行ったら、ここに着いたんだって。」
バードは、生唾を飲み込みました。
「で、その人は、どうしたんですか?」
「夫と、1~2日ぐらい居たらしいの。
ある日、漁に夫と一緒に出かけたんですって。
1日中、漁を手伝ってもらって、その後、帰る支度をしていたの。
その時、夫は、その人が自分の家とは反対の方向を見ている事に、
気が付いたの。
「どうしたんだ。」夫は尋ねたそうよ。
そしたら、その人は、「ねぇ、君にはあれが見えるかい?」と尋ね
たそうよ。
その人が指さす方向を見たけれども何も無かったんですって。
それで、「何も見えないが。」っていったのよ。
すると、その人が言ったそうよ。
「でも、自分には、迷宮のドアがはっきりと見えるんだ。」
「迷宮のドア。それって、何なんだい?」
「私のように、迷宮をさまよっている人間が、出入り出来るドアな
んだ。
君にあのドアが見えないのは、君がこの世界の住人だからなんだよ。
さて、そろそろ、お別れの時が来たようだ。

君にはいろいろ、迷惑をかけて済まなかった。
あらためて、お礼を言うよ。有難う。」
そう言って、その人は、別れの握手を求めたの。
夫も、それに応じたわ。
「どうしても、すぐに帰らなきゃいけないのかい？」
「見てごらん。この左手を。」そう言って、自分の左手を見せたの。
その手は、緑色の光を放って、消えかかったいたそうよ。
「もし、このまま、ここに居れば、私は消滅してしまうかもしれない。
だから、ここに留まるわけにはいかないんだ。
私は、自分の世界に帰りたい。
だから、私は、迷宮をどんなにさまよっても、探し出すつもりだ。
自分の世界のドアを、必ず、見つけてみせる。」
その人は、もう1度、お礼を言った後、ぬかるみの中を歩いて行ったそうよ。
そして、立ち止まると、右手を前方に差しだす仕草をしたらしいの。
そしたら、突然、その人の体が、あとかたもなく消えてしまったらしいわ。」
おかあさんは、話を終えました。
バードは、ずっと、その話を聞いていました。
しばらくして、おかあさんに言いました。
「参考になる話を、聞かせて頂いて有難うございました。
おかげで、私もどう生きるべきか、決心する事が出来ました。」
そう言って、おかあさんと、別れの握手をしました。
家を出ようとした時に、おかあさんの息子の漁師も、駆けつけてきました。
「この人を、あの場所まで、連れて行ってあげて。」
おかあさんは、漁師にそう言いました。
バードは、あらためて、おかあさんにお礼を言って、頭を下げました。

そして、漁師の船に、乗り込みました。
船は動き出しました。
漁師は、自分のお父さんから、迷宮から来た人と別れた場所を、聞いていました。
漁師は船を漕いで、バードを、その場所まで送ってくれました。
しばらくして、その場所に到着しました。
迷宮のドアが、バードの目の前に現れました。
「あなたにも、本当にお世話になりましたね。有難うございました。」
バードは、その漁師と握手をした後、別れを告げて、船を降りました。
バードは、そのドアを開きました。
そして、迷宮へと戻って行きました。

バードは話を続けました。
「そして、私は、ここに戻ってきたんだよ。
あれから、どれくらいの年月が経ったんだろう。
そして、どれくらい、迷宮のドアをくぐり、別の世界を見て来たんだろう。
でも、自分の世界を見つける事は、まだ出来てはいないんだ。
帰る事が、出来ないでいるんだよ。」
そう言いながら、バードは立ち上がりました。
「さぁ、いつまでも、愚痴を言っていても仕方が無い。
帰りたいなら、歩くしかないんだ。」
そう言って、バードは歩き始めました。
ガーネも一緒に着いて行きました。
しばらく歩くと、その道は、幾つかの分かれ道になっていました。
「さぁ、どちらへ行く?」バードはガーネに聞きました。
「私は、一番右側にします。」ガーネは言いました。

「そうか、では、私は真ん中にしよう。」バードは言いました。
「では、さようなら。」二人は、お互いに、そう声をかけました。
そして、別々の道を歩き出しました。

トラは、尋ねました。
「ねぇ、なんで一緒に行こうとは、思わなかったの？」
ガーネは答えました。
「彼と、一緒に行ったのでは、いつまでたっても、彼に追いつけません。
だから、1人で歩くことにしたんです。
いつか、また会えるかどうかは判りません。
彼が、自分の世界を見つけてしまう事も、当然あるわけですからね。
でも、もし会う事があったとしたら、その時は彼と対等の立場でありたい。
そう思ったんです。
多分、彼も、同じ気持ちだったんじゃないかと思います。」
「ふーん。でもあたしとは、一緒よね。どうしてなの。」
「それは、トラ。あなたが、心配だったからですよ。」
「あたしは、あなたよりも未熟だといいたいわけね。」
「違います。未熟なのはお互い様です。
だから、対等の立場で、付き合っていけると思ったんです。
それに。」
「それに、何なの？」
「あの迷宮を1人で、何年もさまようのは、私には辛すぎます。
トラ、私は、あなたに会えて、本当によかったと思っています。」
ガーネは、心をこめて、トラに言いました。
トラは、顔を赤らめました。そして言いました。
「本当ね。ガーネ。私もあなたに会えて、よかったわ。」
そして、お互いに、うなずき合いました。

「トラ。これで私の話もおしまいです。では、そろそろ行きましょうか。」
ガーネはトラに、そう言いました。
「ええ、行きましょう。」
1人と一匹は、また迷宮の、果てしない道を歩き出しました。

ある旅人との出会い。（終）

第2話「ある旅人との出会い。」（後書き）

今回のお話は、ガーネが、その相方のトラと出会う前の物語です。
今回の主役は、バードという、ガーネと同じ迷宮の旅人です。
彼の話から、ガーネは、迷宮や別世界についての知識を得る事になるのです。

さて、次回は、いよいよ、猫のトラとの出会いとなります。

第3話「トラ、登場。」（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第3話「トラ、登場。」のお話です。
この回では、砂塵が吹き荒れ、竜巻が発生する世界に行きます。
そこで、ガーネは、相方となる猫のトラと出会います。

第3話「トラ、登場。」

第3話「トラ、登場。」

ガーネは、迷宮の道を、ひたすら歩いていました。
周りを見回しても、あるのは、多くの道と階段。それだけでした。
それ以外は、暗闇だけが広がっていました。
ガーネは、道の左右を見回しました。まだドアは現れていません。
ため息を1つ、ついた後、また歩き出しました。
どれくらい時間が経ったでしょうか。
目の前の道が、らせん階段へとつながっていました。
「今度は、らせん階段ですか。」
ガーネは、階段を上がって行きました。
文字通り、らせん状の階段をぐるりぐるりと、上へ上って行きました。
ガーネは立ち止まりました。
このらせん階段は、段と段との間に、空間があります。
今、ガーネの目の前には、その間の空間が、自分の身長以上にあったのです。
「これじゃあ、ジャンプしても、手が届くかどうか判りませんね。」
とはいっても、今来た道を引き返す気には、なりませんでした。
前の分岐点は、ここからかなり遠くでした。
そこから、ここまでの間、ドアを1つも見かけませんでした。
何も無いところを、永遠と時間をかけて戻るのは、嫌だったのです。
「仕方がありません。」
上に伸びている、らせん階段なので、助走をつけて飛ぶ事は、出来ません。
ガーネは、今いる段から、思い切って、ジャンプしました。
「とおっ。」

何とか、右手が、上の段に手をかける事が、出来ました。
ですが、体は、宙ぶらりんの状態になってしまいました。
ガーネは、下を見下ろしました。
暗黒の闇が、口を開けているだけでした。
左手もなんとか、上の段に届かせようと、もがき続けました。
しかし、時間ばかりが、過ぎていきました。
そのうち、右手も、自分の体を、支え切れなくなってしましました。
そして、ついに。
「ウワァーッ。」ガーネは奈落の底に、落ちていきました。

ガーネは、目を覚ましました。
ガーネは、自分が路上で倒れているのに、気が付きました。
「私は、らせん階段から落ちた筈だ。何故、ここにいるのでしょう。」
ガーネは、起き上がりました。
念のため、確認してみましたが、どこも痛いところはありませんでした。
真上を見ました。そこにも、幾つもの道があるだけでした。
「本当に、不思議な所ですね。」
ガーネは進もうとしました。そしてふと、右の方を見ました。
「ドアがあります！！」暗黒の闇が広がるその空間に、ドアが現れていました。
話には、聞いていましたが、実際にそのドアを見るのは、初めてでした。
ガーネは、生唾をのみこみました。
「行きましょう。」
ガーネは、ドアを開きました。
ドアの向こうには、明るい世界がありました。
中に入ると、ドアは、ひとりでに閉まってしまいました。
「これが、別世界というわけですか。」

ガーネは、入って来たドアの方を振り向きました。
「！。」もう、そこにはドアは、影も形もありませんでした。
「とにかく、進むしかありませんね。」
ガーネは、そう思い、目の前の未知なる世界へと、歩み出したのでした。

ヒュー。薄茶色の砂塵が、吹き荒れていました。
ドアから出て、数歩しか歩いていません。
でも、目をかばいながら歩かないと、砂塵に目がやられてしまいそうでした。
「何なのです。この世界は。」ガーネは、ぼやきながら歩きました。
しばらくすると、街が見えてきました。
「助かりました。」
街に到着した、ガーネは唖然としてしましました。
その街は、荒れ果てていました。
街の名前を示す看板は、外れかかっており、その字も読む事は出来ませんでした。
街に入る門をくぐりました。
人っ子1人、見かける事が出来ません。
街並みを歩いて行きました。
全ての建物がゴーストタウンのように、灯りは無く、人の気配がありません。
しばらく歩いて行くと、目の前に教会が現れました。
砂塵は、ひどくなる一方でした。とても目を開けてはいられません。
教会に駆け寄り、ドアをノックしてみました。
しかし、何の応答もありません。
ガーネは、ドアを開こうとしましたが、かなり重いドアです。
ドアのノブを回した後、両手で押してみました。
ガチャ。重々しい音をたてて、ドアは開かれました。
「こんにちわ。」ガーネは大きい声で、叫んでみました。

ですが、誰も、出てきませんでした。
「入りますよ。」そう言って、ガーネは中に入りました。
ドアは、その重みですぐに、閉じてしまいました。
ガーネは、目に何か入ったみたいだったので、目をしばたたかせていました。
何とか、ごみは取れたみたいです。あらためて、教会の中を見回しました。
そこは、礼拝堂でした。
その中にある長椅子の一つに、腰をかけました。
「やれやれ、ひどい砂嵐でした。
それにしても、この街の人は、一体どうしたんでしょうか。」
ガーネは、休憩を少しとった後、中を探検してみました。
礼拝堂の奥には、ドアがあり、それを開けてみました。
狭い通路がありました。その両端に、部屋があります。
執務室や応接室、台所やお風呂場、洗面所やおトイレなどがありました。
「なるほどね。礼拝堂以外は、普通の家とそれほど変わらないんですね。」
どの部屋にも、人影はありませんでした。
「誰もいないようですね。ではしばらくここに、居させてもらいましょう。」
表では、まだ砂塵が渦巻いていました。
とても、外に行く状況ではありません。
その教会に逗留する事にしました。
ガーネは、礼拝堂に戻ろうとしましたが、お腹が空いている事に気が付きました。
迷宮では、絶対感じなかった感覚でした。
「ドアの中では、普通に戻るというわけですね。」
ガーネは納得しました。
台所に行ってみました。肉や魚の缶詰めが、幾つか見つかりました。

冷蔵庫も開けました。しかし、電気は流れていないようでした。
中には、お茶とお水らしきものが、入っている缶がありました。
「安心しました。
缶詰めとはいえ、どれも食べられそうなものばかりです。
では、食事にするとしますか。」
ガーネは、大喜びでした。
缶切りやコップ、そしてお皿やフォークも見つかりました。
それらを抱えて、礼拝堂に戻って来ました。

お皿に、缶詰めの開けて、その中身を出しました。
コップには、お茶を注ぎました。
飲んでみると、苦い味がしました。でも、飲めない事はありませんでした。
フォークで、魚を刺して食べてみました。腐ってはいないようでした。
さらに、食べようとした時、「ゴトゴトッ。」物音が聞こえました。
「何でしょう。」ガーネは辺りを見回しました。誰もいません。
長椅子の下をのぞいてみました。
すると、何かが、速いスピードで、走り去っているのが見えました。
ガーネは、それを追いかけて礼拝堂中を駆け回りました。
でも、捕まえる事が出来ませんでした。
がっかりするやら、疲れるやらで、ガーネは、元の場所に戻って来ました。
すると、そこには小さい猫がいました。夢中で、お皿の魚を食べていました。
「あなたは誰です。」ガーネは、思わず言葉を叫んでいました。
すると、思いがけない事が起こりました。
その猫は、食べるのを止めて、ガーネの方を振り向きました。
そして、人の言葉を喋ったのです。
「あたしの名前は、トラ。あなたこそ誰なの?」

「この世界の猫は、喋るのですね。」ガーネは、驚きました。
「何を言っているの。この世界で、生き物なんて、見た事が無いわ。」
トラは、不機嫌そうに言いました。
「それは、すみませんでした。
ここに来て、まだ間もないものですから、ついそう思ってしまいました。」
ガーネは、トラと名乗っているその猫に、まさかと思いながら聞いてみました。
「私の名はガーネと言います。迷宮から来た人間です。
ひょっとしたら、あなたも迷宮から来たのではありませんか。」
それを聞いた、猫は驚いたようでした。
「あなたの言う、迷宮というのは、道と階段しかない世界の事かしら。」
「そうです。」
「それなら、確かにあたしはそこから来たの。まさか、あなたも?」
ガーネはうなずきました。
「もっと、話をしたいけど、その前に、これを食べてからでもいいかしら。」
「もちろんです。ゆっくり食べてください。」

その猫は、お皿の魚を食べ終えると、ガーネのそばに来ました。
そして、その傍らに座りました。
「あらためて、名前を名乗るわ。あたしの名前はトラって言うの。」
「私は、ガーネ。よろしく。」
そう言って、ガーネは頭を下げました。
「まだ、お腹が空いているの?」ガーネはトラに言いました。
「ええ、少し。」控え目な口調で、トラは言いました。
「それなら、食べ物を持ってきてあげます。ここで待ってて下さい。

」

ガーネは、そう言って、台所の方に向かいました。

やがて、ガーネが戻って来ました。
ガーネは、数枚のお皿と食べ物を持って来ました。
お皿に、缶詰の中身を出しました。
冷蔵庫にあった、飲み物も持ってきていました。
試しに飲んでみると、ミネラルウォーターのようでした。
別のお皿には、この水も注ぎました。
そして、これらのお皿を、トラに差し出しました。
「どうぞ、食べてください。
ミルクは無いみたいでした。水で我慢してください。」
ガーネはトラに言いました。
「あ、有難う。」トラは、少し意外そうでした。
最初は、出されていた食事を、遠慮がちに食べていました。
でも、すぐにガツガツと食べ始めました。
「では、私も食べましょうか。」
ガーネは、トラと食事を楽しみました。
「缶詰だったけど、結構美味しかったわ。」
トラはガーネに対する警戒心を解いたようでした。

ガーネは、言いました。
「ここには、どれくらいいるのですか?」
「あなたがここに来る、数時間ぐらい前だと思うわ。
あたし、あなたがここに入って来たところを、見ていたもの。
その頃は、こんなに砂塵は激しく無かったの。
この街のあちらこちらを、走り回っていたわ。」
「私がここに来たときは、もう、砂塵が吹き荒れていて、大変でした。
ここにたどり着くまでに、街の中を通りましたが、ひと気もありま

せんでした。」
「それだけじゃ、無いわ。」トラは言いました。
「街のあちらこちらで、家が破壊されていたの。」
「破壊ですか？」
「ええ、それも全壊。木っ端微塵よ。
でも、不思議なの。
この街の人家は、同じくらいの間隔毎に、建てられていたわ。
それなのに、被害に遭っているのは、限られているの。
全壊した家の両隣の家は、無傷で残っていたりしていたわ。
まるで、何か大きなものが、その通り道にある家を、次々と壊していった。
そんな感じだったわ。」
「そうなんですか。他には何か、気が付いた事はありましたか。」
「壊されていた家の跡は、それほど砂が溜まっていなかったの。
それに引き換え、両隣の家は、砂塵に埋もれていたわ。
あたしが気が付いたのは、そのくらいね。」
トラの話が終わると、ガーネは、考え込んでいました。
礼拝堂は静かでした。外の風が激しいせいでしょうか。
窓ガラスに、砂塵がぶつかる音が、やたらと響いていました。
「もしかしたら。」ガーネは立ち上がりました。

ガーネは、礼拝堂の真ん中に、長椅子で四角に囲みました。
その上に、長椅子を上向けに並べました。
「何なの。これ。」トラは尋ねました。
「簡易シェルターですよ。」
「簡易シェルターって？」
「災害があった時、一時的に身を守る場所ですよ。
さて、他の部屋ももう一度、見てみましょうか。」
ガーネは、そう言って、礼拝堂の奥のドアに向かいました。
「待って。私も行くわ。」トラも、ガーネの後を追いました。

ガーネは、各部屋の床を調べていました。
最後に、台所に入りました。
テーブルをどけると、床に四角い仕切りがありました。
取っ手の様なものがあり、引き出して開けて見ました。
そこには、真っ暗な空間がありました。
ガーネは、灯りを探す事にしました。
台所には無かったので、他の部屋を探しました。
執務室に、ローソクランプがありました。
近くにあった、マッチに火をつけ、ローソクに灯りをともしました。
それを持って、先ほどの場所に戻りました。
暗い空間に、その灯りを入れました。
その中が、灯り色に染まり、ほんのりと明るくなりました。
「ここは、なんなの？」トラが尋ねました。
「地下室みたいですね。」ガーネはそう言いました。
「この仕切りは、地下室へ続くハッチだったんですね。」
そして、取り付けられてある階段を、降りていきました。
ガーネも付いていきました。
そこには、棚が幾つもありました。
缶詰や、飲料用の瓶がありました。
その他にも、ロープや大工用品などがいろいろとありました。
辺りを一通り、見回した後、ガーネは言いました。
「狭いですが、一時的に避難するのであれば、これで十分でしょう。」
「避難って、どういう事なの？」
「勘違いって事もありますけれどね。」
ガーネはそう言いながら、その地下室を出て行きました。

ガーネとトラは、礼拝堂に戻りました。
ガーネは、長いすに腰掛けました。
トラも、その隣に座りました。そして考え込んでいるガーネに尋ね

ました。
「ねぇ、どういう事なの？」
「えっ、ああ御免なさいね。
ちょっと、考え事をしていました。
実は、さっきトラさんが言っていた事を、考えていたんです。」
「私の事は、トラって言っていいわよ。で、どうしたの？」
「有難うございます。トラ。
まだ、仮定の話でしかないんですけどね。」
ガーネはそう前置きして、話を続けました。
「この街の家を壊したものって、多分、竜巻じゃないかと思うんですよ。」
「竜巻？あの、突如として起こる突風の事？」
「よくご存知ですね。そうです。
竜巻は、その進路上にあるものを、強力な力で破壊していきます。
その反面、それより少しでも外れた場所では、無傷な事が多いのですよ。
あなたはさっき、「全壊した家には、砂がそれほど溜まっていなかった。」
そう言いましたね。それは竜巻が砂を巻き上げていったからだと思うんです。」
「確かにそうね。竜巻と考えた方が、自然かもしれないわ。」
トラもガーネの意見に賛成しました。
「それで、この街から人がいなくなったのね。
砂塵が吹き荒れたり、竜巻が起こる街では、安心して住めないもの。」
「恐らく、この街が出来た当時は、こんなにひどくは無かったんだと思います。
原因は判りませんが、上空の気流の流れに変化が生じたのでしょうね。
それで、どこからか砂塵が運ばれてきて、そして。」

「そして、強い風が吹いたり、竜巻が発生するようになった。そう言いたいのね。」
「そうです。しかもこの竜巻は、砂塵をまとっているので、より強力です。ぶつかった時の破壊力は、相当なものになる筈です。」
「だから、こんな簡易シェルターを作ったり、地下室を確認したりしたのね。」
トラは、納得したようでした。
「電気が切れているのが、心配です。あの地下室にはまだ、幾つかローソクランプがありましたね。火事になっては困りますが、通路と台所にはとりあえず、置いておきましょう。」
「でも、そんなに危険なら、今のうちに地下室にこもったらどうかしら。」
「さっき、地下室に行きましたが、換気がよくありません。こもるにしても、それほど長くは居ない方がいいでしょう。やむを得ない場合の、最後の切り札にしておきましょう。それに、私たちがここにいる間は、竜巻は発生しないかもしれません。発生したとしても、この教会を直撃するとは、限りませんしね。」
ガーネのこの意見に、トラもうなずきました。

ガーネとトラは、自分たちの話を、し始めました。
「どうやって、迷宮に来たの?」トラは、尋ねました。
「判りません。気が付いたら、あそこにいました。自分に関する記憶で覚えているのは、名前だけなんです。後は、覚えていません。
トラ、あなたはどうですか。名前以外で、何か覚えていますか。」
ガーネも、トラに尋ねました。
「あたしも同じね。記憶が無いわ。

ここが、自分の世界かもって、入ったんだけど、やっぱり違ったみたいね。」
「でも、どうやって、入ったんですか。ドアは開けられないでしょう？」
「あたしも、最初は、とまどったの。
何も方法が思いつかなかったから、ドアに体当たりしたのよ。
そしたら、中に入る事が出来たわ。」
「えっ、それで入る事が出来るんですか？」
「現に、ここに居るのが、何よりの証拠よ。」
「それもそうですね。そうか、ドアを開けなくてもいいんですね。
あの迷宮には、判らない事が多すぎます。
少しずつ、経験しながら、理解していくしかなさそうですね。
もっとも、知らなくても、自分の世界に戻れるなら、それでいいですけどね。」
「あたしも、同感だわ。」ガーネの意見に、トラも同意しました。

「さてと、これからどうするつもり？」トラは尋ねました。
「あんなに砂塵が吹き荒れていては、外に出るのは無理でしょうね。
まだ、日も明るいので、執務室に、行ってこようかと思っています。
本がたくさんあったので、あの机で読もうかと思っています。」
「本ね。あたしは読めないな。
でも、ここで1猫（ひとり）で居るのもつまらないし、ついて行ってあげるわ。」
「では、一緒に行きましょうか。」ガーネはトラにそう言いました。

ガーネとトラは、礼拝堂を出ました。そして執務室に入りました。
ガーネは、本棚にある本を、一冊一冊、調べていました。
しばらくすると、一冊の本を、机の上に置きました。
「これでも、読んでみますか。」とガーネは思いました。

「何を読む事にしたの？」トラは、尋ねました。
「日記帳です。」ガーネは嬉しそうでした。
「何か、面白い事が書いてあるかもしれません。
しばらく、ここで、これを読んでみようと思います。トラは、どうしますか？」
「あたしの事は、別に気にしなくていいわよ。
おとなしくしてるから、ここに一緒にいていい？」
「もちろん、いいですよ。」
ガーネは、日記帳を読み始めました。
トラは、最初、近くの棚に座り込んで、その様子をじっと見ていました。
そのうちに、うつらうつらし始め、いつの間にか、寝込んでしまいました。
トラが、目を覚ましたのは、ガーネが日記帳を閉じる音が聞こえた時でした。
トラは、足を思いっきり伸ばしました。
首を振った後、大きく口を開けて、欠伸をしました。
「どう、面白かった？」多少、寝ぼけ眼でトラは尋ねました。
「ええ、ここでの生活の事などが、書かれていて興味深かったです。
あと、あの砂塵と竜巻の事も、書いてありましたよ。
朝方から、午前中くらいは、砂塵が吹き荒れる事は無いようですね。
竜巻は、1年に、多ければ2回ほど、発生する事もあるそうです。
ここに、街を建設した当時は、砂塵が吹き荒れる事も、竜巻も無かったそうです。
こんな風になったのは、それから10年ぐらい経ってからのようです。
結局、安定した生活を送るのは、難しくなったと判断したらしいです。
それで、この街から、全ての人が撤退したと、書いてありました。
自然の脅威で、人がいなくなったと言うのは、悲しい事ですね。」

ガーネは、日記帳を本棚に戻しました。そして、トラに声をかけました。
「では、礼拝堂に帰りましょうか。」
トラは、その言葉にうなずきました。
ガーネとトラは、執務室を出て、礼拝堂に戻りました。

やがて、夜になりました。
風は、少し、収まっているようでした。
礼拝堂や通路、そして台所にローソクランプを置き、灯りを灯しました。
「移動用にも、用意しておきましょう。」
これらの灯りは、それほど明るいものでは、ありませんでした。
しかし、ガーネやトラの、不安を取り除く効果は、十分にありました。
夜も更け、ガーネもトラもいつしか横になり、寝入っていました。

突然、大きな物音が聞こえ、ガーネとトラは、目を覚ましました。
教会の窓ガラスが全て割れていました。
教会自体も、みしみしと、きしみを立てていました。
咄嗟に、ガーネはトラを両手で抱え、簡易シェルターから抜け出しました。
ガーネは、トラを自分の着ている服の右ポケットに入れました。
ぐらぐら揺れる教会の中を、ガーネは懸命に走りました。
台所に着いたガーネが、テーブルを蹴ると、地下室へのハッチが現れました。
そのハッチを開けて、ローソクランプを携え、地下室の中に入りました。
中に入ったガーネは、すぐにハッチを閉めました。
そして、ハッチに取り付けられている鍵で、開かないように固定しました。

ガーネは、ホッとしました。
「ねぇ、どうしたのよ。」右ポケットから、トラが飛び出して来ました。
「竜巻です。竜巻が襲って来たんですよ。」ガーネは説明しました。
地下室のハッチは閉められていましたが、激しい物音が響いてきました。
地下室自体も、振動を感じていました。
「大丈夫なの？」トラは心配そうに尋ねました。
「こちらへ来て下さい。」トラに手招きをしました。
トラがガーネの前に立つと、ガーネはトラを抱えて、言いました。
「竜巻は、そんなに長くいるものでは、ありません。
とりあえず、振動とこの物音が静まるまでは、おとなしくしていましょう。」
ガーネは、トラに言いました。
「そうね。」
トラは、震えながらも、うなずきました。
しばらくして、ものすごく激しい震動と物音が、地下室を襲いました。
その後、次第に弱まって行きました。
「竜巻が、去ったのかもしれません。」ガーネはそう言いました。
様子を見るため、少しの間だけ、待機しているつもりでした。
ですが、寝ている間に起こされたためか、いつの間にか眠ってしまいました。

ガーネは目を覚ましました。トラはその横で、眠っていました。
「トラ、起きてください。」ガーネは、トラに声をかけました。
トラも、起きてきました。
「お早う。」そう言った後、すぐに気が付いたのか、ガーネに尋ねました。
「あれから、どうなったの？」

「私も、今、目が覚めたところです。外に出て見ましょう。」
トラは、ガーネの右肩に飛び乗り、ちょこんと座りました。
ガーネはトラに、にっこり微笑むと、地下室の階段を上り、ハッチを開けました。
「ああ、まぶしい。」もう、朝を迎えていました。
ガーネは、周りを見回しました。教会は、廃墟と化していました。
「私たちは、なんとか助かったようですね。」ガーネはトラに言いました。
「ガーネ。あなたのおかげだわ。有難う。」トラはガーネにお礼をいいました。
ガーネとトラは、外に出ました。
教会の他にも、何件か、建物が壊されていました。
「随分、見晴らしがよくなっていますね。」
「そう言えば、砂塵もまだ吹き荒れていないわ。」
「朝は、おとなしいのでしょう。まただんだんと、荒れてきますよ。」
ガーネとトラは、街の中を歩き出しました。
「人が居なくなった理由を、身に沁みて、理解しましたよ。」
「本当にね。」
街の外れまで、歩いたガーネは、そこにあるものを見つけました。
「トラ、ご覧、迷宮のドアだよ。」
「本当だわ。」
ガーネたちは、そのドアへと向かいました。
ドアを開ける前に、もう一度、振り返ってみました。
「ここは、私の、最初に入った世界でしたが、大変でした。」
「あたしも、同じよ。」
なんとなく、感慨深い思いが、湧き上がるのを感じました。
そして、あらためて、ドアの方に向き直り、ドアを開きました。
中に入ると、ドアはひとりでに閉じて、そして、消えてしまいました。

ガーネとトラの周りには、道と階段が、どこまでも広がっていました。

「迷宮へ、戻って来ましたね。」

ガーネがトラに言いました。

トラも、うなずきました。

第3話「トラ、登場。」（終）

第3話「トラ、登場。」（後書き）

今回のお話は、ガーネと、その相方になる、猫のトラとの出会いが中心です。
「トラ・オブ・ラビリンス」のトラは、この猫を指しています。
トラもまた、この物語の主役なのです。
この話以後、ガーネとトラの、別世界への旅が、続いていく事になります。

第４話「空を飛ぶガーネ。」最初です。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第４話「空を飛ぶガーネ。」最初です。のお話です。
この回では、ガーネとトラは、空を飛ぶ事を夢見る博士と出会います。
そして、ガーネは空を飛ぶ挑戦する事になるのです。

第４話「空を飛ぶガーネ。」最初です。

第４話「空を飛ぶガーネ。」最初です。

ガーネとトラは、迷宮の道をただひたすら、歩いていました。
「なかなか、ドアは見つからないわね。」
「疲れる事も無く、お腹が空く事も無い。
とは言っても、道と階段しか、無いんですからね。
いささか、この眺めもうんざりしてきましたね・・・って。
おっと、これは！」
「まぁ、迷宮のドアよ。なんで倒れているのかしら。」
「まるで、飛びこめって言っているみたいですね。」
「そうかも。じゃあ、飛び込んでみるわね。えぃ。」
そう言って、トラは、ドアの中に飛び込んでしまいました。
「仕方がありません。では、私も飛び込んでみましょうか。」
トラに次いで、ガーネもジャンプして、ドアの中に飛び込みました。
次の瞬間。「ウワァーッ。」ガーネは、大声で叫んでしまいました。
自分が、かなり高い上空から、下へ落ちている事に気が付いたからでした。
下を見ると、先にここに来た、トラの姿が見えました。
「ああ、トラも私もこれでおしまいですね。」
ガーネは、覚悟をしました。そして気を失っていました。

ガーネは、目を覚ましました。
ガーネは、ボートの上で、横たわっている自分に気が付きました。
「えっ、ここは一体。」
ガーネが起きた事に気が付いた船員は、ガーネに声をかけてきました。
「大丈夫ですか。御気分は如何です？」

「えっ、ええと、とりあえず、何ともありません。」
「それはよかったです。あなたは本当に運の良い人だ。」
その船員は、感心していました。
「あの、私の連れがどうなったか、判りませんでしょうか？」
「お連れさんがいたんですか。で、それはどんな人ですか？」
「いや、人ではなく、これくらいの小さい猫なんですけれどね。」
「ああ、それでしたら、あちらの船に乗っていたと思いますよ。」
船員がその船を指さしました。
その先にある船の穂先に、見覚えのある小さい猫が、立っておりました。
「ああ、間違いありません。あの猫です。」
「随分、小さい猫ですね。そして可愛らしい。
あの船も、この船と同様、近くの港に向かいます。
そこで、合流出来るでしょう。」
船員はそう言いました。
「判りました。」ガーネはホッとしました。
それから、数十分後に、２つの船は、港に着きました。
ガーネが、船から降りると、トラが急いで、走って来ました。
「こんにちわ。ガーネ。また会えて嬉しいわ。
もう、駄目かと思ったわ。お互い生きていてよかったわね。」
「いきなりドアへ飛び込んだのは、誰でしたっけね。
おかげで、もう少しで、死と御対面でしたよ。
少しは、反省してくださいよ。」
「でも、あの場合、ドアに飛び込むしか無かったでしょう。
それとも、ドアを無視して、あてもなく迷宮をさまようつもりだったの？」
「まぁ、それはそうですけれどね。」
ふぅー。ガーネはため息を１つつきました。
「それにしても、かなり高いところから、落ちた筈ですよ。
よく私たちは、助かりましたね。」

「違うの。確かに途中までは、落ちていたのよ。
でもね。突然、ふわっと、体が浮くような感じになったの。
そして、その状態で、ゆっくりと海に落ちて、いや、降りていったの。
海につかる寸前、落下は停止して、そのままふわふわと浮かんでいたの。
その後、救助艇が駆けつけてくれたのよ。
あなたも、そうして助かったの。」
「空中に浮いていたって言うんですか。でもどうしてなんでしょう？」
「そこから先は、わしに説明させてもらいたいな。」
そう言って、現われたのは、白衣を来た、科学者っぽい人でした。
髪の毛に、白い物が多く混じったおじいさんでした。
「あなたは、どなたですか。」ガーネは尋ねました。
「わしは、カーマイン。航空機のエンジンなどを研究している工学博士じゃ。」
「そうですか。何か私たちに、御用でもおありになるんですか。」
「あるから、ここにいるのじゃ。」かなり、横柄な人でした。
「さきほど、私たちが助かった理由を、説明してくれるとか言っていましたね。
何故、私たちは助かったのでしょうか？」
「ここの海面にのみ起きる、特有の現象のせいなのじゃ。
1日のうち、数時間の間だけじゃが、無重力状態が発生する。
おまえたちが、この海面に落ちてきた時が、その時刻だったのじゃ。
判ったかな。」
「判りましたが。・・・地上近くで無重力状態が発生するのですか。
とても、不思議な話ですが、トラもそれを体験したと言っています。
私も、こうして助かっているわけですから、信じましょう。
それにしても、すぐ救助艇を出してくれて感謝します。
でも、何故、私たちが、あそこに落ちてきた事が、判ったのですか。

」

ガーネはカーマイン博士に尋ねました。

コホンと咳払いして、少し赤らめた顔になってカーマイン博士は答えました。

「いや、わしたちが、救助艇を準備していたのは、君たちとは関係ないんだ。」

「と、言いますと。」

「ある実験をしていたのだ。

その実験の危険を回避するために、準備していたと言う訳だ。

君たちをすぐに、助けられたのは、偶然なんだよ。」

「ああ、そうだったんですか。

それじゃあ、私たちが助かったのは、単に運が良かっただけなんですね。」

「その通りだ。」

「それでも、助けられたことには、間違いありません。

私やトラを助けて頂き、有難うございました。

ところで、実験をしていたとお伺いしました。

差し使えなければ、何の実験をなさっていたんですか。」

カーマイン博士は、自慢するように話しました。

「いいとも。私たちがやっていた実験というのはだな。この大空を飛ぶ実験だ。」

「はぁ？」ガーネは一瞬、耳を疑いました。

ガーネは、大空を指さして、カーマイン博士に質問しました。

「大空を飛ぶと言われましても・・・。

先ほどから、たくさん、大空を、飛行機が飛んでいますよね。

あれは、違うんですか。」

「あれは、空を飛ぶ乗り物だ。わしの目指しているのは、空を飛ぶ人間だ。」

「と、言いますと、人間を改造して、羽でも付けるおつもりですか

？」

「それは、ＳＦの見過ぎじゃ。
わしはな、小型で、推進力が強いエンジンを、開発中なのじゃ。
それを用いた飛行装置を、人間の背中に装着して、空を飛ばせるのじゃ。」

「そんな事が出来るんですか？」

「現時点では、実用には、まだまだだがな。
そうじゃ、もし興味があるなら、わしの研究所に来んか。
いろいろ相談したい事もあるし、見せたいものもある。
おぬしも、そちらの猫も、体の調子は大丈夫かの？」

ガーネはトラを見ました。

「あたしは、元気よ。」トラがそう言いました。

「私も、大丈夫です。特にこれといった用事もありません。
博士さえ、ご迷惑でなければ、お伴させて頂きます。」

「そうか、ではついて来るがいい。」

カーマイン博士は、そう言うと、駐車場まで連れて行きました。
そこに止めてある自分の車にガーネとトラを便乗させて、走り出しました。

博士の研究所に着きました。
でも、そこは、ガーネが想像していたものと、大きく違っていました。

「これは、研究所というよりも、単に大きい家にしか見えないですね。」

「わしの研究には、街からの補助金が出なくての。
自腹でやっておるのじゃ。」

博士は、そう言って、玄関を開けて入りました。
ガーネとトラもその後に続きました。
ガーネは、博士にお願いして、雑巾を用意してもらいました。
それで、トラの足を拭いた後、一緒にその家にあがりました。

博士の後を追って、ある部屋に入りました。
そこは、広い部屋でした。エンジンやその関連機器が並べられていました。
機械部品を加工する台や、機材などもありました。
確かにこれなら、研究所と言えるのかもしれません。
しかし、その部屋は、他の部屋とあまりにも調和していませんでした。
「ここは、後から、改造した部屋なのですね。」
ガーネは聞いてみました。
「ああ、そうじゃ。
研究には、どうしても、これくらいのスペースが必要だったからのう。」
カーマイン博士は、認めました。
「わしが、今精魂込めて開発しているのは、これじゃ。」
そう言って、あるものをガーネやトラの前に置きました。
「黒いランドセルですか。今年お孫さんでも、入学なさるんですか。」
ガーネはそう尋ねました。
「馬鹿な事を言うでない。わしに、孫などおらんわい。
これが、わしが開発している、人間に大空を飛ばせる飛行装置じゃ。」
カーマイン博士は、ガーネに言いました。
「名前はスカイダーと付けた。どうじゃ、格好いいじゃろう。」
「はぁ、スカイダーですか。」
「このスカイダーの特筆すべきところは、やはり、エンジンじゃ。
液体水素と液体酸素」
「あっ、装置の説明は、要らないです。科学的なものは、うといんですよ。
要するに、空を飛べる装置という事ですね。はい、判りました。」
「そうなのじゃが・・・。

（小声で）最近の若い者は、年寄りの言う事を聞かなくて困る。
折角、判り易く説明してやろうと思っておったのに。
人の楽しみを、簡単に拒否しおって。ブツブツブツ。」
老人は、明らかに残念そうでした。
トラは、ガーネに、小声で喋りました。
「何か、このおじいさん。ショックを受けているみたいだわ。
話を聞いてあげた方が、よかったんじゃなくて？」
ガーネも、小声で、答えました。
「駄目ですよ。トラ。こういうじいさんは、甘やかすと癖になるんです。
一旦、喋り出したら、満足するまで止まらないんだから。
まっ、しばらく何もしないで、見守っててあげましょう。」

そのうち、カーマイン博士は、気を取り直して、話を続けました。
「おほん。つ、つまりじゃ、この装置を使って、空を飛ぶ実験をしておるのじゃ。
じゃがな、その被験者、つまりテスターが夏休みをとっておる。
彼が、帰ってくるまでは、満足な実験など何も出来ないのじゃ。
そこでじゃ、頼みというのはだな。おぬしに、その代りをやってもらいたいのじゃ。
引き受けてくれんかのう。
2～3日ぐらいでいいんじゃがのう。
もちろん、その間の宿泊費や飲食代は、全てこちら持ちで、構わん。」
これを聞いて、ガーネは、カーマイン博士の右手を、両手で握りしめました。
「判りました。空飛ぶ実験とは、実に画期的な実験です。
こんな私でも、お役に立つ事ができるなら、どうぞお使いください。」
「すまんのう。恩にきる。」

カーマイン博士も感動して、ガーネの右手を握り返しました。
その様子を、トラはただ呆れて見守っていました。
「どれ、まずはこれを装着してもらおうかの。」
カーマイン博士は、（ランドセルじゃなくて、）スカイダーをガーネに渡しました。
ガーネは、スカイダーを背負いました。
「そしたらのう、このボタンを押してごらん。」
ガーネは、カーマイン博士の指示通り、そのボタンを押しました。
すると、両肩と腰で、バンドが丁度良く、締まりました。
「どうじゃ。気分は？」
「はい。ビシッとランドセルが、背中に装着出来ましたね。」
「スカイダーじゃ。」カーマイン博士は、訂正しました。
「次には、これを装着するのじゃ。」
そう言って、前腕にも、金属機器を装着させました。
「両手のそばにハンドルのようなものがあって、握れるようになっていますね。
これは、何なのでしょうか。」
「これは、空を飛んだり、旋回したりするのに使う物じゃ。
ハンドルを両手でレバーごと握ると、空へと上昇する事が出来る。
その逆に少しずつその手を緩めれば、下降する事も可能じゃ。
また、空を飛んでいる間に、片方の手を緩めれば反対側へ旋回も出来る。
どうだ、割と簡単な操作じゃろ。」
「そうですね。ええと、片方をレバーごと握ると、ウワァー。」
いきなり、ガーネは倒れて、ぐるぐると回り始めました。
スカイダーの片方の噴射口から、白い煙が勢いよく流れています。
そのまま、止まらず壁に激突してしまいました。
「これっ、早くその手を離すんじゃ。」
カーマイン博士は慌てて、ガーネに言いました。
ガーネは、ハンドルから手を離しました。

スカイダーは、その動作を停止しました。
「ああ、助かりました。死ぬかと思いましたよ。有難うございます」
ガーネは、カーマイン博士にお礼を言いました。
「いや、わしも悪かったのじゃ。
先ほども言ったように、まだ、実験段階のものでな。
安全装置など付けておらんのじゃよ。
装着させる前に、よく注意しておくべきだった。すまんすまん。」
カーマイン博士も、ガーネに頭を下げました。

ガーネは博士から、スカイダーの取扱方法や操作方法を教わりました。
外に出て、実際に操作して見る事になりました。
博士の家から、少し歩いたところに、広場がありました。
この時間、そこには誰もいませんでした。
「では、始めよう。手順はもう判っているのう。」
カーマイン博士は、念のため、ガーネに確認しました。
「大丈夫です。任せてください。」ガーネは答えました。
ガーネは、ヘルメットを装着していました。
それには、マイクとヘッドホンが内蔵されていました。
博士とトラは、ガーネから少し離れました。
「では、始めます。」ガーネは叫びました。
ガーネは両手で、ハンドルをレバーごと握りました。
スカイダーの噴射口から、白い煙が勢いよく流れました。
それと同時に、ガーネは上へ上へと上昇して行きました。
博士はマイクに向かって、喋りました。
「よし、そこら辺でよかろう。次は右旋回じゃ。」
ガーネは、ハンドルを操作して右旋回を行いました。
その後も、直進移動や旋回移動を繰り返しました。
全体的に、多少ぎこちない面はあったものの、なんとかやり遂げました。

一連の動作を終えると、博士はガーネに言いました。
「合格じゃ。テスターとして申し分ない。もう降りてきてもいいぞ。」
ガーネは、両手でゆっくりとハンドルを離したり、握ったりしました。
そして、無事に、地上に降り立つ事が出来ました。
「これは、すごい装置ですね。
操作方法さえマスターしていれば、自由自在に空を飛べるじゃないですか。
実験段階ではなく、既に完成しているのではないのですか？」
ガーネは博士に尋ねました。
カーマイン博士は苦笑いして、答えました。
「確かに、あの程度の高さでいいのであれば、完成していると言えるかもしれん。
じゃがな。わしは、このスカイダーを救難、救助用に使う事を想定している。
となれば、今より何倍も高い所でも、同じように操作が出来る必要がある。
残念ながら、今の段階では、それはまだ無理なのじゃ。
高くなればなるほど、推進力や姿勢制御が不安定になってしまうからの。
まだまだ、研究が必要なんじゃよ。」
「そうでしたか。この実験の大切さがよく判りました。
私が、この実験に参加できる事を、光栄に思っています。」
ガーネは、そう言って、カーマイン博士に手を差し出しました。
博士も、その手をしっかり握りました。
「うん。よろしく頼むぞ。
では、そろそろ、お昼にするか。家で食べていきなさい。
実験は、午後から始めるからの。」
博士とガーネ、そしてトラは、博士の家で、お昼を御馳走になりま

した。
その後、ガーネとトラは宿舎を案内してもらい、ひと休みしました。
「ねぇ、さっきスカイダーに乗って空を飛んだでしょ。どんな感じだった？」
トラは、興味しんしんと言った感じで、ガーネに尋ねました。
「すごく面白かったですよ。空が身近に感じられました。
もっと、自由自在に、飛び回れるようになったらいいですね。」
「へぇ、いいな。私も飛びたいな。」トラは羨ましがりました。

午後になり、ガーネたちは、空から落下した、あの場所まで戻って来ました。
救助艇の1つが、ガーネの発進場所でした。
「では、これから実験を始める。くれぐれも怪我の無いようにな。
このスカイダーは午前中に着けたものよりも、推進力が高いからの。
細心の注意を払って、操作するように。」
カーマイン博士は、厳かにいいました。
博士の合図とともに、ガーネは両手のハンドルをレバーごと握りました。
スカイダーの噴射口から、白い煙が勢いよく流れました。
それと同時に、ガーネは、上へ上へと上昇して行きました。
博士はマイクに向かって、喋りました。
「わしが、いいと言うまで両手はそのままの状態でいるんじゃ。」
ガーネは、更に上へと上昇して行きます。
しかし、ある程度の高さに達した時、急に推進力がゼロになりました。
ガーネは、真っ逆さまの状態になって、そのまま落ちてきました。
「ああ、スカイダーを装着している以外は、ここに来た時と同じです。」
ガーネは、無重力状態になっている事を期待しました。
そのガーネの願いはかなえられました。

落ちるスピードは、だんだん遅くなりました。
そして、海面より少し上で浮いている状態になったのです。
「そうか、午前中もこうだったんですね。」ガーネはそう思いました。
救助艇が近くに来てくれたので、それに乗り込みました。
それには、トラが乗っていました。
「ねぇ、怖かった？」トラは尋ねました。
「初めてここに来た時は、そうでしたね。
でも、今は違います。何て言ったらいいのかな。
そうだ、バンジージャンプみたいな面白さがありましたね。
実際、こっちの方が、あれよりももっとリアルで迫力がありますね。
そう、リアルバンジーとでもしておきましょうか。
あの高さから落ちるスリルや迫力は、並ではありません。
すごく楽しいし、面白いと思います。」
ガーネのワクワクした感じが、トラにも伝わって来ました。
「ガーネはずるい。いいな。いいな。私もやってみたいな。」
トラは、心の底からそう思いました。
実験は、海面の無重力状態が、消えると同時に終了しました。
特に怪我をする事もなく、終える事が出来ました。
ガーネは、最高の気分でした。
そんなガーネを、トラは羨ましくて仕方がありませんでした。

ガーネとトラは、宿舎に帰りました。
太陽も沈み、夜になりました。
ガーネとトラは、お風呂やに入った後、食事をしました。
そして少し休憩をした後、夜の散歩に出かけました。

ガーネとトラは、夜道を散歩していました。
お風呂上りの散歩は、気持ちのいい風が吹いている事もあり、快適でした。

「アイスでも、買いましょう。」
近くの食料品店に入り、アイスキャンディーを購入しました。
「お金なんて、よく持っていたわね。」トラが言いました。
「ああ、昼間のテスターの日当が、手に入ったんですよ。
帰りがけに、博士から手渡されました。」
ガーネは、アイスキャンディーを舐めながら、街のあちこちを見回しました。
トラも欲しがったので、時々舐めさせてあげました。
「昼間は、それなりに暑かったけど今は快適ね。湿度もちょうどいいわ。」
「そうですね。とても気持ちがいいです。歩きながらでも眠くなってきました。」
「じゃあ、あの公園のベンチで、休みましょうか。」
「いいですね。そうしましょう。」
ガーネとトラは、公園に入りました。
ゴミ箱に、食べ終わったアイスキャンディーの棒を捨てました。
「残念でしたよ。」「何がなの？」
「このアイスは、当たり付きだったんですけどね。」
「じゃあ、外れたのね。」「はい。」
1人と一匹（ふたり）は、ベンチに腰掛けました。
「ねぇねぇ。」「何でしょうか。」
「午前と午後で、あのスカイダーに乗ったわよね。どんな感じだったの。」
「博士も言ってたし、私も言ってたと思うけど。
午前中に広場で飛行したタイプは、ほとんど実用レベルに達していましたよ。
僅かな時間で私が一応の飛行が出来たのが、その証拠です。
博士は飛行高度に、不満があるみたいでしたね。
でも、今のレベルでも使い方次第で、十分利用価値はあるんじゃないでしょうか。

あと、午後からあの海上で飛行したタイプは、確かにずば抜けた推進力でしたね。
あんなに高いところまで飛べるとは、思ってもいませんでした。
午前のとは、段違いの性能でした。
でも、博士の目標の飛行高度には、届かないみたいだったようです。
姿勢制御もうまくいきませんでした。
でも、あれはあれで既に使いみちがあるような気がします。」
「というと？」
「アトラクションとして使うんですよ。
ショーとしても使えるでしょうし、バンジージャンプ用に使う手もあります。
実際に、あれを使用しましたけど、すごいスリルと迫力でした。
安全性さえ確保出来れば、爆発的にヒットするかもしれませんね。」
「そうか。いいな。私も空を飛びたいな。」
「うーん。トラがあれを操縦出来るようにするのは、難しいでしょうね。
今のスカイダーを完成させるより、はるかに困難かもしれませんよ。」
「じゃあ、自分で操縦するのは諦めるわ。
でも、せめて私もガーネと一緒に、空を飛ぶことは出来ないのかしら。」
「あとで、博士に聞いてみましょうよ。」ガーネはそう言いました。
夜ではありましたが、街灯が街のあちらこちらにあり、明るさがありました。
「ねぇ、公園のあそこは高台になっているわね。上がってみない？」
「そうですね。夜景が綺麗かもしれません。」
ガーネとトラは、高台に続く階段を上りました。
高台に着くと、そこからは街全体が一望する事が出来ました。
「ウワァー。」トラが驚いていました。

「なんて、綺麗な眺めなんでしょう。それに風も心地いいわ。」
「そうですね。こんな場所があったんですね。」
ガーネもトラと同じように感動していました。
眼下に広がる街並みは、もう暗くてよく判りませんでした。
ですが、これらから放たれる灯りは、線の様に連なっていました。
その線は、何本もありました。
1つに集約していたり、または広がっていたりしてました。
暗くなった街全体をキャンバスとして、綺麗な模様を描いていました。
ガーネとトラは、その夜景を十分堪能しました。
帰ろうとしたガーネたちは、同じ高台に人が1人いるのに気が付きました。
どこかで見たシルエットでした。
ガーネたちは、近づいてみました。
「あっ、博士。」
「なんだ、ガーネ君とトラ君だったのか。」
カーマイン博士でした。
「博士も、この夜景が好きなんですか。」
「ああ、この公園が出来てからわな。
まぁ、わしよりも奥さんの方が、好きではあったがの。」
「奥さんですか。確かお宅にお邪魔していた時、誰もいませんでしたね。」
「もう、亡くなっておる。」
「それは・・・。どうも、ご愁傷さまです。」
「いや、もう亡くなって、数年経つからの。
そんなに気にかけてくれなくても、結構じゃよ。」
「はぁ。」何か、気まずいような雰囲気になってしまいました。
「ところで、ガーネ君。明日の事なのじゃが。」
「はい。何でしょうか。」
「午前中は、今日と同じように実験をしてもらうがの。

午後からは、出かけなければならないのじゃ。
だからの。明日は午後の実験は休みとしたいが、いいかの。」
「はい。構いません。どうぞ、ゆっくりお出かけ下さい。」
「実は、最新のエンジンが完成したので、それを取りに行くつもりじゃ。
帰ってから、スカイダーのエンジンと交換して明後日の実験に備えたい。」
「そうでしたか。判りました。ところで先生にお願いがあるのです。」
「何じゃな。」
「実は、うちのトラも空を飛びたいらしいのです。
何とか、私と一緒に空が飛べるように出来ませんか。」
「何。トラ君もなのか。」博士は、トラの方を向きました。
「はい。お願いします。」トラは、博士に訴えました。
博士は、しばらく考え込んでいました。やがて口を開きました。
「判った。考えておこう。
それじゃあ、涼しくなってきたし、わしはそろそろ帰るとするか。」
カーマイン博士はこう言って手を振り、その場を立ち去って行きました。
「どうなるのかしら。」トラはガーネに尋ねました。
「さぁね。明日に期待しましょうよ。
私たちが、期待出来るのは、常に未来にですからね。
それじゃあ、私たちも帰りましょう。」
ガーネとトラも、宿泊所へ帰っていきました。
自分たちの部屋の畳の上に、布団を引きました。
ガーネは、トラにもタオルで可愛い布団を作ってあげました。
布団に入ると、いろいろあったせいでしょう。ガーネは直ぐに眠りに付きました。
一方、トラは布団の中で一心にお願いをしていました。
「明日は、空が飛べますように。」

そして、いつしかトラも眠ってしまいました。

第４話「空を飛ぶガーネ。」最初です。（終）

第４話「空を飛ぶガーネ。」最初です。（後書き）

今回のお話は、ガーネが別世界で空を飛ぶ挑戦をする、第１日目を書いています。
博士との出会いから、空へ挑戦するまでの経緯が書かれています。
今回のお話は、ちょっと長くなるかなと思われたので、話を分ける事にしました。
次回も、この話の続きです。

第４話「空を飛ぶガーネ。」ふたつめってとこですね（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第４話「空を飛ぶガーネ。」ふたつめってとこですね。のお話です。
この回では、前回の飛行実験に、トラも参加する事になります。

第４話「空を飛ぶガーネ。」ふたつめってとこですね

第４話「空を飛ぶガーネ。」ふたつめってとこですね。

翌朝、ガーネとトラは目を覚ましました。
宿舎の窓から、外を眺めました。
「今日も、いい天気ですね。絶好の飛行びよりです。」
ガーネは、嬉しそうでした。
「私も、参加出来るといいな。」
トラは、カーマイン博士に期待していました。
「まぁ、とりあえずは顔でも洗って、それから朝食を食べに行きましょう。」
「そうね。そうしましょう。」
ガーネとトラは、顔を洗いました。
布団を片付けた後、２階の自分たちの部屋から１階の食堂へ降りていきました。
食堂に入ると、トラが食堂で働いているおばちゃんに声をかけました。
「おばちゃん。お早うございます。」
食堂のおばちゃんは、トラの姿を見ると、相好を崩しました。
「あれ、トラちゃんじゃないの。お早う。」
ガーネとトラは、定食を受け取ると、テーブルの席に腰を下ろしました。
「おばちゃん、私が食べやすいように混ぜて出してくれるのよ。とても、味がよくて嬉しいの。」
トラは、はしゃいでいました。
「トラは、すぐに食堂のおばちゃんと仲良くなりましたね。」
「だって、優しいもの。
初めて、ここに来た時だって、すぐに声をかけてくれたりしてね。

それに、あたしが食べやすいように、気を使ってくれるのよ。
食べるものだけじゃなくて、テーブルの位置もちゃんと考えてくれるの。
あたし、頭が上らないわ。」
「よかったですね。ではそろそろ頂きましょうか。」
ガーネとトラは声を合わせて言いました。
「頂きます。」

食事が終わると、トラは、食堂のおばちゃんにお礼を言いました。
そして、ガーネとトラは洗面所に向かいました。
ガーネは歯を磨きました。それが終わると、今度はトラの歯も磨いてあげました。
歯磨きが終わった後、ガーネはトラに言いました。
「今まであまり気にしなかったんですけどね。
トラは、初めて歯磨きをした時も、それほど嫌がりませんでしたね。
むしろ、積極的に口を開けて、磨きやすいようにしてくれますね。
あと、お風呂も平気で入れますし、シャンプーや石鹸も大丈夫でしたね。
どうして何でしょうか。」ガーネは尋ねました。
「何か、自然にそうなってしまうの。
記憶には無いんだけど、多分そんな生活をしていたんじゃないかな。」
「なるほどね。お嬢様猫だったのかもしれませんね」
歯磨きが終わると、洗面所から出て、2階の自分たちの部屋へ戻りました。
「トラ。美味しかったですね。ああ、お腹がいっぱいです。」
ガーネは、畳の上に寝転びました。
「本当ね。」トラも毛づくろいを始めました。
しばらくすると、ガーネはトラに、博士の話をしました。
「トラ。昨日、博士は、この実験は自腹だと言っていましたよね。」

「ええ、そうね。」
「で、博士の家から港に、車で行く間にいろいろと聞いてみたんですよ。
最初は救難救助用の器具の開発だからと、街に補助金の申請をしたようです。
それが、却下されて自腹でやる事にしたらしいんです。」
「フムフム。それで？」
「この宿舎は、博士が教授だった頃の、大学の宿舎なんです。
博士は、その頃の知り合いに頼んで、部屋も食堂も利用出来るようにしたんです。
あと、救助艇が2台ありましたね。
あれは、その頃、学生だった博士の知り合いが造ったんです。
と言っても、船体の方だけでエンジンは博士が用意したそうです。
現在の助手も、知り合いに頼んで来てもらっているボランティアだったんです。」
「博士の生活って、なかなか厳しそうなのね。」
「とにかく、エンジンに自分と親からの資産を、注ぎまくっているらしいんです。
食事も出来るだけ質素なものにしているようです。
私たちと食べたお昼も、私たちがいたから奮発したそうです。」
「何か、悪い事をしちゃったみたいね。博士に感謝しないといけないわね。
でも、車の中でその話をしたのなら、あたしも聞いた筈よね。
なんで覚えていないのかしら。」
「トラ。あなたはお昼を食べて、お腹がいっぱいになっていたんですよ。
車に乗った後、幾らも経たないうちに眠ってしまったじゃないですか。
だから、覚えていないんですよ。」
「そうだったかしら。でも大した事じゃないからいいわ。」

やがて、港に行く時刻になりました。
ガーネとトラは、宿舎を出ました。
近くのバス停から、バスに乗り込みました。
港に着いてみると、既に救助艇が迎えに来ていました。
「ガーネ君、トラ君。」カーマイン博士が近寄って来ました。
「お早うございます。カーマイン博士。」
「ああ、お早う。今日もいい天気じゃな。」
「本当ですね。」
「今日は、これを持ってきたのじゃ。」
博士が、差しだしたのは、救助服でした。
「これを着て、飛んでもらいたいのじゃ。」
「これをですか。でもまたどうしてですか。」
「もともと、この飛行装置は、救難救助を目的としておる。
実際に使用する場合と、少しでも同じ状態で飛んで欲しいのじゃよ。」
「判りました。では着替えます。」
ガーネは、救助艇の中で着替えました。
ガーネは、カーマイン博士に尋ねました。
「救助服の前の方に付いている、寝袋みたいなものは何でしょうか。」
「これは救助した人を、収納するための袋じゃ。」
「と、言いますと。」
「救助しようとしても、救難者が歩く事が困難な場合も多い。
そんな時に、この袋の中に収納して運ぶのじゃ。
救助が用意になるし、それにかかる時間も短縮出来るというわけだ。
今回は、その救難者にトラ君がなってもらいたいのじゃが、よろしいかの?」
博士は、トラに尋ねました。
「博士。有難うございます。喜んでやらせて頂きます。」

トラは、いつになく目をキラキラと輝かせながら、そう言いました。
この救助袋には、大小幾つかのマジックテープが付いています。人を中にいれたら、マジックテープのファスナー面でしっかり固定します。
これで、小さい子供から大きい大人まで、安心して運べるのです。
トラは、この救助袋に入りましたが、体全体がその奥に入ってしまいました。
そこで、トラの顔や前足が袋の縁から出せる状態にしました。
その後、マジックテープで、トラの体を固定したのです。
「これで大丈夫ですか。」ガーネはトラに聞きました。
「しっかりと固定しているみたい。心配いらないと思うわ。」トラは答えました。
「準備は出来たみたいじゃの。では実験場に行くとするか。」
「はい。」ガーネとトラは同時に答えました。
その後、救助艇は発進しました。

いつもの実験場に到着しました。
「では、始めるとするか。」
博士の合図とともに、ガーネは両手にあるハンドルをレバーごと握りました。
スカイダーの噴射口から、白い煙が勢いよく流れました。
それと同時に、ガーネは、上へ上へと上昇して行きました。
トラはその勢いに圧倒されていました。一言も喋る事が出来なかったのです。
やがて、いつものように、急に推進力がゼロになりました。
ガーネは、真っ逆さまになって、そのまま落ちていきました。
トラは、精一杯、救助袋にしがみついていました。
落ちるスピードは、だんだん遅くなりました。
そして無重力状態となり、海面より少し上で浮いていました。

救助艇が近くに来てくれたので、ガーネは乗り込みました。
本日、1回目の実験が終わりました。

「どうです。怖かったでしょうか?」ガーネはトラに尋ねました。
トラはその体を震わせていました。口がきけないようでした。
ガーネは救助袋からトラを出しました。
そして救助艇にあった水筒の水をお皿に注ぎ、トラに差しだしました。
トラは、しばらくその周りをうろうろしていました。
やがてペロペロとお皿の水を舐めはじめました。
お水を飲んで、落ち着いたせいでしょうか。トラが話し始めました。
「すごかったわ。信じられないくらい。
この世界に初めて来た時の方が、高度は高かったと思うの。
でも、あの時はいきなりだったし、何かを思う暇なんて無かったわ。
でも、今回は違うの。
自分が大空を飛ぶんだって、最初から判っていたし、待ち焦がれていたもの。
本当に短い時間だったけど、素晴らしかったと思うわ。
2つの世界が、そこにはあったような気がするの
最初は、ガーネが地上から大空へ上昇するまでの間ね。
眼下の景色がみるみる間に遠ざかって、小さくなって行くの。
上を見れば、大空がどんどん自分の方へ近づいてくるような気がしたわ。
そして、そのまま自分が吸い込まれていくようなそんな感じ。
とても、不思議な世界を、体中に感じたわ。
次に感じたのが、真っ逆さまに急落下して、海面付近で浮かぶまでだったわね。
上昇していたものが、ほんの僅かの間をおいて、いきなり落下したわ。
この星に「もう、帰ってこないと駄目だよ。」って怒られているみ

たいだったの。
有無を言わさず強引に、引っ張られていたわね。
小さくなっていた景色がどんどん近付いてきたの。
実験だから大丈夫なんて、考えている余裕なんてなかったわ。
「もう駄目よ。」思わずそう思っちゃたもの。
海面に近くなるにつれて、少しずつ落下のスピードが落ちていったわ。
でも、完全に無重力状態になって浮かぶまでは、安心出来なかったの。
海面付近で浮かんだ状態になった時、初めて「助かったのね。」と感じたの。
そうしたら、何故か急に体が震えだして止まらなくなってしまっていたわ。」
トラは、一気に喋りました。

「実験はまだまだ続きますけど、どうしますか？しばらく休みますか？」
ガーネや博士は、トラに尋ねました。
「いいえ、こんな機会はそうあるものじゃないと思うの。
あたしにも、続けさせてください。」
トラは懇願するように、訴えました。
少しの間、休憩をとった後、実験は再開しました。

トラは、最初のうちは体を硬くして、実験に耐えるのが精一杯のようでした。
ですが、2～3回と繰り返すにつれて、だんだん余裕の表情になっていきました。
どうやら、無意識に感じていた恐怖感から、解放されたようです。
トラは、この実験自体を、楽しむ事が出来るようになっていきました。

何回目かの実験が終わった頃、カーマイン博士から声がかかりました。
「ガーネ君。トラ君。御苦労様でした。
今日予定した実験は、これでおしまいじゃ。
明日からは、これから取りに行く新しいエンジンで実験をするでの。
お二方もそのつもりでな。」
ええ、やっと面白くなりかけたのに、もうやめちゃうの？
トラは、がっかりしていました。
「カーマイン博士。実は提案があるのですが、聞いてもらえないでしょうか？」
ガーネが博士にそう言いました。
「提案じゃと。はて、どんな話かの。」
「今までの実験は、博士が目標とする高度まで、飛ぶためのものでしたよね。」
カーマイン博士はうなずきました。
「その通りじゃ。
スカイダー内部にモニターを付けて、実験によりその動作を確認しておった。
そして、何が障害になっているのか、調べていたのじゃ。」
「もう1つ、実験して欲しい事があるんです。」
「ほう、それは何かね。」
「一体どれくらいの高度までなら、正常に動作するかという事です。
博士の研究所では、高度は低くても、正常に動作するものを体験しました。
今ここにあるスカイダーは、それ以上の性能を持っています。
是非、このスカイダーが正常に動作する高度の、限界を調べてください。
それもまた、スカイダーの開発に役立つものと、私は思います。」
「正常に動作する高度の限界とな。
確かに試してみる価値はあるのかもしれんな。

まだ、無重力状態が消えるまでは、時間もかなり残っておる。
じゃが、本当に実験をするつもりがあるのかの？」
博士は、念のためにガーネに尋ねました。
「はい、もちろんです。」
カーマイン博士は、救助艇にいる助手の2人の元に行きました。
しばらくの間、3人でこの新しい実験について話をしていました。

数分後、カーマイン博士は戻って来ました。
「助手も、この提案に賛成してくれてな。実験を開始する事になった。
まず、最初は目標の高度の、半分ぐらいからにして行なう。
それから、少しずつ、高度をあげていくのじゃ。よいな。」
「はい、博士。」ガーネはそう答えました。
トラは救助袋に入れたままでした。
「トラ君はどうするつもりかの。」
「はい。通常飛行もやってみたいです。お願いします。」
トラは、博士にそう言いました。

やがて、実験の準備が終わりました。
「では、始めてくれ。」
博士の合図とともに、ガーネは両手にあるハンドルをレバーごと握りました。
再び、ガーネたちは、空へと上昇しました。
予定の高さまで達した時、マイクから博士の声が聞こえてきました。
「よし、旋回じゃ。」
ガーネは、ハンドルのレバーを操作しました。
それと同時に体の向きを変える事によって、旋回をする事が出来ました。
右旋回、左旋回と交互に、繰り返しながら、飛んでいました。
「ガーネ。すごいすこい！！」

トラは、上昇時はもちろん、旋回を繰り返すたびにガーネに声をかけました。
その目はキラキラと輝き、頬の色も赤みを帯びていました。
その後、下降や上昇も繰り返しました。
縦横無尽に飛んでいるその姿に、博士も満足そうでした。
楽しい時間は、あっという間に過ぎていきます。
いつしか、既定の飛行時間になってしまいました。
博士はガーネに、地上に降りてくるように指示を出しました。
いよいよ、最後の難関です。
無重力を利用することなく、無事に着地出来れば成功となります。
ガーネは、ハンドルのレバーの「握る・離す」を繰り返しました。
その間隔を早めたり、遅めたりしながら、ゆっくりと降りていきました。
そして、無事に救助艇へ着地する事に成功しました。
「ガーネ君。見事な着地じゃった。」
カーマイン博士は、ガーネと握手をしました。
「わしが目標として掲げている飛行高度には、まだまだじゃがな。
それでも、わしの描いた夢へ、一歩前進したような気はするわい。」
博士は、この成功を喜んでいました。
その後も、少しづつ高度を上げて実験を続けました。
実験は、海面の無重力状態が消えると同時に終了しました。
結果的には、目標の飛行高度の2／3に、あともう少しというところでした。
それでも、この好結果に、実験にかかわった、みんなが満足しました。
そして、この研究を続ける思いを、強くしたのでした。
今回も、特に怪我をする事もなく、終える事が出来ました。
ガーネもトラも、最高の気分でした。

宿舎に帰ろうとしたガーネたちは、博士に呼びとめられました。
「昨日話した通り、午後は実験をやらないつもりじゃった。
じゃが、先ほどの実験結果を見て、別の実験もしてみたくなっての。」
「と、おっしゃると。」
「耐久実験じゃよ。
最後に成功したあの高度で、時間ぎりぎりまで通常飛行をして欲しいのじゃ。
あのスカイダーがどれほどの耐久性を持つか、確認をしたいのじゃ。
やってくれるかの。」
「でも、博士はいないんですよね。勝手にやってもいいんですか。」
「助手二人も、付き添ってくれるそうじゃ。
ガーネ君やトラ君たちが引き受けてくれるなら、是非お願いしたい。」
ガーネとトラは顔を見合わせました。返事は決まっていました。
「もちろん、喜んでやらせて頂きます。」

お昼になりました。
宿舎に帰ったガーネとトラは、昼食を食べました。
いつものように、歯を磨いた後にガーネは2階に戻ろうとしました。
その時、トラはガーネに声をかけました。
「ねぇ、しばらく食堂にいてもいい？」
「別に構いませんが、どうしてでしょうか。」
「あのね。食堂のおばちゃんが、空を飛んだ話を聞きたいって言うの。」
「ああ、そうなんですか。いいですよ。
午後の実験までは、時間もまだかなりありますしね。
ゆっくり話をしててください。」
トラは、食堂に戻りました。
ガーネは、2階の自分の部屋に戻りました。

部屋で、寝転がりながら、ふと思いました。
「別世界に行って、1人ぼっちになったのは、最初の時ぐらいですね。」
ガーネは、トラと出会う前の自分を思い出していました。

トラが、戻って来ました。
「お帰りなさい。トラ。まだゆっくりお話をしてても大丈夫ですよ。」
「いいえ、もういいの。いっぱいお話したもの。」
トラは、なんとなく、さみしげでした。
「トラ。どうしたのですか。」ガーネは聞いてみました。
「あのね。おばちゃんに、今日の事を話していたの。
そしたら、とても楽しそうに聞いていてくれたわ。
でもね、途中で、おばちゃんの娘と孫が入って来たの。
すると、おばちゃん。少し待っててねって言って、席を外したの。
しばらくして、おばちゃんが戻って来たわ。
話を続けようとしたら、おばちゃんが言ったの。
「ごめんね。今日は久しぶりに、孫が来たの。
早く家に帰ってあげたいから、話はまた今度聞かせてね。」
おばちゃんは、そう言って、家族と一緒に出ていってしまったわ。
だから、あたしも食堂から出てきたの。」
そう言いながら、トラはガーネの横に来てしゃがみ込みました。
ガーネは何も言いませんでした。
ただ、優しくトラの頭を撫でてやりました。
トラは、寝転んでいるガーネに寄り添い、その胸に顔を埋めていました。
泣いているようでもありました。
ガーネは左腕でトラを抱きかかえ、右手でその頭を撫でてやりました。
「大丈夫ですよ。トラ。あなたには、私がついています。

1猫(ひとり)っきりなんかじゃありません。
私は、いつでもあなたのそばにいますよ。」
ガーネはそう言って、トラを慰めました。

やがて、港に行く時刻になりました。
ガーネとトラは、宿舎を出て、バスに乗り込みました。
港に着いてみると、いつものように救助艇が迎えに来ていました。
救助艇に乗り込むと、運転係も兼任している博士の助手に聞いてみました。
「いつも、ご苦労様です。カーマイン博士はもう出かけられたのですか。」
「はい。午前中の実験が終わると、すぐに車でお出かけになりました。
本当は、午前中の実験は、予定どおり早く終わらせるつもりだったのです。
時間的に余裕を持って、出かけたかったんだと思います。
ところが、あの追加の実験を実施する事になってしまいました。
そのため、予定が狂ってしまったんです。」
「それは・・・。どうも申し訳ありませんでした。」
ガーネは、頭を下げました。
助手の人は、それを見ると慌てて言いました。
「別に、ガーネさんが気にする必要なんてないんですよ。
あの実験は、確かに必要なものでしたし、私たちもそれを認めたんですからね。
これから行う実験も、必要だからやるんです。
だから、ガーネさんたちは、いつものように実験に集中して下さい。」
「判りました。では、よろしくお願いします。」ガーネは答えました。
その後、救助艇は発進しました。

いつもの実験場に到着しました。
「じゃあ、ガーネさん。始めますよ。」
助手の合図を確認後、ガーネは両手にあるハンドルをレバーごと握りました。
後は、午前中にやった通常飛行を繰り返しました。
トラは、午前中に何回も乗ったせいでしょうか。今回は落ち着いていました。
青く広がる大空の中で、トラはガーネと一緒にその飛行を楽しんでいました。
トラは「いつまでも、飛んでいたいな」と思っていました。

無重力状態が終了するまで、それは続けられました。
実験が終了すると、助手はガーネに言いました。
「お疲れ様でした。」
「こちらこそ、私が提案した実験に付き合わせてしまい、済みませんでした。
ところで、耐久性に何か問題がありましたか？」
「いえ、モニターで確認してみましたが、特にありませんでした。」
「それは、よかったですね。博士も喜ぶんじゃないでしょうか。」
「はい。そうだと思います。」
その後、博士の助手たちと別れてガーネたちは宿舎に戻る事にしました。

帰りのバスは空いていました。
座席に座ったガーネは、自分の膝に座っているトラに聞きました。
「どうです。もう慣れましたか。」
「午前中もそうだったけど、午後もずっと飛びっぱなしだったでしょ。

だんだん、慣れてきたわね。
もちろん、ガーネの操作がうまくなって来たせいもあるでしょうね。
最初の頃に感じたスリルや迫力が、次第に感じられなくなってきたわ。
もちろん、楽しさは今も変わらないけどね。
でも、出来る事なら。」
「何でしょうか。」
「あたしが、あのスカイダーを背負って、空を飛びたいな。」
「でも、それは。」
「判っているわ。無理ってことぐらい。ただ言ってみたかったの。」
やがて、宿舎に到着しました。

昨日のように、すぐに夕食の時間が訪れました。
ガーネとトラは、食堂に降りていきました。
トラは、いつものように食堂のおばちゃんに声をかけられました。
一瞬、立ち止まりましたが、ちょっと頭を下げただけで通り過ぎてしまいました。
ガーネは、定食を受け取りました。
トラの分も受け取ろうとすると、おばちゃんがトラの方を向きました。
「トラちゃん、昼間はごめんなさいね。
おばちゃんが誘っておいておきながら、勝手に帰っちゃって。
もし、よければ食事の後、また寄ってくれない？
トラちゃんの話の続きを聞きたいの。」
おばあちゃんはそう言って、トラには混ぜご飯を出してくれました。
「あ、有難う。」トラは、ぎこちないながらも、お礼を言いました。
ガーネとトラは、今朝と同じテーブルで食事をとりました。
食事が終わると、いつものように洗面所で歯を磨きました。
その後、ガーネは2階に戻ろうと、階段を上り始めました。
ですがトラは、階段の手前で立ち止まっていました。

ガーネは、トラの元に戻り、声をかけました。
「トラ、どうかしましたか?」
ガーネが尋ねると、トラは答えました。
「あのね。やっぱり、おばちゃんのところ・・・。」
トラは、言いにくそうでした。
ガーネは、しゃがんでトラの頭を撫でながら、こう言いました。
「判りました。おばちゃんのところで、ゆっくりお喋りを楽しんでください。」
「有難う。ガーネ。」トラは急いでおばちゃんの元へ走って行きました。
「やれやれ、一件落着ですね。」
そう言いながら、ガーネは2階に上って行きました。
自分の部屋に入ると、ガーネは寝転がりました。
時間が経つにつれて、眠気がガーネを襲いました。
そして、いつの間にか眠ってしまいました。
どれくらい時間が経ったでしょうか。
誰かが、ガーネの肩を叩いて、声をかけているようでした。
はっとして、目を覚ますと同じ宿舎の人が、ガーネを起こしていました。
「ガーネさん。お電話です。」その人は言いました。
ガーネは、目を擦りながらお礼を言いました。
その後、電話機が置いてある場所に行きました。受話器は外れていました。
ガーネは、受話器を取り上げて、耳にあてました。
「もしもし、どちら様でしょうか。」ガーネは尋ねました。
「わしじゃよ。先ほど自宅に戻って来た。」
電話の主は、カーマイン博士でした。
「そうでしたか。お帰りなさい。
それにしても、わざわざ電話をかけてくるなんて。
何か用事でもあったんですか。」

「実はのう。今日、取りに行った新しいエンジンが手元にあるのじゃ。
スカイダーに取り付ける前に、見せておこうかと思っての。
こうして電話をしてみたのじゃ。
どうだ。もし暇なら今からでも構わんから、わしの家に来んか？」
ガーネは、時計を見ました。まだ床に着くには早すぎる時間です。
「判りました。今からそちらへ伺います。」ガーネはそう答えました。
「そうか。では待っているからな。」そう言って、博士は電話を切りました。
やれやれ。ガーネは苦笑しながらも、出かける事にしました。
トラにその事を伝えるため、食堂に立ち寄る事にしました。
今回は、トラは置いていくつもりでした。
おばちゃんとの長話を楽しんでいるなら、邪魔しては悪いと思ったからです。
食堂の入り口で、トラと鉢合わせしました。
「ガーネ。どうしたの。」トラが尋ねました。
ガーネは、博士のところに出かける話をしました。
すると、トラもついて行くと言いだしました。
「おばちゃんと話をしていたんじゃないの？」ガーネは尋ねました。
「とっくに終わったわ。おばちゃんも、さっき家へ帰って行ったの。」
トラは、そう答えました。
「そうか。さっき、私は少し眠っていたんでしたね。忘れていましたよ。
じゃあ、トラ。一緒に出かけましょうか。」
ガーネとトラは、宿舎の外に出ました。
ガーネたちは、バスの停留所に向かって歩きだしました。
ですが、その時1台のバスがガーネたちの横を、通り過ぎて行きま

した。
ガーネは、そのバスの行き先を示すパネルの文字を、確認しました。
そこには、ガーネたちが行きたい方面の名前が表示されていました。
「あっ、トラ。あのバスですよ。」
ガーネとトラは、一生懸命にその後を追いかけました。
ですが、停留所に人の姿が無かったため、バスは通り過ぎてしまいました。
結局、バスには間に合いませんでした。
ガーネもトラも息を切らして、そこに佇んでいました。
しばらくして落ち着くと、時刻表を眺めました。
今乗り遅れたバスが、目的のバスだった事が確認できました。
次にバスが来るのは、２０分あとでした。
ガーネは、トラにいいました。
「次のバスが来るまで、ここにずっと立っているのもつまらないですね。
どうでしょう。そこの公園で時間を潰しませんか？」
ガーネは、トラにそう言いました。
トラもうなずきました。
ガーネは、食料品店で、飲み物を購入しました。
ブランコに揺れながら、その飲み物をストローでかわるがわる飲んでいました。
「それにしても、ここに来てもう2日目ですね。
しかも、もう夜ですよ。一体、私たちはいつまでここにいるんでしょうね。」
「ひょっとしたら、ここがあたしたちの世界って事もあるんじゃないの。
もしそうなら、もう迷宮のドアは現れる事は無いわ。」
「そんなに早く見つかるものなんでしょうか。
まぁ、あり得ない話ではありませんし、本当にそうなら嬉しいです。
ただ、自分の世界に戻れば、記憶も元に戻ると思っていたんですよ。

そして、迷宮の事など忘れて、以前の生活に戻れるんじゃないかってね。
だから、ここを自分の世界と思うには、少し違和感があるんです。
トラは、どう思います？」
「私も今は何とも言えないわ。
ガーネと同じで、自分の事なんて名前以外、何も覚えていないしね。
やっぱり判らないわ。」
ガーネとトラは、黙ってしまいました。
そして、時が過ぎていきました。
ふと気が付いて、ガーネは時計を見ました。
この時計は、博士が最初に出会った時にくれたものでした。
そろそろ、バスが来る時刻になっていました。
「トラ、バスの停留所に戻りましょうか。」
ガーネは、トラににそう言いました。
「そうね。また乗り遅れると大変だわ。行きましょう。」
トラも同意しました。
ブランコを下りて、飲み終わった缶をごみ箱に捨てました。
ガーネたちは、公園をあとにしました。

ガーネとトラがバスの停留所に着いて、まもなくバスがやって来ました。
ガーネたちはバスに乗り込み、空いている座席に座りました。
「お金はまだあるの？」トラは尋ねました。
「大丈夫ですよ。昨日の日当の分が残っています。
それに、今日も午前中の実験後に、博士から今日の分の日当をもらいました。
何の心配もありませんよ。」
ガーネはそう答えました。

しばらくして、バスはカーマイン博士の近くの停留所に止まりまし

た。
お金を払って、バスを降りました。
「ええと、こちらでよかったんですよね。」
宿舎で、博士の家の住所を知っている人に、書いてもらった地図を眺めました。
ガーネはその地図で、現在自分たちが居る停留所の位置を確認しました。
「間違い無いようですね。行きましょう。」
ガーネはトラにそう言いました。
そして、その地図が指し示す方向に、歩いて行きました。
「ええと、ここから歩いて１０分ですね。」ガーネは言いました。
ガーネが歩いて行く先に、食料品店がありました。
「博士は、多分今日は夜通しでエンジンを取り付けるつもりです。手間をかけずに美味しく食べられる物を幾つか買っていきましょう。私たちの分も含めてね。」
「何で、私たちの分もなの？」
「ひょっとすると、私たちも付き合わされる事になるかもしれないからですよ。
単に、購入したエンジンを見せびらかしたいだけとは思えないんです。
きっと、いろいろ手伝わされるんじゃないかと思います。
トラも覚悟をしていてくださいね。」
「えっ、あたしも何かするの？」
「冗談ですよ。
ただトラも私も、今夜は博士の家で、一夜を過ごす事になりそうです。」
ガーネは、食べ物と飲み物を幾つか選んでかごに入れました。
トラが自分で選んだものも、一緒に入れました。
レジで、支払いを済ませると、そのお店を出ていきました。
「さぁ、少し時間をかけ過ぎましたね。早く行きましょう。」

ガーネとトラは、博士の自宅へと歩き始めました。

第４話「空を飛ぶガーネ。」ふたつめってとこですね。（終）

第４話「空を飛ぶガーネ。」ふたつめってとこですね（後書き）

今回のお話は、人間単独飛行の実験を行なっている世界の２日目以降の話です。
トラも実験に参加する事になり、大空へ飛び立ちます。

第４話「空を飛ぶガーネ。」最後ですね。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第４話「空を飛ぶガーネ。」最後ですね。のお話です。
この回では、人命救助や、スカイダーの換装などの話が中心です。
いよいよ、この世界ともお別れの時が来ました。

第４話「空を飛ぶガーネ。」最後ですね。

第４話「空を飛ぶガーネ。」最後ですね。

カーマイン博士の家に近付くにつれ、あたりは騒がしくなって来ました。

サイレンと鐘の音が、響き渡っていました。

ガーネとトラが、博士の家が見える所まで来ると、その原因が判りました。

博士の何軒か先の、アパートらしき建物が、大火事になったいたのです。

その建物から出る、業火の炎にガーネとトラは立ちすくんでしまいました。

「この火事は、すごいですね。もう建物のほとんどが、炎に包まれています。」

「誰もいないといいわね。」

ガーネの周りは、黒山の人だかりになっていました。

ガーネは、その中に、カーマイン博士の姿を見つけました。

「カーマイン博士!!」ガーネは、博士に声をかけました。

博士は、ガーネに気づいたらしく、右手をあげました。

ガーネとトラは、博士に駆け寄りました。

「すごい業火ですね。」ガーネは言いました。

「そうじゃな。しかし、それよりも大変なのはあれじゃよ。」

カーマイン博士の指さす方を、ガーネたちは見ました。

大火事になっているアパートの屋上に、人の姿がありました。

「あれは、人ですね。しかも小さい女の子です。」

「そうなのじゃ。」

「救助は、どうなっているのでしょうか?」

「あれを見てみぃ。
さっきから、あそこの消防の梯子車が、あの子を助けようとしているんじゃ。
じゃがのう。この業火で近寄る事も出来ないのじゃ。」
「ヘリコプターの応援を呼ぶしかないんじゃありませんか？」
「もう、連絡はしておるらしいがの。
ただ、数時間前、別の場所でも、災害が発生したとの事でな。
そちらの方に、ヘリは全機出払っているらしいのじゃ。
そんなわけで、こちらには都合がつかないらしい。」
「そんな。」ガーネもトラも唖然としました。
「何か方法はないんですか？」ガーネは博士に尋ねました。
博士は、目をつぶり、黙ってしまいました。
「スカイダーを使えばいいじゃないの。」
トラが、ガーネや博士にそう言いました。
二人は、トラの方を振り向きました。
「あの子は、今屋上にいるのよ。屋上は、まだ火の気が感じられないわ。
スカイダーなら、あの高さまで飛べるから、助けられると思うの。
救助袋を使えば、短時間であの子を屋上から搬送出来るじゃない。」
「それは、そうじゃが・・・。」
「それにスカイダーは、もともとこういう時のために開発したんじゃないの？
今こそ、その力をみんなに見せるべきだと思うわ。」
「トラ。そうかもしれませんね。」ガーネは言いました。
「カーマイン博士。今あの子を助けられるのは、スカイダーしかありません。
昼間、使用したスカイダーは今、博士の自宅の研究所にあるんですよね。
もし、許可をもらえるなら、救助するのに必要なものを取って来ます。

もちろん、スカイダーは私が操縦します。
カーマイン博士。どうかスカイダーを使用する許可をお願いします。」
「ガーネ君。」カーマイン博士は言いました。
「君やトラ君の考えはよく判るし、わしも出来ればそうしたいのじゃ。
じゃがのう。今のスカイダーは、何の安全装置も施されていないのじゃ。
実験では、トラブルが起きないよう、その使用には十分配慮したつもりじゃ。
じゃが、今回は違う。
まかり間違えば、お主もそしてあの子も、死ぬかもしれん。
許可を出すわけには、いかんのじゃ。」
「博士・・・。」ガーネは絶句しました。トラも涙を浮かべていました。

その時、屋上の方から爆発音が聞こえました。
ガーネたちは、屋上を見ました。
すると、屋上に置いてあった何らかの機材が、引火したようでした。
その炎と煙は、まさに女の子に襲いかかろうとしていました。
それを見ていたカーマイン博士は、思わず、拳を握りしめました。
そして、ガーネの方に向き直りました。
「ガーネ君。スカイダーを使用する事を許可しよう。
本当に行ってくれるのじゃな?」
ガーネはうなずきました。
「事は急ぐ。ついて来るのじゃ。」
カーマイン博士やガーネ、そしてトラは、急いで博士の自宅に行きました。
ガーネは、救助服に着替え、スカイダーとヘルメットを装着しました。

博士の自宅を出たガーネたちは、業火の炎に包まれたアパートに向かいました。
そして、そのアパートに前に立ちました。
ガーネは、カーマイン博士とトラの方を向きました。
カーマイン博士とトラは、ガーネにうなずきました。
それを見た、ガーネもうなずきました。
ガーネは、両手にあるハンドルを、レバーごと握りました。
スカイダーの噴射口から、白い煙が勢いよく流れました。
それと同時に、ガーネは、上へ上へと上昇して行きました。
あっという間に、ガーネは屋上に到着しました。
屋上も、一部がもう炎に包まれていました。
ガーネは、涙ぐんで動けないでいる、女の子のそばに近づきました。
女の子は、ガーネに気が付くと、急いで駆け寄って来ました。
ガーネは、腰をおろして女の子を抱きました。そして声をかけました。
「もう、大丈夫ですよ。必ず助けますからね。」
ガーネは、女の子を救助袋に入れた後、マジックテープで固定しました。
バルブを開くと、救助袋が膨らみ、救助服にしっかりと固定する事が出来ました。
これで、飛行しても女の子が落ちる事はありません。
ガーネは、女の子の安全を確認した後、急いで屋上を飛び立ちました。
女の子の体重が加わったせいで、バランスが取りづらくなっていました。
それでも、ガーネはなんとか安定したバランスを取る事に成功しました。
そして、カーマイン博士やトラの元に、降りる事が出来たのでした。
救助袋から、女の子を出しました。
そこへ、消防署の人たちや、女の子の両親が駆けつけてきました。

女の子は、母親の胸に抱かれて、泣きじゃくっていました。
両親も、涙を浮かべていました。
その後、女の子は、両親と一緒に病院に運ばれて行きました。
救急車に乗り込む前に、女の子の両親は、ガーネの方を振り向きました。
そして、頭を下げて、お礼の言葉を言いました。
「有難うございました。」
救急車は、走り去って行きました。
カーマイン博士は涙を浮かべながら、ガーネに握手をしました。
「わしからも言わせてもらいたい。本当によくやったのう。」
トラも、ガーネに抱きつきました。そして言いました。
「有難う。ガーネ。」
「どういたしまして　トラ。
でも、救助している間は、夢中だから何にも感じませんでしたね。
こうやって終わって見て、あらためて恐怖を感じました。
精神面が強い人でないと、人を救助するのは、難しいですね。
それを今回、思い知らされましたよ。」
ガーネはそう答えました。
「さぁ、お二方、わしの家に行こう。」カーマイン博士は、そう言いました。
そして彼らは、その場を立ち去りました。

それから2時間後、大がかりな消火活動で、アパートの火は消し止められました。

ガーネとトラは、カーマイン博士の家に着きました。
トラは、あの火事の現場から、ここにたどり着くまでに、眠ってしまいました。
ガーネは、眠ったトラを、右ポケットの中に入れました。
ガーネはカーマイン博士に頼んで、ソファにトラを寝かせました。

そして軽いタオルを、トラの上にかけてやりました。
博士とガーネは、例の研究所と称する部屋に向いました。
テーブルに座り、博士は、その上に載せてあった箱を開封しました。
「見てごらん、これが新型のエンジンじゃ。」
カーマイン博士は、誇らしげにガーネに、そのエンジンを見せました。
「へぇ、これがそうですか。
科学的なことは全然判りませんが、割と小さいものなんですね。」
「人が背負う、スカイダーに取り付けるエンジンなのでな。
小さく、そして軽い必要があるのじゃよ。」
「1つ質問があるのですが、いいでしょうか。」
「構わん。言ってみなさい。」
「博士は今日、このエンジンを受け取るために、出かけたんですよね。」
「そうじゃ。」
「エンジンは、博士がここで製作しているものだとてっきり、思っていました。」
「確かに、エンジンの設計図は、わしが作ったものじゃ。
そして、試作品のひな型も、ここで作っておる。
じゃが、実際にスカイダーに載せる試作品は別じゃ。
わしの教え子が経営している、機械工場で造ってもらっておる。
スカイダーに使われる部品の入手は、個人では難しいし、高額になってしまう。
組み立てにも、専用の機械を所有している工場の方が利点が多い。
エンジンの安定性はもちろん、組み立て時間も短縮出来る。
個人で造るよりは、はるかに格安で早く、しかも良いものが造れるのじゃ。」
「なるほどね。そういうわけでしたか。」ガーネは納得しました。
「今度作成した、エンジンの性能は素晴らしいぞ。
今まで、弱点とされてきた高出力の安定にだな。」

「ちょ、ちょっと、待ってください。
何回も言うようですが、科学的な説明は判らないし、必要ありません。
要するに、今までより、いいエンジンが出来たという事ですね。
それだけ判れば十分です。」
カーマイン博士は、ガーネの言葉に、明らかに不満そうでした。
博士は、いつかの時のように、何やら、ぶつぶつ言っていました。
ですが、ガーネは聞かない事にしました。
しばらくして、博士は、やっと気を取り直しました。
そして、咳払いをした後、ガーネにこう言いました。
「まぁ、今日来てもらったのは、エンジンの説明のためではないからの。
実は、今日中にこのエンジンを、スカイダーに換装したいのじゃ。
それでな。出来れば君にも手伝って欲しいと思っての。連絡をしたのじゃ。
日当は多めに払うが、どうじゃろうか？」
博士は、ガーネに尋ねました。
ガーネは、フゥーとため息をつきました。
「どうせ、そんな事だろうと思っていましたよ。
いいですよ。ここに来てから、博士にはお世話になっていますからね。
それに私も早く、エンジンの性能を知りたいです。」
ガーネは承諾しました。
博士は、その言葉を聴いたせいでしょうか。
先ほどからの不満げな様子が、いつの間にか消えていました。
むしろ、嬉しげにさえ思えるほどでした。
「そうかそうか。それは助かるのう。では早速始めるとしようかの。」
博士は研究室のカーテンで仕切っている一画に、ガーネを連れて行きました。

そのカーテンをくぐって、博士とガーネは中に入りました。
「これは、何なのですか。」ガーネは尋ねました。
「これはの。スカイダーのエンジンを、換装するための装置じゃ。
作業としては、次の順序で行なわれる。
1．スカイダーの個体を開け、エンジンを収納しているカートリッジを取り出す。
2．カートリッジごと固定装置にセットする。
3．換装監視ボックスを被せる。
4．カートリッジからエンジンを外す。
5．エンジンに取り付けてあるオプションを全て外す。
6．外したオプションや、エンジンは、収納ラックに収納する。
これで、エンジンの取り外しは完了する。
上の作業のうち、遠隔操作するのは、4と5じゃ。
エンジンのオプションには、精密で、小さい部品を使っているでの。
直接手で作業しようものなら、接続部分が壊れてしまう可能性が高いのじゃよ。
さて、次に新しいエンジンを、取り付ける作業を行なうがの。
作業としては、次の順序で行なわれる。
1．新しいエンジンを固定装置にセットする。
2．エンジンにオプションを取り付ける。
3．エンジンをカートリッジにセットする。
4．スカイダーにカートリッジをセットし、個体を閉じる。
上の作業のうち、遠隔操作するのは、2と3じゃ。
遠隔操作はもちろん、慎重を要する作業なので、わしがやる事にする。
おおまかではあるが、これが作業の内容じゃ。
理解してもらったかな。」
「はぁ。」
ガーネは心の中で、来るんじゃなかったと後悔しました。
「で、私に何をせよと。」

「1つは、取り外したオプションやエンジンを収納ラックに収納する事。
もう1つは、オプションをこの装置に、あらかじめ用意して置くことじゃ。
これらの作業は、この装置が指示してくれるので、その通りにやればよい。
どうじゃ。簡単じゃろ。」
「まぁ、それだけなら出来ると思います。」
不安ながらも、ガーネはやる事にしました。

エンジンの換装の作業が始まりました。
ガーネは、自分の作業が、実に面倒なものである事が判りました。
エンジンから外す、または取り付けるオプションの数が半端じゃなかったのです。
しかも、作業は1つづつ行なわれました。
完全にエンジンの換装が終わったのは、始めてから6時間後でした。
ガーネもカーマイン博士もくたくたでした。
ガーネは、博士に毛布を貸してもらって、トラの眠っている部屋に行きました。
そして、トラの向かい側のソファで、毛布をかぶって寝てしまいました。

ガーネは、目を覚ましました。
何かが、自分の頬をペタペタと叩いている事に、気が付いたからでした。
ガーネの目の前には、トラの姿がありました。叩いてたのは、トラの前足でした。
「お早う。」元気にトラは言いました。
「お早うございます。」寝ぼけ眼で、ガーネも朝の挨拶をしました。
しばらくぼーっとしていましたが、やがて少しづつ意識がはっきり

してきました。
「カーマイン博士は、まだ寝ているのですか。」ガーネはトラに尋ねました。
「博士なら、朝早く出かけたわ。
街のお偉いさんから、電話で、呼び出しがあったって言ってたの。
あたしたちが買って来た、夜食分を食べていったわ。
あっ、それからガーネにも伝言があるの。」
「伝言？何でしょうか？」
「昨日はどうも有難うって、言っていたの。
あと、今日は実験が遅れるかもしれない、とも言っていたわ。
だから、港にある喫茶店で待機するようにって。
助手の人たちにも、メールを送ったそうよ。」
「そうですか。
でも、今からバスで港に行っても、着くのが早すぎますよね。
私とトラの夜食分は、残っているんですか？」
「ええ、あたしは、ガーネと一緒に食べようと思って待っていたの。
おかげで、お腹がペコペコだわ。」
「それはすみませんでした。では、早速、食事にしましょう。」
ガーネは自分が使っていた毛布を片付けました。その後、食事の用意をしました。
トラには、猫用ミルクと猫缶を、お皿に出しました。
自分には、コーヒーを少し温めて、冷たくなったサンドイッチを用意しました。
「頂きます。」ガーネとトラは声を合わせて言いました。

食べ終わると、食器やごみなどを片付けました。
戸締りを確認した後、博士の家を出て行きました。
バスの停留所に着いてから、5分ほどでバスがやって来ました。
空いている座席に座って、港まで乗って行きました。

港に着くと、近くにある喫茶店に入りました。
そのテーブルの1つに、カーマイン博士の助手の人たちがいました。
「お早うございます。」「お早うございます。」
朝の挨拶を交わしました。
ガーネとトラも席に着きました。
そして、ウエイトレスさんに、コーヒーとミネラルウォーターを注文しました。
「昨日は、大変だったでしょう。」助手の1人が言いました。
「えっ。」
「新しいエンジンの換装をしたんでしょう?」
「あっ、はい、そうです。」
「どのくらい時間がかかりましたか?」
「ええと、確か6時間ぐらいだったと思います。」
「6時間ですか。早く終わってよかったですね。」
「と、言うと。」
「初めの頃は、数日かかっていたんですよ。」
「そんなにですか。でも何故そんなにかかっていたんですか?」
「実験用エンジンは、実験が目的なんです。
ですから、容易に変更出来る部分が多い方が、実験をしやすいんです。
それは、ソフトウエアでも、ハードウエアでも同じです。
そのため最初の頃は、最低限の機能以外、全てオプションだったんです。
その結果、オプションの管理に、時間と手間がかかり過ぎてしまいました。
そこで、実験と同時に、どのオプションを残すかを選別する事にしたんです。
そして、次の試作品を注文する時に、それを反映させるようにしました。
今まで使っていたエンジンと比較して、どうでしたか?

今回の新しいエンジンの方が、オプションの数が少なかったんじゃないですか？」

「確かにそうですね。ざっと、半分ぐらいにはなっていましたよ。」

「半分ですか。オプションの数が、換装作業全体の時間に比例するんですよ。

それなら、次回は間違いなく、３時間ぐらいで終わる筈です。

３時間ですか。それなら負担がぐっと減りますね。

よかった。よかった。」

「そうですね。」ガーネも同意しました。

コーヒーとお水（ミネラルウォーター）が運ばれてきました。

お水の入ったコップにストローを差して、トラの前に置きました。

トラは、ストローからお水を飲みました。

「トラさんでしたっけ。器用な猫ですね。」助手の人は言いました。

「確かに。私もそう思いますよ。」ガーネも同意しました。

いつもの実験予定時間を３０分過ぎた所で、博士が喫茶店に入って来ました。

「お帰りなさい。」テーブルに居た博士の関係者全てが、同時に言いました。

「ああ。みんな集まっておるの。」

博士は、そう言った後、ガーネのそばに近寄り握手をしました。

「有難う。君のおかげで、街から補助金が出そうじゃよ。」

博士は、そう言いました。

「と、言いますと。」きょとんとした顔で、ガーネは尋ねました。

「昨夜、君が救った女の子は、市長の知り合いの娘さんだったんじゃよ。

その知り合いというのは、この街に多額の寄付をしてくれている人での。

市長に、このスカイダーの研究に対し、支援の要請をしてくれたのじゃ。

正式に決まるには、議会の承認が必要になる。
じゃが、昨夜の救出劇はたくさんの人が見てくれていての。
その人たちも、議員に働きかけてくれるのだそうじゃ。
恐らくは、満場一致で可決されるだろうと言ってくれた。」
「そうでしたか。カーマイン博士。おめでとうございます。」
テーブルにいた博士の関係者全てが、お祝いの言葉を口にしました。
「有難う。長い間、実験を重ねてきた甲斐があったというものだ。」
カーマイン博士は、涙ぐんでいました。
ハンカチで涙をぬぐった後、周りにいるみんなに言いました。
「さて、実験を始めようかの。
既に、実験の予定の開始時間をとうに過ぎてしまっておる。
急いで、準備にかかって欲しい。
今日は昨夜、新型エンジンに換装した、スカイダーのお披露目じゃ。
いつも以上に、気を引き締めて作業をしてくれ。」
「はい。判りました。」
ガーネとトラは飛行の準備を、助手たちは救助艇の準備を始めました。
準備が整うと、全員が救助艇に乗り込みました。
救助艇は　走り出しました。

いつもの実験場に到着しました。
「では、始めるとするか。
新型のエンジンの初めての実験じゃ。間違いの無いよう、しっかり頼むぞ。」
博士の合図とともに、ガーネは両手にあるハンドルを、レバーごと握りました。
スカイダーの噴射口から、白い煙が勢いよく流れました。
それと同時に、ガーネは、上へ上へと上昇して行きました。
「いよいよ、目標の飛行高度じゃな。」
博士は、手元にあるパソコンで常時、現在の高度を確認していまし

た。
そして、ついに高度を示す表示が、目標と定めた数値に達した事を確認しました。
博士は、双眼鏡でガーネを確認しました。
ガーネが安定した状態で、大空を飛び続けている事を確認しました。
「やったぞ。初めて目標値をクリアしたんじゃ。」
カーマイン博士は大声で叫びました。
「博士。ついにやりましたね。おめでとうございます。」
助手たちも、お祝いの言葉を述べました。
博士は、マイクのスイッチを入れて、ガーネにもその事を伝えました。
「おめでとうございます。」
スピーカーから、ガーネのお祝いの声が聞こえてきました。
「ガーネ君。これからが正念場じゃぞ。
君が、無重力を利用することなく、無事に着地出来れば実験は成功じゃ。
さぁ、戻って来なさい。」
ガーネは、ハンドルのレバーの「握る・離す」を繰り返しました。
いつものようにその間隔を早めたり、遅めたりしながら降りていくつもりでした。
ですが、今までと違う強い重力に、下降速度を僅かしか落とす事が出来ません。
ものすごい勢いで、海面に向かって下降していました。
救助艇で、カーマイン博士は双眼鏡をのぞいて、その様子を見ていました。
「駄目だ。重力が強すぎて、安全な下降が出来ないんじゃ。」
博士は、海面に発生している無重力状態に、助けを求めました。
ですが、無重力状態を確認している助手から、思いもかけない言葉を聞きました。
「博士。無重力状態が確認出来ません。」

カーマイン博士は慌てて、助手の元へ駆け寄りました。
そして、無重力状態を確認するのに使用しているパソコンの表示を確認しました。
そこには、海面に何らかの強い磁場が、発生している事を物語っていました。
その磁場が、無重力状態の確認を妨害していました。
「何故だ。こんな時に何故なんだ。」カーマイン博士は、叫びました。

ガーネは、一生懸命、下降の制御を試みていました。
ふと、トラの方を見ると、何やらガーネに叫んでいるようでしたですが、その声は届きません。
トラは右の前足を、下の方に向けました。
ガーネは、その足の先、つまり眼下に広がる海面に目をやりました。
「！」
そこには、あの迷宮のドアが、上空を向いた状態で現れていました。
ガーネはつぶやきました。「そうですか。もうお別れなんですね。」
ガーネは、マイクに向かって、話始めました。

カーマイン博士は、マイクからガーネの声を聞きました。
「いろいろと有難うございました。これでお別れです。
カーマイン博士。いつまでも、長生きしてくださいね。」
これが、博士が聞いたガーネの、最後の言葉となりました。
この声の後、マイクのスイッチが切られる音がしました。
「ガーネ君。トラ君。」
博士は、双眼鏡で、ガーネの姿を追い続けました。
ガーネは、スカイダーの解除ボタンを押して、スカイダーと分離しました。
そして、真っ逆さまに下降していきました。
海面に激突する。カーマイン博士はそう思いました。

しかし、ガーネの姿は、海面に到達する前に幻のように消えてしまいました。
博士は、自分が今見た事が信じられませんでした。
救助艇に乗り込み、ガーネを最後に確認した場所まで、走らせました。

救助艇は、その場所に到着しました。
スカイダーと救助服、そしてヘルメットが無重力状態で浮いていました。
博士は、無重力状態が消えてはいなかった事を確認しました。
博士は、これらを拾い上げました。
救助服に付いている、救助袋も調べてみました。
そこに、トラの姿はありませんでした。
博士は、助手に尋ねました。
「君は、わしにあの二人は、実験より高いところから落ちてきたと言ってたの。」
その助手は、うなずきました。
「一体、彼らは、何者だったんじゃろう。」
カーマイン博士は、ガーネたちが消えたその海面を、じっと見つめていました。
いつまでも。いつまでも。

「トラ、行きますよ。」
ガーネは、迷宮のドアめがけて落ちていきました。
ですが、その中に入った途端、ふわりと体が浮きました。
そして、普通に立った状態で、その暗黒の闇の中をゆっくりと降りていきました。
次第に、ガーネの周りに、多くの道と階段が現れ始めました。
ガーネはその中の１つの道に、降り立ちました。
トラが、ガーネの右ポケットから飛び出して来ました。

そして、ガーネの右肩に、ちょこんと座りました。
ガーネはトラに尋ねました。
「今回の旅はどうでした？」
「今回は、３日間だったでしょ。随分長く滞在していたのね。
今までで、１番長い旅だったわ。
あたしとしては、想い出に残った事が２つあるの。
１つは、スカイダーで大空を飛んだ事。
もう１つは、食堂のおばちゃんに、美味しい混ぜごはんを食べさせてもらった事。
この２つが、一番印象に残ったの。
そう言えば、おばちゃんにお別れを言えなかったな。
ううん、誰にも言えなかったわ。それが心残りね。
ガーネは、どうだったの？」
「私も、スカイダーで、大空を飛んだ事ですね。あれは、貴重な体験でした。
後は、特に無かったような気がします。」
「でも、ガーネは女の子を助けたじゃない。」
「ああ、あれね。でもあれは成り行きで、そうなっただけですよ。
自分としては、それほど心に残る出来事ではありませんでしたね。
もっとも、カーマイン博士にとっては、意味のある事だったと思うんですよ。
自分が望んでいた本来の形で、スカイダーが使われたんですからね。
喜んでいたと思いますよ。」
「きっと、そうだと思うわ。
あっ、それはそうとガーネは昨夜、カーマイン博士の手伝いをしていたのよね。」
「そうですよ。」
「日当はもらえたの？」
「あっ、そうでした。すっかり忘れていましたよ。」
「じゃあ、ただ働きだったっていうわけね。ご苦労様でした。」

トラは、気の毒そうにガーネを見ました。
「確かにそうですね。でもね、トラ。」
ガーネは、優しい瞳でトラを見つめて、こう言いました。
「私たちは、それ以上に、価値のあるものを手に入れましたよ。」
「それは、何?」
「想い出。それだけは今も、私たちの胸の中に残っています。」
「ガーネ。」

ガーネとトラは、再び、果てしなく続いている迷宮の道を歩き始めました。

第4話「空を飛ぶガーネ。」最後ですね。(終)

第４話「空を飛ぶガーネ。」最後ですね。（後書き）

今回のお話は、人間単独飛行の実験を行なっている世界の最終話となります。
この第４話「空を飛ぶガーネ。」は3回に分けて、投稿しました。
もし、その全てを読んで下さる方が、1人でもいたなら嬉しいです。
書いた甲斐があったと思います。
これからも、トラ・オブ・ラビリンスは続きます。
これまでより、投稿に時間はかかると思いますが、期待しないで待ってて下さい。
では、またお会いしましょう。

第5話「海底都市」最初かな。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第5話「海底都市」最初かな。のお話です。
この回では、ガーネとトラは海底都市のある世界へ行きます。
ガーネは、その街並みを見学します。

第5話「海底都市」最初かな。

第5話「海底都市」最初かな。

「ふーん。」

ガーネとトラは、あるものを見つめ、首をかしげていました。

それは、自分たちが歩いている道の、上空に浮かんでいました。

「あれは、迷宮のドアですよね。」「そうみたいね。」

ドアは、ガーネたちが歩いている、道の方を向いていました。

ガーネたちは、ドアの真下まで来ました。

その瞬間、自動ドアのように、ドアが開きました。

「あれは、何ですかね。」

「なんか、水が波打っているように、見えるわね。」

どれどれ、ガーネは、その水に触ってみようと、手を伸ばしました。

そして、その水に手が触れた途端、ガーネはその中に引きずり込まれました。

「ウワァー。」

ガーネの右肩に座っていたトラも、一緒に引きずり込まれてしまいました。

そこは、海中でした。

「ブクブクブク。」

ガーネの体は、海中でもがきながら、上へ上へと上昇していきました。

「プワァーッ。」ガーネは、海面に顔を出す事が出来ました。

「ゲホッ、ゲホッ。」口や鼻に入った海水で、むせていました。

少し、落ち着くとガーネは、自分の周囲を見回しました。

そこには、海面が広がるだけで、他には何もありませんでした。

ガーネは、一緒にいたトラの事を思い出しました。

「トラーッ！トラーッ！」ガーネは、大声でトラの名前を呼びました。
ですが、何の応答も返ってきませんでした。
周辺や、海中も探しました。
ですが、トラの姿は、どこにもありませんでした。
「生きていてくださいね。トラ。そしてまた会いましょう。」
ガーネは心の底から、そう願いました。
今のガーネには、気落ちしている暇はありませんでした。
何とか助かる方法は無いものかと、泳ぎ出しました。
どんなに泳いでも、陸地が見えませんでした。
ガーネは、ばててしまいました。
仰向けになって、浮かぶ事にしました。
良い天気でした。照りつける太陽がまぶしいです。
しばらく休憩を取った後、またガーネは泳ぎだしました。
ガーネの体力は、どんどん消耗していきました。
ガーネは、気が付きませんでした。
自分の背後に、大きな波が近づいていたのです。
「ザブーン。」
ガーネは、まともに波を受けてしまいました。
そして、そのまま海中に、沈んで行きました。
おぼろげな意識の中で、「ああ、私は、もう駄目です。」と思いました。
恐怖は、ありませんでした。不思議な安堵感さえ、感じていました。
ガーネは、気を失いました。

ガーネは、目を覚ました。
しばらくして、半身を起こしてみました。
ガーネは、自分の周りを見回しました。
そこは、病院のようでした。その白い部屋には、ベッドが1つありました。

そのベッドの上で、ガーネは寝ていたのでした。
「ここは、どこなんでしょう。」ガーネは、そう思いました。
そこへ、医者と看護婦と思われる人が、入ってきました。
「こんにちは。お加減は如何でしょうか?」
「あなたは、どなたでしょうか。」
「これは、すみません。紹介がまだでしたね。
私は、この海底都市の病院に勤務している医者です。
どうです。体の具合は?」
「えっ、ええと少し頭がボーっとしています。
でも他には、別にどこも悪くは無いようです。」
「それは、よかった。では、念のため、少し調べさせて頂けますか。」
「はい。お願いします。」
その後、ガーネは幾つか検査を受けました。
その結果、異常無しと認められました。
検査が終わると、ガーネは、その医者に尋ねました。
「一体、ここはどこなんでしょう。私はどうしたんでしょうか?」
「それについては・・・」
「それについては、俺が話すとしようか。」
そう言って入って来たのは、ガーネより年上だと思われる男性でした。
「あなたは?」
「俺の名はノア。この海底都市ガルディの北ブロックの長(おさ)だ。」
「海底都市?ここは海底にあるんですか。」
「そうだ。
君は、海中に沈んでいくところを、俺の部下に救助されたのさ。
呼吸が停止していたそうだ。
もう少し、救助が遅ければ死んでいたらしい。」
「そうでしたか。」ガーネは、特に喜ぶでもなくそう言いました。
ちょっとの間、窓を眺めていました。

ふと気が付いたように微笑んで、ノアに話しかけました。
「命を助けて頂いて有難うございました。おかげで助かりました。」
ガーネは、ノアにお礼をいいました。
「ところで、聞きたいことがあるんだ。」
「はい？」
「まぁ、ここで話をするのも、なんだから別の場所に移動しよう。もう、大丈夫なんだよね？」
ノアは、医者に確認しました。医者はうなずきました。
ノアは、ガーネに言いました。
「では、行こうか。」
ガーネは、うなずきました。
そこにいた医者と看護婦にお礼を言った後、病室を出て行きました。
病院を出ると、そこには青空が広がっていました。
そして、綺麗な街並みがありました。
「ノアさん。ここは海底都市の中ですよね。
それなのに、まるで外に出ているようじゃないですか。どうしてなんですか？」
それを聞くと、ノアはぎくっとして、急に立ち止まりました。
少し首をかしげていましたが、やがてこう話し出しました。
「この空は、ホログラフィーだよ。
街並みも、地上にあった時と同じように造られている。」
そう言いながら、ノアはこれまでとは違い、興味げにガーネを見つめました。
「やはり、君はここの人間では無いのだな。
もしそうなら、そんな質問をする筈が無いものな。」
そう言って、ノアは歩き出しました。
しばらく歩いていくと、やがて大きなお屋敷が見えてきました。
「ここは一体、誰のお屋敷なのでしょうか？」
「俺の家だよ。」
ノアは、事も無げにそう言いながら、歩いて行きました。

ガーネは病室で、ノアが北ブロックの長だと言ったことを思い出しました。
「ひょっとして、あなたがこのお屋敷のご主人なのですか？」
「まぁ、そう言う事だ。」
ノアは、玄関の呼び出しベルを鳴らしました。
「帰ったぞ。」ノアは叫びました。
やがて、お屋敷の中から、何人か人が出てきました。
その人たちは、通路の左右に並びました。
その中で執事と思われる人が、お辞儀をしてノアに声をかけました。
「お帰りなさいませ。御主人様。
ですが前にも言いました通り、お出かけの際は、お供をお連れください。
皆が心配しています。」
執事がそう言うと、ノアは頭をかいて言いました。
「そうか。それはすまなかったな。今後気をつけるとしよう。
ああ、それからこの人は俺の客だ。部屋を用意しておいてくれ。
くれぐれも粗相のないようにな。」
「判りました。」執事は、お辞儀をしながらそう言いました。
「では、えーと、名前は、なんだったけな？」
「あっ、申し訳ありません。私はガーネと言います。」
「そうか。ガーネか。ではガーネ。私の書斎に案内する。一緒に来てくれ。」
ノアはガーネを連れて、ノアの書斎に向いました。
書斎に入ると、ノアは椅子の１つを机の近くに置きました。
そして、ガーネに、そこに座るように促しました。
ノアは、机の窓際の椅子に腰を下ろしました。
「さて、いろいろと聞きたいことがあるのだが。」
「はい。何でしょうか。」
「君は、一体どこからきたのかな。」
「ええ、迷宮からです。」

「迷宮？」
「私は、迷宮の旅人なんです。」
この後、ガーネは自分の事や迷宮についてを、ノアに話始めました。
話が終わると、ノアは腕を組み、何かを考えていました。
しばらくして立ち上がると、本棚から一冊の本を取り出しました。
「ここにあるのは、歴代の王の記録、つまり日記帳だ。
実は今、俺が持っているこの日記帳にも、迷宮の旅人の事が書かれている。」
「えっ、その日記帳にもですか。」
「かなり、昔の話だがな。
君のように迷宮から来た人間が、やはり海中をさまよっていたらしいのだ。
彼女は2日ほど、城にいたらしいのが、いつの間にか消えてしまったそうだ。」
「彼女って言うと女の人って事ですよね。そうか、女の人もいるんですね。」
「君がいた迷宮には、女の人はいないのか？」
「というか、私が迷宮で会った事があるのは、私より年配の男の人と猫ですよ。
それ以外には、誰にも会った事がありません。
」
「そういうものなのか。では、つまらないだろう。」
「ええ。でも私には、いつも猫が一緒にいました。
だから、さみしくはありませんでした。」
「その相方の猫は、どうしたんだ。」
「この世界に来た時に、はぐれてしまい、行方不明になってしまいました。」
「そうか、それは心配だろうな。私の方でも、出来るだけ探してみてあげよう。」
「有難うございます。」

「君も、いずれは消えてしまうのだろう。
それまでは、ここにいるがいい。私が許可をしよう。」
「どうも、有難うございます。ではしばらくの間、ご厄介になります。」
ガーネは、ノアにお礼を言いました。
「確か、君は、まだお昼はまだ食べていなかったな。
どうだ、何か用意してもらうか？」
「いえ、まだ体が、少しおかしいようです。
夕方まで寝かせてもらえれば、有難いです。」
「判った。では執事にそう伝えておこう。」

その後、現れた執事に案内され、用意してもらった自分の部屋に行きました。
「迷宮のドアが現れるまでは、この城の住人となるわけですね。」
ガーネは、自分がこれからどうなるのか、全く判りませんでした。
それと同時に、トラの事も気になっていました。
「また会えますよね。トラ。」
ガーネは、ベッドに入り、眠る事にしました。
いつしか、深い眠りに入って行きました。

夜になりました。
ガーネは、既に起きていました。
体調は、だいぶ良くなっているようでした。
ガーネは、お風呂に入った後、ノアと食事を楽しみました。
部屋に戻ろうとした時、ノアは言いました。
「明日、俺がこの都市を案内するつもりだったんだけどな。
だが、急に用事が入ってしまってね。
申し訳ないが、俺の代わりにエスコートをしてくれる人を君に付けるよ。
その人と、街の観光を楽しんでほしいな。」

「有難うございます。お心づかい感謝します。」
ガーネは、そう言って部屋に戻りました。
「あっ。」ガーネは何か頭がふらふらするような感覚を覚えました。
ガーネは、思わずベッドに倒れてしまいました。
「いけません。海で溺れかかった時の後遺症が、まだあるみたいですね。」
ガーネは、明日の事も考え、そのまま眠る事にしました。

翌朝になり、気持ちのいい朝を迎えました。
ガーネは早くから起きていました。
多少まだ頭がふらふらしています。
ですが、昨日ほどでは無かったので、心配しませんでした。
ノアと食事をした後、今日1日エスコートしてくれる人を待っていました。
「トン、トン。」部屋をノックする音が聞こえました。
開けると、そこには、ガーネと同じぐらいの年齢の女の人が立っていました。
「お早うございます。
今日1日、エスコートさせて頂きますアムと言います。よろしくお願いします。」
その人は、そう言いました。亜麻色の長い髪の美しい女性でした。
ガーネは、出かける事にしました。
ガーネたちは、海底都市ガルディの街並みを、歩いていました。
「信じられませんね。この青空が偽物だなんて。
もし、何も聞かされていなければ、全然気が付きませんよ。」
ガーネは感嘆して言いました。
「ガーネ様。有難うございます。
この居住空間にある一切のものが、我が部族ガルバが造ったものです。
お気に召して頂けてうれしく思います。」

「アムさん。私の事を呼ぶ時は、ガーネと呼んでください。
そうでないと、話しにくくなってしまいます。
ところで、この街ならではの珍しい物、というのはありませんか。」
「珍しいものですか。・・・要するに名物的な物という意味でしょうね。
うーん。特にはありませんね。強いて言えば、美術館とか博物館ぐらいですね。」
「へぇ、じゃあ、そこに行きましょう。最初に、美術館に行きましょうか。」
ガーネとアムは、美術館に行きました。
二人は、飾られている絵画や彫刻を、1つずつ見て回りました。
「ガーネ様は、いや、ガーネはこういうものに興味がおありなんですか？」
「これはあくまでも、私自信の見解なんだけどね。」
「はい？」
「芸術というのは、それを見た人が心を揺り動かされる物だと思うんですよ。
それが絵画や彫刻、または他のものであったとしても同じです。
だからこそ、これらは人に評価され、こうして後世に残っているんです。
だから、これらを見て、どこにそんな価値を見出したのか知りたいんです。
そしてそれが、ここの人たちの事をよく知る事にも、つながると思うんです。」
ガーネたちは美術館の見学を終えると、次は博物館に行きました。
「街の広さが原因なんだと思いますが、見たいものが近くにあるのは楽です。」
「まぁ、確かにそうですね。」アムは笑って答えました。
中に入ると、いろいろな展示物が飾られていました。
特に多かったのが、彼らが、海中艇と呼んでいる船の展示でした。

過去から現在まで、違う形状の船が、たくさん並べられていました。
居住空間の建築物のミニチュアなども、多く展示されていました。
人の衣服などの生活感に密着している物も、多くありました。
ただ、海底都市本体を支えるものに関する展示が、あまりありませんでした。
これだけの居住空間を造り、人の命を支えている機械群の展示。
科学にうといガーネでも、見てみたいと思っていました。
それだけに、展示が無かったのは、残念でした。
それを話すと、アムはニッコリ笑って、こう答えました。
「それなら、明日、長がコントロールベースを案内してくれると思います。」
「コントロールベースとは、何でしょうか?」
「まぁ、それは明日のお楽しみにしておいてください。」
アムに答えを、はぐらかされてしまいました。
博物館の最後に、とてつもなく大きい海洋生物が展示されていました。
「すごい大きい生き物ですね。これは何ですか?」
「これは、ガロンです。この魚のために、たくさんの人が死にました。」
「死んだのですか?」
「正確に言えば、食べられてしまったのです。」
アムはそれまでとは違う、つらい感情を現わした、口調になっていました。
これ以上は、この話は止めた方がいいみたいですね。ガーネはそう思いました。

その後、二人は、博物館をあとにしました。
アムは、気を取り直したように、明るい声でガーネに尋ねました。
「ガーネ。これから何か、ご希望はありますか。」
「そうですね。そろそろお茶でも、飲みませんか?」

「判りました。そうしましょう。」
「あそこに美味しいコーヒーを飲ませる店がありますよ。」
アムはガーネにそう言って、その喫茶店に連れて行きました。
テーブルに着いて、コーヒーの注文をしました。
「あと、何か食べたい物はありませんか?」アムは尋ねました。
「いえ、お昼には、まだ早いです。」手を振りながら、ガーネは答えました。
コーヒーが運ばれて、二人で飲む事にしました。
「こうしている所は、他の人から見ると、恋人同士に見られるんでしょうか。」
ガーネはアムに尋ねました。
アムは、むせた様に咳をしました。
「そ、そんな事は無いと思いますよ。」
「そうでしょうね。」ガーネはうなずきました。
「ところで、アムさんに、この海底都市について聞きたい事があるんです。」
「はい。何でしょう。」
「陸上の方が、ここの人たちにとっても、暮らしやすいと思います。何故、ここの人たちは、海底都市に住んでいるのでしょうか?」
「それは、もうこの星に陸上が無いからです。」
「えっ、それは、つまり星全体が、海で覆われているという事でしょうか?」
「その通りです。星の寿命が、終わりに近づいていると言う人もいます。
何十年前からか判りませんが、地殻変動が多発するようになりました。
それに加えて、その強さも大きくなっていったのです。
その結果、地震や津波などで、陸が1つ1つ、海上から姿を消しました。
そして今では、全ての陸が消えてしまったのです。」

「そうだったのですか。
それで、海底都市が出来たのですね。
それにしても、あれだけ巨大なものをよく海の中で造りましたね。」
「えっ、あっ違います。海の中で造ったのではありません。
陸上で造った船を、あそこに設置したんです。」
「船？あの海底都市は、船だったんですか？」
「そうです。
海上に陸が全て無くなれば、私たちは生きる所が無くなってしまいます。
それは絶対に、回避しなければなりません。
そこで、たくさんの人や動物が、生きていられる空間を造ろうとしました。
その結果、考案されたのが海上や海中、そして海底に移動出来る大型の船でした。
それが、この海底都市ガルディなのです。」
「えっ、あの海底都市は、移動も出来るのですか。」
「はい。と言っても移動に使ったのは、最初だけのようです。
あそこは、これまでの地殻変動データから、それが発生しにくいらしいのです。
他のどの場所よりも安全だと言う事で、選ばれた場所なのです。
あそこに海底都市を設置してからは、これまで何のトラブルもありません。
ただ1つの欠点をのぞけば、申し分の無い場所です。」
「その、アムの言う、ただ1つの欠点とは何でしょうか？」
「あの海底都市の付近は、ガロンが多く棲息している場所だったのです。
実は、今の海底都市は、2つの船で構成されています。
1つは、私たちの部族ガルバが、支配する海中大型船。
もう1つは、部族デルダが、支配する海中大型船。
この2つが連結して、海底都市ガルディとなっているのです。

ですが、この星には、もっと多くの部族がいました。
これらの部族の中には、陸と運命を共にしたところもありました。
それでも、まだ多くの部族が私たちと同じく、海中大型船を造船していました。
ですがそれらの全てが、初期不良や操縦の失敗などで、海の藻屑となりました。
その船から放り出された人たちは、みんな、ガロンの餌食となりました。」
「それは・・・。悲しい過去の話しをさせてしまいましたね。許して下さい。」
「あっ、いえ、ええと祖母から伝えられた話を、お話しただけです。別に、気にしていません。」
「そうですか。
それにしても、よくあんな立派な海底都市が出来ましたね。
私には科学の事は、よく判りません。
それでも、部族ガルバの科学技術の高さには、敬意を表しますね。」
「ガーネ。そう言ってくれると、同じ部族としては嬉しいです。」
コーヒーを飲み見終わって、喫茶店を出て行きました。
その後、アムはガーネを海中艇に乗せてくれました。
海中艇は、海底都市の周りや、その海上をゆっくりと航行しました。
ガーネは、海底都市の大きさに、感心するばかりでした。

海中艇を降りた後も、街中を回りながら、二人でお喋りをしていました。
お昼も、子綺麗なレストランで、昼食をとりました。
楽しい食事が終わった後、アムはガーネに言いました。
「では、今はこれくらいにして、お屋敷に戻ってお休み下さい。
夕方頃、またお迎えに上がります。」
「えっ、夕方にですか。何か面白い事でもあるんでしょうか?」
「まぁ、楽しみに待っていてください。」

アムはそう言って、ガーネをお屋敷まで送り届けました。

夕方になりました。辺りが急に暗くなりました。
アムが約束通り、迎えに来てくれました。
ガーネは、お屋敷の人に出かける旨を伝えた後、アムと二人で出かけました。
着いた先は、午前中に乗った海中艇の前でした。
「また、乗るんですか？」ガーネは尋ねました。
「ええ、いいものを見せてあげられると思います。」
海中艇は、二人を乗せて、海に潜りました。
海の中には、闇がどこまでも、広がっていました。
ライトで照らしている部分ぐらいが、明るさを持っているだけでした。
「もうじき、始まります。」アムはそう言いました。
ライトが消されました。
2～3分ぐらい経った後でしょうか。ガーネはその意味を知りました。
海底都市が、一斉に灯りを灯したのです。
幾つもの灯りが、海底都市を覆っていました。
海水を通して見ているせいでしょうか。
1つ1つの灯りが、幻想的な輝きをもたらしていました。
これらが闇の中で、夢幻とも言える神秘的な模様を浮かびあがらせていました。
ある光は強く点灯し、ある光は点滅を続けていました。
まるで、この模様自体が意思を持って動いているようでもありました。

ガーネの乗っている海中艇に、夕食が並べられていました。
アムは同じテーブルに、淡い光を放つランプを置きました。
そして、海中艇内部の灯りを消したのです。

テーブルの周りは、ランプの灯りの色に染まりました。
やや暗いながらも、夕食を食べるのには、何の支障もありませんでした。
お互いの顔も、ランプの明かりの色に、染まっていました。
ガーネは、外の景色を眺めました。
海底都市は、更に輝きを増したように、思えました。
二人は、お互いを見つめ合いました。
どちらからともなく、うなずき合った後、テーブルの席に着きました。
ガーネはアムと二人で、この幻想的な映像を楽しみながら、食事をしました。
時が流れるのを忘れてしまうほど、神秘的な世界がそこにはありました。

海中艇を降りると、アムはガーネに言いました。
「今日1日、私とお付き合い下さり、有難うございました。
いつか、また会える日を楽しみにしております。」
そう言って、アムはガーネに手を差し出しました。
「とんでもありません。こちらこそ、いろいろ楽しませて頂きました。
本当に有難うございました。」
ガーネは、アムに握手しました。
「それでは、失礼します。」
そう言って、アムはガーネの前から立ち去って行きました。
「いい1日でした。」ガーネは、心の底からそう思いました。
いつしか、頭のふらふらは、解消していました。
ガーネは、ノアの屋敷に戻りました。
歯を磨いて、お風呂に入った後、ベッドに横たわりました。
ガーネは、夢も見る事も無く、穏やかに眠りに着きました。

翌朝、ガーネが起きると電話が鳴りました。
ガーネは欠伸をしながら、受話器をとりました。
「今日、なんとか暇が出来たんでな。後で迎えに行くぞ。」
電話の主は、ノアでした。
「判りました。お待ちしております。」
ガーネは、電話を切って、受話器を置きました。
また電話が鳴りました。今度は、朝食の用意が出来たとの知らせでした。
洗面所で、顔を洗いました。
そして、食堂に向かいました。
朝食は1人でした。執事さんに聞くと、ノアは朝から出かけたとの事でした。
ガーネは歯を磨いた後、いつもの服に着替えて、ノアが戻るのを待ちました。
15分ぐらい経った頃でしょうか。ノアが戻って来ました。
ガーネは、玄関でノアに会いました。
「あまりにお忙しいのであれば、無理に案内して下さ・・・」
と言いかけるガーネを、ノアは制止しました。
「いや、今日1日は大丈夫だ。準備が出来ているなら行こうか。」
「大丈夫です。いつでも行けますよ。」
二人は、街中へ歩いて行きました。
歩く道すがら、ノアはガーネに尋ねました。
「昨日は、どこに行っていたんだい。」
「街中をぐるぐると。美術館や博物館にも行きました。
午後からは、海中艇で散歩もしました。」
「そうか。それはよかったな。」
「その後夕方に迎えに来て、また海中艇でディナーを楽しみました。
本当に楽しい1日でしたよ。有難うございました。
あと、今日はコントロールベースに連れて行ってくれるとか。
どうか、よろしくお願いします。」

ガーネがそう言うと、ノアは何やら難しい顔で、考え事をしていました。
「ええと、君をエスコートしたのは・・・」
「はい。アムと言う名前の女性でした。」
「そうか。ちょっとそこで待っててくれ。」
ノアは、ガーネから離れて、自分の携帯電話で電話をかけていました。
しばらくして、ノアは戻って来ました。
「何かあったのですか？」ガーネは尋ねました。
「いや、ちょっと用事を思い出してな。確認の電話をしただけだよ。さぁ今日はさっき、君が言った通りにコントロールベースに連れていくよ。
迷子にならないように、俺に着いて来てくれ。」
ノアは、ガーネの肩を叩いて、笑いながら言いました。
「はい。しっかりお伴しますよ。」ガーネも笑いながら答えました。

街の中央に来ました。そこには市役所がありました。
ノアは、その中を通って行きました。ガーネもそれに続きました。
窓口の奥にまで行きました。そこには細い通路があり、左右に部屋がありました。
その中に、危機管理室という札が貼ってある部屋がありました。
ノアとガーネは、その部屋に入りました。
部屋の真ん中あたりに、机が1つありました。机の上にはパソコンがありました。
その他には、奥に長いテーブルが、2つほど置かれているだけでした。
ノアはガーネに「俺のすぐ隣にいてくれないか。」と頼みました。
ガーネはうなずくと、ノアのすぐ傍らに立ちました。
ノアは、机の上のキーボードで、何かを入力していました。
「よし、入力完了。」ノアはそう言って、最後に1つキーを押しま

した。
ブザーが少しの間、鳴っていました。
すると、ノアとガーネが立っている足元が、台となって下へ沈み始めました。
「ワァ。」ガーネはよろけそうになりましたが、必死で踏ん張りました。
その様子をノアはにやにや笑いながら、見ていました。
自分たちを乗せた四角い台は、どんどん下に降りて行きました。
やがて、目的地に着いたのでしょう。下降は止まりました。
目の前にはドアがありました。しばらくすると、またブザーが聞こえました。
それが鳴りやむと、ドアが開きました。
ドアの外に出ました。目の前の通路はずっと奥まで、つながっていました。
そしてその左右には、部屋へと続くドアが幾つかありました。
「ようこそ、ここが海底都市ガルディのコントロールベースだ。この中で、居住空間を始めとする都市の機能の全てを支えているのさ。」
ノアは、そう説明しました。
コントロールベースは、この階を含め、5階分あるという事でした。
ノアはガーネに、その中の1部を見せてくれました。
発電管理室や空調室、そしてコンピューター制御室がありました。
他にも機関室や工場などさまざまな部屋がその中にはありました。
見学を終わり、居住空間に戻って来た時は、お昼を回っていました。
ノアとガーネは、レストランで昼食をとりました。
食後のコーヒーを飲みながら、ノアはガーネに尋ねました。
「コントロールベースを見学した感想は、どんなものかな?」
「大変、大きく立派な設備でしたね。」
「フム。それから何かあるかな。」
「もともと、科学にはうといんで、その程度しか判りませんでした。

でも午前中は、有意義に過ごせたと思っていますよ。」
「そうか。それはよかった。あと、午後からの予定だがな。」
「はい。」
「海中艇で、海を散策するのは、どうだろうか。
昨日は、海底都市を中心に回っていただけなんだろう?
この海には、さまざまな生物がいるんだ。
それを観るのも、悪くないと思うがどうだろうか?」
「いいですね。そうしましょう。」
「では、海中艇発進の準備をしていてもらうか。」
ノアはそう言って、携帯電話を取り出しました。
その時その携帯電話に、電話がかかってきました。
「ちょっと、失礼。」
ノアはそう言って、ガーネより少し離れたところで、電話に出ました。
ノアは電話の相手から、何か報告を受けているようでした。
「フムフム。何。やっぱりそうなのか。」ノアは興奮しているようでした。
受話器を置くと、ノアはフゥーッとため息をつきました。
そして、こちらに走って来ました。
ノアはガーネの向かい側の席に座りました。ノアは興奮しているようでした。
「ガーネ、君が昨日・・・」
ノアが、言いかけた途端、とてつもなく激しい揺れが発生しました。
しばらくして、揺れがおさまりました。
しかし、その時には、街は既に真っ暗になってしまいました。
1分ほど経ってからでしょうか。電気が回復しました。
「電源が回復したようですよ。よかったですね。」
「これは、非常用電源だよ。バッテリーで動いているんだ。
すぐに対策を講じないと、数時間で止まってしまう。」
ノアは、そう言って走り出しました。ガーネも、その後を追いまし

た。
走りながら、ガーネはノアに尋ねました。
「何故、さっきのエレベーターを使わないんですか。」
「バッテリー駆動の状態では、最低限のものしか動かないんだよ。あのエレベーターは使えない。」
ノアは、街の外れまで行きました。
そして、足元にあるマンホールのふたを鍵を使って開けました。
「ここは？」
「この穴はコントロールベースまで、つながっているんだ。ここから降りていくぞ。」
「ここから降りて行くって、どのくらいかかるんですか？」
「大した事は無い。気を失うぐらいまでには着く。」
「大した事あるじゃないですか。私は降りれないかもしれないです。ここで待っていてはいけませんか？
どうせ、電気関係の事なんて、判りませんしね。」
「体力が無いのか？」「ええ、虚弱体質です。」
「そうか。では運動になるぞ。ついてこい。」
マンホールには梯子が装備されていました。
二人は、それをつたって下に降りて行きました。
来るんじゃなかった。ガーネはすごく後悔しました。
下からノアの声が聞こえました。「早くついてこい。」
マンホールの中なので、やたら響いていました。
「やれやれ。」ガーネも仕方が無くついて行きました。
格闘の末、コントロールベースまでなんとかたどり着きました。
ガーネは手の感覚が、おかしくなっていました。
ガーネは泣きたくなりました。

ノアは近くのハッチを開けて、中に入りました。
そこには、先ほど見たコントロールベースがありました。
ノアは、発電管理室に行きました。

その中の計器は作動していました。
その値を1つずつ調べた後、ガーネに言いました。
「まずいな。発電所との接続が切れている。
外にある発電所に何かトラブルがあったとしか、思えないな。」
「じゃあ、どうするんですか?」
「南部ブロックにある発電所を動かすしかない。
ここよりは出力は弱いが、節電状態にすれば安定した電力供給が期待出来る。」
「ここから行けるんですか?」
「駄目だな。もともと南部ブロックは、部族デルダの海中大型船の部分だ。
ここと接続してはいるが、隔壁があってね。直接入る事は今は出来ないんだ。」
その時、ノアの携帯電話が鳴りました。
ノアは、電話の表示板を見て喜びました。
「しめた。ラディアからだ。」
ノアは、そう言って携帯電話を耳にあてました。
「もしもし、こちらノアだ。」
「ノア。あなた今どこにいるの?」
「コントロールベース南部ブロックの発電管理室だ。」
「ああ、もうそこにいるのね。で、状況を報告してくれない?」
「判った。
さっき計器を調べてみたんだが、どうやら発電所自体のトラブルらしい。
今、バッテリーでなんとか電力供給しているが、それも僅かな間だ。
部族ガルバの長として、部族デルダの長ラディアに要請する。
ただちに、北ブロックの発電所を作動して欲しい。」
「判りました。部族デルダの長として、その申請を受理します。
今、屋敷にいるから地下道を通れば10分でコントロールベースに着くわ。

こちらの発電所を作動させるまで、そこで待機してて頂戴。」
「よし、判った。じゃあ頼むよ。」
「それじゃあ、後で会いましょうね。」そこで電話は切れました。
「フゥ。」ノアは安堵のため息を漏らしました。
それから、ガーネの方に振り向きました。
「部族デルダの長ラディアが動いてくれた。
まもなく発電出来そうだ。それまで我々はここで待機だ。」
ノアは、話を続けました。
「向こうの発電所が作動すれば、このランプが点灯する。
そうしたら、こちらで向こうとのリンク作業を行うんだ。
リンクが確立すれば、この海底都市に安定した電力が供給される。
だが、それにはラディアがここに来なくてはいけないんだ。」
「でも、確か直接入れないとか、言っていましたよね。」
「コントロールベースに、安定した電力が供給されないと隔壁は開かないんだ。
それにこちらとの往来は、制限があってね。
2つの部族の長の許可が無いと、出来ないのさ。
俺の持っているこの鍵とラディアの持っている鍵。
この2つを同時に使う事によって初めて、隔壁は開くんだ。」
「ラディアさんがここに来なければいけない理由は？」
「向こうの発電所とのリンクを確立するのにも、向こうの鍵が必要なんだよ。
こちらの発電所を向こうが使用出来るようにした時も、そうだったんだ。
俺がこの鍵を向こうに持っていって、リンクを確立させたのさ。
「そうですか。
ではラディアさんが来るまでは、ここでひと休みというわけですね。」
「そうだ。」
ガーネはそれを聞いてほっとしました。

こうして、2人は、ラディアが来るのをただひたすら、待っていました。

第5話「海底都市」最初かな。（終）

第5話「海底都市」最初かな。（後書き）

今回のお話は、海底都市のある世界のお話です。
ですが、この世界に入った途端、ガーネはトラを見失ってしまいます。
さて、この先はどうなるかというと、まぁ、言わぬが花でしょうね。
気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。

では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第5話「海底都市」ふたつめかもしれない。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第5話「海底都市」ふたつめかもしれない。のお話です。
この回では、トラとラディアが、海底都市の街並みを見学します。

第5話「海底都市」ふたつめかもしれない。

第5話「海底都市」ふたつめかもしれない。

トラは、海中で懸命になって、もがきました。
苦しくなって口を開けてしまい、海水もいくらか飲みこんでしまいました。
意識が遠のく寸前、トラは、海面に浮上しました。
トラは、何をする気力も無くなり、ぐったりとしました。
潮の流れも速かったせいか、だいぶ流されていました。
トラは、気を失いました。

トラは目を覚ましました。
トラは、自分が綺麗なベッドの上に、横たわっているのを知りました。
「これは夢かしら。」トラはそう思いました。
しばらくして、人の足音が近づいて来るのが、聞こえてきました。
「ガーネかしら。」トラはすぐにそう思いました。
しかし、トラの前に現れたのは、綺麗な女の人でした。
「あら、起きたのね。子猫ちゃん。」その人はそう言いました。
「初めまして。あなたは誰なの?」トラは尋ねました。
その女の人は驚いていました。
「あら、子猫ちゃん。あなた、人の言葉が喋れるのね。」
その女の人は、トラの傍らに座りました。
「私の名前は、ラディアよ。どうぞよろしくね。」
「あたしの名前は、トラって言うの。そう呼んでくれて構わないわ。」
「そうなの。それなら、トラちゃんって呼んでもいい?」
「ええ、いいわ。」トラは答えました。

「トラちゃん。もう大丈夫だと思うけど、今何か欲しい物はあるかしら。」
「欲しい物と言うより、聞きたい事があるの。」
「どうぞどうぞ、いくらでも聞いてちょうだい。」
「ここは、どこなの。どうしてあたしは助かったのかしら?」
「トラちゃん。あなたはね。海面で気を失っていたのよ。
私の部下が、海中艇で、発見したの。
まだ、生きているらしいと聞いたので、ここに連れて来てもらったのよ。」
「そうだったの。有難う。ラディア。」
トラは、そう言って、前足を差しだしました。
その意味をすぐに悟ったのでしょう。ラディアは指で握手をしました。
「可愛いわ。ねぇ、家の子にならない?ここなら、絶対不自由はさせないわ。」
ラディアは期待した目でトラを見つめながら、そう言いました。
トラは首を振りました。
「駄目なのよ。あたしは迷宮の旅猫(たびびと)だもの。」
「えっ、迷宮って。」
トラは、自分の事や、迷宮についての話をしました。
ラディアはそれを真剣に聞いていました。
「そうだったの。それじゃあ、すぐに消えていなくなってしまうのね。」
ラディアはちょっと悲しげでした。
でも、すぐに気を取り直してこう言いました。
「じゃあ、あなたが迷宮に戻るまででもいいわ。
それまでは、ここでゆっくりとしていって欲しいの。どう?」
「有難う。よろしくお願いします。」
「こちらこそ、よろしくお願いします。」
再び、二人は、握手をしました。トラは言いました。

「ねぇ、お願いがあるの。」
「何？」
「何か、食べさせてくれないかしら。お腹がペコペコなの。」
それを聞いて、ラディアは慌てて言いました。
「そうよね。ごめんなさい。うっかりしていたわ。
すぐに食事の用意をさせるわ。待っててね。」
ラディアは呼び鈴を鳴らしました。しばらくしてドアを叩く音が聞こえました。
「いいわよ。入りなさい。」
屋敷に仕えているメイドが入って来ました。
「ラディア様。何かお呼びでしょうか？」
「この子のために、食事を用意してちょうだい。
ええと魚のすり身は好きかしら？」
「ええ、もちろん。」
「そう。じゃあ、それをお願いするわ。あとこの子が飲むものも用意してね。」
「かしこまりました。食事はどちらでなさいますか？」
「ねぇ、トラちゃん。どこで食事したい？」
「どこでもいいわよ。」
「そう、ここは今散らかっているから、食堂に行きましょうね。
じゃあ、食堂でお願いするわ。」
「判りました。では失礼いたします。」
メイドは、部屋から出ていきました。
しばらくして、部屋の電話が鳴りました。食事の準備が出来たとの知らせでした。
「じゃあ、行きましょうか。トラちゃん。」
「ええ、行きましょう。」
そう言うと、トラはラディアの右肩に飛び乗り、ちょこんと座りました。
「まぁ、可愛いい。」ラディアは、嬉しそうでした。

ラディアたちは、部屋を出て、食堂に向かいました。

トラは食事を始めました。
その様子を、ラディアは頬づえをつきながら、楽しげに見つめていました。
食事が終わると、トラは満足そうに、しゃがみ込んでいました。
休憩中に、トラは自分の相方である、ガーネとはぐれてしまった事を話しました。
「そうだったの。それは心配ね。」ラディアはトラを気遣いました。
「私の部下が、あなたの所に着いた時、周りには誰もいなかったそうよ。
多分、あそこら辺は潮の流れが速いから、あなたはだいぶ流されてしまったのね。
どうしたらいいのかしら。」ラディアは考え込みました。そして言いました。
「とりあえず、私の部下に誰か知っている人がいないか聞いてみるわ。
それで駄目なら、ノアに聞いてみるわ。」
「ノアって、誰なの。」
「私は、この海底都市ガルディの、南ブロックに住む部族デルダの長よ。
ノアは、北ブロックに住む部族ガルバの長なの。
そして、この2つの部族が、このガルディにいる全てというわけなのよ。
こちらでは、見つけられなくても、ノアの方で見つけている可能性があるの。
だから、あとで電話して聞いてみてあげるわ。それでいいかしら。」
「ええ、有難う。よろしくお願いします。」
「じゃあ、そろそろ部屋に戻りましょうか。」
「はい。」

ラディアとトラは、食堂を出て、自分たちの部屋に戻りました。
トラはまだ少し、体が思うように動かないみたいでした。
ラディアにそれを話しました。
「今日はもう休んだ方がいいわ。」ラディアは心配そうに言いました。
トラは、このままベッドで寝かせてもらう事にしました。
ラディアも、就寝の時刻になると、トラの隣で眠りに着きました。

トラは、目を覚ましました。
隣で、一緒に眠っていたラディアの姿は、既にありませんでした。
トラは、ベッドから立ち上がりました。
足を思いっきり伸ばして、首を振りました。その後、大きな欠伸をしました。
トラが、毛づくろいにいそしんでいると、声が聞こえました。
「お早う、とらちゃん。機嫌はどう?」声の主は、ラディアでした。
「大丈夫よ。だいぶ元気になったわ。」トラはそう答えました。
「よかったわ。」ラディアはそう言って、トラの傍らに座りました。
「じゃあ、朝食が済んだら、私と出かけない?
この海底都市ガルディを案内しようと思うの。」
「いいわね。是非、お願いするわ。」

朝食が終わり、トラはラディアを待っていました。
1時間後、ラディアはトラの前に現れました。
「やっと、来たわね。何か用事でもあったの?」
「えっ、別に何も無かったわ。
ただ、お化粧と、着替えをしていただけよ。ええと今、何時かしら。」
ラディアは壁にかかっている時計を見ました。
「なんだ。あれから1時間しか経っていないじゃないの。
とらちゃんは、心配性ね。」ラディアはそう言いました。

トラは、言うべき言葉が見つからず、黙っていました。

ラディアとトラは、街を歩いていました。
案内といっても、ラディア自身が、好んで行く店が中心でした。
服飾店や、アクセサリーを置いている店に、トラを連れ込みました。
猫用の服を何種類か、見つけて持ってきました。
「ねぇ、これ可愛いと思うの。着てみない？」などと言ったりしていました。
また、トラに、自分が気に入ったアクセサリーを、首からかけたりしていました。
「ねぇ、これいいと思うの。プレゼントしてあげるから、これ買わない？」
などと、はしゃいでいました。
「そうね。考えておくわ。」トラは、軽くあしらっていました。
喉が渇いたという事で、アイスクリーム屋に行きました。
ラディアは、ソフトアイスクリームを2つ注文しました。
ラディアは、テーブルに置いてあるスタンドに、ソフトクリームを置きました。
そして、それをトラに勧めました。
トラは、そのソフトクリームを工夫しながら、なんとか食べていました。
ラディアは、自分もソフトクリームを食べながら、その光景を楽しんでいました。
アイスクリームを食べ終わり、再び街に出ました。
「あのアイスクリームは、美味しかったわね。」ラディアはそう言いました。
「そうね。」トラはそう返事をしました。
しかし、本当は、返って喉が渇いてしまいました。
ラディアも、同じだったらしく、自販機でお水を購入しました。
ベンチに座り、お水にストローを差して、トラとかわるがわる飲ん

でいました。
お水を飲み干すと、ストローとともに、ゴミ箱に入れました。
そして、また歩き出しました。
トラは、歩いている途中で、美術館や博物館を見つけました。
何か、珍しいものでもあるかと思い、ラディアに案内を頼みました。
「止めた方がいいわよ。あんなのつまらないだけだわ。」
ラディアは、そう答えました。結局、中には入れませんでした。
後で聞いたところ、ラディアは両方とも入った事が無かった事が判りました。
ガーネなら、こういうの好きだから、絶対に寄るのにな。
トラは、そう思うと、ちょっと涙ぐんでしまいました。
でも、それをラディアには、悟られないようにしました。

お昼になりました。近くのレストランで、食事をしました。
休憩後に公園で、走り回ったりしていました。
ラディアは、ゲームセンターにトラを誘いました。
トラは、飴玉が取れるクレーンゲームに、興味をそそられました。
ボタンを叩くだけでいいらしいので、ラディアにやってみたいと言いました。
「そんなの面白くないわよ。ねぇ、それよりこっちに来て。」
ラディアはそう言って、シューティングゲームにトラを誘いました。
画面の中で迫りくるゾンビを打ち続け、声を張り上げて興奮していました。
危ない人かも。トラはそう思いました。
ラディアは顔をこちらに向けました。顔は紅潮し、目は血走っていました。
「ねぇ、トラちゃんも支えてあげるから、レバーを引いてみる?」
ラディアは、トラにも参加させようとしました。
「私は、いいわ。」トラは、ゲームセンターの外へ出て行きました。
「あっ、待ってよ。」ラディアは慌てて、トラの後を追いました。

トラは、ベンチに座っていました。
「どうしたの。疲れた?」ラディアは聞いてみました。
「別に。何でも無いわ。」トラはそう答えました。
トラは、多少いらいらしていました。
ガーネと一緒にいる時は、絶対に感じた事の無い感情でした。
ラディアは、そんなトラを見て、どうしたらいいか判らないようでした。
ですが、何かを思いついたらしく、トラに声をかけました。
「ねぇ、私の海中艇に乗ってみない?」
「海中艇って、確か私を助けてくれた時に、乗っていた船の事よね。」
「そうよ。それに乗って、海中を散歩しましょう。きっと楽しいと思うわ。」
ラディアはそうトラに言いました。
トラはしばらく考えていましたが、やがてラディアに言いました。
「それも悪くないかもしれないわね。じゃあ行きましょう。」
ラディアとトラは、海中艇のあるドッグに向いました。

ラディアたちは、海中艇に乗り込み、海中に潜りました。
海中は透き通っていました。その中を海中艇は進んでいきました。
海底都市の周りをゆっくりと回りました。
トラは、自分がいた海底都市の巨大さに、圧倒されてしまいました。
よくこんなものを、人間が作ったものだと、改めて思いました。
「どう、このデス・クイーンの乗り心地は?最高でしょ。」
ラディアはそう言って自慢しました。
「この船はデス・クイーンって言うのね。あなたの船なの?」
「そう、私の旗艦。なかなか使い勝手がある船よ。
この海底都市には、海中艇は幾つもあるわ。
でも、このデス・クイーンほどの戦闘能力を持っている船はどこに

も無いわ。」
「そうなの。でもそんな戦闘能力って何に使うの？」
「ガロンとの戦闘に備えるためよ。」
「ガロンって何なの？」
「この海に棲息する、獰猛でかつ危険な海洋生物だわ。
私たちの仲間を、片っ端から食べていった悪魔よ。」

ラディアは、トラに話を始めました。
この星の陸地が、全て消滅してしまった事。
生き残るために、全ての部族が、大型の海中艇を作った事。
造った海中艇の初期不良や操縦の未熟から、多くの民が海中に投げ出された事。
その民を、昔からこの地域に生息しているガロンがむさぼり食べてしまった事。
わたしとこの船があれば、そんな事は決してさせなかったのに。
ラディアは拳を握りしめて、悔しそうに話しをしていました。

「そうだったの。大変だったのね。」トラはラディアに言いました。
この人は自分の感情に正直な人なんだ。トラはそう思いました。
直情でわがままで、かつ男のような荒っぽさを秘めている。
トラは、またラディアを好きになりました。
海中艇は、ドッグに戻りました。
そして、ラディアとトラは、屋敷に戻りました。
お風呂に入った後、食事をしました。もちろんその後、歯を磨きました。
ラディアとトラは、とりとめも無く、いろいろと話をしました。
ラディアは、トラが昼間よりも、機嫌が良くなっているのを見て安心しました。
やがてベッドに入りました。今夜もトラは、ラディアの隣で寝る事にしました。

トラは今日、1日を振り返っていました。
海中艇の乗った後はともかく、前半は本当に気疲れをしました。
ガーネに会いたいな。トラは心の底から、そう思いました。

翌朝、トラは目を覚ましました。
あたりを見回しましたが、ラディアはいませんでした。
しばらくして昨夜、寝る前にラディアが言った事を思い出しました。
「ごめんね。トラちゃん。今日は午前中、どうしても断れない用事があるの。
お昼までには帰ってくるから、昼食は一緒に食べましょう。」
トラは、ラディアが帰ってくるまで何をしようかしら。と思いました。
とりあえず、毛づくろいをしていると、そこにメイドさんがやってきました。
「お早うございます。あのトラ様。お食事の準備が出来ていますよ。」
「えっ、作ってくれたの?」
「はい。昨日ラディア様から、頼まれました。
「私が、帰ってくるまで、トラちゃんの面倒を見てて欲しいの。」
そう言われています。」
「そうなの。有難う。」
「では、トラ様。」
「トラでいいわよ。」
「それでは、手前どもが、ラディア様に叱られてしまいます。
それでは、トラお嬢様では如何でしょうか?」
「それも、少し照れるけど、メイドさんが困るならそれでいいわ。」
「有難うございます。ではトラお嬢様。
お食事は、ここでなさいますか?それとも、食堂になさいますか?」
「ここで食べると、汚してしまうかもしれないから、食堂にするわ。」

「有難うございます。トラお嬢様。では、こちらへ。」
そう言ってメイドさんは、トラを食堂に連れて行きました。
トラは、メイドさんに御給仕してもらいながら、楽しく食事をしました。
「トラお嬢様。お味は如何でしたか？」
「いつもどおり、とても美味しかったわ。有難う。」
「そう言って頂けると、とても嬉しいです。」
メイドさんは、食器を片づけた後、トラに尋ねました。
「トラお嬢様、これから何かして欲しい事はございますか？」
「そうね。特にこれと言ってないわ。」
「でしたら、当屋敷のお庭で、散歩など如何でしょう。
もし、よろしければ、私がご案内しますがどうなさいますか？」
「是非、お願いします。」
トラは、メイドと一緒にこの屋敷の庭を見て回る事にしました。

トラは初めて、このお屋敷の庭に入りました。
「うわぁ、なんて広いのかしら。」トラは、驚いていました。
庭は単に広いだけでは、ありませんでした。
いろいろな種類の花が、あちらこちらにたくさん咲いていました。
芝生も、絵を描くように綺麗に刈り取られていました。
置いてある石も、置き物として観る事が出来るくらい、味わい深いものでした。
少し歩く度に、庭に変化が見られ、見るものを楽しませてくれました。
感動も与えてくれました。
トラは、この庭を思いっきり、駆け回りました。
また、メイドさんと一緒に散策もしました。
トラは、ラディアが帰ってくるまで、ずっとこのお庭にいました。
ラディアが帰って来ました。

「ただいま。」「お帰りなさい。」
トラは、ラディアの元に駆け寄りました。
メイドさんから話を聞いていたのでしょう。ラディアはトラに言いました。
「トラちゃん。午前中はお庭で、楽しんでたみたいね。」
「ええ、とっても楽しかったわ。」
「それはよかったわ。あとでメイドにお礼を言わないといけないわね。」
「ええ、メイドさんはとても優しく接してくれたわ。」
トラは、メイドさんに感謝していました。
ラディアはトラと一緒に、昼食を食べました。
食事が終わり、ラディアとトラは、ティータイムを楽しんでいました。
その時、とてつもなく激しい揺れが発生しました。
しばらくして、揺れがおさまりました。
しかし、その時には、このお屋敷を含め街全体が、既に真っ暗でした。
1分ほど経ってからでしょうか。電気が回復しました。
「電源が回復したのね。よかったわ。」
トラが、ホッとしました。
「今は多分、非常用電源よ。バッテリーの力で動いているんだわ。すぐに対策を講じないと、数時間で止まってしまうの。」

ラディアは、屋敷の被害を確認しました。
その後、海底都市ガルディの、南ブロック内の主要拠点に連絡しました。
どこも、災害は発生していないようなので、ラディアは安心しました。
「後は、主電源がどうなっているかだわ。」
ラディアは、電話をかけました。

「誰に電話をかけて、確かめるつもりなの？」トラが尋ねました。
「海底都市ガルディの北ブロックの長（おさ）のノアよ。
彼は、部族ガルバの長でもあるの。
この海底都市を造ったのは、部族ガルバなのよ。
この海底都市の主電源も彼らが管理しているわ。
だから、ここは直接ノアに聞いた方が、早くて確かな情報が得られるのよ。」
少し間をおいた後、相手が電話に出ました。
ラディアは、現在の状況を教えるよう、相手に告げていました。
相手がその情報をラディアに伝えたようでした。
ラディアは自分も、コントロールベースに行くと伝えた後、電話を切りました。
「ごめんなさい。トラちゃん。これから急ぎの用事が出来てしまったわ。
だから、ここでおとなしくしていてね。」
「あたしも、一緒に行っちゃいけない？」
「でも、ひょっとすると危険な事もあるかもしれないのよ。」
「それなら、なおさらラディアを一人で行かせたくないの。
あたし、ラディアがとても心配なの。ねぇ、お願い。私も連れてって。」
ラディアは、トラを見つめていました。
ラディアはトラの言葉に、何か心を動かされるような思いでした。
「有難うトラちゃん。じゃあ、一緒に行きましょうね。」
ラディアはそう言うと、トラを連れて、物置に向かいました。
床のハッチを開けて、地下道へ降りて行きました。
地下道には、数台のバイクがありました。
「この地下道はね。南ブロックのコントロールベースにつながっているのよ。
これから、バイクの乗って、全速力で走るわ。
トラは危ないから、私のポケットに入っていなさいね。」

「判ったわ。」トラはそう答えました。
そしてラディアが入口を広げている、右ポケットの中に入りました。
ラディアは、地下道を全速で走りました。

地下道は、これまで、使われる事がありませんでした。
南ブロックのコントロールベースに行きたければ、普段は警察署に行きます。
奥に配備されてある隠しエレベーターで、そこまで降りる事が出来たからです。
ラディアはいざ、こうして地下道を走ってみると、不便だなと思いました。
この地下道は本来、非常用でしかも歩くために作られていました。
そのためか、道路の整備があまり良くありませんでした。
道路幅も狭かったため、車を走らせる事が、出来ません。
だから、ラディアはバイクを置いて、緊急時に備えていたのでした。
それにしても、走りにくい道路でした。
そのうえ、今は、灯りが非常灯のみなので、視界があまりよくありません。
まかり間違えば、横転は免れません。
部族の長(おさ)専用の道路であったのが、救いでした。
もう少し、この地下道に予算をかけておくべきだったとラディアは思いました。

ラディアは10分以内に、コントロールベースの入り口へ到着しました。
バイクを降りたラディアは、鍵を取り出しました。
その鍵は、部族の長だけが、持つ事の出来るものでした。
海底都市ガルディの南ブロックを支える、コントロールベース。
その全ての装置にアクセス出来るただ1つの鍵でした。
また、北ブロックとのアクセスにも、重要な役割を担う鍵でした。

ラディアはその鍵でロックを解除し、コントロールベースの入口を開けました。

中に入ったラディアは、発電管理室に向かいました。
トラも、右ポケットから飛びだして、ラディアの右肩に座りました。
発電管理室に入ったラディアは、また自分の鍵を取り出しました。
そして、その鍵で北ブロックの発電所のロックを解除しました。
発電所は稼働を開始しました。
「この発電所が完全に稼働するには、まだ時間がかかるわ。
それを見届けるまでは、ここにとどまっているしかないわね。」
「ねぇ、完全に稼働したら、次はどうするの？」
「隔壁を開いた後、北ブロックのコントロールベースの発電管理室まで行くの。
そして、この発電所を向こうとリンクさせるのよ。
これで、海底都市ガルディ全体が、この発電所の電力を使えるようになるわ。」
「判ったわ。でも何故あなたが、わざわざ来る必要があったの。
こちらの発電所を稼働したければ、電話連絡で済んだんじゃないの。
向こうで、こちらの発電所の電力を、使う場合もそうでしょ。
稼働後に、向こうの人に連絡を入れれば済む話じゃないの？」
「非常事態でもあるわけだし、本来は、そうあるべきなんだけどね・・・。

まず、ここの発電所の話からするわね。
この発電所は、南ブロックには、ただ1つの発電所であり、貴重な財産なのよ。
そして、南ブロックは、部族デルダが支配する地域なの。
だから、この発電所を動かすには、部族の長である私の許可が必要なわけよ。
次に、隔壁の話なんだけどね。
これは、北ブロック、南ブロックというより、部族間の仕切りなの。

1つの部族を1つの国だと、考えてちょうだい。
他の国へ勝手に入ったり、他の国の所有物を勝手に使ってはいけないでしょ？
それを防ぐ目的で、設けられたものなのよ。
だから、これを開けるには、私とノアの二人の許可が居るの。
こちらの発電所の電力を、北ブロックや海底都市全体で使う場合も同じよ。
私とノアの二人の許可が居るの。
これらの許可の証として、部族の長のみが持つ事が出来る、この鍵が必要なのよ。
そして、それを使用していいのは、部族の長本人のみというわけよ。」
「でも、それだと非常事態によっては、手遅れになるんじゃないの？」
「そうなんだけどね。
私やノアだけでは、どうにもならないのよ。
2つの部族の大型の海中船が、連結して海底都市を造っているんだけどね。
だからと言って、仲がいいってわけじゃないのよ。
むしろ、領土とか、宗教とかで、争いが絶えなかったわ。
陸地が全て消えて、この海底都市が出来てから変わったのよ。
2つの部族が、共生を意識して、手を携えるようになっていったわ。
だけどね。それでも部族の誇りとかいうものは、依然と残っているのよ。
長老たちも、これ以上の交流というか、改善は望まないの。
難しいところだわ。」
ラディアも部族の長として、大変なんだなと、トラは同情しました。
しばらくしてラディアは、発電所が完全に稼働した事を確認しました。

そして携帯電話で、ノアを呼び出しました。
ノアはすぐに電話に出ました。
「北ブロックの発電所は、完全に作動させたわ。
私は、これから隔壁の場所まで行くから、ノアも急いで。」
「判った。俺もすぐに、隔壁に向かうよ。」
ラディアは用件を言った後、電話を切りました。
「さぁ、ぐずぐずしてはいられないわ。隔壁の所まで行きましょう。」
ラディアたちは、隔壁に向かって走り出しました。

隔壁にたどり着くと、その脇に設置してあるマイクに向かって喋りました。
「ノア。聞こえる。隔壁に着いたわよ。」
「聞こえるぞ。こちらも着いた。」
二人は、それぞれ、自分の持つ鍵を隔壁の鍵穴に差しこみました。
「じゃあ、開けるぞ。」「いいわよ。」「せいのー！」
ガチャリン。
物々しい音を立てて、隔壁は開かれました。
「ラディア！」「ノア！」
二人は駆け寄りました。そして抱き合いました。
「よく来てくれた。」「当たり前じゃない。」
ラディアは、久しぶりに会ったその顔に、ホッとしていました。
ノアも、嬉しそうでした。

ラディアは、ふと右肩にトラが乗っていない事に、気が付きました。
あたりを見回すと、自分とは少し離れた位置に、トラは立っていました。
ラディアはトラの方に歩み寄ろうとして、気が付きました。
トラは前方を一心に見つめていました。
そしてその目から、涙がこぼれていました。

「トラちゃん・・・。」
ラディアは、トラが見つめている方を見ました。
そこには、人が1人立っていました。
その人は、驚いたように、トラに向かってこう言いました。
「トラ。トラなのか。」
その声を聞いた瞬間、トラは涙声で叫びました。
「ガーネェ！ガーネェ！」
その人は、膝を付き、両腕を広げました。
その人の目もうるんでいました。
トラは、ガーネと呼んだその人の胸に、飛び込んで行きました。
そして、甘えるような鳴き声をあげていました。

ガーネは優しくトラを抱きしめました。
「お帰りなさい。トラ。」
「ただいま。ガーネ。」

第5話「海底都市」ふたつめかもしれない。（終）

第5話「海底都市」ふたつめかもしれない。（後書き）

今回のお話は、トラと部族デルダの長（おさ）ラディアの話が中心です。
前回、はぐれてしまったガーネとの出会いもあります。
ここまで、読めばお判りと思いますが、もう書く事はほとんどありません。
南ブロックの発電所と北ブロックのコントロールベースを、リンクするだけです。
節電モードとはいえ、安定した電力の供給が出来るのですからね。
お話としては、終わりですね。
文書的には、あと数行書けば、終わりになるのでしょうね。
今回は、ガーネとトラは再会シーン以外、目立ったものがありませんでしたね。
大体、サブキャラのノアとラディアが強力すぎるのです。
まぁ、たまにはいいんじゃないでしょうか。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第5話「海底都市」終わりなの。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第5話「海底都市」終わりなの。のお話です。
この回では、トラとラディアが、海底都市の発電所の復旧に強力します。

第5話「海底都市」終わりなの。

第5話「海底都市」終わりなの。

「じゃあ、ここに、君の鍵を差し込んでくれ。」

「判ったわ。」

ラディアは、ノアが示す差込口に、鍵を挿入し右に回しました。

すると、差込口の上部のランプが、緑色に点灯しました。

その上部には、電力供給状態を示す、パネルがありました。

向こうの発電所とこのコントロールベースのリンク状態も表示されています。

しばらくすると、そのリンクが確立された事を表示しました。

その後、バッテリーからの供給が終わった事も、確認出来ました。

「フゥー。やれやれ、やっと終わったな。ラディア、ご苦労様でした。」

「どういたしまして。それより、主電源の方は、どうなっているの？」

「これから、調べるところだよ。電源が供給されたので、やっと調べられる。」

そう言ってノアはパネルに、こちらの発電所の状態をパネルに表示しました。

現在の配線状況が、確認出来ました。

「ああ、駄目だ。モニターの一部が壊れてしまっている。」

パネルで確認すると、配線部分の一部が、表示されていませんでした。

「どうするの。」

「遠隔操作での補修は無理だな。直接、作業艇で修理に行かせよう。」

ノアは、発電管理室のマイクで、部下にその指示を与えました。
「これで、何とかなるだろう。」
「ねぇ、私もデス・クイーンで出動するわ。
作業艇は大きいし、武器は一切持っていないのよね。
もし、ガロンに狙われたら、大変よ。」
「昼間だから、そんなに危険は無いとは思うが・・・。
しかし、つい先日も、昼間に多くのガロンを目撃したと報告を受けている。
じゃあ、念のために行ってくれるか。」
「判ったわ。」
ラディアは、発電管理室を出て行こうとしました。
「待って。」ガーネの右肩に座っていたトラが言いました。
「あたしも、一緒に行くわ。お願い。連れてって。」
「危険な事になるかもしれないのよ。それでもいいの?」
「あなた1人だと無茶しかねないから、心配なの。」
ほんのつかの間、ラディアは、トラを見つめていました。
「じゃあ、行きましょう。」ラディアは微笑んで、うなずきました。
「なら、俺も行こうか?」ノアも言いました。
「駄目よ。あなたは、ここで、作業員に指示をしなければならないでしょ。
彼らを守るのは、私たちに任せて。」
ノアは、何か言おうとしましたが、結局ラディアの言うとおりにしました。
トラは、ガーネの右肩から降りました。そしてガーネの方に振り向きました。
「いいですよ。あなたが行きたいと思うなら、行ってください。」
ガーネはトラにそう言いました。トラとガーネは互いにうなずき合いました。
ラディアとトラは、デス・クイーンに向いました。
「彼女は、いつの間に君の猫とあんなに仲良くなったんだろうな。」

「あのラディアさんって人。性格がトラと似ているのかもしれません。
ノア。あなたはあの人とは、単に部族の長同士の間柄じゃ、無いんでしょ。」
「彼女は、俺の幼なじみなんだよ。
小さい頃、居住空間内では2つの部族が、一緒に暮らしていた時期があったんだ。
よく一緒に、遊んだものさ。まぁ、それはさておき。」
ノアは、ガーネの方に向き直った。
「ところで、君はどうする?」
「それなんですけどね・・・。」
ガーネは、苦笑して、話を続けました。
「部族ガルバの長(おさ)ノア。あなたに、お願いがあるんです。」

デス・クイーンは、発進しました。
「ねぇ、ラディア。」「何。トラちゃん。」
「さっきのノアって言う人。ラディアとはどんな関係なの?」
ブッ、ラディアは飲んでいた、ジュースをを思わず吐いてしまいました。
「ど、どうしてそんな事を聞くの?」
「だって、ラディアの様子が、ただの部族の長同士には思えなかったの。」
ラディアは顔を赤らめました。
「あ、あの人はね。私の幼なじみなのよ。ただそれだけよ。」
「えっ、でも確か、ラディアとノアじゃ、住んでいる所が違うんでしょ。」
「私の小さい頃は、デルダもガルバも、一緒に住んでいた時があったの。
でも、海底都市での暮らしが安定するにつれて、小競り合いも多くなって来たわ。

前にも話したとおり、もともと仲がいい部族どうしでは無いのよ。
だから大事をとって、居住区を別々にしたってわけ。
それでも、役所で許可さえ下りれば、今でも違う居住区に住む事が出来るのよ。
コントロールベースのように、厳しくは無いわ。」
「フゥーン。それでノアを知っていたわけなのね。
それで、あの人の小さい頃って、どんなだったの？」
この質問をしたトラは、そのあとすごく後悔しました。
「えっ、ノアの小さい頃？実はあの人、ああ見えてもね・・・。」
ラディアの長い長い話が、始まったのでした。

「作業艇。現場に到着しました。」
発電管理室で、ノアは、その報告を受けました。
「発電所のモニター接続部分を分離して、作業艇のモニターに接続してくれ。
そして、その情報をこちらのパネルに表示出来るようにするんだ。」
「判りました。」
しばらくすると、作業終了の知らせが入りました。
ノアはパネルに、現在の発電所の情報を映し出しました。
その結果、配線の一部が、破損している事が判りました。
「これでは、直接作業員の手で、交換するしかないな。」
ノアは、その指示を作業艇に伝えました。
その後、デス・クイーンにも連絡を入れました。
ラディアは、顔を赤くして力説していた昔話を止めて、その連絡をとりました。
「あっ、ノア。今昔話をしているの。
ほらあなたが小さい頃、ジャングルジムから転げ落ちて・・・」
「そんな事は、どうでもいいから。」
ノアは、我を忘れそうになる自分を抑えて、話を続けました。
「今、作業艇から発電所の補修のため、作業員が向かった。

君の海中艇で、彼らを警護して欲しいんだ。」
「判ったわ。絶対ガロンに手出しをさせないから、安心して。」
デス・クイーンは、作業艇の前面に出て、警護にあたりました。
その後ろでは、作業員が作業艇から離れて、発電所に向かっていました。

ガロンが現れました。全部で１０匹ほどの群れをなしていました。
「ついに現れたわね。ガロン。」ラディアはそう言いました。
「でも、ちょっとタイミングがよすぎね。」トラはそう批評しました。
「前にも言ったと思うけど、ガロンは私たちの仲間をたくさん食べたの。
多分、それで味をしめたんでしょうね。人間の匂いにはすごく敏感なのよ。」
ガロンたちが、迫ってきました。
「あいつら、何とかして、移動中の人間を食べようとしているわ。
先に先制攻撃をかけるわ。ドリルミサイル準備！」
ガロンたちが、デス・クイーンにまとまって迫って来ました。
「今だわ。ドリルミサイル発射！」
デス・クイーンから、ドリルミサイルが発射されました。
前面上部にある、２基の発射口から、同時に発射されました。
割と小さいミサイルで、１基の発射口から数発発射されました。
発射されたドリルミサイルは、拡散してガロンに向かって行きました。
１匹のガロンに数発のドリルミサイルが、ドリルで体内に入り込みました。
そして、爆発しました。「ボム！」
あっという間に、ガロン９匹が、海の藻屑と消えました。
しかし最後の１匹が、ドリルミサイルをかいくぐって、向かってきました。

「ラディア。どうするの？」
「大丈夫よ。この船自身の武器で、あいつを仕留めてやるわ。ドリル開放！」
デス・クイーンの前面から、ドリルが現れました。
「ドリル回転！」
ドリルが、高速回転を開始しました。
そのままデス・クイーンは、ガロンにドリルを直撃しました。
ガロンは、ズタズタに引き裂かれ、海底に没しました。
「やったわ。」ラディアは狂気しました。
「すごいじゃない。」圧倒的な勝利に、トラもはしゃいでいました。
「あれが、ドリルミサイルですか。小さい割にはすごい威力ですね。」
ガーネはノアにそう言いました。
「あれが、戦闘部族と言われるデルダが造った、対ガロン用の切り札だよ。
個体は小さいが、上部にはドリルを装備し、下部には、起爆装置を内蔵している。
ドリルの力で、ガロンの頑丈な皮膚に穴を開けて、体内に入り込むんだ。
そして、中に入った瞬間、起爆装置が働いて、爆発すると言うわけだ。
実際には、ドリルの力も爆発力もそれほど大きくはないんだ。
それでもガロンには、十分すぎる力を持ったミサイルなんだよ。
おまけに、ミサイルの小型化も容易でね、量産も可能なんだ。
確かに、戦闘部族の名は伊達じゃないと思うね。いい物を作るよ。」
「でも、前面攻撃だけでは、死角が出来やすいんじゃありませんか。」
「デス・クイーンを見てごらん。前面、左右側面、後部面に発射口があるだろう。

それぞれ2基ずつで、合計8基の発射口があるんだ。
1回の発射で、1つの発射口から最大10発まで発射が可能なんだ。
同時発射すれば、最大80発が発射出来るわけだ。
しかも、発射されたドリルミサイルは、拡散して相手を迎え撃つんだ。
死角も、かなり少なくなると見ていいと思う。」
「でも1人では、扱いきれないでしょう?」
「最大で4人は乗れる事になっている。でも、実は1人で、十分なんだよ。
デス・クイーンには対ガロン用の索敵システムが組み込まれているんだ。
ある一定の範囲にガロンが侵入すれば、自動的に発射されるようになっている。
ラディアはね。自分で戦いたいから、あえて前面はフリーにしているんだよ。」
「デス・クイーンは、もう1つ武器を出しましたね。
向かって来たガロンに前面からドリルを回転させて、体当たりしてました。
ガロンは、バラバラになってしまいましたが、あれは相当な力なんでしょう?」
「あれも、作業艇で使用する掘削用のドリルに比べれば、はるかに弱いよ。
でも、対ガロン用としては見ての通り、十分すぎる力なわけさ。
それにデス・クイーンは、船としては小型だよね。
搭載しているエンジンは高性能なんだが、小型だからそれほど出力は出ない。
エネルギー量も大したことは無いんだ。
だから、こうした装備に仕上がっているのさ。
もちろん対ガロン用としては、申し分の無い海中艇である事は間違いない。

それに小回りが利くからね。ラディアはすごく気に入っているんだよ。」

数時間後、発電所の修理が完了したとの報告が、作業艇からありました。

「どれどれ。」ノアは、パネルに現在状況を表示してみました。

確かに、正常に稼働していました。

「やっと、終わったようだな。」ノアは、作業艇に指示を伝えました。

「ご苦労様。みんなに、作業艇に引き上げるように指示を出してくれ。」

「判りました。」

その後、デス・クイーンにも連絡を入れました。

船内は相変わらず、昔話で盛り上がっていました。

ラディアは、ノアからの連絡をとりました。

「ねぇねぇ、ノア。

あなたが布団に地図を書いちゃった時に、二人でなんとか隠し通したわよね。

あれって、あなたが何歳・・・」

「やかましいわ。」

ノアは、ゼイゼイと息を切らしました。

それでも、何とか気分を落ち着けたあと、話を続けました。

「さっき、発電所の補修作業が終了したんだ。発電所は稼働を開始したよ。

今、その発電所から作業艇に、作業員が戻ろうとしているんだ。

また君の海中艇で、彼らを警護して欲しい。」

「あら、もう終わったのね。判ったわ。私に任せて。」

デス・クイーンは、再び作業艇の前面に出て、警護にあたりました。

その後ろでは、作業員が発電所から離れて、作業艇に戻ろうとしていました。

ガロンがまた現れました。先ほどより大きな群れをなしていました。
今度は、２０匹近い数で、こちらに接近してきました。
ノアは、そのうちの１匹に注目しました。
「まずいな。クロスが現れた。」
「クロスって、何ですか？」
「ガロンたちのリーダーだ。右の頬に、十字型の傷があるだろう。
だから、クロスと呼ばれているんだ。
とにかく頭が切れるんだ。仲間に集団行動を取らせる事も出来る。
あの、ラディアにしても、こいつには舐められている。
さっきのようなわけにはいかないぞ。」
ノアは、ラディアにもその事を伝えた。
「任せてよ。今度こそ、やっつけてやるわ。」
ラディアは、興奮していました。
「危険な事をしては駄目だ。
作業員に近づけないようにしてくれれば、それでいいんだ。」
ノアは、ラディアにそう忠告をしました。

ガロンたちが、迫ってきました。
ノアの忠告を無視して、ラディアは戦いに入りました。
「先に先制攻撃をかけるわ。ドリルミサイル準備！」
ガロンたちが、デス・クイーンにまとまって迫って来ました。
「今だわ。ドリルミサイル発射！」
デス・クイーンから、ドリルミサイルが発射されました。
前面上部にある、２基の発射口から、同時に発射されました。
しかし、次の瞬間、全てのガロンが、四方に散らばりました。
ドリルミサイルが命中して、絶命したものもいましたが、大半は無傷でした。
デス・クイーンは、ガロンの群れの中に、突進しました。
そして今度は、全部の発射口から、ドリルミサイルを発射しました。

群れの中を巧みに航行しながら、発射し続けました。
さすがに、広範囲に大量のドリルミサイルを発射した効果は、ありました。
次々と、ガロンが沈んで行きました。
最後に残ったのは、クロスだけでした。

クロスは、デス・クイーンに突進してきました。
ラディアは、ドリルを回転させて、クロスに直撃しようとしました。
ですが、何度やってもその度にかわされてしまいました。
「この船がいくら、小回りが利くといっても、クロスほどではないものね。」
ラディアは、ドリルミサイルも攻撃に加えました。
ですが、クロスは岩礁などの障害物を盾にして、かわしていました。
それでも、ついにラディアは、クロスを追いつめました。
ラディアは全速力で、クロスにドリルを直撃させようと、突進しました。
ですが、それはクロスの罠でした。
デス・クイーンがクロスに直撃する寸前、クロスは身を翻しました。
そして、真上へと逃げていきました。
その結果、デス・クイーンは目の前に現れた岩礁に、激突してしまいました。
デス・クイーンのドリルは、岩礁にがっちりと、くい込んでしまいました。
しかし、この争いの間に、全ての作業員は作業艇に戻る事が出来ました。
そして、作業艇は、海底都市ガルディへ戻って行ったのです。
デス・クイーンは、当初の目的を達成しました。

「あとは、デス・クイーンを回収するだけだな。」ノアは、そう思いました。

その時、ラディアから連絡が入りました。
「ねぇ、ノア。どうしてもドリルが岩礁から外れないの。逆回転をしても駄目だったわ。どうしたらいい？」
「仕方がないさ。デス・クイーンのドリルは、対ガロン用なんだからな。
岩礁では、もう動けないんだよ。
こうなったら、ドリルは破棄してしまうんだ。
ガロンが追いかけてきたら、残ったドリルミサイルでけん制すればいいさ。」
「そうね。それしかないようね。」ラディアも納得しました。
ラディアは、デス・クイーンからドリルを外しました。
おかげで、デス・クイーンは岩礁から逃れる事が、出来ました。
その時、遠くから、クロスが近づいて来るのが見えました。
ラディアは、ドリルミサイルを発射しようとしました。
しかし、幾らトリガーを引いても、発射させる事は、出来ませんでした。
どうやら岩礁との衝突の際に、発射装置が故障してしまったようです。
ラディアは、発射操作に気を取られ、油断をしてしまいました。
そこを、クロスが猛襲をかけてきました。「バーン。」
デス・クイーンはクロスに体当たりされ、横転を繰り返しました。
ラディアは必死になって、何とか踏ん張り、体制を元に戻しました。
ですが、デス・クイーンはボロボロの状態になっていました。
再び、クロスが迫って来ました。今度直撃を受けたらおしまいです。

ノアは、その状況を固唾を飲んで、見守っていました。
「どうしたらいい。ガーネ」
ノアは、ガーネの方を振り向きました。
「ガーネ？」
もう、その部屋には、ガーネの姿はありませんでした。

クロスが、目の前に迫って来ました。
ラディアもトラも観念しました。でもクロスから目をそらす事はしませんでした。
そんな最中、不思議な事が起こりました。
今にもぶつからんばかりに迫っていたクロスが、いきなり方向転換をしたのです。
ラディアとトラは、とりあえず、ホッとしました。
それと同時に、何があったのかと、クロスの進む方向に目をやりました。
「！」
そこには、潜水服を着た人が1人いるだけでした。
ラディアは、拡声器を使って呼びかけました。
「ガロンが来るわ。早く、逃げて。」
その声に気がついたのか、その人はデス・クイーンの方に振り向きました。
そして、迫りくるクロスの方も見ました。
ですが、その人は、そこから動く事はありませんでした。
「一体、あの人は・・・」「ガーネだわ。」
「えっ。」「あたしには、はっきり判るの。あれはガーネだわ。」

「ごめんなさい。」ガーネはそう言いました。
「あなたたちは、昔から、ここを縄張りとして生きてきたんですよね。
そのあなたたちの縄張りを、私たちは土足で踏み荒らしました。
そして、自分たちの住みかとしました。
あなたたちからすれば、私たちは侵略者以外の何者でもありません。
あなたたちが制裁として、私たちの仲間を食べたのも無理からぬ事だと思います。
でもね。私たちは生きたかったのです。

この星の寿命は、もうじき終わるのかもしれません。
例え、そうだったとしても最後の最後まで生き延びたかったのです。
私は、そんな人たちを救いたいのです。生きようとする命を助けたいのです。
でも、私には、あなたほどの強さはありません。誰よりも弱い人間なのです。
だから、卑怯な手を使います。卑怯な手を使ってあなたと戦います。」
ガーネは、手に握りしめている物の安全ピンを抜きました。
そして、両手で握りしめ、迫りくるクロスの前へ差しだしました。
「その代りに、私はあなたの最後を見届けてあげます。
自分の命をかけて、あなたの最後を見届けてあげます。
それが、あなたに対する私の敬意の証しです。」
ガーネは、両手を開きました。
安全ピンを抜いた手榴弾は、ガーネの手を離れました。
海流の勢いに乗って、迫りくるクロスの口の中へ吸い込まれていきました。
クロスがガーネに噛みつこうとした瞬間、「ボム！」と音が聞こえました。
クロスは、棒立ちになり、狂ったようにのたまわっていました。
クロスは、最後の力を振り絞って、その頭でガーネを押しつぶそうとしました。
でも、それはかないませんでした。
クロスは、ガーネの目の前で、崩れるように深い海の底に沈んで行きました。
ガーネの目からは、一筋の涙が頬を伝って流れていました。
「さよなら。ガロン。」
ラディアとトラは、その光景をじっと見守っていました。
クロスが沈んで行った後、ガーネの背後から、女の人が幻のように

現れました。
亜麻色の長い髪をした美しい女性でした。
その人は泳ぐようにして、ラディアたちの方に向かって行きました。
そして、すぐに消えてしまいました。
ラディアとトラは顔を見合わせました。
「一体、あれは何だったのかしら。」

居住空間に戻って来ました。
ガーネとトラは、その街の一角に、迷宮のドアを見つけました。
お別れの時が、来たのです。
ノアは別れの握手をしながら、ガーネに言いました。
「ガーネ。ラディアの命を助けてくれて有難う。」
「いえ、お二人こそ、私とトラを助けて頂き、本当に有難うございました。
また、今日まで、面倒を見て頂いた事を、心から感謝しております。
お二人とも、いつまでもお元気でいて下さい。」
ガーネも別れの挨拶をしました。
ラディアはトラを抱き上げて言いました。
「トラちゃん。もう会えないのね。どこに行っても、体だけは大切にね。」
ラディアは涙ぐんでいました。
「有難う。ラディアもお元気で。」
トラも悲しそうでした。
ラディアは、トラをガーネに手渡しました。
ガーネとトラは、再び二人にお礼を言った後、お辞儀をしました。
そして、迷宮のドアの中へと消えて行きました。

「行ってしまったな。」ノアは、寂しそうでした。
「ええ。」ラディアも同じ思いでした。
二人は、それぞれの屋敷に戻ろうと、歩き出しました。

ラディアは、疑問に思っていた事をノアに聞きました。
「ねぇ、ノア。あの時、何故ガーネさんは一人で海中にいたの？」
「ガーネはね。君たちが、デス・クイーンに向かった後に、俺に言ったんだよ。
「ガロンを倒せる武器を私に下さい。」とね。
理由を聞くと、彼はこう言ったんだ。
「私は、トラに、必ず守ると言いました。
でも今回、私はトラを助けてあげる事が出来ませんでした。
トラを助けてくれたのは、ラディアさんでした。
だから、今度は助けてあげたいのです。
私の命をかけて、ラディアさんとトラを救ってあげたいのです。」
俺はいつの間にか、彼を火薬庫に案内していたんだ。
彼は、そこにある武器の中から、手榴弾を選んだ。
そして、君たちに危険が及ぶと察した時、海中に潜って行ったんだ。」
「そうだったの。そのおかげで助かったのね。
トラが、あの人を好きな理由が、なんとなく判ったような気がするわ。」
「そうだな。」
しばらくして、突然、ノアは立ち止まりました。
「そうだ。ガーネに確認しなければならない事があったんだ。
今回の事故で、すっかり忘れていたよ。」
「今頃言っても、もうあの人たちは、戻っては来ないわよ。
それで、何を聞きそびれたの？」
「彼がここに来た時、俺が彼を街へ案内しようと思ったんだよ。
だけど、急な用事が出来てしまってね。
代わりにエスコートしてくれる人を頼んだ事があったんだよ。」
「フムフム。それでどうしたの？」
「彼の話によると、アムっていう女の人が来て案内したらしいんだよ。

本当に楽しい1日だったって、喜んでいたよ。」
「よかったじゃない。それがどうしたの?」
「ガーネが、言ったんだよ。
夕方に迎えに来て、また海中艇でディナーを楽しんだってね。」
「えっ、そんな筈はないわ。数年前なら、出来たかもしれないけれどね。
今はあなたも知っている通り、夕方以降の海中艇の乗り入れは禁止しているわ。」
「そうなんだよ。だからおかしいと思ってさ。
エスコートする人を紹介してくれた人に電話したんだよ。そうしたら。」
「そうしたら、どうだったの?」
「俺が、一旦は頼んだけれども、後でキャンセルしたってと言うんだよ。
だから、誰もこちらには、寄こしていないと言うんだ。」
「何なのよ。それ。」
「だから、判らないんだよ。
もちろん、俺はキャンセルなんてした覚えが無いんだ。
それに、もう1つ、判らない事がある。
実際に海中艇は、その時刻に動いていたんだよ。記録にあったそうだ。
だから何故、海中艇をその時間に動かしたのか、管理者に聞いてみたんだ。
そうしたら、俺自身が、許可を与えたからなんだそうだ。
もちろん、俺は、そんな事を許可した覚えなんて無いんだ。」
「そんな。じゃあ、そのアムって言う人の事は何か判ったの?」
「何も判らない。アムの事を知っているのは、ガーネだけなんだ。
後は、誰も知らない。」
「本当に、一体何があったのかしら。」
「ただ1つ、奇妙な事が判ったんだよ。」

「それは、何なの？」
「今から、数年前、夜に海中艇が、ガロンに襲われたんだ。
海中艇では、ディナーが催されていたらしいんだ。
その船にいたのは、男の人とその人をエスコートする女性だったそうだ。
両方とも、ガロンの餌食になってしまったらしい。」
「それ、知っているわ。
その事件がきっかけで、夜間の海中艇の乗り入れは禁止になったんでしょ。
で、それがどうしたの？」
「その時、被害に会った女性の名前が、アムだったんだよ。
亜麻色の長い髪をした美しい女性だったそうだ。」
「亜麻色の長い髪をした美しい女性・・・。」
ラディアは、さきほど海底で見た幻の女性の姿を思い浮かべていました。
「まさかね。」ラディアは自分がふと頭に浮かんだ事を否定しました。
「ねぇ、ノア。」ラディアはノアに言いました。
「なんだい。ラディア。」
「もう、この件を考えるのは、止めにしない？
ガーネたちは、帰ってしまったんだし、もう確認する事は出来ないわ。
それに、あなただって、何も覚えていないんでしょ。
それじゃあ、いくら考えても、答えは出る筈が無いわ。」
ノアは考え込んでいましたが、結局、ラディアの意見に賛成しました。
「そう、そうだね。君の言う通りだ。」
「ねぇ、もう夜になってしまったし、このまま屋敷に帰るのもつまらないわ。
たまには、一緒に食事をしない？おいしい焼肉屋が最近、出来たの。

連れて行ってあげるから、そこに食べに行かない？」
「そうだな。たまにはいいかもしれない。じゃあ、行くか。」
「ええ、そうしましょう。」
二人は、もうこの件で、話をするのは止めにしました。
他の話題に切り替え、楽しくお喋りしながら、街の方へ歩いて行きました。

ガーネとトラは、迷宮へ戻って来ました。
「今回は、お互いにいろいろ大変でしたね。
トラ。一匹(ひとり)っきりにしてしまって、ごめんなさい。」
「いいのよ。向こうで会う事が出来たし、こちらにも一緒に戻れたしね。
ラディアと知り合えたのも、よかったわ。
ガーネはどうだったの？
ガロンとの対決は、大変だったわね。」
「まぁ、あれもそうだったけど、他にも大変な事がありましたよ。」
「それは何なの？」
「マンホールの中を、街からコントロールベースまで、梯子で降りたんですよ。
しかも、非常灯のみの中でですよ。あれは、辛かった。」
「へぇ、そんな事もあったのね。それで、いい事は何も無かったの？」
「実は街の案内を、ノアの口利きで女性にエスコートしてもらったんです。
あれは今でも、よかったと思いますね。」
「フゥーン。そうなの。」つまらなさそうに、トラは言いました。
「ええ、亜麻色の長い髪をした美しい女性でした。」
トラは、その言葉を聞いて、さきほど海中で見た女の人を思いだしていました。
あのクロスを沈めたのは本当にガーネなのか、それとも．．．

トラは、考えるのを止めました。
今、自分に大切な事は、ガーネがそばにいてくれる事でした。
そして今、自分の目の前にいるのは、間違いなくいつものガーネでした。
だったら、もう何も考える必要はない。トラはそう思いました。
「じゃあ、そろそろ行きましょうか。トラ。」
「ええ、行きましょう。ガーネ。」

ガーネとトラは、再び、果てしなく続いている迷宮の道を歩き始めました。

第5話「海底都市」終わりなの。（終）

第５話「海底都市」終わりなの。（後書き）

今回のお話は、第５話「海底都市」の最終話です。
前回後書きで述べた通り、本編は最初の８行で、終わっています。
後は、エピソードと言っていいと思います。
まぁ、暇があれば、エピソード部分ものぞいて見てくださいね。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第６話「残留思念」始まりみたい。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第６話「残留思念」始まりみたい。のお話です。
この回では、ガーネとトラが雨の降る中、わらぶき屋根の家で雨宿りをします。

第6話「残留思念」始まりみたい。

第6話「残留思念」始まりみたい。

ガーネは、迷宮の道を、ひたすら歩いていました。
どのくらいの時間を歩いたのか、この迷宮の中では全く判りません。
疲れることが全く無いとはいえ、いつまでも歩いているだけなのはこたえます。
話し相手のトラも今はいません。
ガーネの右ポケットで、おネムの状態でした。
もちろん、疲れたとか気分が悪いのでは無く、ただ飽きたからでした。

「猫は1日のうち、2／3は眠ると言いますからね。
これが、普通なのかもしれませんね。
普段は私に気を使って、起きてくれているのかもしれません。
だとしたら、非常に申し訳無いです。
迷宮のドアの向こうでは、私は普通の人と同じ感覚に戻っていました。
トラも、同じ筈です。
にもかかわらず、トラはいつも私と同じくらいの睡眠時間でしたね。
無理をさせ過ぎているのかも知れません。」

ガーネは、とりとめの無い事を考えて、気を紛らわせていました。
それから、どのくらいの時間が経ったでしょうか。
トラが目を覚まして、ポケットから顔を出しました。まだ寝ぼけ眼です。
前足で目を擦りながら、トラは言いました。

「お早う。ガーネ。」
「はい。お早うございます。トラ。」

ガーネは、両手の手のひらを上にして指の部分を重ねました。

そして、ポケットに近づけました。
トラは、ポケットから這い出て、手のひらに乗りました。
ガーネは、しゃがんでトラを路上に下ろしました。
トラは足を伸ばした後、首を回したり、欠伸をしたりしました。
毛づくろいを始めました。自分の体を丁寧に舐めていました。
こういう猫のしぐさは、可愛いものです。
ガーネは、ゆっくり眺めて楽しみました。
こうして過ごす時間だけが、この迷宮で歩くガーネには、唯一の心の慰めでした。
やがて毛づくろいも終わると、トラはガーネに話しかけました。
「ガーネ。まだ迷宮のドアは現れないの?」
「はい、残念ながら。この状態っていつまで続くんでしょうね。」
「あたしに聞かれても、答えようが無いわ。」
ガーネは、自分の右肩に乗ったトラと一緒に、再び歩き出しました。

ようやく、迷宮のドアがガーネたちの進む先に現れました。
ガーネとトラは、心を弾ませながら、急いでそのドアへ走りました。
迷宮のドアにたどりついたガーネは、そのドアを勢いよく開きました。
「ザーザー、ガガーンガガーン。」
ドアの向こうは、土砂降りの雨でした。雷鳴もとどろいていました。
ガーネは、トラの方を向きました。期待のまなざしを浮かべてトラに尋ねました。
「トラ。大きい傘とか長靴あります?」
「あるわけないでしょ。」トラは、そっ気ない返事をしました。
「そんな。実はトラは魔法の猫でした。なんてオチにはなりませんか?」
ガーネは何とか期待をつなごうと、あがいていました。
「残念ながら、無いわね。」
トラは、荒れ狂う天気に思わず、ガーネの胸に飛び込みました。

ガーネもしっかりトラを抱いて、その天気を眺めていました。
やがて、ガーネとトラはお互いの顔を見て、うなずき合いました。
「これは、駄目でしょう。」「そうね。駄目だわ。」
ガーネは、初めてドアの向こうに行く事無く、迷宮のドアを閉めました。
迷宮のドアは消えてしまいました。
「まぁ、今回は仕方が無いですよ。」「ええ、もちろんだわ。」
ガーネとトラは、再び歩き出しました。

幾らも歩かないうちに、ガーネとトラの進む先に、迷宮のドアが現れました。
喜んでガーネたちは、ドアに駆け寄り、開きました。
「ザーザーザー、ガガーンガガーン。」
さきほどと全く同じでした。迷わずガーネはドアを閉めました。
ガーネとトラは、再び歩き出しました。
幾らも歩かないうちに、ガーネとトラの進む先に、迷宮のドアが現れました。
今度こそはとガーネたちは、ドアに駆け寄り、開きました。
「ザーザーザー、ガガーンガガーン。」
「ええい、しつこいですね。」「本当よ。」
ガーネはドアを閉めました。そして歩き出しました。
そんな事が、繰り返されました。
そして１０回目、かすかな期待を胸に、ガーネはドアを開けました。
「ザーザーザー、ガガーンガガーン。」
ガーネは、ドアに手をかけたまま、その場で膝をつきました。
「駄目です。どこまでもこの世界は、私たちについて来ます。」
「本当に。まるでいつもの逆ね。迷宮のドアがあたしたちを追っかけてくるわ。
というより、先回りして待っているの。」
「つまり、この世界をクリアしない限り、先には薦めないという暗

示ですね。
ロールプレイングゲームのようですね。
ひょっとしたら、この世界は誰かの意思で造られた世界なのかもしれません。
そして私たちは、その人の手のひらで踊っているだけなんですよ。」
「そうかも知れないわね。じゃあ、どうするの？」
「ここがどういう所なのか、私には今も判りません。
でも、未来に向って歩き出さない限り、問題は何も解決しません。
行きたくは無い。行きたくはありませんが、行くしか無いのでしょうね。」
そう言ったガーネの顔は、苦渋に満ちていました。
「そうね。それしかないわね。」トラも、観念しました。
「トラ。あなたは、念のために私のポケットに入っていてください。」
「いいわよ。」
トラは、さっきまで眠っていた右ポケットに戻りました。
ガーネは腰を上げて、勇気を振り絞りました。
「行きますよ。トラ。」
ガーネは、ドアの向こうへ、走り出しました。

「ザーザー、ガガーンガガーン。」
激しい雨が、ガーネに降り注ぎました。
走っていたガーネは、近くにサトイモのような大きい葉っぱを見つけました。
ガーネは、それを引っこ抜き、傘代わりにして走り出しました。
しばらく走っていると、前方にわらぶき屋根のがっしりした家が見えてきました。
「やった。これで雨宿りが出来るかもしれません。」
屋根の軒下にたどり着きました。
「ハァ、ハァ、ハァ。」息も絶え絶えでした。

ガーネは、息が苦しくて、もう駄目かもと思いました。
それでも、時間が経つにつれて、呼吸も楽になってきました。
「どうやら、雨で死ぬ事はなさそうですね。」
わらぶき屋根の戸をたたきました。
「すみません。すみません。」ガーネは大きい声を上げました。
しばらくすると、鍵があいて戸が開く音がしました。「ガラガラガラ。」
そこには、着物を着た幼くてあどけない少女が、現れました。
「どちら様ですか。」その少女は、たどたどしい言葉で話をしました。
「突然、お邪魔してすみません。
雨で濡れて死にそうなんです。助けてください。」
ガーネは、心の叫びを切実に語りました。
その少女は、疑わしそうにガーネの方を向いていました。
今にも、閉めてしまいそうな感じでした。
その時、ガーネの右ポケットから、天使、いや猫が現れました。
「ガーネ。それじゃあ駄目よ。」トラが現れました。
「可愛い。」少女が、目を輝かしました。
「私たち、突然の雨に会って大変なの。お願いだから助けて。」
トラは、哀願するように言いました。少女は、びっくりしていました。
そして、ガーネの方を向きました。「この子、話せるの?」少女は、尋ねました。
ガーネは、うなずきました。
少女は、平静に対応している風でしたが、嬉しさが隠し切れていませんでした。
「どうぞ。」少女は、二人を家へ招き入れました。
ガーネはトラを伴い、恐る恐る家の中に入りました。
「こんにちわ。失礼します。」ガーネは小さい声を出しながら、中に入りました。

玄関から、その家のほとんどが見渡せました。
どの場所にも、太い木材が使われていました。
床は、畳と木の両方でした。
家の真ん中に、囲炉裏がありました。
掘りごたつのように、足を下ろせる深い囲炉裏でした。
薪には火が付いて暖かそうでした。
天井から自在鉤（じざいかぎ）が吊るされていました。
それには鉄瓶が備えられており、湯気が立っていました。
「ハックシュン。」ガーネはくしゃみをしました。
ガーネはずぶ濡れでした。トラもだいぶ濡れていました。
「使ってもいいタオルはありませんか。
あと何か着替える物は、無いでしょうか。」

ガーネとトラは、囲炉裏に座っていました。
共に、少女から借りたバスタオルを巻いていました。
ガーネの濡れた衣服は、囲炉裏の近くにロープを張ってそこで乾かしました。
ガーネはぶるぶる震えていました。
少女は、お茶を多少ぎこちない手つきで、ガーネに差しだしました。
「どうぞ。」
ガーネは、震える手でそれを受け取り、飲みました。人心地がつく思いでした。
少女は、小皿に温めのお茶を注いで、トラの前に置きました。
トラも舐め始めました。
次第に、ガーネもトラも体が暖まって来ました。
「どうも、有難うございました。」ガーネは少女にお礼を言いました。
少女もガーネに頭を下げました。
「ええと、出来ればお名前を教えて下さいますか。」ガーネは言いました。

「ナミコ。」その少女は、自分の名前を言いました。
「今日はナミコさん以外に、家にいる人はいないんですか？」
「おじいちゃんとおばあちゃん。」「えっ、いるんですか？」
ナミコちゃんは、うなずきました。
「早く御挨拶しないといけませんね。」ガーネは立ちあがりました。
ナミコちゃんは、顔を赤らめて思わず目を閉じました。
そして、ガーネにこう言いました。「そのままだと、駄目だと思う。」
トラも目をそむけながら、ガーネに注意しました。
「ガーネ。バスタオルが取れているわ。」
ガーネは自分の体が、素っ裸である事に気が付きました。
「しまった。忘れていました。」
急いでバスタオルを体に巻きつけました。そして言いました。
「見ました？」
ナミコちゃんとトラは、共に顔を赤らめたまま、こくりとうなずきました。
ガーネの顔が、見る見る間に赤く染まって行きました。

とりあえず、衣服が乾くまでは、挨拶は延期する事にしました。
ガーネは、ナミコちゃんに尋ねました。
「お母さんは？」「採れた野菜を売りに、市場へ行った。」
「お父さんは？」「お母さんが、死んだって言ってた。」
「それはそれは・・・。つまらない事を聞いて済みませんでした。
ナミコさんを傷つけたのなら、この通りお詫びします。」
ガーネはそう言って、目をつぶった顔の前に、両手の平をくっつけました。
「別にいい。終わった事だから」ナミコさんはそう言いました。

ナミコちゃんは奥の部屋に入りました。そしてトランプを持って来ました。

それをガーネに差し出しました。
「遊びたいのですか?」ガーネが尋ねました。
ナミコちゃんは、うなずきました。
「じゃあ、トランプしましょうね。何がいいでしょうか。出来れば、トラも遊べる方がいいですね。」
ガーネは思案しました。
「そうだ。神経衰弱をやりませんか?」
「神経衰弱って何?」トラが聞きました。
「トランプを裏返しにして、ばらまくんですよ。2枚ずつトランプを引きます。引いたカードに書いてある数字を見比べます。
同じならその2枚を手元に置いて、もう一度同じ事をする事が出来ます。
違うなら元の状態に戻します。
これを決められた順番に一人ずつ行います。
ばらまいたカードが全て無くなった時、手元にあるトランプが多い人が勝ちです。
判りましたか?」
トラとナミコさんは、うなずきました。
「では、ゲームを始めますよ。」
ガーネはトランプを切った後、畳の上にばらまきました。
「では、誰から引きます?」
ナミコちゃんが照れたように、手をあげました。
「じゃあ、ナミコさんから、こう右回りでやりますね。いいですか?」
ナミコちゃんもトラもうなずきました。
ガーネは、ナミコちゃんに始めるように促しました。
ナミコちゃんはうなずくと、トランプを引きました。
2つのトランプの数字は違っていました。
「ああ、残念ですね。」ガーネはそう言いました。

ナミコちゃんは、トランプを元に戻しました。
次はトラの番でした。ガーネは言いました。
「トラは、トランプをめくれませんね。
だから前足で、どのトランプを引きたいか指示してください。
私が代わりに引いてあげますよ。」
トラは、うなずきました。
トラが前足で指示したトランプ2枚を、ガーネがめくりました。
また、数字が違いました。
今度はガーネの番でした。2枚のトランプを引きました。
すると、その2枚に書かれてある数字は同じものでした。
「やりましたよ。」ガーネは素直に喜びました。
「ウーッ。」明らかにナミコちゃんとトラは不満そうでした。
ガーネはもう1度、トランプを引きました。今度は数字が違いました。
「ああ、残念です。」ガーネはがっかりしました。
それを見てナミコちゃんとトラは、何故か嬉しそうでした。
その後も、ゲームは続けられました。
結局、ガーネが勝ったのは最初だけでした。
それ以後は、ナミコちゃんやトラが半々ぐらいで勝ちました。
所詮、子供の遊びですよね。ガーネはそう思って自分を慰めました。

部屋の中は、とても暖かでした。
そのせいか、ジャケットとパンツ以外は乾いていました。
ガーネは、ナミコちゃんやトラに向こうを向いてもらい、着こみました。
下半身が、トランクス1枚なのはどうかと思い、バスタオルを巻きました。
「お馬乗りしたい。」ナミコちゃんが、とんでも無い事を言い出しました。
「いや、ナミコちゃん。この格好でお馬さんになるのは、まずいで

すよ。
パンツが乾くまで、待ってもらえません？」
ナミコちゃんは、首を横に振りました。
「あの、どうしても駄目ですか？」ガーネは繰り返し尋ねました。
ナミコちゃんは、こくりとうなずきました。
ガーネは雨宿りを許してくれた、ナミコちゃんの願いを無視出来ませんでした。
ガーネは、よつんばいになりました。
そしてナミコちゃんを背に乗せて、歩き出しました。
トラも、ナミコちゃんの後ろに飛び乗りました。
ガーネは2階は勘弁してもらい、1階中をくまなく歩きました。
ナミコちゃんとトラは、バランスを取りながら気持ちよさそうでした。

部屋の時計が、午後5時の鐘を鳴らしました。
「お母さんが帰ってくる。」ガーネの馬から降りた、ナミコちゃんが言いました。
「そうなんですか？」まだ乗っているトラに構わず、立ち上がりました。
トラはクルクル回って、壁にあたりました。
トラはガーネに抗議をしました。ですが冷たい目でにらみ返されました。
「怒ってたの？」トラは、低姿勢になりました。
それから幾らも経たないうちに、ナミコちゃんのお母さんが帰って来ました。
「お母さん。お帰りなさい。」ナミコちゃんが、急いで出迎えました。
「ただいま、留守番有難うね。」
お母さんは、ナミコちゃんにそう言いました。
それから、ガーネとトラを見ました。

「この人たちは、どなたなの？」お母さんはナミコちゃんに尋ねました。
「雨宿りに、家まで来た。」
「そうだったの。それでナミコちゃんが助けてあげたのね。」
ナミコちゃんは、うなずきました。
お母さんは、バスタオルを巻いているガーネを見て、納得したようでした。
「すみません。お世話になっています。」ガーネがお母さんにそう言いました。
お母さんは、お辞儀をしただけで、特に何も言いませんでした。
「ナミコちゃん。お腹が空いたでしょ。すぐにご飯を作ってあげるからね。」
お母さんは、エプロンをして、台所に向かいました。
それを見送っていたガーネは、ナミコちゃんに尋ねました。
「ひょっとして、あなたのお母さん。怒っているんじゃないですか？」
「大丈夫だと思う。」

「手伝って。」ナミコちゃんは、ガーネに言いました。
居間にテーブルを置いたり、お母さんの作った料理をを並べるのを手伝いました。
おじいさんとおばあさんも、離れからやって来ました。
「すみません。お世話になっています。」ガーネは挨拶をしました。
二人は、ガーネにお辞儀をしましたが、特に何も言いませんでした。
夕食の準備が整い、みんなが席に着きました。
ナミコちゃんは、ガーネの裾を引っ張りました。
「トラと一緒に座って。」ナミコちゃんは、自分の隣に誘いました。
ナミコちゃんの隣に、トラ、ガーネの順で並んで座りました。
夕食は、温かい鍋物でした。
ガーネは、家族と一緒に鍋をつついて食べていました。

トラの前には、小皿を用意してもらいました。
その中に、鍋の具と御汁を入れました。
ふぅふぅしながら冷ました後、トラに食べてもらいました。
トラも、その味には、すごく満足したようでした。
ナミコちゃんは、あまり感情を表に出さないような子供でした。
でもこの時ばかりは、そんなトラを見て嬉しそうにしていました。
トラの小皿が空になると、今度はナミコちゃんが進んで御給仕をしてくれました。
いつの間にか、トラとナミコちゃんは、すごく仲が良くなっていました。

食事が終わると、ガーネは、ナミコちゃんと後片付けをしました。
その後ナミコちゃんは、ガーネとトラを2階に案内しました。
その1つの部屋を開けて、ナミコちゃんは言いました。
「ここに泊まって。」
「えっ、お泊まりしていいんですか?」ガーネは尋ねました。
ナミコちゃんは、うなずきました。
ガーネとトラは、ナミコちゃんにお礼を言いました。
部屋を出た時、お母さんが上って来ました。
「お母さん。この人たち、ここに泊まってもらう。」
お母さんは、微笑みながらナミコちゃんに言いました。
「ええ、あなたがそれでいいなら、構わないわよ。」
ガーネとトラは、お母さんにお礼を言いました。
お母さんは、ガーネたちにお辞儀をすると、2階の奥の方に向かいました。
「この部屋の隣が私。その次がお母さんの部屋。」
ナミコちゃんは、そう説明してくれました。

ガーネとトラ、そしてナミコちゃんは、再び1階に戻って来ました。
「何かして遊びたい。」ナミコちゃんは、そう言いました。

ガーネは、もう夜だし体力が必要な物は避けようと思いました。
出来れば、トラも混ぜてやれる遊びがいいなと思案しました。
「鬼ごっご。」ナミコちゃんが、またとんでも無い発言をしました。
ハードです。今の時間からそれをやるのは、ハード過ぎます。
下手すると明日後遺症が出て、１日歩けないかもしれません。
非常に危険な行為です。絶対に避けなければなりませんでした。
「いやあ、ナミコちゃん。確かにこの家は広いですよ。
でも、走り回るのは危ないです。
誤って体をぶつけたり、ひっくり返ったりして怪我をするかもしれません。
室内では止めましょう。それに家の人の迷惑にもなりますしね。」
「大丈夫。」ナミコちゃんは、この一言でガーネの言う事を退けました。
これはいけません。ガーネは死に物狂いで、考えました。
「そ、そうでした。
トラは、もうじき、おネムの時間なのですよ。
猫っていうのは、かなりの睡眠時間が必要な動物なんです。
もう、今日は休ませる必要があるんです。
大変残念ですが、遊ぶのは明日と言う事にしてもらえませんか？」
ガーネは、何か言おうとしたトラに、目配せをしました。
口元に人差し指を立てて、シーッのポーズを取りました。
それから、ナミコちゃんを見ました。
明らかに、不満そうです。ほっぺが大きく膨れていました。
ガーネは膝をついて、ナミコちゃんの肩にそっと手をやりました。
「ナミコさん。私ほどではありませんが、トラも雨で少し濡れたのですよ。
今日は大事をとって、休ませてあげてくれませんか？」
ガーネは諭すように、ナミコちゃんに言いました。
これには、ナミコちゃんも我を通す事が出来ず、しぶしぶうなずきました。

「やりました。」心の中で、ガーネは思わず喝采をあげました。
自分を褒めてあげたいと思いました。
善は急げです。
ナミコちゃんの気の変わらないうちに、自分たちの部屋へと行きました。

ガーネとトラは、自分たちの部屋に入りました。
「畳みの部屋ですか。なかなかいいですね。」
部屋の灯りをつけながら、賛嘆していました。
ガーネは布団を敷き始めました。
「本当に、もう寝るの?」「実は、少し悪寒を感じるんですよ。」
「どれどれ。」うつぶせになっているガーネのおでこに前足をあてました。
「そうね。確かに少し熱いかもかも知れないわ。」
「判るんですか?」「まさか。ただやってみたかったの。」
「そうですか。」ガーネはガクッとしました。
ガーネとトラは、それぞれの布団に入りました。
「きっと、雨に打たれたせいね。
あとパンツを履いていないのも、原因じゃない?
今、下半身はトランクスとバスタオルだけだしね。」
「そうかも知れません。家の中は暖かいんですけどね。」
ガーネは、布団がちゃんと肩を覆うようにかけました。

「ねぇ、ガーネ。」「何です。」
「今日の夕ご飯、みんなで食べたわよね。」「そうですね。」
「あたしたちの向かい側に、ナミコちゃんと私たち以外の家族が並んだわよね。」
「おじいさんとおばあさん、そしてお母さんでしたよね。」
「ガーネは、何か気が付いた?」
「別に何も変わった事はありませんでしたよ。

家族団らんで、楽しく食べていたじゃないですか。」
「確かに、あたしたちを除いては、普通の家族の食事風景だったわね。
でも何なのかしら。あたしにはすごく違和感を感じたのよ。」
「どんな風にでしょうか？」
「何て言ったらいいのか、うまく言えないんだけどね。
あたしたちの向かい側に座っている人たちに、命の鼓動が感じられなかったの。」
「それは、どういう事でしょう？」
ガーネは布団を少しずらして、トラに尋ねました。
「話したり、食べたりしているのは、あたしも見ていたわ。
でも、それが映像のようにしか感じられなかったの。
人が持つ存在感とか温もりとか、そういうものが全く感じられなかったの。
あたしが、それを感じる事が出来たのは、ガーネとナミコちゃんだけだったの。
あっ、もちろんあたし自身もそうよ。」
「つまり私たちが、見ていたのはまぼろしだったと言うんですか？
でも、あのお鍋には、大きいジャガイモが入っていたんですよ。」
「それがどうしたの？」
「実は、そのジャガイモに目を付けていたんですよ。
そうしたら、おじいさんにそれを奪われてしまいました。
その後お鍋には当然の事ながら、そのジャガイモは無くなっていました。
おじいさんは口の中でホクホクしていましたよ。湯気も立っていましたね。
あれが全部まぼろしなんて、信じられませんよ。
現にあのお鍋の具やお汁は、私も食べましたよ。
トラだって、小皿に分けた物を食べて美味しいと言ってたじゃないですか。」

「確かにそうね。あれは美味しかったし、本物だったわね。」
「トラも少し、疲れているんじゃないですか。
まぁ、確かにあの人たちはナミコさん以上に、愛想がありませんでした。
話しかけても、いつもお辞儀をするだけでしたしね。
でも、だからと言ってまぼろしと言うのは、無理があるんじゃないでしょうか。
さぁ、お喋りはこれくらいにして、少し眠りましょうよ。」
ガーネは欠伸して目をつぶりました。そしていつの間にか眠ってしまいました。
トラは、寝息を立てているガーネをしばらく眺めていました。
そのうち、トラも眠気に誘われました。
「そうね。眠りましょう。」トラも眠りにつきました。

それから、どれくらい経ったでしょうか。
ガーネたちの部屋の戸をたたく音に、ガーネとトラは目を覚ましました。
「はーい。」ガーネは半分寝ぼけたまま、声をあげました。
戸が開きました。部屋の中に入ってきたのはナミコちゃんでした。
「あの。どうしたんですか?」ガーネは尋ねました。
「お風呂が沸いたの。入る?」ナミコちゃんは、答えました。
ガーネとトラは、顔を見合わせました。
「ガーネ。どうする?」
「悪寒もあまり感じなくなりましたよ。
一風呂浴びてから、眠った方が気持ちいいかもしれません。」
「じゃあ、そうしましょう。」
ガーネとトラは、ナミコちゃんにお風呂に入る事を告げました。
ですが、ナミコちゃんはもじもじしていました。
「どうしたんですか、ナミコさん。」
しばらくして、ナミコさんは、やっと答えました。

「わたし、トラちゃんと入りたい。」
それを聞いたガーネは、トラの顔を見た後、ナミコちゃんに言いました。
「それじゃあ、先にナミコちゃんとトラが入ってくるといいですよ。上がったら、私も入る事にします。」
ナミコちゃんは、喜んでいました。
トラを両手に抱えて、部屋を出て行きました。
その後、しばらくしてトラがお風呂から上がって、帰ってきました。
「じゃあ、今度は私が行きますか。」
「拭くタオルは、お風呂場に置いておいたわよ。」
「それは有り難いですね。」
ガーネは部屋を出て行きました。

ガーネがお風呂から上がって、部屋に戻って気ました。
部屋には、ナミコちゃんもいました。
お外から取ってきたのでしょう。猫じゃらしを持っていました。
それをトラの目の前で動かしていました。
トラはその先端を、前足で攻撃をかけていました。
ガーネも面白そうなので、自分の使っている布団の上から眺めていました。

そんな事をしているうちに、夜も更けてきました。
ナミコちゃんは部屋を出て行きました。
ガーネは部屋の灯りを消しました。
どちらからともなく「お休みなさい。」と声をかけ、そのまま眠ろうとしました。
また部屋の戸をたたく音が聞こえました。
「はーい。」ガーネは、声をあげました。
部屋の灯りをつけました。
部屋の中に入ってきたのは、やっぱりナミコちゃんでした。

ナミコちゃんは、寝巻き姿で、手には枕を持っていました。
「あの。どうしたんですか?」ガーネは尋ねました。
「トラちゃんと眠りたい。」ナミコちゃんは、ガーネにそう言いました。
「別に構いませんよ。
ただ、さみしいなら、お母さんの所で眠った方がいいんじゃないでしょうか?」
ナミコちゃんは、黙って首を横に振っていました。
ガーネはため息を1つつきました。それからこう言いました。
「じゃあ、トラ。ナミコさんのお部屋で、一緒に寝てくれませんか?」
「いいわよ。」トラはうなずきました。
ナミコちゃんは喜んで、自分の部屋へトラを抱いて連れて行きました。
「これで、やっと、ゆっくり眠れそうです。」
ガーネは、部屋の灯りを消しました。
ガーネの部屋には、雨の降る音と真っ暗な空間が広がっていました。

第6話「残留思念」始まりみたい。(終)

第６話「残留思念」始まりみたい。（後書き）

今回のお話は、第６話「残留思念」の第１話です。
さて、この先がどうなるのか、筆者にも判りません。
何とか最後まで、お話が出来ればいいと思っています。
いつも、第１話目を書く時点では、ラストが不確定です。
最初考えていた事と、違う結果になる事もあります。
まぁ、それはそれで楽しい部分もあります。
「この小説家になろう」では過去の文章の修正も簡単です。
いざとなれば、全部を書き換える事だって出来ます。
過去に書いた事とのつじつま合わせに悩む事がありません。
苦しくなったら、いつでも書き換えたいと思います。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第6話「残留思念」ふたつめかしら。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第6話「残留思念」ふたつめかしら。のお話です。
この回では、ガーネとトラが、ナミコちゃんと遊びます。

第6話「残留思念」ふたつめかしら。

第6話「残留思念」ふたつめかしら。

ガーネは、目を覚ましました。
あまりの息苦しさを感じたからでした。呼吸が思うように出来ません。
ふと気が付いて見ると、何かが顔に張り付いていました。
ガーネは窒息死する前に、それをはがしました。
「お早う、ガーネ。」張り付いていたのは、トラでした。
トラを下に置いた後、ゴホッ、ゴホッとガーネはむせかえりました。
しばらくして息が整える事が出来たので、深呼吸をしてみました。
室内でしたが、苦労して吸う事が出来た、空気の味は格別でした。
「空気って美味しいんだな。」ガーネはしみじみ思いました。
ガーネはトラに朝の挨拶をしました。
「お早うございます。トラさん。相変わらずお元気で何よりです。」
ガーネはトラににこやかに微笑みながら、話を続けました。
「でもね、あなたに気が付くのがもう少し遅かったら、大変でしたよ。
今頃、私は迷宮ではなく、冥界に旅立っていたかもしれません。
トラさん。人間っていうのは、こう見えてデリケートな生き物なんですよ。
この鼻と口を同時に塞がれると、息が出来なくなってしまうんです。
つまり、死という現象が真直に迫ってくるわけです。
そんなわけですから、トラさんにはもっと人に優しい接し方をお願いします。」
そうお願いした後、あらためてガーネはトラに、尋ねてみました。
「で、一体、どうしたって言うんですか?」
「だって、いくら前足でたたいても起きないんですもの。

仕方が無いから太の字になって、顔にしがみ付いていたの。」
「太の字？大の字でしょう。」
「あたし、猫だから尻尾があるのよ。」
「それだったら木の字では？あっそうか、トラさんの尻尾は短いんでしたね。
なるほど、それで判りましたよ。」
ガーネは納得しました。
「そんな事より、もう朝ごはんがとっくに出来ているわ。
みんな、あなたを待っているのよ。早く降りて来なさいね。」
トラは、そう言って出て行きました。
「えーと、そんなに遅くまで寝ていたんでしょうか。
とりあえず、これ以上みんなを待たせておくわけにはいきませんね。
朝食を食べに早く降りましょう。」
念のため、時刻を見てみました。まだ、朝の7時前でした。
早すぎると思いましたが、田舎だからしようが無いのかも、と思いました。
ガーネは急いで、1階に降りて行きました。
トラの言う通り、全員揃っていました。
「お早うございます。どうも、遅れて申し訳ありませんでした。」
ガーネは集まっている人たちに謝りました。
ナミコちゃんが、ガーネに言いました。
「そこに座って。」
ガーネはうなずきました。そして昨夜と同じ場所に腰を据えました。
食事が始まりました。それも昨夜と変わらない食事風景でした。
食事の後片付けを一緒にやった後、ナミコちゃんが歯ブラシを持って来ました。
「はい、これ。」
実は昨日、ガーネは、ナミコちゃんに相談をしていました。
余っている歯ブラシがあったら欲しいと訴えたのでした。
歯ブラシを受け取ったガーネは、ナミコちゃんにお礼を言いました。

早速、洗面所で歯を磨きました。
ガーネは、昨日は磨く事が出来なかったので、とても嬉しい様子でした。

「フン、フフンフン。」ガーネは浮かれていました。
今朝になって、やっとジャケットとパンツが乾いたのでした。
誰も見ていないうちに、着込む事にしました。
今まで、腰に巻いていたバスタオルを取って、乾いたパンツに履き換えました。
パンツの色はダークグリーンでしたが、パステルカラーでした。
それが昨日の雨で、ただのダークグリーンになっていました。
４つポケット付きのジャケットも、羽織りました。
これも、雨で白さが暗い色になっていました。
ですが、今では本来の白さに戻っていました。
ガーネは、いつもの姿に戻ったのでとても満足でした。
鳥のさえずりが、聞こえました。ガーネは窓から、外を眺めました。
いい天気でした。雲が多少あるくらいでした。
さて、気晴らしに散歩でもしようかしらん、と思っていました。
そんなガーネの元へ、いつものように愛想の無いナミコちゃんが来ました。
ガーネは身構えました。またとんでも無い事を話すかも知れなかったからです。
そんなガーネの懸念は、的中してしまいました。
ナミコちゃんは一言、「山登りに行こう。」って、のたまっていました。
ガーネは、よっぽど無視しようかと思いました。
「お母さんから、みんなのお弁当も作ってもらった。」
ナミコさんのこの言葉で、ガーネは止めを刺されました。
今回は、拒否する事は出来ませんでした。

山の入り口は自宅から、僅か数分でした。
石の階段が、どこまでも続いていました。
その階段を、ナミコちゃんを先頭にトラ、ガーネの順で歩いて行きました。
石の階段を上りきると、そこからは山道に入る事になります。
石を重ねて作った階段で、人の手がかかっている分、歩きやすい階段でした。
本来なら、話をしながら楽しく歩いて行った方が、いいのかもしれません。
退屈なのか、それとも疲れたのか、時々トラがナミコちゃんの肩に座ります。
すると、ナミコさんは嬉しそうに、トラと話をしていました。
一方、ガーネは帰りの事も考え、なるべく体力温存を図ろうとしました。
そこで迷宮を歩いているがごとく、ただ黙々と歩いて行きました。
ただ、ここは迷宮と違い、歩けば歩くだけ疲れます。
おまけに、昨日の雨でまだ靴は濡れていたので、快適とは決して言えません。
次第に、汗も流れてきました。

山道を歩き続けると、その多様性に驚くかもしれません。
上り道もあれば、下り道もあります。
広い道もあれば、細い道もあります。
石畳のような所もあれは、土を踏み固めただけのような場所もあります。
なだらかで上りやすい斜面や階段もあれば、急な場所もあります。
地面に落ち葉がいっぱいに広がって、歩きやすかったり滑りやすかったりします。
ごつごつした石が、あちらこちらに埋まっていたり、散乱していたりもします。

そんな山道を、ガーネたちは歩いて行きました。
途中で、１０分ほどの休憩を2回とりました。
ナミコちゃんが、水筒のお茶をコップに注いで、ガーネに渡しました。
ガーネは、そのお茶を、ごくごくと飲みました。
それは、ナミコちゃんの自宅で飲む、いつものお茶の筈でした。
ですがガーネは、今まで飲んだ事の無いような美味しさだと感じていました。

山の頂上付近まで来ると、さすがに風は涼しいです。
「あと、もう一息だから。」ナミコちゃんの言葉に勇気づけられ、歩きました。
そして、山の入り口から歩いて約2時間後、ついに山の上に到達しました。
ガーネがそこに着くと、ナミコちゃんはガーネの手を取って迎えてくれました。
実はガーネが登頂に四苦八苦している最中、ナミコちゃんに声をかけられました。
「私、先に行ってる。ここからは、一本道だから大丈夫。」
ナミコちゃんは、そう言って先に進んで行きました。
目的地に到着したナミコちゃんは、その山の大きい木の根元を陣取っていました。
キャンピングシートを敷き、食事の用意をして到着を待っていてくれてたのです。
ガーネは、汗まみれでした。とめどもなく汗が顔や体中からあふれていました。
ナミコちゃんが差し出したタオルで、汗を拭いました。
少し時間が経つと、荒れた息づかいもおだやかになり、汗もおさまりました。
ガーネは山の頂上に吹いている風に、心地よさを感じました。

「食事にする。」ナミコちゃんは、そう言いました。

2人と1匹は、お母さんが作ってくれた昼食を食べました。
ガーネとナミコちゃんは、おにぎりを口いっぱいに頬張りました。
トラには小さく分けて、食べやすくしてあげました。
一緒に持ってきたおかずも、とても美味しい味でした。
「ナミコさんのお母さんの料理は、美味しいですね。」
ガーネとトラは、口々に褒めたたえました。
「うん。」ナミコちゃんは恥ずかしそうに、けれども嬉しそうに答えました。
水筒のお茶をみんなで分け合いながら、楽しい食事の時を過ごしました。

食事が終わり、後片付けをしました。
この山の頂上では、簡易トイレや手洗い場がありました。
屋根つきの休憩所もありました。
木のベンチは、バランス良く、6脚ほど並べられていました。
ガーネは、用足しを済ませた後で、木のベンチの1つに腰をかけました。
「帰るまで、ここで休憩しましょう。」ガーネはそのまま寝転ぼうとしました。
その時、ナミコちゃんが近寄って来て、ガーネにこう言いました。
「鬼ごっこ。」ガーネは、背筋が凍るような思いでした。
助けを求めるように、トラの方を向きました。
でもトラは、ガーネに同情するような目つきで、ただ首を横に振るばかりでした。
はめられたと思いました。でも、どうする事も出来ません。
ガーネは、鬼ごっこに挑戦する事にしました。

「じゃんけんぽん。」「あいこでしょ。」

鬼は、ガーネに決まりました。
「１０数えますよ。１、２、・・・１０」
ガーネは走り出しました。もちろんターゲットは、ナミコちゃんです。
この勝負では、逃げる場所を山頂の一角にし、高さも制限しました。
そうしないと、この辺の地理に詳しいナミコちゃんが圧倒的に有利だからです。
又、トラも高いところに上ってしまうので、手が届きません。
それでは、あまりにも不公平だと、ガーネがだだをこねました。
又、山の中では、自分たちは迷子になる可能性もある事を強調しました。
この結果、この申し出が聞き届けられ、この制約が認められました。
この制約のおかげで、数分後にナミコちゃんにタッチする事が出来ました。
次は、ナミコちゃんが鬼です。ガーネから見れば鬼が鬼になったのでした。
ガーネは、必死で逃げ回りました。
もう大人気ないなどの評価は気にしていられません。本気で逃げました。
トラは必死じゃなくても、走る速さと瞬発力は誰よりも上です。
ナミコちゃんはしばらくの間、誰ともタッチする事が出来ませんでした。
「これで終わりですね。」ガーネはそう期待しました。
ですが、その期待は裏切られました。
「負けない。」
ナミコちゃんの恐るべき持久力が、ガーネやトラを追い詰めたのです。
トラは、確かに人並み以上の優れた運動能力があります。
でも、その持久力は、子猫相当の低いものでした。
しかも、今回は逃げる場所が限られていました。

結局、あっけなくトラは、ナミコちゃんにタッチされてしまいました。
一方、ガーネはもうここに来るまでに疲れていました。
体を休めたいと思っているところへ、この鬼ごっこです。
持久力で対決されたら、ひとたまりもありません。戦線恐々としていました。
次の鬼は、トラでした。
トラは、明らかにガーネの方を向いていました。
「スピードで一気に片を付けるつもりですね。」ガーネは察しました。
トラは、数を数え終わり、ガーネ向かって1直線に走り出しました。
ガーネも一生懸命逃げましたが、結局あっさりとタッチされてしまいました。

鬼ごっこは、鬼を交代しながら、この後もずっと繰り返されました。
ガーネ、トラ、ナミコ。
彼らの異なる運動能力と持久力のバランスの元に、鬼ごっこは続けられました。
時が流れ、やがて鬼ごっこは終わりを告げました。
2人と1匹の戦士が力尽きて倒れている山頂には、涼しい風が吹いていました。

ガーネは木のベンチに、腰を下ろしました。
「いいー天気だなー。」
目の前のベンチで、トラが小さい黒い虫に、前足でちょっかいを出していました。
すると、その黒い虫が、飛んでトラの顔にぶつかりました。
急な出来事に、トラはバランスを崩して、地面に落ちてしまいました。
それを隣に座って楽しんで見ている、ナミコちゃんの姿がありまし

た。
だんだん、眺めている風景がぼけてきました。
ガーネはいつの間にか、眠っていました。

ガーネが目を覚ました時、ナミコちゃんもガーネにもたれて眠っていました。
そして、その膝には、トラも前足を体の下にしまいこんで眠っていました。
ガーネはナミコちゃんの時計を見ました。時刻は既に3時を回っていました。
「そろそろ帰りましょうか。」
ガーネは、ナミコちゃんとトラを起こしました。そして帰路に着きました。
ガーネはナミコちゃんの手を握って歩いていました。
ですが、ナミコちゃんはうつらうつらして、今にも倒れそうでした。
トラが、ガーネに言いました。
「もう、これ以上歩かせるのは無理じゃないの?」
ガーネが恐れていた事が、現実となってしまいました。
ここに来ると決まった瞬間から、こうなるのではないかと危惧していたのでした。
だから、体力を温存しようとしたり、鬼ごっこを回避したかったのです。
でも、それはかないませんでした。
「仕方がありませんね。」
ガーネは、遊び（?）疲れた体にムチ打って、ナミコちゃんを背負いました。
そんなガーネに、トラは追い打ちをかけました。
「ガーネ。あたしも眠たいの。」
欠伸をしながら、トラはガーネに訴えました。
ガーネはため息をつきながら、トラに言いました。

「判りました。トラ、あなたは私の右ポケットで寝て下さい。」
トラは、ガーネのポケットに飛び付くと、よじ登ってポケットの中に入りました。
ガーネは、背中とポケットが重くなったのを感じました。
そして、1人さみしく山を降りて行きました。

途中、湿った落ち葉の上や高い階段を降りる際に、滑って転びそうになりました。
それでも何とか、ぎりぎりで踏ん張りました。
体力的に相当きついものがありました。行きとは違い、何度も休憩しました。
水筒は既に空の状態で、1滴のお茶も飲む事は出来ませんでした。
山頂のお水は飲料用では無いので、補充する事が出来なかったのでした。
楽に座れそうな大きい石を見つける度に、休憩しました。
「何で、こんな事をやっているんでしょう。」ガーネはそう思いました。
そう考えたら、ガーネは急に笑いたくなりました。
眠っている者を起こしてはまずいと思い、小さい声で笑いました。
笑いだすと止まりませんでした。しばらくの間笑い続けました。
笑いが止まり、ふと気が付くと、ガーネは涙を流している事に気が付きました。
涙をぬぐった後、「さぁ行きましょう。」と自分にかけ声をかけました。
ガーネは再び歩きだしました。
ちょっと行っては休み、ちょっと行っては休みを繰り返していました。
陽はどんどん傾いて行きました。でもガーネにはどうする事も出来ません。
諦めずに少しずつ、少しずつ山道を下っていきました。

苦労を重ねた末、ようやく、山の入り口まで戻って来ました。
もう辺りは暗くなりかけていました。
ガーネは、1歩歩くのにも、大変な状態でした。
でも、「もう少し。」と我慢をして歩いていました。
そして、ついに無事にナミコちゃんの家に戻って来ました。
沈みゆく夕日が、最後の鮮やかな色と輝きをガーネに魅せてくれました。
疲れ切った体と心に、その光景は深く染み渡りました。
「こんな日もたまには悪くない。」ガーネはそう思いました。

ナミコちゃんの家の中も、薄暗くなって来ていました。
ガーネは、背中に背負っていたナミコちゃんを下ろしました。
トラもポケットから出して、畳の上に置きました。
家の灯りを付けると、ナミコちゃんとトラは目を覚ましました。
ナミコちゃんは、目を擦りながら「ここはどこ?」とガーネに尋ねました。
「自宅に帰って来たんですよ。」ガーネはナミコちゃんにそう答えました。
ナミコちゃんは、しばらく寝ぼけ眼で辺りをキョロキョロしていました。
やがて、意識もはっきりしてきたらしく、自分の家である事を確認しました。
「ガーネ、有難う。」
ナミコちゃんはにっこり微笑んで、ガーネにそう言いました。
「どういたしまして。」ガーネも微笑んでいました。
「お母さんは、まだ?」
「私が、この家にたどり着いた時にはいませんでしたね。」
二人が、そんな会話をしていると、そのお母さんが戻って来ました。
「ごめんね。ナミコちゃん。すぐお夕飯の支度をするから。」

そう言って、エプロンをした後、すぐにお母さんは、台所に向かいました。
「今日は、お昼美味しかったです。有難うございました。」
ガーネはお母さんに、お礼を言いました。

後は、いつも通りでした。
おじいさんとおばあさんも現れました。
みんなで夕食を食べた後、ガーネたちは、後片付けをしました。
ガーネはトラと、食後の歯磨きをしました。
ナミコちゃんも飛び入りで参加して、歯を磨きました。
みんな、鏡をのぞいて、磨いた歯を確認しました。
電燈の灯りに照らされて、みんなの歯が同時にキラリと光りました。

ガーネは、部屋の中で寝ころびました。
「今日は、本当に疲れました。
多分、明日は体のふしぶしが痛くなっているでしょうね。」
ガーネはぼやいていました。
「でも、ナミコちゃんは喜んでいたじゃないの。行ってよかったと思うわ。」
「誰かさんも、思いっきりはしゃいでいましたね。」
ガーネはトラの方を向いて、そう言いました。
「そ、そう?」トラは思わず目をそらしました。
その後、ガーネもトラも言葉を交わす事も無く、疲れてボーッとしていました。
しばらくして気になる事でもあるのか、トラが声をかけてきました。
「ガーネ。眠っているの?」
「いや、寝転んではいるけど、眠ってはいませんよ。」
「実は、ナミコちゃんの事で、相談があるの。」
「えっ、何でしょうか?」ガーネはトラの方に向き直りました。
「昨夜、ナミコちゃんのお部屋で一緒に寝たのよ。」

「フムフム。そうでしたね。それがどうしたんですか？」
「夜中にふと目が覚めたのよ。そうしたら隣でナミコちゃんがうなされていたの。
それが激しくなったと思ったら急に目を覚まして、起き上がったの。
心配になって「どうしたの？」って聞いたのよ。
少しの間、何故あたしがそこにいるか判らなかったみたい。
でも、すぐに思いだしたみたいで、いきなりあたしに抱きついてきたの。
「怖かった。」そう言って涙ぐんでいたわ。」
「トラがですか？」「茶化さないで。」「すみません。」
「ナミコちゃんの話によると、突然、家が大きく揺らいだんだって。
それでね。お母さんやおじいさん、そしておばあさん。
家族みんなが、自分の所へ駆け寄って来たらしいの。
そうしたら、家を支えている木材が次々と倒れて来たそうよ。
ナミコちゃんは、必死で家族を呼んだんだって。
そうしたら・・・。」
「そうしたら、どうなったんですか？」
「そこで、目を覚ましたらしいの。」
ガーネは腕を組んで、何やら考え事をしていました。
しばらくして、トラに尋ねました。
「それで、ナミコさんは過去にその夢と同じ夢を、見た事があるのでしょうか？」
「あたしが聞いた限りでは、ずーっと前に1回見た事があるだけだって。
それ以後は、今まで見た事は無かったそうなの。」
「フム。私は精神科医では無いので、よくは判らないんですけど。
それほど頻繁に見る夢で無いのなら、そう心配する必要もないと思いますね。
たまたま悪い夢を見たっていうだけなんじゃないでしょうか。
今日は、だいぶ疲れたと思うし、ぐっすり眠れるんじゃないでしょ

うか。」
「そうね。そうだといいわね。」

話が1段落したところで、戸をたたく音が聞こえました。
「はーい。」ガーネは声をあげました。それからトラにこう言いました。
「きっとナミコさんですね。」トラもうなずきました。
戸が開きました。部屋の中に入ってきたのは、やっぱりナミコちゃんでした。
「あの。どうしたんですか?」ガーネは尋ねました。
最初は言うのをためらっているような感じでした。
再度ガーネが、来た理由を尋ねると、意を決したらしくこう言いました。
「何かして遊ぼう。」ガーネとトラは顔を見合わせました。
部屋の時刻を見ました。まだ7時ぐらいです。
「いいですよ。」ガーネは応じました。
「何をやりましょうか。
今日はもう疲れているので、テーブルの上で出来るゲームにしましょうね。」
しばらくガーネは考え込みました。
「そうだコイン飛ばしゲームでもやりましょう。」
「コイン飛ばしゲームって?」
「まぁ、その説明をする前に、用意してもらいたいものがあるんですよ。」
「何を?」
「これくらいの大きさのコインは用意できますか?」
ガーネはナミコちゃんに聞きました。ナミコちゃんはうなずきました。
「それから大きい白紙の用紙ってありますか?」
「カレンダーの裏は使える?」

「大丈夫です。あとはさみとサインペンはありますか？」
ナミコちゃんはうなずきました。
「では、それを持ってきて下さいませんか？」
ナミコちゃんはトラを連れて、部屋を出て行きました。
彼女らが出ている間に、部屋の隅にあったテーブルを中央に運びました。
しばらくして手に荷物を抱えた、ナミコちゃんとトラが戻って来ました。
「これとこれ。」ナミコちゃんは、持って来たものをテーブルの上に並べました。

ガーネはカレンダーの裏紙を、テーブルからはみ出さないサイズに切りました。
そして、その裏紙の白い面に大小幾つかの丸を書き込みました。
そして、その丸の中に数字を書き込みました。
一番手前にある丸に「スタート」と書きました。
「これで準備は完了です。」ガーネはナミコちゃんたちに言いました。
「ルールを説明しますよ。
このスタートに、このコインを載せます。
次に右手の親指と人差し指の指先で、丸を作ってください。
そうしたら、次にその人差し指を使って、コインをはじいてください。
コインが数字のついた丸の中に完全に入れば、その数字が得点になります。
スタートから遠くて小さい丸は、高得点です。
逆に、スタートから近くて大きい丸は、点数が低いです。
入らなければ、０点です。
１人ずつ交代でこのゲームをやります。
１回やる毎に、取得した得点を加算していきます。

１０回やって、その合計がいちばん多い者が優勝です。
判りましたか？」
「はい。」「判ったわ。」ナミコちゃんとトラは、同時に返事をしました。
「トラは前足にコインを載せますので、前足を上げて放り投げてください。
さぁ、少しの間、練習をしましょう。
うまく出来るようになったら、ゲームを始めたいと思います。」
ガーネやナミコちゃん、そして、トラは交互に練習をしました。

トラも含めて、何とかやれそうになったので、ゲームを開始する事にしました。
最初は、ガーネです。スタートに載せたコインをはじきました。
コインはうまく丸枠の中に入りました。
「３０点ですね。まぁ最初としてはいい方じゃないでしょうか。」
次はナミコちゃんでした。狙いを定めてコインをはじきました。
「ああ、残念ですね。丸枠からはみ出してしまいました。０点です。」
ナミコちゃんは悔しそうでした。
次はトラです。ガーネは前足にコインを載せました。
「トラ、いいですよ。」トラはコインを前足で放り投げました。
なんと、一番遠くにある丸枠に入りました。
「ええ、初めから１００点ですか。」ガーネは頭を抱えました。
トラは自慢げに、ガーネとナミコちゃんを見回しました。
次は先頭に戻って、ガーネです。
慎重に狙いを定めてコインをはじきましたが、丸枠の中には入りませんでした。
「残念です。力が足りなかったようです。」
次はナミコちゃんです。俄然、本気モードに突入していました。
あまりの気迫に、ガーネもトラも黙ってしまいました。

勝負に集中していました。コインをはじく仕草を繰り返していました。

「やる。」ナミコちゃんは、スタートにあるコインに右手を近づけました。

そしてコインをはじいたのでした。

はじかれたコインは、丸枠の1つに完全に入りました。

「やぁ、これは50点ですね。やりましたね。ナミコさん。」

入った瞬間、ナミコちゃんは思わずガッツポーズをしました。

そして、自分の手とガーネの手でたたき合いました。

トラの前足ともたたき合いました。

「楽しい。」ナミコちゃんはそう言いました。

想像以上に、白熱したゲーム展開になりました。

時間が経つのも忘れ、みんな夢中で楽しんでいました。

ゲームが1段落した頃、ナミコちゃんは今何時かを確認しました。

「いけない。お風呂の時間。」

ナミコちゃんはそう言って、部屋を出て行きました。

「随分、盛り上がったわね。」トラはガーネに言いました。

「このゲーム、意外と楽しかったね。」ガーネも同意しました。

やがてお風呂が沸きました。

昨夜と同じようにナミコちゃんとトラが先に入りました。

ナミコちゃんたちが上がった後、ガーネもお風呂にゆっくりと入っていました。

「今日は1日がとても、長かったような気がします。」

ガーネは今日1日の事を、感慨深く思い返していました。

「慣れない山登りは、行きも帰りも大変でした。

特に、帰りはよく帰って来れたと思いましたよ。

鬼ごっこで全力を出し切り、ナミコさんやトラを抱えて下りたんですからね。

途中で、頭がおかしくなったような気分になりました。
無事に帰れて、こうしてお風呂に浸かっているのが夢のようです。」
ガーネはぐったりと疲れて、ついうとうととしていました。

部屋に戻ると、その戸の前にナミコちゃんが立っていました。
「今日はお母さんと寝る。」そう言って、ガーネたちにお休みを言いました。
ナミコちゃんが、お母さんの部屋に入るのをガーネたちは見ていました。
ガーネは戸を閉めました。そしてトラに言いました。
「ナミコちゃん、とても嬉しそうでしたね。
今日私たちと遊んだ事を、お母さんとお話したいんでしょうね。」
「きっとそうね。」
「トラも今日は、ご苦労様でした。
もう今夜はナミコさんも来ないんじゃないでしょうか。
私たちも今日は1日、動き回りましたからね。体が疲れきっていますよ。
もうこれ以上、何もしたくありません。今夜はすぐに眠りましょうね。」
「そうね。今日はあたしもクタクタだわ。」トラも賛成しました。
ガーネは部屋の灯りを消しました。
「お休みなさい。」「また明日ね。」
ガーネとトラは、夢を見る事も無く、すぐに深い眠りに入りました。

翌朝、異変が起きていました。

第6話「残留思念」ふたつめかしら。（終）

第６話「残留思念」ふたつめかしら。（後書き）

今回のお話は、第６話「残留思念」の第２話です。
前回と引き続き、レトロな遊びを書きました。

ここで、あらためてお詫びします。
投稿前に、チェックはしているのですが、誤字脱字などが出てしまいます。
又、前書きや後書きなどは前回分のコピペを使用したりしています。
そのため、ついうっかり見落として、おかしな内容になる事もあります。
これからも、十分に気を付けたいと思いますが、皆無は無理かと思います。
これらが見つかった際には、「またか。」と諦めて下さい。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第6話「残留思念」お別れね。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第6話「残留思念」お別れね。のお話です。
この回では、ガーネとトラが、いなくなったナミコちゃんを探します。

第6話「残留思念」お別れね。

第6話「残留思念」お別れね。

ナミコちゃんは、お母さんのお部屋で一緒に布団に入っていました。
でも、眠る事は出来ませんでした。
「心が見えない。
私は気が付いてしまった。
昨日、ガーネやトラちゃんと、力いっぱい遊んだ事をお母さんに話した。
でも、お母さんは、「そうかい。」と頭を撫でてくれるだけだった。
それ以上は何も言ってくれなかった。
お母さんは、私がガーネやトラちゃんの事を話す時は、いつも反応が無い。
おじいさんもおばあさんも、そうだった。
私には、今のお母さんの心が見えない。
おじいさんの心も、おばあさんの心も見えなくなっている。
あの時までは、確かに見えていた。
私の家族の心が、いつでも手に取るように見えていた。
あの時以来だ。あの時以来、私には見えない。
でも、ガーネやトラに出会った時、私には見えた。
彼らの心を、今まで忘れていたものを、はっきりと見る事が出来た。
私は気が付いてしまった。
今私の周りにいる家族は、本当は実在していないんだ。
やっぱり、あれは夢じゃなかったんだ。
やっぱり、あの時、私は、そして私の家族は・・・。」

トラは目を覚ましました。
「昨日はよく、眠ったわ。」トラは欠伸をした後、立ち上がりまし

た。
「もう、みんな起きている頃ね。」
トラはふと傍らでぐっすり眠っている人間に目が留まりました。
「相変わらず、お寝坊さんね。
まぁ、昨日は頑張ったみたいだから、ぎりぎりまで寝かせておいてあげましょう。
さて、1階に降りてみましょうか。」
トラは部屋を出て行きました。

ガーネは目を覚ましました。何かが顔をたたいていたからです。
「おや、トラさんじゃないですか。
お早うございます。もう朝ご飯の時間なんですか?」
ガーネは寝ぼけ眼でトラに挨拶しました。
「ガーネ。それどころじゃないのよ。とにかく早く起きてよ。」
トラは朝の挨拶も忘れて、興奮していました。
ガーネはそのトラの剣幕で、すっかり目が覚めました。
「一体、どうしたんです?」
「とにかく、今の時刻を見てよ。」
ガーネはトラに言われたとおり、部屋にある時計を見ました。
時刻は9時を指していました。
「あれ、もうこんな時間になっていたんですか。
すっかり寝坊してしまいました。じゃあ、朝食はもう終わっていますね。
トラ、いつものように早く起こしてくれてもよかったじゃないですか。」
ガーネはちょっと恨みがましく、トラに言いました。
「あたしも、今朝は寝坊したの。起きたのはつい、10分ぐらい前よ。」
「そうでしたか。それはすみませんでした。
しかし、珍しいですね。トラが寝坊とは。やっぱり昨日は疲れてい

たんですね。」
「確かにそれもあるわね。でも今日はいつもと違うのよ。」
「と言うと、何か異常な事でもあったんですか。」
「普段なら、人が部屋を出る音とか、朝食の準備とかで、物音が聞こえるの。
それで目が覚めるんだけど、今日は一切、何も聞こえなかったの。」
「だから、それは昨日疲れてたせいで、ぐっすり眠っていたからでしょう？」
「最初はあたしも、そう思ったわ。それで1階に下りていったの。
そうしたら。」
「そうしたら？」
「誰一人いなかったの。それどころか人のいる気配すらなかったのよ。」
「ナミコさんは？あの子ならいつも、1階にいるはずですよ。」
「そう思ったんだけど、やっぱりいないの。」
「出かけた可能性もありますね。
それともどこかのお部屋に、入っているのかも知れません。
じゃあ、探してみますか。」
ガーネは立ち上がりました。
いつもの服に着込んだ後、トラを右肩に載せて部屋を出て行きました。

「まずは、隣のナミコさんのお部屋に行ってみましょう。」
ガーネは部屋の戸をたたきながら、言いました。
「ナミコさん、ナミコさんいますか？」
部屋から何の返事もありません。
「失礼しますよ。」ガーネは恐る恐る部屋の戸を開けました。
でも、そこには誰もいませんでした。
「いないようですね。
お母さんは、もう出かけた後でしょうから、1階の離れに行って見

ましょう。」
「ナミコちゃんのおじいさんとおばあさんの所へ行ってみるのね。」
「そうです。」
ガーネはうなずくと、1階に下りていきました。
階段を下りると、ガーネはトラに言いました。
「本当ですね。トラの言った通り、誰もいませんね。
知らなければ、空き家と間違えるかもしれません。」
ガーネとトラは離れに行きました。
ガーネは部屋の戸をたたきながら、言いました。
「すみません。ちょっとお話したい事があるんです。
開けてもよろしいでしょうか?」
部屋から何の返事もありません。
その後、何回か声をかけましたが、やっぱり何の返事もありませんでした。
ガーネはトラを見ました。そして互いにうなずき合いました。
「失礼しますよ。」ガーネはそう言いながら、恐る恐る部屋の戸を開けました。
そこには、おじいさんとおばあさんが向き合って座っていました。
「あっ、すみません。
いくら声をかけても返事が無かったものですから、つい開けてしまいました。
本当にすみません。」
ガーネは、ひたすら謝りました。
でも、何の返事もありませんでした。
ガーネは首をかしげました。不振に思って、2人に近づいてみました。
おじいさんは、手に持っている茶飲みでお茶をを飲もうとしていました。
おばあさんは、笑みを浮かべて、おじいさんに話しかけているようでした。

しかし、2人はその状態のまま、硬直していたのでした。
「あの。」ガーネはおばあさんの肩を、ポンとたたきました。
おばあさんは石のように硬くなっていました。
そしてその状態のまま倒れてしまいました。
「大変です。」
ガーネはおじいさんを見ました。おじいさんも同じような状態でした。
ガーネとトラは、薄気味悪くなり、慌ててその離れから出ました。
「一体、何があったのかしら。」トラは恐ろしくて震えているようでした。
ガーネはトラを抱えました。
「とりあえず、お母さんの部屋へ行って見ましょうか。
昨夜、ナミコさんはお母さんと一緒に寝た筈です。
ひょっとしたら、そこにいるかも知れません。」
ガーネの声は震えていました。
トラは、自分を抱いているガーネの手も、少し震えている事を感じました。
2階に上がって、お母さんの部屋の戸をたたきました。
やはり、返事はありませんでした。
「失礼します。」ガーネは思い切って、開けてみました。
そして、唖然としました。
出かけている筈の、ナミコちゃんのお母さんが、そこにはいました。
まるで、何かを呼び止めるような格好で、そのまま硬直していました。
ガーネはふと気が付いたように、あたりを見回しました。
でも、その部屋にはナミコちゃんはいませんでした。
ガーネとトラは何もしないまま、その部屋を出て行きました。
通路に出ると、トラはガーネに尋ねました。
「ねぇ、これから私たち、どうすればいいの?」
ガーネは、興奮している自分を抑えているようでした。

しばらくして、トラにこう答えました。
「とりあえず、ナミコさんが、どうなったのか心配です。まだ探していない場所を含めて、家中探し回りましょう。じゃあ、二手に分かれましょうか？」
「嫌よ、一旦離れたら、もう会えないかも知れないわ。ねぇ、一緒に探し回りましょう。広いと言っても探す場所は限られているし。」
トラにそう言われて、ガーネも思い直しました。
「そうですね。じゃあ、一緒に探しましょう。」
ガーネはトラを右肩に載せて、探索を開始する事にしました。家の中を始め、隣にある蔵の中も探してみました。庭や物置なども探索しましたが、ナミコちゃんは見つかりませんでした。
ガーネとトラは、家の中に戻って来ました。そして玄関に腰を下ろしました。
「フゥー、駄目ですね。どこにもナミコさんはいませんよ。」
「外にでも、出かけたんじゃないの？」
「今となってはそれしか、考えようが無いですね。でもね。そうなると、私たちではどうしょうもありませんよ。探す範囲が広すぎます。ナミコさんが帰って来るのを待つしかありません。」
「そうね。そうよね。」
ガーネもトラも、自分たちで出来る事は何も無くなり、途方に暮れていました。
「一体、どこに行ったんでしょうね。」
ガーネは家の天井付近を見ながら、ため息をついていました。その時、ガーネは部屋の一角に、ある異常を見つけました。
「トラ、あれは何だと思いますか？」
トラはガーネが指し示す方向に、目をやりました。
「壁に亀裂が走っているわ。」トラは叫びました。

「いや、それだけじゃありません。」
ガーネは次に目の前に現れた現象に驚いていました。
「壁だけじゃありません。
この家の中の空間そのものに、亀裂が走っているんです。」
ガーネやトラがその異常に気が付いた途端、それは激しさを増しました。
自分たちのいる空間が、ガラスのように次々とひびが入ってきたのでした。
そしてその一部が割れて、破片となって落ちてきたのです。
「あっ、危ない」落ちてきた破片から、トラを守るために覆いかぶさりました。
しかし、ガーネには何の怪我もありませんでした。
破片はガーネの体を突きぬけ、床へ消えていきました。
ガーネは足元を見ました。すると、そこにも亀裂が生じていました。
「ウワァー。」ガーネの足元が裂けました。
ガーネはトラを抱えたまま、奈落の底に落ちて行きました。

ガーネとトラは、落下するスピードが、緩やかになって行くのを感じました。
そして停止しました。ガーネたちは空間に浮いた状態になりました。
「ここは、どこなんでしょう?」「さぁ、あたしにも判らないわ。」
ガーネは周囲を見回しました。
「ここも迷宮と同じように、真っ暗な空間ですね。」
「でも、ここには道は無いわ。ただ真っ暗なだけみたいね。
あっ、ガーネ見てよ。周りの景色が、変化していくわ。」
「本当ですね。何かぼかしたような風景が見えてきましたよ。」
更に時間が経つにつれて、はっきりした風景が浮かび上がって来ました。
「これは・・・。そうです。ナミコさんの家の中ですね。」
「本当ね。でもこれって、どういう事なのかしら。」

「判りません。しばらく様子を見てみる事にしましょうよ。」
ガーネとトラは互いを見て、うなずき合いました。

おじいさんとおばあさんが、囲炉裏に腰を下ろして、お茶を飲んでいました。
お母さんは、洗濯物を畳んでいました。
すると、突然、玄関が開きました。
子供が花を1本手に持って、中に入りました。
「ただいま。」
「おや、ナミコちゃん。もう帰って来たのかい。」
「お帰り。」「お帰りなさい。」
家族が、ナミコちゃんに声をかけました。
「お母さん、花摘んだ。」ナミコちゃんは嬉しそうにお母さんに言いました。
「まぁ、綺麗な花ね。」
靴を脱ぎ、スリッパを履いて、お母さんの元に駆け寄ろうとしました。

ところが、その時、ナミコちゃんの家が大きく揺らぎました。
ナミコちゃんも思わず、転倒してしまいました。
「ナミコちゃん。」「ナミコ。」「ナミコさん。」
お母さんやおじいさん、そしておばあさん。
家族みんなが、ナミコちゃんの元へ駆け寄ろうとしました。
ですが、その時家を支えている木材が、次々と倒れてきました。
「お母さん、おじいさん、おばあさん。」
ナミコちゃんは手を伸ばして、必死で家族を呼びました。
けれども、それ以後に起きた出来事を知る機会はもうありませんでした。
倒れてきた太い木材の1つが、ナミコちゃんの頭上に落ちてしまったからです。
家族も、倒れてきた木材の下敷きになってしまいました。

そして、土台を失った家の天井が、屋根ごと落ちてきたのでした。

「・・・。」

ガーネとトラは、その光景をじっと見ていました。
声をひと言も発する事は、出来ませんでした。
その顔には、涙がとめどもなく溢れていました。

潰れた家の中から、青白く輝く光が、浮かびあがって来ました。
その時、大地や山々から、淡い緑色の波が発生しました。
その波は、たくさんの光の粒子をまとっていました。
その波は、ナミコちゃんの家を中心として、あたり一面を覆ってしまいました。
青白く輝く光も、その波に包まれてしまいました。
するとその波から、光の粒子が青白く輝く光めがけて、一斉に降り注ぎました。
その青白く輝く光は力を注がれたように、どんどん大きくなりました。
気が付くと、ガーネとトラはその中に入っていました。
そこにはナミコちゃんの家を中心に、付近の山々などが具現化されていました。
ガーネとトラは、顔を見合わせてうなずきました。
ガーネとトラは浮かんでいる状態で、ナミコちゃんの家に向かいました。
そしてその外壁をすり抜けて、中に入る事が出来ました。

ナミコちゃんが玄関の近くで、倒れていました。
しばらくして気が付いたナミコちゃんは、あたりを見回しました。
周りには、誰もいませんでした。
ナミコちゃんは、涙声で、家族を呼びました。
「お母さん、おじいさん、おばあさん。」

すると、お母さんが、台所からやって来ました。
「ナミコちゃん。何かあったの？」
おじいさんとおばあさんも、離れからやって来ました。
「どうした、ナミコ。」「どうしたの。ナミコさん。」
ナミコちゃんは、駆け寄って来た家族に、思わず抱きつきました。
「怖い夢を見た。」ナミコちゃんはそう言って、涙ぐんでいました。
でも、ナミコちゃんの手には、摘んだ筈の花はありませんでした。

「ナミコちゃんが、言っていたのは、夢じゃなかったのね。」
トラは、ガーネにそう言いました。ガーネはうなずきました。
「そうか、ナミコさんは、この災害で既に亡くなっていたんですよ。
でも自分が死ぬ事を意識せずに亡くなった事で、この世に思いを残してしまった。
その思いに大地や山々が感応して、力を与えたんです。
だから、この世界が誕生したんですね。」

ガーネとトラの周りの風景が、だんだんぼけてきました。
そして、真っ暗になっていきました。
すると、今度は、ガーネとトラは上昇していきました。
しばらくすると、上昇するスピードが緩やかになり、そして停止しました。
突然、明るくなりました。
周りを見回すと、そこは落下する前の場所でした。
ガーネとトラは、元の場所に戻って来たのでした。

トラは、ガーネに言いました。
「私たち、どうやら元の場所に戻れたみたいね。」
「そのようですね。
でも何故、私たちはあの映像を見る事が出来たのでしょうね。」
「本当のナミコちゃんの家があった、あのあたり一帯の大地や山々

の持つ記憶。
それが私たちに語りかけてきた。そんな気がしたわ。」
「でも、何のためにですか？」
「それは・・・。ごめんなさい。よく判らないわ。」
ガーネはため息をつきました。
「まぁ、それはいいとして、とりあえず、これからどうしましょうか？」
「私たちは、ナミコちゃんを探していたのよ。捜索を続けましょう。」
「そうは言っても、もし先ほどの映像が真実であるとすればですよ。もうナミコさんは、この世にはいない事になるじゃありませんか。昨日まで私たちの前にいたのは、ナミコさんが残した思い。それを人の形に具現化したものに過ぎません。だとすれば、もはや探す意味は無いんじゃないでしょうか？それよりは、むしろ。」
「むしろ、何なの？」
「問題は、私たちですよ。ナミコさんの思いで創造されたこの世界は、何故か壊れかかっています。ここに長くいるのは、危険かもしれません。下手をすれば、この世界ごと私たちも消滅するかも知れないんです。早くこの世界から、脱出する必要があるんじゃないでしょうか？」
「でも、どうやって？」
「それは・・・。」ガーネは答えを見つけ出す事が出来ませんでした。
しばらく考え込んでいたトラが、ガーネに話し始めました。
「確かこの世界は、ナミコちゃんの思いが具現化したものだって言ってたわね。」
「まぁ、私たちが見たあの映像の通りだったとすれば、の話ですけどね。」

「それなら、この世界はナミコちゃんの願いがかなう場所でもあるわけよね。」
「それはそうでしょうね。この世界は、ナミコさんが中心となっている世界。
つまり、ナミコさんが主人公の世界なんですからね。」
「だとすればよ。
ナミコちゃんが私たちを迷宮に戻したいと思ってくれれば、かなうんじゃない？」
トラのその言葉に、ガーネは目からウロコが落ちたような気がしました。
「そ、そうですね。そうかもしれません。
確かに、ナミコさんがそう思ってくれれば、間違いなくかなうでしょう。
でもそれなら、やっぱりナミコさんを探し出す必要がありそうですね。」
「でも、問題はどこにいるのかよね。」
「そうですね。それはさっきから抱えている難問ですね。
結局、降り出しに戻ったってわけですか。」
ガーネは、がっかりしました。
「落ち着いて、考えて見ましょうよ。
何故、ナミコちゃんがいなくなったのか？
何故、この世界が壊れかかっているのか？ガーネ。何か考え付く事って無い？」
「そうですね。
何故、ナミコさんがいなくなったのか？
これに関しては、ちょっと判りませんね。
でも何故、この世界が壊れかかっているのか？
この点に関しては、ある程度推測出来ると思うんですよ。」
「どういう事かしら、聞かせて。」
「この世界は、ナミコさんの思いが具現化したものって事でしたよ

ね。
それが壊れかかっていると言う事は、こう考えてもいいんじゃないでしょうか。
つまり、ナミコさん自身がこの世界にいる事に関して、迷いが生じたんですよ。」
「迷い？どんな風に？」
「自分の思いを具現化した世界の中で、これからも暮らしていくべきか。
それとも、自分のの思いを消滅させて、本当の家族と同様に冥界に旅立つべきか。
その判断に悩んでいるんじゃないでしょうか？」
「でも何故、急にその事に悩み出したのかしら？」
「それなんですけどね。
2日前の夜、ナミコさんが夢でうなされていたって言いましたよね。
しかも、その夢は過去に見た事があると言っていました。」
「えっ、ええそうだったわね。それがどうかしたの？」
「トラもさっき言った通り、過去に見たのは夢じゃ無くて、現実だったんですよ。
じゃあ、それを夢だと思っていたのは、どうしてでしょう。
それはナミコさんが、この世界を現実だと信じていたからだと思うんですよ。」
「そうね。確かにそうだと思うわ。」
「ところが、ナミコさんの心の中で、何らかの変化が起きてしまった。
その結果、その夢が現実じゃないかとの疑念が膨らんだんです。
だから、夢として現れてうなされたんじゃないかと思うんです。」
「なるほどね。でも何故、そんな変化が起きたのかしら？」
「ナミコさんがここ最近で、心に変化を起こすような出来事があった。
そう考えるしかありません。

では、それは何なのでしょうか？トラには何か心当たりがありますか？」

「そうね。普段の生活では、自分の世界なんだから変化なんて無いと思うわ。

何か、他から外的要因が加わったって考えるのが妥当よね。

そうすると、2日前に何かが起こったって事になるけど。

あら、ひょっとしてそれって。」

「どうやら、トラも私と意見が同じになったようですね。

そうなんです。私たち自身なんです。

私達との出会いが、ナミコさんに変化をもたらしたんですよ。」

「でも、どうして？」

「これまでナミコさんは、自分の思いが具現化した世界で生きてきました。

自分が見て感じた世界です。

ナミコさんは家族と、生前はいつも一緒にいました。

だから、家族に対する記憶が十分あったのです。

今、ナミコさんという家族は、その記憶を元に具現化したものです。

だから、その家族と接しても、何の違和感も感じなかったんです。

いや、少しはあったかもしれません。

ですが、些細な事だと気にしていなかったんだと思います。

ところがそこへ、私たちがやって来ました。

ナミコさんは、過去に私たちと会った事がありませんでした。

つまり、私たちに対する記憶が全く無いのです。

ナミコさんは私たちと接した時に、気が付いたんだと思います。

家族と接した時と明らかに、何かが違うと感じたんだと思います。

それは単純に、家族か他人かというだけのものじゃなかったんです。

もっと、根本的な違いを感じてしまったんです。

ナミコさんは、今接している自分の家族に、違和感を覚えるようになりました。

その結果、自分が今いる世界に対しても疑問を抱き始めたんですよ。

」
「でも、まだ疑惑でしかないわけよね。
それが、確信に変わったのは、いつなのかしら。」
「多分、それは昨夜じゃないかと思うんですよ。」
「昨夜？
でも確か昨夜は、ナミコちゃんはおかあさんと一緒に眠っていた筈よ。」
「その通りです。
だから、これから話すのは、私の推測でしかありません。
ナミコさんは、眠る前にお母さんと何かお話をしたんじゃないでしょうか。
その結果、何故だかは判りませんが、ナミコさんの疑惑は確信へと変わった。
つまり、真実に目覚めたんです。」
「それで夢の方が現実であり、自分は既に死んでいるのだと気が付いたのね。
そして、自分の思いを消滅させる事を考えたのね。
」
「この世界が壊れかけているのは多分、そのせいでしょう。
でもナミコさんの心の中には、まだこの世界に未練があるのでしょうね。
だから、完全には消滅していないのだと思います。」
「ひょっとしたら、もうナミコちゃんは決めたのかもしれないわよ。
」
「えっ、どちらを選ぶつもりなんでしょうか？」
「もちろん、自分の思いを消滅させる事よ。
だから、最後に自分にとって一番心に残った場所に、行ったんじゃないかしら。」
「さてと、もしそうなら今ナミコさんは、どこにいるんでしょうね。
ナミコさんが最近、最も夢中になった事って何だったでしょうか？」

「ひょっとして?鬼ごっこ」
「だとすると、ナミコさんが今いる場所は?」
「山頂だわ。」「山頂ですね。」
ガーネとトラの意見が、一致しました。

ガーネとトラは、山の入り口に来ました。
「もう、ここにくる事は、絶対に無いと思っていたんですけどね。」
ガーネはぼやきました。
「何を言っているのよ。ナミコちゃんが心配じゃないの。」
トラがガーネをたしなめました。
「はい、そうでしたね。すみません。じゃあ行きましょうか。」
ガーネとトラは、入り口の階段を上り始めました。

山や山道のあちこちに亀裂が走っていました。
ガーネとトラは、最初、勢い込んで走っていました。
しかし、すぐに体がばててしまいました。
注意も散漫になり、転びそうになったり、亀裂に足を突っ込みそうになりました。
「山では、焦ってはいけませんね。
もどかしいですが、休みをとりながら、いつもより少し速めで歩きましょう。」
「そうね。そうしないと山頂に着くのが、かえって遅くなってしまうわ。」
ガーネとトラは、この前上ったときより、少し速めにして歩きました。
そのおかげで、山頂には2時間も経たないうちに着く事が出来ました。

思っていた通りでした。ナミコちゃんはそこにいました。
この前、ガーネたちと眠り込んだ木のベンチに座って、うつむいて

いました。
「やっと、お姫様とのご対面ですね。」
ガーネとトラは顔を見合わせ、にっこりと笑いました。
ナミコちゃんは、近づいてくる人影に気が付きました。
「やっぱり、見つけてくれた。」ナミコちゃんはそう言いました。
「探しましたよ。」ガーネとトラは、ナミコちゃんの傍らに座りました。
「ナミコさん。それで決心は付いたんですか?」ガーネは尋ねました。
ナミコさんは驚いたような顔で、ガーネを見つめました。
しかし、すぐに納得した表情を浮かべていました。
「私たちに何が起きたのか、知っているんだ。」
ガーネとトラはうなずきました。
「私は、それを知るまでに随分時間がかかった。」
ナミコさんは、立ち上がりました。そして前を向いたまま、ガーネに言いました。
「私は家族の元に帰る。」
「えっ。」
「私は、私の本当の家族の元に帰る。」
ナミコさんは、両手にこぶしを作りながら、そう言いました。
ナミコさんは、ガーネとトラの方を振り向きました。
「有難う、ガーネ。そしてトラちゃん。
私が真実を知ることが出来たのは、あなたたちのおかげ。
それに、私といっぱい遊んでくれた。本当に有難う。」
トラは、ナミコちゃんに抱きつきました。
トラもナミコちゃんも、別れを惜しむかのように涙ぐんでいました。
ナミコちゃんは、ガーネにトラを返しました。
ガーネはナミコちゃんに手を差し出しました。
「さよなら。」「さよなら。」
ナミコちゃんもその手を握り返しました。

ナミコちゃんは握手を終えると、頭を下げて立ち去っていこうとしました。
「あっ、待ってください。」
ガーネが声をかけると、ナミコちゃんは立ち止まり、そして振り向きました。
「大丈夫。この世界が消滅する前に、あなたたちは出て行ける。私が、この世界にお願いした。
それが、あなたたちに対する私のせめてものお礼。」
ナミコちゃんはそう言った後、ガーネたちにもう一度、頭を下げました。
そして歩き出しました。
立ち去っていくナミコさんの後姿を、ガーネとトラは見送りました。
その姿は、まぼろしのように消えてしまいました。

ナミコさんが消えた場所に、迷宮のドアが現れました。
「トラ、私たちも戻りましょうか。」「そうね。」
ガーネとトラは、木のベンチを離れました。
そして、迷宮のドアへと歩いていきました。
その間も、この世界は、どんどん崩れていきました。
さまざまな破片が、落ちては消えていきました。
既に周囲はほとんど、真っ暗な闇に囲まれていました。
ですが迷宮のドアへの道は、しっかりつながっていました。
ナミコさんとの約束通り、ガーネたちの歩みを妨げる事はありませんでした。
ガーネとトラは、無事に迷宮へと戻って行きました。
ガーネたちが去った後、迷宮のドアは閉じ、そして消えました。
その直後、この世界は終わりを告げました。

迷宮に戻ったガーネとトラは、飛びはねていました。
「軽い、軽い。なんて体が軽いんでしょう。

さっきまで感じていた重い疲れも無くなってしまいました。」
「本当ね。凄いわ。」
ガーネとトラは、迷宮の力に感動していました。
「しかも、濡れていた靴もすっかり乾いています。」
「まだ、濡れていたんだ。」

「ねぇ、ガーネ。」
つかの間の運動を終えた後、トラはガーネに言いました。
「あたしたち、ナミコちゃんに悪い事をしたんじゃないかしら。」
「どうしてです？」
「だって思いだけだったとしても、ナミコちゃんの意思は確かに存在していたわ。
それをあたしたちが、あの世界に入った事で消滅させてしまったんだもの。
果たして、これで本当に良かったと言えるのかしら。」
「そんな事は無いと思いますよ。
あの世界や自分の思いを消滅させたのは、ナミコさん自身が決めた事です。
トラもそれは、知っているでしょう。
私たちが、ナミコさんといた事で、ナミコさんは迷いから抜け出せたのです。
だから、ナミコさんは私たちに感謝したんです。
私たちは、ナミコさんのお役に立てたんですよ。」
「随分、都合のいい考え方ね。」トラは半分笑いながら、言いました。
「だって、そうでも考えないと、やりきれないじゃないですか。」
ガーネも苦笑しながら、そう言いました。
「ナミコさんには、選択肢がもう1つ、ありました。
自分が気が付いた真実を、自分の記憶から消し去る事です。
そうすれば、今まで通りに暮らす事が出来た筈です。

またナミコさんは、私たちの事も想い出に加える事が出来たと思います。
それならば、今まで以上に楽しい生活を送る事も出来たでしょう。

あそこはナミコさん自身が、見て感じた世界を具現化したものです。
そのため限界はありました。
でもナミコさんが願った事で、可能な事であれば全てかなえる事が出来ました。
記憶操作など、たやすかったに違いありません。
でも、ナミコさんが、それを選ぶ事はありませんでした。

ナミコさんは昨夜、お母さんと一緒に布団に入っていました。
ナミコさんは、あの山頂でこんな事を考えたんじゃないでしょうか。
造られた偽りのお母さんと眠るより、本当のお母さんと一緒に眠りたいって。」
トラは、じっと考えていました。
「そうね。そうかもしれないわ。」
トラもガーネに賛成しました。
「さぁ、トラ。私たちもそろそろ行きましょうか。」
「そうね。行きましょう。」
トラは、ガーネの右肩に飛び乗りました。

ガーネとトラは、また果てしなく続く迷宮の道を、歩き出しました。

第6話「残留思念」お別れね。（終）

第６話「残留思念」お別れね。（後書き）

今回のお話は、第６話「残留思念」の最終話です。
今回はこの「トラ・オブ・ラビリンス」の中では１番、心が重くなる話です。
人の死と言うものを、取り上げているからだと思います。
このサブタイトルである以上、避けては通れませんでした。
ですが、もっと柔らかい表現をした方が良かったかとも思います。
今回のお話を読んで下さった方は、どんな感想をお持ちになられたのでしょうか。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

最新の投稿は、Ｔｗｉｔｔｅｒで、お知らせしています。
ｇａｒｎｅｓｔ２０１８で検索すれば、見れると思います。

第7話「天空の村にて」最初だよ。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第7話「天空の村にて」最初だよ。のお話です。
この回では、ガーネとトラが、天空の村に行く事になります。

第7話「天空の村にて」最初だよ。

第7話「天空の村にて」最初だよ。

ガーネとトラは、自分たちの目の前にある階段に圧倒されていました。

「これは、何でしょうか。」

「階段だとは、思うんだけど。」

ガーネたちが見ていた階段。

それは、異様なほど段差が大きく、そして足の踏み場は狭い階段でした。

「階段というよりは、むしろ断崖絶壁と言ってもいいんじゃないでしょうか。」

「まぁ、それは大げさな表現だけど、それに近いかもしれないわね。それにしても、よくこんなオブジェみたいなものを作ったわね。何か理由でもあるのかしら。で、どうするのこれ。上って行く？」

「さすがに、これは遠慮しますよ。」

ガーネはそう言って、迷宮の道以外の真っ暗な闇を指さしました。

「ここを飛び降りれば、他の道に降り立つ事が出来ますしね。」

「それもそうね。別に疲れるわけじゃないけど、登るのは大変そうだわ。

じゃあ、そこを降りましょうか。」

「念のために、私の右ポケットに入っていてくれませんか？

ひょっとしたら、はぐれてしまうかもしれませんし。」

「そうね。判ったわ。」

トラはガーネの言う通り、ガーネをよじ登って右ポケットに入りました。

「これでよしと。では行きますよ。」「いいわ。」

ガーネは飛び降りました。

ガーネは、真っ暗な闇の中を下へ下へと降りて行きました。
と、急にその落下スピードにブレーキ―がかかりました。
「急に何事ですか。」
ガーネが驚いている間に、今度は上へ上へと上昇して行きました。
そして、あの階段のある道の高さまで、戻ってしまいました。
でも、それで終わりではありませんでした。更に上に上昇して行きました。
「どこまで、上って行くんでしょう。」
さすがに、ガーネも不安になってきました。
そしてついに、あの階段の頂上まで上昇したのでした。
ガーネは、何気なくその頂上を見ました。
「えっ！」ガーネは目を疑いました。
そこに、迷宮のドアがあったからです。
ガーネは、ここで止まってくれたらいいのに、と思いました。
しかし、そうはうまくいきませんでした。
今度はゆっくり下がり続け、結局、元の場所に着地したのでした。
「トラ、あれを見ましたか？」
「うん、ポケットの中からのぞいていたわ。
あれは確かに、迷宮のドアだったわね。
でも、あそこまで行かないと入れないのね。」
「この際諦めて、来た道を戻りますか。」
そう言って、後ろを振り返った途端、「あっ！」と驚いてしまいました。
そこにも、階段がそびえ立っていたからでした。
「どうやら、登らなきゃならないみたいね。
ガーネ。仕方がないわ。上りましょう。」
「いやです。何か方法はある筈です。」ガーネはだだをこねました。
「とは、言っても他に方法なんてあるの？」トラはガーネに尋ねました。
「少し考えてみますので、静かにしていて下さい。」

ガーネはそう言って、目をつぶりました。
「諦めが悪いんだから。」トラはそう思いました。
相方がこの様子では、先に進むのはもう少し待った方がよさそうです。
トラも、隣で毛づくろいを始めました。
かなりの時間が経ちました。でもガーネは動く気配がありません。
近くに寄ってみると、ガーネはいつの間にか居眠りをしていました。
「呆れた。」そう言って、トラもガーネの右ポケットに入ってしまいました。
そして、そのまま時が過ぎて行きました。

「行きましょう。」ガーネは立ち上がりました。
「あっ、やっとその気になったのね。」トラも立ち上がりました。
「やはり、時間を無駄にするわけには行きません。
それにここに立ち止まっていても、事態が好転するわけではありませんしね。」
やれやれ、やっとそんな事に気が付いたの。トラはそう思いました。
ガーネはしばらくためらっていましたが、意を決して、登り始めました。

それは、長い登階段（とざん）の始まりでした。
ガーネは両手を次の段に載せて、両腕の力で体を持ち上げました。
次に両足をその段に載せる事で、何とか次の段を踏む事が出来ました。
トラも、気合を入れてジャンプしないと、次の段に移る事は出来ませんでした。
それでもトラは一歩ずつ、着実に登って行きました。
途中何度もジャンプに失敗をして、階段を2～3段落ちてしまう事もありました。
それでも、諦める事なく登って行きました。

「アーレーッ。」と叫びながら大回転をして落ちていく相方がいました。
それも気にする事無く、ひたすら登り続けました。
どれくらいの時間が経ったか判りません。
トラは、ついにその階段の登頂に成功しました。
「やっと着いたわ。」トラは感動していました。

階段の頂上には、何もありませんでした。
ただ、そのゴールを歓迎するかのように、迷宮のドアがそこにはありました。
トラは頂上の周りを、一回りしました。
そして、その中央でしゃがみこみました。
「さぁ、あの人はいつここに来るのかしら。」
トラは、1猫(ひとり)で、迷宮のドアの中に入る気はありませんでした。
この時より、ここを住み家としたトラの日々が始まりました。
トラの日常としては時折、頂上をぐるぐる散歩します。
それが飽きた頃、毛づくろいをして時間を過ごします。
それを繰り返して、やる事がなくなると眠りに入りました。
トラは自分が猫である事を感謝しました。
いくらでも、眠ろうと思えば眠れたからです。
別に眠たいわけではありませんでしたが、時間を潰すには好都合でした。
時折、階段の下から、「アーレーッ。」という声が聞こえてきました。
トラは子守唄のように聞きながら、眠っていました。
1回、階段の下をのぞいて見た事がありました。
あの懐かしい顔を持つ人間が、階段の半分まで来ていました。
「おーい。」トラは前足を振って、呼びかけました。
ガーネも気が付いたのでしょう、手を振って応えようとしました。
その時、バランスを崩したのでしょう。

ガーネは「アーレーッ。」と叫びながら、大回転をして落ちて行きました。
「悪い事をしてしまったかしら。」
トラはそう言って、小さい舌を出しました。

それから更に時間が経ちました。
トラは前足を体の下に入れた状態で、しゃがんでいました。
「あれからどのくらいの時間が経ったのかしら。
あたし、仙人になったような気分だわ。
この世は、まさに諸行無常ね。」などとつぶやいていました。
さぁ、そろそろ眠りましょうか。トラがそう思った時でした。
いつの間にか、階段のあたりからニョキっと両手が生えていました。
「まさか。」トラは期待で思わず、立ち上がりました。
そして次にあの懐かしい顔が、トラの目の前に現れたのでした。
その顔には微笑みとともに、苦労した思いがありありと浮かんでいました。
そして、トラの方に近づいて来ました。
「ガーネ。」トラはガーネに駆け寄りました。
「ガーネ。登頂おめでとうございます。」
トラは、ガーネに抱きつきました。
「やっと、やっとやりましたよ。」
ガーネは涙を流しながら、その場に膝をつきました。

「おめでとうございます。ガーネさん。今のご心境をお聞かせください。」
「まさに感無量です。長く険しい道のりでした。
ですが、無事にこうやってたどり着けて、本当によかったと思っています。」
そんなインタビューごっこを、ガーネとトラは演じていました。
やがて、それにも飽きたので、トラはこんな事を言いました。

「それにしても、長かったわ。
私が登頂を果たしてから、実時間なら1年間ぐらいかかったんじゃないかしら。」
「たったそれっきりですか。私は3年以上過ぎた気がするのです。」
どちらも時間の流れが判らないので、正確な時間を知る事は出来ませんでした。
ガーネは、迷宮のドアを見つめました。
「疲れているわけではありませんが、しばらく休憩します。
それから、迷宮のドアを開けましょう。」
「そうね。それがいいわ。」
ガーネは、その場で横たわり、目をつぶりました。
いつしか、寝息が聞こえてきました。
トラは、そんなガーネを懐かしげに見ていました。
そのうち、トラもうつらうつらとし出しました。
そしてガーネの直ぐ横で、いつの間にか眠ってしまいました。

「さあ、行きますよ。」ガーネは迷宮のドアを開きました。
と、そこには岩壁のようなものが立ち塞がっていました。
「これでは中に入れませんよ。一体どういう事なんでしょうか。」
「ねぇ、ここここに手をかけて、ここここに足を乗せればいいんじゃない。
そうすれば張り付く事が出来ると思うんだけど、どうかしら。」
「ここに張り付いてどうするんですか?」
「判らないけど、何か起きるんじゃないかしら。」
ガーネはしげしげと、その岩壁を見ました。頑丈そうな岩肌でした。
岩壁を押してみました。何の反応もありません。
少しの間、どうしたらいいのか考えてみましたが、いい案は思いつきません。
「やっぱり、張り付いてみるしかないのでしょうか。
何か、危険な気もしますけどね。」

試しに片足ずつ乗せて、重心をかけて見ました。
大丈夫。安定していました。
上の方に両手をかけてぶら下がっていました。
それでも、びくともしませんでした。
「じゃあ、ちょっとこれに体を預けてみましょうか。」
ガーネはトラにそう言いました。
「あっ、ガーネ。ちょっと待って。」
トラは、何か嫌な予感がしました。
「私、念のためにガーネの右ポケットに入っているわ。」
トラはそう言ってガーネをよじ登り、ポケットの中に入りました。
「まぁ、いいですけれどね。」ガーネは首をかしげていました。
「じゃあ、やってみますよ。」ガーネは、その岩壁に張り付いてみました。
その時でした。迷宮やドアが一瞬にして消えました。
そしてガーネの周りには、青い空がどこまでも広がっていました。
「えっ、ええ!」ガーネは眼下を見ました。
そこは雲に覆われて、下界が全く見えませんでした。
ものすごく強い風が吹いています。
ガーネは必死で、両手両足を使って、岩壁にしがみついていました。
しかし、このままでは、落ちてしまうのは時間の問題です。
ガーネは上の方を見上げました。
頂上が全然見えません。でも今はそれに向かって進むしかありません。
バランスを取りながら、右足を岩壁から離しました。
強風の中、右足を乗せられる場所を探りました。
そして何とか、その場所を見つけてそこに右足を乗せました。
そして、重心をかけた途端、その足元の岩が崩れてしまいました。
「ウワァ。」
ガーネはバランスを崩し、両手でぶら下がっている格好になってしまいました。

何とか両手で、体を持ち上げようとしました。
ですが、力尽きて出来ませんでした。
強風にさらされる中、ガーネの両手は感覚を失ってしまいました。
そして手に力を込める事も、出来なくなってしまいました。
「もう、これまでです。トラ、すみません。」
力を失った両手は、岩壁から離れてしまいました。
ガーネは気を失い、その体は下へと落ちて行きました。
その時、とてつもなく大きい鳥が、ガーネの目の前に現れました。
そして、ガーネをクチバシでくわえて、飛んで行ってしまいました。

「おい、大丈夫か。」人の声が聞こえました。
ガーネは、はっと目が覚めました。
そして自分の目の前に、女の子がいるのを確認しました。
ガーネは、上半身を起こしました。
「あなたは一体、どなたなのでしょうか。」
まだ少しボーッとしている頭で、ガーネは尋ねました。
「あたしの名はナミキ。ライバの使い手だ。」その女の子はそう言いました。
「ライバって、何でしょうか。」
「こいつさ。」ナミキさんは右手の親指で、自分の後ろを指さしました。
「グキキキ。」ライバが鳴き声をあげて、こちらを向きました。
「あわわわ。」ガーネは思わず後ずさりをしました。
「これは一体、何なんです。」
ガーネは震えながら、ライバを指さして尋ねました。
「お前、命の恩人に対して、その態度は失礼じゃないのか。
このライバがいなければ、今頃お前はあのまま落ちて死んでいたんだ。」
ナミキは怒ったように言いました。
ガーネは自分が岩壁から落ちて、気を失った事を思い出しました。

「それじゃあ、あなたとその鳥が私を助けてくれたんですか？」
「鳥じゃない。これはライバと言う翼竜だ。名前はゼノンと言う。そしてあたしはその使い手なんだ。」
「そうでしたか。いやすっかり気が動転していました。先ほどからの無礼な発言を、どうかお許し下さい。あなた方には、とても感謝しています。有難うございました。」
ガーネは、土下座してナミキさんとゼノンに深くお詫びしました。
ナミキさんは、さすがに土下座にはちょっと引いたような感じでした。
「ま、まぁ、判ればいいんだよ。ところで、あんたは、ここらあたりでは見かけない顔だね。着ている服もあたしたちと少し違うし。一体、何者なんだい。」
ナミキさんは、いぶかしげにガーネに尋ねました。

その時、ガーネの右ポケットが、もぐもぐと動きました。
「うるさくて起きちゃったんだけど、何かあったの？」
トラは、怒ったように言いました。
ガーネは、トラを両手で持ち上げました。
そして、にこやかに頬笑みながらこう言いました。
「ああ、あなたは寝ていたんですね。私があれほど大変な目に会っていたのに、自分だけが寝ていたんですね。」
トラはそれを聞くと、我に返ったような顔をしました。
そして少し後ろめたそうな表情で、こう言いました。
「や、やあねぇ、私がガーネだけに辛い思いをさせるわけ無いじゃないの。わざと言ってみただけよ。」トラはしらを切り通そうと思っていました。
「じゃあ、私の身にどんな事があったか言ってみて下さいませんか？」

ガーネに詰め寄られました。
両手で押さえられているので、逃げる事も顔をそむける事も出来ませんでした。
トラは、観念しました。
「ごめんなさい。私が悪かったわ。」トラは素直に謝りました。
ガーネは再び、微笑みました。
「いえ、いいんですよ。
下手に起きていたりしたら、大変な事になっていたかも知れませんしね。」
トラは、その言葉を聞いてほっとしました。

このやり取りを、ナミキさんとゼノンは聞いていました。
「この猫、すごいじゃないか。人間と話をしている。」
ナミキさんは驚きを隠せない様子でした。
「うちのゼノンも、人間の言葉を理解出来るけどね。
さすがに、人の言葉を喋る事は無理だよ。」
ナミキさんは興味深い顔で、トラを眺めました。
「実は私たちは、この世界の人間ではありません。」
ガーネはそう言って、詳しい話をしようとしました。
「あっ、待って。」ナミキさんは、ガーネが話し出すのを止めました。
「どうやら、あんたの話はあたしでは理解するのは難しそうだ。
あんたは、しばらくここにいるつもりなのかい？」
「出来れば、そうお願いしたいです。」
「それなら、これから村役場へ行こうじゃないか。
あんたの話を他のやつらにも、聞いておいてもらう必要があるからな。
あんただって、何回も同じ話をするのは嫌だろう？」
ナミキさんは、そうガーネに尋ねました。
「確かに、その方がよさそうですね。」

「判った。じゃあ、あたしに任せな。
ゼノン。もう、あんたの今日のお仕事は終わりだ。自分の巣へ帰りな。」
ナミキさんは、ゼノンにそう伝えました。
「グキキキ。」ゼノンは鳴き声をあげた後、翼を羽ばたかせました。
そして、どこかへ飛んで行ってしまいました。
ナミキさんは、その姿を見送っていました。
ゼノンが見えなくなると、ガーネたちの方に向き直りました。
「じゃあ、そろそろ行くか。もう、あんた歩けるのかい？」
ガーネはうなずきました。
ナミキさんは、ガーネとトラを連れて、村役場に向かいました。

村役場の前には、多くの人が集まっていました。
ナミキさんが、岩壁から落ちた人を助けに行った事が知れ渡っていたからです。
いきなり、たくさんの拍手が起こりました。
「ナミキさん。ご苦労様。」「本当によく助かったわね。」
そんな声が次々と聞こえてきました。
その中の1人が、ガーネの前に進み出ました。
「この村へようこそ。私は、この村の村長です。
あなたを助けたのは、同じくこの村の住人のナミキです。
では、まず、失礼とは存じますが、あなたのお名前をお聞かせ願いますか？」
村長さんは、ガーネに尋ねました。
「私の名前はガーネと言います。
この度は、助けて頂いて本当に有難うございました。」
「では、ガーネさん。
とりあえず、村役場まで来ませんか？いろいろお話をお聞きしたいです。」
「いいですよ。そのつもりで来ました。」ガーネはうなずきました。

その時、ナミキさんは村長さんにこう言いました。
「あっ、村長さん。これからこの村の代表たちを呼んでくるつもりだ。
ガーネから話を聞くのは、その時にしてくれないか？」
村長さんはそれを聞いて、ナミキさんにこう話しました。
「判りました。ではそうする事にしましょう。
ナミキさん、会議室にみんなが集まるように伝えてもらえますか？」
「判った。そうする。」
ナミキさんはそう言うと、どこへともなく立ち去っていきました。
「では、ついて来て下さい。」村長さんはガーネにそう言いました。

村長さんに連れられて、ガーネは移動しました。
トラが、ガーネに尋ねました。
「これから、一体どうなるのかしら。」
「さぁ、とりあえずやれる事をやってみるだけですね。」
ガーネはそう答えました。
このやり取りを村長さんを始め、周りにいた村人たちはみんな聞いていました。
「この猫、すごいぞ。人間と話をしている。」
「本当だわ。すごいすごい。」
口々に驚いているのが、聞こえてきました。
目の前の村長さんも驚いていました。
「ガーネさん。これは一体。」
「ああ、この猫は喋るんですよ。
その事も含めてあとで、私たちの事を聞いて頂きたいと思います。」
「そうですか。いや判りました。それにしても、喋る事が出来る猫とはね。」
村長さんは興味深い顔でトラを眺めていました。

やがて、村役場に到着しました。

その頃には、もう村人たちは散らばっていました。
「昨今は話題になるのも、忘れられるのも早いですからね。明日にでもなれば、みんな忘れちゃっていますね。」
ガーネはそうつぶやきました。
職員室を通り、村長室に入りました。
「さぁ、お席に腰をおかけ下さい。」
村長はガーネに席を勧めました。
「では、お言葉に甘えまして、座らさせて頂きます。」
ガーネとトラは、席に座りました。
「では、しばらくの間、ここで待ってて頂けますか。村の代表たちが集まり次第、お話を伺う事にします。」
村長さんは、ガーネにそう言いました。
「はい、判りました。お待ちしております。」ガーネはそう答えました。
ガーネたちは出された飲み物を飲んだりしながら、その時が来るのを待ちました。

その頃ナミキさんは、村の代表たちに声をかけていました。
どの代表もナミキさんにとっては、旧知の間柄でした。
最初に行ったのが、呪術師ミヤビの所でした。
「おーい、ミヤビいるか。いたら返事しろ。」
ナミキさんは、声を張り上げましたが、一向に応答がありません。
しかし、家の煙突から煙が上がっているのを見て、在宅だと気が付きました。
「失礼するぞ。」ナミキさんは、ドアを開けて家の中に入って来ました。
その瞬間、異様な臭気が漂っているのが判りました。
「なんだこれは。」ナミキさんは慌てて、自分の持っていた布で口を覆いました。
しかし、時既に遅くナミキさんは、その臭気のため気絶してしまい

ました。
気が付くと、僅かな灯りがともる、その部屋の診療台の上に寝かされていました。
ナミキさんの目の前には、その薄暗い中で不気味に微笑む人の顔がありました。
「ギャアー。」思わずナミキさんは、叫び声をあげました。
「どうしたのか。」その顔はそう言って、ナミキさんの顔をのぞき込みました。
「何だ、ミヤビか。おどかしやがって。」ナミキさんはほっとしました。
「一体、何をやっているんだ。」
「いや、先日森に行って、薬草やトカゲのしっぽなどを取って来たのだ。
だからちょっと変わった薬でも、作ってみようかと調合していたというわけだ。」
「ちょっと変わった薬って。」
「一時的に人間の精神を壊してしまう薬なんだ。」
「そんな事を・・・。一体それが何の役に立つと言うんだ。」
「私の考えでは、人の健全な精神が、健全な肉体を作るとなっている。」
「なるほど。あえて否定はしない。
だが、それとこの薬を作るのとどういう関係があるんだ。」
「だから、この薬で人間の精神を破壊した後の、肉体が引き起す変化をだな。
じっくり観察して、これからの研究に役立てたいと思っているのだ。」
「物騒な研究をしやがって。
まぁ、今日はあんたとその事で、議論する気は無いんだ。
実は今日、この山の岩壁から落ちた人間を拾ってやったんだ。」
「ほう、この山の岩壁に人がいたというのか。随分、物好きな人間

だな。
一体、誰なんだ。」
「それがな、本人はこの世界の人間じゃないと言い張っているんだ。」
「それは面白い。で、どこから来たと言っているのか？」
「いや、何だか難しい話になりそうだったんでね。
1回、村の代表たちに集まってもらおうと思ったんだ。
そしてその席で、やつの話を一緒に聞こうと思ってさ。」
「なるほど、それでここに来たと言うわけか。了解した。」
「集まるのは、村役場の会議室だ。午前10時に始まる。」
「了解した。必ず行く。」
ナミキさんはゼノンに乗り込み、見送るミヤビさんに手を振って別れました。
「さてと今度はノミチの所に行くか。出かけてなければいいんだけどな。」
ナミキさんは、次の目的地へゼノンを飛ばしました。

ナミキさんは、上空に多くのヤーベが飛んでいる事を確認しました。
「あそこだ。」
ナミキさんは、ゼノンから降りて、ヤーベが集っている場所に足を向けました。
「おーい、ノミチ、いるか。」
ナミキさんは、大きな声でさけびました。
「こっちよ、ナミキ。」
ノミチさんの返事が聞こえた方に、目をやりました。
するとノミチさんが、力いっぱい走ってくる姿が見えました。
「やぁ、ナミキじゃない。お久しぶりね。」
ノミチさんはナミキさんに抱きつくなり、そう言いました。
「えっ、確か昨日会った筈だか。」「あのね。あなたがここに来るのがよ。」

相変わらず、ハイテンションだな。とナミキさんは思いました。
「実は、今日来たのは」ナミキさんはノミチさんに、話をしようとしました。
ですがノミチさんはいきなり、ナミキさんの手を引っ張りました。
「そんな事より、早くこっちに来てよ。」
ノミチさんは興奮して、ナミキさんを連れて行きました。
行った先は、ヤーベたちがたむろしているド真ん中でした。
「すごいな。やーべもこれだけ揃っていると、すごい光景だな。」
ナミキさんは、感心しながら、そう言いました。
「そんな事は、どうでもいいのよ。それより、あちきの話を聞いて。」
ナミキさんは、いつになく、ハイテンションなノミチさんに圧倒されていました。
ですが特に拒否する必要も無いので、うなずきました。
「実はね。すごい発見をしたのよ。」
「発見？」
「ナミキ。
あなたはこのヤーベが、この天空の村に雨を降らせている事は知っているわね。」
「当たり前だ。この天空の村に住む者なら誰だって知っている。
ヤーベが雨鳥とも呼ばれるのも、それが理由だろう。」
ナミキさんは、ノミチさんにそう言いました。
翼竜ヤーベ。
ナミキさんが操る翼竜ライバたちの役割は、主に荷物や人の運搬が仕事でした。
また遠くの人からの連絡手段にも、役立っているのでした。
一方、ノミチさんが操るヤーベの役割はただ一つでした。
但し、それが無ければ、この天空の村に人が住む事は出来ませんでした。
いや、人だけではありません。

動物や植物など生きとし生けるものが、住む事が出来無かったのです。
ヤーベの役割。それはこの天空の村に雨を降らす事でした。
ヤーベは雲の下にある、この山の巨大な湖から、たくさんの水を飲み込みます。
そして、体いっぱいに貯め込むのです。
ヤーベは、その中にあるプランクトンや小魚を消化し、栄養としています。
もちろん、水分も補給しますが、ヤーベが必要とする量はほんの僅かです。
だから残りは、排水される事になります。
ヤーベは排水の際、天空の村を飛び回ります。
ヤーベは、８枚羽の羽を、ヘリのプロペラのように回して飛びます。
その羽の骨に沿って排水管があり、そこから排水するのです。
ヤーベの飲む湖の水は、そのままでは使い物になりませんでした。
ですが、ヤーベに取り込まれた水は、その体内で浄化されていました。
たくさんのヤーベが一斉に、天空の村を飛び回って排水します。
それは慈雨として、この地の生きとし生ける者全てに、恵みをもたらしました。
村人はこの雨を、井戸水や貯水池に貯め込みました。
そして、安定した水の補給を実現したのでした。
「で、それがどうかしたのか？」
「本来、ヤーベは羽の排水管の複数の穴から、排水するんだけどね。羽の広がりを狭める事により、雨では無くて滝のように流す事が出来るの。」
「その状態では、飛ぶ事なんか出来ないだろう。」
「だから、ギリギリ飛べる程度に狭めるのよ。
もちろん、飛ぶ高さは低くなるけどね。その分勢いもすごい筈よ。」
「と言う事はまだ、テストはしていないんだな。」

「その通りよ。飛べるギリギリの狭める角度は判ったんだけどね。実際の排水はしていないの。
だから、今やってみようと思って、あなたをここに呼んだの。ねぇ、一緒に体験しましょう。」
「ちょっと待て。テストをしたけりゃ自分1人だけでやれ。俺を巻き込むな。」
「フフフ。もう手遅れよ。さぁ、ヤーベ。さっさとやっておしまい。」
そのノミチさんのかけ声に一匹のヤーベが、2人の頭上に飛びました。
そして羽を少し狭めた状態で、排水を開始しました。
それは、ものすごい水流となって、2人を襲いました。
あっという間に、その水流に巻き込まれ、柔らかい土の上に体ごと落ちました。
そこに、更に大量の水が注ぎ込まれました。
ナミキさんとノミチさんは、泥になった土の中に埋まりました。
やがて、排水は終わりました。
しばらくして、2人の人間が、顔を上げました。
「プワァッ。」「プワァッ。」
「・・・・。」「・・・・。」
「・・・・てへ。失敗しちゃった。」
「・・・・その前に何か言うべき言葉があるんじゃないか？」
「・・・・ごめんなさい。」

2人は、ノミチさんの家に行ってシャワーを浴び、そして着替えました。
「ああ、やっとさっぱりしたわ。
お互い同年齢で、しかも同じ背格好だったのが、幸いしたわね。
あちきの服が、ちゃんと似合っているじゃないの。
あなたは、いいお友達を持って幸せね。」ノミチさんはそう言いま

した。
「誰がいいお友達だって。誰がこんな目に会わせたと思っているんだ。」
いかにもつかみかからんばかりに、ナミキさんは責めたてました。
「いや、いやあね。お茶目で言っただけじゃないの。
本当に悪かったって、心の底から後悔しているんだから。」
と言いつつ、ノミチさんは笑っていました。
こいつは、子供の頃からこういう奴なんだ。ナミキさんはため息をつきました。
「じゃあ、俺はもう帰るよ。」
そう言って、ナミキさんは立ち去ろうとしました。
「あら、今日は何か、あちきに用事があったんじゃなかったの？」
ノミチさんのその言葉に、大事な事を思い出しました。
「あのな。お前がこんなテストなんてやるから、すっかり忘れていたぞ。
今日、お前の所に来たのはな。」
ナミキさんはそう言って、自分が助けた人間の話をしました。
そして、その人の話を聞くようにノミチさんに促しました。
しばらく考えた後、ノミチさんは答えました。
「なるほどね。ミヤビが面白がるのが判るわ。
あちきも興味があるわね。判ったわ。あちきも会議室に行く。」
ノミチさんも集まる事に同意しました。
「でも、ナミキ。もう、トモネ様の所へは行ったの？」
「いや、まだだが。」
「だったら、早く行った方がいいわ。
あそこに行ったら、なんやかんや言いながら、長く引き留められちゃうし。」
「お前が言うな。」
ナミキさんは、ゼノンに乗り込みました。
「じゃあ、また後で会おう。」ナミキさんはノミチさんにそう言い

ました。
そして再び、ゼノンで大空に舞い上がりました。
「さてと。マサギは村役場の職員だから、村長から話を聞いている筈。
あたしが、連絡する必要も無いだろう。
じゃあ、真っすぐオババ様の所に向かうか。」
ナミキさんはそう言って、ゼノンと飛んで行きました。

ナミキさんは、村の最長老であるトモネ様の家の前に来ていました。
「オババ様、いるか？」玄関の戸をガラリと開けました。
ナミキさんは、靴を脱ぐと、ズカズカ家の中に入りました。
そして、一番奥の部屋の戸を、開けました。
「あっ、オババ様。見つけた。」ナミキさんは、嬉しそうに言いました。
「全く、オババ様は玄関で声をかけても、返事もしないんだからな。いないかと思った。」
トモネ様は、部屋の畳の上で座っていました。
湯のみでお茶を飲みながら、ナミキさんにこう言いました。
「ナミキ。まずはその戸を閉めて、ここに座りなさい。」
トモネ様は、ナミキさんに静かにそう言いました。
「はい。」何か悪い事でも言ったかなと思いながら、戸を閉めました。
「ナミキや。お前はいろいろ間違っている。
まず、玄関には呼び鈴があった筈。何故、それを鳴らさない？
また、そこに住んでいる人の許可も得ずに何故、勝手に入って来るのじゃ？」
「それは、だって俺は昔から、オババ様の事を知っているし・・・。」
「ナミキや。親しき仲にも礼儀は必要なのじゃよ。
それとオババ様って誰の事じゃ。あたしゃ、トモネっていう名前な

んだがの。」
「それは・・・。判っているんだけど。」
「じゃあ、これからはちゃんと人の名前を呼ぶんじゃぞ。判ったな。」
「はい。オババ、いやトモネ様。」
「よし、それでいいんじゃ。」トモネ様は、そう言ってお茶を飲もうとしました。
「うん。何じゃ。もう無いのか？
ナミキや。ちょっと台所に行って、お茶を入れて来てくれんか？」
「えっ、でもちょっと急ぎの話があるんだが・・・。まぁ、いいか。まだ時間もあるしな。
はいはい、判りました。少し待っていて下さいね。トモネ様」
ナミキさんはそう言って、台所に行きました。
きゅうすの中身の茶葉は既に広がっていました。
ナミキさんは、中の茶葉を捨て、新しい茶葉を入れました。
鉄瓶には、熱いお湯が沸いていたので、それを注ぎました。
きゅうすから、湯のみにお茶を注ぎ、トモネ様の所に持って行きました。
「トモネ様。お茶が入ったよ。」
そう言って、トモネ様の前に湯のみを差し出しました。
トモネ様は、お茶を一口飲みました。
「うん。なかなか良い味じゃ。ナミキや。お茶の入れ方がうまくなったの。」
ただ、新しい茶葉にお湯を注いだだけなんだけどな。
ナミキさんは心の中で、そう思いながら言いました。
「そうか。それはよかった。」
トモネ様は、お茶を堪能した後、ナミキさんに尋ねました。
「ところで、今日ここに来た理由は何かの？」
「実は。」
ナミキさんはそう言って、自分が助けた人間の話をしました。

そして、その人の話を一緒に聞いて欲しいとトモネ様に訴えました。
「何と、異星人がこの星に来たというのじゃな。
それなら、会わずにはおられまいて。」
なんか、エキサイトしていました。
「いや、違う世界から来たとは言っていましたが、宇宙人では無いようです。」
「それは残念。じゃが、久々に面白い事になりそうじゃ。
行く事にするとしようかの。」
「そう言ってくれると有難い。では、あたしと一緒に村役場まで来てくれ。」
「あのライバに乗るのかの。少し気が引けるの。」
「大丈夫。ゼノンには、かごも付けてきたんだ。
あたしも、そばにいるから安心して乗ってくれ。」
こうして、ナミキさんは、トモネ様を説得し、一緒に村役場へ向かいました。
「久しぶりの空の散歩じゃ。なかなか気持ちがいいのう。」
「だろう。たまにはこんな風に外に出てみるのも悪くないんじゃないか。
なぁ、オババ様。」
「トモネじゃ。」ゴツン。
トモネ様のげんこつに、ナミキさんは思わず頭を押さえました。
やがて前方に、村役場が見えてきました。
「時間的には、十分間に合うはず。もう、みんな来ているかな。」
ナミキさんは、そう思いながら飛んで行きました。

第7話「天空の村にて」最初だよ。（終）

第7話「天空の村にて」最初だよ。（後書き）

今回のお話は、第7話「天空の村にて」の第1話です。
今回の世界の話は、サブキャラクターが結構出てきます。
また、天空の村についての説明も少なからず、入っています。
特に盛り上がる事も無く、淡々と、時が流れて行く。
そんな話にしたいなと思っています。

無料小説投稿について。
ネットでも、小説投稿が出来るサイトが多くなりました。
私も、投稿している1人です。
これらのサイトに投稿した小説は、無料で読める物が多くあります。
でも、それは本当に無料なのでしょうか？
この小説を読むためには、パソコンやスマートフォンなどの機材が必要です。
これらを購入する資金が要ります。
次に、インターネットに接続をするための契約をしなければなりません。
それにも、お金は必要です。
もちろん、電気も使用出来なければなりません。
使う場所も必要です。
これらの必要な物が全て揃って初めて、やっと無料の小説が読める事になります。
つまり、厳密にはタダではありません。

もともと、パソコンやインターネットを使っていた人もいるでしょう。
また、図書館などで、パソコンを無料で使えるところもあるでしょ

う。
そういう所で読むのであれば、無料と言えない事は無いかもしれません。
ですが、それでも何の損も無いのかと言えば、それは違うと思います。

小説である以上、ある程度の大きさの文章量があります。
それを読もうとすれば、どうしても時間がかかってしまいます。
その分、それを読んだ人の人生が削り取られます。
また、文章を理解しようとすれば、頭を働かせる必要もあります。
頭は、使えば使うほど、研ぎ澄まされるものかもしれません。
ですが、それとは反対に消耗あるいは劣化する部分も必ずあります。
稚拙な文章であれば、なおさらでしょう。
自分の中で何よりも大切なこれらと引き換えに、人は小説を読む事になります。

ただ、そんな大事なものと引き換えるには、無料小説はリスクがあります。
本屋で並べられている本は、今やいろいろなジャンルがいっぱいあります。
ですが、そのどれもが、第3者のチェックを通って生まれた物です。
厳しい編集者や批評家にたたかれながら生まれた物です。
当然、ある一定以上の品質が、そこにはあります。
自分の見たいジャンルの本を読めば、その面白さに引き込まれるでしょう。
でも、無料小説は違います。
それをチェックするのは、書いた本人のみ。当然、査定は甘くなります。
無料小説は、玉石混交なのです。
感動させられ、読んでよかったと思う作品もあります。

それとは逆に、長い時間読んだ後で「つまらない時間を過ごしてしまった。」
そんな感想を抱いた作品もあるでしょう。

こんな事も言えるかもしれません。
無料小説で、偶然、巡り合った1つの作品に、感動したとします。
ですが、それと同じ作者だからと言って、その品質が続くとは限りません。
第3者のチェックを経ないで生まれた作品に、安定した品質を求める。
これは、どうしても無理があると考えざるを得ません。

では、こうしたリスクを持つ無料の小説投稿は、無い方がいいのでしょうか。
私は、否と思います。
例えば、ここに稚拙で、読むに耐えない文章であったとします。
それは、筆者の文章だったりします。
それを読んだ人は、不快な思いをするかもしれません。
でも、人が自分で書いた物には、自分の心が、自分の思いが宿っています。
自分が書いた物。それは小説、マンガ、ブログ何でも構いません。
これらの作品をネットで公開するという事。
それは作品を通じて、多くの人に自分の存在を訴えている。
そんな風に筆者は考えるようになりました。
だから、そんな機会を無料で与えてくれるさまざまなサイト。
そんなサイトがある事を心から、感謝しています。

自分の書いた作品。
それは自分が生きていた証(あかし)です。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第7話「天空の村にて」ふたつめだよ。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第7話「天空の村にて」ふたつめだよ。のお話です。
この回では、ガーネとトラが、天空の村の会議室に呼ばれます。

第7話「天空の村にて」ふたつめだよ。

第7話「天空の村にて」ふたつめだよ。

ナミキさんとトモネ様は、村役場の会議室に入りました。
「おっ、みんな来ているみたいだな。」
「あっ、ナミキ、やっと来たのね。
人に呼び出しをかけた割には、来るのが遅いじゃない。」
ノミチさんが、声をかけました。
「まぁ、オババ、いやトモネ様の所へ行っていたんだ。仕方が無いだろう。」
「そうか。確かそんな事を言っていたわね。あっ、トモネ様。お久しぶりです。」
「おお、ノミチか。相変わらず、元気いっぱいじゃな。」
「こんにちわ。トモネ様。これは先日頼まれたお薬です。
ついでに持ってきました。どうかお納めください。」
「これは、ミヤビさん。いつもお世話をおかけします。」
「あれ、トモネ様。何でミヤビばかりに、そんな丁寧語を使うの？」
「当たり前じゃ。ミヤビさんは、この村唯一の呪術師じゃぞ。
あたしゃミヤビさんのおかげで、こうして長生きも出来ておる。
敬意を表すのは、当然の事じゃ。」
「それなら俺だって、ライバでみんなに貢献しているが。」とナミキさん。
「あちきだって。あちきだって。」とノミチさん。
「この美貌と色気で、みんなに幸せを与えているわ。」
「お前はヤーベ使いだろうが。この雨女。」ナミキさんはつっこみました。
「何よ、この若ボケ女。」
「何だ、その若ボケ女と言うのは。」

「だって、そうじゃない。
あちきの所に来る早々、自分が来た用事を忘れているじゃないの。」
「あれはお前のせいだろうが。あんなつまらないテストなんかやりやがって。」
「何よ。」「何だよ。」
「まぁ、まぁ。お2人とも、気を静めて下さいまし。」
「おや、マサギ。やっと来たのか。」
「ええ、やっと体が空きました。まだ会議の時刻より前ですよね。よかった。
あっ、トモネ様。お久しぶりでしたね。いつもお元気そうで、何よりです。」
「おお、マサギ、会いたかったぞ。」
トモネ様は涙を流して、マサギさんに抱きつきました。
「随分、見ないうちに綺麗になったのう。このオババも嬉しい。」
トモネ様は、相好を崩して喜んでいました。
「マサギのおばあさんはどうしたかの。元気でやっているか？」
「はい。おかげ様で、トモネ様に負けないくらい元気です。」
「そうかそうか。それは良かったのう。」
この2人に背を向けて陰口をたたいている人間が2人いました。
「何だ、自分でオババとは。俺には、トモネと呼べってうるさかったのに。
しかも、たかが会えたぐらいで、あんなに歓迎しやがって。
俺たちとは、全然待遇が違うじゃないか。」
「全くその通りね。
あちきたちの中では、マサギちゃんはトモネ様に、一番可愛がられていたからね。
仕方が無いと言えば、仕方が無いんだけど。」
「そうそう、小さい頃からそうだった。
一緒につるんでいても、ミヤビとマサギは別格だったな。」
なにやら、不穏な空気がたちこめていました。

「こんにちわ。ナミキさん。ノミチちゃん。」
2人の目の前には、大きく目を見開いて、嬉しそうなマサギさんがいました。
そして、がしっと2人の首を左右の腕で、抱えました。
「よ、よう、相変わらず、綺麗な窓だな。」
「そ、そうね。いいお天気だわ。」
いきなりの事で2人は思わず、訳の判らない事を口走っていました。
2人もマサギさんの事は好きなので、面と向っては何も言えないのでした。
「じゃあ、みなさん。そろそろお時間ですので、席について下さい。」
マサギさんがそう言うと、みんなはうなずいて、いつもの席に座りました。
「ところで、その異星人とやらは、いつ頃来るのかの。」
トモネ様がそう言ったので、みんなは首をかしげてしまいました。
そして、その視線はトモネ様からナミキさんに移りました。
「こ、こらオババ、いやトモネ様。異星人では無いと言ったじゃないか。
別の世界から来た人間なんだよ。」ナミキさんは、大声をあげました。
「そうだったかの。あたしゃ、てっきり異星人だと思って来たのじゃが。」
みんなの視線が更にきつく、ナミキさんに注がれました。
「まぁ、この若ボケ女が連絡係になったのが、そもそもの間違いなのよ。」
「ナミキ、間違った事を訂正するのは、格好悪い事では無い。」
「ナミキさん。早くトモネ様に謝って、訂正した方がいいですよ。」
「ナミキ。恥を知るのも、人間として時には必要な事じゃよ。」
ノミチさん、ミヤビさん、マサギさん、そしてトモネ様に注意されました。

「こらぁ、あたしは無実なんだぁ！」
ナミキさんの叫びは、部屋中に空しくこだましました。

しばらくして、予定時間になったのか、村長さんが現れました。
その後ろには、ガーネがついて来ていました。
ガーネの右肩にはいつものように、トラがちょこんと乗っていました。

部屋のみんなが席に着きました。そして、村長さんが口を開きました。
「ここにおられるのが今日、ナミキさんが助けたガーネさんとトラさんです。」
村長さんは、2人を紹介しました。
ガーネとトラは、頭を下げました。
「私の名前はガーネです。この猫はトラと言います。
この度は、この村の人のご好意のおかげで助かりました。
特にナミキさんには、この山から落下しているところを、助けて頂きました。
本当に、有難うございました。」
そう言ってガーネは、トラと共に頭を下げました。
「いやあ、いいんだよ。そんな事。」
ナミキさんは、右手で頭の後ろを押さえながら、言いました。
「あれ、あのナミキが、照れているわ。」
ノミチさんが、ミヤビさんにささやきました。
「めったに、お礼なんて言われないから、恥ずかしがっているのだな。」
ミヤビさんはそう答えました。
「ナミキさんって、純情なんですね。」
うんうんと、マサギさん。
「あたしゃ、あんなナミキ、久しぶりに見たの。」

トモネ様は、珍しいものを見るように、ナミキさんを見つめていました。
「確かに。なかなかいい表情をしていますね。ナミキさん。」
村長さんも、何故か変に感心していました。
部屋にいる全員に見つめられて、ナミキさんは顔を真っ赤にしました。
「こらー、俺の顔をそんなにじろじろ見るな。
大体、今日の会議の主役は、あの2人であたしじゃないんだ。」
ナミキさんは、大声を出してごまかすしか、どうしょうもありませんでした。

「さて、ナミキをいじるのは、これくらいにして。」
ミヤビさんは、急におごそかな顔になりました。
それにつられて、ナミキさん以外の他の代表たちも真面目な顔つきになりました。
あたしは、いじられてたんかい。ナミキさんはそう思いました。
まぁ、風向きが変わったみたいだしと、ナミキさんも真面目な顔をしました。
「さて、確か君の名前はガーネと言ったね。
君は一体、何者なのか？何故、ここに来たのか？」
ミヤビさんは、質問しました。
ガーネは自分が迷宮で、トラと旅をしている事。
それ以前の記憶が、自分にもトラにも無い事。
そして迷宮の道やドアの事についても、そこに集まった人たちに説明しました。
「なるほど。君はその迷宮のドアを開いて、ここに来たと。」
「はい。ドアを開くと、そこにはこの山の岩壁があったんです。
そして、それにつかまってみたところ、この世界に来たというわけです。」
「そしてその岩壁から落ちた所を、あたしが拾ったってわけか。」

ナミキさんは、ガーネにそう言いました。ガーネはうなずきました。
「で、これから君はどうするつもりなのか？」
再び、ミヤビさんは質問しました。
「ここが、自分やトラの世界なら、この旅はこれでおしまいです。ですが違えば、迷宮のドアがまた現れるので、私たちは迷宮に戻ります。
とりあえず、今はそれが判るまで、ここに滞在したいのです。」
ガーネは、部屋の中にいる人たち全てに、そう訴えました。
「どうかよろしくお願いします。」トラも頭を下げました。

「聞けば、確かに変わった話よね。すぐにはとても信じられないわ。でも、ガーネさんでしたっけ。
あなたの隣にいる、トラっていう名前の猫は確かに不思議な猫ね。体もここの猫にしては小さすぎるし、しかも人の言葉を喋るなんて。
そんな猫は見た事が無いわ。
それに、さっきあなたが言っていた、ここに来た時の話。
それは、ナミキ自身から聞いた話と一致するしね。
ナミキはちょっとおかしいところもあるけど、でたらめは言わないわ。
だから、あちきは信じていいと思う。」ノミチさんは、そう言いました。
ちょっとおかしいってなんだ。
そういきり立つナミキさんを、ミヤビさんが制しました。
「私は、ちょっと確認したい事があります。
その子猫ちゃんを、私のところに寄こしてくれませんか？」
マサギさんが、何やら真剣そうな顔で、ガーネにそう言いました。
ガーネとトラは、顔を見合わせ、うなずき合いました。
トラは歩いて、マサギさんの目の前に立ちました。
「ほら、こっちへおいで、子猫ちゃん。」
そう言ってマサギさんは、おいでおいでをしました。

トラがマサギさんに近付くと、マサギさんは両手でトラを抱きかかえました。
マサギさんは顔を真っ赤にして、トラを可愛がりまくりました。
「ああ、可愛い、可愛い過ぎるわ。ほら見て。この肉球なんてプニプニよ。」
トラに夢中になって遊んでいるうちに、マサギさんはふと気が付きました。
周りにいるみんなの目が、冷たくなっていたのです。
その時、ふいに肩をたたかれました。
マサギさんが振り返ってみると、ナミキさんが怖い顔をしていました。
「なぁ、今は会議中なんだろ。もうやめろ。猫だって迷惑がっているだろう。」
マサギさんはトラをテーブルの上に置くと、コホンと咳をしました。
そして先ほどのような真剣な顔に戻って、こう言いました。
「べ、別に遊んでいたわけでは、ありませんよ。
ただ、この子が本当に猫なのか、確認したかっただけです。
ガーネさんの言っている事を、認めるかどうかの判断材料にしていただけです。」
「ほう。ではマサギ。お前さんの意見は?」
ナミキさんは、マサギさんの返答を促しました。
「もちろん、この子猫ちゃんは、可愛いです。」マサギさんは、即答しました。
「誰もそんな事は、聞いていないだろうが。」ナミキさんは詰め寄りました。
「えっ、ああ、そうでしたね。
ええ、私もガーネさんの言う事を信じたいと思います。」
マサギさんも賛成しました。
「あたしは、当事者だからな。信じるしかないだろうな。」

ナミキさんはそう言いました。
「では、あとは私と、トモネ様と言う事になるわけだ。」
ミヤビさんは、話を続けました。
「今回は状況証拠だけで、判断するしかないわけだ。
結論としては、ノミチの意見に賛成だな。
確かにこの天空の村には、このような不思議な猫は存在しない。
そして、彼が岩壁に急に現われて落下した事は、ナミキの証言とも一致する。
この2つを考慮すれば、彼の話を事実と考えても差支えないと思う。」
「では、ミヤビもガーネの話を信じるというわけだな。
じゃあ、最後はオババ、いやトモネ様だ。さぁ、どうする?」
「お前、わざと間違えておるじゃろう。まぁ、それはこの際、いいとしよう。
あたしゃ、あまりこういう話には興味が無いんでな。
お前たちが信じると言うなら、あたしゃ、何も言う事は無いよ。
本当は、異星人の方が、よかったのじゃがな。」
「まだ言っているのか。ガーネは宇宙人じゃない。」
ナミキさんは、声を大きくして言いました。
「ああ、判ったよ。耳元で大きな声を張り上げなさんな。
あたしゃ、老い先短いんだ。もっと大切に扱え。」
トモネ様は、ナミキさんに注意しました。
大体、あんたが、と言いそうになるのをナミキさんはこらえました。
「まぁ、いいや。で、村長さんの意見も聞いておこうか。どう思うんだい。」
ナミキさんは、村長さんに尋ねました。
村長さんは右手を額に載せて、何やら考えているようでした。
しばらくして、ガーネの方を振り向いて言いました。
「いやあ、あなたがこの世界の人間では無いなんて、とても信じら

れません。
ですが、この話し合いの結果から言えば、事実と認めざるを得ないでしょう。
私も、信じる事にしたいと思います。」
「そうか。じゃあ、これでガーネが言った事はみんな信じたわけだ。ところで、本人はしばらく滞在したがっているが、どうしたらいいと思う？」
ナミキさんは、みんなに尋ねました。
その時、最長老のトモネ様が、手を上げました。
「トモネ様。何かご意見でもおありでしょうか。」村長さんは尋ねました。
「どうじゃろう。
そういう事情なら、しばらくの間ここで、滞在させてみてはどうじゃ。
もちろん、ここにいる間に必要な費用は、村の方で面倒を見る必要があるがの。
みんなの意見を聞きたい。」トモネ様はみんなにそう提案しました。
「あちきは、滞在する事には何の問題も無いわ。問題はその費用よね。
でも折角助けた命なのに、１文無しで路頭に迷わせるのも可哀そうだわ。
今回は例外中の例外と言う事で、滞在費用を出してあげてもいいんじゃない。」
ノミチさんも賛成しました。
「私もその意見に賛成だ。
それに、滞在費用については私にも考えがある。」ミヤビさんも賛成しました。
「私も賛成です。」「もちろん、俺も賛成だ。」
マサギさんとナミキさんも賛成しました。
全員が賛成した事を確認した村長さんは、ガーネにこう言いました。

「どうやら、この会議の結論が出たようです。
ではガーネさん。しばらくの間ここで、ゆっくりとご滞在下さい。
後の事は、ここにいる村役場の職員のマサギに任せるつもりです。
何か滞在中不都合がございましたら、遠慮なく彼女にご相談下さい。
さてと、他に皆さまの中から、他に質問はございますでしょうか？」
その質問に誰も、答える者はいませんでした。
「では、これでこの会議を終了させて頂きます。
皆さま、お忙しいところ、有難うございました。」
村長さんがそう言うと、1人ずつ部屋を出て行きました。
その中でミヤビさんだけが、ふと気が付いたように立ち止まりました。
そしてガーネの方を向いて、こう言いました。
「ああ、ガーネさん。」「ガーネと読んで下さって結構ですよ。」
「では、ガーネ。後でいいから体が空いたら、私の呪術院に来てくれないか？
いろいろと相談したい事があるんだ。」
「えっ、あ、はい。判りました。後ほど、伺わせて頂きます。」
「そうか。では待っている。
あとそれから、今みんなは、ガーネの自己紹介を聞いた。
だから、トモネ様以外の村の代表には、もう敬語を使う必要は無いと思う。
普通に喋って欲しい。でないと話しづらいのだ。
多分、みんなも同じ意見だ。」
ガーネはそれを聞くと、笑いながらこう答えました。
「判りました。ミヤビさん。」
ミヤビさんはうなずくと、部屋の外に出て行きました。
最後に、村長さんとマサギさんが出て行きました。

「やりましたね。これで大出を振ってここにいられますよ。」
ガーネは手を、トラは前足を使ってたたき合いました。

「うわぁ、私早く美味しい物が食べたいわ。
綺麗なお風呂にも入りたいし、ふかふかのベッドで寝たい。」
トラは有頂天になっていました。
ガーネもうんうんとうなずきました。
「まぁ、迷宮からここに来るまでに、大変な事ばかりでしたからね。
これくらいの恩典があっても、いいでしょう。」
ガーネとトラ、共に浮かれていました。

トントン。ドアをたたく音が聞こえました。
ガーネとトラは、背筋をピンと伸ばしました。
「はい、いいですよ。」
部屋に入って来たのは、先ほどマサギと呼ばれていた女の子でした。
「こんにちは。あの、初めまして。
先ほどもお会いしましたが、この村役場の職員でマサギと言います。
ガーネさんがここに滞在中、何か困った事がありましたら、私にご連絡ください。
どうかよろしくお願いします。」
そう言って、少しぎこちない手つきで名刺を差し出しました。
「ああ、マサギさんですか。こちらこそ、よろしくお願いします。」
ガーネも挨拶をしました。
「では、これからガーネさんたちの宿舎をご案内します。こちらへどうぞ。」

ガーネとトラは、マサギさんと一緒に村役場の外に出ました。
村役場から、そう距離が離れていないところに、その宿舎はありました。
「ここがガーネさんたちが滞在する間の、宿泊施設となります。」
ガーネとトラは、自分たちが入る部屋を案内されました。
「ここですか。随分質素な、いやさっぱりとした部屋ですね。」
「はい、なかなかよい部屋だと思います。」

何となく、話がかみあっていない感じもありましたが、無視する事にしました。
「では、しばらくひと休みしていて下さい。あとで私がこの村をご案内します。」
そう言って、マサギさんは部屋を出て行きました。
「最初、考えていたのとはちょっと違うわね。」
「でも、景色は最高じゃないでしょうか。」
ガーネは窓を開けて、深呼吸をしました。「空気も美味しいですよ。」
トラも真似をしてみました。「本当だわ。それに風が気持ちいい。」
「本当ですね。陽射しは少し強いですが、我慢出来ないほどじゃありません。」
ガーネとトラは、ベッドに寝転んでみました。
「まぁ、ふかふかではないんですけどね。」
「ええ、でもそんなに悪くないわ。これならぐっすり眠れるでしょう。」
「長い事、迷宮の中で、しかも階段を歩き続けでしたからね。あの時に比べれば、天国ですよ。」
「そうね。そう思うわ。」
ガーネは、用意されてあったお茶を飲みました。
トラにも、少し水で薄めたものを飲ませました。
「その茶飲み茶碗、横に広いから飲みやすいでしょう。」
「ええ、綺麗に全部飲めたわ。」トラは、口の周りをペロリと舐めました。
ガーネもお茶を飲み干しました。
しばらくすると、宿舎の人がやって来ました。
そして何か紙切れのようなものを、ガーネに手渡していました。
その人が、部屋を出て行った後、ガーネに尋ねました。
「何なの？」トラは尋ねました。
「これは食券ですね。これを持っていけば、昼ご飯が食べられるら

しいですよ。」
「そう、じゃあそろそろお昼だし、行ってみない？」
「いいですね。行ってみましょう。」
1階にある食堂には、結構人が集まっていました。
食事を注文する場所にも、少しばかり列が出来ていました。
ガーネも一緒に並びました。しばらくすると、ガーネの順番がやってきました。
「あの、これでお願いします。」ガーネは食券を2枚差し出しました。
「はい、判りました。」
係りの人は、その食券と引き換えに、ラーメンを2つ載せたトレイを置きました。
「あの、これが私たちの昼ご飯なんですね。」
ガーネは念のために、確認をしました。
「はい、そうですよ。」係りの人はすぐにそう答えました。
ガーネは、トレイを持ってトラを探しました。
トラには、あらかじめテーブルの席を取っておくように、頼んでいたのです。
キョロキョロ周りを見回すと、食堂の端にあるテーブルにトラはいました。
「ここよ。ここ。」
食堂にいる人が、一斉にトラの方を向きました。
ああ、あれがお喋り出来る猫なのか、と言う言葉が、次々と聞こえてきました。
ガーネはなんだか照れくさそうに、トレイを持ってトラの元へ行きました。
「はい、お待ちどうさま。」ガーネは、トレイをテーブルに置きました。
「あら、私たちはラーメンなの？」「どうやらそうみたいですね。」
ガーネは、小さい茶碗とスプーンを食堂からもらってきていました。

小さい茶碗に、麺とスープを入れました。
スプーンで、麺を少し細かくした後、スープを水で薄めて飲みやすくしました。
「さぁ、召し上がれ。」ガーネはトラにそう言いました。
トラは、ずるずる麺を食べ、スープを飲みました。
「どうです。お味は？スープは薄いでしょうか？」
トラは、首を横に振りました。
「麺は丁度いい硬さだわ。
スープはもともと濃いのでしょうね。薄めた事で丁度いい味になったわ。」
「どれどれ、私も頂きましょう。」
ハシを開いて「頂きます。」と礼をした後、ガーネも食べ始めました。
「ああ、トラが言った通りですね。少しスープは濃いようです。」
ガーネはそう言って、水を足しました。
「ああ、これなら丁度いいですね。
ちなみに麺は、個人的にはもっと柔らかい方がいいですね。」
ガーネは、ラーメンを食べながら、そう言いました。
食事を食べ終わると、席を立って食器を片づけました。
その後、自分たちの部屋へ向かいました。
部屋の中には、歯磨きセットが置いてあります。
部屋の洗面所で、ガーネとトラはいつものように、歯を綺麗に磨きました。
差し込んできた太陽の光で、その歯がキラリと輝きました。

午後になり、休憩しているガーネの部屋に、トントンとたたく音が聞こえました。
「はーい。」ガーネがドアを開けました。入って来たのは、マサギさんでした。
「約束通り、お迎えに来ました。

あの、先ほどは言い忘れていたのですが、もうお昼はお済みでしょうか？」
マサギさんは恐る恐る尋ねました。
「はい、ラーメンを食べました。」ガーネはそう言いました。
ああ、やっぱりと後悔したように手で顔を覆いました。
「あっ、そうでしたか。大変申し訳ありません。
実は、これからお食事に誘うつもりでいたのです。
でも、もう食べてしまわれたんですよね。本当に申し訳ありませんでした。」
そんな、あなた。ガーネもトラも心の中で、そう思いました。
でも、もうお腹はいっぱいでした。
「いいえ、お気持ちだけで十分ですよ。」そう言うのが精いっぱいでした。
でも、落胆した表情を、隠す事は出来ませんでした。
「申し訳ございません。申し訳ございません。」
半分、涙目になりながら、マサギさんは謝りました。
ガーネはトラと顔を見合わせて、ため息をつきました。
そしてもう終わった事ですからと、マサギさんを慰めました。

「では、これから村をご案内します。ご用意は如何ですか？」
「はい、大丈夫です。いつでも行けます。」
マサギさんはガーネとトラを連れて、宿舎を出ました。
「何か乗り物に乗るんですか？」
「村を案内すると言っても、中央にある住宅街付近だけなんです。
だから、それほど広く無いんですよ。」
マサギさんはそう答えました。

住宅街にある人家はすべて一軒家でした。またそこには、市場もありました。
食料品を始め、衣服、日常雑貨、金物などさまざまな物が売られて

いました。
「いろいろな物がたくさん売っていますね。」ガーネとトラは感心しました。
「はい。日常で必要な物は、ここで全て購入出来ます。」
「これ全部1つ1つ見て歩きまわったら、半日潰れてしまうかもしれませんね。」
市場を出ると、広い公園がありました。
そして、その近くに大きな建物がありました。
「マサギさん。あれは何なのでしょう。」
「呪術院です。あそこで病気などの治療を行っています。
院長は先ほど会議室にいました、ミヤビさんです。
そう言えばさっきミヤビさんが、相談があるような事を言っていましたね。
ガーネさん、ちょっと寄って行きますか。」
ガーネはしばらく考えていましたが、やがて口を開きました。
「いや、今は案内を先にしてもらいましょう。
マサギさんに、余計な時間を使わせるわけにもいきません。
それに寄るのは、後でも構わないみたいな事を言っていましたしね。」
「そうですか。そう言って頂けると私も助かります。」
村の住宅街のはずれに来ました。
「ここから先は、森林や放牧用地です。」
「放牧用地っていうと、家畜がいるわけですね。見てみたいです。」
「すみません。
残念ながらこの先は、特別に許可を取ったものしか入れないのです。」
「そうでしたか。」ガーネはちょっとがっかりしました。
「じゃあ、住宅街より外は、全てあんな感じなんですか？」
「いえ、違います。

その他にも小規模ながら、工場や掘削場、そして発電所などがあります。」

「発電所？ここは電気が通っているんですか？」

「はい。火石（かせき）と太陽の光を利用しています。」

「火石とは一体、何なのですか？」

「私もよくは、知らないのです。

聞いた話では、とても強いエネルキーをたくさん蓄えている岩石なのだそうです。

そしてその岩石の集合体である岩盤が、この山の地層にはありました。

そこで、その火石を地層から取り出して、村に運んだのです。

発電所は、火石のエネルギーを利用して、電気を発生させるために作られました。

ただ、問題が発生しました。

発電所は、エネルギーを得るために、化石の活性化を行っています。

ところが、使用が進むにつれ、不活性化が思ったよりも加速してしまったんです。

その結果、予定より早い段階で、電気を得る事が出来無くなってしまいました。

それで一時は、電気の使用を止めてしまう事も、検討されたらしいのです。

ですが、太陽の光を照射する事で、再活性化させられる事が判りました。

加えて、火石のエネルギー量の回復や増幅が、可能な事も判ったんです。

今では、どこの家庭にも、送電されるようになりました。

私たちの生活にかかせない、貴重なものとなっています。」

「すごいですね。それを全部ここの人たちが開発したんですか？」

「いえ、違います。これらは全て、地上でつちかわれた技術なんです。

その技術を昔、村人が地上で暮らす人たちから学んだ結果、実現させたんです。」

「いや、それでも大したものですよ。」ガーネは、賛嘆しました。

そんなガーネを見て、ちょっとマサギさんは自慢気な顔をしました。

そして、話を続けました。

「発電所の話は、これくらいにして村の周りの話に戻りますね。

このずっと向こうには、翼竜の棲みかもあるんです。」

「翼竜？

ここに初めて来た時、助けてくれたあのライバっていう名前の翼竜ですか？」

「はいそうです。でもライバの他にもう1種類、翼竜がいるんです。」

「そうなんですか。それは一体どんな翼竜なんですか。」

「口で言うよりも、実際見た方が早いと思います。

まもなく、現れると思いますので、期待して待っていて下さい。」

「判りました。楽しみにしています。」ガーネはそう言って、目を輝かしました。

やがて、村の案内を終えると、マサギさんが時刻を確認していました。

「これで私の案内は終わりです。

ですが、もし少しお時間を頂けるなら、私と喫茶店に行きませんか？

お見せしたい物があるのです。」

「ご存じのとおり、特に何かしなければならない事が、あるわけではありません。

御好意に甘えさせて頂きましょう。トラもそれでいいね？」

「もちろんよ。でも何か美味しい飲み物があるといいな。」

トラは、期待しました。

「では、行きましょう。」

ガーネとトラは、マサギさんと一緒に喫茶店に入りました。

そして、窓際のテーブルの席に着きました。
ガーネとマサギさんは、コーヒーを注文しました。
トラには、猫用の甘い飲み物を注文しました。

注文した飲み物を待っている間、ガーネはマサギさんに尋ねました。
「ところでマサギさんは、他の村の代表の人たちとは親しげでしたね。
お知り合いなんですか？」
「はい。ナミキさん、ノミチさん、そしてミヤビさんはよく知っています。
実は、この3人は、学生時代の同級生だったんです。
登下校や授業中、そして休み時間に、よく4人で一緒に行動しました。
学校を終わってからも、互いの家に行って遊んだりしていました。」
「なるほど、そうだったんですか。じゃあ、今でも、遊ぶ事があるんですか？」
「昔ほどじゃないんですけれど、ありますね。
ただ、今はそれぞれやっている事が異なるので、全員揃う事は少ないですね。」
「マサギさん以外の人たちって、どんな事をしているのですか？」
「えっ、あ、はい。
まずはナミキさんですね。翼竜ライバの使い手です。
あっ、これはガーネさんも知っていますよね。」
ガーネはうなずきました。
「はい。私はナミキさんに助けられたんです。」
「そうでしたね。次はノミチちゃんです。ノミチちゃんも翼竜の使い手です。」
「ああ、さっきマサギさんが言っていた、もう1種類の翼竜ですね。」
マサギさんはうなずきました。そして話を続けました。

「最後は、ミヤビさんですね。
村の案内の時にも言いました通り、呪術院の院長です。
呪術院はこの村で、病気や怪我をした人を治療できる唯一の場所なんです。」
「その3人が、それをやるようになったのは、何かわけでもあるのですか？
また、村の代表になっているのは、どうしてなんです？」
ガーネはマサギさんに尋ねました。
「あの3人が今やっている事は、それぞれの一族が長年やってきた事なんです。
そして、それぞれの一族の血を持つ者しか、やれない事なんです。
また、それをやる者はその一族の代表者なんです。
だから、村の代表者の集まりにも、出席してもらっているんです。」
「そうだったんですか。で、マサギさんはどうなんですか？
マサギさんが、村役場の職員をやっているのも、一族の血だからですか？」
ガーネの問いに、マサギさんは笑いながら答えました。
「いえ、私は違います。
だって、村役場の職員ですよ。誰だって採用試験に受かれば入れます。
でも私の父もそうでしたから、全く無いとは言えないのかもしれません。」
「さて、どうなんでしょうね。」ガーネも笑っていました。
「あっ、そうそう、他にも1人、村の代表者はいましたよね。」
「えっ、ああ、トモネ様の事ですね。
トモネ様は、私が物心ついた時から、村の最長老として代表をやっていました。
私も随分、可愛がってもらいました。」
「そうだったんですか。いや、よく判りました。
いろいろお話を伺わせて頂いて、どうも有り難うございました。」

ガーネは、マサギにお礼を言いました。

しばらく経つと、それぞれが注文した飲み物が運ばれてきました。
ガーネとマサギさん、そしてトラは、それを飲み始めました。
「美味しいですね。」ガーネがそう言いました。
「そうでしょう。ここのコーヒーは村人に一番人気があるんですよ。」
マサギさんも美味しそうに飲んでいます。
「本当に美味しいわ。」トラも猫用の飲み物に、喜んでいました。

ガーネたちが、その味に舌づつみを打っていると、マサギさんが話しかけました。
「ガーネさん。トラさん。窓の外を見て頂けますか。」
ガーネとトラは、言われた通り、窓の外を眺めていました。
すると、ぽつぽつと雨が降り出しました。
「あっ、雨が降っていますね。でもここは雲ひとつない筈です。どうして、降るのでしょうか?」
ガーネは首をかしげながら、空の方を向きました。
「あっ、あれは何です?」ガーネは空を指さしました。、
そこには、ヘリのプロペラのように羽を回転させている生き物が飛んでいました。
「あれですよ、ガーネさん。あれが先ほどお話した、別の種類の翼竜ヤーベです。
ああやって、翼から雨を降らしているんです。
あの雨が、この天空の村に降る唯一の雨あり、水源なんです。」
「あんな形の翼竜がいるんですね。しかも雨をもたらすなんて。
本当に不思議な光景だ。晴れている空に、雨が降っています。」
ガーネは、驚いていました。
「ガーネさん、あのヤーベのどれかに、ノミチさんが乗っているんです。

何か、神秘的だとは思いませんか？」マサギさんは尋ねました。
「はい。不思議の世界にいるような、そんな感じさえしますね。」
ガーネはそう答えました。
トラも、その光景をじっと見つめていました。

やがて、雨が止みました。
マサギさんは、ガーネたちと別れ、職場に戻る事になりました。
「色々有難うございました。」ガーネたちは、マサギさんにお礼を言いました。
「こちらこそ、お付き合い頂き、有難うございました。
ところで、ガーネさん。
今日は、宿舎に帰る前に、ミヤビさんの所に言って頂けないでしょうか？
多分、ガーネさんの事を待っているんじゃないかと思うんです。」
「ああ、その件がありましたね。判りました。
じゃあ、これから、あの呪術院に立ち寄ってみる事にしましょう。
マサギさん。今日は本当に有難うございました。
また、機会があれば、一緒にコーヒーを飲みましょう。」
「えっ、あ、はい。楽しみにしています。」
マサギさんは、少し顔を赤くしながら、ガーネと握手をしました。

ガーネは立ち去っていく、マサギさんの後ろ姿を見送りました。
「じゃあ、マサギさんの言う通り、呪術院に行ってみましょう。」
ガーネは、そうトラに言いました。
「そうね。ミヤビさんが待っているなら、早く行きましょう。」
ガーネとトラは、ミヤビさんの待つ、呪術院に向かいました。

第7話「天空の村にて」ふたつめだよ。（終）

第7話「天空の村にて」ふたつめだよ。（後書き）

今回のお話は、第７話「天空の村にて」の第２話です。
今回の話は、村についてやサブキャラクターの説明が主体でしたね。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第7話「天空の村にて」みっつめだよ。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第7話「天空の村にて」みっつめだよ。のお話です。
この回では、ガーネとトラが、ミヤビさんのお手伝いをします。

第7話「天空の村にて」みっつめだよ。

第7話「天空の村にて」みっつめだよ。

我は、闇が好きだ。
暗闇の中には、あらゆる人の思いが隠されている。
良い心、悪い心、全てがそこにはある。
だから、怖れを抱く。
それと同時に、安らぎも感じてしまう。

真っ暗な闇の中にポツンと我が浮かんでいる。
誰かが、話しかけてくる。
でも、本当は誰もいない。
我以外、他には誰もいない。誰も話しかける者はいない。
それは、物音1つしない、静寂に満ちた世界。
なのに、誰かが話しかけてくる。
耳からではない。音としてでも無い。
それは、我の心に直接響いて来る。
喜び、怒り、憎しみ、嘆き、そして快楽。
全ての感情が、我に話しかけてくる。
我は、その1つ1つを全て受け止める。
そして、それらを全て自分の力に変える。
我には判る。
その力が、我の体の隅々まで、充たしてくれるのを感じる。
我が呪術を使うための力が、体中にみなぎるのを感じる。
だから、我は明日を、更に強く生きる事が出来る。
我は闇が好きだ。
我に怖れと安らぎと、そして力を与えてくれる。
それは、我がまだ見ぬ未来に挑むのに、かけがえの無いもう1つの

世界。
我は闇が好きだ。

ガーネは、呪術師ミヤビさんの元に行きました。
「ここが、呪術師の家か。割と広いんですね。」
「ここが、村で唯一の、病気や怪我を治療をする場所だって聞いたわ。
だから、入院も出来るようになっているんじゃないの。」
「なるほど。病院ですね。」
中に入ると、待合室でしょうか。何人か人がいました。
ガーネは受付に行きました。
「あの、今日こちらのミヤビさんから、来る様に言われたんですが。」
その時、中にいた看護婦さんらしい人が、ガーネに声をかけました。
「あの、すみません。ひょっとしたら、ガーネさんでしょうか？」
「はい、そうです。」
「よかった。それでしたら、先生がお待ちしていました。
あちらのドアから入って来てくれませんか。」
ガーネは言われた通り、少し離れたドアの方に歩いて行きました。
そのドアには、「関係者以外立ち入り禁止」と書いてありました。
そのドアを開けて、中に入りました。
「失礼します。」
そこには、テーブルが1つと、座りやすそうな椅子が幾つか並べられていました。
誰もそこにはいませんでした。
反対側にあったドアから、先ほど声をかけてくれた看護婦さんが現れました。
「先生は、ただ今、治療中です。いましばらくお待ち下さい。」
「はい、判りました。」
それから、半時ほど経ったあとでしょうか。ミヤビさんが入ってき

ました。
「いや、申し訳ない。今日はいつもより人が多くて時間がかかってしまった。」
「あの待合室にいた全員の治療が、終わったんですか？」
「いや、ほとんどは薬をもらいに来ているだけなんだ。
それは、他の者でもやれるからな。」
「なるほど、そうでしたか。ところで、ここは病院なのですか？」
「ここでは、呪術院と呼ばれている。
薬による治療もあるが、主な治療は呪術によるものだからな。」
「そうでしたか。ところでこの部屋は、どういう部屋なんでしょうか？
ここは、休憩室だ。よくナミキやノミチなど村の代表が遊びに来る。
まぁ、我らの溜まり場だな。」
「ここが溜まり場ですか。まぁ、確かにここは村の中心にありますしね。
集まりやすい所でしょう。
おまけに居心地がよさそうな、家具もおいてありますし。
ところで、私に何か御用があると聞いたのですが、一体何でしょうか？」
「実は、最近助手が辞めてしまってね。人手が足らなくなっている。
これから、募集をかけるところだった。
もし、ここで手伝って頂けるのであれば、有り難いと思ってね。どうだろうか？」
「それは構いませんが、私は医療に関しては、何も知りませんよ。」
「いや、助手と言っても、治療の手伝いではない。
頼まれて作った薬の配達とか、治療に使う花や薬草などの採取をして欲しい。
もちろん、日当も払おう。
ここにいる間、宿泊所の食券だけでしか食べれないのは、味気ないだろうし。

何かちょっとしたものを買いたくても、いちいち担当の職員に言わねばならない。
それじゃあ、不便だと思うのだが、どうだろう。」
「判りました。ではそうさせて頂きましょう。」
ガーネは間髪入れずに、そう答えました。
「マサギには、この村を案内してもらったか？」
「はい。」
「ではもう知っていると思うが、この天空の村はこの住宅街が主要地域だ。
ここが村の大半の人の、生活拠点というわけだ。
後は、田畑や家畜の放牧のための草原。翼竜の棲みか。
小さな工場や掘削場、そして発電所があるだけだ。
だから配達してもらう家や建物は、全てこの近くにある。迷う事は無いと思う。
一応、簡単な地図は渡しておく。」
そう言って、ミヤビさんはガーネにかばんと地図を渡しました。
「では、早速だがここにある荷物を運んで欲しい。
向こうからは、受取書をもらってくればいいから。では頼む。」
そう言って、荷物をガーネに預けました。
「判りました。配達に行ってきます。」
ガーネはそう言って、呪術院を出ました。

「地図判る？」
「まぁ、簡単なものだけれどね。
でも、この村の家並は理路整然と並んでいるしね。迷う事は無いと思いますよ。」
ガーネは、1件目の家の玄関の呼び鈴を鳴らしました。
「はーい。」声が聞こえた後、玄関のドアが開きました。
「こんにちわ。呪術院からお薬の配達に来ました。」
ガーネがそう言うと、その家の奥さんらしき人が答えました。

「あら、いつもの人と違うのね。
あなた、確か午前中にナミキさんに助けられた人じゃなかったかしら。」
「はい、そうです。しばらく、ここでお世話になる事になりました。
今は、ミヤビさんの勧めもあって、呪術院のお手伝いをしています。」
「そうだったの。えーとあなたのお名前は？」
「あっ、申し遅れました。私はガーネと言います。
こっちはトラと言う名前の猫です。」
そう言って、トラの紹介もしました。
「どうぞ、よろしくお願いします。」トラも頭を下げました。
「ああ、あなたが噂に聞いた喋る猫なのね。
こちらこそ、よろしくね。」
そう言いながら、手元にある受取書にはんこを押していました。
「じゃあ、これ受取書ね。」そう言って、ガーネに手渡しました。
「有難うございます。またご用がお有りの時は、遠慮なくお越し下さい。」
ガーネはそう言って、受取書をかばんに入れて、その家を出て行きました。
「なるほどね。こうやって1件1件回るわけなのね。」
「ミヤビさんの言った通り、注文した家が近いって言うのは楽ですね。
あと6件ですね。さぁ、どんどん行きましょう。」
ガーネとトラは、こうして1件ずつ回りました。
やがて、全ての家に配達が終わると、呪術院に戻ってきました。
休憩室に入ると、ミヤビさんがお茶を飲んで、くつろいでいました。
「ただいま。」
「おや、もう帰って来たのか。もっとゆっくりしてもよかったのにな。」
ミヤビさんはそう言いました。

「と言いましても、さきほど村の案内はしてもらいました。
それに特に立ち寄りたい所も、ありませんでした。」
「やれやれ、ガーネたちもここの常連になりそうだな。
ここに入り浸る時間が増えていくと思う。」
ミヤビさんは、そう言って湯飲みをテーブルに置きました。
「そうだ。特に用事が無いなら、薬草採取も手伝ってくれないか？
もちろん、我も行く。」
「いいですね。行きましょう。」
ミヤビさんは、ガーネとトラを連れて、呪術院の裏庭に行きました。
「これは、ライバですよね。」「ライバだわ。」
ガーネたちは目の前にある生き物を指差して、ミヤビさんに尋ねました。
「そうだ。ライバだ。名前はシャドーと付けた。」
「これは、ナミキさんだけが、乗れるんじゃなかったんですか？」
「いや、確かにナミキはライバの使い手だし、会話も出来る。
だが、ライバに乗るだけなら、彼女以外にも出来るのだ。
この間、会議室に集まった者たちであれば、誰でも乗ることは可能だ。
もちろん。我もだ。
ただ、トモネ様はお年なので、1人で乗る事はもう無いと思う。
我ら以外でも、ナミキから手ほどきを受けた者なら乗りこなせる。
荷物や人の運搬に、大いに利用されているのだ。」
「そうでしたか。」
「では行くぞ。我の後ろに乗って、しっかりつかまっていろ。」
そう言ってミヤビさんはガーネとトラを載せて、シャドーで飛んで行きました。

ミヤビさんが、シャドーから降りたのは、住宅街からだいぶ離れた森の中でした。
「やっぱり住宅街とは、全然雰囲気が違いますね。

木々の緑に囲まれて、まさに山の中です。」
「住宅街は、人が生活する拠点だからな。自然よりも人を優先している。」
ミヤビさんは、そう言って、更に森の中に入りました。
「まだ、先なのですか。」ガーネは尋ねました。
「ああ、まだ先だ。
だが、シャドーが降り立つのに丁度いい広さは、あそこしかないんだ。
ここから先は、徒歩で行かなければならない。」
そう言って、ミヤビさんは、歩き出しました。
ほとんど道になっていない所を歩きました。
険しい坂や、木々の中を通り抜けて、目的の場所にたどりつきました。
「ここでは、いろいろな草木や植物が生い茂っている。
我にとっては、宝箱のような場所なんだ。」
そう話すミヤビさんは、とても楽しそうでした。
「さて、ガーネ。頼みがある。
この木に成っている実を、取って来て欲しいのだ。
我は、もう少し先で、薬草を取ってくる。」
ミヤビさんは、ガーネにそう言いました。
ガーネは、その木の上の方に、実が成っているのを見つけました。
そして、それを指差しながら、ミヤビさんに尋ねました。
「木の実と言うと、あれですか。」
「そうだ。ゆっくりやって構わない。じゃあ、我は行って来る。」
ミヤビさんは、ガーネの肩をポンとたたいて、森の奥に入っていきました。

「高い木ね。ガーネは登れるの？」
「さぁ、木というものに登った記憶が無いんですよ。
でも、この木はかなり太いし、登っても大丈夫なんじゃないでしょ

うか。
つかまりやすそうな感じもしますしね。」
そう言いながら、ガーネはその木を登り始めました。
両手両足で、しっかりとしがみつきながら、登っていきました。
しかし、1／3ぐらいのところで、止まってしまいました。
「どうしたの？」
「いや、疲れました。やっぱり迷宮とは全然違いますね。」
ガーネは、休みをとりながら登っていきました。
そして、ついに木の実に手が届くところまで来ました。
ガーネは、木に絡めた足で自分を固定させて、周りの木の実を採っていきました。
また、近くの枝になんとか移って、更に幾つか木の実を採りました。
「これくらいで構いませんよね。」
「もっと、採った方がいいんじゃないかしら？」
「と言っても、どれくらい採れとは言われていませんでしたしね。
じゃあ、あと少し採ったら降りましょう。」
ガーネはこわごわ、別な枝に移って木の実を採りました。
その枝にある木の実を全て採った後、その木を降りました。
「はい、ご苦労様でした。」トラはガーネをねぎらいました。
「まだ、ミヤビさんは、帰ってこないようですね。
じゃあ、ひと休みして戻ってくるのを待ちましょうか。
それにしても、体のあちこちが傷だらけになってしまいました。」
ガーネとトラは、休憩する事にしました。

しばらくして、ミヤビさんが戻ってきました。
見れば、バケツにたくさんの薬草が入っていました。
「お帰りなさい。」ガーネは声をかけました。
「ああ、今日はいいものがたくさん手に入った。
ところでガーネの方は、どれくらい取ったのだ。」
「はい、これです。」

ミヤビさんは、ガーネが差し出したバケツに入っている、木の実を見ました。
「なんだ。まだこれしか取っていないのか。」
ミヤビさんは、明らかに不満そうでした。
「ですが、私は木登りは初めてなんですよ。あそこまで登って、木の実を取るのは、難しかったんですよ。」
「何だガーネ。君はあの木を登って取ったのか？」
「えっ、はい、そうですけど。違ったんでしょうか？」
そう言うガーネを見ながら、ミヤビさんは苦笑しました。
そして、ガーネが登った木に手を当て、その木を揺らしました。
「あっ。」
バタバタバタ。その木の上から、雨のように木の実が落ちてきました。
ガーネとトラは唖然とした状態で、その光景を見ていました。
それを見たミヤビさんは、何故か嬉しそうでした。

ミヤビさんも交えて、ガーネたちは、草の上に腰を下ろし、休憩を取りました。
「ちょっと、お聞きしたい事があるんですが、いいでしょうか？」
ガーネは、ミヤビさんにそう尋ねました。
ミヤビさんは、一瞬キョトンとした顔をしましたが、すぐにうなずきました。
「ミヤビさんは、何故、呪術師になったのですか？」
「我の事か。そうだな。
我ら一族に流れる血のせいと言えば、言えない事も無いのだ。
この天空の村で、呪術を使えるのは我ら一族のみだからな。
その事は、マサギからも聞いたんじゃないか。」
「はい。
ミヤビさんだけでは無く、ノミチさんもナミキさんもそうだと言っていました。」

ミヤビさんはうなずくと、話を続けました。
「我が1人っ子で、他に呪術を使える者がいなかったのも、理由の1つだ。
おまけに、呪術師以外、この村では医療に携われるものはいなかったからな。
ただ本当のところは、やはり我自身が、呪術医療が好きだからなのだと思う。
だから、不満を感じる事も無く、続けていられるのだ。
それに出来れば、この村でも医療に携わる事が出来る人間を、増やして生きたい。
そうしないと、我ら一族が途絶えた後、医療を出来る人間がいなくなってしまう。
もちろん、呪術は、我ら一族以外不可能だ。
だが、薬草などを患者の様態に合わせて調合する事は、教育する事で可能だ。
だから、それが出来るように教育していきたいというのが、我の願いなのだ。
そのためには、我自身が、薬の源となる動植物に対して、正しい知識が必要だ。
だから、医療の合間に、こうやって薬草採取をしているんだ。」
大したものです。
この人はこの村の未来の事まで、ちゃんと考えています。
だから、きっと村の人たちに慕われているんでしょうね。
ガーネは、ミヤビさんの言葉に、感動しました。
「だが、それと同時に、」
「はい？」
「呪術で、多くの人を、思い通りに操りたい。
または、興味本位で調合した薬を、多くの人で試してみたい。
そんな衝動に駆られて、この体がうずいてしまう事がある。
そして一旦、そうなると、もう我自身では、どうする事も出来なく

なってしまう。
気が付いて見れば、いつの間にか我の大事な助手が診療台に乗っているのだ。
そして、我は何故か、指で注射器を支えている。」
この人はやっぱり駄目だ。とても危ない人なんだ。
必要以上に、近寄っちゃいけないんだ。
ガーネは、さきほどの感動が、間違いであった事に気付きました。

少しばかりの休憩の後、再び薬草探しに戻りました。
ミヤビさんとガーネは、森のあちらこちらを歩きまわって、薬草を採取しました。
いつの間にか、バケツ４つには、薬草や木の実がたくさん入っていました。
「これだけ取れれば、当分は大丈夫だと思う。」
いつもは愛想の無いミヤビさんの顔にも、満足そうな笑みがありました。

「どうだろう、まだ陽も高いし、釣りでもやって帰らないか？」
ミヤビさんがそう言い出しました。
「えっ、釣りですか？ミヤビさんがやりたいのなら、私は別に構いません。」
ガーネも特に用事があるわけでもないので、賛成しました。
「釣りって、魚を捕まえるのよね。ワァー、楽しみだわ。早く食べてみたい。」
昼食のラーメンが、自分的にはイマイチだったため、トラも喜んでいました。
「何匹か釣って、食事に一品付け加えるのも悪くない。
じゃあ、行くぞ。こっちだ。」
そう言って、ミヤビさんが歩きだしました。
ガーネとトラは、ミヤビさんの後をついて行く事にしました。

藪の中に入りました。草木をかき分け、近寄ってくる虫たちを払いました。
しばらくすると、目の前の視界が開けました。
ようようの思いで、たどり着いた所には、大きな池があったのでした。
「これもヤーベが降らした雨が、溜まって出来たものなんですか？」
「この天空の村では、すべての水が、ヤーベからもたらされたものだ。
その水から、このような池や湖が出来たのだ。
さてと、本当はここより少し遠くの方に、綺麗でもっと大きな湖があるんだ。
でも、今日は薬草採取が目的だったから、ここで釣る事にしようと思う。」
「それはいいんですけどね。
さっき、たくさんの虫にたかられて、体の何ヶ所か刺されたんです。
トラも刺されたみたいで、気持ち悪がっています。
これって、大丈夫でしょうか。あと、ミヤビさんは、どうでしたか？」
ミヤビさんがトラを見ると、地面に体を揺すりながら、転がっていました。
「ああ、ここの虫たちには毒が無いので、心配はいらない。
自分たちの縄張りに侵入して来たので、追い払おうとしただけだ。
あと、我は虫よけの薬を塗っているので、大丈夫だ。」
その時、ガーネとトラの動きが、一瞬、止まりました。
「あの、それを私たちに、塗って頂くわけにはいかなかったのでしょうか？」
「そうよ。そうよ。」
ガーネは、いつの間にか、そばに近寄って来たトラと一緒に抗議しました。
「すまん。つい忘れてた。」

ミヤビさんは、いつものような愛想の無い顔で、愛想の無い返事をしました。
「では、まず釣り竿を用意しなければならない。それには、」
虫よけの薬の話は、もう解決したと言わんばかりに、釣りの話をし出しました。
「ああ、もうこの人は。」
ガーネとトラは、同時にため息をつきました。

釣り竿には、その近くにある笹のような木を使用しました。
ガーネも、ミヤビさんの真似をして、その木を一本刈り取りました。
ミヤビさんはその木に、持参してきた釣り糸、おもり、釣り針を取り付けました。
ガーネもミヤビさんに手伝ってもらいながら、仕掛けを作りました。
「釣り道具なんて、売っているんですか？」
「この村の付近には、湖や池が、幾つかあるからな。
村人も、娯楽と料理の材料の調達を兼ねて、釣りをする事が多いんだ。
需要あれば、供給ありというわけだ。」
「なるほど。で、餌はどこにあるんですか？」
「ここだ。」
ミヤビさんが池の中にある石を引っくり返しました。
何か小さな虫が、そこに這っていました。
小さいので、針にうまく刺すには時間がかかりましたが、何とか出来ました。
池のほとりで、ガーネとミヤビさんは並んで、釣竿の糸を垂らしました。
「あの、すみません。１つ、質問したい事があります。」
ガーネはミヤビさんに、そう言いました。
「どうぞ。」ミヤビさんは、ガーネに質問を促しました。
「あのですね。竿の長さに比べて、釣り糸が短すぎるんじゃないで

しょうか？
これだと釣れても、手元まで届かないと思います。」
「その通りだ。本来は釣り糸の長さは、竿より少し長めにするものだ。
また、釣り糸の途中に、魚の引きが判る目印を付けるんだ。
釣りの際は、その目印が動いた時に、竿を上げるタイミングを判断する。
竿を上げた時、タイミングが良ければ、魚を釣り上げる事が出来るというわけだ。
だが、これが我には難しい。
引いたと思って、竿を上げて見れば、もう餌は無くなっている。
あるいは、引いた事に全然気が付かない。これでは、駄目だと思ったのだ。
だから、釣り糸の長さを短くして、釣竿を上下に動かす事にした。
これなら、釣竿を持っている手に直接振動が来るから、魚の引きがすぐに判る。
あとは、釣竿を上げれば、ほとんどの場合釣り上げる事が出来るんだ。
ようするに、釣り上げる事が楽になると言うわけだ。」
「ですが、どうやって、魚を取り込むのですか。」
「魚を釣りあげたら、そのまま、釣竿ごと後ろの草むらに放り出すのだ。
その後、草むらで跳ねている魚から針を抜いて、バケツに放り込めばいいんだ。」
「あっ、そういう釣り方なんですか。
判りました。私もその方法で、やってみましょう。」
２人で並んで、釣竿を上下に動かしていました。
「これをやっている光景を人が見たら、何て思うんでしょうね。
まず、面白い人たちって思われる事は、間違いないでしょうね。」
「釣りに集中するんだ。そんな事はすぐに忘れる。」

しばらくして、ガーネの釣竿を持つ手に、魚の引きを感じました。
「えい。」釣竿を引き上げると、魚がかかっていました。
ガーネは言われた通り、そのまま釣竿を後ろに手放しました。
その後、跳ねている魚を見つけて針を取り、バケツの中に放流しました。
「まずは、1匹ですね。」ガーネは何だか楽しくなってきました。
その後、ミヤビさんも釣りあげました。
何匹か釣り上げた時、トラが言いました。
「ねぇ、これ食べられないの？」
バケツの魚を凝視しながら、トラが尋ねました。
「この世界の猫も、釣り上げたばかりの魚を食べられるから、問題無いとは思う。
ただ、池の魚なので、泥が体の中にあるんだ。
すぐに食べるなら、湖か渓流の魚の方がいい。」
「ふーん。でも食べられない事は無いのね。ちょっと食べていい？」
「ああ、構わない。」
トラは、前足から、鉤爪を出しました。
「子猫なのに、随分大きいな。」ミヤビさんはちょっと感心していました。
「だから、あまり怒らせないようにしないと、いけないんですよ。」
小さい声で、ガーネがミヤビさんに、トラとの付き合い方を説明しました。
トラは、その鉤爪で簡単にバケツの魚を採りました。
地面にバタバタ動き回る魚を、ムシャムシャ食べ始めました。
「そうね。確かに泥の感じや匂いがするけど、美味しいわよ。
ああ、でも、一匹だけじゃよく判らないわ。もう一匹、食べてもいい？」
「後で、釣った魚を焼くから、今はそれくらいにしておいた方がいい。」
ミヤビさんが、トラにそう言いました。

ウーン。トラは悩んでいましたが、言われた通り、食べるのを止めました。
結局、１０匹ほど釣りあげて、釣りを終えました。

ミヤビさんは釣った魚を、さばきにかかりました。
「何か手伝う事は、ありませんか。」
ガーネはそう言って、ミヤビさんの顔を見た瞬間、絶句しました。
目は怪しげな光を放っていました。
その口元は笑っているように横に開いて、中の歯が見えていました。
何かトランス状態に陥っているようでした。
トラは思わず、ガーネに飛び付きました。
そして、共にガタガタ震えていました。
魚をさばいた後は、いつものミヤビさんに戻っていました。
魚の内臓を取り出した後、持参した水の中でそれを洗って、塩を振りました。
その後、そのうちの何本かを、細い串に差しました。
ミヤビさんは、釣り上げた全ての魚の処理を続けました。
その間に、ガーネはミヤビさんの指示通り、たき火の準備をしていました。
やがてミヤビさんは、全ての魚の処理を終えました。
そのうちの何本かを、たき火の近くに刺しました。
しばらくして、煙と共に香ばしい香りが、あたりに立ち込めてきました。
ガーネは焼けた魚の一匹を取り出して、ほぐしました。
そして、少し冷ましたものをトラにあげました。
「さぁ、どうぞ。」
トラは、食べてみました。
「とても、美味しいわ。とてもよく脂が乗っているの。
さっきの泥臭さも抜けているし、何よりこの焼けた香ばしさが嬉しい。」

トラは、とても喜んでいるようでした。
ですがそれに対し、ミヤビさんはこう言いました。
「ただ、「美味しい。」だけでいいのでは？
そんなにコメントは必要ないと思うが。」
トラは、その言葉にシュンとしてしまいました。
ガーネも、あまりのドライな発言に、トラの弁護をしようかと思いました。
ですが、気まずくなりそうなので止めました。
その代り、自分も焼けた魚をほおばる事にしました。
「でも、やっぱり美味しいですよ。トラの気持ちが判ります。」
口をホクホクさせながら、ガーネはそう言いました。
そんなガーネを見て、ミヤビさんも魚を口にしました。
「確かに、そうだな。トラ、言いすぎたようだ。すまなかった。」
トラはその言葉を聞いて納得したのか、またムシャムシャと食べ始めました。
「でも、何ですね。たき火で、魚を焼いて食べるのは確かに美味しいです。
でも、これが昼間じゃなくて、夜だったらもっと素敵でしょうね。
満天の月と星空の下で、森に囲まれて、たき火をする。
そのたき火の、赤々と燃える火を見ながら、美味しく焼けた魚を頂く。
なかなかロマンチックじゃないでしょうか。」
「確かに、そうかもしれない。だったら、今度は夜に来てみようか？」
ミヤビさんも、思い浮かべてみたのでしょうか。そんな提案をしてきました。
ええ、お願いします。と言おうとした時、ガーネの背中をたたく物がいました。
えっ、と後ろを振り向いてみると、そこには魚を食べていた筈のトラがいました。

丁度、ミヤビさんからは隠れて見えない位置にいます。
トラはその頭でガーネの背中に、頭突きをしていたのでした。
「どうしたのですか？」
ガーネが聞くと、トラがさかんに、頭を横に振っていました。
ガーネはトラの言わんとしている事に、気が付きました。
ガーネの脳裏にはミヤビさんが夜中、トランス状態に陥っている姿が見えました。
そして、自分たちに包丁を切りつけている光景が浮かび上がったのです。
ガーネは自分の全身から、震えが起こり始めているのを感じました。
ですが、それをかろうじて、押しとどめました。
そしてミヤビさんに、こう言いました。
「と、思ったのですが、これからは虫が多くなる季節です。夜は止めましょう。」
「それもそうだな。」ミヤビさんも納得したようでした。
ガーネもトラも、ホッとしました。

焼いた魚を全部食べ終わると、たき火の後始末をしました。
後片付けが全て終わった時、いつしか夕暮れになっていました。
「じゃあ、そろそろ帰るとしよう。」
ミヤビさんは、もう一度、バケツの中の薬草や木の実を確認しました。
先ほどさばいた魚が、バケツの中に入っている事も確認しました。
そして、これらをシャドーへ、丁寧にロープでくくりつけました。

「じゃあ、帰るとしようか。ガーネ。」「はい。」
ミヤビさんたちを乗せたシャドーは、大空に舞い上がりました。

「ナミキ、いるー？いるなら返事してー。いなくても返事してー。」

「おい、ノミチ。」
「あっ、やっと見つけたー。」
「さっきから、見つけてたろう。いいかげんにしろよ。
それから、語尾にーを付けるのは止めろ。」
ノミチさんは、ナミキさんの目の前に、明るさ満載で現れました。
「やぁ、相変わらず元気そうじゃない。ナミキ。」
「出たな。無意味に元気な女の子。てめえ、一体何しに来やがった。」
「あれ、もう忘れちゃったのかな。これだから年をとると・・・。」
「やかましいわ。特に用が無いなら、とっとと消えな。」
「あれ、本当に忘れちゃったのかな?」
ノミチさんは首をかしげました。かなり真面目な顔つきでした。
その様子に、ナミキさんはちょっと不安を覚えました。
「えーと、何か約束していた事って、あったけ?」
その問いに、ノミチさんはフゥーとため息をつきました。
「これよ、これ。」
ノミチさんが差し出したのは、先ほど泥だらけになった自分の衣服でした。
ちゃんと乾いており、綺麗に折り畳まれていました。
「オゥ、わざわざ、持って来てくれたのか。有難いな。
それならそうと、早く言ってくれればいいじゃんか。
そうしたら、あんなに邪険にしなかったのによ。
それにしても、もう乾いたのか。早いな。」
「あのね。ここは天空の村なのよ。陽射しが強いから、乾くのも早いわ。」
「それにしても随分、綺麗にして持って来てくれたな。
いやあ、有難い。有難い。」
ナミキさんは、そう言って、その場で着替えました。
「うん。やっぱり、この服の方がいいな。
お前の服は軽いし、それほど丈夫でもないからな。

返す時、ボロボロだったら悪いと思っていたんだ。
あー、よかった。よかった。
じゃあ、これはあとで洗って返すから。」
そう言って、来ていた服を、片付けようとしました。
「あ、それ今返してもらうわ。」
ノミチさんは、ナミキさんから自分の服をひったくりました。
「いいよ。洗って返すから。」
そう言って手を伸ばすナミキさんに、ノミチさんはこう言いました。
「駄目よ。この服はあなたのと違って、もっと柔らかい生地で出来ているのよ。
大切に気を付けて洗わないと、すぐに駄目になっちゃうの。」
「ああ、そうですか。判りましたよ。どうせ、俺は雑な女の子ですよ。」
「いいえ、雑な男みたいな女の子よ。」
「何を。」
「キャー、この子、暴力を振るうわ。逃げなきゃ、キャー。」
げんこつを振り上げて、追いかけるナミキさん。
両手で頭を抱えて、逃げまどうノミチさん。
いつもの光景が、繰り返されていました。
やがてお互い、走り回るのに疲れたのでしょう。
近くの大きい岩の上に、腰を下ろしました。
「それにしても、最近物忘れがひどくなったんじゃない？
午前中に来た時も、自分が来た用事を忘れたりしていたわよね。
今も、預けた服の事を忘れちゃうなんて。
それに、運動神経もにぶくなったみたいだわ。
ほら、あちきはまだ大丈夫なのに、ナミキはもう息切れしているし。
見かけより年なんだから、気を付けた方がいいわ。」
ノミチさんは、ナミキさんの事を心配しました。
「おい、ちょっと待て。」
ナミキさんは、ノミチさんの腕をグイッとつかまえました。

「確か、俺の記憶が正しければよ。
俺とあんた、マサギとミヤビは学生時代、同級生で同年齢だった筈だが。」
その問いにノミチさんは、首をかしげて考え事をしていました。
そして、しばらくした後、ポンと手を打ちました。
「そうね。そうだったわ。
それじゃあ、あなたが、そんなに急に年をとったのは、卒業してからかしら。
ほら、人って、それぞれ個人差って言うものがあるじゃない。」
「あのな。」ナミキさんは絶叫しました。
「時間の流れは、みんなに平等なんだ！！」

第7話「天空の村にて」みっつめだよ。（終）

第7話「天空の村にて」みっつめだよ。（後書き）

今回のお話は、第7話「天空の村にて」の第3話です。
今回の話は、ミヤビさんが中心のお話でした。
サブキャラでは、一番謎めいたキャラです。
お楽しみ頂けたのであれば、幸いです。

今回の第7話「天空の村にて」に関しては特にクライマックスはありません。
気が付いてみたら、さよならでした。
そんな最後にしたいです。
ガーネもトラも、別に大した活躍はしません。
ただ、時間に流されるまま生きて行くだけです。
ヒーローものでも、ヒロインものでもありません。

それにしても、もう3話目なのに、1日目が終了していません。
あと、そんなに長い話では無いと思うのですが、どうなるんでしょうね。
何となく、人ごとみたいに考えてしまう今日この頃です。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第7話「天空の村にて」よっつめだよ。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第7話「天空の村にて」よっつめだよ。のお話です。
この回では、ガーネが、ライバの使い手になります。

第7話「天空の村にて」よっつめだよ。

第7話「天空の村にて」よっつめだよ。

ミヤビさんたちはシャドーに乗って、無事に呪術院に戻って来ました。

「今日は、ご苦労だった。我も助かった。」

別れ際にミヤビさんは、ガーネにこう言いました。

そして、日当を払ってくれました。

宿舎に戻る途中で、ガーネはトラに言いました。

「日当が入ったし、今夜は外食をしてみませんか？」

「いいわね。食べたい物を選べるのはいい事だわ。」トラも、賛成しました。

昼間、案内してもらった場所に、レストランがあったのを思い出しました。

「あそこに行ってみましょうか？」「そうね。それがいいわ。」

ガーネたちは、レストランに向かう途中で、声をかけられました。

「ガーネさん。トラさん。」

ガーネたちが振り向くと、マサギさんが手を振っていました。

そして、駆け寄って来ました。

「マサギさん。今晩は。あっ、今、お帰りですか？」ガーネが声をかけました。

「はい。そうです。ガーネさんやトラさんもですか？」

「はい。今日はミヤビさんのお手伝いをしていました。

これから、レストランで食事でもしようかと話していたんですよ。」

「あっ、そうでしたか。

だったら、昼間のお詫びに、私が夕食にお二方を招待したいと思います。

如何でしょうか？」

それを聞いて、ガーネとトラは顔を見合わせ、にっこりとしました。
「では、お言葉に甘えさせて頂きます。」
ガーネは、マサギさんにそう言いました。

マサギさんの案内で、ガーネとトラはレストランに行きました。
そこは、ガーネたちが期待していた以上に、立派なレストランでした。
「こんな立派な所で、大丈夫なんですか。」ガーネは、小声で聞きました。
「大丈夫です。必要経費で落としますから。」
マサギさんも小声で、そう返事をしました。
ガーネとトラは、それを聞いて、とても安心しました。

中に入ると、ウエイトレスさんがテーブルを案内しました。
マサギさんたちは、そのテーブルの椅子に着席しました。
テーブルには、メニューが置いてあります。
ウエイトレスさんが「どれになさいますか?」と尋ねました。
「こういう機会でもないと、こんなお店にはなかなか来れないんです。
だから、高くても、美味しい物を頼んだ方がいいですよ。」
「有難うございます。」
マサギさんの素敵なアドバイスに、ガーネもトラも嬉しくなってしまいました。
マサギさんたちは、気に入った食べ物と飲み物を何品か選び、注文しました。
「お金の事を気にしないで注文出来るなんて、なんて素晴らしい事かしら。」
マサギさんたち全員が、喜びをかみしめていました。

やがて、注文した品が運ばれ、マサギさんたちは豪華な食事を楽し

みました。
食事が終わった後、食後の飲み物が運ばれてきました。
マサギさんたちは、自分の注文した飲み物を味わいながら、飲んでいました。
トラも、ストローを使って器用に飲んでいました。
「今日1日は、どうでした。」ガーネがトラに尋ねました。
「迷宮の生活とだいぶ違っていたから、まだまだ慣れたとは言えないわね。
それに会議室にいた、村の代表たちって、みんな個性が強い気がしたわ。
まぁ、あれくらいでないと、代表になれないのかもしれないけれどね。」
「あの中で普通なのは、村長さんと、マサギさんくらいでしょうか。」
ガーネは笑いながら、話しました。
「普通が一番ですよ。」マサギさんはそう主張しました。
「本当を言うと、あたし、ちょっとマサギさんは苦手だったの。」
トラは本音を吐露しました。
このトラの言葉に、マサギさんは愕然としました。
「えっ、どうしてなんですか?」ちょっと涙目になってマサギさんは尋ねました。
「ほら、会議室でマサギさん、トラをもみくちゃにしていたでしょ。
あれ以後、トラは警戒しているんですよ。」ガーネも同情しました。
「あの可愛がり方は少し、異常だったわ。
あたし、だんだん自分の身が心配になって来たもの。」
トラのその言葉に、マサギさんはショックを受けたようでした。
「ごめんなさい。ごめんなさい。」マサギさんはひたすらトラに謝りました。
「私、小さくて可愛い物が、大好きなんです。
そこへトラさんが現れたので、私、もう夢中になってしまって。

本当に、ごめんなさいね。」
「まぁ、こういう人は案外、多いんですよ。トラ。
あの時、ナミキさんにも、注意されていました。
これからは、あんな事の無いようにお願いしますね。」
「はい。今後は気をつけます。
だから、トラさん。嫌いにならないでいてくださいね。」
「判ったわ。じゃあ仲直りしましょう。」
トラの差し出した前足を、マサギさんは指で握りました。
「まぁ、これでこの件は解決としますか。」ガーネはそう言いました。
「そうね。そうしましょう。」「はい。お願いします。」
マサギさんとトラは、顔を見合わせて、にっこりしました。

「話は変わるんだけどね。
この世界には、翼竜っていう生き物がいるのね。びっくりしたわ。
それに、あの翼竜たちがいないと、生活が出来ないなんてね。」
トラがこの世界の感想を言いました。
「まぁ、昔からですからね。」マサギさんはそう言いました。
「それに、知っていましたか？ここにはまだ、電話が無いそうですよ。」
ガーネが、トラにそう言いました。
「えっ、本当なの？」トラは、マサギさんに振り向きました。
マサギさんは、飲み物を飲みながら、うなずきました。
「というか、まだ電話という概念自体、確立されていないらしいのです。」
「じゃあ、誰かに何か連絡したい時は、どうするの？」
このトラの質問に対し、マサギさんが答えました。
「もともと村人の大半が住宅街に居るので、それほど不便では無いんです。
少し歩けば、出会う事も出来ますしね。

村役場で知らせたい事があれば、拡声器を使って村中に知らせています。」

「でも、田畑の方に点在する家や、発電所などは、遠くにあるわね。どうやって、連絡をとるの？」

「遠くにいる相手との連絡手段には、ライバを使うんです。

ライバには、手紙を入れておく筒が、装備されています。

それを使って、手紙のやり取りを行なうんです。

また、それとは違った方法もあります。

ライバは人の言葉を理解出来るし、耳もかなりいいんです。

まず、近くにいるライバに、相手に伝えたい話をするんです。

すると、村中に散らばっているライバどうしが、伝達し合うんです。

最後には、あのナミキさんにその内容が伝わります。

そして、ナミキさんから連絡したい相手に伝言が伝えられるんです。

ナミキさんは、ライバの話を正確に理解出来ますからね。

遠くで無くても連絡がしにくい場合は、これらの方法を使っています。」

「でも、なかなか手間がかかるのね。不便な事は不便だと思うわ。」

「確かに、急いでいる場合には、不向きですね。

これらのやり方では、会話のような早い言葉のやり取りは出来ません。

だから、いずれは電話が生まれて、普及していくんじゃないでしょうか。

まぁ、電話に限った事ではありません。

今でも科学的なものを、どんどん取り入れているようですからね。

いずれは、翼竜たちの出番も無くなる日が来るんじゃないでしょうか？」

ガーネのそんな予想に、マサギさんもしぶしぶ認めました。

「確かに今の村でも、そういう流れになりつつありますね。」

「長い目で見れば、どっちがいいのかしら。」トラは尋ねました。

「私には、判りません。

人間にとっては自分たちだけで、生活出来る環境を作りたいと思うでしょうね。
ただ生命がそこに存在する以上、何らかの必燃性があるんじゃないでしょうか。
科学に一方的に走って、その存在を脅かす必要は無いと思います。
それよりも、互いに助け合って共存出来る道があるなら、それを模索すべきです。
と、思うんですけどね。」
ガーネは、そう答えました。

話が1段落したところで、トラは話を変えました。
「それにしても、呪術師って初めて知ったわ。
なんか、少し不気味な気がするんだけど、私たち、大丈夫かしら。」
「私も同感ですね。事件が何も起きない事を、期待するしかありませんね。」
「心配いりませんよ。あの人はいい人です。
同級生だった私が言うんだから、間違いありません。」
マサギさんは、そう言ってミヤビさんを弁護しました。

マサギさんたちは、食後の飲み物を全て飲み終えました。
マサギさんはレジで料金を払い、領収書をもらっていました。
レストランを出た後、ガーネたちの宿舎の前で、マサギさんは言いました。
「今日は、夕食にお付き合いしてもらって、有難うございました。
また、いろいろなご意見を聞かせて頂いたので、本当によかったと思います。
また機会があれば、お食事をご一緒にさせて下さい。では、お休みなさい。」
マサギさんはそう言って、ガーネたちと別れました。
ガーネたちは、マサギさんの後ろ姿を見送りながら言いました。

「マサギさんって、いい人ですね。」
「あたしも、そう思うわ。
あたし、悪い事を言っちゃったかもしれないわね。」
トラは、ちょっと反省しているようでした。

ガーネとトラは、宿舎に戻りました。
自分たちの部屋に戻ると、ガーネもトラもぐったりしました。
「今日は、疲れました。本当に目まぐるしい一日でしたね。」
「迷宮での生活が長かったせいもあるけれど、本当に疲れたわね。」
「でも、最後に食べた夕食は、とても美味しかったですね。
昼食を御馳走にならなくて、かえってよかったんじゃないでしょうか。」
ガーネの意見にトラがうなずいた後、こう言いました。
「でも、こんな贅沢が出来るのは、今日だけね。
ガーネ。あたし、明日からは食券で食べる事にするわ。」
「私も、そうする事にしますよ。」
ガーネとトラは、歯を磨いた後、お風呂に入りました。
トラも入浴する事が許されたので、喜んでいました。
風呂から上がった後、ガーネはトラに言いました。
「日当にまだ手を付けていませんでした。寝る前に何か飲みましょうか?」
「そうね。何か飲みましょう。」
ガーネとトラは、売店で、好きな飲み物を買いました。
そして部屋に戻った後、それを飲み干しました。
「じゃあ、今日はもう寝ましょうか?」「それがいいわね。」
ベッドは、2階建てでした。
「どちらで眠ります?トラの好きな方でいいですよ。」
「そう?だったら、上の方で眠りたいな。」
「じゃあ、私は下で眠りましょう。」
ガーネとトラは、それぞれにベッドに潜り、そのまま眠ってしまい

ました。
数時間後、トラは目覚めました。
「まだ、朝は来ないのね。」
トラは欠伸をして、また眠りにつこうと思いました。
でも、なかなか眠れませんでした。
ベッドに備えてある階段で、下に降りて行きました。
ガーネは静かな寝息を立てて、ぐっすり眠っていました。
それを眺めている間に、トラもまた眠くなってきました。
大きく欠伸をした後、トラはガーネの布団に潜りこみました。
そして今度は、朝までゆっくりと眠る事が出来ました。

翌朝、ガーネとトラは欠伸をしながら、歩いていました。
「ねぇ、ガーネ。何でこんなに朝早く起きなきゃいけないのよ。」
トラが不満そうに言いました。
「朝早く、ミヤビさんからの電話が宿舎にかかってきたんですよ。
すぐ来いって。だから、仕方が無いでしょう。
ミヤビさんは、私たちにとって、大切な雇い主なんですからね。」
「でも、呼ばれているのは、ガーネだけなんじゃないの？
あたしまで、引っ張っていく必要があるのかしら。」
「ありますよ。」「あら、何かしら？」
「苦労は分かち合うのが、仲間じゃないですか。
あまり冷たい事を言うと、泣きますからね。」
「はいはい、判りました。お伴させて頂きます。」トラは観念しました。

だらだらーっと歩いていたガーネがふと立ち止まりました。
ガーネの歩いている前には、ライバが立ち塞がっていたからでした。
ゼノンやシャドーとは違い、１回り小さいサイズでした。
「お早う。」突然、ライバが喋り出しました。
それを聞いて、ガーネとトラは、耳を疑いました。

「ねぇ、トラ。今のライバの言葉、聞こえました？」
「ええ、聞こえたわ。お早うって言ってたわね。」
「やっぱり、トラもそう聞こえたんですね。
でも今まで、ライバの声なんて理解出来なかったのに、どうしてでしょう。」
「ねぇ、ガーネ。あたしにそれを聞いて、本気で判ると思っているの？」
「はい。私は、そう信じています。」
「ねぇ、無い物ねだりや他力本願はそろそろ止めて、現実を直視しない？」
「直視していたら、生きては行かれませんよ。特に、迷宮の旅人はね。
違いますか？」
「それを言ったら、おしまいだわ。まぁ、いいわ。で、これからどうするの？」
「とりあえず、こちらも挨拶して、すぐに別れましょう。」
「そうね。それが正解だわ。余計な事に首をつっこむのも好きじゃないし。」
「それを言ったら、それこそおしまいですよ。」

「お早うございます。」
ガーネとトラは、そう言ってお辞儀をしました。
その後、すぐにライバの横を通り過ぎようとしました。
「ねぇ、あそぼ。」ライバが、そう言いました。
「いやです。」「やめとくわ。」ガーネとトラは相手にしませんでした。

ガーネは何事も無かったかのように、ミヤビさんの呪術院に向かって歩きました。
「ねぇ、ガーネ。」「何でしょうか。トラ。」

「あの子、ついて来ているわよ。しかも歩いて来るわ。どうしたらいいと思う？」
ガーネは、そっと後ろを向きました。トラの言っている通りでした。あのライバが、トコトコと歩いてついて来ていました。
ガーネは不意に立ち止まりました。
後ろを振り向くと、ライバも立ち止まっていました。
「このまま行くと、ミヤビさんや患者の方々にご迷惑ですよね。」
ガーネは、トラにそう言いました。トラもうなずきました。
いきなり、ガーネは走り出しました。
「ガーネ。あの子も走ってくるわよ。」トラが驚いたように言いました。
ひょいと後ろを見ると、少し翼を羽ばたかせてはいますが、確かに走っています。
ガーネは無我夢中で、村の中を駆け回りました。
それでも、あのライバはついてきました。
「どうにか出来ないものでしょうか？」ガーネは走りながら、思案しました。
と、その時、村役場へ歩いているマサギさんの姿が目に映りました。
「おお、女神よ。」ガーネは一目散で、マサギさんにしがみつきました。

「マサギさん。お早うございます。」ガーネは朝の挨拶をしました。
マサギさんは、最初誰なのか判らないようでした。
でも、すぐにガーネだと気が付いて、返事をしました。
「ガーネさん。お早うございます。一体どうしたんですか？」
「ライバに追われています。助けて下さい。」
そう言って、マサギさんの影に隠れました。
「えっ。えっ。」迫り来るライバの姿に、マサギさんも思わず走り出しました。
ガーネはその後を、追っかけました。

「何で、私の後ろにについて来るんですか？」
マサギさんは走りながら、ガーネにそう言いました。
「だって昨日、会議室で村長さんが言いましたよ。
滞在中不都合があったら、遠慮なくマサギさんにご相談下さい、って。
だからお願いしているんですよ。」
「ライバの担当は、ナミキさんです。私じゃありません。」
「だけど、あなたは村役場の職員さんじゃないですか。何とかして下さい。」
「でも、私が助けるのは村民なんです。
ガーネさん。あなたは村民じゃありません。」
「そんな冷たい事を言わないで下さい。
昨夜、一緒に夕食を食べた仲じゃありませんか。」
「それはそれ。これはこれです。」
マサギさんとガーネは、そんなやり取りをしながら、逃げ回っていました。

だんだん、２人は走り疲れてきました。
歩道を曲がったところで、隠れそうな物陰に身を潜めました。
追いかけて来たライバは、立ち止まってあたりをキョロキョロしていました。
２人はぜいぜいと息を切らしていました。
それでもライバに、気付かれないようにしていました。
「このままでは、らちがあきません。どうしたらいいんでしょうか？」
ガーネはあらためて、マサギさんに尋ねました。
「この状態では、ナミキさんに連絡を取る事が出来ません。
こうなったら、もうあのお方にすがるしか方法はありません。」
マサギさんはきっぱりと、そう言いました。
やはり、あのお方に頼るしか術は無いんですね。とガーネは思いま

した。
出来る事なら、迷惑をかけないつもりでいましたが、やむを得ません。
マサギさんとガーネは顔を見合わせ、うなずきました。
「ミヤビさーん。」
2人はそう叫びながら、全力で、呪術院に向かいました。
そんな2人を見つけたライバも、急いで後を追って行きました。

2人は、呪術院の中に駆け込みました。
2人とも、息切れして、苦しそうでした。
その様子に、待合室にいた患者も、看護婦もあっけにとられていました。
診療室にも、その様子が報告されたせいでしょうか、ミヤビさんが出てきました。
「一体、どうしたのだ。二人とも。」
2人は、その言葉を聞いて、救われた気がしました。
しばらくして、呼吸が元に戻ると、マサギさんが話し始めました。
「実は、ライバに追われているんです。なんとかならないでしょうか?」
「ライバに追われている?」
ミヤビさんは、呪術院の窓から、外を眺めました。
そして、そこにはライバの姿がありました。
「確かに。だが、あれは子供だな。
それにしても、何故、追いかけられているのか?」
ミヤビさんが、そう尋ねました。するとガーネが、その問いに答えました。
「実は今朝、あのライバが、私たちの進行方向にいたんです。」
更に、ライバの言葉を理解出来た事。
その言葉を無視して行き過ぎようとしたら、追っかけて来た事。
これらをミヤビさんに説明しました。

「ガーネ。君たちは本当に、あのライバの言葉が理解できたのか？」
ミヤビさんは、信じられないと言った顔つきで、尋ねました。
ガーネとトラは目を合わせて互いにうなずきました。
「はい。その通りです。」ガーネはそう答えました。
「信じられません。
この村で、ライバの声が理解出来るのは、ナミキさんだけなんですよ。」
マサギさんも疑っているようでした。
「フム。これは確認する必要があるな。
と言って、あそこでは人の往来の邪魔になってしまう。
そうだ。あのライバを裏庭に連れて行こう。そこでゆっくりと、調べてみたい。」
ミヤビさんが、そう提案をしました。
「でも、どうやって連れて行くのですか？」
「簡単だ。君たちを追いかけて来たのだから、君たちが先導すればいい。
そうすれば、必ず付いて来る筈だ。」
「そうですか。仕方がありませんね。」
ガーネトラは、諦めたようにミヤビさんの指示に従いました。
ライバはミヤビさんが言ったように、ガーネたちの後をついて行きました。

ライバは何のトラブルも無く、呪術院の裏庭に移動しました。
「では、ガーネ。ライバに何か話しかけてくれ。」
「えっ、あ、はい。判りました。
ライバ、あなたは何故、私たちの後についてくるのですか？」
ガーネのその問いに、ライバは答えました。
「あたし、遊びたいの。」
「今、何と言ったのか？」ミヤビさんが、ガーネに尋ねました。
「こう言ったんですよ。あたし、遊びたいの、って。」

ガーネはそう答えました。
「本当なんでしょうか?」マサギさんはまだ半信半疑でした。
「残念ながら、我にもライバの言葉は判らないな。
だが、呪術で心を読む事は可能だ。
私がいいと言ったら、もう一度やってみてくれ。
少なくとも、このライバが心に思った事は、見える筈だ。」
ミヤビさんは、呪文を口の中で唱えました。
しばらくすると、トランス状態になったようでした。
「構わない。やってみてくれ。」
ガーネはミヤビさんの言葉に、うなずきました。
そして再び、ライバに質問しました。
「ライバ、あなたは私と遊びたいですか?私と一緒にいたいですか?」
ライバは、勢いよく首を縦に振りました。そして鳴き声をあげました。
「ミヤビさん。大丈夫ですか?」
ガーネは、倒れそうになったミヤビさんを、慌てて支えました。
ミヤビさんは、目を開けました。
「ガーネ。今、ライバは何と言ったか?」
「はい、あなたと遊びたい。あなたとずっと一緒にいたい、と言いました。」
「我も、あのライバの心の声を聞いた。
それはガーネ。今、君が答えた内容そのものだった。
間違いない。君にはあのライバの声が聞こえるんだ。」
ミヤビさんは、そう確信しました。
「私にはライバの声を、理解する事は出来ません。
ですが、あのライバがガーネさんの問いに、首を縦に振りました。
それは私も見ていましたから、間違いありません。
だから、私もガーネさんの言った事は、本当だと認めたいと思います。」

マサギさんも、賛成しました。

「ガーネ。君は以前、ナミキのゼノンに会った事がある筈だ。ゼノンの声は理解出来たのか？」

ミヤビさんが尋ねました。

ガーネとトラは顔を見合わせました。ですが共に首を横に振りました。

「いいえ、私たちは鳴き声を聞きましたが、理解出来ませんでした。」

ガーネは、そうミヤビさんに答えました。

「そうか。ナミキなら全てのライバの声を、理解できるのだがな。」

ミヤビさんは、考え込んでいました。

しばらくして顔を上げると、ガーネにこう言いました。

「ガーネ、頼みがある。君はあのライバの使い手になってもらえないだろうか？」

「えっ、私がですか？」

「そうだ。君は迷宮の旅人という、今まで我らがあった事が無い人間だ。

どういう可能性を秘めた人間なのか、我としてもすごく興味がある。君だって、今の自分の力を、もっと知りたいんじゃないのか？ガーネ。

もし君さえよければ、君をあのライバの使い手として、承認する用意がある。

そうなればこの村で、可能な限りの待遇を約束しよう。どうだろうか？」

ガーネは、このミヤビさんの新たな申し出を、トラと話し合っていました。

しばらくして、ガーネはミヤビさんに、こう答えました。

「ミヤビさんやマサギさんも知っている通り、私たちは迷宮の旅人です。

場合によっては今すぐにでも、ここから消える運命にあります。
そんな人間でも、何かのお役に立てるというのであれば、喜んでお受けします。
待遇は今まで通りで、構いません。
但し、行く事が可能な場所であれば、どこへでも連れて行って欲しいのです。
もちろん、ナミキさんやノミチさんが行ける所は、全てです。
如何でしょうか？」
ガーネのこの答えに、ミヤビさんはマサギさんと相談しました。
その結果、ミヤビさんは、こう答えました。
「判った。君の言う通りにしよう。」
「有難うございます。
でも、あのライバからも、承認も得る必要があると思います。
ちょっと、待ってて下さい。」
そう言ってガーネは、ライバに振り向きました。
「ライバ。私たちは、ここの世界の人間じゃありません。
迷宮の旅人です。いつ君の前から消えるか、判らない存在です。
私たちが消えた場合、君はとても悲しい思いをするかもしれません。
それでも、私を使い手として、認めてくれますか？
一緒にいたいと、言ってくれますか？」
このガーネの問いに、ライバは首を縦に振って答えました。
「あたしはあなたと一緒にいたい。あたしはあなたに従う。」
「有難う、ライバ。」ガーネは、そうライバにお礼を言いました。

再び、ミヤビさんの方を振り向きました。
「ミヤビさん。では、喜んでお引き受けします。」ガーネは、そう言いました。
「そうか。では確認の印を取り交わさなければいけない。こちらへ来てくれ。」
そう言って、ミヤビさんはみんなを連れて、呪術院の休憩室に入り

ました。
そして、マサギさんと話し合い、何やら紙にしたためていました。
その後、ミヤビさんとマサギさんは、その紙に自分たちの印を押しました。
ミヤビさんはその紙を、ガーネに手渡しました。
「これは、君がこのライバの使い手である事を示す書類だ。
私たちの印は、既に押してある。
後は君がここに、自分の名前とあのライバの名前を、書き込めばいいだけだ。」
「ライバの名前とは？」
「自分が所有するライバの名前は、自分で決められる。
そして、あのライバにもその名前を認識させる事になっている。」
ガーネは窓の外から、ライバを眺めました。
その後、自分の名前とライバの名前を記入しました。
ガーネはその書類を、ミヤビさんに手渡しました。
「これで、もうこの書類は誰に見せても有効だ。
ガーネ。君をあのライバの使い手として認めよう。」
そう言って、あらためてその書類を、ガーネに手渡しました。
パチパチパチ。ガーネは、ミヤビさんとマサギさんから、拍手を送られました。
「あ、有難うございます。」ガーネは照れたように、頭をかいてそう言いました。
「おめでとう。」トラも喜んでいました。
そんなトラにガーネは言いました。
「トラ。あなただって、あのライバの使い手なんですよ。
ほら、見て下さい。トラっていうあなたの名前も書いてあるじゃないですか。」
「えっ、本当なの。」トラも嬉しそうでした。
「よかったですね。ガーネさん。トラさん。
でも、それに引き換え、私の夢は破れてしまいました。」

マサギさんは思い出したように、ハンカチで涙ぐんでいました。
「私の夢とは？」全員がつっこみました。
「実は私の願いは、無事に村役場を、定年退職する事なんです。
その際に、遅刻や欠席が１回も無ければ、皆勤賞がもらえるんですよ。
それを楽しみに、今まで勤めてきたんです。本当に残念でした。」
なんて地味で、しかも時間のかかる遠大な夢を持っていたんだ。
その部屋にいた全員が、そう思いました。
「だ、大丈夫だと思いますよ。マサギさん。
ほ、ほら、もともとマサギさんを私の担当にしたのは、村長さんじゃないですか。
私が不都合を感じたら、マサギさんに相談してと言ったのも、村長さんです。
今回が、その不都合だったんです。
つまり今朝、私がお願いした時点で、村役場の業務は始まっていたんですよ。
それを村長さんに話せば、遅刻は取り消されるんじゃないでしょうか。
あと、それで難しいようなら、私がこう言ったと付け加えて下さい。
今回はマサギさんのおかげで、助かりました。
マサギさんがいなければ、村長さんに余計な手間をわずらわせる所でした。
そんな風に言えば、きっと理解されると思いますよ。
もちろん、その事に関しては、ここにいるミヤビさんも証人になってくれます。」
マサギさんは、ミヤビさんの方を向きました。
すると、ミヤビさんはうなずいていました。
マサギさんは、涙を拭き取りました。その眼には希望の光が宿っていました。
「有難うございます。これからすぐに村役場に行って、その事を伝

えます。」
そう言ってマサギさんは急いで、呪術院を出て行きました。
後に残った全員が、フゥーとため息をつきました。
「人の夢って、いろいろなのね。」トラが複雑そうな表情を浮かべていました。

「ところで、ガーネ。君はライバに1人で、乗れるのかな。」
今更ながら、ミヤビさんが尋ねました。
まさか。ガーネは苦笑しながら、首を横に振りました。
ガーネは、ミヤビさんに連れられて、納屋の方に向かいました。
そして、ライバの手綱と思われるものの束を、ガーネに見せました。
「これはライバの手綱ですね。これがどうしたんですか?」
「自分が所有するライバには、自分が選んだ色の付いた、手綱をつけるんだ。
だが、他の人間が使用している色は使えない。
その色には、ライバを判別する意味もあるからだ。
ナミキは、青色。ノミチは、黄色、我は黒色だ。ガーネは何色にする?」
「あの、マサギさんやトモネ様。
あと村人の中にも、ライバは使える人がいるんですよね。
その人たちは、何色なんですか?」
「マサギやトモネ様は乗る事は出来るが、現在所有しているライバは無い。
あと、ナミキに手ほどきされた村人は、使う事が出来るだけで、所有は出来ない。
決まっているライバの中から、ナミキが選んで使わせてるだけだ。
だから、色は無い。」
「そうでしたか。では使用していない色を選びますね。」
ガーネは見比べた結果、1つの手綱を手にしました。
「ミヤビさん。私はこれにします。」

そう言って、ガーネが見せた手綱の色は、白色でした。
「判った。ではそれにしよう。
君の書類にも、その事を付け加えておくとしよう。」
そう言って、ガーネに渡した書類に、手綱の色も書き加えました。

ガーネとミヤビさんは再び、裏庭に来ました。
見れば、ライバがうとうとしていました。
ですが、2人の足音で目を覚ましたように、しゃんと立ちあがりました。
「ねぇ、あそぼ。」ライバは言いました。
それに対し、ガーネはこう答えました。
「たった今、私はあなたの使い手となりました。
ライバ。今日からあなたの名前は、「ガイム」です。いいですね。」
それを聞くと、ライバはこう答えました。
「はい。あたしの名前は「ガイム」です。名前を付けてくれて有難う。」
ガーネは話を続けました。
「それから今後、私たちの事は、名前で呼んで下さい。
私はガーネ。この猫の名前はトラです。よろしいですか。」
「はい、ガーネ。そしてトラ。」ガイムは、そう言って頭を下げました。
「これがあなたの手綱です。」そう言って、手綱を首にかけてやりました。
「判った。」ガイムは翼をバタバタさせながら、そう言いました。

「じゃあ、初飛行ですね。
ガイム。私が乗りたいから、姿勢を低くしてもらえませんか。」
「判った。」
ガイムはガーネが乗りやすいように、体を低くしました。
「では、行って来ます。」ガーネはミヤビさんに、そう言いました。

「ウム。気を付けてな。」ミヤビさんは、そう答えました。
ガーネは、ガイムの背中に乗り、両手で手綱を握りました。
そして左手で、ポンとガイムをたたいた後、こう言いました。
「じゃあ、ガイム。行きましょうか。」
ガイムは翼を羽ばたかせ、大空へ舞い上がりました。
ミヤビさんは待合室に、患者を待たせているのも忘れてその光景を見ていました。
「トラ。君は行かなくてよかったのか？」
ミヤビさんは、自分の右肩に乗っているトラに聞きました。
「はい。ガーネから、今は危ないから乗っちゃ駄目って、言われたの。
でも、ここから見ている限りは、大丈夫そうね。」
「ああ、でも上がる時や、旋回を始めたりする時は、バランスを崩しているな。
だが、あのガイムがちゃんと自分の体を傾けて、補正させている。
あんなに親切なライバを、私は見た事が無い。
使い手を本当に、大切に思っている証拠だ。
あれなら、不慣れな人間でも、安心して乗る事が出来るだろう。」
ミヤビさんがそう言うと、トラは「ふーん。」と言うだけでした。
不審に思って、ミヤビさんがトラの顔を見ると、なんだかつまらなさそうでした。
自分も乗りたかったのだろうか。それともガイムに嫉妬しているのだろうか。
ミヤビさんは、トラのそんな思いに、妙に心が動かされました。

やがて、無事にガーネが帰って来ました。
「ガイム、有難うございました。」「面白かった。」
ガイムとそんな会話をした後、ガーネはミヤビさんとトラの元に駆け寄りました。
「どうだった。」「危なく無かったの？」

ミヤビさんとトラの言葉に、ガーネは微笑みながら、こう言いました。

「ガイムが我慢をして、私をサポートしてくれました。
だから、安心して乗っていられました。
あの子は、本当に気の優しい子です。
ミヤビさん。私はあの子に乗れてよかったと思っています。
トラも、今度は一緒に乗りましょうね。」

「そうか。それはよかったな。」「私も乗りたい。」
ガーネが嬉しそうだったので、ミヤビさんもトラもホッとしました。

呪術院に戻ると、待合室では、患者が溢れかえっていました。
「しまった。うっかり忘れていた。」ミヤビさんは、そう言いました。

「看護婦さん。診療を再開しますが、もう少し待たせておいて下さい。」
ミヤビさんは、そう看護婦さんにお願いしました。
看護婦さんは、ニッコリと笑いました。
そして、出来るだけ早くお願いしますね。と返事をしました。
ミヤビさんは、ガーネたちを休憩室に、連れて行きました。
「予定より、随分遅くなってしまった。実は、ガーネに頼みたい事があるんだ。」
ミヤビさんは、そう言ってガーネの前に、大きい荷物を置きました。
「実は、これをノミチに届けて欲しいんだ。」
「えっ、これは何ですか？」
「翼竜ヤーベ用の薬だ。翼竜にもいろいろと、薬が必要な時があるんだ。
だから定期的に、薬を調合して持っていく事にしている。
本当はシャドーで、我と一緒に行く予定だったのだがな。
時間が大幅にずれてしまって、今はこの通り、患者でいっぱいになってしまった。

我はこれから診療を、再開しなければいけない。
だから、ガーネ。君が1人で、これをノミチの所まで、運んで欲しいんだ。
幸い、ガーネも、翼竜ライバの使い手の1人になった事だしな。」
「でもさっき、なったばかりなんですけどね。
そんな大事な物を、まだまだ素人の私に任せて、いいんですか？」
「大丈夫。君にはあのガイムがついている。我は、何の心配もしていないよ。」
ガーネは、しばらく考え込んでいました。
やがて、意を決したのでしょう。ガーネはこう言いました。
「判りました。では、これを運ぶ事にします。」
それを聞いて、ミヤビさんは言いました。
「そうか。では、よろしく頼む。午前中に帰って来ればそれでいい。
飛行テストも兼ねて、ゆっくりと飛んで行ってくれ。」
「判りました。有難うございます。じゃあ、トラも行きましょう。」
ガーネはトラに、そう声をかけました。
「判ったわ。あたしも行きます。」トラも張り切って答えました。
ガーネは右肩にトラを乗せ、荷物を持ってガイムの元に行きました。
先ほどと同様、ガーネはガイムに体を低くしてもらいました。
そして、トラにこう言いました。
「トラ。私の右ポケットに入ってて下さい。顔や前足は出してて構いませんよ。
でも、しっかりつかまってて下さい。
強い風が吹いて危ないと思ったら、ポケットの奥に体全部を入れて下さい。
すぐに、ポケットのふたが閉じてくれますからね。」
「判ったわ。心配しないで。」トラは、そう答えました。
ガーネはトラが、右ポケットの中に入ったのを、確認しました。
その後、ガイムの背中に乗り、両手で手綱を握りました。

そして左手で、ポンとガイムをたたいた後、こう言いました。
「じゃあ、ガイム。行きましょうか。」
ガイムは翼を羽ばたかせ、再び大空へ舞い上がりました。

第7話「天空の村にて」よっつめだよ。（終）

第7話「天空の村にて」よっつめだよ。（後書き）

今回のお話は、第７話「天空の村にて」の第４話です。
やっと、２日目になりました。
今回の話は、前半は、マサギさんとの夕食でのお話です。
後半は、ガーネがライバの使い手になるまでにお話です。
今まで、サブキャラが中心の話でしたが、やっと本来の感じになってきました。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第7話「天空の村にて」いつつめだよ。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第7話「天空の村にて」いつつめだよ。のお話です。
この回では、ガーネとトラが、ノミチさんへ薬の配達をします。

第7話「天空の村にて」いつつめだよ。

第7話「天空の村にて」いつつめだよ。

ガーネは、ガイムに乗って、ノミチさんの所に向いました。
「ええと、確か方角はこっちでいいんでしたよね。」
少し不安になりながらも、ガイムを飛ばしていると、やがて深い森が現れました。
その上空には昨日、喫茶店で見た翼竜の姿を何匹か見つけました。
「あれは、ヤーベよね。」トラはそう言いました。
「そうみたいですね。やっと見つける事が出来ました。」
ガーネはホッとしました。
やがて、森の中に、少し開けた場所が現れました。
そして、そこにはたくさんのヤーベが集っていました。
「多分、ここらあたりでしょう。」
ガーネは、ヤーベのいる場所と少し離れた場所に、ガイムを着地させました。
「ここで、待っていて下さいね。」
ガーネはそう言って、ガイムの体をポンと触りました。
「判った。」ガイムはそう言うと、その場所で翼を休めるのでした。

ガーネは、ヤーベが集っている場所の近くに、1件、小屋があるのを見つけました。
「多分、あそこですね。」「そうね。そうに違いないわ。」
いつの間にか、ポケットから這い出たトラが、ガーネの右肩に載っていました。
ガーネは小屋の戸をたたきました。
「ノミチさん。ノミチさん。お薬をお届けに上がりました。」
何回か戸をたたくと、ノミチさんの声が聞こえてきました。

「戸は開いているから、勝手に入って来ていいわ。」
では、お言葉に甘えまして、という事で、ガーネは戸を開けました。
そこには、テーブルの椅子に腰を下ろしているノミチさんの姿がありました。
「あら、お早う、ガーネ。そしてトラちゃん。」
ノミチさんは、ガーネだと判り、笑顔で手を振っていました。
「お早う。ノミチさん。」トラも挨拶をしました。
「お早うございます。ノミチさん。
はい。これがミヤビさんから、渡すように頼まれたお薬です。」
ガーネはそう言って、薬の入った大き目の荷物を渡しました。
「あっ、有難う。」ノミチさんは、はにかみながら、お礼を言いました。
「少し待っててね。」ノミチさんは、そう言って、薬の受取書に記入しました。
「はい。これお願いね。」ノミチさんは受取書を差し出しました。
ガーネはそれを受け取ると、かばんの中に入れました。

その後、気が付いたようにノミチさんは、ガーネの方を見ました。
そして首をかしげて、ガーネに尋ねました。
「でも、ミヤビさんと一緒じゃないみたいね。どうやってここまで来たの?」
「実は。」
ガーネは自分が、ライバの使い手になった事を話しました。
そして、ミヤビさんが作成した、証明書を見せました。
ノミチさんは、それをしげしげと見つめました。
驚いた様子で、ガーネに言いました。
「すごいじゃない、ガーネ。ここに来てまだ今日で2日しかならないのに。
しかも、今朝起きたばかりの事なんでしょう。
それで、もうライバに、いやガイムに乗っているんだ。

とても、信じられないわ。」
そう言いながら、ノミチさんはガーネを連れて、外に出ました。
「ねぇ、ちょっと飛んでみてくれない？」
「えっ、まぁいいですけれど。」
ガーネはそう言って、ガイムの背中に乗りました。
そして、小屋の周りを旋回したのでした。
ノミチさんは、その様子を見て、思わず拍手をしながら叫んでいました。
「ガーネ。すごいわ。本当にすごい。」
やがて、ガーネは地上に戻ってきました。
ノミチさんは駆け寄って、拍手で出迎えました。
「すごいわね。これは奇跡なんじゃないかしら。
こんな僅かな時間に、大空を自由に飛べるなんて。」
ノミチさんは、感動しているようでした。
「ちょっと不安定な部分も、あったみたいだったけどね
ガイムがちゃんと、サポートしてくれていたわ。
これなら、何の心配もいらないわね。」
「確かに。ガイムは私に乗りやすいように気を使っているみたいです。
この子は、本当に優しい子です。」
ガーネはそう言いました。
「ガーネ。あなたは運がいいわね。こんなライバに巡り会えて。」
「私も、そう思います。」
ガーネは、心の底からそう思いました。
「じゃあ、いつまでも表で立ち話もなんだから、そろそろ小屋に戻らない？」
そう言って、ノミチさんはガーネたちと小屋の中に入りました。
その後、ノミチさんたちは、テーブルの椅子に腰を下ろしました。
「さっき、結構、難しい顔をしていましたね。何かあったんですか

？」
「えっ、いや別にそういう事じゃないのよ。
今日の、ヤーベのスケジュールを練っていただけ。」
「スケジュールと言いますと。」
「うーん。簡単に言うとね。ヤーベって生き物でしょう？
ある程度決まった時間に、湖でお水を飲んだり、雨を降らしたりするんだけどね。
たまに、体調が崩れる事もあるのよ。
そういう場合、湖に行く時間を遅らせたり、中止したりするの。
あと、雨を散布する場所を検討したりするわ。
池や湖、村人たちが作った貯水池など、必要以上に溜まらない様に管理するの。
その日その日によって違うからね。結構、面倒なのよ。」
「そうでしたか。いろいろ大変なんですね。」
「特に心配なのが、羽が痛んでしまったり、体調が元に戻らない場合よ。
自然治癒だけでは、どうにもならない場合があるわ。
だから、そういう時は、ミヤビさんにお願いして、お薬を調合してもらうの。」
「それは、ナミキさんの方でも、同じなんでしょうね。」
「ナミキも翼竜使いだからね。
でも同じ翼竜と言っても、種が違うから、同じ症状でもお薬が違うのよ。
それにヤーベはライバと違って、体がデリケートに出来ているの。
だから、お薬が必要になる事が多いんだけど。
それに比べてライバは、ナミキと同じで体だけは頑強なのよ。
だから、それほど体調管理には気を使わなくて済む筈よ。
まぁ、それでもライバは、やる事が多岐に渡っているし、使用頻度も高いわ。
その分、怪我なんかが多くなるわね。

もちろん、ヤーベと同様、羽を痛めるなど翼竜特有の症状も出るわ。」

「そうね。翼竜に限らず、体調管理は難しいわ。あたしたちは、ほとんど迷宮だから、気にしなくて済むけどね。」

トラは、そう言いました。

「そうですね。トラの言う通りです。その点は確かに楽ですね。で、今日のヤーベたちはどんな感じなんですか？」

「さっき、ヤーベの頭領に尋ねたんだけど、体調はみんないいみたい。

だから後は、雨の散布場所を決めればいいだけよ。

でも、それも今、決めたわ。」

そう言って、両腕を上の方に伸ばして、背伸びをしました。

「それは、よかったですね。

じゃあ、ノミチさんへの配達も終わりましたし、これで失礼します。」

そう言って、ガーネたちは小屋を出て行こうとしました。

「あっ、待って。」ノミチさんが呼び止めました。

「ガーネ。あなた、今日は、忙しいのかしら？」

「いいえ。午前中は、この配達でおしまいです。」

「そう。それじゃあ、少しの間、あちきと付き合わない？

まだ、住宅街以外、案内してもらっていないんでしょ。

あちきが案内してあげるわ。」

「それは嬉しいですね。確かにまだ時間はたっぷりあります。

トラ、どうしますか？」

「いいんじゃないかしら。あたしもこの村をもっと見てみたいわ。」

「そうですね。じゃあ、ノミチさん。喜んでお供させて頂きます。」

「そう？じゃあ、決まりね。」

そう言うと、ノミチさんはガーネたちを連れて、小屋の外を出ました。

少しばかり歩いて行くと、ライバの姿が見えてきました。

「これが、あちきのライバ。名前はマーガレットよ。」
ガーネはそれを聞いて、トラと小さい声で話しました。
「聞きましたか。トラさん。」
「ええ、聞いたわ。
あのライバからどうしてそんな、お人形さんみたいな名前を考え出したのかしら。
あたしには、ちょっと理解に苦しむんだけど。」
「まぁ、ネーミングは人それぞれですからね。
しかし、確かに私の理解も超えてしまっていますね。
こういう場合、どういう風に対処をしたらいいんでしょうかね。」
「普通で、いいんじゃない。変におかしい事を言うと怪しまれるわ。」
「そうですね。」
ガーネは、にこやかな顔で、ノミチさんに答えました。
「ええと、それは結構なお名前ですね。
名は体を現わすなどといますが、まさにその通りです。」
「そうでしょう。
あちきもこの子に会った途端に、すぐにこの名前を思いついたの。
あちきたちって、結構ウマが合うんじゃないかしら。
それに引き換え、ナミキったらひどいのよ。
そんなお人形さんみたいな名前を付けるなんて、お前ｘｘじゃないのか。
なんて、言うのよ。」
「それはひどいですね。」ガーネはそう言いました。
ナミキさんは正常な人なんですね。ガーネとトラは、心の中で思いました。
「まぁ、ナミキの事なんかどうでもいいわ。それより、早く飛びましょうよ。」
そう言って、ノミチさんはマーガレットの背中に乗りました。
ガーネも、自分たちの後をトコトコついて来たガイムに乗ろうとし

ました。
「あっ、悪いけど、今回はあちきの後ろに乗ってくれない？
ガーネ。あなたは乗り始めたばかりだし、並飛行はまだ無理だと思うの。」
「それもそうですね。」
ガーネも同意して、連れてってと訴えるガイムをなだめました。
その後、ノミチさんの後ろに乗りました。
そして、その腰に両腕で、しっかりとつかまりました。
ウフフ。悪くないわね。ノミチさんは、そう思いました。
もちろん、トラはいつものように、ガーネの右ポケットに潜りました。

「じゃあ、行くわよ。しっかりつかまっていなさいね。マーガレット、飛んで。」
そう言って手綱を引くと、マーガレットは「グキキキ。」と鳴き声をあげました。
そしてノミチやガーネたちを背に、大空に舞い上がりました。

「あのね。ここが住宅街で、あそこが放牧地帯で」
空の上から、後ろを振り向いて、ノミチさんは説明を始めました。
トラがポケットから顔を出しながら、こう言いました。
「ねぇ、ノミチさん。
説明の最中に悪いんだけど、こちらをいちいち振り向かなくてもいいと思うの。
それより、もっとマーガレットの操縦に専念してくれない？
説明は前を向いていても、出来ると思うんだけど？」
「なに、トラちゃん。ひょっとして怖がっているの？
大丈夫だったら。あちきは、こう見えてもライバだってベテランなんだから。
目隠ししたって、乗りこなせるわ。」

「お願いだから、それだけは止めてください。
それより、何だかマーガレットが左下へ傾いているんですけど。」
ガーネが不安そうに言いました。
「おっといけないわ。」
慌てて、マーガレットの姿勢を正しました。
「駄目よ。トラちゃんも、ガーネも。
操縦中の相手に不用意に、話しかけるのはよくない事だと思うの。
もちろん、あちきが魅力的過ぎて、ほっておけないっていうのは判るわよ。
でもね。それはやっぱりいけない事だわ。」
ノミチさんは、ガーネたちに、そう注意しました。
「あのね。あたしがいつノミチさんのモグモク。」
何か文句を言いかけたトラの口を、ガーネは片手でふさぎました。
ガーネは小さい声で、トラに言いました。
「トラ。世の中にはね。
時として理不尽な事があっても、耐えなければいけない場合もあるのですよ。」
ガーネはトラに優しくさとしました。
「判ったわ。ガーネ。」トラはうなずきました。
「どうも、すみませんでした。これからは気をつけたいと思います。
でも、出来れば前の方を向いて話をして頂けると、こちらも安心なのです。
どうかよろしくお願いします。」
「そうね。判ったわ。
大丈夫なんだけど、同乗者を不安にさせてはいけないわね。
これからはあちきも、気を付けるわ。」
この言葉に、ガーネとトラは、ほっとしました。

「あそこは、放牧場ですか?」
「そうよ。見てごらんなさい。たくさんのブルクがいるでしょう。」

「ブルクってなんでしょうか。」
「あちきたちが、食べるお肉さん。
あそこにいるのは、家畜だけどね。森の中には野生のブルクもいるの。
ナミキが、いつか獲ってやるって言ってたわ。」
「美味しいんですか？」
「まぁ、ブルク自体を食べても、味なんて無いわね。
やっぱり、どれくらい味付けがうまいかで、変わってしまうわ。
料理人の腕のみせどころって、わけね。
どう？もし気になるなら、降りてみる？」ノミチさんはガーネに尋ねました。
「是非、近くで見てみたいです。」ガーネはそう答えました。
ガーネの要望で、ノミチさんはマーガレットを放牧場の近くに着地させました。
そこにはたくさんの動物がまとまって、歩いたり走ったりしていました。
それを飼い主が先導しながら、歩いていました。
「あれが、ブルクなんですね。」
「そうよ。
家畜は人間になれているから、近づいても、そんなに攻撃的にならないわ。
でも、野生のはそういうわけには、行かないわね。
かなり、凶暴だと言う話よ。でも、めったに獲れないから、人気があるの。」
「他に家畜はいるんですか？」
「ブルクと種が違う動物が、２種類ほどいるわ。後、鳥類もやっぱり２種類ね。
でも、その中で、よく食べられているのは、やっぱりブルクね。
肉質が柔らかいし、味付けがしやすいので、料理に最適らしいの。」
「多分、昨日夕食でお肉が出たから、あれがブルクなんじゃないか

と思うんです。
確かに、美味しかったですね。」
「でしょ。」
ノミチさんにとって、ブルクの放牧は小さい頃からの、見慣れた光景でした。
ですから、特別に何の感慨もありません。
でも、ガーネとトラには、初めての経験だったのです。
特に、動物だと言う事で、トラには強く心をひかれる光景だったようです。
「すごい数ですね。ほらあんなにいますよ。よく、はぐれないものですね。」
「本当ね。あっ、あそこにいる小さいブルク、転んじゃったわ。
でも、すぐに起き上がった。丸っこくてなんて可愛いのかしら。」
小さくて可愛いと呼ばれている、トラが絶賛していました。
「こうして見ると、一緒に移動してはいますが、1匹1匹違いが判りますね。
1匹に対して1つのドラマがあります。なかなか興味深い光景ですね。」
ガーネは、いつしか評論家になっていました。
「それに、本当に美味しそうだわ。」
トラは、昨夜食べたお肉を思いだして、舌舐めずりをしました。

「そろそろ行きましょうよ。」
ノミチさんが、ガーネたちにそう声をかけました。
ですがその声が聞こえないかのように、ガーネとトラはじっと見つめていました。
ノミチさんが粘った末、ようやくガーネたちを、放牧場から引き離しました。
「じゃあ、行くわね。」
ノミチさんは、ガーネたちが放牧場に引き返すのではないかと、心

配しました。
だから急いで、マーガレットに飛び乗りました。
そして、ガーネが背中に乗ったのを確認するや否や、急いで飛び立ちました。

ノミチさんは、ガーネたちとしばし休憩をしようと思い、こんな事を言いました。
「ねぇ、あそこにこの村で一番大きい湖があるの。これから寄って行かない？」
ノミチさんは、湖の場所を指さしながら、ガーネにそう言いました。
「それは多分、昨日、ミヤビさんが言っていた湖の事ですね。トラ。どうします？」ガーネはトラに、尋ねました。
「あたしも少し休憩したいわ。行きましょう。」トラも賛成しました。
「では、連れて行って下さい。お願いします。」
ガーネはノミチさんに、そう頼みました。
「ＯＫ。じゃあ行くわよ。」
ノミチさんは、マーガレットを湖に直行させました。

ノミチさんは、マーガレットを湖のほとりに、着地させました。
「本当に、大きい湖ですね。淡水なのに、水の色も綺麗です。」
「そうでしょ。あちきたちは、ここがお気に入りなの。あちきたち以外で、ここに来たのは、ガーネとトラちゃん。あなた方が、初めてだわ。」
「そうですか。それは身に余る光栄ですね。」
ガーネたちがいる所には、木で作られた屋根のある休憩所や調理場がありました。
休憩所には、テーブルが１つと、椅子が６つぐらい置いてありました。
ノミチさんたちは、椅子に座りました。

ノミチさんは、水筒を出して、３つのコップに注ぎました。
飲み口が大きめだったので、トラでも楽に飲めそうでした。
「はい、どうぞ。少し甘めだけど、飲みやすいわよ。」
「では、頂きます。」ガーネとトラはその飲み物を口にしました。
「確かに、うっすらと甘いですが、飲みやすいですね。
これなら、かえって喉が渇いてしまうという事もないでしょう。」
ガーネとノミチさんは、美味しそうに飲んでいました。
「本当。飲みやすいわ。これならいくらでも、飲めそう。」
トラも、その味に満足していました。
「今日もよく晴れているわね。でも、本当は雨の方があちきは好きなの。」
「そうなんですか。」
「と言っても、滝みたいに激しく流れるような雨じゃないわよ。」
ノミチさんは、昨日のナミキさんとの事を、思い出したのでしょう。
ガーネの方を見て笑いながら、そう言いました。

「しとしとと降って、それとなく、草木や大地に湿り気を与えるような雨。
静かではあるけど、生きとし生ける物全てに、希望を与えるような雨。
あちきは、そんな雨が好き。
だから、そんな雨をみんなに分けてあげたくて、あちきは雨を降らせているの。
ヤーベの降らせる雨は、この雲の下で降る雨とは違うの。
ヤーベがいつも飲んでいる湖の水とも違う。
ヤーベによって取り込まれた水には、あらゆる汚染が取り除かれ、浄化される。
そして、生きとし生ける物に必要な、成分が加えられる。
ヤーベから排水されたその水は、命と名付けられた全ての物に力を

与える。
静かに、そしてゆっくりと。でも、着実に。
あちきは、雨が好き。
暑い陽射しを和らげてくれる。
湿り気の中で、乾いた心を解きほぐしてくれる。
人に、生きようとする希望を見出してくれる。
あちきは、そんな雨がとても好き。
だから、あちきは雨を降らせてあげたいの。
この天空の村全てに。
あちきが、生まれたこの故郷に。
あちきが、愛しているこの大地に。」

ノミチさんは、ポエムのようにガーネやトラに語りました。
「ノミチさんは、この村が大好きなんですね。」
「そんなの決まっているじゃない。この村も。この村に住んでいる人たちもね。」

ガーネは湖の周りの景色を眺めていました。
「あのー、ノミチさん。あの森は結構大きいですね。」
ガーネは森を指さしながら、ノミチさんに言いました。
「ああ、あの森ね。
私たちはよくあの森で遊ぶわ。でもね、気を付けないと、大変なのよ。」
「と言うと？」
「昔、井戸を作ろうとして、とても深く掘った穴が、あちらこちらにあるの。
でも、結局あまり水が出なくて、そのままになっているわけ。
だから、ついうっかりすると、穴の中に落ちちゃうかも知れないのよ。

あそこは、普通の村人では、歩行禁止になって入れないの。
だから、もし私たちがあの穴に落ちちゃたら、助からないかも知れないわ。
特に「静寂の穴」には気を付けないといけないの。」
「「静寂の穴」って一体、何なのですか？」
「「静寂の穴」は、昔掘った穴が、特殊な状態に変化したものなの。
その穴にに入ってしまうとね。
中からどんなに大きい声で叫んでも、外に聞こえる事は絶対に無いの。
外からの声も全く聞こえないわ。文字通り、静寂な世界なの。
その上、その底には、ある種のガスが溜まっているの。
もし、1日以上、そこにいたら喉や肺がやられて確実に死ぬとさえ言われているわ。
だから、とても危険なのよ。
ガーネもあの場所に行くときには、気を付けるのよ。
まぁ、多分、行く必要なんて無いとは思うけどね。」
「あっ、そうなんですか。判りました。
いろいろと教えて頂いて、有難うございます。」
ガーネは、ノミチさんにお礼を言いました。
「でも、そんなに危険なら、板みたいなものでも、敷いたらいいのに。」
トラは、そう言いました。
「もちろん、幾つかの穴には、そうしているのよ。
でも当時は、穴を作っても、水がすぐに出なくなっちゃったみたいなのよ。
だから、たくさん掘ったのね。
あちきたちにも、まだどこにどのくらいあるのか、正確には判らないのよ。」
「水を得るって、大変なことなのね。」トラは、そう言いました。

マーガレットは、ついに山頂の先端部分まで、来ました。
「ほら、あそこに小さい建物が、幾つかあるでしょ。
あれが、発電所や掘削所なの。あっ、工場もあったわね。」
「あんなに小さいんですか。まるで掘立小屋みたいですね。
もっとしっかりした大きい建物群を想像していたんですが。」
「科学と言っても、ここにいる村人が不自由なく暮らせる程度でいいって事よ。
みんなも必要以上はいらないって言っているわ。
万が一、それが原因で自然を壊したら、元も子も無いしね。
工場なんかも実用と言うよりは、実験を目的で建ててあるだけなの。」
「自然重視って事なんでしょうか。
それとも共存って言った方がいいんでしょうかね。
まぁ、どちらにせよ、今ある自然が、いつまでも続くといいですね。」
「当たり前よ。
自然が無ければ、この村で生きていく事なんか出来ないもの。」

その後、マーガレットは、山頂を一周しました。
「どう、大体、村全体の感じがつかめたんじゃない？」
「はい。村の中心の住宅街が、一番人が多い場所だと言う事が判りました。
それに手つかずの自然が多く残っているんですね。」
「さて、これで一応、この山頂を一回りしたわ。
他にどこか行きたいと思った場所は無い？」
「そうですね。
そう言えばノミチさんはヤーベに、湖の水を飲ませているって言ってましたね。」
「ええ、そうだけど。それがどうしたのかしら？」
「出来れば、その湖に連れて行って欲しいんですけど、駄目でしょ

うか?」
ガーネはノミチさんに、そう言ってみました。
「そうね。あたしも、行ってみたい。」トラも賛成しました。
「えっ、あの湖に。うーん。」
ノミチさんは、手を組んで考え込んでしまいました。
「ノミチさん。手綱から手を離さないで下さい。マーガレットが傾いています。」
ノミチさんは、ガーネの声に気が付いて、慌てて手綱を握りしめました。
「もう、ガーネったら。操縦者を困らせる様なお願いをしないでよ。」
「あっ、やっぱり駄目ですか?」
「ごめんなさい。」そう言って、ガーネの方を向いて手を合わせました。
「だから。」
「あっ、またやっちゃった。」
ノミチさんはそう言って、再び手綱を握りました。
「ごめんなさいね。あちき、あの雲の下にあなたを連れていくのは無理だわ。」
「いや、無理ならいいんですけど、でも、どうしてでしょうか?確か、ヤーベに毎日水を飲ませるために、降りているんですよね。」
「そうなんだけどね・・・。
あの雲の下には、ナミキと一緒に行ってもらいたいのよ。
彼女なら、うまく案内が出来ると思うわ。」
「そうですか。判りました。
ノミチさんには、この山頂を案内してもらって、私もトラも嬉しかったです。
もうこれ以上、無理をお願いするわけも行きません。
ノミチさんの言う通り、行くのは諦めましょう。」
「そう?ごめんなさいね。じゃあ、そろそろ帰りましょうか?」

「はい。」
マーガレットは、ノミチさんの小屋へと戻って来ました。

「今日は楽しかったわ。また来てね。」
「私の方こそ、本当に有難うございました。」
ガーネはそう言って、頭を下げました。
「有難うございました。」
トラもお礼を言いました。
その後、ガーネたちは、ノミチさんの小屋をあとにしました。
その後ろ後を、ノミチさんは見送っていました。
「ごめんなさい、ガーネ。
あの雲の下の事は、あちきではどうしても、うまく説明出来ないの。
」

ガーネは、ガイムが待っている場所に戻りました。
ガイムが駆け寄ってきて、ガーネの顔を舌で舐めました。
そして、顔を体に擦りつけていました。
「待たせてごめんね。じゃ、帰りましょう。」
ガーネは、そう言ってガイムの背中に乗りました。
そして、体をポンと触りました。
「うん。帰ろう。」
ガイムはそう言って、翼を羽ばたかせて、大空へ舞い上がりました。
そして、呪術院へ戻って行きました。

呪術院に帰ると、休憩室でミヤビさんがお弁当を食べていました。
「ただ今、帰りましたって、もうお昼ですか？」
「と言うより、朝昼混合だな。
今朝は忙しかったので、朝食を取り損ねたのだ。」
ガーネは今朝、ミヤビさんに迷惑をかけてしまった事を思い出しました。

「すみません。私のせいでご迷惑をおかけしました。
本当に、申し訳ありませんでした。」「申し訳ありませんでした。」
ガーネとトラは、一緒に頭を下げて謝りました。
「いや、謝る必要は無い。
こちらも、いい体験をさせてもらったからな。
ところで、ガーネ。お昼はどうするつもりだ。」
「あっ、はい。食券はもうもらっています。
だから、宿舎の食堂で食べるつもりです。」
「そうか。お昼を食べたら、また来てくれ。もう1つ、配達する物が出来た。」
「判りました。」
ガーネはそう言って、呪術院を出た後、宿舎に向かいました。

宿舎の食堂で、食券を渡すと、昨日とは味が異なるラーメンが出てきました。
「また、ラーメンなんだ。」トラは可笑しそうに言いました。
「ええ、そうです。でも、味が違うみたいですよ。」
ガーネとトラは、仲良くそのラーメンを食べました。
「なんか、しょっぱかったですね。」
「あたしはガーネが水で薄めてくれたので、丁度よかったわ。」
とても美味しかったと言うには、難があるラーメンの味でした。
でも、何故か舌にその味が、いつまでも染みついていました。
ガーネたちは、自分たちの部屋で歯を磨き、ひと休みしました。
そろそろ出かける時間です。
ガーネとトラは、また呪術院に向かいました。

呪術院の休憩室では、食事を食べ終えて休んでいる、ミヤビさんがいました。
「また、来ました。」ガーネはミヤビさんに挨拶をしました。
「ウム。」と言って、ミヤビさんは、診療室から、荷物を持ってき

ました。
昼間より、2倍ほど大きい荷物でした。
「これは、ナミキから頼まれていた薬だ。これを運んで欲しい。」
「随分、大きい荷物ですね。これも、翼竜用なのですか？」
「その通りだ。ノミチのヤーベと違って、ライバは数が多いからな。薬の量もそれに従い、多くなると言うわけだ。」
「判りました。では、これをナミキさんの所に運びますね。」
そう言って、その大きい荷物を運ぼうとしました。
「ああ、そうだ。今のうちに言っておく。
その荷物が無事にナミキの手に届いたら、今日はもうおしまいだ。
だから、ゆっくり行って来て大丈夫だ。
ガーネ。君がどこか案内して欲しいところがあるなら、ナミキに頼むといい。
ナミキに時間があれば、そこに連れて行ってくれると思う。」
「判りました。では、行ってきます。」
ガーネはその荷物を、ガイムの所まで運んで、くくりつけました。
「じゃあ、行きましょう。トラ。準備はいいですか？」
「もちろんよ。」トラは右ポケットから顔を出して、ガーネに答えました。
ガーネは、ガイムの背中に乗り、その体をポンと触りました。
「では、ガイム。行きましょう。」
「判った。」
ガイムは、鳴き声を上げて、大空高く舞い上がりました。

第7話「天空の村にて」いつつめだよ。（終）

第7話「天空の村にて」いつつめだよ。（後書き）

今回のお話は、第７話「天空の村にて」の第５話です。
今回の話は、ガーネたちとノミチさんの話のやり取りがメインのお話です。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第7話「天空の村にて」むっつめだよ。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第7話「天空の村にて」むっつめだよ。のお話です。
この回では、ガーネとトラが、ナミキさんへ薬の配達をします。

第7話「天空の村にて」むっつめだよ。

第7話「天空の村にて」むっつめだよ。

「次はナミキさんの所ですね。」
ガーネはガイムの背中に乗り、大空へ舞い上がりました。
地図にあった方角にしばらく進むと、上空にたくさんのライバを見つけました。
「ああ、あそこですね。」
ガーネはその真下の平地に、小屋があるのを見つけました。
ガーネは小屋から少し離れた所で、ガイムを着地させました。
「ガイム、有難うございます。しばらくここにいて下さいね。」
「判った。」

ガーネは、ナミキさんがいると思われる、その小屋に向かって歩き出しました。
するとトラが右ポケットから這い出して、ガーネの右肩にちょこんと座りました。
「午前中はノミチさんで、午後はナミキさんか。
両方ともライバに乗れるのに、なんで薬をもらいに行かないのかしら。」
トラが疑問を呈しました。
「ノミチさんの予定は、ヤーベの体調の具合で変わるんだそうですよ。
だから出来るだけ、ヤーベの近くにいた方がいいらしいのです。
小屋があそこにあるのは、そのためですね。
一方、ナミキさんは、この山頂全体にいるライバを、全て管理しているんです。
多くのライバと、多様な運搬や連絡などを共に管理しています。

だからライバが多くいるこの小屋に常駐した方が、対処しやすいらしいのです。」
「そうなの。翼竜使いも楽じゃないわね。
じゃあ、あまり自宅には帰っていないの？」
「はい。２人とも、ほとんど毎日、小屋で寝泊まりしているらしいです。
と言っても、時々お休みは取るらしいです。
長い時間、体が空く場合には、呪術院に顔を出す事もあるそうですよ。」
ガーネはトラとそんな話をしている間に、ナミキさんの小屋に到着しました。

ガーネはその小屋の戸をたたいた後、こう言いました。
「ナミキさん。お薬をお届けに上がりました。」
すると、中から声が聞こえてきました。「ああ、ちょっと待っててくれ。」
その後ガチャと、戸が開きました。
「何だ。ガーネじゃないか。でも、お前、どうやってここまで来たんだ。」
ナミキさんは不思議がっていました。
「あのライバに、乗ってきたんです。」そう言って、ガイムを指差しました。
「ちょっと待て。俺はお前に、ライバに乗る許可を出した覚えは無いんだがな。
それに、そのライバはまだ子供だ。危険すぎる。」
ナミキさんは、怒ったように言いました。
「それについては、ミヤビさんからもらった証明書があります。」
そう言って、ガーネはその文書を、ナミキさんに手渡しました。
「ふーん。どれどれ。」
ナミキさんは、渡された文書を開いて読み出しました。

文書を読み終わったナミキさんは驚いて、ガーネに言いました。
「このライバ自身が、お前を選んだと言うのは、本当なのか？」
「本当です。ミヤビさんとマサギさんも見ていました。
ミヤビさんは、私に、ライバの使い手にならないかと言ってくれました。
私は、その申し出を受ける事にしたんです。
そうしたら2人は、私にこのライバに乗っていいと許可をくれたのです。
だから今、私は、このガイムに乗って空を飛ぶ事が出来るんです。」
ガーネはナミキさんに、そう説明しました。
「そうよ。あたしもそこにいたもの。間違いないわ。」トラもそう言いました。
ナミキさんは、ガーネの話を聞いた後、もう一度その文書を読んでいました。
読み終わるとナミキさんは、ガーネの方に顔を向けました。
「そうか。あの2人が承認したんだ。
本来、ライバはその使い手である、俺が管理している。
ライバに乗るには、俺の許可が必要なんだ。
いたずらに乗り回して、怪我をされたらたまらないからな。
人間も、ライバも傷つく事があるからだ。
だが、例外もある。
村の代表者の2人以上の承認があれば、ライバに乗ることは可能なんだ。
そして、この文書には2人の承認の印がある。」
そう言って、ナミキさんは2人の印を押してあるところを見せました。
「あの2人がいいと言うなら、この俺も承認したいな。
だが、念のためだ。そのライバ、ええと、名前は何と付けた？」
「ガイムです。」

「そのガイムをここに呼んでくれ。そして、俺の前で飛んでみてくれないか。」
「判りました。でもその前に、薬を受け取って頂けませんでしょうか？」
「えっ、ああ、そうだったな。」
ナミキさんは、ガーネから薬を受け取りました。
「とりあえず、礼を言っておくよ。持って来てくれて有難う。」
「いえ、これもミヤビさんのお手伝いですから。後で、受取書を渡して下さい。」
ガーネは、そう言ってガイムの方を向きました。
「ガイム。ちょっとこっちに来てもらえますか？」
ガーネがそう言うと、ガイムは「何？」と、ガーネの近くに寄ってきました。
そして、ガーネに頭を垂れました。
「ガイム。少し乗っても構いませんか？」
「もちろん。」
ガイムは、体を低くしました。ガーネはガイムの背中に乗り、手綱を引きました。
「ガイム。では飛んで下さい。」
ガーネはそう言って、ポンとガイムを触りました。
「飛ぶ。」ガイムは鳴き声をあげながら、大空へと舞い上がりました。
ガーネは、ガイムに何回も、小屋の上空を旋回させました。
飛行している間、ガイムは鳴き声をあげていました。
「あれは、ライバの歌だ。ライバが歌を歌っている。
俺が初めて、ゼノンに乗った時のように。」
ナミキさんは、何故か、懐かしい思いに駆られていました。
そして上空に舞うガイムに乗っている、ガーネの姿が目に映りました。
その時ナミキさんは、はっきりとその理由が判りました。

「あれは、昔の俺だ。
ガーネは、初めてゼノンに乗った時の、俺の姿を見せてくれているんだ。」
例えようも無いその懐かしさに、ナミキさんはいつしか涙を流していました。

ナミキさんがふと気が付くと、いつの間にか自分もゼノンに乗っていました。
「ゼノン、行くよ。」ナミキさんはかけ声とともに、手綱を引きました。
ゼノンはそれに応えて、大空高く舞い上がりました。
「おーい。ガーネ。」ナミキさんのゼノンは、ガーネのガイムと合流しました。
「どうだ。並飛行をやらないか?」「いいですね。やりましょう。」
二人は、それぞれの翼竜を並ばせて、飛行をしました。
直進、旋回、降下、上昇、また直進と、基本的な動きを繰り返しました。
ガイムの方が多少、遅れ気味になる事もありましたが、順調な飛行を続けました。
「楽しいな。ガーネ」「そうですね。ナミキさん。」
ナミキさんは、ガーネに気を使いながらも、その飛行を楽しんでいました。

やがて2人は飛行を終了し、小屋の近くに着地しました。
「どうだった。?」「はい。とても気持ちがよかったです。」
「今度は、是非、並飛行で宙返りやきりもみ回転もやってみたいな。教えてやるからどうだ、やってみないか?」ナミキさんは、乗り気でした。
「まぁ、そういう機会があれば。」ガーネは、遠慮がちに答えました。

2人は、土手の草むらの上に寝転びました。
ナミキさんは空を見上げて、こんな事を口ずさみました。

「俺は、空が好きだ。
空の青さが、好きだ。
空の青さは、1つじゃない。見る角度や高さによって、さまざまに変化する。
季節によっても違う。
俺は、そのどの空の青さにも、心を惹かれてしまう。
俺は、空を飛ぶ事で、その青さを独り占めに出来る。
その青さと一体になって溶け込む事が出来る。
時が止まるような、錯覚さえ覚えてしまうその瞬間。
別な世界に、飛び込んだようなその感覚。
俺にとって、それはなくてはならない大切な時間。

この空には、もう1つ、俺を魅了させるものがある。
それは、太陽。
まぶし過ぎて、直視は出来ない。
だがそれは、この空の青さを背景として、壮大な輝きを見せてくれる。
天空に浮かぶ、神のような存在だ。
俺は、空を飛ぶ事で、その神に近付く事が出来る。
その偉大な力を、この身体いっぱいに浴びる事が出来る。

空の青さと太陽の輝き。
これをこの身体全体で感じる事こそ、俺が空を飛ぶ最大の理由。
俺が生きている事に、無上の喜びを感じるその瞬間。」

ナミキさんは、目の前に広がる空を、じっと眺めていました。

「確かに確認したよ。俺もガーネがライバに乗る事を承認しよう。」
「有難うございます。」
ナミキさんは、ガイムから降りたガーネと握手をしました。
そして、持っていた証明書に、自分の承認の印も追加しました。
「これでいい。これで間違いなくガーネは、ライバの使い手として認められた。」
ナミキさんは満足したように言いました。
「しかし、ライバ自身がお前を選ぶとはな。まるで、俺の時と同じだった。」
「えっ、そうだったんですか？」
ナミキさんは懐かしむような表情で、ガーネにうなずきました。

ナミキさんは、ガーネがここに来た理由を思い出しました。
「そうだ。確か、今日は薬を持って来たんだったな。」
ナミキさんは小屋で、薬の受取書に記入しました。
「はい。これでいいんだろう。」ナミキは受取書を差し出しました。
ガーネはそれを受け取ると、かばんの中に入れました。
その後、ガーネはナミキさんに、こう言いました。
「すみません。あの、実は午前中にノミチさんの所に行ったんですよ。」
「ああ、あいつの所に行ったのか。何の用だったんだ？」
「翼竜ヤーベ用のお薬を渡すためです。」
「ああ、そうか。あいつの所にも、必要だからな。で、それがどうかしたのか？」
「その時ノミチさんに、ヤーベが飲み水に使う湖を見たいと言ったんです。」
「フムフム。それで、あいつ、何と言ったんだ？」
「自分ではうまく案内出来ないので、ナミキにお願いして、と言わ

れました。」
あのヤロー、面倒な事は全部、俺に押し付けるつもりだな。
ナミキさんは、そう思いました。
「まぁ、行っても構わないけど、どうしても行きたいのかい？」
ナミキさんは念のために、ガーネに尋ねました。
「はい。午前中ノミチさんに、この山頂全体をライバで案内してもらったんです。
だから出来れば、雲の下の世界も行ってみたいんです。」
ガーネがそう言うと、ナミキさんは気難しそうな表情をしました。
まぁ、いいか。行けば分かるからな。
そんなつぶやきが聞こえた後、ナミキさんはガーネに言いました。
「判った。どうしても行きたいんなら、連れて行ってやる。
但し、お前のガイムは置いて行け。
雲の下の世界は環境が厳しくてな。子供のライバにはよくないんだ。
あと、行く前にこの布で、お前とトラの口を覆っておけ。」
ナミキさんはそう言って、2枚の布を渡しました。
「判りました。でも、この布は何で必要なんですか？」
「降りて見れば、すぐに判るよ。」
ガーネは、自分とトラの口を、もらった布で覆いました。
「じゃあ、トラ。降下している間は、風の抵抗が激しいと思うんですよ。
だから、着地するまでは、ポケットの奥にいて下さい。」
ガーネはトラに、そうお願いしました。
「モグモグ。」ガーネはトラが、何を言っているのか判りませんでした。
ですが、トラがガーネの右ポケットに潜り込んだ事で、安心しました。
ナミキさんはゼノンの背中に、ガーネと一緒に乗りました。
「しっかり、つかまっていろよ。じゃあ、出発だ。ゼノン。」
ナミキさんが手綱を引くと、ゼノンは大空へ舞い上がりました。

ゼノンは、山頂の先端に差しかかりました。
ナミキさんとガーネの眼下には、どこまでも広がっている雲がありました。
「じゃあ、あの雲の中に突入するからな。しっかり、つかまっておけ。」
「はい判りました。」ガーネは、そう答えました。
「降下だ。ゼノン。」
ナミキさんはそう言って、ゼノンに雲の下に降りるよう、指示を出しました。
ゼノンは、頭を下にして、雲海に突入しました。
ナミキさんたちは、薄暗い雲の中をただひたすら、降下しました。
やがて、突然視界が開きました。
「見るんだ。ガーネ。あれがお前が見たがっていた地上の姿だ。」
ナミキさんは、そう言いました。
「あれが・・・。」ガーネは絶句しました。

ナミキさんたちは、降下を続けた末に、無事に地上に着地する事が出来ました。
「着きましたよ。トラ。」
ガーネはトラが入っている、右ポケットのふたを開けました。
「やれやれ、やっと着いたわね。結構、時間がかかったんじゃない。」
トラはそう言うと、ポケットから飛びだして、地上にスタッと降りました。
「へぇ、ここが・・・。」
ガーネとトラは、その世界の姿に、言うべき言葉を失っていました。
ただ、唖然として、見つめる事しか、出来ませんでした。

それは、まさしく、死の世界でした。

ガーネたちの周りは、全て廃墟と化していました。
たくさんのがれきが散在していました。
それでいて、何もかも根こそぎ吹き払ったかのような、綺麗な場所もありました。
ただそこには、幾つもの建物が建っていたと思われる、痕跡が残っていました。
クレーターになっている場所もありました。
人の気配はもちろん、僅かな生命の息吹さえ、感じられませんでした。
空気はよどんでいて薄黒い色をしており、呼吸するのも困難なほどでした。

「何故、こんな事に。」ガーネは咳をしながら、ナミキさんに尋ねました。
「俺も、詳しくは知らない。
オババ、いやトモネ様から聞いた話では昔、ここで激しい戦争が行われたそうだ。
領土や利権絡みの戦争だったらしい。
それから、どれくらいの年月が経ったか判らないが、今もそのままになっている。
大地も、空気も荒れ果てて、新しい命が生まれる事の無い世界になってしまった。
何の希望も見当たらない。まさに、死の世界となってしまったんだ。」
ガーネは、それ以上聞く事は、何もありませんでした。
ふと気が付くと、トラがいません。ガーネは、慌ててトラを探しました。
ガーネは、がれきの中を探し回りました。
そのがれきの中で、一番高い所に、トラはいました。
「トラ。」ガーネはトラの名前を呼びました。

でも、トラは動く気配はありませんでした。
ガーネは急いで、トラの元へ駆け寄りました。
トラは、何かをじっと見ていました。
ガーネは、トラの見ている方向に目をやりました。
そこには、がれきが砂にまみれていました。
そして、その中に、白骨化している人間のかけらが多く散在していました。
ガーネは、トラを抱きかかえました。トラの体は震えていました。
トラはガーネに何か言おうとしていました。
ですが、咳が邪魔をして、喋れないようでした。

「もう、帰ろう。これ以上いると、肺がやられてしまう。」
ナミキさんは、ガーネたちにそう言いました。
「そうですね。帰りましょう。」ガーネも賛成しました。
2人は、待機しているゼノンの元へ、歩きだしました。
ガーネはトラを、右ポケットに入れました。
するとトラは、右ポケットの奥に、潜り込みました。
トラの咳は、続いていました。
ゼノンの元に戻ったナミキさんたちは、その背中に乗りました。
「じゃあ、帰るからな。」
ナミキさんはそう言って、ゼノンに帰還の指示を伝えました。
ゼノンは、大空へ舞い上がりました。
雲の中に突入する前に、ナミキさんは、ガーネに声をかけました。
「あれを見て。あそこがヤーベたちが水飲み場にしている湖なんだ。」
ガーネは、ナミキさんが指さす方向を見ました。
そこには、かなり大きい湖がありました。
そして、たくさんのヤーベが群がっていました。
「ノミチも、あそこにいる筈だ。どうだ。寄ってみるか?」
ナミキさんは、ガーネに尋ねました。

「いえ、さっきから、トラの咳が止まらないんですよ。
私も、ちょっと調子がおかしいんです。
このまま、まっすぐ村に帰った方がいいと思います。」
「多分、地上の空気を吸い込んだので、喉や肺がやられたんだな。
判った。村に戻ったら、呪術院にまっすぐに向かおう。」
ナミキさんは、そう言って、少し速いスピードで、ゼノンを上昇させました。
「でも、これで判っただろう。
何故、ノミチがお前たちを、雲の下に連れて行きたくなかったのか。
うまく案内が出来なかったからじゃない。
あいつは、お前たちに、あんな光景を見せたくなかったんだよ。」

ゼノンは、雲海に突入しました。
薄暗い雲の中を、ゼノンは、ひたすら飛び続けました。
しばらくしてゼノンは、雲海を突き抜けました。そして村の上空に到達しました。
ガーネは、村が見えて来た途端、何かホッとする思いを感じました。
ガーネは右ポケットを触って、こう言いました。
「トラ、帰って来たよ。」

ゼノンは、呪術院の裏庭に、着地しました。
ナミキさんは、ガーネたちをゼノンから、降ろしました。
「先に呪術院の中に入って、ミヤビの診療を受けて来るんだ。
その間、俺は、一旦小屋に戻る事にしよう。
その後、ガイムを連れて戻って来るから、心配するな。」
ナミキさんは、ガーネにそう言いました。
「有難うございます。では、よろしくお願いします。」
ガーネはそう言って、頭を下げました。
中に入ると待合室には、既に人が1人もいませんでした。
休憩室に入ると、そこにはミヤビさんがいました。

「お帰り。と言いたいが、ガイムの姿が見えない。何かあったのか？」

ミヤビさんは、ガーネに尋ねました。

ガーネは、答えようとしましたが、声がかすれて、うまく喋る事が出来ません。

ミヤビさんは、それを察したのでしょう。

ガーネを診療室に、連れて行こうとしました。

その時、ガーネはポケットから、トラを出しました。

トラの咳も、さっきから続いていて苦しそうでした。

ガーネは、ミヤビさんの顔を見ました。

ミヤビさんは、納得したようにうなずきました。

「判った。ガーネとトラ。一緒に来るんだ。」

ミヤビさんはそう言って、ガーネたちを診療室に連れて行きました。

治療が終わって、ミヤビさんたちは診療室から出て、休憩室に入りました。

そこには、ナミキさんの姿がありました。

「おっ、やっと終わったようだな。大丈夫か？」

「おかげ様で、咳が止まり、声も楽に出るようになりました。気分もさっきまでとは違って、だいぶよくなったように思います。」

「あたしも、ついさっきまでは、本当に苦しくて仕方が無かったわ。でも、今はもう大丈夫よ。」

ガーネとトラは、ナミキさんとミヤビさんにお礼を言いました。

「我は、ガーネたちが良くなってくれれば、それで満足だ。」

「俺も、地上に行く前にもう少し、注意をしておいてやればよかった。

すまなかったな。でも、大した事が無くて本当によかった。」

ナミキさんは、ガーネにそう言って、頭を下げました。

「とんでもありません。地上に行きたいと言ったのは、私の方です。私こそ、自分の無理なお願いで、ご迷惑をおかけして申し訳ありま

せんでした。」
ガーネも謝罪の言葉を口にしました。

その後ミヤビさんは、自分の分も含めて3人と1匹に、飲み物を用意しました。
出された飲み物を飲みながら、話題を変えて、別の話に盛り上がっていました。
やがて、ナミキさんは、用事があると言って、帰る事にしました。
その際、ふと気が付いたように、ガーネにこう言いました。
「あっ、それはそうと、俺の小屋の近くでガイムが待機していただろう。
あいつに、お前がここにいると言ったら、すぐに飛んで行っちまった。
今は裏庭に、ゼノンやシャドーと一緒にいるよ。」
「有難うございます。ナミキさん。」ガーネはナミキさんにそう言いました。
「ガーネ。今日はもう帰って、宿舎で、ゆっくり休んだ方がいい。」
ミヤビさんは、そう言ってガーネに今日の日当を手渡しました。
ガーネはそれを受け取ると、あらためて2人にお礼を言いました。
そして、トラと宿舎への帰路につきました。

「それにしても、あの薬がこんなにうまく利くとは、思わなかったな。
やはり、被験者は必要だ。」
ミヤビさんは、そうつぶやきました。
「うん。ミヤビ。今、何か言ったか?」ナミキさんは、尋ねました。
「いや別に。何でも無い。」ミヤビさんは、そう答えました。

ガーネとトラは、宿舎に戻りました。
「お腹が空きましたね。部屋に戻る前に、食事をしませんか?」

ガーネは尋ねました。
「そうね。元気になったら、あたしも食欲が出てきたわ。じゃあ。食堂に行きましょう。」
ガーネとトラは、食堂に直行しました。
ガーネは、食券を使って、係りの人に手渡しました。
すると、いつものようにトレイが2つ出て来ました。
トラが待っているテーブルに着いた後、そのトレイを置きました。
ガーネが席に着くと、トラがこう言いました。
「この時間って、あまり人はいないのね。」
「まぁ、大体の人は、定時で帰るんじゃないでしょうか。ここは、そんなに村人の数も、多く無さそうですしね。」
「じゃあ、食べましょうか。」ガーネはハシを割って、手を合わせました。
「頂きます。」ガーネとトラは同時に、食事の挨拶をしました。
ガーネたちはこの食堂で、初めてラーメン以外の物を口にしました。
「なかなか、美味しいですね。」「ここは、夕食の方がいいわね。」
期待していた以上の味に満足しながら、食事を楽しみました。

やがて食事も終わり、ガーネたちは歯を磨いて、自分の部屋に戻りました。
「今日1日も結構、大変でしたね。
翼竜ライバに追いかけられたかと思えば、急にその使い手になってしまいました。
その後も、すぐにガイムに乗って、大空を飛び回りましたよね。
それでも、こうやって無事に宿舎に帰れる事が出来ました。
これって、奇跡と言っていいんじゃないでしょうか？」
「確かに、ここに来てからは、ちょっと忙しいわね。
まぁ、迷宮と比較しても、仕方がないんだけど。
それにしても、よくあんなにすぐに翼竜で、飛べたものね。
あたし、ガーネを見直したわ。」

「まぁ、あれはガイムがしっかり、私をサポートしてくれたからですよ。
ど素人の私の技量だけでは、あんなに簡単に飛ぶ事は出来ませんでした。
私は、ガイムに感謝しなければ、いけないんでしょうね。」

その時この部屋のドアから、ノックの音が聞こえてきました。
「はーい。ちょっと待って下さい。」
ガーネは、ドアの方に行って開きました。
「あの、私、この宿舎の受付の者です。
実はさきほど、ガーネ様へのお手紙を、ライバが運んで来ました。
これがその手紙です。どうかお受け取り下さい。」
そう言って宿舎の受付の人はガーネに、その手紙を手渡しました。
その人がお辞儀をして立ち去った後、ガーネは部屋の中に戻りました。
手紙は2通ありました。
片方の手紙は、ミヤビさんから来たものである事が判りました。
ガーネは早速、その封を開いてみました。
「何て、書いてあるの？」トラは尋ねました。
「明日の午前中は、トモネ様の家へ、お薬の配達をして欲しいとあります。
それからミヤビさんが、村長さんから頼まれた、私への伝言も書いてありますね。
ええと、午後からは村役場で、荷物運びを手伝って欲しいとあります。」
「ふーん。それで、もう一方の手紙は何て書いてあるの？」
「ちょっと待って下さいね。」
もう片方の手紙は、ノミチさんから来たものでした。
ガーネは、その封も開いてみました。
「フムフム。ノミチさんたちは、明日、湖へ遊びに行くそうですよ。

ついては私たちも、招待するから来てみませんかと書いてありますね。」

「あっ、そうなんだ。で、ガーネはどうするの？」

「まぁ、居候の身としては、ミヤビさんや村長さんの方を取らざるを得ませんね。

湖の方は、諦めるしか無さそうです。」

「じゃあ、あたしも、ガーネに付き合うわね。」

トラの言葉に、ガーネは少し考え込んでいました。

やがて顔を上げると、トラにこう答えました。

「いえ、トラは、ノミチさんたちと一緒に、湖に行った方がいいと思います。

トモネ様の所はともかく、村役場の方は行っても退屈なだけですよ。」

トラはその言葉に、どうしたらいいか迷っているようでした。

ですが少し経った後、トラはガーネを見上げてうなずきました。

「判ったわ。あたしは明日、ノミチさんたちと出かける事にするわ。」

「そうして下さい。そしてゆっくりと楽しんで来て下さいね。」

ガーネは微笑みながら、そう言いました。

夜遅くなり、お風呂に入った後、ガーネとトラは寝る事にしました。

「じゃあ、私は下で、寝ますね。」ガーネが、そう言いました。

ガーネがベッドの中に入ると、トラもその中に潜りました。

「あったかい。今日はあたしもここで寝る。」トラがそう言いました。

「どうぞ。じゃあ、お休みなさい。」

ガーネはそう言って、消灯しました。

「ねぇ、ガーネ。」「はい。何でしょうか。」

「今日、地上の世界を見たでしょ。」「えっ、ああそうですね。」

「どうして、あんな事になっちゃたのかしら？」

「ナミキさんは、領土や利権絡みの戦争のせいだって言ってましたよね。
でも、あれは人間同士が争った跡には、とても見えませんでした。
何か強力な兵器で、破壊尽くされた。そんな感じを受けたんです。
私にはあの大惨事が戦争によるものか、それ以外なのかは判りません。
でも、それが自然などではなく、人が故意に起こしたものだとしたら。
そこには、人の「思い」が隠されているような気がしてなりません。
最初から、世界の崩壊や破滅を願っていたとは、到底思えません。
やはりその根底にあるのは、幸せになりたいという「思い」ではないでしょうか。
今以上に、幸せになりたいという願いではないでしょうか。
人はその「思い」を実現するために、強い力を生み出す事があります。
その力は、その「思い」が強ければ強いほど、より強力になっていきます。
そしていつしか、誰にも手に負えないほどの化け物になってしまったのです。
でもその事を、創造した者たちさえ、正確には認識していなかったのでしょう。
それは、常に自分たちの管理下にある。
使用したとしても、想定以上の被害は絶対にもたらさない。
そう思っていたのでしょう。いや、思いたかったんでしょう。
その結果、それを使用して、破滅した。
そんな風に思えて、ならないんです。

ですが、あの大惨事が起きる事が事前に判っていたら、結果は違っていた筈です。
今よりも不幸になってしまう、というか、全滅してしまうからです。

世界中が協力し合って、それを回避する事が出来たのではないでしょうか。
でもね。トラ。
人は、未来を予測する事は出来るかも知れません。でも、知る事は出来ません。
あそこに生きていた1人1人が、その心に自分たちの未来を描いていたでしょう。
でも、それが現実の未来とは限らないんです。
現実の未来を知る事は、誰にも出来ないんです。
だから、あの大惨事を、回避する事が出来なかったんです。

ひょっとしたらあの大惨事を、正確に予測出来た人たちがいたのかもしれません。
例え、そうであったとしても、それだけでは回避出来ません。
その人たちに、あの世界の人全てを説得するだけの力が無ければ、無理なんです。
その行動を止めさせるだけの力が無ければ、駄目なんです。
そういう人たちが、いなかったからこそ、あの世界は破滅したんでしょうね。」

ガーネたちの部屋は消灯して、既に暗くなっていました。
それでもトラには、ガーネの切ない思いが伝わって来ました。
「だけど、どんな事情があったにせよ。悲しい事ね。」トラはそう言いました。
「そうですね。悲しい事です。
犯した過ちを正したり、償ったりする事は、もう出来ません。
未来に向かって歩きだす事も、もはや、かなわぬ夢なのですからね。」
「そうね。」トラは何となく落ち込んでいました。
「なんてね。ごめんなさい、トラ。

布団に入って、演説する話でも無かったですね。
さぁ、明日も早く起きなければなりません。
もう、寝ましょう。お休みなさい、トラ。」
「うん。お休みなさい、ガーネ。」
ガーネとトラは、やるせない気持ちを抱きつつも、いつしか眠ってしまいました。

第7話「天空の村にて」むっつめだよ。（終）

第7話「天空の村にて」むっつめだよ。（後書き）

今回のお話は、第７話「天空の村にて」の第６話です。
今回の話は、ガーネたちとナミキさんの話のやり取りがメインのお話です。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第7話「天空の村にて」ななつめだよ。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第7話「天空の村にて」ななつめだよ。のお話です。
この回では、ガーネがトモネ様の元へ薬の配達をします。

第7話「天空の村にて」ななつめだよ。

第7話「天空の村にて」ななつめだよ。

ガーネは、目を覚ましました。
ボーっとした状態で、ベッドを降りて立ち上がりました。
そして、両腕を高く上げて背伸びしながら、欠伸をしました。
「ああ、いつの間にか、ぐっすりと寝てしまいました。
おや、今日もいい天気ですね。」
窓の方を見ながら、1人、そうつぶやきました。
ベッドの方を見ました。
トラも起きたらしく、前足で、目をこすっていました。
トラもボーっとしているのか、よたよたしながら、ベッドから転げ落ちました。
でも、下の方のベッドにいたので、大した事は無かったようです。
トラは、首を振った後、足を伸ばしながら欠伸をしました。

人間と猫の、朝の恒例行事が終わると、お互いに挨拶をかわしました。
「お早う、トラ。いい朝ですね。」
「お早う、ガーネ。いい朝だわ。」
その後も、トイレに行ったり、顔を洗ったりと朝の恒例行事に励んでおりました。
これらが終わった頃、ガーネは、部屋の時計で時刻を確認しました。
「ああ、もう食堂は始まっていますね。じゃあ、急ぎましょう。」
ガーネは、そう言うと、トラを抱えて食堂に向かいました。
食堂には、あまり人はいませんでした。
「そうか、今日は村役場はお休みです。だから、人が少ないんですね。」

「だから、マサギさんも今日は、湖に遊びに行けるのね。」
ガーネは、いつものように食事をもらうために、列に並ぶつもりでした。
ですが、今日は人が並ぶ姿がありませんでした。
そのため、ガーネはすぐに係りの人に、食券を渡す事が出来ました。
ガーネたちはあたりを見回しましたが、テーブルはほとんどがら空きでした。
それでも、ガーネたちは、いつものテーブルにトレイを運びました。
「頂きます。」ガーネは、両手を合わせて、そう言いました。
「頂きます。」トラも、そう言いました。
今日は、魚が出ていたので、トラは大喜びでした。
バリバリと噛み砕かんばかりに、勢いよく食べました。
あっという間に、トレイの上の物を全部平らげてしまいました。
駄目だわ、まだ食べ足りないの。そう思って、ひょいとガーネの方を見ました。
そんなトラに引き換え、ガーネはおハシで少しづつ、口に運びました。
「あら、美味し。」
そう言いながら、右手の手のひらを頬に当てました。
トラは、思いました。
ひょっとしたら、ガーネの魚の方が、あたしのよりはるかに大きいんじゃない？
それとも、魚が嫌いなのかも知れないわ。
だから、あんなにゆっくりと食べているのよ。
きっと、そうだわ。そうに決まっている。
ガーネは、あの魚を食べ切るのが大変なんだわ。
だったらここは相方として、あたしがガーネの魚を食べてあげる義務があるわ。
その方が、ガーネも喜んでくれる筈だわ。
変な理屈を、真剣に考え始めました。そしてガーネに言いました。

「ねぇ、そんなに食べるのに時間をかけるなんて、おかしいわ。ひょっとしたら、魚が嫌いなんじゃないの。もしそうなら、私が食べてあげる。」
そう言って、トラは前足の鉤爪をニュッと出しました。
そして、ガーネの食べかけの魚をすくおうとしました。
ですがその瞬間、ビシッとガーネの手にあるおハシが、それを見事に抑えました。
ガーネはニッコリ笑って、トラに注意しました。
「トラ。お食事中に、下品な真似をしてはいけません。」
今にも、口に手を当ててほっほっほっと、笑いたそうな様子でした。
「ふん。もう、ガーネなんて知らない。」トラは、そっぽを向こうとしました。
ですがそんな言葉とはうらはらに、トラの目はガーネの魚から離れませんでした。
どうしても、ガーネの魚が欲しくてたまりませんでした。
「心と身体は違うのね。」トラは自分の事ながら、悲しくなりました。
トラはガーネに頭を下げて、こう言いました。
「あたし、ガーネの魚を食べたいの。少しでいいからおすそ分けして。」
ガーネは、トラのそんなけなげな態度に、心を打たれました。
「はい。どうぞ。」
ガーネは、残っている魚を半分ずつにして、その一方をトラに与えました。
「有難うございます。」トラは再び、頭を下げました。
そして、遠慮なくバリバリと食べました。
食事が終って、歯を磨いた後、ガーネとトラはひと休みしていました。
出かける時刻が近くなったので、ガーネは服を着替えました。
やがて、出かける時刻になりました。

「じゃあ、行きましょうね。トラ。」
「ええ。行きましょう。」
ガーネとトラは、顔を見合わせてにっこりとしました。
そして、宿舎をあとにしたのです。
2人が、この宿舎に戻ってくる事は、もう2度とありませんでした。

ガーネとトラは、呪術院のドアを開けました。
待合室を通り、休憩室に入りました。
「お早うございます。ミヤビさん。」「お早うございます。」
ガーネとトラは、ミヤビさんに朝の挨拶をしました。
しかし、すぐに「？」と思いました。
いつも呪術院で見る黒衣とは、違う服をまとったミヤビさんがいたからでした。
それはどう見ても、どこかに遊びに行くようなラフな格好でした。
ガーネは、頭にピーンと来ました。
「ミヤビさん。ひょっとして今日、湖へ遊びに行くつもりではありませんか。」
ガーネのこの問いに、ミヤビさんはしらを切りました。
「な、何を言っている。そんな事では無い。
ただ、たまにこの格好で、診療するのも悪く無いと思っただけだ。」
それを聞いたガーネは、ミヤビさんの両肩に手を置きました。
そして涙を流しながら、こう言いました。
「別に気にしませんから、本当の事を話してくれて構いませんよ。
実は私たちにも、昨日、ノミチさんから手紙が届いたんです。
今日、私たちを湖へ招待したいって言う手紙でした。
結局、行くのはトラだけにしました。
私には、ミヤビさんと村長さんのお手伝いが、決まっていましたからね。」
ガーネがそう言うと、何だ知っていたのか、とミヤビさんはホッとしていました。

「実は、そうなんだ。我の方にも、ノミチからの手紙が届いたのだ。ただそれは我が、ガーネに手紙を出した後だったのだ。だから今朝まで、どうしようか悩んでいたのだ。」

ミヤビさんの目は、充血していました。

それは今日の配達と役場の手伝いは止めてもらって、一緒に遊びに行くか。

それとも、自分だけ遊びに行くので、その事を伝えるか。

どちらにしようか悩んでいたようにも思えました。

しかしそれにしては何故か、顔がいつもと違い、浮かれているようでした。

ひょっとしたら、遊びに行くから興奮して眠れなかっただけじゃないのか。

そんな風にも思えてきました。

そんなガーネの思いをよそに、ミヤビさんは淡々と話を進めました。

「トモネ様に渡す荷物は、ここにある。これを、午前中に運んでもらいたいのだ。

それが済んだら後は、自由にして構わない。

但し午後からは、村役場に行って欲しい。

手紙にも書いたように、村役場の荷物運びの手伝いだ。

両方とも、よろしく頼む。

ここでの手伝いは午前中なので、日当はいつもの半金だ。それは今、払っておく。

午後は、村役場の仕事だ。

ガーネたちのこの村での滞在費用を肩代わりしているから、日当は出ないと思う。

少し気の毒な気もするが、まぁ、これも運命だと思ってやってもらいたい。」

「そうですか。判りました。」ガーネはそう言いました。

午後は、日当が出ないというあたりに、何となく解せない思いはあ

りました。
しかし、自分たちの滞在費用を、負担してもらっているのも事実です。
また、いくら日当をもらっても、結局は使う事が無いかも知れません。
ガーネは、これは仕方が無い事だな、と諦めました。
「では私はこれから、トモネ様の所に配達に行きます。
ミヤビさんはトラを、湖へ連れて行って下さいますか。」
ガーネはミヤビさんに、そうお願いをしました。
「判った。トラは、確かに我が責任を持って預かろう。」
ミヤビさんがそう約束をしてくれました。
「じゃあ、行って来ます。トラは湖で、ゆっくり楽しんで来て下さい。」
「判ったわ。行ってらっしゃい。」
ミヤビさんはガーネに、トモネ様の荷物と今日の分の日当を手渡しました。
その荷物は、これまで配達した物とは違い、小さな物でした。
ガーネは、渡された荷物を持って、ガイムの元に向かいました。
ガイムは翼を休めて、大人しくしていました。
ガーネは、ガイムにその荷物をくくり付けました。
その後、ガイムの背中に乗りました。
「じゃあ、ガイム。飛んで下さい。」ガーネは手綱を引きました。
「判った。」ガイムは、大空へ舞い上がりました。

ガーネは、トモネ様が住んでいると思われる田畑の近くまで、飛んで来ました。
「さて、どこらへん何でしょうかね。
多分、ここらあたりだと思うんですが、なかなか見つかりませんね。」
ガーネはもう少し、先を飛んでみる事にしました。

しばらく飛んでいると、やがて1件の家が見えてきました。
「ひょっとして、あれですか。何と大きいお屋敷何でしょうね。」
半信半疑ながら、ガーネはそのお屋敷の近くに降下し始めました。
すると、そのお屋敷の玄関先で、手を振っているおばあさんの姿がありました。
それは、見覚えのある顔でした。
「トモネ様です。」
トモネ様は、降りてくるガーネに、人差し指で何か方向を示していました。
「あれは、降りる場所を誘導してくれているんですね。」
ガーネは、トモネ様が歩く方向に、ガイムを移動させました。
トモネ様は、そのお屋敷の裏庭に、ガーネたちを導いてくれました。
そこには、ライバが1匹いました。
「ガイム、あそこに降りてください。」ガーネは、そうガイムに指示をしました。
「判った。」ガイムは、そう言って、ガーネの指示する場所に着地しました。
ガーネはガイムから降りて荷物を外した後、ガイムにこう言いました。
「じゃあ、ここで休んでいて下さいね。」
ガイムは、ガーネの言うとおり、翼をたたんで休みの姿勢をとりました。
ガーネはそれを確認した後、近寄って来たトモネ様にこう言いました。
「お早うございます。ミヤビさんに頼まれたお薬を届けに来ました。」
「それは、済まなかったのう。有り難く貰って置こう。
時にあのライバが、お前さんの「ガイム」とか言う、名前のライバなのじゃな。」
トモネ様は、そう言いました。

「何故、その事を知っているのですか?」ガーネは驚いて尋ねました。
「そんな事、もう村中の人間が知っておるわい。
ナミキの奴が、ご丁寧にも、1件1件触れ回ったからの。」
ガーネは、ナミキさんは村の広報係でもあったのかと、気が付きました。
なるほど、こんな狭い村ならあっという間に情報なんて広がってしまうのですね。
悪い事は、なかなか出来無いものですと、ガーネはしみじみ思いました。
「どうも、お騒がせしてすみませんでした。」
ガーネは、そう言って頭を下げました。
「いや、構わん。
さて、立ち話もなんじゃ。今日はこれから何か他に用事でもあるのかのう?」
「いえ、午前中はもう何もありません。」
「じゃったら、屋敷に上がっていかんか。
お茶菓子などでも、つまんでいってはどうかな。」
ガーネは、今日の配達はこれで終わりなので、その申し出を受ける事にしました。
「では、お言葉に甘えて、お屋敷に上がらせて頂きます。」
ガーネがそう言うと、心なしかトモネ様は喜んでいるように見えました。
「では、その荷物を持ってついて来なさい。」

トモネ様は、先導してガーネをお屋敷に招きました。
ガーネはお屋敷の中に入ると、その広さに圧倒されていました。
また、かなり太い木材で、構成されていました。
「さすが、昔に建てられた屋敷ですね。迫力があります。」
ガーネは感心しながら、周りを見回しました。

床は、畳と木の両方でした。
家の真ん中に、囲炉裏がありました。
掘りごたつのように、足を下ろせる深い囲炉裏でした。
そこで、トモネ様は、腰を下ろしてお茶をすすっていました。
「さぁさぁ、そんな所に突っ立っていないで。
こちらに来て、一緒にお茶を飲むがよかろう。」
トモネ様はそう言って、鉄瓶に入っているお茶をひしゃくで茶飲みに注ぎました。
そして、そばにあるお茶菓子を添えて、ガーネの前に置きました。
「有難うございます。では、喜んで頂きます。」
ガーネが、お茶をすすっているのを見ながら、トモネ様はこう言いました。
「どうじゃな。この屋敷は。こんな建物を見るのは初めてじゃないのかな?」
「いえ、同じような家に寝泊りした事があります。
もっともこんなに広くはありませんでした。」
「それは、この村での事かの。」トモネ様は、尋ねました。
「いえ、旅先での出来事です。あそこでは激しい雨が降っていました。」
ガーネは、懐かしそうに目を細めていました。

「ここは、現在使用されている人家では、一番古い建物なのじゃ。
じゃがの、ご覧の通り、しっかりした造りになっとるでの。
まだまだ、耐久性は十分との事らしい。」
「そうでしたか。確かにこれなら他の家よりも安全かもしれませんね。」
ガーネも同意しました。
「あと、何年使えるか判らんがの。
あたしゃ、ここに生涯住み続けるつもりじゃよ。
あたしが死ぬのが先か、この屋敷が壊れるのが先か、楽しみだで。」

トモネ様は、そう言って、フッフッフと笑いました。
「そんな事を言わないで、いつまでも長生きして下さい。
ナミキさんたちも、きっとそう思っていますよ。」
ナミキさんの事を言うと、トモネ様は更に、フッフッフと笑い続けました。
「ナミキか。あれは小さい頃から、男勝りな子でな。
だから、余計可愛がってしまったのじゃ。
じゃが、今でも、あのように口調が男のようでな。
少し、教育の仕方が間違ったのではないかと後悔をしておる。」
「確かに、そうかもしれませんね。」ガーネは、遠慮なくそう言いました。
「ですが、性格はさっぱりとしていて、なかなかいいんじゃありませんか。
責任感や決断力もあるし。人の上に立つ才能はあると思いますよ。
お嫁さんになれるかどうかは別ですけどね。」
「そこなのじゃよ。それが心配じゃ。
誰ぞ、よい人が見つかればよいのじゃが。」トモネ様は、そうこぼしていました。

「はい。これがミヤビさんから、渡すように頼まれたお薬です。」
ガーネはそう言って、脇に置いていた小さ目の荷物を渡しました。
「おお、わざわざ有難うのう。」トモネ様は、お礼を言いました。
「ちょっと待ってて下され。」
トモネ様は、そう言って、薬の受取書に記入しました。
「じゃあ、これをミヤビさんへな。」トモネ様は受取書を差し出しました。
ガーネはそれを受け取ると、かばんの中に入れました。

「ところで、ガーネとやら。
そなたは昨日、地上の世界に降りたとの事だが、どうじゃった。

あたしゃ、あそこへは、随分若い頃に1回行ったきりでな。
それ以後は行っておらん。」
「ああ、ナミキさんから聞いたのですね。
そうです。確かに行きました。
あそこは、廃墟と化していました。がれきが散在していましたね。
でも、妙に綺麗な所もありましたよ。
もっとも、何かが建っていたような痕跡は残っていましたがね。
特にクレーターのようなものが出来ている部分はそうでした。」
「やはり、昔のままなのじゃな。
まぁ、今あそこで生きておるのは1人もおらんそうだから、無理も無い事じゃ。」
トモネ様はそう言って、ため息をつきました。
「それで、空気はどうじゃったかの。少しは綺麗になっておったかの。」
トモネ様はそう尋ねました。
「いえ、空気の中に何かが浮遊しているらしく、黒がかった色をしていました。
トラはすぐに、咳き込んで止まらなくなってしまいました。
私も咳き込み、気分が悪くなってしまいました。
ナミキさんに連れられて急いでここに戻り、ミヤビさんの手当てを受けました。
おかげで私もトラも、元の状態に戻る事が出来ました。」
「そうか。それは大変じゃったの。
やはり、もう元の世界には戻れんのかいの。」
トモネ様は、さみしそうな顔をして、遠くをみつめていました。
「あそこで何が起きたか、知っておるかの?」トモネ様は、尋ねました。
「ナミキさんが、トモネ様から聞いた事があると言っていました。
領土と利権による戦争が起きたせいでみたいな事を言っていましたね。」

「そうか。ナミキは、あたしが言ったことをを覚えておったのか。」
トモネ様は、少し微笑んでいました。
「これからあたしが言うのは、この村に伝えられてきた話じゃ。じゃから少し正確さに欠けるかもしれんがの、聞いてくれるか？」
「トモネ様さえよければ構いません。お話を伺いましょう。」
ガーネはそう言いました。
トモネ様は、話を続けました。

「地上の世界はの。ここは違い、科学文明に目覚めた世界じゃった。
身の回りにあるものは、ほとんどが電気製品化しておったそうじゃ。
地上には2つの国家があっての。
かつては、各々の国が相手国とは異なる得意な分野を、発展させていったんじゃ。
そして、それを相互に補完し合う事で、共存の道を歩んで行ったという。
国が発展するにつれて、人々の暮らしが良くなっていった。
それにつれて各々の国が、更なる発展を模索するようになったんじゃ。
当然、相手国の得意とする分野にまでも、進出するようになった。
それは、今まで無かったような競争や反発を招いての。
事あるごとに、いさかいを起こすようになって行ったらしい。
また同じ産業を行なうと言う事はじゃ。
それに使用する原材料も同じになるという事でもある。
この2つの国が、原材料として使っていたのは、この山に眠る資源じゃった。
あたしらが、火石を使うようになったようにな。
じゃが、この山にはそれ以外にも、有用な資源が多く眠っておった。
当然、その取り合いも激しくなっていったというわけじゃよ。
これらの争いの種の他にも、更に問題があった。

この2つの領土は、もともと暫定的に決められたものだったのじゃ。
そのあいまいさ故に各々の国が、領土と山の資源を要求し合っての。
各々の国の言い争いは、留まる所を知らなかったと言う。
じゃが、それでもまだ致命的な決裂にまでは、至らなかった。
事が起きたのは、それからじゃ。
ある時、片方の国がこれまでに無かった技術を持つ、飛行機を作った。
それは、この天空の村にも届くという触れ込みの飛行機だったのじゃ。
これまで、ミサイルはあったし、飛行機もむろんあった。
じゃが、飛行距離も短く、高度も大した事は無かった。
どんなに頑張っても、この村にまで届くような物は作れなかったのじゃ。
だから、その国は大喜びでの。空の制空権は自国が握ったと大騒ぎをした。
そして、ついにそのお披露目の日が来たのじゃ。
じゃがの、その飛行機はこの山の高さの半分を過ぎた所で爆発した。
そして、相手国側の軍事基地周辺に落ちたのじゃ。
飛行機を飛ばした国は、相手国に迎撃されたと非難した。
一方、相手国は、我が国の破壊を狙った侵略行為だと非難したのじゃ。
この事件がきっかけとなっての。
お互いどちらからともなく、宣戦布告に至ったと言うわけだ。
最初は、人が銃や刀を持った戦いだったそうな。
それに戦車が加わり、死者が一気に増えた。
近代兵器の投入が、敵の損失を早めると確信した軍部は新たな兵器を投入した。
飛行機、船など、いろいろじゃ。
そしてついに、片方の国が、自国が最強とするミサイルを発射した。
そして、相手国の多くの戦力を、一瞬にして奪ったのじゃ。

それに味をしめたその国は、次々と強力なミサイルを造っていった。
一方、先制攻撃された国の方も、それで終わりでは無かった。
自国のミサイルを相手以上に、強力なものにして発射したのじゃ。
当然、相手国も大きな被害を被った。
こうなると、後は泥沼じゃな。
強力なミサイルを開発しては、発射し、また開発しては、発射。
それを両方の国が繰り返して行ったのじゃ。
互いの国の人間の命が奪われ、その都市も次々と破壊されて行った。
そして、最後。
お互いの生き残りをかけた最終兵器のミサイルが、各国全弾、放たれた。
その幾つもの光が、空を覆い、地上世界の全てに広がって落ちて行ったのじゃ。
次の瞬間、この村でも大地震かと思われる大きな揺れを感じたらしい。
噴煙が一気にこの村まで、襲いかかり寄った。
その噴煙の中、幾つもの光がここまで見えたと言う。
恐ろしい光景だったそうじゃ。
幸い、ある程度ホコリに包まれたが、この天空の村は無事じゃった。
じゃがの。
地上の世界は、生きとし生けるもの全てが滅んだ死の世界となってしまった。
そしてそれから、途方もなく長い年月が経っておる。
それなのに、地上は、ガーネ。そなたが見た様に変わっておらんのじゃよ。」

トモネ様の話は、終わりました。
しかし、その壮絶な話の内容に、ガーネは声が出せませんでした。
しばらくして、気を取り直したガーネは、トモネ様に尋ねました。
「大変な事が起きた事は、判っていました。

でも、まさかそれほどとは、思いませんでした。
ですが、そんな地上の話が何故、この村に詳しく残っているのですか？」
「実はの。ここの村人も、昔はよく地上の世界に降りていたのじゃ。」
「ああ、それは確かマサギさんから聞いた気がします。
確か、地上の人の技術を学んでいたっていう話でしたね。」
「その通りじゃ。
その技術を学んだ村人の中に、最終日近くまで残っておった者がいたのじゃ。」
「えっ、それでどうなったんですか？」
「実は、そのミサイルの発射は極秘扱いでの。
研究室にいる全ての者が、軍に拘束されてしまったのじゃ。
もちろん、村人も同じ目にあったらしい。
じゃがの。一緒に拘束された研究者の１人と村人がすごく仲が良くての。
おまけにその研究者、その研究所の抜け道を知っておったのじゃ。
そこでその研究者に連れられて、研究所を脱出し、ライバの所に戻れたのじゃ。
脱出の際、村人が、一緒に行こうと誘ったらしいのじゃがの。
地上の人間は、あたしらのように天空の村では生きていけないのだと言う。
なんでも、呼吸困難に陥ってしまうからというのが、その理由らしいのじゃ。
それに今いるここが、自分たちの世界だから逃げるわけにはいかない。
そう言っての、村人に自分の書いた日記を渡して、立ち去ったそうじゃ。
ライバが、村に戻って２日後、あの最終日が訪れたのじゃ。
その村人の告白と、手渡された研究者の日記が今でも語り継がれて

いるのじゃ。」
「えっ、そうすると、その日記は今でも、この地にあるんですか？」
「ああ、村役場にあるそうじゃ。」
「是非、見てみたいですね。」ガーネは、心の底からそう思いました。
「あるとは思う。じゃが、そなたがそれを見るのは不可能じゃろうて。」
「えっ、見てはいけないのでしょうか？」
「そんな事は無い。村役場にある資料は、誰でも見る事が出来る。もちろん、そなたでもな。じゃがの、やっぱり無理じゃろうな。」
「一体、どういう事なんでしょうか？
実は午後から、村役場の荷物運びを手伝う事になっています。
それが終わったら、その事を聞いてみようと思っていたのです。」
「何？午後からじゃと。
フーム。なら今、あたしがここで言わんでも、理由はすぐに判るじゃろう。
向こうに行ったら、村長さんに聞いてみるとよい。
それで、何もかもはっきりする筈じゃ。」
何か奥歯に物が挟まったような言い方でした。
ですがそれ以上、聞いても無理だと判断して、ガーネは諦めました。
「では、そろそろおいとまします。」
そう言って、立ち上がるガーネをトモネ様は制しました。
空になったガーネの茶のみに、鉄瓶からひしゃくでお茶を注ぎました。
そして、茶菓子を前に差し出しながら、こう言いました。
「もう少しいいじゃろ。もっと話したい事があるんじゃ。」
村の事や、代表たちの事など、とりとめの無い話が続きました。
気分を害されてもまずいなと思い、ガーネは黙ってその話に耳を傾けました。
やがて、いつの間にかお昼近くになりました。

「どうじゃ、お昼はここで食べて行かんか？
すぐに用意するでの。宿舎のラーメンでは、味が濃すぎてうまくないじゃろ。」
人の腹の中を、見透かしたような発言でした。
あのラーメンの味は、ここまで知れ渡っているのかと、感心しました。
「では、よろしくお願いします。」
ガーネは自分が気が付いた時には、もうこの言葉を喋っていました。

出された料理は、ブルクを野菜と一緒に炒めたものでした。
この村で良く出てくる、「ご飯」と呼ばれる主食と一緒に、食べました。
レストランとは違う味でしたが、なかなか美味しい味でした。
「家庭料理の味っていう奴ですね。」ガーネは感心しました。
洗面所を借りて歯を磨いたり、トイレを済ませたりしました。
その後、しばしの休息をとっていました。
ガーネは部屋にあった時計で、現在の時刻を確認しました。
そろそろ村役場に行かなければならない時刻が近付いてきました。

ガーネは、トモネ様にお礼を言った後、その屋敷の外に出ました。
そして、裏庭のガイムの元に行きました。
そこには、ガイムが食事したと見られる跡が残っていました。
ガーネは、見送ろうと近づいてきたトモネ様に、こう言いました。
「トモネ様。ガイムにも、食事を与えて下さったんですね。
つい、うっかりしていました。本当に有難うございます。」
ガーネは、トモネ様にお礼を言いました。
「なーに。あたしのライバに、餌を与えるついでにじゃよ。気にするでない。」
トモネ様は、こう言いました。
ガーネは、ガイムの背中に乗りました。

そして、別れ際に、こう言いました。
「今日は、本当に有難うございました。
面白いお話も伺えましたし、美味しい料理もごちそうになりました。
とても、感謝しています。では、これで失礼します。」
そう言って、飛び去ろうとするガーネに、トモネ様はこう言いました。
「こちらこそ、手伝いと言いながら、ここまで来てくれて有難い事じゃ。
その上、こちらの無駄話をじっと聞いて下さって、感謝するでの。
じゃあ、帰りは気を付けて行きなされ。」
トモネ様は、そう言って、後ずさりをしました。
ガーネは、トモネ様に、もう一度会釈をした後、ガイムを舞い上がらせました。
眼下を見ると、いつまでも、手を振るトモネ様の姿がありました。
「では、ごきげんよう。」ガーネはその場所を立ち去って行きました。
「それにしても、年寄りは敬うべきものですね。
要求もしないのに、惜しげも無く欲しい情報を提供して頂けるのですから。
今度、来る事があったら、美味しいお菓子でも買って持って行きましょうかね。」
ガーネはそう言いながら、呪術院へと帰って行きました。

呪術院の裏庭に戻って来ました。
ガーネはガイムから降りて、こう言いました。
「ご苦労様でした。
多分、今日はもう乗る事は無いと思うから、ゆっくり休んで下さいね。」
「もっと、飛ぼう。」
ガイムは、翼をバタバタさせながら、だだをこねていました。

ガーネは、こすりつけてくる頭をなでながら、「また明日ね。」と説得しました。
ガーネは、ガイムが落ち着いたのを確認した後に、呪術院に向かいました。
ドアには、鍵がかかっていました。
「こんなに、早く帰ってくるわけありませんものね。」
ガーネは、そのまま歩いて、村役場に向かいました。

ガーネは、村役場に着きました。
「何とか、時間前に来る事が出来ましたね。」ガーネは、ホッとしていました。
中に入ると、職員であろう数人の人が、荷物は運んでいました。
そこへ、村長さんもやって来ました。
「やぁ、今日はすみません。なにせ、忙しいものですから。猫の手も、借りたいくらいなんですよ。」村長さんは、そう言いました。
ガーネは、しまった、トラを連れてくれば良かった。と思いました。
村長さんに、荷物運びの段取りを説明してもらいました。
その後、村長さんの案内で、村役場の裏庭の方に向かいました。
そこには、村役場を圧倒するような強大な建物が、３つ並んでいました。
正確には、建築中のが、そのうち1件ありました。
それぞれの建物に、「1、2、3」と番号が振られていました。
「これは、一体何なのでしょうか?」ガーネは尋ねました。
「何を隠そう、倉庫なんです。村で一番でかいんですよ。」
村長さんは、自慢げにそう言いました。
「で、この2と書いてある倉庫に、荷物を入れてもらえればいいんです。」
「なるほど。ほんのちょっとでいいですから、中を見せて頂けないでしょうか?」

「別に構いませんよ。どうぞ見ていって下さい。」
村長さんは、そう言って倉庫の鍵を開けました。
「グワーン。」大きな音を立てて、その扉は開かれました。
「おおっ。」倉庫の灯りがついた時、ガーネは思わず声を漏らしました。
そこには既に倉庫いっぱいの荷物が積まれていたのでした。
「あの、これのどこに荷物を置けとおっしゃるのですか？」
「この上の方にまだまだ隙間があるから、大丈夫ですよ。」
村長さんは、事もなげにそう言いました。
「あのー、質問があるのですが。
普通、お片付けって言うと、要らない物を捨てて、要る物を残す。
すなわち、取捨選択をすると思うんですが、ここではやっているんですか？」
「当然、やっていません。」村長さんは胸を張って答えました。
「何故でしょう？」ガーネは、尋ねました。
「ここにある資料は、歴代の村長が心を込めて作成した物です。
捨てられるわけがありません。」
何故か、村長さんは、涙を流しながら、訴えていました。
「でも、すぐにいっぱいになってしまいますよ。
そうしたら、どうするんですか？」
「だから、今あの3号倉庫を造っているんです。
大丈夫です。必ず、間に合わせます。」
またもや、村長さんは、胸を張って答えました。
きりがないですよ。ガーネは、そう言おうとしました。
ですが、言っても聞く耳を持たないようでしたので、止めました。

その時、ガーネはふと気が付きました。
「ねぇ、村長さん。
実は、先ほど、用事があってトモネ様に会って来たのです。
その際ここに、地上の世界が消滅する前に、そこの研究者が書いた

日記がある。
そう聞かされました。」
「フム。確かにありますが、それがどうかしたのですか？」
「それは、どこにあるのですか？」
「こちらですよ。」
村長さんは、そう言って1号の倉庫に向かいました。
そしてその鍵を開け、中を見せてくれました。
「その時代の物は、必ずこの中にある筈です。
但し、それを探すのに、どのくらいの年月がかかるか判りませんよ。
また仮に見つけたとしても、その後、また元の状態に戻してもらいますからね。」
村長さんは、念を押すように言いました。
ガーネは、そこに積み上げられていた荷物を見ました。
それは完全に天井についていました。
「だから、トモネ様は見る事が出来ないとおっしゃったのですね。」
ガーネは、日記を見るのを諦める事にしました。
でも、少し粘ってこんな質問をしてみました。
「ですが、あの1件はこの村でも、特異な出来事であった筈でしょう。
何故、他の書類と別にしなかったのですか？」
「最初は、そうしていたらしいのです。
でもこの役場も、それ以後、何回か引っ越しをしているのですよ。
だから、いつの間にか、他の資料の中に埋もれてしまったというわけです。」
「なるほど。そうでしたか。」ガーネは納得せざるを得ませんでした。
ガーネは、荷物運びを始めました。
やがて、全ての荷物を、何とか整理する事が出来ました。
「皆さん。ご苦労様でした。

予定通り、全ての荷物を片付ける事が出来ました。
今日の作業は、これでおしまいとしたいと思います。
では、皆さん、お気を付けてお帰り下さい。」
その村長さんの言葉を受けて、全ての職員がぞろぞろと、家路に急ぎました。
ガーネも、村役場の建物から出て来ました。もう、くたくたの状態です。
「まだ陽は高いですが、夕食を食べてしまいましょうか。
今夜はトラは、向こうで食べるとか言っていました。
すると、私1人で食事をする事になりますね。
だったら、今日は宿舎の食堂では無くて、外食にしましょう。
日当もある事ですし。」
ガーネは、そう言って村役場の門を出ようとした時、ふと上空を見上げました。
するとそこには、あのガイムが勢いよく、ガーネに向かって飛んで来ました。
ガーネには、それが不吉な事を知らせる、サインのように思えました。
「何かあったのでしょうか?」ガーネの心に不安が芽生えました。

ガーネの1日はまだ終わっていませんでした。

第7話「天空の村にて」ななつめだよ。(終)

第7話「天空の村にて」ななつめだよ。（後書き）

今回のお話は、第7話「天空の村にて」の第7話です。
今回の話は、ガーネがトモネ様の話を聞くところがメインのお話です。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第7話「天空の村にて」やっつめだよ。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第7話「天空の村にて」やっつめだよ。のお話です。
この回では、あの4人組とトラが湖で遊びます。

第7話「天空の村にて」やっつめだよ。

第7話「天空の村にて」やっつめだよ。

ナミキサンたちは、湖のほとりに来ていました。
「湖に来るのは、久しぶりだな。しかも4人揃って。」
ナミキさんは、上機嫌でした。
「それに、トラさんも飛び入り参加していますしね。」
マサギさんは、自分の右肩に乗っているトラを見ながら、そう言いました。
「でも、ガーネは来れなかったのよね。ねぇ、トラちゃん。」
ノミチさんも、トラに声をかけました。
「そうなの。ガーネは朝早く、出かけたわ。
何でも、トモネ様へのお薬の配達を頼まれたらしいの。
午後からは村役場で、何か手伝って欲しい事があるらしいわ。
本当は、あたしも行くって言ったんだけどね。
午後からは、村役場での手伝いだから、いても退屈なだけだって言われたわ。
それなら今日は、こっちで楽しんでおいでって事で、こっちに来る事にしたの。」
「そうだったの。でも、この集まりは昨日のうちに、連絡した筈よ。
なんで、そんなに急な用事が出来ちゃったの？」
ノミチさんは、首をかしげていました。
「それは、我にも、責任がある。」ミヤビさんが口を開きました。
「昨日、診療開始時間が遅れてしまったのだ。
そのため、トモネ様に届ける筈の薬を、手配出来なくなってしまった。
そこで今日、やむなくガーネに配達に行ってもらったんだ。
ガーネは以前、会議室でトモネ様に会っている。

その後、我に何回かトモネ様と、直接話をしたいと言っていたのだだから、我も、ガーネに頼む事にしたんだ。」

「それに、診療開始時間が遅れたのは、ガーネさんと私にも責任がありますしね。

それもあっての事なんでしょうね。」マサギさんが、そう言いました。

「でも、マサギ。午後からの村役場の手伝いって何なんだ?」

ナミキさんは、マサギさんに尋ねました。

「実は今日、村役場は荷物整理のため、ほとんどの業務がお休みなんです。

昨日の間に、私たちのところは終わってしまったので、休む事が出来たんです。

ただ、部屋のあちらこちらに、大きい荷物が積まれたままになっているんです。

それを片付けるのに、どうしても人手が欲しくて、ガーネさんに頼んだんです。」

「つまり、大きな荷物の運び要員ってわけか。雑用係になったってわけだな。

まぁ、ガーネがこの村のいる間の滞在費用は、村が出しているからな。

断るわけには、行かなかったんだろう。気の毒って言えば、気の毒だな。」

ナミキさんはガーネに同情していました。

「ところで、マサギ。昨日の遅刻の件は、どうなったのだ。」

気になっていたのか、ミヤビさんはマサギさんに尋ねました。

「あっ、あれですか。ミヤビさん、喜んでください。

ガーネさんの言った通りに喋ったら、なんと遅刻にはならなくて済んだんです。

もう、あたし嬉しくて、嬉しくて。」マサギさんははしゃいでいました。

「そうか。それは、よかったな。」ミヤビさんは、淡々と言いました。
「一体、何の話なんだ?」ナミキさんが尋ねました。
「別に。ささいな事だ。」

4人と1匹は、湖で、水浴びをしたり、泳いだりしていました。
「あっ、冷たい。コラァ、ノミチ。いきなり水をかけるんじゃない。」
不意に水を浴びたので、ナミキさんは不覚にも驚いてしまいました。
「何を言っているのよ。湖に来て、水の飛ばし合いをやらなくてどうするの。
ほら、いくわよ。えぃ。」
ノミチさんは両手で湖の水を、ナミキさんに何回もかけました。
「コラ、止めろ、ノミチ。」ナミキさんは、逃げ回りました。
それでも、だんだん慣れてきたのでしょう。
ナミキさんも、お返しとばかりにノミチさんに、湖の水をかけまくりました。
力技ならナミキさんの方が、はるかに上です。
「あっ、止めて。止めなさいよ。」今度は、ノミチさんが逃げ回りました。
湖に入りながら、マサギさんはその様子を楽しんで見ていました。
でもいつしかナミキさんが、マサギさんの背後に近付いていました。
「マサギ。覚悟。」
ナミキさんはいきなりジャンプして、マサギさんの首に右腕を絡ませました。
そしてその勢いで転倒したマサギさんと一緒に、湖の中に突っ込みました。
「アッププ、アッププ。」
マサギさんは突然の事で、パニックを起こして溺れかけようとしていました。

そんな彼女らの光景を、ミヤビさんは休憩所から眺めていました。
ミヤビさんは、麦わら帽子に黒のサングラスという、いでたちでした。
「なんとも無邪気で、微笑ましい光景だな。」
ミヤビさんは、そう言ってリクライニングタイプの椅子に、横になっていました。

「トラちゃん。これを使って。」
ノミチさんが、渡したのは小さい浮きボードでした。
トラは、泳ぎ疲れていたので、早速、その上に乗りました。
そして、寝そべって体を休めました。
「へぇ、そんなもの売っていたんだ。」
ナミキさんは興味ありげに、ノミチさんに尋ねました。
「うん。でも、これ、ミニチュアとして売っている浮きボードなの。でも、ちゃんと水に浮くし、トラちゃんのサイズにぴったしだったからね。
思い切って、買っちゃった。」ノミチさんは、楽しそうに答えました。

湖の中で、浮きボールを使って、ボール遊びもしました。
両手で、ボールをついて飛ばし合っていました。
トラも最初は、浮きボードの上で、うまくボールを頭でごっつんこしていました。
ですが、夢中になって遊んでいる最中に、バランスを崩してしまったのです。
トラは、突然、浮きボードから水の中に落ちてしました。
本来、トラは水の中を泳ぐ事が出来ました。
ですが何分、不意の中の出来事でもあり、溺れかかってしまいました。
「あら、大変。」ノミチさんとマサギさんが、大急ぎでトラを救出

しました。
トラは、マサギさんの手の中で、ぜいぜいと息をきらしていました。
しばらくして呼吸が落ち着いたトラは、つぶやきました。
「ボール遊びって、命がけのスポーツなのね。」

「ねぇ、たまには、競泳してみない？」ノミチさんは、提案しました。
「おっ、いいな。俺もやりたい。
どうだ、ミヤビ。学生の頃を思い出して、やってみないか？」
ナミキさんは、やる気まんまんです。
「そうだな。いいかもしれない。」ミヤビさんも、賛成しました。
「私は、そういうのは苦手なので、審判をしますね。」と、マサギさん。
「じゃあ、あたしはここで、応援しているわ。」
トラが浮きボードの上で、立ち上がりました。
「じゃあ、決まりね。ここからあそこの岸までを往復するのよ。いいわね。」
「判ったよ。」「了解した。」
3人は、スタート位置に整列しました。
マサギさんは、ふところから、笛を取り出しました。
「マサギ。お前、用意がいいな。そんな物を持ってきていたのか？」
ナミキさんは、尋ねました。
「はい。いずれ、こんな日が来るんじゃないかと、いつも持って来ていました。」
マサギさんは何故か、得意げに答えました。
「こんな日って。まぁ、いいか。早く始めよう。」
「みなさん、用意は出来ましたね。　じゃあ、始め。」
ピーッ。マサギさんは、笛を鳴らしました。
3人は、一斉に泳ぎだしました。

「いやぁ、勝った。勝った。一時は、ミヤビに抜かれると思ってヒヤッとした。
まぁ、勝ててよかった。」ナミキさんは、勝利の微笑みを浮かべていました。
「まぁ、このくらいが妥当だろう。」ミヤビさんは、相変わらずです。
「まさか。ミヤビさんにも、追いつけないなんて。
このあちきとした事が、誤算だったわ。」ノミチさんは、悔しそうでした。
「みなさん、お疲れ様。素晴らしい戦いでした。
特に、最後のナミキさんとミヤビさんのデッドヒートはすごかったですよ。」
「うん。あたしも、思わず興奮しちゃったわ。」
マサギさんとトラは、はしゃいでいました。
その後何回か、競泳を繰り返しましたが、順位が変わることはありませんでした。

お昼になりました。
マサギさんが持ってきたサンドイッチを、みんなでほうばりました。
「うん。マサギのサンドイッチはうまいな。」
「あちきと、いい勝負かも。」
「大したものだな。」
みんなに褒められ、マサギさんは気をよくしました。
「本当、美味しいわ。」
「トラちゃん、それは缶詰よ。」ノミチさんはつっこみました。

お昼が終わって、それぞれお喋りを楽しみながら、休憩をしていました。
その後、また各人、思い思いの水浴びや泳ぎを楽しみました。
やがて、ミヤビさんがみんなにこう言いました。

「さて、そろそろ上がろう。
夕食の食料の調達と、焚き火の準備をしなければならない。」
４人と１匹は、ミヤビさんの言葉にうなずき、岸に上がりました。
そしてシャワー浴びた後、着替えました。
「じゃあ、役割分担をしようじゃないか。みんな、何をやりたい？」
「我は、焚き火の準備をしよう。」とミヤビさん。
「では、私もお手伝いします。」マサギさんも一緒にやる事にしました。
「あちきは、魚を釣るわ。期待しててね。」とノミチさんは張り切っていました。
「じゃあ、俺は木の実を取ってきてやる。」ナミキさんはそう言いました。
「あたしは、ノミチさんについて行きたいな。」トラはそう言いました。
「うん。じゃあ行こう。トラちゃん。」
ノミチさんはトラを連れて、いつも行く釣り場まで歩いて行きました。
マサギさんは、トラと一緒に準備をするつもりでした。
だから、トラと一緒に釣り場に向うノミチさんが、羨ましそうでした。
「じゃあ、俺は木の実を取ってくるから。」
ナミキさんは、そう言って、森の中に入って行きました。
ミヤビさんは、ノミチさんを見送っているマサギさんに声をかけました。
「さぁ、早く準備をしないと、夕食が遅くなってしまう。」
「はい。判りました。」
マサギさんは、後ろ髪を引かれつつ、ミヤビさんの手伝いを始めました。

ノミチさんは、２０匹以上の、魚を釣り上げていました。

「どれも型は大きいし、これだけあれば十分でしょう。」
ノミチさんはそう言って、釣り道具の片付けを始めました。
すると、トラの声が聞こえてきました。
「ねぇ、このバケツの魚、1匹だけ食べてもいい？」
「いいわよ。でも後でみんなで食べるんだから、1匹だけよ。いい？」
「判ったわ。」
トラは前足の鉤爪で、バケツの魚を器用にすくいあげました。
その魚を地面に落とし、ムシャムシャと食べ始めました。
「美味しい？」
釣り道具の片付けが終わったノミチさんが、トラのところにやって来ました。
「ええ、昨日は池の魚だったけど、今日は湖の魚だわ。
確かに、昨日と比べて、泥っぽさがあまり感じられないわね。
それに型も大きいわ。美味しいし、食いでがあっていいと思う。」
トラは、その味に満足したようでした。
トラは食べ終わると、口の周りや前足を舌で、舐め回していました。
それが済むと、待っているノミチさんの右肩に、ちょこんと座りました。
「じゃあ、ミヤビさんの所に帰りましょう。」
ノミチさんはトラと一緒に、ミヤビさんが待っている所に、戻りました。

ミヤビさんの所に戻ったノミチさんは、釣果を2人に見せました。
「どう？結構獲れたでしょ。これだけあれば、夕食には十分じゃない？」
ノミチさんは多少、自慢げに言いました。
ミヤビさんとマサギさんがうなずいたので、ノミチさんも満足でした。
「さて、焚き火の準備も終わった。

マサギ、悪いが火をつけておいてくれないか。
我はその間に、ノミチが釣り上げた魚をさばくとしよう。」
「判りました、ミヤビさん。ではお願いします。」
マサギさんは、自分が魚をさばかなくてもいい事が判って、ホッとしました。
早速、焚き火に火をつける事にしました。

焚き火に火がつけられました。
マサギさんも、魚をさばき終わり、1本1本、串に刺していました。
その後、塩を振って、焚き火の近くにそれを刺しました。
マサギさんやノミチさんも、それを見習って、串を刺していきました。
うっすらと魚に焼き跡がついてきました。
時々、刺している向きを変えて、まんべんなく焼きあがるようにしました。
やがて、魚は焼きあがりました。
取り出してみるとほどよく焼けていて、しかも油がのっていました。
ノミチさんは、一口食べてみました。
「うん、美味しい。とてもよく焼けているわ。」ノミチさんは満足しました。
ミヤビさんとマサギさんも、食べて、その味に納得したようでした。
トラも、ほぐしてもらった魚を食べて、喜んでいました。

「でも、おかしいわね。あれから大分経つのに、ナミキが帰ってこないわ。」
ノミチさんが、そう言いました。
「今の季節なら、この近くで木の実を取るのは容易な筈だが。」
ミヤビさんも、首をかしげていました。
「そうですね。ちょっと心配になって来ました。」
マサギさんは、不安そうに言いました。

「ねぇ、探しに行った方がいいんじゃない。」トラがそう言いました。
ノミチさんが、立ち上がりました。
「そうかもね。
じゃあ、あちきが探しに入って来るわ。
トラちゃんは、ここでマサギちゃんと、お留守番しててね。
全員で、捜索するほどの事でも無いと思うわ。
みんなは、ここで、焚き火の番をしていてよ。」
そう言って、ノミチさんは、森の中に入って行きました。

それから、更に時間が過ぎていきました。
「おかしいな。ノミチも帰って来ない。何かあったのかもしれないな。」
ミヤビさんは、そう言いました。
「私たち、どうしたらいいのでしょう。」
マサギさんは、ミヤビさんに尋ねました。
「では、今度は我が探しに行こう。」
ミヤビさんはそう言って、立ち上がりました。
「ねぇ、みんなで行けばいいんじゃない？」トラはそう言いました。
「そうです。そうしましょうよ。」とマサギさん。
「いや、多分大丈夫だろう。
何か手に負えない事が起きたのであれば、すぐに戻って来よう。
その後、一緒に村に戻って、村人に応援を頼めばいいと思う。
では、焚き火の番を頼む。」
ミヤビさんは、そう言って、森の中に入って行きました。

マサギさんとトラは、ミヤビさんが戻ってくるのをひたすら、待ちました。
でも、いくら待っても、戻っては来ませんでした。
「こうなったら、私が探しに行くしかありません。」

「そうね。あたしも行くわ。」
マサギさんは、火の後始末をした後、トラを肩に乗せました。
そして、みんなが消えてしまった、森の中に入って行きました。

「いやあ、本当に今日はいい天気だわ、
絶好のキャンプ日和ね。」トラはほがらかにそう言いました。
「あのー、トラさん。こんな状況下で、よくそんなに陽気でいられますね。」
マサギさんは、不思議そうに言いました。
「だって、原因も判らないのに、怖がっていても仕方がないでしょ。
もちろん、警戒は必要でしょうけどね。
何かあればあったで、それが判った時点で、対処すればいい事でしょ。
それまでは、いたずらに不安がるのは止めた方がいいと思うの。」
マサギさんは、トラのその言葉に、ホッとする思いでした。
「そうですね。確かに不安がっているだけでは、何も解決しませんね。
じゃあ、張り切って探しましょうか。」
「そうよ。それくらいで丁度いいのよ。」
マサギさんとトラは、森の中で、何人かの足跡が重なっているのを見つけました。
「これは新しいですよ。ここの森には私たち以外、入れる人はいません。
足の大きさから言っても、間違いなくミヤビさんたちでしょうね。」
マサギさんたちは、その足跡をたどりました。
藪の中を通り抜けると、少し開けた場所に出ました。
そこには、ミヤビさんたちと思われる足跡とは別に、違う足跡も見つかりました。
どう見ても、動物の足跡でした。
「これは、ブルクの足跡ですね。

そうか。ここらあたりには、野生のブルクがいたんでしたね。」
「じゃあ、そのブルクに襲われたのかしら。」
「確かにそれは、ありますね。
ブルクは、縄張り意識が強いから、ミヤビさんたちを排除しようとしたのかも。
特にブルクは、人の背後に回って、攻撃をする癖があるんですよ。
それで、やられたのかもしれません。
と言ってもブルクは草食ですから、命には別状ないと思うんですけどね。」
「結構、凶暴なのね。あたしたちも気をつけないといけないわね。」
トラも警戒してキョロキョロとあたりを見回しました。
「マサギさん。あれを見てよ。すごく綺麗な花があるわ。」
その声に、マサギさんもトラが見ている方向に目をやりました。
「本当ですね。小さいけれどなんて美しい花なんでしょうか。」
マサギさんも、しばし見とれていました。
そして、その方向に歩いて行った時、気が付いたのです。
「あっ、あれは何でしょうか?」
マサギさんは、前方の草むらの中に、キラリと光るものを見つけました。
それは、マサギさんが、見覚えがあるものでした。
「あれは、ノミチさんの髪留めです。」
マサギさんは、そう言って、その髪留めに駆け寄りました。
そして後1歩で届くというところで、足元がガクンときました。
「ウワァーッ。」マサギさんはトラと一緒に、奈落のそこに落ちていきました。

「マサギ。マサギ。」
上の方から、自分の名前を呼ぶ声が聞こえてきました。
その声と体を揺さぶられた事で、マサギさんは、目を覚ましました。
「あっ、ここはどこなんでしょう。」

そう言って、マサギさんは、上半身を起こしました。
上の方から僅かに漏れる陽の光で、自分の周りにいる人の姿を確認しました。
それは、自分たちが懸命に探していた人たちでした。
「ミヤビさん。ナミキさん。ノミチさん。」
マサギさんは、ミヤビさんに抱きつきました。
「よかった。みんな無事だったんですね。本当によかった。」
マサギさんは、涙ぐんでいました。
「本当によかったわ。」トラはマサギさんの傍らにいました。
「トラさんも、大丈夫だったんですね。」
「まあね。何とか無事に着地出来たわ。」
その時、マサギさんは、腰がズキッと痛むのを覚えました。
「あっ、痛い。」マサギさんは、思わず腰に手をあてました。
「腰から落ちてきたからな。無理も無い。」とナミキさん。
「頭からではなくて、よかった。では治してやろう。」
そう言って、ミヤビさんはマサギさんに手をあて、呪を唱えました。
詠唱が終わると、ミヤビさんはこう言いました。
「もう、痛みは消えている筈だ。マサギ、立てるか？」
ミヤビさんの言葉に、マサギさんは立ち上がりました。
「あっ、大丈夫です。腰の痛みもとれました。有難うございます。」
マサギさんは、ミヤビさんにお礼を言いました。

マサギさんは、あらためて周りにいるみんなの顔を見回しました。
「みなさん。無事でなによりです。でも、どうしてこんな所にいるのですか？」
マサギさんは、そう尋ねました。
「マサギ。俺もお前と、同じさ。
俺は木の上に登って、夕食に食べる木の実を取っていたんだよ。
そうしたらさ。俺の真下を、あの野生のブルクが走って行ったんだよ。

俺はチャンスと思ったね。
ここでこれを捕まえて、村に帰れば英雄さ。
野生のブルクは、高いからね。
だから急いで、ブルクの後を追って行ったのさ。
ところが、この穴の上を通っちまったのが運の尽きさ。
あっという間に落ちてしまったというわけなのさ。」
ナミキさんは、一攫千金を逃したような悔しさをにじませていました。
「あちきは、こんな女とは違うわ。
親切にも、帰ってこないナミキを探して、ここまで来たのよ。
あっ、それはマサギちゃんも知っていたわね。
それでね。この穴の近くまで来たのよ。
そうしたら、すぐそばに綺麗な花が咲いているじゃない。
あちきは、嬉しくて夢中で、その花に向かって歩いて行ったのよ。
まさか、こんな所に、穴が開いているなんて思わなかったわ。
草で覆われていたので、全然判らなかったの。
気が付いた時には、この穴に落ちていたってわけよ。
その際に、髪留めが外れてしまったの。だからこんなよ。」
ノミチさんは、そう言いながら、だらっと垂れ下がった髪を触っていました。
「我は、ノミチの足跡をたどって、ここまで来たのだ。
ノミチの髪留めを見つけたので、拾おうと身体をかがめていた。
その時、背後から、野生のブルクが突っ込んで来て、この穴に落とされたのだ。」
相変わらず、淡々とミヤビさんは話をしていました。
「それは、大変でしたね。みなさん。怪我は無かったんですか?」
マサギさんは、心配そうに尋ねました。
「大丈夫だ。我が、既に呪術で治してある。」
なんて、便利な人なんだろう。1家に1台、いや1人は必要ですね。
マサギさんとトラは、感心していました。

「みなさんが、ここにいる理由は、判りました。
また、こんな深い穴を自力で、登る事が出来ないのも判ります。
でも、それをどのライバにも連絡していませんよね。
連絡していれば、ライバはここに飛んで来た筈です。
私たちも、探す手間が省けたと思うのですが。
一体、何があったんですか？」
マサギさんは、誰ともなしに尋ねました。
「いいか。マサギ。これからやる事を黙って見ていろ。」
ナミキさんは、そう言って、大声を上げました。
「ノミチのアホーッ。」
何て事言うのよ、あんたは。ノミチさんは、ナミキさんに抗議しようとしました。
それを、ミヤビさんが片手で、制止しました。
「これは、一体。」マサギさんが愕然としました。
大声を出している筈のナミキさんの声が、穴の中で広がらなかったからです。
まるで、岩に吸い込まれるように、すぐにかき消されてしまいました。
これでは、穴のすぐそばにいても、何も聞こえません。
マサギさんは最初、信じられない気持でいました。
ですが、ふとある事に気が付いて、その原因が判りました。
「ここは、「静寂の穴」なんですね。」
マサギさんは、誰ともなしに、そう言いました。
ミヤビさんは、その言葉にうなずいて、こう言いました。
「その通りだ。ここでは、どんなに大声を出しても、外まで伝わる事は無い。
実際、さっきから我らは、何回か叫んでいたのだ。
しかし、ライバたちは現れなかった。」
「確かに、湖で休憩しているライバたちには、何の動きもありませ

んでした。
多分、何も聞こえていないのでしょう。」
マサギさんは、ミヤビさんにそう答えました。
「さて、我々は自分たちが今、置かれている状況を正しく認識したわけだ。
では、これからどうしたらいいと思う?」
ミヤビさんは、全員に尋ねました。

「ちょっといいかしら。」トラが何故か、元気が無さそうな声で言いました。
「どうした。トラ。」ミヤビさんが、しゃがんでトラを見ました。
「何故か知らないんだけど、頭が少しクラクラするのよ。
いつまでも、ここにいて大丈夫なのかしら?」トラは、そう尋ねました。
「フム。」ミヤビさんは立ち上がり、あたりを見回しました。
「「静寂の穴」には昔から、有害なガスが溜まっていると聞く。
ここにも、僅かではあるが、滞留しているのだろう。
トラは我々と違って、身体も小さく、低い位置の空気を吸っている。
有害なガスを吸い込みやすいのだろう。
我々も、早くこの場所を、脱出した方がいいのかも知れない。」
ミヤビさんは、全員にそう言いました。
「だけどさ。問題はどうやって、ここから出るかだよな。
この穴は、ただ掘っただけの穴で、つかみどころが無いんだよな。
自力なんて、とてもじゃないが登れないよ。」
ナミキさんは、嘆いていました。
「あちきにも、どうしたらいいのか判らないわ。」「私もです。」
3人以上集まっても、文殊の知恵は出ないようでした。
その時、トラがこう言いました。
「ねぇ、ミヤビさん。ミヤビさんは昨日、呪術でライバの心を読んだわよね。

だったら、呪術でライバの心に直接、話しかけるなんて事は出来ないの？」

トラのこの質問に、ミヤビさんはこう答えました。

「昨日見せた呪術は、「聞」（ぶん）の術だ。

昨日、初めてライバに対して使った。

結果は、トラ。君も見ての通りだ。我も満足している。

だが今度は逆に、心に話しかける術だ。これを「話」（わ）の術と言う。

これが聞のように、ライバに通用するかどうかは、判らない。

だが、やってみる価値はあるな。」

ミヤビさんは、しばらく考えていました。

やがて顔をあげて、こう言いました。

「よし、やってみよう。

但し話の術の後、それを確認するために聞の術も使った方がいいだろう。

２つの呪を行なうため、同時詠唱を行う。」ミヤビさんは、そう言いました。

「同時詠唱？　それって何の事だ。」ナミキさんは、ミヤビさんに尋ねました。

しかし、既にミヤビさんは、呪を詠唱していました。

穴の上から漏れる太陽の僅かな光の中、それは始まりました。

トランス状態になったミヤビさんの身体全体が、白く光り輝きました。

そして、その光は、人の身体の形のまま、２つに分離しました。

その光が消えた時、そこには２人のミヤビさんがいました。

１人は赤く染まっており、もう１人は青く染まっていました。

そして、２人同時に、呪の詠唱が始まりました。

詠唱が終わると、赤い方は目を開けたままで、青い方は目を閉じました。

赤い方は、何やら口ずさんでいました。
そして、それが終わると、目を閉じました。
すると、今度は青い方が目を開きました。
そして、何かを聞いているように、うなずいていました。
やがて、それも終わったのでしょう。再び、目を閉じました。
次の瞬間、２人の身体が、白く光り輝きました。
そして、その光は１つになりました。
光が消えた時、ミヤビさんは、元の１人の身体に戻っていました。
周りにいた全員がその不思議な光景に、一言も声を発する事が出来ませんでした。
ただ、見つめているだけでした。
次の瞬間、元に戻ったミヤビさんは、ガクッと倒れそうになりました。
それを慌てて、ナミキさんとマサギさんが、左右から支えました。
ミヤビさんが、目を覚ましました。
「どうした。ミヤビ。しっかりしろ。一体、どうなったんだ。」
ミヤビさんは、その言葉を聞いた後、ゆっくりと微笑みました。
「大丈夫だ。我のシャドーに、我の言葉が届いたのを確認した。
シャドーの声による伝言は、間違いなく、ガイムに届く筈だ。
後は、ガーネが救助に来るのを待てばいい。
多分、この穴の上空には、伝言を終えたシャドーが、飛んでいる筈だ。
ガーネに我々の位置を知らせるためにな。」
ミヤビさんのこの言葉に、穴の中にいる誰もが安心をしました。
「有難う、ミヤビ。」
ナミキさんは、ミヤビさんを支えながら、感謝の言葉を口にしました。
みんなは、ガーネがここに来るのを待っていました。
トラは、つぶやきました。「ガーネ、早く来て。あたしの元に。」

第7話「天空の村にて」やっつめだよ。（終）

第7話「天空の村にて」やっつめだよ。（後書き）

今回のお話は、第７話「天空の村にて」の第８話です。
今回の話は湖での、あの４人組とトラのお話です。
ガーネは、今回は出て来ません。（この作品中、初めてですね。）
前回、ガーネが出かけている間に、起こった話です。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第7話「天空の村にて」終わりだよ。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第7話「天空の村にて」終わりだよ。のお話です。
この回では、ガーネが「静寂の穴」に落ちた、４人組とトラを救助に向かいます。

第7話「天空の村にて」終わりだよ。

第7話「天空の村にて」終わりだよ。

ガイムは村役場の敷地の中にいた、ガーネの目の前に降り立ちました。

「ガイム。どうしたんですか?」ガーネは尋ねました。

「みんな「静寂の穴」に落ちた。トラも落ちた。」ガイムは、そう報告しました。

「それって、本当なんですか?」「他のライバからの伝言を聞いた。」

なるほど、ライバ同士で伝言を伝え合うと聞いていましたが、この事ですか。

多分、ナミキさんたちの中の誰かのライバからの伝言なのでしょうね。

ガーネは、そう理解しました。

「しかし、ライバの使い手が3人とも、穴に落ちてしまうなんて。一体、何が起こったんでしょうね。」

ガーネは疑問に感じましたが、今はそれを考えている場合ではありません。

「村長さーん。」ガーネは、村役場に急いで戻りました。

ガーネはガイムに乗って、湖へと直行しました。

「救助隊より先に来てみたんですが、落ちた穴ってどこにあるんでしょうね。」

ガーネは、そうつぶやきました。

ガーネは村長さんに、村の代表たちが「静寂の穴」に落ちた事を伝えました。

すると村長さんは、事の重大さを察して、救助隊を編成する事にし

ました。
ただ、その人手を集めるのには時間がかかります。
そこで、村長さんは、ガーネに先に現場に行くように頼んだのでした。
その際、もし単独で救助が可能ならと、救助道具一式とその方法も伝えたのです。

湖の上空に到達する手前で、1匹のライバが上空に舞い上がって来ました。
手綱の色は、黒色でした。「あれは、シャドーですね。」
シャドーはガイムに接近して、鳴き声をあげていました。
「ガイム。シャドーは何を話しているのですか?」
「シャドーは、みんなが落ちた穴を案内すると言っている。」
「判りました。ガイム、シャドーの後をついていって行ってください。」
「判った。」
シャドーに先導され、ガーネはガイムと共に、その穴の上空に到達しました。
「あそこですか。確かに藪の中に、少し開けた所がありますね。でも、大型のライバでは、着地出来ないでしょう。ガイム。あなたなら降りれませんか?」
ガーネが尋ねると、ガイムはその周りを何回か旋回した後に、こう言いました。
「大丈夫。」
その声を聞いた後、ガーネは、ガイムに降下の指示を出しました。
「判った。」ガイムは、その藪の中の1画に着地しました。
ガーネはガイムを降りて、周りを見回しました。
少し先に、とても綺麗な花が咲いていました。
そして、その近くにキラリと光るものが落ちていました。
「あれは何でしょうか?」

思わず駆け寄ろうとしたガーネを、ガイムがクチバシで抑えました。
「一体、どうしたんです。」「その下に穴が開いている。」
ガーネは手探りをしながら、ほふく前進でゆっくりと進みました。
「あっ。」ガーネは思わず声をあげました。
ガーネの手がその穴を探り当てたのでした。
穴の上には、長い草が幾重にも倒れていました。
そのため上から見ただけでは、その穴を確認する事は出来なかったのでした。
ガーネは村長さんから預かった、救助用具を取り出しました。
その中の鎌を取り出し、その長い草を刈っていきました。
その時です。ガーネの背後から、ガサッと音がしました。
ガーネが後ろを振り向くと藪の中で、獣が走り去っていくのが見えました。
「多分、野生のブルクですね。きっと私を襲おうとしたのでしょう。
でもガイムがここにいたので、出来なかったというところでしょうか。
そうか。
ひょっとしたら、みんなが穴に落ちたのは、ブルクのせいかもしれませんね。」
やがて、ぽっかりと空いた穴が、ガーネの前に現れました。
穴から中を除きましたが、かなり深い穴でした。
でもその中に何人もの人の姿を認めました。

ナミキさんたちは、救助をひたすら待っていました。
「シャドーの伝言は、ガーネにちゃんと届いたかな?」
ナミキさんは、ちょっと不安そうに言いました。
「我々には、自分たちでここから脱出出来る術は無い。
やれる事はやったのだ。後は運を天に任せるほか仕方が無い。」
ミヤビさんは、そう言いました。

「そうね。最悪の場合の事を考えてたって、きりが無いものね。来る事を信じて、気軽に待ちましょうよ。」とノミチさん。
「でも、出来るだけ早く来て欲しいです。有害なガスの事も気になりますし。」
マサギさんは自分の肩の上で、ぐったりしているトラを心配していました。
それからあまり時間が経たないうちに、いきなり穴の中が明るくなりました。
みんなは、穴の入り口を見上げました。
そこには逆光で顔がよく確認出来ませんでしたが、明らかに人の姿がありました。
そしてその人が、手を振っているのが判りました。
「おーい。」ナミキさんは、思わず声をあげました。
「駄目よ。声は届かないわ。
それよりも、みんなで手を振りましょう。その方が判りやすいわ。」
ノミチさんのこの意見に、みんな賛成しました。
そして穴の入口に向かって、思いっきり手を振りました。

穴の入り口から、人の姿が消えました。
「あら、どうしたのかしら。人がいなくなってしまったわ。」
「いや、よく見るんだ。上から何かが降りてくる。あれは・・・ロープだ！」
穴の入り口から、太いロープが降りてきました。
そして、その先端には、何かが巻きつけてありました。
ミヤビさんが、それを受け取りました。
「これは、ライトと手紙だ。」
ミヤビさんは、ライトを点灯させました。そして手紙を開きました。
「みんな、これはガーネからのものだ。上にいるのはガーネだ。」
ミヤビさんがそう言うと、みんなの顔が明るくなりました。
トラも、ガーネの名前を聞いた途端、その顔をあげました。

「なんて書いてあるの？」ノミチさんは、尋ねました。
「このロープで、２人ずつ上に引き上げると書いてある。準備が出来たら、ライトを点滅して欲しいとの事だ。」
そう言って、ミヤビさんはロープを見ていました。
「これは、救助用のロープだな。この２つの輪の中に１人ずつ、体を入れて固定すればいいらしい。」
マサギさんも、そのロープを見ました。
「あれ、これは村役場に置いてあるものです。確か、今日ガーネさんは、村役場のお手伝いをしていたんでしたよね。きっと、村長さんに私たちの事を話して、これを貸してもらったんでしょう。これなら、扱い方はよく知っています。私に任せてください。」
マサギさんは、胸をたたいてそう言いました。
「そうか。それでは頼む。」ミヤビさんは、ロープをマサギさんに手渡しました。
「ねぇ、誰が最初に上がる？」ノミチさんは尋ねました。
「我は後でもいいが。」ミヤビさんは、そう言いました。
「駄目です。ミヤビさんはトラさんを連れて、早くこの穴から出てください。
そして、すぐに治療を始めて欲しいんです。」
マサギさんは、自分の肩にいるトラの具合が心配でした。
そのため、ミヤビさんに早く出て行くよう、促したのでした。
「判った。トラの事は私が責任を持って保護すると、ガーネに約束してある。
では、その言葉に甘えて、先に行かせてもらうことにしよう。」
ミヤビさんはそう言って、マサギさんからトラを手渡されました。
そして自分のポケットの中に、トラを入れました。
マサギさんは、ロープの輪の中にミヤビさんをくぐらせ、固定しました。

「あと、1人誰が行く？」ナミキさんが尋ねました。
「私は村役場の職員として、皆さんの安全を確認する義務があります。
それに、ロープの扱い方は私が一番、手馴れています。
私は最後まで、ここに残りましょう。」マサギさんは、そう言いました。
「じゃあ、ナミキ。ライバ使いのあんたが先に行きなさいよ。
何か不測の事態が起きた場合、役に立つ事があるかも知れないわ。
もう大丈夫だとは思うけどね。」
ノミチさんの言葉に、ナミキさんはうなずきました。
「判った。じゃあ、俺が先に上にあがるからな。」
ナミキさんはそう言って、マサギさんにロープに固定してもらいました。
「じゃあ、合図をするわね。」
ノミチさんは、ライトを点滅させました。
マサギさんも、両腕で丸の形を作って、ガーネに知らせました。
ロープは何の異常も無く、するすると上に上がって行きました。
2人の姿が消えて少し経った頃、2つの顔が穴をのぞいて手を振っていました。
「やったわね。」マサギさんとノミチさんは、手を取り合って、飛び跳ねました。
そのうち、穴にいるのが2人だけとなっている事に気が付きました。
「よりにもよって、一番頼り無さそうな人と残ってしまったわ。」
2人は、同時にそう思いました。
でも、その思いをを顔に出す事はありませんでした。
少し、不安になった矢先、またロープが降りてきました。
2人はホッとして、ロープを固定した後、ライトを点滅させました。
ロープは何のトラブルも無く引き上げられ、穴の外に出る事が出来ました。
2人は一旦、上空に上がった後、地上へと降ろされました。

ロープを外した後、みんなが集まっているところに駆け寄りました。
そして無事に穴から出てこれた事に、喜びを分かち合ったのでした。
「ガーネ。有難う。」ノミチさんとマサギさんは、ガーネにお礼を言いました。
2人は、ロープがガイムによって、引っ張られていた事を知りました。
「なるほどね。これなら2人一緒でも、簡単に上がれた筈だわ。でもひょっとしたら、4人一緒でも、大丈夫だったんじゃない？」
ノミチさんは、ガーネにそう尋ねました。
「ガイム自身は自信ありげでしたね。多分出来たとは思いますよ。でもガイムは、他のライバより1回り小さいですしね。念には念を入れたんですよ。」ガーネは、そう説明しました。
「トラさんは、どうなっていますか？」
心配そうに聞いたマサギさんの肩に、トラがちょこんと飛び乗りました。
「あたしは、もう大丈夫よ。心配してくれて有難う。」
トラは、マサギさんにお礼をいいました。
「いいえ、そんな事。トラさんが無事なら、それでいいんですよ。」
マサギさんは、顔を少し赤くしながら、顔と手を横にぶんぶん振っていました。
明るい声が飛び交う中、空は夕焼けの色に染められていきました。

マサギさんは、ミヤビさんに頼んでライバのシャドーを、村役場に飛ばせました。
全員が無事に脱出出来た事を、村役場にいる村長さんに知らせるためでした。
しばらくして、シャドーが帰って来ました。
その返事は、全員無事でよかったというものでした。
「全員無事だったので、救助隊は解散するそうです。
村の人たちにも、御心配をおかけしました。

また、みんな健康状態もいいなら、慌てて帰る必要も無い。
折角、湖まで行っているのだから、楽しんで帰って来なさい。
そうも書いてありました。
これで連絡も済んで、一安心です。」マサギさんは、ホッとしました。
「もう、陽が暮れちゃったな。これからどうしょうか？」
ナミキさんは誰ともなしに、尋ねました。
「村の方には、自分たちが無事だった事を知らせる事が出来たわけよね。
また、ゆっくりして来ていいって、言ってもらえたんでしょ。
だったらちょっと遅れたけど、予定通りここで食事をする事にしない？
食材だってちゃんと用意してあるわ。
今日、招待予定だった、ガーネとトラちゃんもここにいる事だし。
あの穴の中にいたせいで、気分が優れない場合は、止めた方がいいけどね。
どうなのかしら？」
このノミチさんの提案に全員が、賛成しました。
「あたしなら、大丈夫よ。もうすっかり、元気になったわ。」
トラも、賛成のようでした。
「じゃあ、食事の準備を始めようか。」ナミキさんは、そう言いました。
その言葉を合図に、みんなはそれぞれ、行動を開始しました。

ミヤビさんとマサギさんは、焚き火の準備を再開しました。
やがて、重ねた木材に火が点火されました。
ミヤビさんとマサギさんは、燃え盛る炎をずっと見つめていました。

ノミチさんは、焚き火で赤くなっている木片の幾つかを、取り出しました。

もちろん、焼き料理に使うためでした。
昼間釣った魚の残りは、天日で干してありました。
だから、少し炙るだけで、美味しく焼き上がりました。
「そう言えば、ナミキは木の実を取るのを任されていたのよね。今、持っているの？」ノミチさんは、尋ねました。
「ああ、もちろんだ。この袋の中にあるさ。」
ナミキさんは、そう言って、袋の中身をテーブルの上に出しました。
ですが、その半数ぐらいが、潰れていました。
「ありゃー。きっと、穴に落ちた時に潰れたんだな。まぁ、これでも食べられない事はないんじゃないか？」
ナミキさんは、気楽に言いました。
「あんた。何を言っているの。大事な食材をこんなに潰して置いて。こんなペースト状になった物をどうしろっていうのよ。それとも、あんたが料理してくれるの？」
ノミチさんの剣幕に、さすがのナミキさんもたじたじとなりました。
「すまん。いや、本当にすまん。」
ナミキさんは、両手を合わせてノミチさんに謝りました。
「なんてね。木の実の半分はスープのだしに使うから、別に構わないのよ。」
ノミチさんは、してやったりといった顔で、舌を出していました。
「こらぁー。お前はいつもそう言って、俺をからかいやがって。」
ナミキさんは、そう言って、げんこつを振り上げました。
それをノミチさんが、片手を上げて制しました。
「ちょっと待ってよ。遊ぶのは後でもいいでしょ。今は、料理に専念させて。」
ノミチさんは、一瞬で、真剣な表情に変わりました。
こいつは、本当に。
ナミキさんは、ノミチさんの正論に対し、言い返す言葉がありませんでした。
振り上げたげんこつは、へなへなと降ろすしかありませんでした。

料理が1つ出来た後、ノミチさんはナミキさんにこう言いました。
「まぁ、そんなに顔を膨らませて、ふてくされないでよ。
今夜のために、ちゃんと用意して来た物があるのよ。見てみない？」
ノミチさんはそう言って、傍らに置いていた重そうな箱を開けました。
「おおっ、これはすごい。」ナミキさんは、感動しました。
箱の中には、新鮮な肉や野菜、そして飲み物などが、入っていました。
「ねぇ、すごいでしょう。これも今夜の料理に、全て使うつもりなの。
忙しくなるからナミキにも、是非、手伝って欲しいの。
どう？お願いしても構わないかしら？」
ノミチさんにこう言われ、ナミキさんも俄然、張り切り出しました。
「判った。何でもしよう。俺に指図してくれ。」
ノミチさんはナミキさんのこの言葉に、心の中でニヤッとしました。
この後ナミキさんは、ノミチさんに言う通りに、かいがいしく働きました。

ノミチさんはナミキさんと協力して、予定していた全ての料理を作り上げました。
「お料理出来たわよ。みんな悪いけど、テーブルに並べてくれない？」
ノミチさんのその言葉に、全員がワラワラと動きました。
そして出来た料理と持ってきた飲み物が、テーブルに並べられました。
その間ノミチさんは、料理器具を洗ったり、片付けたりしていました。
それが済むと、ノミチさんもテーブルの方にやって来ました。
布巾や調味料などを置いた後、みんなにテーブルに着くように言いました。

「こうやって見ると、なかなか美味しそうに出来たわね。」
ノミチさんは、満足そうでした。
「うん。なかなかいいんじゃない。」
ナミキさんは自分も一緒に手伝ったので、誇らしげでした。
「いや、大したものだ。」とミヤビさん。
「本当に、美味しそうですね。」マサギさんも、絶賛でした。
「そう言えばお昼を食べるのが、少し早かったんでした。お腹がペコペコです。」
ガーネは、目の前の料理にお腹の虫が鳴っていました。
「本当、早く食べましょう。」トラも、食べるのを待ちわびていました。

全員が、テーブルに着きました。
「頂きます。」楽しい晩餐が始まりました。
「おっ、このお肉最高だな。」とナミキさん。
「私は、この野菜スープがたまりません。」とマサギさん。
「やっぱり、この魚の焼けた香ばしさがたまらないわ。」とトラ。
「私もやはりお肉ですね。これもブルクなんでしょうね。
本当にこの食材は、作る人によって、味が違いますね。
でも、どの人が作った料理も個性が感じられて美味しかったですよ。
もちろん、ノミチさんが味付けして焼いたこのお肉もです。」とガーネ。
「どの料理も文句が言えないくらい、美味しい。さすがは、ノミチだ。
我々のお母さんのような存在だな。有難い。」とミヤビさんも、絶賛。
みんなに褒められて、ノミチさんは顔を赤くしました。
照れ隠しに、ジュースを注いだワイングラスを顔に近付けていました。
「こちらこそ、そんなに褒めてくれて有難う。」

ノミチさんは、小さい声でつぶやきました。

ある程度、食事が進んだ所で、ノミチさんがミヤビさんに尋ねました。

「でも、なんで、「静寂の穴」には、あんな有害ガスが発生するのかしら。

他の穴では見られない現象よね。」

「先ほど、あらためてトラの症状を呪術で探っていた。

すると、それが地上に降りた時に起きた症状に似通っている事に気が付いたのだ。

これからは我の推測になるが、ひょっとしたらあそこに溜まっている有害ガス。

あれは、はるか昔この村を襲った、噴煙の中に含まれていたものかもしれない。」

「この村を襲った噴煙？

地上が死の世界になった日に、この村に湧き上がって来た噴煙の事ですか？」

ガーネは、やっと話に割り込めたと喜びました。

「ガーネ。何故、君がその事を知っているのか？」

「実は今日午前中に、トモネ様からその話を聞かされたばかりなんです。」

「そうだったのか。トモネ様ならその話を知っていても何の不思議も無い。

さてと、話を戻そう。

「静寂の穴」は、井戸のために掘られたどの穴よりも、深く掘られている。

だから、その時の有害ガスがまだ滞留しているのではないだろうか。」

「確かに、あのガスを吸った感じは、地上のそれと同じ見たいだった気がするわ。

でも、あたしは今回、地上とは違って、咳は1回も出なかったわ。」
あたしも負けてなるものかと、トラも話に参加しました。
「恐らくは、ガスの濃度のせいだと思う。
大体、本来あそこにガスが噴出しているのは、あり得ないそうだ。
だから地上からの噴煙が原因とみる考え方も、あながち否定出来ないと思う。
また地上に比べて、ここの濃度は薄いと思われる。
だからトラは咳も出なかったし、他の４人も大した影響を受けなかったのだ。
だが場所によっては長時間、穴の中にいると死に至るケースもある。
その場合、やたら咳き込んでいた形跡があったそうだ。」
「でも、その推測が事実とすると、当時の村の被害はもっと大きいんじゃない。
よくこの村は、死の世界にならなかったものね。」
「それなんだが、これから言うのも、推測でしかない事を先に言っておく。
この村が正常な状態にいられたのは、ヤーベのおかげではないかと思っている。」
「ヤーベが？また、それは何故なの？」
「本来、ヤーベの飲み水である、雲の下の湖も汚染されている筈だ。
雨が降った際に、空気中に浮遊している有害物質が混ざるからだ。
あの水をこの村に、直接使ってみた事があると言う。
だがその結果、土も田畑も異常なほど、枯れた状態になってしまったらしい。
それにもかかわらず、ヤーベが排水した水には、そんな現象は起こらない。
むしろ、いい結果のサンプルが採れるばかりだったそうだ。
ヤーベは、取り込んだ水を浄化させる事が出来る。
それは、村人全てに知られている事実だ。
だがひょっとしたら、それだけでは無いのかもしれない。

ヤーベは、大気中の汚れた空気を吸っている筈だ。
それの浄化も、しているのかも知れない。
また、排水された水が村の浄化に、1役担っているのかもしれない。
まだ、いろいろと推測の段階ではあるが、いずれは解明したいと思っている。
それは、この村人の治療にも、役に立つ事があると思っているからだ。」
「じゃあ、ヤーベを使えば、地上に新たな息吹を与える事が出来るのかしら。」
「地上は広すぎる。やるとなればたくさんのヤーベが、必要となるだろう。
だが、生物が自分の住みにくい環境を、わざわざ棲みかにするとは思えない。
飛ぶ事すら無いのでは無いだろうか。だから、その期待は薄いと思う。」
「確かにそうね。
ヤーベがあの湖で水を飲むのは、単にたくさん水があるからに過ぎないもの。
地上近くなんて飛んだ事無いわ。」

折角の楽しい晩餐なのにな。
ほとんど、ミヤビとノミチしか話していない。
残りは、黙って聞いているぐらいしか出来ない。
しかも、話がちょっと難しくて、暗い話しになりそうだ。
そう警戒したナミキさんは、話題を変えてみる事にしました。

「ウマイ、ウマイ。しかし何だな。
よりによって4人とも、同じ穴に落ちるなんてな。
間抜けもいいところだったよな。」
ナミキさんは、焼肉をほおばって、共通の話題で盛り上がろうとし

ました。
「何言ってんのよ。元はと言えば、あんたが悪いんでしょ。」
案の定、ノミチさんが喰いついてきました。
「おっ、何言ってんだよ。
大体お前が花を取ろうとして、穴に落ちたのが始まりじゃないか。
後から探しに来たミヤビやマサギは、そのとばっちりを受けたんだ。
2人共、お前の落とした髪留めに、気を取られて落ちたんじゃないか。」
どうだ、言い返せないだろう。ナミキさんはほくそ笑んでいました。
「あら、随分責任転嫁が、お上手になられた事。
お姉さん、びっくりして口を利く事も出来ないわ。
いい、言わなきゃ判らないようだから、言うけどね。
そもそも事の発端は、ナミキ。
あんたが野生のブルクを追っかけて、あの穴に落ちた事から始まるのよ。
あたしがあそこに行ったのは、何故だと思うの。
いつまでも戻って来ないあんたを、探しにに言ったからでしょうが。
あんた、本当に判っているの?」
ノミチさんは、反撃を開始しました。
「なるほど、そう言われてみれば、その考え方にも一理あるな。」
ナミキさんは、思わずひるみました。
「一理?それが全てじゃないの。何を人ごと見たいな事を言ってんのよ。
大体、あんたは昔から、そうだったわね。
学生の頃、遠足に行ってあんた一人だけが戻らずに、みんな大騒ぎだったわ。
後で聞いたらその言いわけがこうよ。
湖の魚を追いかけるのに夢中になっていたから、時間が経つのを忘れたって。
なんて、言い草なのかしら。小さい子供じゃあるまいし。全く呆れ

ちゃうわ。」
ノミチさんは、昔話でナミキさんを追及しました。
「おいおい。それは昔の話だろうが。何を今更、持ち出すんだ。」
ナミキさんは、その追求をかわそうとしました。
「ああ、そうだ。ナミキのそう言う想い出なら、私にもある。」
ミヤビさんがそう言って、手を上げました。
「あっ、はい、もちろん私にも、覚えが。」
マサギさんもそう言って、手を上げました。
「こらー、ミヤビ、マサギ。お前ら調子に乗って何を言いだすつもりなんだ。」
「しかし、事実ではある。」
「事実もへったくれもあるか。もっと友達を大切にしろ。
大体、お前たちの話を聞いているとだな。
俺が行動力があるだけの、そそっかしいアホみたいに聞こえるじゃないか。」
この言葉に、周りにいた全員が「うん。」とハモリました。
「てめえら。それでも俺の友達かー。」
「あのー、実は私にも、言いたい事があるんですが。」
「なにー。やいガーネ。
てめえが俺の小さい頃の事なんぞ、知っているわけ無いだろうが。」
「いえ、今日の午前中に、トモネ様の所に行った時にですね。
こちらが聞きもしないのに、ナミキさんについてあれこれ聞かされたんですよ。
何のかんのと言いながら、ナミキさんはトモネ様に愛されているんですね。」
「うるせえや。あのオババが言った事なんか気にすんな。
ましてや、それを人前で話すなんぞ、言語道断だ。」
「えーっ、でもあちきは聞いてみたい。」
「私もです。興味があります。」
「我も、楽しみだ。」

「あたしも楽しみだわ。是非、聞かせて。ガーネ。」
「こらー、ガーネやトラまでこの俺をおもちゃにしやがって。」
「あら、おもちゃじゃないわ。ただ愛されているだけよ。」
うっふん、かえってうらやましいくらいだわ。」
「だったら、お前が俺の代わりに、いじられんかい。」
「やーね。あちきには、そんな趣味ないわよ。」
「なにを―。」

楽しい晩餐は、その後も延々と続きました。
食事が終わると、場所を変えて焚き火のそばで、立ち話をしていました。
ナミキさんとノミチさん。
ミヤビさんとマサギさんが、それぞれ会話を楽しんでいました。
トラはガイムと何故か、にらみ合いをしていました。
そんな中で、ガーネは1人腰を降ろして、残った焼き魚を食べていました。
「ここに来て僅かですが、こんなに知り合いが出来たんですね。」
そう言いながら、焚き火のゆらめく炎を眺めて、感慨に耽っていました。
そしてその向こう側に、迷宮のドアが現れているのに、気が付きました。
「もう、お別れなんですね。」

ガーネは、マサギさんと話をしている、ミヤビさんの元へ行きました。
「これで、トモネ様を交えて、みんなで何か美味しい物でも食べて下さい。」
ガーネはそう言って、日当が入っている袋を、ミヤビさんに手渡しました。
ミヤビさんは最初、怪訝な顔をしていました。

ですが、すぐに気が付いたのでしょう、ガーネにこう尋ねました。
「ひょっとして、迷宮のドアが現れたのでは無いのか？」
その言葉に、一瞬、ガーネは息をつまらせました。
ですが、すぐに笑顔に戻って、こう言いました。「はい、そうです。」
その頃には、みんなが会話を止めてガーネの方を向いていました。
トラも、迷宮のドアが現れた事に気が付いたようでした。
ガイムに何かを話しかけた後、ガーネに駆け寄って、その肩に飛び乗りました。
ガーネは、あらためて全員に別れの挨拶をしました。
「短い期間ではありましたが、みなさんには大変、親切にして頂きました。
いつまでもいたい気持ちはあるのですが、迷宮のドアが現れてしまいました。
それは、残念ながらここが私たちの世界では無かった事を示しています。
私たちは、また迷宮に戻ります。
そして、自分たちの世界を見つける新たな旅に出たいと思っています。
私たちは、みなさんがこれからも幸せに、暮らしていける事を願っています。
今まで本当に有難うございました。」
「有難うございました。」
ガーネとトラは、そう言って頭を下げました。
「もっと、ゆっくりして・・・。」
ナミキさんがそう言いかけた時、ガーネたちの姿に変化が生じました。
身体の1部が緑色に歪み、消えかかっていたのでした。
もう、ここにはいられないのだな。
ナミキさんを含めた全員が、その事を理解しました。

「では、これで失礼します。」
ガーネとトラはそう言って、もう一度頭を下げた後、迷宮のドアに向かいました。
ガーネの背後から、「さよなら。」「また来てね。」などの声が聞こえました。
それでも、ガーネは振り向く事無く、歩み続けました。
トラはたまらなくなって、「ガーネ。」と声をかけました。
それに対してガーネは、くちびるをかみしめながらこう答えました。
「振り向いちゃ駄目です。別れが辛くなるだけですよ。」
「・・・うん。」
ガーネとトラは、そのまま迷宮のドアの中へと消えて行きました。

「行っちゃたわね。」ノミチさんは、誰に言うともなしにそう言いました。
「そうだな。」ナミキさんは、言葉少なに返事をしました。
ノミチさんは、ふとナミキさんの顔をのぞきこみました。
「何、ナミキ。あんた、泣いてんの。」
ノミチさんは、驚いたように言いました。
「な、何言ってんだよ。泣いてなんかいるわけ無いじゃないか。これはただ、目に」
「目にゴミが入っただけだって言いたいの？
ナミキ。あんた、可愛い所あるじゃない。」
ノミチさんはそう言って、ナミキさんの背中をたたきました。
「あっ、痛っ。貴様、何しやがるんだ。そんなんじゃないって言っているだろ。」
ナミキさんは、ノミチさんに抗議しました。
「まぁ、いいから、いいから。お姉さんが慰めてあげるわ。」
ノミチさんはそう言って、ナミキさんの頭をつかまえ、いい子いい子しました。

「こら、こらぁ。人の心をもてあそびやがって。」
ナミキさんは、本気で涙を流してしまいました。
これはいけないわね、とノミチさんも本気で、ナミキさんを慰めにかかりました。

しばらくして、ナミキさんの気分が、落ち着いたようでした。
「じゃあ、そろそろ乾杯をしない？」ノミチさんは、そう提案しました。
「何のためにだよ。」ナミキさんが、尋ねました。
「もちろん、ガーネとトラのためよ。
あの人たちは、あちきたちと別れて、また新しい旅立ちの時を迎えたのよ
そのお別れと新しい旅立ちの門出を祝って、歓迎したいの。
それが、友達ってもんじゃない？」
ノミチさんのその言葉に、ナミキさんもうなずきました。
「それもそうだな。新しい旅立ちの時に、悲しがってばかりもいられないよな。
よーし。じゃあ、あいつらが自分たちの世界を、早く見つけられる事を願おうか。
それじゃあ、乾杯しょう。みんな、コップを持ったか？」
「あちきは持ったわ。」「我も持った。」「あ、はい。私も持ちました。」
「うん。俺も持った。じゃあ、いくぞ。
あいつらの新しい旅立ちを祝って。せーのー、」
「カンパーイ。」
４人が同時に叫んだ声が、天空の村に響き渡りました。

ガーネとトラは、迷宮へと戻って来ました。
「今回は、別れがとても辛かったですね。」「本当ね。」

ガーネとトラは、天空の村であった事を1つ1つ、思い出していました。
「ガーネ。今回も助けてくれて有難う。」トラはガーネにお礼を言いました。
「今回も、私の手柄とは言えませんね。
トラたちを助ける手段は、村長さんにアドバイスされた事をやっただけです。
それに、実際に穴から引き上げたのはガイムだったですよね。
私はそれを、現場で実際にやったに過ぎません。
つまるところ、私1人では、何も出来ませんでしたよ。それは事実です。」
ガーネはそう言って、苦笑しました。
「何だ、そうなの。感謝して損したかも。」トラは笑いながら、そう言いました。

「そう言えばガイムって、変わったライバだったわね。
どうして、あのライバの言葉だけ、あたしたちに判ったのかしら。
それに、どうしてあんなに早くガーネは乗り回す事が出来たのかしら。」
「さぁ、何故なんでしょうね。それは私にも判りません。
でも、ミヤビさんが言っていましたよね。
ライバの声を理解できたのは、私たちが迷宮の旅人だったからかもしれないって。
ひょっとしたら、全ての原因は私たちにあるのかもしれません。
だとしても、疑問は深まるばかりですね。
だって、私たち自身にも、まだ迷宮の旅人の事が良く判っていないのですから。」
「そうね。
その回答は、旅を続けて行く中で、見つけていくしかないんじゃないかしら。」

「それにしても、ついうっかりしてしまいました。ガイムに何の別れの挨拶もしていませんでしたね。済まない事をしました。」
ガーネは、後悔しているようでした。
「ああ、その事なら心配要らないと思うわ。あたしが、ガイムに話をしておいたもの。あたしたちは、迷宮に戻らなければいけないから、これでお別れよって。」
「そうだったんですか。それを聞いて、ホッとしました。そう言えば、トラはガイムのそばにいたんでしたね。それで、ガイムは、何と返事をしたのでしょうか？」
「いつもみたいに、口数少なくこう言っただけだったわ。「判った。」ってね。」
「そうですか。
私にはまだガイムの心が、今1つ理解する事が出来ませんでした。それがとても、心残りです。もう少し一緒にいたかったと思います。でも、それはそれとして、トラには感謝しなければなりませんね。よく、最後にガイムに声をかけて下さいました。
いや、本当に助かりました。有難うございました。」
ガーネは、トラにお礼の言葉を口にしました。
「どういたしまして。あたしはあなたの相方ですもの。」
トラはすました顔で、そう言いました。

トラは天空の村にいる間、心の中に隠していた事をガーネに打ち明けました。
「でもね。ガーネ。本当は迷宮のドアが現れた時、あたしホッとしたの。」
「えっ、それは何故ですか？」
「天空の村では、出会う人たちに言われたわ。
あたしのような猫はいないって。

でもそれって、ここがあたしの世界じゃないって事の裏返しじゃない。
だから、すぐにでも迷宮に戻りたいなって思っていたの。
でも、あそこに地上の世界があると知ってちょっと期待したの。
ひょっとしたら、そこにはあたしのような猫がいるんじゃないかって。
でも、実際に行ってみたら、死の世界だったでしょ。
これが、あたしが帰るべき世界だなんて、絶対に信じたくなかったの。
あの光景を見た後は、迷宮のドアが現れるのをひたすら待っていたわ。
だから、迷宮のドアが現れた時には、あたしは心の底から安心したの。
とても嬉しかった。まだあたしの世界には、希望が持てると判ったからよ。」
「そうだったんですか。トラも苦悩していたんですね。
実は、私も服装や何かで、村人とはだいぶ違っていましたからね。
トラと同じ気持ちだったんですよ。
だから、迷宮のドアが現れた途端、複雑な思いでしたよ。
みんなと別れ難い思いも感じていたし、一方ホッとしたのも事実でしたからね。」
「そうか。ガーネも同じだったんだ。」トラは、嬉しそうにガーネを見ました。
「本当にいい人たちでしたね。トラ。
あの人たちへの感謝の意味も込めて、早く自分たちの世界を見つけましょうよ。」
「そうね。絶対に見つけるわ。」
ガーネとトラは、その思いを固く心に誓いました。

「じゃあ、そろそろ行きましょうか？」

「ええ、行きましょう。」
ガーネとトラは、果てしなく続く迷宮の道を、また歩き出しました。
第7話「天空の村にて」終わりだよ。（終）

第7話「天空の村にて」終わりだよ。（後書き）

今回のお話は、第７話「天空の村にて」の最終話です。
早いものですね。
この第７話「天空の村にて」第１話の初回掲載日は２０１１年６月７日です。
全９話で、約１か月ぐらいかかった事になります。
大体、週２回ぐらいで投稿をしました。
最初からお読み頂いた方は、おられるのでしょうか。
もし、おられるなら、心から感謝申し上げます。
相変わらず、拙い文書で、しかも誤字脱字などいろいろだったかと思います。
それでも、めげずに読んで下さった方がいるとしたら、頭が下がる思いです。
「天空の村にて」はこれで終わりですが、トラ・オブ・ラビリンスは続きます。
またいつか、別の世界へ、みなさんを連れて行く事が出来たらと思います。

ただ、新シリーズになる事や、それに加えて夏本番です。
ノートパソコンで入力しても、パソコンの暑さで、手に汗がびっしょり。
パソコンもベタベタになって来ます。
その上、汗もだらだらこぼれてきます。
クーラーはあるんですが、今年は節電ですよね。
電気量を１５％カットする場合、どうしてもエアコンを切らざるを得ません。
折角、去年暑過ぎて、購入したばかりなんですけどね。シクシク。
でも扇風機だけでは、苦しいです。

そこで、エアコンを２８度で使う事にしました。
２８度でも湿気は結構あるものですね。でもだいぶ楽になりました。
節電は、私には無理でした。
一番いいのは、夜間のＡＭ１：００～６：００の間で打ち込む事です。
もっと暑くなっても、昼間よりは多少なりとも、ましですから。
扇風機だけでも、なんとかなるかもしれません。
でも、そんな時間、眠くて仕方がありません。
結局、入力する機会が無くなって来ますね。従って、投稿も出来なくなります。
やはり、エアコンは付けたいと思います。
でも、夏は出来るだけ、入力は避けたいです。
いつ頃、投稿しやすくなるんでしょうね。やっぱり、秋でしょうか。

と言う事で、次回のシリーズは、予告の意味も含めて１回分のみだけ投稿します。
後は、涼しくなってからと言う事で、ご了承ください。
では皆様も、この暑い夏に、お身体を壊されないように願っております。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第8話「正と邪の女神。」最初ですね。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第8話「正と邪の女神。」最初ですね。のお話です。
この回では、魔女ルーディアと王女アイリスについてのお話です。
また、ガーネとトラの神殿ガルディの探検前のお話も書かれています。

第8話「正と邪の女神。」最初ですね。

第8話「正と邪の女神。」最初ですね。

とある国の国王の使者が馬で一路、王国グライアを目指していました。

ある森のそばを通ると、その路上に黒衣の者がひざまずいておりました。

「一体、どうしたのですか？」使者は、その黒衣の者に尋ねました。

「大変申し訳にくいのですが、この先をお通しするわけには、参りません。

どうか、お引き返しのほどをよろしくお願いします。」

黒衣の者は、女性でした。

「私は、ある用事があって、先を急がねばならないのです。

残念ながら、ご希望には添えません。」

使者は、そのまま通り過ぎようとしました。

しかし、黒衣の者は、馬の手綱を押さえて、先に進ませませんでした。

「一体、何があったんですか？」使者は、もう一度尋ねました。

黒衣の者は、再びひざまずいてこう言いました。

「実は、私は王国グライアの国王の従者です。

実はあそこの森の中で、我が主（あるじ）はただ今、休息をしております。

そのため何か事が起きぬよう、こうして見張りをしているのです。」

それを聞いた使者は、「それは、好都合。」と言って、馬から降りました。

そして、黒衣の者に、自分が自国の国王からの使者である事を話しました。

「実はこの書状を一刻も早く、王国グライアの王に手渡したいのです。

どうか、お目通りがかないませんでしょうか。」使者は、そう尋ねました。
黒衣の者は、しばらく考え込んでいましたが、やがて顔を上げました。
「本来ならば許されぬ事ではありますが、急用とあらばやむを得ぬでしょう。
但し念のため武器は一切、私の方で預からせて頂きます。
それで構わないのであればお通ししますが、如何でしょう。」
「判りました。」
使者はそう言って、所持している武器を全て、黒衣の者に手渡しました。
「では、こちらへどうぞ。私がご案内します。」
黒衣の者はそう言って、使者を森の中へ連れて行きました。

ここは、王国グライアの神殿ガルディ。
その謁見の間(ま)において王のグライアは、使者と対面していました。
その使者は、他国の王からの手紙を託されていました。
その手紙を読んだ王のグライアは、その使者にこう伝えました。
「そなたの国の王が民を思うその気持ちは、もっともである。
悪霊や魔物などの災いより、そなたの国を救うには、もはや神剣のみ。
幸い、我が王家には、先祖代々より受け継がれてきた神剣が、2本ある。
そのうちの1本をお貸し申そう。
これを持って直ちに自国へ戻り、悪霊どもを打ち払うがよかろう。」
王はそう言って、2本の神剣のうちの1本、ザイドをその使者に手渡しました。
「ははぁ。」使者は、頭を下げ、その神剣を両手で押し頂きました。
その後、使者は王に対し、こう願い出ました。

「このような大切な神剣をお貸し下さり、お礼の申し上げようもございません。
我らは直ちに、自国に帰還する由にございます。
しかし、それにあたって、今1つ欲しき物がございます。」
「何じゃ。何なりと申してみるがよかろう。」
「さすれば、わらわが欲しいのは、」
使者はそう言って、王の元に駆け足で、近付きました。
先ほどまでの使者の姿から、黒衣をまとった女人の姿へと変貌していました。
そして、やわら刀を鞘から引き抜きました。
「そなたの命じゃ。」
使者はそう言って、白く光り輝く神剣の刃を王の心の臓に突き刺したのでした。
王の鮮血があたりに飛び散りました。
使者はその刃を、王からゆっくりと引き抜きました。
神剣の刃は先ほどまでとは違い、赤く光り輝いていました。
「これぞ、まさしく邪剣ぞ。」使者は、そうつぶやきました。
「ウッ。」王グライアは床に倒れ伏し、そのまま息絶えてしまいました。
「王!」倒れた王の元に、従者たちが集まって来ました。
また王を殺害した使者は、更に多くの従者に囲まれてしまいました。
「我らが王の仇じゃ。その者を斬り殺せ。」
号令と共に、従者が一斉に剣を抜き、使者に躍りかかろうとしました。
その時、使者は、自分が手にしていた神剣を1振りしたのでした。
たった1振り。その1振りで従者のほとんどが切り裂かれ、死んでしまいました。

「ほお。さすがよのう、この邪剣の威力は。ますます気に入ったわい。」

使者はそう言って、歩き出しました。
そして剣を構えながらも、怯えて動けない従者たちに向かってこう言いました。
「わらわは、魔女ルーディア。
わらわが欲したのは、神剣にあらず。邪剣だったのじゃ。
この王国に代々伝わる神剣に、現王の命を注ぐ事によって、邪剣は生まれる。
わらわが手にしている剣が、赤く光輝いている事こそ、まさに邪剣の証拠じゃ。
民を救うのでなく、民を支配し、世界を支配するための剣が今、生まれたのじゃ。
ハハハハハ、アッハハハハハハ。」
魔女はひとしきり高笑いをした後、更に言葉を続けました。
「さてと、わらわにはまだやる事がある。
お前たち、斬り殺されたく無くば、そこを退け。」
その言葉を聞いた途端、生き残っている全ての者たちが魔女に襲いかかりました。
「止むをえまい。」
魔女は彼らを1振りで、せん滅しました。
そして王座を振り返り、死んだ国王のグライアに対し、こう言いました。
「さすが、グライアの王よ。
よく、これだけ忠義の者を集めたのう。その事だけは敬意に値しよう。」
魔女はそう言って、静かに部屋を出て行きました。

魔女が向かったのは神殿の奥にある、女神の間でした。
この女神の間には、王国グライアの金銀財宝が保管されていました。
また王国の守護神として、2体の女神像がそこにはありました。
1体は、力を司る正神ザイド。

もう1体は、正義と愛を司る正神ラムダでした。
魔女は、正神ザイドの石像の前に立ちました。
「わらわはこの時を待っていた。この時をひたすら待ちわびていた。」
魔女は感慨深げに、言葉を紡ぎました。
「わらわが持っているのは、確かに邪剣。
されど、わらわ自身は、一介の魔女に過ぎぬ。
この邪剣を振るうに値する力は、今のわらわには無い。
それ故、わらわは自らの命を断ち、女神ザイドに捧げる。
女神がわらわの命とこの邪剣を受け入れた時、邪神ルーディアが誕生する。
逆に、受け入れ適わずの暁には、そのまま躯(むくろ)となるであろう。
だが魔女と言えども、いずれ死は訪れる。
ならば今、その命をかけるに値する時が来ているのだ。
ためらう必要など、どこにもあるまい。」
魔女ルーディアは邪剣の刃の先を、自分に向けました。
そして何のためらいも無く、心の臓に刃を突き立てたのでした。
「ウウッ。」
薄れゆく意識の中で、魔女は最後の力を絞って、石像に手を当てました。
「我を導きたまえ。」
魔女は石像に手を置いたまま、ガクッと膝を崩しました。
その時、石像本体が光輝きました。
その光はどんどん大きくなり、魔女の身体ごと包んでしまいました。
光が消えた時、女神である正神ザイドの石像に変化が起こりました。
石像が新しいものに変わり、その顔は魔女ルーディアのものになっていたのです。
しばらくして、その石像が人の姿に変身しました。
石像と同じ形の鎧をまとったその者の手には、邪剣が握られていま

した。
そしてその顔は、まさしく魔女ルーディアの顔でした。
その者は、不思議そうにあたりを見回しました。
そして、手に持った邪剣を眺め、それに映っている自分の顔や姿を見ました。
「ハハハハハ。アッハハハハハ。
やったぞ、わらわは。わらわはついに、邪神になったぞ。
ハハハハハ。アッハハハハハ。」
ルーディアは高笑いをしました。
邪神ルーディアが今、誕生したのでした。

その頃、王の謁見の間に、王女アイリスが駆けつけて来ました。
何か、嫌な胸騒ぎを覚えていたからでした。
「こ、これは。」
その部屋は、血の海と化していました。
死者をかき分け王座まで来た時、アイリスは立ちすくんでしまいました。
国王グライアの身体が、大量の血で覆われていたのでした。
「父上、父上。」アイリスは懸命に父にすがりました。
ですがその時、国王グライアは既に息を引き取っていました。

「誰がこんな事を。」アイリスは1人立ち上がり、誰ともなしにそう言いました。
「おひい様。」かすかな声が聞こえました。
王の直属の従者の声でした。アイリスは慌ててその者に駆け寄りました。
アイリスが片膝をついて、その者を抱きかかえました。
その従者は、アイリスもよく見知っている顔でした。
「どうか、しっかりして下さい。一体、何があったのです。」

従者は、息も絶え絶えに、謁見の間で起きた事をアイリスに伝えました。
そして話し終わると安心したように、息を引き取りました。
「魔女ルーディアよ。よくも父や従者たちの命を・・・。
絶対に許すわけには行きません。」
王女アイリスは、謁見の間を飛び出しました。
そして2本の神剣が置かれていた、剣(つるぎ)の間に入りました。
しかし今、そこにあるのは正剣ラムダただ1本でした。
アイリスは、鎧と正剣を身に付け、急いで女神の間に向かいました。

アイリスが女神の間に向かう途中、その進路に人の姿がありました。
「一体、あなたは何者です?ここで何をしているのです。」
アイリスは問い詰めました。
「ほう、まだ生き残っている従者がいたのか。」
その者は、ゆっくりとアイリスに向かって行きました。
近づくにつれて、アイリスにははっきりと判りました。
その者がまとっている鎧が、女神ザイドのものである事。
その腰に付けている剣が、神剣ザイドである事。
これらの事を確認した王女アイリスは、名乗りをあげました。
「私は、王国グライアの王女、アイリス。
魔女ルーディア。よくも父や従者たちの命を奪ったな。
絶対に許せません。覚悟なさい。」
アイリスは、正剣ラムダを手に取って身構えました。
「何か、勘違いしているようだな。
わらわは、魔女などでは無い。
わらわは、邪神ルーディアなるぞ。
いくら、お前がわらわにたてつこうとも、人であるお前が敵う筈もあるまい。
大人しく、床(とこ)にひざまずけ。
わらわのしもべになると言うのなら、生かしておいてやってもよい

ぞ。
わらわは、慈悲深い女神だからの。ハハハハハ。アッハハハハ。」
邪神ルーディアは、高笑いをしました。
しかし、次の瞬間その笑いは収まりました。
アイリスが目にも見えない早技で、剣を振るったからでした。
その刃の刃先が、ルーディアの頬をかすめました。
そしてその肌に、血の跡がうっすらと残っていました。
「邪神ルーディア。
神であったとしても、油断すれば待っているのは封印という名の牢獄ですよ。」
王女アイリスは、静かにそう言いました。

「おのれ、王女アイリス。この邪剣で、お前の体を切り刻んでくれるわ。」
「お黙りなさい。邪神ルーディア。
王である父上をたぶらかし、我が王家に受け継がれてきた神剣を、お前は奪った。
このまま生かしておいては、どんな災いをもたらすか計り知れません。
王家にあるもう1本のこの神剣で、お前の野望を必ず打ち砕いて見せます。」
邪神ルーディアの持つ神剣ザイド。
正神ザイドの持つ正剣として、この世に生まれた神剣でした。
それが今や、邪神となったルーディアの力を引き出す邪剣となってしまいました。
王女アイリスの持つ神剣ラムダ。
正神ラムダの持つ正剣として、この世に生まれた神剣でした。
神剣ザイドと共に、王国グライアを守って来ました。
それが今や、邪剣となったザイドに、敵対出来る唯一の剣となってしまいました。

その2本の神剣が、火花を散らしました。
最初は、互角に打ち合っていました。
ですが王女アイリスは、若いながら、優れた剣の使い手として、評判でした。
同じ神剣同士の戦いのため、次第に邪神は、追い詰められていきました。
「今だ。」王女は、隙をついて邪神に斬りつけました。
ですが、それは邪神の誘いのために作った隙でした。
王女の剣は、紙1枚の差でかわされ、邪神との間隔が広がってしまいました。
邪神は、左手のみで剣を持ち、右手を王女の前に差し出しました。
「炎(えん)。」
邪神ルーディアより、業火の炎が、王女に注がれました。
「ああっ。」
炎を体や顔に浴びた王女は、床に転がってしまいました。
「ふん。わらわが、元は魔女である事を忘れたか。
特にわらわは炎を操る事を、得意とする魔女での。
邪神となった今のわらわは、使える術の全てが強化されておる。
こうなっては、もう手を出す事も出来まい。
大人しくこの刃にかかって、死ぬがよかろう。」
邪神はそう言って、王女に斬りかかろうとしました。
王女は間一髪でその刃を、自分の剣で払いました。
思わず邪神が退いた隙に、王女は何とか立ち上がりました。
しかし身にまとっている鎧は、濃く焦げ付いていました。
そして王女の顔には火傷の跡が出来て、左目は焼かれていました。
「ほう、片目が潰れたか。
いくら優れた戦士であろうと、果たしてその状態で満足に戦えるのかな。」
王女は、邪神に斬りかかりました。
ですが、片目を失った事により、方向感覚がずれてしまっていまし

た。
そのため、刃の切っ先が邪神に届く事はありませんでした。
邪神は、その正剣を自分が手にしている邪剣で打ち払いました。
王女は、正剣をぐっと握り締め、何とか手放すのをこらえました。
ですがその反動でバランスを崩し、床に倒れてしまいました。
「王女、覚悟。」邪神は、猛然と王女に斬りかかりました。
「これまでか。」王女は自らの死を覚悟しました。
ですが邪神の剣は、王女に届く事が出来ませんでした。
「放せ、放さぬか。」邪神は大声を上げていました。
王女は急いで立ち上がり、邪神を見ました。
そこには邪神の両腕を、背後から押さえている戦士の姿がありました。
「カミーラ！」それは王女の許婚の、他国の王子でした。
「遅れて済まない。だが何とか間に合ったようだな。」
王子はそう言って、王女に微笑みました。
王女は剣を持ち直し、邪神と対峙しました。
その瞬間、邪神は高笑いをしました。
「ハハハハハ。アッハハハハハ。」
その笑い声は、神殿中に鳴り響きました。
「その程度で、神となったわらわを抑えられると思っているのか？」
そう言った後、邪神は目を閉じました。
「炎。」邪神はその身体全体を炎と化しました。
「ウワァー。」王子は、その全身が炎に包まれました。
王子は、苦しみもだえました。
しかし、邪神から決して離れる事はありませんでした。
「何故じゃ。邪神となったわらわの術を何故、耐える事が出来るのじゃ。」
不審に思った邪神は、背中越しに王子を見ました。
「なるほど。そなたのまとっているその鎧は神具なのじゃな。
道理で、持ちこたえておるわけじゃ。

わらわが以前のように魔女ならば、容易く防御したであろう。
だが、今のわらわは邪神なるぞ。いつまで耐えきれるかのう。」
邪神はうすら笑いを浮かべました。
「カミーラ！」王女は思わず、声をかけました。
それに対し、王子はうなずいた後、王女に語りかけました。
「我が愛しのアイリス。
あなたのその正剣こそ、この邪神を封印できる唯一無二の存在。
さぁ、アイリス。このまま私ごとこの邪神をその正剣で貫きなさい。
」
「何を言うの、カミーラ。そんな事が出来るわけ無いじゃない。」
王女は泣き叫びました。
「戯言（ざれごと）を抜かしおって。炎。」
再び邪神は業火の炎を、全身にまといました。
王子は激しい炎に再び、包まれました。
邪神に対峙しながら、動く事が出来ない王女の耳に、王子の声が聞こえました。
「アイリス。もう私は耐えられない。
お願いだ、アイリス。その正剣で邪神を封印してくれ。
私は、あなたを、あなたが生まれたこの国を守りたいんだ。
頼む。アイリス。私の死を無駄にしないでくれ。」
アイリスは、カミーラの目が閉じようとしているのを見ました。
「カミーラ！」
アイリスは、無我夢中で、その正剣の刃を邪神に突き刺しました。
「あーあっ。」邪神はもだえながらも、狂気の目を見開きました。
王子の死により、邪神は両腕の戒めを解かれていました。
邪神は、自分を突き刺している王女を、ものすごい形相でにらみつけました。
そして、自由になった両腕で己の邪剣を握り締め、王女に深く斬りつけました。
王女は、よろよろと邪神の元を離れ、床に膝をつきました。

邪神は、正剣に突き刺されたままの状態で、ふらふらと動いていました。
その時自分の背後で倒れている、カミーラの姿が目に映りました。
邪神は、急いでカミーラから魂を取り出そうとしました。
新しい魂さえ手に入れば、封印を免れるからでした。
邪神は、右手をカミーラの身体に触れました。
その途端、もうそれが手遅れである事を悟りました。
「駄目じゃ。もう既に事切れておる。これではもう、役には立たぬ。」
そう言って、立ち上がろうとしました。
ですが、ふと思い返して、再びカミーラの元で膝をつきました。
邪神はカミーラの頭を撫でながら、こう言いました。
「これなら、まだ使えるかも知れぬな。」
その後、カミーラの頭から、髪の毛の一本を指で押さえました。
その瞬間、その髪の毛は緑色に輝き出しました。
そして、それは邪神が頭からその髪の毛を抜くまでの間、続きました。
「一体、何を。」王女は痛みに耐えながら叫びました。
邪神はその声を聞いて、王女の方を振り向きました。
邪神の手には、もうカミーラの髪の毛はありませんでした。
邪神は、王女に向ってこう言いました。
「王女アイリスよ。これで勝ったと思うな。
邪神となったわらわが、死ぬ事はもはや無いのだ。
しばしの間、この神殿に封印される事にはなるだろう。
だが、いつの日か必ずや人の魂をこの身体に宿させ、邪神として復活してみせる。
そして今度こそ、この世界に君臨して見せようぞ。
惜しむらくは、その時をお前に見せつけられないのが、残念。
ハハハハハ。アッハハハハハ。」

邪神ルーディアは高笑いの中、手にした邪剣と共に幻のように消えていきました。
「カタン。」邪神が去ったその後に、王女の正剣が残っていました。

王女は、よろめきながらも、立ち上がりました。
「おひい様ぁ。」２人の従者が王女の元に駆け寄りました。
王女は許嫁であった、カミーラの元へ歩いて行きました。
「カミーラ！！」王女は号泣しながら、カミーラの身体を抱きました。
ですが、カミーラが息を吹き返す事はありませんでした。
王女は、カミーラを寝かせた後、２人の従者にこう言いました。
「カミーラは、王国グライアのために、邪神と戦った英雄です。
どうか、手厚く葬って下さい。」
「判りました。おひい様。」２人の従者はうなずいて、そう答えました。

王女は、再び立ち上がり、落ちている正剣を拾い上げました。
しかし、その足取りはふらふらしていました。
「しっかりして下さい。おひい様。」
２人の従者に支えられながら、王女はこう言いました。
「もう、時間がありません。私を女神のの間へ、連れて行って下さい。」
そう言って、残り少ない僅かな命の時を、ひたすら歩きました。
やがて、女神の間に入りました。
その中央には、王家に受け継がれた金銀財宝が眠る、隠し部屋がありました。
その隠し部屋の左右に、２人の女神の石像がありました。
その女神は２人共、鎧を身に着けた武闘神でした。
右は、見慣れた古い石像のままでした。
ですが、左は今、出来上がったばかりのように新しい石像になって

いました。
王女は、その石像の顔を見ました。
「魔女ルーディア。いや、邪神ルーディアよ。
やはり、ここに封印されていたのですね。」
王女は誰ともなしにそう言いました。
王女は、従者たちの支えを払い、自らの足で右の石像へと歩き出しました。
それは、正神ラムダの石像でした。
しばらくその石像を眺めた後、従者たちの方を振り向きました。
「あなたたちに、伝えておかなければならない事があります。
いつの日か邪神ルーディアは必ず蘇り、世界を恐怖と混乱に陥れるでしょう。
私はその日が来ても、邪神を抑えられるよう、自らこの身を捧げるつもりです。
あなたたちは、この事を私の弟に伝えて下さい。
そして私がよりよい統治をして欲しいと願っていた事も、伝えて欲しいのです。」
「そんな、おひい様。」
2人の従者が叫ぶ声に、うなずいてこう言いました。
「このままでも、あと僅かで、私の命は尽きてしまうでしょう。
それならば、私はこの国やこの世界のために、この身を捧げたいと思います。
それが私のために命を落としたカミーラに報いる、ただ1つの道です。」
「おひい様。」
泣きじゃくる従者の肩に、王女は手を置きました。
「では、後はよろしく頼みます。」
王女はそう言って、正神ラムダの石像に向って歩いて行きました。
その王女の手には、かつて正神ラムダが所有していた正剣が握られていました。

次の瞬間、正神ラムダの石像自身が、白く光り輝きました。
そして、その光は次第に大きくなっていきました。
すると、それに呼応するかのように、正剣ラムダの光も大きくなっていきました。
２つの光は１つの大きな光となって、王女の身体を包み込んだのでした。
２人の従者は、その強く輝く大きな光を正視出来ず、思わず目を閉じました。
やがて、その光は消えました。
２人の従者が目を開けた時には、既に王女の姿はありませんでした。
しかしそこには、今までとは異なる新しい石像が立っていました。
その顔は、まさしく王女アイリスのものでした。
「おひい様。あなたは正神となられたのですね。」
２人の従者は、その石像の下にひざまずき、大声を上げて涙を流しました。

こうして王女は、正神アイリスとして生まれ変わりました。
そしていずれ訪れる邪神復活に備え、石像の姿のまま長い眠りについたのでした。

「この後、この国はアイリスの弟が、統治する事になりました。
弟は正神となった姉の意志をついで、平和と繁栄の道を歩んで行きました。」
ガリガリボリボリ。
「その数百年後、王国は天変地異に見舞われ、疫病もまん延しました。
そのため王国の全ての民が、生きる場所を求めて、その地を離れて行きました。」
ボリボリガリガリ。

「王国は、荒れ狂う砂嵐の中で、廃墟と化していきました。
その中で、神殿ガルディは、人知れずにその姿を消していました。」
ガリガリボリボリ。
「ですが２００年に１度、その神殿が姿を現すと言う噂が流れ始めました。」
ボリボリガリガリ。
「また今なお、莫大な金銀財宝が眠っているとの噂もささやかれています。」
ガリガリボリボリ。
ボリボリガリガリ。
「この噂を嗅ぎつけ、その財宝を手に入れようとする者が多くなりました。」
ボリボリガリガリ。
ガリガリボリボリ。
「しかし未だかつて、それを持ち帰ったという記録は残されていません。」
ガリガリボリボリ。
ボリボリガリガリ。
ガリガリボリボリ。
「あら、袋の中、もう空っぽよ。他には無いの？」
「いや、その奥の方にあるはずじゃよ。」
「そう？じゃあ、探してみるわ。」
「そのため、ただの噂では無いのかとも、・・・。
てぇー、少しうるさいんじゃありません？
あの神殿の伝説を知りたいって言うから、話をしているんですよ。
それなのに何ですか、さっきからガリガリボリボリって。」
「何ですかって言われても。おせんべいだし。かじれば音は鳴ると思うの。」
「そうじゃよ。そんな事も判らんとは情けないのぅ。」
「まぁ、ドンマイですよ。レミアさん。」

「誰も、おせんべいの事を聞きたいわけじゃなーい！！」

いけない。また取り乱してしまったわ。乙女として、はしたない事を。

ええと、私は、レミア。

今、私は、私のおじいさんであるゾア博士の元で、伝説の神殿を探しています。

と言っても、おじいさんは科学者で、主に戦闘車両の開発にいそしんでいます。

私は、考古学を専攻している学生です。

きっかけはおじいさんから、伝説の神殿の話を聞かされた事から始まります。

その神殿は、２００年に1度、この地上に現れるとの事でした。

私はおじいさんから、伝説の神殿の事が書かれてある古文書を渡されました。

その内容は、考古学を学んでいる私にとって、興味深いものでした。

それで、この神殿探しに参加したと言うわけなのです。

ですがおじいさんの方は、その神殿に眠る財宝が目当てのようでした。

それさえあれば思う存分、好きな研究に打ち込めるとあって、真剣でした。

私たちは、特殊に改造した戦闘車両で、この地まで来ました。

おじいさんの考えが正しければこの1両日中に、幻の神殿が現れるそうです。

私たちはそれまで、この車両に待機していたのでした。

ある日、思いがけない事が起こりました。

ある砂嵐の強い日、その中から突如として、人影が現れたのでした。

正確に言えば、人1人と猫1匹でした。

奇妙な事に人の方は、顔に鉄の仮面を付けていました。

また猫の方も極端に小さく、その上、なんと人語が喋れるのでした。

人の方はガーネ、猫の方はトラと言う名前でした。
ガーネとトラは、私たちを手伝うので、車両に泊めて欲しいと言いました。
私は、とても怪しすぎるので、反対してみました。
ですが、おじいさんは面白がっていました。
それに人手はあった方がいいと言う事で、結局私が折れることにしました。
そして現在、私が大事な話をしている最中に、おせんべいをかじっているのです。

「あったわよ。」
トラとか言う名前の猫が、喜んで新しいおせんべい袋を口にくわえて来ました。
「それは駄目よ。私が自分の分として、購入したものだから。」
私は、丁寧に説明しました。
トラは私の言葉を聞いて、一瞬硬直していました。
それから口にくわえていたせんべい袋を、ポトッと落としました。
その表情は茫然としていて、悲しみに包まれていました。
そしていつしか涙も、頬をつたってこぼれていました。
「何も、そんなにがっかりしなくても。」
その猫の落ち込みように、私は慌ててしまいました。
「鬼。」「悪魔。」祖父とガーネの声が頭の中でぐるぐると回っていました。
あれは私のです。絶対に食べさせません。
私は、心に固く誓っていました。
しかし再びトラの顔を見て、その悲しそうな表情に心が折れてしまいました。
「いいわよ、いいわよ。好きなだけお食べなさい。」
トラにそう言ってあげると、トラは泣きじゃくりながら、こう言いました。

「レミアお姉ぢゃん、ぶぁりがとう。」
「見て下さい。なんて感動的な光景なんでしょうか。」
「おお、孫が真人間なりおった。それでこそ、わしの孫じゃ。」
ガーネと祖父は、何故か手を取り合って涙を流していました。
私は正直付き合いきれない、と思いました。
ですが、おせんべいは食べたかったので、袋から菓子皿に盛りました。
「頂きます。」みんなで声を合わせて、おやつを食べる挨拶をしました。

「ところで、おじいさん。神殿は、何時頃開くのでしょうね。」
私は、おじいさんに尋ねました。
「そうじゃな。あと数時間といったところか。
もう少しの辛抱じゃよ。それでバラ色の日々が約束されるのじゃ。」
おじいさんは、もう財宝を手にしたような口ぶりでした。
時々暇を見ては、あれを買おうか、それともこれを買おうか。
ノートと電卓と武器カタログを交互に、見ていました。
全くの取らぬたぬきの皮算用です。あたしは身内ながらさすがに呆れました。
「レミア姉ちゃん。レミア姉ちゃん。」トラちゃんが声をかけて来ました。
この頃になると、喋る猫にも慣れてきていました。
その上、「レミアお姉ちゃん」と甘えてくるのです。
何だか、私はお姉さんになった気分になりました。
良く見れば、可愛い子猫ちゃんです。私はだんだん好きになって行きました。
「何。トラちゃん。」
「ねぇ、レミアお姉ちゃん。何やっているの？」
「ああ、これ。
今度街の本屋さんで、考古学の貴重な資料となる古本の即売会があ

るのよ。
滅多に出ないレアものも、多数出品されるというからチェックしているわけ。」
「じゃがのう。その手の本は高価なものばかりじゃ。どうやって、購入するつもりかの。」
いつの間にか、おじいさんも絡んで来ました。
「どうやってって・・・。
だって、この神殿巡りで、いっぱい財宝が手に入るんでしょう？だったら、それを一部売り払って、買えばいいじゃないの。」
私は、至極もっともな意見を述べたつもりでした。
ですがそんな私に、聞き捨てならない言葉が聞こえて来ました。
「そうかのう。そう言うのを取らぬたぬきの皮算用とかいうんじゃなかろうか。」
そう言いながら、おじいさんは私の元から遠のいて行きました。
おじいさんはガーネの所に行って、何やら話をしていました。
その会話の中で、「あんな孫に育てた覚えは・・・。」などと口走っていました。
私には、何を言っているのかさっぱり判りませんでした。
それなのにトラちゃんは、微笑んでこう言いました。
「おじいちゃんとお姉ちゃんって、良く似ているね。」
私は驚きのあまり、声を出す事が出来ませんでした。
トラちゃんの言葉は、私にはとても心外でした。

「ところで、確認しておきたい事があるのですが。」ガーネは私に尋ねました。
「何でしょうか？」
「先ほど、神殿が消えたって言ってましたよね。
その神殿が２００年に1度、神殿が現れるとも言ったと思います。
何故、それが判ったのでしょうか？」
「ああ、その事ですか。」

私はてっきり、おせんべいを食べていて聞いていないんだろうと思っていました。
ですからはっきり言って、この質問はとても嬉しかったのです。
「今回の神殿探しの情報の出所は、全ておじいさんなんです。
おじいさんから聞いた話と、渡された何冊かの古文書から始まった事なんです。
私の先ほどの話も、これらを元に研究して出した成果に過ぎません。
だからこれから言う事も、それがベースとなっていると解釈して下さい。」
「判りました。で、どうして判ったんでしょうか？」
「まず先ほど、私が話した内容なんですけどね。
あれは王女に最後に付き添っていた2人の従者の手で、書かれたらしいんです。
それ以後は、その王国の複数の人の手で、記録として加筆されています。
また王国を離れた民の中には、隣の王国に移住した人たちもいたんです。
その人たちが時折、王国の状況を観察しては記録に留めていたと言うわけです。
それはその人たちの子孫になっても、続けられて行ったという事です。
彼らの残してくれたこれらの記録から、判ったというわけなんです。」
「なるほど、そうでしたか。あと、もう1つ質問があります。
この神殿の事と、先ほどの正と邪の女神の話しとはどんな関係があるんですか？」
「神殿が姿を消したのは、正神アイリスによるものだという事です。
人がいなくなった事で、神殿が無防備になってしまいました。
もし、誰かが女神の間まで入りこんだら、その魂を邪神が狙うのは、必至です。

そして、邪神は容易く、己を復活させてしまうでしょう。
正神アイリスは、その事を恐れたのです。
だから、神殿を人前から消させたのです。
ですが、２００年に１度、正神の力は弱まるらしいのです。
以前は、正神が２人であったため、何の問題も起きなかったそうです。
ですが片方が邪神になった事で、その力の行使に空白の期間が出来たのです。
その結果、その２００年に１度、姿を現さざるを得なかったという事です。
正神の力の空白期間は、数日間続きます。
この神殿の事は、既に人の噂に上っていました。
だからその期間中に、財宝目当てに神殿に行く人が、現れ始めたのです。」
「ですが、誰もその財宝を、持ち帰った人はいないんですよね。
数千年前からなら、何回か神殿に人が入ったんじゃないでしょうか。
それなのに、何故なんでしょうね。」
「それは多分、神殿内にいる悪霊や魔物が原因だと思われます。」
「それは、またどうして。」
「当時この王国やその周辺の国々は、悪霊や魔物がはびこっていました。
そして、これらが民を苦しめていたのだそうです。
そのため正神の石像が放つ力や正剣が、これらを封じてきたのでした。
ところがその正神の力が弱まった事で、これらの悪霊たちがまた出てきたのです。
これらは人の魂を喰らう事で、自分の力をより強く出来ると言われています。
現にこれらに命を奪われて、神殿から帰れなくなった者も多くいると言う事です。

これら悪霊や魔物によって、女神の間まで行く事が出来ないのです。」

「でも、それは正神アイリスにとっては、好都合なのでしょうね。人は何人か犠牲になるにしても、邪神が蘇る事は防げるのですから。」

「まぁ、正神としては、複雑なんじゃないでしょうか。数日間でも、自分の力が弱まったせいで、人の命が無くなるのですから。」

私は話をしながら、だんだん嬉しくなってきました。私の研究の成果をこんなに、熱心に聴いてくれる人は初めてだからでした。

「そうかも知れませんね。でもそれなら、私たちも女神の間までたどり着けないんじゃないんでしょうか。」

「そうね。あたしも悪霊や魔物が相手となると、ちょっと気が引けるわ。」

トラも、不安そうに言いました。

「そこで、わしの出番となるわけじゃよ。」

いつの間にか、おじいさんが私の横に座っていました。

「あの、まだいろいろとお話しておきたい事が・・・。」

「いや、ここからは多分、わしの専門領域じゃ。わしが話そう。」

おじいさんは、自分の孫のささやかな楽しみを奪おうとしていました。

「ですが・・・。」少しばかり抵抗をしてはみました。

が、話の主導権はおじいさんに奪われてしまいました。シクシク。

「それでじゃな。この試作品の戦闘車両レイグルを使う事にしたのじゃ。

これはまだ、装備している各種機器のテストが終わっておらん。

それを試す意味でも、この神殿探しに使おうと言うわけなのじゃ。

聞けば悪霊や魔物などと言うのは、太陽の光や水、そして火などに弱いと言う。
つまり人が生きるのに、必要不可欠なものがその対策として有効らしい。
じゃからの。今回はそれらを考慮した装備をほどこしたのじゃ。
また、レーザービーム砲、マシンガン砲、ロボットアームなどの装備もある。
移動する足にしても、いろいろじゃ。
車両、キャタピラ、ホバークラフト、スクリューなどがある。
平地、急な坂道やガタガタ道、そして水上や水中なども移動が可能なのじゃ。
空すら1分程度なら飛べるのじゃ。
じゃが何といっても、その特筆すべきは、その馬力と装甲の厚さじゃ。
古代の遺跡などどんな建物でも、簡単にぶっ壊して素通り出来る力があるのじゃ。
これで、一気に女神の間まで、行こうと思っておる。」
「素晴らしい。いやさすがです。
探検と言うのはこれまで1歩1歩、苦労しながら先へと進んで言ったものです。
もはや、そんな時代は終わったんですね。
今は科学力にものを言わせて、強引に目的地まで、行ってしまうんですね。
やぁ、すごい。すごい。」
ガーネはそう言って、トラちゃんと拍手をしました。
トラちゃんは、器用に前足を使って拍手をしていました。
「いやあ、科学力と言っても、結局は金と力を使っての事じゃがの。」
おじいさんは、ガーネたちの拍手に浮かれて、つい本音を出してしまいました。

「それに、この古文書を解析した、レミアお姉ちゃんも偉い。」
トラちゃんはそう言って、ガーネと一緒に、私にも拍手を送っていました。
「いやあ、私も、先輩に言われた通りに書き写しただけだから。」
私も、つい照れて、本当のことを暴露してしまいました。
「それでも、2人共すごい。」拍手は更に続きました。
「レミアよ。」「おじいさん。」
人から、自分たちの研究成果を認められるのは、大変嬉しいものです。
私とおじいさんは、手を取り合って、喜びを分かち合いました。
「有難う、ガーネ。そしてトラちゃん。」
私とおじいさんは、心の底から、感謝しました。
私たちの、仲間としての結束は強まりました。

やがて予定していた時刻がついに来ました。
私を含め、全員が窓の外の景色を見つめていました。
砂嵐が静まりかけている、その景色には変化が起きていました。
それまで、何にも無かった王国の跡地。
そこに、ぼんやりと建物の姿が浮かび上がってきたのでした。

第8話「正と邪の女神。」最初ですね。（終）

第8話「正と邪の女神。」最初ですね。（後書き）

今回のお話は、第8話「正と邪の女神。」の第1話です。
いよいよ、新シリーズ開始です。
と言いたいところですが前回の後書きで述べた様に、投稿はこの1回分だけです。
後は、涼しくなってからと言う事で、ご了承ください。
では皆様も、この暑い夏に、お身体を壊されないように願っております。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第8話「正と邪の女神。」2つめですね。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第8話「正と邪の女神。」2つめですね。のお話です。
この回では、祭壇の間で、魔物と戦います。

第8話「正と邪の女神。」2つめですね。

第8話「正と邪の女神。」2つめですね。

神殿ガルディが私たちの目の前に現れたのは、それからまもなくでした。

私たちは、探知機でそれが実在しているのを確認しました。

そしてすぐさま、戦闘用車両レイグルの乗り込んだのです。。

ものの10分も経たないうちに、レイグルは走り始めました。

そしてあっという間に、神殿の門の前に到着しました。

「では、これから神殿へ乗り込むぞ。準備は出来ておるかの。」

おじいさんは、運転席から振り向いた後、私たちに尋ねました。

私たちは、シートベルトがきちんと締まっているかどうかを確認しました。

戦闘用車両でもあり、強い材質で作られた物だという事でした。

私は、これから起きる事を考えて、少し強めに締めて置きました。

しかし、ちょっと走っただけで、すぐに普通の締め具合に戻しました。

お腹に巻いた部分が、ちょっと苦しかったからでした。

誤解の無いように言って置きますが、私はそれほど太ってはいません。

先ほどからのおやつの食べすぎと、シートベルトの締めすぎによるものです。

ここを間違えて解釈されては、私のプライドに関わります。

なので念のため、ご報告をしておきます。

話がそれてしまったようです。本題に戻りましょう。

「私は大丈夫ですよ。」「あたしも。」

ガーネとトラが次々と声をあげました。

トラちゃんのシートベルトは、ガーネが固定したようでした。

大きいシートベルトを、トラちゃんの体形に合わせて工夫して締めていました。
手馴れた様子だったので、結構付き合いが長いのだと私は感じました。
本当は私がやってあげようと思っていたので、ちょっとがっかりしました。
「こら、レミア。お前はどうなんじゃ。」
しまった。余計なことに気を取られて、返事をするのを忘れていました。
「は、はい。ＯＫです。」慌てて、そう言いました。
「じゃあ、行くからの。」
レイグルは、神殿へ向って進撃を開始しました。

バリバリ、ドガンドガン、バターン。
車内とは言え、凄まじい音と振動が伝わってきました。
「♪♪邪魔する奴らはぶっ潰せ。」「ぶっ潰せ。」
「♪♪あたしらいつでも、力押し。」「力押し。」
「♪♪エイエイオー。」「エイエイオー。」
しかし、車内では全員が歌を歌って、盛り上がっていました。
特にトラちゃんは、興奮して声を張り上げ、４つ足をバタバタさせていました。
おじいさんやガーネ、そして私も興奮して声を張り上げていました。
それくらい迫力ある光景が、私たちの車窓のすぐ外で、展開されていたからです。
迫り来る神殿の柱を折り、壁をぶち破り、破竹の快進撃です。
もちろん神殿が、私たちに向かって来ているわけではありません。
私たちが乗っているこのレイグルが、神殿をぶち壊しながら、進んでいるのです。
目の前に屋根の一部が、落ちてきました。
ですがそれにひるむ事無く、ひたすらレイグルは前進しました。

まさに、爽快です。身体に何か熱いものが、みなぎるような感覚さえ覚えます。
私とガーネは、こぶしを振り上げていました。
トラちゃんは、私たちの真似をしているらしく、右前足を高く上げていました。
おじいさんも、歌を熱唱していました。みんな、まさにノリノリの状態でした。

実は、この進撃のやり方には、少し議論がありました。
「そんな。絶対に駄目です。人類の貴重な財産である、あの遺跡を壊すなんて。」
私は、おじいさんに抗議しました。
「別にわしは、あの遺跡を壊すなどとは言っておらん。」
おじいさんは私の言った事を、即座に否定しました。
「えっ、でもこのレイグルをあの神殿に突っ込ませるんでしょう。」
私は、尋ねました。
「確かにその通りではあるが・・・。
最低限の被害は、認めてもらわねばどうにもならないのじゃ。」
「と言うと？」ガーネが尋ねました。
「あの宮殿は２００年に１度しか現れないのは、もう知っておるな。」
「はい。」
それはさっき、私が説明したばかりでしたので、みんな知っていました。
お菓子を食べて、聞いていなかった場合を除けばですが。
その場合は、誰であろうと張り倒そうと思っていました。
ですので、無駄な手間が省けてホッとしました。
「この神殿に初めて人が探検をしてから、数千年の時が流れていると言う。
それにもかかわらずじゃ。まだ誰も財宝のある女神の間にまで到達

しておらん。
それは何故だと思う?」
おじいさんが誰ともなしに問いかけていました。
「神殿が広すぎて、場所が判らなかったからではありませんか?」
とガーネ。
「もともと、無かったっていう考え方もあるわね。
つまり、ただの伝説でしかなかったとか。」とトラちゃん。
「既に財宝が奪われていたので、悔しくて黙っていたなんて。」これは私。
しかし、おじいさんは首を横に振って、こう答えました。
「いや、どれも違う。
探検者が女神の間まで、到達出来なかった最大の理由。
それは、この神殿が守護者によって守られていたそうだからじゃよ。」
「守護者って?誰か今でもあの神殿を管理している者がいるのですか?」
私は首をかしげて、おじいさんに尋ねました。
「いや、人間ではない。もっと恐ろしいものだ。
あの宮殿の探検記は、世界中、さまざまな所に残っておる。
それを総合的に、突き合せてみると、驚くべき事実を発見した。」
「その事実とは、一体何だったんですか?」ガーネが喰いついてきました。
私は小さい声で、トラちゃんに尋ねました。
「ねぇ、トラちゃん。あのガーネって言う人、世界の歴史に興味でもあるの?」
「そうね。確かに博物館なんかがあったりした場合、間違いなく行くわね。
あと、おばあさんなんかから、昔話を聞くのも好きみたい。」
「ふーん。そうなんだ。」私は、特に大した事じゃないような返事をしました。

しかし、心の中では、ひょっとしたら私と同類なんじゃないかと思い始めました。
おじいさんは、話を続けました。
「実はのう。
この神殿には、財宝の守護者と称して悪霊や魔物が現れるとの事らしい。
これらが、探検者が進むの妨害をしているとの事じゃ。
いや、妨害だけならまだしも、そのために命を落とす者さえいたと言う。」
「それは今、私も初めて聞きましたよ。
なんで前もって言ってくれなかったのですか？」
私は寝耳に水の話に、おじいさんに抗議をしました。
「言ったら、来ないんじゃなかろうと思ってな。いや、すまんかったのう。」
おじいさんはそう言って、頭をかいていました。
「済まなかったじゃ、済みません。」
私は、顔を膨らませました。
もし、事前にこの事が判っていたら、確かに来る事はありませんでした。
私は、幽霊とかお化けとか、そう言う物が大嫌いでしたからね。
そんな私の心を知ってか知らずか、おじいさんは話を続けました。
「での。わしらが普通に探検に行っても、彼らの二の舞になるだけと思ってな。
一策講じる事にしたのじゃ。幸い、わしは戦闘用車両の専門家での。
じゃから、試作品の戦闘用車両に、今回の探検に必要な対策を施したのじゃ。
そして、なるだけ早く、財宝を手に入れる方法を練っていた。
今回のプランは、その結果なのじゃよ。」
「ですが、おじいさん。方法って言われても。
これでは、ただの力押しじゃないですか。考えた欠片も感じられま

せん。
それにやはり貴重な遺跡を、例え一部でも自分たちで壊すのは納得出来ません。」
この正論とも思える私の抗議に対して、おじいさんはこう言いました。
「じゃがのう。
悠長な事をやっていては、手ぶらで帰るだけじゃよ。
お前だって、そうじゃ。
例え、あそこの遺跡の幾つかを、持って帰って報告したとしてもじゃ。
誰が、それを信じると言うのじゃ。
次にあの神殿が現れるのは、２００年後ぞ。
相手にされないばかりか、嘘つき呼ばわりされて、それでおしまいぞ。」
「ですが・・・。」
「まぁ、聞きなさい。
もし、ここで仮に金銀財宝を見つけたとしたら、どうじゃろうな。
鑑定家に見せれば、確かに本物と判定してもらえるじゃろう。
それを学会に持っていって報告すれば、一躍お前は、有名人じゃ。
ひょっとしたら、「考古学の母」などと呼ばれるかもしれん。
その夢が今、手の届くところにあるのじゃ。
それを果たして、自分から放棄していいものかのう。」
おじいさんの話に、私は不覚にも、心を動かされてしまいました。
私には、断じて虚栄心などと言うものはありません。
ですが、人に蔑まされるよりは、尊敬を受けたいと思うのは、人情でしょう。
まして、「考古学の母」なんて呼ばれた日には。
それに、うまく行けば、大金持ちにもなれます。
私は、自分が気が付かないうちに、おじいさんの手を両手で握り締めていました。

「是非、その方法で行きましょう。」
1も2も無く、賛成している私が、そこにはいました。
その私の耳に、トラちゃんの声が聞こえてきました。
「やっぱり良く似ているね。」私は、その言葉を無意識に聞き流していました。

そんなわけで、今や破竹の快進撃あるのみです。
誰も、私たちを止められません。
あっという間に、祭壇の間に到着しました。
私たちは、ここでとりあえず、現在位置の確認をするために降りてみました。
「ここからが、王室専用の間になります。」
私は、古文書にあった地図のコピーを見ながら、そう言いました。
「レミア姉ちゃん。でも、この神殿随分大きいね。
もっと小さいのかと思ってた。」トラちゃんは感心していました。
「ここは神殿と言っても、外側の方は一般の民にも一部開放されていたわ。
彼らが集う広場や祭壇もあったの。
また、ここから先は王室しか入れない専用区域なっているわ。
こんな具合に、多くの人が使用出来るように考えたのね。
だから、こんな大きな敷地になったんだと思うの。」
私は、肩に乗っているトラちゃんに、そう説明しました。
「まぁ、神殿が広いのはいいとして、ここからどう行けばよいのかの。」
「それ何ですけど・・・。
この先に、女神の間があるのは記録にあるので、間違いなさそうなんです。
だけど、ここから先の詳細な方の地図が無いんですよ。」
「はて、それはまた何故なんでしょうね。」とガーネ。
「多分、その当時、その間取りは極秘扱いになっておったんじゃ無

いかの。
王室専用であり、しかも金銀財宝が眠っているとなれば、なおさらの事じゃて。」
おじいさんは腕を組みながら、話を続けました。
「さて、これからどうしたものか。
今までのようにレイグルに乗って、破壊を続けながら探索をすべきか。
それとも念のために歩いて、探索を続けるべきか。」
おじいさんは、悩んでいました。
「敷地の広さから見て、女神の間までそんなに距離は無いと思うんですよ。
場所も判らないのに、いたずらに壊しまくるのはどうなんでしょう。
かえって見つけにくくなる場合も、あるんじゃないでしょうか？」
私は、おじいさんにそうアドバイスしてみました。
「そうじゃの。それがいいかも知れんわい。
時間はまだ、たっぷりとあるからの。
ここまで来て焦らなくとも、なんとかなるじゃろ。」
おじいさんは、私の意見に賛成のようでした。
そんな私たちの会話を聞いてたのでしょう。
ガーネとトラちゃんが、何かひそひそ話をしています。
その後、なんか不安ありげな顔で、こちらを見ていました。
「どうしたんですか？」私はガーネとトラに向かって、尋ねてみました。
「いや、何でもありません。」「そうよ、何でも無いわ。」
慌てたかのように、ガーネとトラは、私に答えました。
「別に何を言っても、気にしませんから。
何か意見があれば、おっしゃって下さい。」私は、そう言いました。
「では、お言葉に甘えて、遠慮なく言わせて頂きます。
ここから近いとは言っても、レイグルから離れて歩くのは危険だと思います。

ここから金銀財宝が近いのだとすれば、障害が大きくなるのは目に見えています。
時間だって、これからの方がかかる可能性が大きいです。
それよりもレイグルでスピードを落としながら、探査を続けるべきだと思います。
探検に安全とスピードを求めるなら、この方法が無難かと思います。」
ガーネの言葉に、おじいさんはうなずきました。
「確かにな。これからの方が、危険が大きくなるかもしれん。
1人1人で歩いて行って、何かあった場合どうしようもないからのう。
どう思う？レミアよ。」
私は考えてみました。
何のトラブルも無いのなら、私が提案した通りでいいと思います。
でも、ここは伝説の神殿。しかもいわくつきです。
何があっても、おかしくはありません。
現に過去に使者だって、出ているのです。
やはり何を置いても、安全は確保すべきです。
「そうですね。ガーネの言う通り、やはりレイグルを使いましょうか？」
「では、決まりじゃな。」
私たちの話はまとまり、出発する事になりました。

私は、肩にぶら下げていた水筒を下ろしました。
そして水筒に付いているコップを外した後、それに水筒の中の冷水を注ぎました。
私は熱中症予防のため、水は定期的に補給しています。
本当はスポーツドリンクあたりがいいらしいのですが、今はありません。
これでも無いよりかはましと、飲んでいるというわけです。

私は冷水を飲みながら、簡略に書かれた地図で、再度確認をする事にしました。
「ここには、左右両方に出入り口があってと・・・。
ああ、確かにありますね。
左側が王室の居住の間に繋がっていると。
一方、右側には、大広間に広がっていて、その奥は、と。
あら、記述が消されているわ。
これは怪しい。きっと何かあるに違いないわ。」
私がそう思った時、私の肩をコンコンと、突くものがありました。
「トラちゃん、今考え中なの。用事ならあとにして。
それに痛いわ。たたく時は、もう少し加減してくれない？
ねぇ、ガーネからも何か言ってやってよ。ねぇ・・・。」
私は、自分の前にいるガーネに文句を言おうと、顔をあげました。
「あれっ。」
ガーネの右肩には、トラちゃんがいました。
また、ガーネの横には、私のおじいさんもいました。
何故か、2人とも顔面蒼白でした。
私は小突かれた肩の方を、恐る恐る振り向きました。
黒くて鋭く尖った足先が、私を突いていたのでした。
私は更に、後ろを振り返りました。
そこには、黒い身体に8本の足を持つ、爬虫類のような生物がいました。
私は「ギャアー。」と叫ぼうとしました。
ですがその寸前、「ギャアー。」と叫び声が聞こえたのを確認しました。
それは、ガーネとおじいさんの叫び声でした。
ガーネはトラちゃんを抱きかかえて、おじいさんと一緒に逃げ出していました。
2人は、この部屋の入り口まで行って、その両側で私を見守ったのでした。

「早く逃げてくるんじゃ。」「早く来て下さい。」「レミアお姉ちゃん、早く。」
次々と矢継ぎ早に、声をかけてくるのですが、助けに来る者はいませんでした。
私はどうやら、ヒーローを待っているヒロインにはなれないようです。
自分の命は、自分で守らなければならない事を深く悟りました。
「ギャアー。」私は全力で走りました。
「ガシャ、ガシャ。」
後ろから物凄い音を立てて、追いかけて来るのが判りました。
それでも私は、その部屋の入り口近くまで、来ました。
ガーネやおじいさんが、入口から腕を伸ばしていました。
私は、精一杯手を伸ばして、その手をつかもうとしました。ですがその時。
「バザーン。」凄まじい地響きが私の周りで起こりました。
私は立ち止まり思わず目を閉じてしまいましたが、やがて静かになって来ました。
私は、恐る恐る目を開けると、何故かあたりが暗くなっていました。
周りを見回すと、先ほどの生物の足に囲まれていたのでした。
更に真上を見ると、その生物のどす黒い腹らしき物がありました。
私は、その生物の身体の真下にいたのでした。
もし、この生物がその腹を地面にくっつけられるなら、私は潰れてしまいます。
また、あの足に襲われたら、串刺しになってしまうでしょう。
私は真剣になって、逃げる方法を考えました。
幸い、足と足の間には、余裕で人が通れる広さがあります。
あと多分、前よりも、後ろの方が移動しにくいんじゃないでしょうか。
部屋の入り口では、みんなが心配そうな顔をしていました。
でも、私を助けるために近付いて来る気配は、微塵も感じられませ

んでした。
私は、心を決めました。
「行こう！」私はその生物の後ろの方から、外へ飛び出しました。
その生物はゆっくりと、身体の向きを私の方に移動させました。
「やっぱり、小回りが利かないんだわ。」
私はそう思って、安心しました。
気が付いてみると、喉がからからに乾いていました。
肩にぶら下げていた水筒をコップに注いで飲み、心を落ち着かせました。
しかし、次の瞬間、その生物は思いがけない行動に出ました。
私の方に向きを変えたその生物は、フワァッと浮いたのでした。
そして私の目の前に着地したのでした。
「ギャアー。」私は思わず手にしたコップを、その生物にたたきつけました。
その時、信じられない光景を見ました。
コップから流れた水がその生物にかかるや否や、白い煙が発生したのでした。
「グワァー。」私は始めて、その生物の鳴き声を聞きました。
明らかに、苦しがっています。良く見るとかかった身体の一部が溶けていました。
「そうか、この生物の弱点は水なんだわ。」
私は、切り札を手にしたような感覚を覚えました。そして、水筒を手にしました。
「あれっ。もう少ししか無いじゃない。」
水筒のふたを急いで開けましたが多分、水をかけられるのは、あと1回でしょう。
私は、どこにかけるべきか即座に考えました。
この生物の移動方法は、ジャンプと走る事、つまり足です。
足を封じてしまえばよいわけです。
そこで私は右側にある前足2本に、思いっきり水筒の残りの水をぶ

ちまけました。
その後水筒を捨ててその生物の下を通って、全力で部屋の入り口に向かいました。
しかし予想よりはるかに早く、その生物は向きを変えていました。
そして、私の真上にジャンプしたのでした。
入口まで、あと僅かと言う所で、私はまたしても捕まってしまいました。
「残念。」私は泣きそうになりながら、入り口の方を見ました。
「！！」そこには、誰1人いませんでした。
きっと、この生物に怖れをなして、とっくに逃げてしまったんでしょう。
「ちくしょう。この人でなし。」私はありとあらゆる悪態をつきました。
やがて、私を取り囲んでいた生物の足から糸が出て、私の身体を巻き始めました。
粘着力のかなり強い糸でした。
あっという間にがんじがらめにされた私は、腹の外へと放り投げられました。
身動きの出来ない私に、その生物の口が迫って来ました。
その口の大きいあごが動いて、カチカチと音を立てています。
私を食べるために、そのあごで挟もうとした瞬間、奇跡は起こりました。
強い水流が、その生物を襲ったのでした。
私は、なんとか向きを変えて、入り口の方を向きました。
そこには生物めがけて水を飛ばしている、ガーネとおじいさんがいたのでした。
「あれは、水圧洗浄ガンだわ。」
水圧洗浄ガン。
それは、高圧力で出力した強い水流で、壁の汚れなどを落とすものです。

使用してみれば判ると思いますが、水を放出する際の勢いはすごいです。
汚い壁が、あっという間に綺麗になります。
普段、お掃除が苦手な人でも、何だか楽しくなってしまう器具です。
一度、お試しあれ。
私たちは普段、戦闘用車両レイグルの外側を洗浄するために、使用しています。
戦闘用車両には、シャワーやお風呂に毎日使えるほどの、水が補給されています。
私がおじいさんに頼んで、無理矢理作らせたから、間違いありません。
私は勝ったと思いました。
「ムァメェ、ミヤッミマメェ。」
私はぐるぐる巻きにされて、口すらあまり開く事が出来ませんでした。
それでも懸命に声を張り上げて、普段使った事の無い言葉で応援しました。

その生物は断末魔の悲鳴を上げた後、ゆっくりと崩れるように倒れて行きました。
その後、幻のようにどこへともなく、消えてしまったのでした。
私に巻きついていた、あの粘着力の強い糸も、嘘のように消えていました。
私は、しばらく呆然としていました。
気が付くとおじいさんに、肩をたたかれていました。
そして「おい、怪我はありゃせんか。」と声をかけられました。
「おじいさん、有難うございます。」
私は、おじいさんに抱きつき、泣いて感謝しました。

何とか魔物を退治出来た私たちは、祭壇の間の中へ戦闘用車両を移

動させました。
その後、丁度お昼近くになっていたので、食事をする事にしたのでした。
食事の内容は、ビスケットが数枚と乳飲料でした。
「ねぇ、ちょっとわびしい食事じゃない？」
トラちゃんは、ガリガリ食べながらそう言いました。
「でも、これからの食事はずっとこんなもんなのよ。
もちろん、栄養とかカロリーは十分なので、心配いらないと思うわ。」と私。
「確かにそうなのじゃろうが・・・。
わしのように年をとると、食べ物ぐらいしか楽しみがなくてな。
もう少し、色をつけてくれると有り難いのじゃが。」
おじいさんは、そうこぼしていました。
「まぁ、美味しい事は美味しいんですけどね。」
ガーネは、特に不満は無さそうでした。
「ところで、さっきからズルズルって音が聞こえてきますね。
この車両からの発生音のような気がするんですが、これって何なのでしょうか？」
ガーネはおじいさんに、そう尋ねました。
「バキューム装置が働いておるのじゃ。
これで、先ほどこの部屋に放水した水を吸い上げているのじゃ。
かなり強力でな。外にいると、わしらの体内の水分までも吸い上げかねない。
じゃから、ここに移動したわけじゃよ。」
「へぇ、そうだったんですか？で、どのくらいの回収率なんですか？」
「テストの平均では1時間の吸い込みで、９０％以上は常に出来ておった。
かなりの回収率じゃよ。」おじいさんは、自慢げに言いました。
「じゃあ、それが終わるまでは、ここで待機というわけですね。」

「そういう事じゃな。シャワーを浴びるのが、楽しみな孫もいるでの。」
おじいさんはそう言って、私の方をちらちらっと、見ました。
「当然ですよ。それが出来ないなら、ここには来ませんでしたもの。」
私は、断言しました。
「まぁ、私たちもお風呂は好きですしね。大助かりですよ。ねぇ、トラ。」
「そうね。やっぱり1日に1回は入らないと、毛並みによくないの。」
ガーネとトラちゃんは、私の意見に賛成のようでした。
「わしはどちらでもいいがの。
まぁ、みんながそう言うなら、文句などありゃせん。」
私のおじいさんは、清潔感というものには、無縁のお方のように思われました。
やがて、私たちはわびしい昼食を終えました。
その後、ガーネは私にこう尋ねました。
「あの、歯ブラシもらえませんでしょうか？出来れば2本。」

「ところでじゃ。先ほどのあの生物。あれはどう思う。」
おじいさんは誰ともなしに、そう言いました。
「すごく大きい爬虫類って感じだったわね。」とトラ。
「生物と言っても、水をかけたら最後は幻のように消えてしまいましたからね。
やはりあれは、魔物だったんじゃないでしょうか？」とガーネ。
「何にしても、私はとても怖かったわ。
だって最初、誰も助けに来てくれなかったんだもの。」
私は、さっきから心の中に溜まっていた不満をぶちまけました。
私としてはそれを言う事で、慰めの言葉と乙女への気配りを期待しました。

ですが驚いた事に、周りにいる人の反応は、明らかに違っていました。
「レミアお姉ちゃん。助けるってまさか、お姉ちゃんをじゃないよね。」
「そんなわけは無かろう。」「そうですとも。きっと私の事をですよ。」
私が先ほど、助けを求めるヒロインであった事を、無視した発言をしていました。
「当然、私の事じゃないですか。
あの魔物に追いかけられて、大変だったのをもう忘れたんですか？」
私は全員をにらみつけて、糾弾しました。
「と言われてもな。」「そうよ。少し無理があると思うの。」「ですよね。」
「何をわけの判らない事を言っているの？
か弱いヒロインが、助けを求めて苦しんでいたと言うのに。
何にも、感じなかったの？」
いささか、私は興奮して来ました。
「か弱いヒロインって・・・。
じゃあ聞くがの。確かこの神殿に乗る込む前の事じゃ。
わしがお主のの最後のおせんべいを食べた際にな。
お主からアッパーカットを喰らって、床にたたきつけられた事を忘れたのかの？」
「私はそれを止めようとしたんですけどね。
そうしたら、胸倉をつかまれて、車両の外に放り投げられてしまいました。」
「その時、ガーネの肩にいたあたしも、一緒に放り投げられちゃった。
そんなに強いレミアお姉ちゃんを、誰が助けられるって言うの？」
2人と1匹は、口々にそう叫んでいました。
駄目だ、乙女の可愛くてささいなお茶目を、根に持つなんて。

こんなひ弱な奴ら、いや、人たちの中ではとてもヒロインになんかなれっこない。
私は、けなげなヒロイン役を演じる事を断念しました。

「さてと、話は変わるがの。これからどうしたものじゃろうか？
多分、これからもあのような魔物は何体か出て来ると思うのじゃ。
その危険を冒してまで、この探検を続けるべきかの？」
おじいさんはそう言って、みんなの意思を確認しようとしました。
「私はさっき決めたように、このレイグルで先に進みたいわ。
考古学者の卵として、遺跡には興味がありますからね。
また、財宝にも魅力を感じますし。」
「じゃが、先ほどのような、怖い思いもするかもしれんのじゃがの。」
「だから余計、その怖がった分を、取り返したいんです。」
私は、きっぱりとそう言いました。

トラ。こういう人がギャンブルにのめり込んで、スッテンテンになるんですよ。
判ったわ。私も気を付けないといけないわね。

何か私の隣から、ひそひそ話が聞こえてきましたが、私は無視しました。
「ゴホン。まぁ、お主の言いたい事は判ったわい。
ところで、ガーネ。お主たちはどうなのじゃ。」
おじいさんはガーネたちにも、意見を求めました。
「私たちは、別にどちらでも構いませんよ。
財宝を手に入れても私たちには、使いようがありませんしね。
まぁ、危険が無い方がいいには決まっていますけどね。
私たちとすれば、お2人のお手伝いが出来るなら、それでいいですよ。」

「そうね。あたしもガーネと同じ意見だわ。」
ガーネとトラちゃんは、そう答えました。
財宝をもらっても、使いようが無いか・・・。
やっぱり、本当にこの世界の人間じゃないのかも。
私は、ふとそんな風に思いました。
「みんなの意見はよう判った。
わしとしては、この探検は続けたいのじゃ。
まだその入り口に立ったばかりじゃからの。
特に反対意見は無さそうなので、行く事にしたいと思う。
それで、構わんかの？」
おじいさんのその言葉に、全員うなずきました。

私は、１つ提案を出す事にしました。
「ねぇ、今回の探検は記録に残しておきたいのよ。
それでね、お願いがあるんだけど。
毎回、魔物が出るたびに、その生物とかいう言い方だと、おかしいと思うの。
だからさ。この際、魔物が出るたびに名前を付けるなんてのは、どう？」
「まぁ、確かにその方がいいかもしれんて。
こちらも、魔物を指す時に楽じゃからな。」おじいさんは賛成しました。
「私も構いません。」「右に同じく。」ガーネとトラも賛成のようでした。
「じゃあ、そう言う事で。これからは、順番で名前を付けることにするわね。
今回のあの魔物に関しては、私が名前を付けるわ。
名前は「ガルガン」。別に名前に意味なんていらないからね。
各人、気に入った名前を付けていってね。」
「了解しました。」全員でハモリました。

やがて、バキューム装置は自動停止しました。
放水の回収率は９４％。なかなかの数字です。
これならシャワーなどに思い切り、使う事が出来ます。
私は嬉しくて、みんなにＶサインをしました。
みんな、その意味が判ったらしく、全員笑顔でした。
「じゃあ、出発するぞ。みんなシートベルトをしっかりな。」
「オー！」
戦闘用車両レイグルは、発進しました。
祭壇の間の奥にある、右側の出入り口から出て行きました。
目指すは大広間です。ここから先に何があるか誰にも判りません。
私たちは未知の世界にまた１歩、歩みだしたのでした。

第８話「正と邪の女神。」２つめですね。（終）

第8話「正と邪の女神。」2つめですね。（後書き）

今回のお話は、第8話「正と邪の女神。」の第2話です。
これって、ダンジョン？ロールプレイング？
いや、特に何も考えていません。
ただこういう所なら、魔物がいても有りかなと思って。
と言っても、ほとんど大した敵にはしないつもりです。
ほとんどね。

今週2日ぐらい涼しい日がありましたので、書いてみました。
今度はいつ頃になるのでしょうね。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第8話「正と邪の女神。」3つめですね。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第8話「正と邪の女神。」3つめですね。のお話です。
この回では、大広間で、植物の魔物と戦います。

第8話「正と邪の女神。」3つめですね。

第8話「正と邪の女神。」3つめですね。

祭壇の間からは狭い通路でした。
ですので、私たちは相変わらずぶっ壊しながら、進んで行きました。
その結果、あっという間に大広間に着いてしまいました。
よく考えてみれば、ここは普通は歩いて通る道なので、当たり前でしたね。
大広間の中まで、戦闘用車両レイグルで入りました。
「何かすごくだだっ広い場所だわ。」
もちろん、今までの部屋も狭くはありませんでしたが、さすがは大広間です。
私の部屋の広さとは、比べようもありません。
私は、いつしか無意識の内に、空想の世界に突入していました。

こんなに広ければ、どんなに散らかしても、大丈夫なんじゃない？
ああ、でもその分、ごみが多くなってしまうわね。
出たごみは、どうやって片付けたらいいの？
誰に聞いたらいいかしら、悩んでしまう。
でも今はそれを考えるより、もっと考えなければならない事があるわ。
どの順番で、家具を並べたらいいの？
やっぱり、お人形台を先に並べる方がいいのかしら。
それとも、たんすや鏡台？ベッドはどこに置いたらいいのかしら。
あっ、いけない。絨毯を先に引かなくては。
でもその前に、箱から荷物を出して置くべきかしら。
最初の掃除は、どのタイミングでやったらいいの。
もちろん、窓のホコリを、最初に払わなければいけないわね。

それから床を・・・。
私は、いろいろな事を思い巡らせました。
とりあえず先に、箱から荷物を取り出してから考えよう。
そう思った時、私はここが自分の部屋では無い事に、気が付きました。
「あっ。」

ふと我に返った私は、周りで私をじっと見つめている複数の目に気が付きました。
「おじいさん。この人大丈夫でしょうか?」ガーネは心配そうに尋ねていました。
「レミアお姉ちゃんが、おかしくなっちゃったぁー。」
トラちゃんが泣き出しそうでした。（なんて失礼な。）
「いやあ、よくある事じゃよ。
何か興味があるものを見つけると、自分の空想の世界に入って行くのじゃ。
特にこの孫は、昔からそうじゃった。
こちらが、気が付かないでいるとな。いつの間にか、はぐれてしまっておる。
それで、慌てて後戻りしてみると、幾らも歩かないうちに、ボーっとしておった。
わしが、「どうしたかの。」と尋ねるとな。
「私はどうやって、あのお月さまに帰ったらよいの?」
などと言っておったわい。いやあ、懐かしい想い出じゃよ。」
おじいさんは、目を細めて昔を思い出していました。
「おお、そうじゃ。つい先だってもな。
珍しくわしと一緒に、買い物に行ったんじゃよ。
そうしたらな。あるポスターをじっと眺め出しての。
しばらくしたら、急にニタニタと笑いを浮かべおって・・・。」
「シャラップ!（お黙り）」

私は思わず、おじいさんの身体を動けないように固定しました。
そして、おじいさんの口を塞ぎ、頭の後ろに手を当てました。
後は、ねじのようにクルッと回すだけで、全ては終わります。
手に力を込めて回しにかかった時、私は肩をポンとたたかれました。
誰っ、と振り向くと、そこにガーネがいました。
「お嬢様。もうお目覚めのお時間ですよ。」
私は、その一言で、我に帰りました。
「お見事です。セバスチャン。」

現実の世界に戻って来た私は、フゥーッとため息をつきました。
そしてあらためて、自分がこの神殿ガルディの大広間にいる事を実感しました。
「さてと、もう地図は当てにならないし、目で確認するしかないわね。」
私たちは、大広間を調べる事にしました。
しかし、探索はすぐに終わってしまいました。
「この大広間の奥には、異なる3つの色の出入り口らしきものがあるのね。
左から、赤、緑、青で塗られているわ。
その他は、部屋の左右に、大きい植物が植えてある花壇ぐらいかなっと。
あっ、その花壇の手前にも、石壇が幾つかあるわね。
左右の壁に沿って、平行に並べられているわ。
あそこなら座ったり、寝転んだり、向き合って話をしたり出来るわね。
あとは、別にこれといった物は・・・、無いわね。」
私は、調査結果をみんなの前で、公表しました。
「赤、緑、青か。光の3原色じゃな。はてさて、どんな意味がある事やら。」
おじいさんは、首をかしげていました。

「まぁ、出入り口も謎なんですけどね。
それにしても、何でここはこんなに植物を植えているのでしょうね。
しかも、やたらと大きいものばかりです。
ほら、これなんて私たち3人が手と手をつなぎあって、やっと届くんですよ。
凄い太い植物ですね。」ガーネはそう言って、植物をたたいていました。
「確かにそうだけど・・・。
この大広間の大きさからすれば、大した事無いんじゃない？
少し大きめの観賞用植物ってとこかしらね。」
私はそれほど、奇妙だとは思いませんでした。
「だけど、このつるだって、太いし多いですよ。
このまま行くと、この大広間中に広がっちゃうんじゃないでしょうか？
今だって、床は歩きにくい個所もありますよ。」
ガーネは、なおも異論を唱えました。
「でも、まぁ、それはいいんじゃない。植物は、植物でしか無いんだし。
魔物みたいに、こちらに害を与えるってもんでも無さそうだし。」
私は、楽観的に考えていました。
「だと、いいんですけどね。」ガーネは納得いかないようでした。
そんな他愛も無い会話をしている最中に、次なる恐怖が襲って来ました。
「アレー。」「ウワァー。」
私とトラちゃんの背後から、植物のつるが忍び寄って来たのでした。
そのつるは、あっという間に私たちに巻きつきました。
そして天井高く、吊るし上げられてしまったのです。
トラちゃんは「ワァー、高い、高い。」と大喜びです。
一方、私は、こう叫びました。
「キャー、助けて。でも、スカートの中を見ないで。」

それに対して、ガーネはとても冷静でした。
「よく考えてみたんですが・・・。
なんで探検中なのに、スカートなんてはいて来るんですか？
それに確か、さっきはパンツ姿でしたよね。
はき替える必要なんて、無かったじゃありませんか。」
ガーネは腕を組んで、首をかしげていました。
「それは・・・、いろいろあったの。あなたには判らない事だわ。」
「・・・そうですか。まぁ、いいですけどね。」
この時、レイグルの拡声器から、おじいさんの声が聞こえました。
「今からレーザービーム砲で、つるを焼いてしまうからの。
心の準備をしといてくれ。」
その声の内容に、私は蒼ざめました。
「待って下さい。この高さから落ちたら私は・・・。」
私の必死の呼びかけにこたえる事無く、レーザービームが発射されました。
「ビシューッ。」お金をかけているとはいえ、大したものです。
レーザービームは、狙いたがわず、私たちのつるに命中しました。
私たちはつるが切れると同時に、真っ逆さまに落ちて行きました。
大変危険な状態ですが、ガーネが無事にキャッチしてくれる事を期待しました。
ところがです。
「トラーッ。」
ガーネは落ちて行くトラに向かって、大急ぎで駆けだして行きました。
トラは、器用にも落ちて行く最中に、何回か回転をしました。
その後、ガーネが伸ばしている両手の上に、ちょこんと乗る事が出来ました。
「トラ。怖い思いをさせて済みませんでした。さぞかし不安だったでしょう。
でも、無事でよかったです。本当によかったです。」

ガーネは涙ぐんでトラを抱きしめながら、何度も言いました。
「私はいいのよ。ガーネさえ無事なら。」
トラちゃんは、優しくガーネにそう告げていました。
「ドサッ。」これは私が落ちた音です。
危ない所でした。もし途中で、つるに引っかからなければ、重傷だったかも。
運がよかったんです。しかし、不思議な事も起こりました。
何故か頭からではなく、お尻から落ちたんです。
本来はあり得ない筈です。だって頭の方が重いのですから。
ねぇ、絶対にそうですよね。
多分、ここが異常な世界だから何でしょうね。
私は、そう納得しました。
ですが、真っ先に落ちたお尻が痛くて、すぐには動けませんでした。
「あの、大丈夫ですか?」ガーネが声をかけてきました。
一応、心配はしているようでした。
でもその態度は、同じ危険を体験したトラちゃんに比べると、格差がありました。
なので、普段は温厚な私も、ついに腹を立てました。
「あのね。普通こういう場合、私を先に助けるのが・・・。」
そう言いかけた私に、トラちゃんが答えました。
「ごめんね、レミアお姉ちゃん。ガーネはどんな時でも、あたし優先なの。」
その言葉を耳にして、私はガーネとトラを見上げました。
「クッ、ま、まぶしい!!」私は思わず、腕で自分の目を覆いました。
なんとトラちゃんから、溢れんばかりの優しい光の波が発せられていたのでした。
そして、それがあたり一面をを包んでいたのです。
ガーネに、しっかりと抱かれているトラちゃんは、気品さえ感じられました。

「もしや、これが！
ヒロインからしか発する事の出来ないと言われる、伝説の光のオーラ！！」
出来ない。私にはこんなオーラは出す事など出来ない。
私は、くちびるをかみしめて、ただ現実を受け入れるしかありませんでした。

結局、何のかんの言いながら、少しお尻が痛いです。
誤解の無いように言っておきますが、お尻から床にぶつかったので痛いだけです。
他の理由では、決してありません。
私にも、プライドがありますので、そこのところよろしく。
そんな症状もあり、私はガーネに肩を貸してもらって、レイグルに戻りました。
ヒヤッとする痛み止めの絆創膏を貼ってもらった時は、ホッとしました。
でも、あざは、しばらく残るんでしょうね。
もしも、あざが消える前に人前にさらす事があったら、どうしましょうか。
そんな時が来たら恥ずかしいですね。
まぁ、縁遠い私です。心配する必要は無いと思います。

「ところで、おじいさん。あの植物は何て、名前を付けましょうか？」
私はそう尋ねました。
「そうか、今回はわしが名前を付けるんじゃったの。
それじゃあ・・・。「アルゴラ」とでもしようかの。もちろん、意味は無い。」
「有難うございます。ではあの植物は「アルゴラ」とします。
みなさん、よろしいですね。」

「はい。」全員で、ハモリました。

「それにしても、ほれ、あれを見てみい。さっきの騒ぎに反応したのかの。
植物のつるが、異常分裂を起こしてあの3つの出入り口を覆ってしまったぞよ。」
「本当ですね。さっきとは比べようも無いくらい、多くなっています。
やっぱり、レーザーで、一網打尽といきますか?」
「それがじゃの。お主ら、先ほどレーザーで切ったつるを、よく確認したかの?」
「いいえ。」全員が否定しました。
「実はの。確かに一度は切れたんじゃよ。じゃが、その後、すぐに再生しおった。
全く、信じられぬわい。」おじいさんは、困ったような顔をしました。
「とすると、レーザーを使っても、効果は一時的だと。」ガーネは尋ねました。
「恐らくその通りじゃ。」おじいさんは、うなずきました。
「だったら、「火」を使ったら?」私は、ここぞとばかり話に突っ込みました。
「およそ草木など、植物を片付けるのは、昔から「火」と決まっているわ。」
「なるほど、さすがはレミアさん、私たちとは目の付けどころが違いますね。」
ガーネが拍手を送りました。
「本当、そんな事にすぐ気が付くなんて、ひょっとしたら天才かも。」
トラちゃんも拍手喝采です。
「いやあ、わしの孫なもんで。血は争えないの。」

何故か、おじいさんが手を頭の後ろに当てて、照れていました。
「いやあ、それほどでも。」私も、結局同じでした。
こうして、「火」を使う事が満場一致で決まりました。
「じゃが、とりあえず、火炎放射器で試してみたらどうかの。
それで、本当に有効だと判れば、このレイグルで放火してみようと思うが。」
「レイグル自体に、火炎放射器が装備されているんですか？」
「正確には、ロボットアームのオプションとしてあるのじゃ。
これをアームに取り付けて、放火するという次第でな。
左右両方のアームで、一緒に放火すれば、たちどころに燃え尽きるじゃろうて。」
全員が、この作戦にうなずき、実行される事になりました。

私とガーネが最初に、火炎放射器で試し打ちをします。
その後、効果があれば、おじいさんがレイグルから放火するというわけです。
「ねぇ、私はどうする？」トラちゃんが身体を揺らせて尋ねました。
「済みませんね、トラ。今回は下手をすると、火ダルマになる危険もあります。
だから、レイグルに残っていて下さい。
拡声器で、適切なアドバイスなどして頂けると、有難いです。」
そのガーネの言葉に、トラはうなずきました。
「判った。あたしはここでガーネたちを見守っているわ。」

私たちは、火炎放射器を手にしました。
思っていたよりも、ポータブルです。カートリッジを装填して使うタイプでした。
片手で持ち運び可能ですが、放火の際は、両手で支えるようになっています。
「では、行きましょうか。」

ガーネのかけ声で、私は一緒にレイグルから出て行きました。
アルゴラに近付く前に、ガーネは私に尋ねました。
「先ほどは、どうも済みませんでした。あの、お怪我は如何ですか？」
「えっ、ああ、もう大丈夫よ。走り回るのはちょっとだけどね。
まぁ、今回はテストだけだもの、問題無いと思うわ。
いざとなれば、このレイグルに逃げ込めばいいだけだし。」
「そうですね。でも、本当に無理はなさらないで下さい。」
やっぱり、優しい人です。私はそう思いました。
時と場所さえ違えば、やっぱり私がヒロインだったかも。
そんな考えが、私の頭をよぎっていました。
それにしても、この人は一体。
私は、鉄の仮面を被っているこの人の素顔が、とても知りたくなっていました。

私たちは、レイグルから出て、アルゴラと名付けた植物の方に向いました。
前回と違い、私たちはマスクキャップを被っていました。
まぁ、ヘルメットのすごい版だと思っていただければ、幸いです。
これは火を放った場合でも、マスクカバーを覆って顔を防御する事が出来ます。
またマイクとイヤホーンも内蔵されていますので、連絡もバッチシでした。
その他にも、ガーネは知りませんでしたが、私にはもう1つ切り札がありました。
「じゃあ、始めるわよ。」「はい、いつでも構いません。」
私とガーネは顔を見合わせ、うなずき合いました。
「放射！」
私の合図で一斉に、部屋の片側に生えているアルゴラへ、火を放ちました。

外側の一部は、燃えているようです。
ですが、なかなか全体にまでは回っていきません。
私たちが苦戦している間に、アルゴラのつるが、また私の身体に巻きつきました。
「そうはさせないわ。」私は、つるに向けて、火を放ちました。
火炎放射器から放射された炎は、あっという間につるに燃え広がりました。
その結果、わたしは、拘束を解く事が出来たのです。
私の放った炎は、つるを伝わって、上の方にまで燃え広がっていました。
このまま燃え広がれば、アルゴラ本体にまで及ぶ事は間違いありません。
「ひょっとしたら、これでアルゴラを焼く事が出来るかも。」
私はそう期待しました。
ですがその時、思いもかけない事が起こりました。
私の炎がアルゴラの最上部に届く前に、そのつるがプツリと切れたのでした。
そのつるは、炎と一緒に床の上に落ちていきました。
まるでアルゴラ自身が自分が燃えるのを防ぐ為、わざと切断したみたいに。
その後も、驚く事が起こりました。
その切断したところから、２つのつるが分裂したかの如く、生えてきたのでした。
「ウワァ。」そのつるどもが再び、私を襲ってきました。
片方を何とか焼いて止めたものの、もう１つが私を巻き付けてしまいました。
最初のように、天井近くまで吊るし上げられた私は、しかし余裕でした。
切り札をポケットに、入れておいたからです。
私はポケット中の物を、アルゴラの真上に放り投げました。それは

生肉でした。
するとアルゴラは、それを別なつるで、捕まえました。
その後、そのつるは生肉を、アルゴラの真上に持って行って落としたのでした。
生肉は、アルゴラの体内に入ったようでした。アルゴラ全体が揺れ動いています。
まるで、消化しているかのようでした。
「やっぱり、食肉植物だったんですね。食べちゃうんだ。」
私は、あれが自分だったらと思い、背筋がヒヤッと冷たくなるのを感じました。
その時でした。私を絡めていたつるが緩み、高さも地上近くに下ろしていました。
私はこの機を逃さず、火炎放射器を使って、火を放ちました。
あっという間につるは切れ、私は地上に降り立つ事が出来ました。
その後、私は自分に絡まっているつるを、大急ぎで外したのでした。
私が苦戦している最中、ガーネもアルゴラに手こずっていました。
ガーネはつるをかわしながら、懸命にアルゴラ本体に火を放っていたのです。
あと、もう少しで、本体が燃えるのが判りました。
私は急いでガーネの元に駆け寄り、アルゴラの同じ場所に火を放ちました。
その結果、幾らも経たない内に、アルゴラ本体が炎上しました。
アルゴラはその燃える炎の中、灰1つ残さず、ゆっくりとその姿を消しました。
「やったー。」私は、ガーネと手をたたき合って、勝利を祝いました。
しかしすぐに、その喜びは消えました。
残りのアルゴラから一斉に、私たちに、つるが伸びてきたからでした。

私たちは、急いでレイグルへと引き返しました。
すると、私たちのイヤホーンに声が届きました。
「こちらの準備は既に出来おる。お前たちはレイグルの中に入りなさい。」
おじいさんの声でした。私たちは急いで、レイグルの中に飛び込みました。
「では、行くぞ。」
おじいさんは、火炎放射器を付けたロボットアームを、動かそうとしていました。
ですが、なかなか動きません。
「どうしたんです。」私は、おじいさんに尋ねました。
「いかん。レイグルがつるに絡まれた。これではロボットアームが動かせん。」
おじいさんがそう叫んでいました。
どうしたらいいの。そう思った私の肩に、ガーネがそっと手を置きました。
「大丈夫ですよ。私が焼いてきましょう。
みんなは、ここに残っていてください。」
そう言って外に出ようとしたガーネに、おじいさんは声をかけました。
「頼むぞ、ガーネ。
あと、その火炎放射器の炎は遠慮なく、このレイグルに当てて構わん。
このレイグルの耐防火機能は、そんな炎ではびくともせん。
熱さも内部までは伝わってこんから、心配する事はないぞ。」
「有難うございます。その言葉を聞いて安心しました。」
ガーネはそう言って、レイグルの外に飛び出しました。

「なるほど。これは大変です。」
イヤホーンからガーネの声が聞こえたので、私とトラちゃんは窓の

外を見ました。
部屋の左右の生えている全てのアルゴラから、つるが伸びていました。
そしてそのつるは、レイグル全体に絡んでいました。
ガーネは、左右のロボットアームに絡んでいるつるを、全て焼き切りました。
「おじいさん。ロボットアームは動かせます。火炎放射器を使用して下さい。」
「判った、直ぐに動かそう。ガーネ、おぬしは直ちに戻ってくるんじゃ。」
ガーネの連絡を受けて、おじいさんは、ロボットアームを操作しました。
大丈夫です。今度はちゃんと動き出しました。
ガーネは、それを確認した後、レイグルに戻ってきました。
「お疲れ様。」「ガーネ。無事でよかったわ。」
私とトラちゃんは、ガーネの苦労をねぎらいました。
「よし、準備は全て整った。火炎放射器で、一気にかたをつけるぞ。発射!」
レイグルの大型火炎放射器から、炎が部屋の左右のアルゴラに放射されました。
その炎の勢いは、絶大でした。
全てのアルゴラが、あっという間に炎に包まれ、燃え上がりました。
アルゴラから伸びていたつるも同様です。
レイグルの周囲が一時、火だるまとなっていました。
それでも少し時間が経つと、全てのアルゴラの姿が幻のように消えていきました。
私たちはそれを確認した後、少し経ってからレイグルの外に出ました。
大広間は、ガラーンとしてしまいました。
アルゴラが植えてあった花壇の手前に、くつろげる石壇があるくら

いでした。
レイグルの炎で、壁にすすが幾らか付いたいました。
3つの入り口も、今はぽっかり空いています。
「やったわね。」私たちは、満足感に浸りました。

その後、アルゴラが生えていた花壇?をのぞいてみました。
私は、そこにあるものを見つけました。
「これは何。まるで、弓矢の弓みたいなんだけど。」
私は、声を張り上げて、その弓らしきものを高々と持ち上げました。
「こちらにも、ありますよ。」
ガーネとトラちゃんも、反対側の花壇で何かを見つけたようでした。
私たちはレイグルに戻って、見つけたものを検証しました。
私のは、先ほど言ったように、弓のようなものです。
一方、ガーネたちが見つけたのは、明らかに矢の方でした。
「なるほど。弓矢というわけじゃな。
それにしてもこの矢の先端は、なんじゃろ。
まるで、何かをここに差し込んで欲しいかのようじゃな。」
おじいさんのその言葉に、私ははっと、気が付きました。
そして、ある物を持って急いで戻ってきました。
それはあの、ガルガンの消えた跡地に、残っていたものでした。
私は、その溝の部分を矢の先端に差し込みました。
その結果、まるであつらえたように、ぴったりと収まりました。
「なるほど、これはやじりだったんじゃな。」
おじいさんは感心しながら、そう言いました。
用途は、判ったものの、いつ使ったらよいのか皆目検討がつきません。
とりあえず、また弓矢とともに、レイグルで保管する事になりました。

さてと、日も暮れて、神殿の中は暗くなって来ました。

大広間は、ただでさえだだっぴろいです。
それがこの暗さも加わる事で、不気味さが一層広がりました。
私はレイグルがあってよかったと、今更のようにホッとしました。
「そろそろ、食事にしましょう。」
私がそう告げると、賛成する声が広がりました。
「いいですね。」「では食べようかの。」「お腹空いた。」
私はお母さんでもあるかのように、テーブルにビスケットと飲み物を置きました。
「さぁ、召し上がれ。」
最初の頃は、グズグズぼやいていたのですが、最近は慣れてきたようです。
今日の戦闘で、疲れたせいもあるのでしょうね。
みんな、美味しい美味しいと残さず、食べ終えました。
「では、歯磨きに行って来ます。」「じゃあね。」
ガーネとトラは、洗面所へと行きました。
本当に、歯磨きが好きな人たちだなと、感心しました。
食器類を片付け終わると、他にする事が無くなりました。
後で、明日の予定を決めるミーティングをやるそうですが、時間はまだあります。
それまで、私は読書を楽しむ事にしました。

みなさん。想像がつきますでしょうか。
気持ちの良い天気の、昼下がりの公園にて。
1人の乙女がテーブルに置いた文学書を、ひたすら読んでいます。
1ページずつめくりながら、その内容の展開に我も忘れて読みふけっています。
その乙女は、陽射しを避けるためか、白くてツバの大きい帽子を被っています。
そして暑さを和らげるためでしょうか、白いふわっとした服装を着ています。

その乙女の傍らには、ちょっと洒落たティーカップが置いてあります。
時折、乙女は休憩でもするかのように、そのティーカップの紅茶を啜ります。
その後も目を輝かせ、期待に胸を弾ませながら、続きを読み続けるのです。

私はこんなイメージというか、空想の乙女になっていました。
そして、時が経つのも忘れていたのです。
「ねぇねぇ、レミアお姉ちゃん。何を読んでいるの。」
気が付くとトラちゃんが、私の手に鼻をこすりつけていました
「どうしたの。」私は尋ねました。
「だってさっきから話しかけてるのに、全然返事してもらえないんだもの。」
「あっ、そうだったの。ごめん、ごめん。」
「別に謝る必要は無いんだけど・・・。それで、どんなご本を読んでいたの?」
「まぁ、ズバリ言うと、オカルトとか超常現象とか言ったようなお話ね。」
「何だ。文学全集とかそう言うんじゃないんだ。」
この猫ったら、私の心の中を、読んだのかしら。
まぁ、別にいいけど・・・。
「トラちゃん。そんなものはねぇ、もう私ぐらいの年・・・。」
「どうしたの?」「えっ、別に何でも無いのよ。」
アハハハハ。笑ってごまかせ、私はレミア。
私は、トラちゃんの悪気は無いであろう言葉を、さらりとかわしました。
「で、何か面白いネタでも、ありましたか。」
いつの間にか、ガーネが隣に座っていました。
「えっ、まぁ、少しは。」「是非、お聞かせ下さい。」

「わしも聞いておきたいの。」おじいさんもそう言いました。
「ねぇ、ガーネ。どうしたの。」
「トラ。これからレミアお姉ちゃんが、面白いお話を聞かせてくれるんだよ。」
「へぇ、楽しみ。」
パチパチパチ。いつの間にか、私は拍手で迎えられました。
「えっ、何。みんな急に集まって、どうしたんですか？」私は、そう尋ねました。
「少し前に、後で、明日のためのミーティングをするって言ったと思うがの。」
おじいさんはそう答えました。
「えっ、もうそんな時間ですか？」
私は慌てて、時間を確認しました。確かにもうそんな時間でした。
「じゃあ、ミーティングを始めましょう。」
私がそう言うと、クレームがあちらこちらで、起こりました。
「私は、本の話を聞きたいです。」「わしもじゃ。」
「レミアお姉ちゃん、お願い。」
私は、みんなの要望をかわし切れませんでした。
なので、私は話を始める事にしました。

「実は、魔女についての話なんですが。
魔女って言うのは魔族で、神よりもむしろ悪魔に近い存在なんだそうです。
順番から言えば神：神族↓王族↓人族↓魔族：悪魔の順なんです。
王族は人族よりも、神族に近い存在として定義されています。
多分、遠い昔、神と王族は何等かの関係があったからとの事でした。
」
「フムフム。それがどうかしたかの。」おじいさんは尋ねました。
「この説が正しいとするとですね。
アイリスを正神ラムダが受け入れたのは、極めて有りそうな話なん

ですよ。
アイリスは、王女。つまり、王族ですから。
神に最も近い存在なため、受け入れられたと考えても、不自然じゃないんです。
過去にも、そんな事例が古文書の中には、あるらしいのです。
ところが、魔女ルーディアの場合は違います。
魔女は、魔族です。神にもっとも遠い存在なんです。
その彼女が命を捧げたからといって、正神ザイドが受け入れるんでしょうか？」
「なるほど。確かにそう言われてみれば、不自然ですね。
で、それに対して、レミアさんは何か答えがお有りになるんでしょうか？」
ガーネのこの問いに、私は思わず苦笑しました。
「いえ、まだ何も。ただそうじゃないかと疑問に思っただけです。」
それからも話は続けましたが、やがてだいぶ時間が経ってしまいました。

「まぁ、神と悪魔の話は、これくらいにしておこう。
みんなも疲れておるだろうから、ミーティングをさっさと済ませてしまおう。
と言っても、明日からの行動について、１つ決めて置きたい事があるだけじゃ。
じゃから、すぐ終わる。心配せんでよい。」
このおじいさんの提案により、話題は変わって行きました。
「さてと、あの大広間には、３つの出入り口があるがの。
どこから行ったらよいと思う？」
おじいさんは、誰ともなしに尋ねました。
ですが、全員、これといった意見はありませんでした。
「では、レイグルの運転手でもある、わしが勝手に決めようと思う。
明日は、あの赤い出入り口を、くぐるとしよう。それでよいかの？」

「異議なし。」全員が賛成しました。
「決定じゃな。では、簡単だが、今日はこれでミーティングを終わるとしょう。
みんな、今日1日、本当に御苦労じゃった。」

ミーティングを終え、私はガーネとトラを、レイグルの寝床に案内しました。
「おじいさんと私は、こちらの2階建てのベッドを使う事にするわ。だから、ガーネたちは、反対側のベッドを使って欲しいの。もちろん、寝袋もあるから、あの大広間で寝たいなら、それもいいけど。」
私は、ガーネとトラちゃんにそう言いました。
「トラ。どうしましょうか?」
「うーん。あそこは特に何も無いし。やっぱりレイグルで寝るわ。」
「では、そうしましょう。」
ガーネたちの今夜の寝床も決まり、私はテーブルに戻りました。
そして読みかけていた本の続きを、また読み始めました。

第8話「正と邪の女神。」3つめですね。(終)

第8話「正と邪の女神。」3つめですね。（後書き）

今回のお話は、第8話「正と邪の女神。」の第3話です。
まぁ、面白いと思って頂ければ、幸いです。

皆さん、連日連夜、蒸し暑い日が続きますが、体調は如何でしょうか？
こちらは何とか生きていますので、ご安心下さい。
涼しい日が来るといいのですが。

なるだけ、1週間に1回ぐらいは、投稿したいのですがね。
今度はいつ頃になるのでしょうね。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第８話「正と邪の女神。」４つめですね。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第８話「正と邪の女神。」４つめですね。のお話です。
この回では、赤の間で、魔物ラドムアと戦います。

第8話「正と邪の女神。」４つめですね。

第８話「正と邪の女神。」４つめですね。

私は目を覚ましました。「じゅるり。」

いつの間にか、朝になっていたのです。

神殿の中にいるため、外ほどではありませんが、やはり明るいです。

私は、そのまばゆい明るさの中、欠伸をしました。

どうやら昨日、テーブルで本を読んでいる間に、寝てしまったようです。

気が付いてみると、本の上に顔を乗せたまま、眠っていました。

本をよく見ると、私の口元あたりを乗せた部分に、何故か染みがついています。

まぁ、古い本ですからね。最初から汚れていたんでしょう。

この本は返さなければならないので、汚したり無くしたりしたら１大事です。

私は本を閉じて、自分のバッグにしまいました。

このレイグル、本棚を装備してくれないものですかね。やれやれ。

鏡をのぞき込みました。髪は逆立っており、肌のつやも全く感じられません。

私はこのレイグルで寝泊まりするようになって、もうどのくらい経つんでしょう。

早く、金銀財宝を見つけて、元の生活に戻りたいものです。

鏡の冴えない自分に、「おはよう」の４文字を言いました。

いや、「お早う」だから３文字ですね。

その後、私は風呂場へ直行し、シャワーを浴びたのです。

その後、服を着替え、少々お色直しして、風呂場を出ました。

私はこれ以上、人が増えるなら、もう１個女子専用の風呂場が欲し

いです。
でも、すぐに却下されるのでしょうね。耐えるしかありません。
早く、日常を取り戻さねば。私はいつも朝、そう心に誓うのです。
でも、いつも裏切られます。そしてため息をつくしかないのです。

私はネイルチェックも、細かくしてします。
私は特に、ネイルアートに興味があるわけではありません。
それでもネイルは、美しく仕上がっている方が気持ちがいいです。
ここに来た当時は、ワイン色に綺麗に仕上がっていました。
今は駄目です。どの指のネイルも毎日のように、すぐに剥げてしまいます。
急場をしのぐため、上塗りをしています。
ただ、上塗りは綺麗に塗らないと、色の濃淡が出てしまいます。
また滑らかに仕上がらず、でこぼこな部分も出来てしまうのです。
ネイルチェックで「オヨヨヨ。」と言って、泣き崩れる事もしばしばあります。

風呂場を出て通路に出ると、あのカップルがいました。
御存知、ガーネとトラちゃんズです。
トラちゃんは、今日もしっかりとガーネの肩に乗っています。
「お早う、トラちゃん。」
「お早う、レミアお姉ちゃん。」「お早うございます。レミアさん。」
私たちは、レイグルの中の内壁に掛けてある額の写真に、手を合わせました。
「今日は、お宝を見る事が出来ますように。」お祈りを捧げました。
毎日の恒例行事が終わり、テーブルへと歩いて行きました。
その道すがら、ガーネは尋ねました。
「一体、あのお写真はどなたなんですか?」
ガーネのその問いに、私は思わず、吹き出していました。

「ガーネ。あなた、そんな事も知らずに毎日お祈りしていたの。」
私は呆れてしまいました。
ですが私は親切な人間なので、丁寧に説明してあげたのです。
「私のおばあさん。」「おや、そうでしたか。いつ頃亡くなられたのですか?」
「失礼ね。また生きているわ。」
「それは、早とちりしてしまって、申し訳ありませんでした。」
「まぁ、いいけどね。おじいさんが飾ったのよ。
家へ帰ると、おばあさんは怒ってばっかりで、怖いらしいの。
かと言って、離れ離れも寂しい。
だから、こうやって写真を置いて一日一回、私たち家族は拝む事になったわけ。」
「このおばあちゃんの顔、レミアお姉ちゃんに似ているね。
お姉ちゃんも年をとったら、こんな風になるのかな。」
トラちゃんは、私の老後の事を考えながら、その写真を見つめていました。
「そう?」嬉しいやら悲しいやらで、朝から複雑な私がそこにはいました。

おじいさんは相変わらず、元気はつらつな顔で起きて来ました。
テーブルに集まった3人と1匹は、朝の挨拶をかわします。
そして、いつものビスケット朝食を食べました。
その後、ガーネととらちゃんが、これまたいつものように歯磨きをしました。
そしてそれが終わったところで、出発となったのです。

私たちは大広間の奥にある一番左側の、出入口の中を前進しています。
その通路は短く、幾らも経たない内に、別の広間に到着しました。
通路と広間の床が赤い色だったので、私たちは「赤の間」と名付け

ました。
そこには幾つかの石像が並んでいました。
私たちは赤の間の中に、レイグルを停めました。
そしてレイグルを降りて、これらを見学する事にしたのです。
「不思議なところですね。人間の石像もあれば、動物や魔物のものもある。」
ガーネは興味深そうに、眺めていました。
「遠い昔、この世界は神族と人族、そして魔族が、共存していたそうです。
それがいつしか、違う世界へと分かれていったらしいんです。
神族は天上界へ、魔族は地の底の魔界へ、人間は地上界へっていう具合に。
これらの像はきっと共存していた時代を、再現したものなんでしょうね。」
私は自分でも無意識に、この部屋の説明係りになっていました。
と言っても、こうやって人に説明するのはまんざら嫌いではありません。
将来は、古代遺跡のツアーコンダクターにでもなりましょうかね。
私たちは部屋の中にある、石像の1つ1つを見て回りました。
私たちが特に心を惹かれたのは、部屋の中央にある石像でした。
それは翼を持った、魔物の石像でした。
「蝙蝠のような翼を持っているのに、顔は人に近いですね。
手足は、ともに3本ですか。
それにしてもこの石像の大きさが実際の寸法なら、そんなに大きくありませんね。
生まれたばかりの赤ん坊と言った程度でしょうか?」
「待って下さい。この魔物は確か昨日から見ている本の中にありましたよ。
確か名前は「ラドムア」って言った筈です。」
私は昨日調べた事がすぐに役に立つ事が出来て、嬉しい思いです。

「そうですか。おや、これは何でしょうね。
何かを書いた紙切れが、貼ってあります。」
「どれどれ。」ガーネの言葉に、私もその紙切れとやらを見る事にしました。
確かにガーネが言ったように、古い紙切れが貼ってあります。
「えーと。見えにくくなっていますが、文字は読めない事も無いと思います。
レイグルに行って調べて見ましょう。」
私はそう言って、その紙切れを丁寧に剥がしました。
「レミアさん。ここここにもありますよ。」
その紙切れは、合計3枚貼ってあります。
私は、その3枚とも剥がした後、レイグルに戻る事を仲間に伝えました。
他の人たちは引き続き、見学をするようです。
「これは多分、神じゃな。」「これは人間ですね。」「これって魔女かしら。」
探検中ではありましたが、楽しんでいるようでした。
レイグルに戻った私は、資料が入っているカバンを開けます。
そしてその中から、古代言語について書かれてある本を見つけました。
私は急いでテーブルの椅子に座り、その言語と首っ引きで意味を調べ始めました。

数分後、私はそれが封印のための、護符である事が判りました。
私はその後、昨日から読んでいる本も拾い出し、調べを進めました。
「ええと、ラドムア、ラドムアっと。あっ、見つけた。」
私はその古文書に書かれてある絵柄が、あの石像と同じものだと確信しました。
そしてラドムアを封印する方法として、護符が使われる事も知りました。

「このままでは、ラドムアの封印が解けてしまうかも知れない。」
私はその事に気が付いて、慌てて護符を持ってレイグルを飛び出しました。
そして護符を元通りに貼ろうと、石像に向かったのです。
その時、石像には異変が起こっていました。
魔物の姿の白い石像が、本物の黒い魔物へと変化していったのです。
黒い蝙蝠のような翼、人のような顔。３本指の手足。まさに魔物の姿でした。
「グワァー。」ラドムアは鳴き声を上げました。
おじいさんたちも、その存在に気が付いたのでしょう。
私と一緒に慌ててレイグルの中に、逃げ込んだのでした。
その後、私たちは窓から、ラドムアを見ていました。
ラドムアは飛びながら、自分が乗っていた台座に向かって、翼を一振りしました。
すると、台座の上に載っている石板が吹き飛んでしまったのです。
その台座の中からは、数体のラドムアが出現しました。
群れになったラドムアは、最初のうちは、赤の間全体を飛行していました。
しかし次第に、このレイグルの周りに、集まり出したのです。
「グワァー。」１匹のラドムアが、鳴き声を上げました。
それを合図に、全てのラドムアが一斉に、このレイグルに攻撃をしかけたのです。
あるラドムアは体当たりで、あるラドムアは爪で引っ掻いて。
「どうやら、あいつらは肉体を使った攻撃しか、出来ないようじゃな。
じゃが、このまま何もしないでおれば、装甲が破壊されるかも知れん。
ここは、積極的に交戦した方が、いいのかもな。」
おじいさんは、そう判断しました。
「じゃあ、どうするんです。」ガーネは尋ねました。

「とりあえず、レーザーを使ってみようと思う。
翼が焼き切れれば、攻撃は不可能になるじゃろう。」
おじいさんはそう言って、レーザー砲を準備しました。
「よし、レーザー砲。放射!!」
おじいさんはそう言って、何匹かまとまっているところへ、放射しました。
しかし、次の瞬間意外な事が起こりました。
ラドムアが、こちらが放射したレーザーを跳ね返したのです。
跳ね返されたレーザーは、別なラドムアに命中しました。
ところがそのラドムアも、そのレーザーを跳ね返したのです。
こうして何回か跳ね返されたレーザーは、レイグルの窓を直撃しました。
貫通こそはしませんでしたが、窓に亀裂が入ってしましました。
「いかん。防御シャッターを降ろすのじゃ。」
私はおじいさんの声を聞いた後、急いでその通りにしました。
そしてとりあえずですが、ホッとしたのでした。
「まさか。レーザーを跳ね返すとはな。
はてさて、これからどうしたものか?」おじいさんは悩んでしまいました。

レーザー砲が逆にレイグルにダメージを与えた事で、みんな唖然としていました。
「とりあえず、いろいろ試してみようかの。」
おじいさんは、ロボットアームに火炎放射器を取り付け、放射しました。
しかしその炎も、レイグルへ跳ね返されてしまいました。
「ゾア博士。火力をぎりぎりまで、弱めたらどうなりますか?」
ガーネのこの発案が、実行されました。
その結果、跳ね返る事はありませんでした。
しかし、ラドムアにダメージを与える事は出来なかったのです。

「やはり、駄目じゃのう。」
「でも、判った事もあります。
ラドムアは、身体全体に赤い膜をまとって、攻撃を遮断している事。
その防御の際には、動く事が出来無い事。
この2つです。
とりあえず、こちらから攻撃をしている間は、動けないという事です。」
「ガーネ。確かにあなたの言う通りだと思うわ。
でも、それだけではあのラドムアを、どうする事も出来ないわ。」
「本当ね。どうしたらいいのかしら。」
トラちゃんもそう言って、首をかしげていました。
みんなが対策に悩んでいる間も、ラドムアの体当たりは続いていました。
「まずいの。このままではいずれ、装甲にダメージを喰らってしまうぞ。
それにしても、ここは少し暗いの。あやつらがカメラに見えにくい。
ライトでも、付けるとするかの。」
おじいさんはそう言って、レイグルのライトを全部点灯させました。
その時です。
あれほど執酷迫っていたラドムアが、一斉にレイグルから離れて行ったのでした。
「どういう事なのじゃ。」おじいさんが首をかしげていました。
「私が直接、様子を見てきましょう。」ガーネがそう言いました。
「大丈夫なの?」トラちゃんは、心配そうに尋ねました。
「念のため、水圧洗浄ガンを持っていくよ。
ラドムアが襲ってきても、多分足止めぐらいにはなるだろうと思う。」
ガーネはそう言って、水圧洗浄ガンを抱えて、外に出ようとしました。
「待って。それなら私も行くわ。援護してくれる人がいた方が心強

いでしょう。」
私はそう言って、ガーネと同じ装備で、一緒に出て行きました。
「待って。あたしも行くわ。」
トラちゃんはそう言って、ガーネの肩に飛び乗りました。
「でも、危険だと思いますが。」
「大丈夫。空は飛べなくても、速さならあいつらには負けないわ。お願い。一緒に行かせて。」
ガーネは、ちょっと考え込んでいるようでした。
ですが、大丈夫だろうと判断したのでしょう。一緒に行く事に同意しました。
「じゃあ、わしは残っておるからの。何かあったら、直ぐ連絡するんじゃぞ。」
おじいさんのその言葉を背に、私たちはレイグルの外に出て行きました。

レイグルから降りてみると、確かにその周りには何もいません。
ですが赤の間の奥に、ラドムアはこちらを見ながら飛び回っています。
私はガンを構えたままで、あたりを警戒しました。
ですがガーネは、ガンを下ろしたまま、赤の間の周りをぐるりと眺めていました。
しばらくした後、ガーネの独り言が、聞こえてきました。
「そうか。そうなのかもしれない。」ガーネは、そうつぶやいていたのです。
ガーネはトラちゃんを肩から下ろして、手の上に載せました。
「頼みがあります。しばらくの間、トラを頼みます。」
ガーネはそう言って、トラちゃんを私に手渡しました。
そして水圧洗浄ガンも、私に手渡したのです。
「ガーネ。どうするつもりなんです?」「ガーネ?」
私たちは、口々に尋ねました。

「ちょっと思い付いた事があるんですよ。
でも、少し危険かなって思ったので、念のため、トラを預けるだけです。
多分、心配無いと思いますけどね。」
ガーネはそう言いました。
その後、ガーネは腰を下ろし、両手を地面につきました。
まるで、徒競走のスタート地点に、立っているかのようです。
ガーネは少し腰を上げて、こう言いました。
「用意、スタート。」ガーネはその声とともに、駆け出して行ったのです。
私もトラちゃんも驚いて、声を発する事も忘れ、それを眺めていました。

赤の間の奥へ走り出したガーネを、ラドムアが一斉に襲いかかりました。
ガーネを追っかけていたラドムアが一斉に、離れ出したのです。
ガーネは、その1匹の翼をつかみました。
そして、右側の壁の方に、その身体を向けたのです。
壁にはところどころ隙間があり、そこから陽の光が漏れていました。
ガーネは、じたばたするラドムアを、その光にさらしたのです。
「グワァー。」ラドムアは、断末魔の叫び声を上げました。
そしてその身体は、みるみる間に白くなってしまったのです。
ガーネは、自分がつかんでいた、ラドムアの翼を離しました。
すると、ラドムアは石のように鈍い音を立てて、床に落ちたのでした。
「やった!」私は、トラちゃんと一緒に喜びました。
その後、残りのラドムアに追いかけられて、戻ってくるガーネを援

護しました。
２つの水圧洗浄ガンを両腕で構え、放水したのです。
トラちゃんもガーネの肩に飛び乗り、鉤爪を振り回して威嚇していました。
そのためガーネは、ラドムアに捕まえられる事無く、戻って来れたのです。
「有難う、レミアさん。そしてトラ。」ガーネは私たちに、お礼を言いました。

私たちは、レイグルに戻りました。
「ガーネ、よくやったの。よく弱点を見つけてくれた。これであのラドムアに、一泡吹かせてやれるわい。」
おじいさんはそう言って、レイグルを動かし始めました。
「とすると、これから私たちのやる事は。」
私がそう言うと、おじいさんはうなずいてこう言いました。
「当然、これじゃろうて。」
私たちは、全員歌い出しました。
「♪♪邪魔する奴らは、ぶっ潰せ。」「♪♪私らいつでも、力押し。」
レイグルは思いっきり、赤の間の右側の壁に突進したのです。
その結果、その壁は私たちの思惑通り、こなごなに破壊されました。
と、そこから強い陽の光が、赤の間全体に差し込んできたのです。
「グワァー。」「グワァー。」
多くのラドムアの断末魔が、聞こえてきました。
しばらく経った後、私たちは赤の間へと、戻って行きました。
レイグルを降りて、私たち全員、歩き出しました。
その床には、いたるところにラドムアが落ちていました。
その身体は、白く石のような状態に、なっていました。
私たちが初めてここに来て見た石像と、同じ状態だったのです。
私たちは、全部のラドムアが落ちている事を、確認しました。

その後、私たちは全員、横1列に並びました。
全員で股を開き、左手は腰に当てて、右手は前に出してVサインを掲げました。
そして口を揃えて大声で、力いっぱい叫びました。
「勝利！！」

さて、後片付けが残っています。
白く石になったラドムアを片付けようと、彼らの台座の中をのぞきこみました。
すると、陽の光に照らされて、中でキラリと光るものがありました。
「魔物の、お墓の中に入るのは嫌です。」
そう言って、駄々をこねるガーネを黙らせ、中に入らせました。
その後、台座から出てきたガーネが持っていたものは、小さい箱1つでした。
それをとりあえず傍らに置き、後片付けを再開しました。
白く石になったラドムアを、元の台座の中に、放り投げました。
その後、石板でふたをして、残った一匹のラドムアを、その上に載せました。
それが終わると、3枚の護符を水で濡らし、貼り直しました。
これで、封印は終了です。もう2度と現れる事は無いでしょう。
私は先ほど見つけた小箱を、小脇に抱えました。
そして私たちは、今や、我が家であるレイグルへと、戻って行ったのです。

レイグルに戻った私は、テーブルにその小箱を置きました。
全員が見守る中、私はその小箱を開けるため、止め金具を外そうとしました。
しかし鍵が必要らしく、外す事が出来ません。
「どうしたらよかろう。」
頭を抱えるおじいさんに、私は笑って答えました。

「大丈夫ですよ。こんなちゃちな鍵、いつでも開けられます。」
私はそう言って、私のお気に入りの私用カバンから、ある物を取り出しました。
それは、ちょっと太目の針金で、変な形にねじれた物です。
特に名前は付けていません。まぁ、「万能合鍵」とでも命名しておきましょう。
いや、それより「万能出会い鍵」の方がよかったりして。
私はそれを、小箱の鍵穴に差し込みました。
そして耳をあてながら、それを動かしました。
しばらくすると、「カチリ。」と音が聞こえました。
「ふん。ちょろいわ。」
私は心の中で、ほくそ笑みながら、止め金具を外しました。
「すごいすごい。」トラちゃんは興奮して、私を褒め称えました。
「いやぁ、大したもんじゃよ。」おじいさんも、絶賛です。
「本当にすごいですね。どこでそんな技術を、身に付けたのですか？」
ガーネも、賞賛しました。
「実は私、小さい頃から、鍵を無くしてしまう事が、度々あったんです。
それで鍵を無くしても、開けれるように、個人的に修行していたんです。」
私は、長年の修行の賜物である事を告げました。
その私の告白を聞いた全員が、また更なる拍手を私に送ったのでした。

私は小箱のふたに、手をかけました。
全員が、ごくりと喉を鳴らす中。ゆっくりとそのふたを開けました。
「おおっ！！」全員から、どよめきの声が聞こえました。
その中には、まばゆいばかりに、赤く光り輝く石があったのです。
「これは！」私はそれを手に取り、その神々しさに心を打たれまし

た。
「わしには石の事はよく判らんが・・・。
多分、宝石と見て間違い無いんじゃなかろうか。」
おじいさんも、心なしか声を震わせながら、そう言いました。
「おめでとうございます。レミアさん、ゾア博士。」
「よかったわね。レミアお姉ちゃん。」
ガーネとトラちゃんが、私たちに祝福の言葉を捧げました。
私は、感動で胸が張り裂けんばかりでした。
ここに来て、どれくらいの時が経った事でしょう。
私は、いや私たちはやっと、念願だった宝石を手に入れたのです。
例え、それが1つであったとしても。
今までの苦労が無駄でなかったと、感じさせるには十分の証(あかし)でした。

その後、私たちはテーブルに集まり、ミーティングを始める事にしました。
議題は、ズバリ、どこに行くかでした。
「赤の間は、あの小箱のあった台座以外も、探索したがの。
他には、特にこれと言った物も、無かったわい。
そこで、一旦、大広間に戻るわけじゃが。
次はどこに行こうかの。残りは後2つ。緑と青の出入り口じゃ。」
とおじいさん。
「どちらでもいいですよ。レミアさん、選んで下さい。」とガーネ。
「レミアお姉ちゃん。お任せ。」とトラちゃん。
「あのね、ガーネとトラちゃん。今ミーティングをやっているのよ。
ミーティングって言うのはね。
話し合うから、そう言うの。丸投げでは駄目なのよ。」
私はそう言って、たしなめました。
「じゃあ、緑。」「じゃあ、青。」既にグダグダの状態でした。
「もう少し考えてから・・・。」「何を考えるんですか?」
「だからどこに行こうって・・・。」「考えたら判るんですか?」

「それは・・・。」
「アーア。レミアお姉ちゃん、私おネム。」トラちゃんが大きい欠伸をしました。
「アーア。レミアさん。私おネム。」とガーネ。
「アーア。レミアよ。わしおネ・・・。」「やめんかい。」
まぁ、無理もありませんね。どこがいいなんて、誰も知らないんですから。
これ以上、グダグダにならない前に、お開きにしましょう。
まだ、午前中だと言うのに、眠たがっている人間と猫がいますしね。
本当は私も眠いんですよ。夜中に本なんか読みふけっちゃたし。
「では、大広間に戻ったら考えると言う事で。これでお開きとします。」
「はーい。」全員でハモッた後、みんなその場でばててしまいました。
確かに、今回は精神的に疲れる戦いだったと思います。

「ちょっとの間、休みましょう。」
私は、軽い足取りで、自分のベッドに向かいました。
私のベッドは、2階にあります。
「♪♪ランランラン。」いつものはしご登りも、楽しくてたまりません。
あっという間に着きました。
ただこの時、ちょっとだけ違和感がありました。
ですが、この時の私はとにかく浮かれていたので、気にもしませんでした。
ここレイグルでは、誰にも個室と名の付く部屋などありません。
巨大な貯水槽や燃料タンク、そしてエンジン。これらが幅をとっていたのです。
それなので、かろうじて個室と呼べるのは、ベッドの上だけとなります。

この2階建てベッドの2組が、私たちの部屋というわけです。
プライバシーはカーテン1つきり。まぁ、それでも何とかやっています。
最初はおじいさんと二人きりで、そんなに気にもしませんでした。
おじいさんはベッドよりも、運転席などに座っている事の方が多かったし。
そうそう、あの運転席は、１８０度倒す事が出来るリクライニング方式です。
つまり、あそこで寝る事も可能。
さすがは、おじいさんです。やる事にそつがありません。
他はどうでも、自分の快適さだけは、しっかり確保しているのです。
それに引き換え、私が1人で落ち着いていられるのは、この場所だけです。
ですがそれも今は、ガーネやトラちゃんが一緒。
トラちゃんは、それほど気にしませんが、問題はガーネ。
寝姿などを見られて、私の魅力に気付いてしまったら、危険です。
それに私は素顔という、個人的プライバシーをさらけ出しています。
にもかかわらず、ガーネは相変わらず鉄の仮面で、素顔を隠しているのです。
これまでいろいろあったので、信頼関係は多少なりとも、生まれてはいます。
でも、何か油断出来ないものを、常に感じているのも確かなのです。
まぁ、それはともかく。

私はあの小箱を、このベッドに持ち込んでいました。
「♪♪ランランラン。」私はその小箱を開け、中の赤い秘石を取り出しました。
寝ながら右腕を伸ばして、赤い秘石が良く見える位置に合わせました。
赤い秘石。恐らく数千年前から、あそこにあったのでしょう。

少し、不透明でした。磨けば綺麗になるのかしらん。
思えば、不思議な出会いです。
２００年に１度しか現れる事の無い神殿に、この秘石は眠っていました。
しかも、魔物ラドムアのお墓の中で。
本来であれば、私たちの出会いなど夢物語です。起きるわけがありません。

でも今、悠久の時を経て、私はこの秘石を手にしています。それは確かな事です。
この秘石は、どんな時の流れを過ごしたんでしょう。
多分、あそこに保管される前に、いろいろな所に行ったんじゃないでしょうか。
この輝きです。
神族、人間、そして魔族。
いろいろな者の手を伝わって、ここに来ているのでしょう。
この秘石が私の手元に来るまでに、歩んできた道のりや時の流れ。
そしてかかわりあった多くの者たち。
それらは、私には想像も出来ないほどの、広がりがあるに違いありません。
まだ箱庭で生きている私にとっては、それは宇宙のような広がりでしょう。
「宇宙（そら）か。」私はまた、空想の世界に入っていきました。

私は今、ベッドで寝ているのではありません。
果てしなく大きい宇宙の中を、流れているのです。
私の周りには、月やたくさんの星がその光をまたたかせています。
まるで、その１つ１つが自分たちの命を主張しているかのように。
そんな中でも、ひっそりとした静寂さが保たれています。
本当の静寂。何も聞こえる物などありません。

そんな静寂の中。
その星たちの間から、１つ、また一つと私の方へ流れて来る星があります。
私は、それをつかもうと手を差し出します。
でもその星たちは私の開いた手やその指の間から、こぼれていってしまいます。
手のひらに載っても緩やかに動いて、またすり抜けてしまうのです。
つかめそうで、つかめない。ありそうで、あり得ない。
私は、そんな宇宙をただあてもなく、ひたすら流れて行くのです。
私の肉体は時が経てば、いずれ朽ちてしまう事でしょう。
すると私の魂はどこへ。
消滅してしまうのでしょうか、それとも。
ひょっとしたら、この広大な宇宙に輝く、１つの星になってさまようのかも。
だからつかめない。だからあり得ない。
私も、そんな星たちと一緒に、この宇宙をひたすら流れて行くのかもしれません。
私もまた、この宇宙で生まれた命の１つなのだから。

「あたしも宇宙に行きたい。」
「えっ！」私は驚いて、私のすぐ横から聞こえる、声の主を見ました。
トラちゃんでした。
「トラちゃん。ここは私のプライベートルームなのよ。
黙って入って来てはいけません。」
私はそう言って、たしなめました。
「でもこのベッド、あたしのなんだけど。」トラちゃんがそう訴えました。
「えっ！」私は再び驚いた後、向かい側にある２階建てのベッドを見ました。

確かに、いつもと違う光景です。
その上に、向かい側の2階にあるカバンは、紛れも無く私の物でした。
よく考えてみれば、私のベッドには、いろいろな物が置いてあります。
だから、こんなに広い筈が無かったんです。
私の方が断りも無く、トラちゃんの部屋に、ズカズカ上がっていたのでした。
「ごめんなさい。」私はトラちゃんに、謝りました。
「いやあ、判ればいいんですよ。」1階で声がしました。
私が下の階をのぞくと、そこにはガーネが寝転んでいました。
「やぁ、こんにちわ。」手を上げて愛想よく、私に挨拶をしました。
私は、恐る恐る聞きました。
「ええと、私はさっきから、何か喋っていましたか?」
「うん。レミアお姉ちゃんは声を出して、独り言をつぶやいていたわ。
その上、あたしがここに転がり込むのにも、気が付かないようだったの。」
「本当ですよ。私の方でも聞こえましたから。」
「で、私が何を話していたか、判っちゃったんですか?」
「もちろんです。」「当たり前じゃない。」
「で、どのあたりから、お聞きになっていたんでしょうか?」
「ええと、確か「箱庭」とか「宇宙か。」と言った単語が出てきたあたりから。」
私は、顔が火照ってきたのが判りました。
恥ずかしくてたまらなくなり、毛布で顔を隠しました。
そしてもう一度、小さい声でこう言いました。「ごめんなさい。」

第8話「正と邪の女神。」4つめですね。(終)

第8話「正と邪の女神。」４つめですね。（後書き）

今回のお話は、第８話「正と邪の女神。」の第４回です。
今まで平気で、第８話「正と邪の女神。」の第４話なんて書いていましたね。
済みません。第４回が正解ですね。後で全部直そうかしらん。
でも、面倒なので、これからはという事で、ご了承下さい。

何か、戦いが中心の、お話になってしまったような気が・・・。
まぁ、魔物も強くなっていくんだし、仕方が無い事ですね。

今週は台風で、少し暑さは和らぎましたが、湿気は相変わらずです。
と言っても、今日は涼しかったです。
だから、早めに投稿する事にしました。

みなさん、体調は如何でしょうか？
これから、どんどん暑くなります。
お身体をお大切に。

なるだけ、１週間に１回ぐらいは、投稿したいのですがね。
今度はいつ頃になるのでしょうね。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第8話「正と邪の女神。」5つめですね。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第8話「正と邪の女神。」5つめですね。のお話です。
この回では、緑の間で、ゴーレムのサドラスと戦います。

第8話「正と邪の女神。」5つめですね。

第8話「正と邪の女神。」5つめですね。

私たちは、大広間の中央に戻りました。

「さてと、これからどちらへ行く？」

おじいさんは、私たちに尋ねました。

「さっきも話し合った通り、特にこっちがいいという事も無いわ。だから普通に、2番目の出入り口に進みましょう。」私はそう言いました。

「2番目じゃの。了解。」

おじいさんは私の意見を受け入れて、2番目の出入り口に進みます。

そこは、出入り口もその通路も緑色でした

赤の間と同様、幾らも経たないうちに別の広間に出ます。

「ここが緑の間というわけじゃな。」

私たちはレイグルに乗ったまま、その部屋の中央まで行くつもりでした。

ですが、部屋の中に入った途端、ガシンと音がして、床が崩れてしまったのです。

「ウワァ。」レイグルはそのまま、地の底に落ちて行きました。

暗くて何も判らない所を、ただひたすら落ちて行ったのです。

でも、それは時間にして、あっという間の出来事だったのでしょう。

「ザブーン。」気が付いてみたら、私たちのレイグルは水の中に落ちていました。

おじいさんはレイグルのライトを、全部点灯させました。

その結果、私たちは今、地下洞の湖に浮かんでいる事が判ったのです。

「ホバークラフト展開。」

おじいさんは車両を収納し、水上でも走れるホバークラフトを展開

しました。
「格好いい。変形メカなのね。」「いやあ、なかなかいいんじゃないですか。」
モニターで映し出されている、機体変形動作にガーネとトラちゃんは大喜びです。
私は何度も見ていますし、その事自体に興味はありませんでした。
ただ、このおかげで助かったのは、間違いありません。
ですから、これを作ってくれたおじいさんに、あらためて感謝しました。
「おじいさん、子供の頃に見た子供番組のおかげですね。」

ホバークラフト化したレイグルは、順調に走行しました。
しばらくすると、岸を確認する事が出来たので、そこに降りて見ます。
「ここまで来てしまいましたが、この先どうしますか?」
ガーネはおじいさんに尋ねました。
「探索をしたいが、その前にこの湖の水質検査をしたいの。」
「えっ、おじいさん。それは何でですか?」
私はすぐに、周りの調査を始めるものとばかり思っていたのでした。
「今、レイグルの貯水槽にある水は、何度も再利用されておる。
もし、この湖の水が飲料用に耐える物なら、それと取り換えたいのじゃよ。
もちろん、品質は今の状態でも良好なのじゃが、いい機会なのでな。」
そうか。そうですよね。私は、このおじいさんの意見をもっともだと思いました。
良く考えてみれば前回、水を取り換えたのはかなり前の事です。
やはり、このあたりで換えた方が無難かもしれませんね。
「判りました。では、調べて見ましょう。」
私は水質検査器具を持って、湖の水を調べ始めました。

見た限りでは透明度も高く、とても清らかな水に思われます。
しばらくして、検査結果が出ました。
良好です。飲み水として、何の問題もありません。
私は早速、手ですくって飲みました。「美味しい。」その一言です。
私たちは、その場所でしばらくの間、休憩する事にしました。
その理由は、「泳ぎたい。」と私が言い出したからです。
こんな綺麗な水の中を泳げるなんて機会は、めったにありません。
私はためらう事無く、進言したのでした。
「やれやれ、判ったわい。
じゃが、その前に貯水タンクの水の入れ替えが先じゃ。」
おじいさんにそう言われ、しぶしぶ、それを待つ事にしました。
もっともその間、ただボーっとしていたわけではありません。
私はガーネにも手伝ってもらって、水筒や空きボトルなどに、水を補充します。
なんのかんのとやっている内に、貯水タンクの水の入れ替えも終わりました。
「さあ、泳ぎましょう。」
私とトラちゃんは、湖に潜りました。
一方、ガーネは、おじいさんの臨時の助手として、作業を手伝っています。
それまでは、私は、水着を着る機会なんて無いと思っていたのです。
ですが念のためと、持って来たのが幸いしました。

「ザブーン。」水しぶきを上げながら、私たちは湖に飛び込んだのです。
最初は、キャッキャッ言いながら、交互にかけ合って楽しんでいました。
トラちゃんは結構、泳げるようです。
私も、童心に返ったようにはしゃいでいました。
その後、透明度の高い水の中を泳いでいきます。

レイグルのライトが明るいのも、私たちには好都合でした。
ある程度の距離や深さまで、潜る事が出来るからです。
そんな範囲でも魚影が濃く、魚がいっぱい泳いでいます。
しかも、いい型が結構いるのです。
私は魚の手づかみを、試してみる事にします。
レイグルから要らないバケツを持ってきて、それに水を注ぎました。
これで準備完了。私は再び、湖に潜りました。
魚は私に対し、、何の警戒もしていないようです。
むしろ、向こうから寄って来さえします。
私は、寄って来た魚に手を伸ばしました。
すると、どうでしょう。何の苦労も無く、簡単に獲る事が出来たのです。
私はそれを用意したバケツの中に放り込みました。
トラちゃんも、魚の手づかみに参加します。
トラちゃんは鉤爪で魚を引っ掛け、口にくわえた後、岸に上がりました。
最初の一匹はその場で食べたようでしたが、それ以後はバケツに入れています。
みんなの協力もあり、あっという間にバケツをいっぱいにする事が出来たのです。

私たちはまだお昼を食べていませんでした。
いつもビスケットだけだったので、さすがに飽きてきています。
特に私とおじいさんは、この生活が長いのでなおさらです。
私たちは、レイグルからキャンプ用のコンロなどの料理器具を持ち出しました。
これも念のためと、持参しておいたのが幸いしたのです。
一回も使っていなかったので、燃料は十分。
私たちは水洗いして、内臓を取り去った後、焼き始めました。
時間が経つにつれて、焼き色も付き、油もうっすらと浮かんできま

す。
そろそろ、食べる頃合いと、火から降ろしました。
「頂きます。」全員で、その焼き魚をパクリと食べました。
「あっ、とても美味しいです。」とガーネ。「いいわね。これ。」
とトラちゃん。
「うん、いい塩加減じゃ。」とおじいさん。
「久しぶりのお魚。美味しいわ。」と私。
水が綺麗なせいかも知れませんが、なかなかの美味しさでした。
ビスケット以外の物を、久しぶりに食べたせいもあったと思います。
そんなこんなで私たち全員、１匹も残す事無く、食べ尽くしたのでした。

腹が膨れた後、しばらく休憩をしました。
他愛も無い雑談をした後、後片付けを行ったのです。
さて、時刻はもう午後。そろそろ出発しましょう。
私たちは、レイグルに乗り込みます。
すると、おじいさんがこんな事を言い出しました。
「とりあえず、ジェミコを使って、この地下洞を調べてみよう。」
「ジェミコって何ですか？」ガーネはそう尋ねました。
「ジェット・ミニ・ヘリコプター、略してジェミコじゃ、
まぁ、小型無線探索機というところか。」
おじいさんはそう言って、傍らのＢＯＸより、ジェミコを取り出します。
「これがジェミコじゃ。」
それは、両手で持てるぐらいの大きさのボールでした。
それをおじいさんは、左手側にある丸い引き出しを開けて、その中に入れます。
その引き出しを戻すと、カタンと音がしました。
「よし、射出じゃ。」おじいさんは近くにあるボタンの１つを押します。

すると、レイグルの上の方から、あのボールが空気圧で射出されました。
その後すぐにボールが変形し、プロペラが回り始めました。
「準備完了じゃ。」
おじいさんは、ジェミコ専用コントローラーを取り出し、操縦を始めました。
「ラジコンみたいなものなんですね。」
「見たいなでは無く、ラジコンそのものじゃよ。まぁ、高性能ではあるがの。
ガーネ、どうじゃ。ちょっと触ってみんか?」
「え、いいんですか。」
「構わん。ちょっとやそっとの操作で壊れるほど、柔な代物ではないのでな。」
おじいさんはそう言って、コントローラーをガーネに手渡します。
「これは・・・。2スティックタイプですね。これなら扱いやすそうです。」
「頼むぞ。ほれ、レーダーとモニターはこれじゃよ。」
レーダーもモニターも、コントローラーに装備されていました。
モニターは2つでした。
ジェミコ自身が映し出されている物と、ジェミコが映している物でした。
これらを見ながら、ガーネは操縦を始めます。
「ガーネ。どう?操縦出来そうなの?」
何だか楽しそうに、トラちゃんはガーネに話しかけていました。
「操縦だけなら、あのスカイダーと同じやり方みたいです。
なんとかやれそうですよ。」
ガーネも何故か、目をキラキラさせながら、モニターを見ていました。
何がそんなに嬉しいんでしょうね。
私はもともと、メカものには興味が無いので、ただ黙って見ている

だけでした。
ジェミコはこの地下洞全体を次々と、私たちに目の前に映し出してくれます。
その結果、この湖が案外、大きい物だと判ったのです。
この地下洞を1通り調べた後、ジャミコに記録された映像を確認して見ます。
私たちはその映像の中に、大きな砂の山が映っているのを発見しました。
そしてその後ろに石壇があり、長方形型の箱らしき物が映っていたのです。
「ひょっとして、またお宝かも。」私は期待に胸が踊りました。

「発進！」レイグルは湖の上を走りました。
目的の岸にたどり着くと、おじいさんはホバークラフトを解除します。
そして今度は、キャタピラにて走行を開始したのです。
やがて、あの砂山が、私たちの目の前に現れました。
私たちは降りるために、シートベルトを外そうとした時です。
突然、その砂山が、高くせり上がり、大きな巨人の姿に変身しました。
「ゴーレム。あれはゴーレムだわ。」私はそう叫びました。
ゴーレムはドシンドシンと、地響きを立てながらこちらに向かって来ます。
「いかん。ここはひとまず退散じゃ。」
おじいさんは、ゴーレムを背に、急いでレイグルで逃げます。
幸い、ゴーレムはレイグルの走行速度に比べれば、かなり遅い歩みでした。
このまま逃げ回っていれば、多分追いつかれる事は無いでしょう。
「と言ってもじゃ。このままでは燃料切れになってしまわないとも限らん。

何とか早く手を打たねばな。」
おじいさんは運転をしながら、私たちに対策の検討を促しました。
「レミアさん。ゴーレムの事で、何か役に立つ情報はありませんか？」
「そうねぇ、無い事も無いわ。
但し、それは私が今、読んでいる本からの情報でしか無いの。
だから正しいかどうかは判らないけどね。」
「それでも構いません。どうか聞かせて下さい。」
「そうね。私たち、こういう事にはうといもの。
レミアお姉ちゃん、何か参考になる事があるなら、是非聞かせて。」
実際、事態は緊急を要します。
それは、レイグルのモニターや後部窓から外を見れば、一目瞭然です。
ためらっている場合ではありません。
「ゴーレムの身体は、魔術師が土や泥あるいは砂を利用して造ったものなの。
その身体に何枚か護符を貼りつける事によって、命が吹き込まれるというわけね。
ゴーレムを倒すには早い話が、その護符を破ってしまえばいいの。
事の真偽はともかく、そんな風に書かれてあったわ。」
私は若干得意げに、話をしていました。
人に何か教えると言うのは、結構気持ちがいいものだと気が付きました。
私、教職も採ろうかしら。
そして、ゆくゆくは考古学の教授にでもなろうかしらん。
私の思いは、既に未来へと羽ばたいておりました。
念のために言っておきますが、これは現実逃避ではありません。
ゴーレムに潰されるのではないかという、不安を払拭したいからではないのです。

その点は、誤解の無き様に。

「他に対策が無い以上、この説を信じるしか無いでしょう。ゴーレムの護符を見つけて破きましょう。」ガーネはそう提案しました。

「そうね。他にどうしょうもないもの。」とトラちゃん。

「では、決まりじゃな。

ガーネ。先ほどと同じようにジェミコを操縦して、護符を見つけてくれ。」

「判りました。」

ガーネは手元にあったコントローラーを操縦して、ジェミコを操作しました。

「レミアさん。トラ。一緒にチェックをお願いします。」

ガーネから声がかかり、ひとまず私は、自分の将来設計を中断しました。

そしてトラちゃんと一緒に、モニターチェックをしたのです。

ジャミコは、追いかけてくるゴーレムに接近しました。

そしてゴーレムの頭から足までを、丹念にぐるぐると回ったのです。

「あっあそこ、・・・あそこもそうじゃない。・・・そしてあそこにも。」

運転中のおじいさんを除く全員が、必死でモニターを眺めていました。

護符が見つかる度に、それを記録したのです。

1通りのチェックを終わった結果、護符は3枚と判りました。

「首の右側の付け根、左足首の内側、

そして右腕の脇に隠れている胴体部分の3枚ですか。」

ガーネはそう言い、私たちもうなずきました。

「これで護符の場所は判りましたが、どうやってあの護符を破りましょうか?

レミアさん、何かいい考えはありますか?」

「もし、あの本に書いてある事が真実なら、火や水では駄目なの。もちろんレーザーもね。」
「えっ、それは何故なんですか？」
「護符は、生きている物の手で無ければ破れないの。それ以外だと、護符にかけられている力で跳ね返されてしまうの。」
「本当でしょうか？やってみる必要がありますね。」
ガーネは、レイグルで試してみる事を提案しました。
レイグルから、一番狙いやすい首の護符に、レーザーを命中させます。
すると護符が赤く輝き、レーザーを１８０度跳ね返したのです。
その結果、発射した後部のレーザー砲が破損してしまいました。
それをレイグルの乗っている全員が、モニターとその時の衝撃で確認したのです。
「ガーネ、今のは。」私の声は震えていました。
ガーネはうなずいて答えました。
「確かに、あれはラドムアの防御と全く同じです。
多分、護符どころか、あのゴーレム自体にもその力が備わっているのでは？
だとすれば武器を使っての攻撃は一切、出来ないでしょう。」
「レミアお姉ちゃんの言っていた事が、正しかったわけね。」
トラちゃんも、それが事実である事を認めました。
「自分が言いだした事なんだけど、まさか事実とはね。厄介な事になったわ。」
私は愚痴をこぼしました。
「大丈夫。あたしが行く。」
そう言って、前に進んだのはトラちゃんでした。
「でも、どうやって。」私は尋ねました。
「あのゴーレムを見てよ。身体は、石のブロックで構成されているわ。
私ならその間接部分を足がかりにして、身体中駆け回れる。

私は生き物だし、この鉤爪も私の身体の一部よ。
きっと全部の護符を破れると思うの。」
トラちゃんのこの言葉に、私は勇気づけられる思いでした。
「そうね。トラちゃんならうまくやれるかも。ガーネ、あなたはどう思う。」
多分、ガーネも賛成するだろうと思っていたのですが、その答えが意外でした。
「駄目ですね。絶対に出来ません。」
「あの、どうしてなのでしょうか?」「そうよ。何故なの?」
私とトラちゃんが、口々に尋ねました。
「トラ、あれを見てご覧なさい。」
ガーネがそう言って、指さしたのは後部窓です。
そこには追いかけてくる、ゴーレムの姿がありました。
「ゴーレムの走行速度は、確かにレイグルよりは遅いでしょう。
でも、それなりの速さで、迫って来ているのも事実です。
それに御覧なさい。
あのゴーレムが走る度に、砂が撒き散らされたり、戻ったりしているでしょう。
あんな状況下での移動は、あなたと言えども無理です。
トラ、あなたがあのゴーレムの身体の周りを、駆け回るにはね。
どうしても、ゴーレムの動きを停止させる必要があるんです。」
なるほどね、それはもっともだわ。私もそう思いました。
トラちゃんも頭をうなだれて、ため息をついています。
ガーネの意見が、正しいと思ったからでしょう。
「いや、あのゴーレムの動きを止める方法はあるぞよ。」
おじいさんが運転しながら、私たちの会話に入って来ました。
それにしても器用ね、このおじいさんは。もうお年でしょうに。
私もこれぐらいの器用さが欲しかったかも。私は切実にそう思いました。
「どうするつもりです。」とガーネ。

「左右のロボットアームに、ロボットハンドを装着する。
それで、あのゴーレムを押さえようと思う。」
「ええと、それってつまりロボットの手のような感じなんですか？」
「そうじゃ。人と同じ5本指での。あのゴーレムと一緒じゃよ。」
「大丈夫ですか。向こうの強さは半端じゃないと思いますが。」
「わしがこのレイグルを造ったんじゃ。わしを信用してもらおう。
ただ、燃料切れはまずい。早めに護符を破いてもらわんとな。」
おじいさんの言葉に、ガーネはうなずきました。
「それからじゃ。あと、こんなものを使ってみてはどうかの。」
おじいさんはそう言って、ガーネにある物を手渡しました。

「わぁーっ。面白い。」
トラちゃんは大喜びです。レイグルの中を、ガーネの操縦で飛び回っています。
今、トラちゃんの背中には、ジェミコが取り付けられています。
トラちゃんは、ジェミコの下部のダブルハンドで固定されていました。
「空飛ぶトラですか。
それにしても、よくこんな便利なオプションがありましたね。」
ガーネは感心していました。
「ジェミコは、単に探索機というだけでは無い。
小道具や薬箱を運搬したりするのにも、使われておる。
その際使用するのが、このダブルハンドでの。
これをジェミコに装着する事よって、運搬にも利用出来るようになったのじゃ。
以前、深い井戸に落ちた子猫を、助けるのにも使った事があっての。
これを使う事を思い付いたわけじゃ。」
「わーい。」トラちゃんは飛ぶ事が出来て、ご機嫌です。
実はおじいさんに、これを使って私も空を飛べないか、と打診した事があります。

ですが、その回答は短く、かつ残酷なものでした。
「重いのは、駄目じゃ。」
決して悪気があって、言っているので無い事は判ります。
ですが、私の繊細な心は、傷つけられました。
それ以来、この件に関して聞く事は、２度とありません。
今、そのジェミコを使って、トラちゃんが楽しそうに飛んでいます。
私はそれを見守りながら、うらやましさを募らせていました。
「そろそろ、練習はこのくらいでいいでしょう。」
ガーネは、トラちゃんを着陸させました。
「どうです、飛んだ感想は？怖くはありませんでしたか？」
「うーん。最初浮き上がった時は、少し不安だったわね。
でも、飛行が始まったら、後は楽しかったわ。」
なかなか、好評価のようです。
ガーネはトラちゃんの言葉を聞いて、決心したようでした。
「判りました。では、作戦を実行しましょう。」

「ゾア博士。ロボットハンドの装着は、どのくらいかかりますか？」
「もうやっておる。まもなく完了じゃよ。」
私はこの機会に、あのゴーレムの名前を決めようと思いました。
「ねぇ、あのゴーレム、何て言う名前にするの？
確か今回は、ガーネが名前を付ける順番だったわね。」
「えっ、そうでしたっけ。
ええと、それじゃあ、「サドラス」としましょう。
もちろん、名前に意味なんてありません。」
「了解です。」私は笑って、答えました。
おじいさんの言った通り、それから幾らも経たないうちに装着完了となりました。
「では、ロボットアームを動かすぞ。」
おじいさんは、左右のロボットアーム・ハンドが動くのを確認します。

その後、直ちにレイグルの機体を反転して、サドラスと対峙しました。
サドラスが力任せにこのレイグルをたたこうと、両腕を振りおろしてきます。
そこをレイグルのロボットアーム・ハンドが、がっしりと受け止めます。
互いの両手が組み合ったため、レイグルもサドラスも動けなくなりました。
「護符を破るのは今じゃ。」
ジェミコ＋トラちゃんは、その言葉を合図に、レイグルの窓から飛び出しました。

最初に、左足の護符を破りました。
「まずは1個ね。」
トラちゃんの装着しているジェミコからは、モニター信号が送られています。
それにより、トラちゃんの様子は絶えず、こちらのモニターに映っています。
また声の送受信も可能なので、孤立してしまう事はありませんでした。
次は胴体に貼り付けている護符です。一番難易度が高い場所です。
右腕の付け根近くの胴体部分に貼られている為、隠れて破りにくい筈でした。
ですが、今はレイグルが、サドラスの腕を押さえつけています。
そのため、楽に破る事が出来たのです。
最後は、首筋にある護符です。これは簡単です。
肩の上に着陸して、楽に破る事が出来ました。
「はい、これでおしまい。」
トラちゃんは、私たちの方を振り向きました。
「あら、ライトの光に照らされて、トラちゃんの歯がキラリと光っ

たわ。」
「日頃の成果ですよ。」
私の言葉に、ガーネは何故か自慢げにそう言って、胸を張りました。
トラちゃんは全ての護符を破ったので、レイグルに戻ろうとしています。
とその時、足元がぐらつき出したのです。
3つの護符が破れて、サドラスが砂の状態に戻ろうとしていたのです。
「ガーネ。早く。」
トラちゃんの要請を受けて、ジェミコは、最速でレイグルに戻りました。
「ただいま。」
「お帰りなさい。お疲れ様でした。」私とガーネはトラちゃんをねぎらいます。
トラちゃんは、ホッとした様子で、窓の外を眺めました。
その時にはサドラスは、完全に砂と化した後だったのです。
その砂の一部はレイグルも被りましたが、故障する程ではありません。
ガーネは、トラちゃんをジェミコから外しました。
トラちゃんは、足を伸ばしたり、首を捻ったりしています。
「やっぱり、あれは重かったのね。取り外したら、身体が軽くなったわ。
でも、面白かった。」ご機嫌のトラちゃんでした。

砂が静まった頃、私たちは砂山の後ろにあった石壇に近寄りました。
その上にはジェミコの記録通りに、長方形型の箱が載っています。
ガーネは、そのふたに手をかけます。
重いふたでしたが、鍵がかかっている事も無く、あっさりと開きました。
「これは。」

そこには一本の剣が、納められています。
ガーネはその剣を取り出して、鞘を引き抜いてみました。
「おおっ。」全員でどよめきました。
その刃から発せられている光が、黄金色に輝いていたのです。
「これはすごいですね。」ガーネはその輝きに圧倒されていました。
「じゃが、光が激しすぎる。これは宝刀というよりは、魔法剣じゃろな。
魔法の力で、輝いておるのじゃろ。
さしずめ、これから攻略する場所で使うアイテムと言ったところか。」
おじいさんの意見には、私も賛成でした。
お宝というには、発せられる光の力が尋常では無かったからでした。
ガーネは、剣を鞘に戻すと、おじいさんに尋ねました。
「で、これはどうします。ここに置いておきましょうか?
それとも、持って帰りますか?」
私はおじいさんが答える前に、すかさず答えました。
「持って行きましょう。この先何が起こるか判りませんし。
必要となることが、あるかも知れません。」
私の意見に、おじいさんもうなずきます。
そしてしばらく、あたりを見回した後、こう言いました。
「多分、ここにあるお宝は、これぐらいじゃろうて。
そろそろ、上にあがるかの。」おじいさんは、そう言いました。
「そうですね。でもどうやって、上にあがりますか?」
「先ほど録った映像の中に、らせん状の上り坂を見つけたのじゃ。
そこに行こうと思う。」
レイグルに戻った私たちは、その記録を調べてみました。
確かに、ここから少し走ったところに、そんな風に見える場所がありました。
「ここに、こんな箱があると言う事は、出たり入ったり出来ると言う事ですね。

多分、あそこがその出入り口なんでしょう。
他には、めぼしいところも無いようですし。じゃあ、ここに行きましょう。」
私たちはこの場所まで、レイグルを走らせました。

「ここですね。」予想通り、幾らも走らないうちに目的地に着きました。
確かにらせん状の上り坂があります。
私たちはその坂に沿って、上にあがって行きます。
ですが、その坂道の最後になって、レイグルを停止させました。
目の前が、壁になっていたからです。
私たちはレイグルを降りて、その壁に近づきました。
「完全に塞がっていまね。これでは進めないでしょう。」
ガーネは、がっかりしたようでした。
「そうじゃな。これではどうしょうも無い。」とおじいさん。
「折角、出られると思ったのにな。」トラちゃんもがっかりしています。
ですが、私はハンドライトを点けて、その壁を丹念に調べました。
こんなところに壁があるのは、どうしても不自然に思えてならなかったのです。
案の定、その壁には細工が施されていました。
本来、開いていた場所に、石を積み上げて塞いだ後が残っていたのです。
私がその事を指摘すると、おじいさんはこう言いました。
「なるほどな。
多分、誰かがここに入っても、楽に抜け出せないように細工をしたのじゃな。
じゃが、そうと判れば、ここから出る方法はある。」
おじいさんは、そう言いました。
「いつもの力押しですね。」ガーネは、当然のように言いました。

「そうじゃ。じゃが、この岩盤はひょっとして、他より固いかもしれん。
念のため、レーザー砲で切り取ってしまおう。」
私たちはその言葉を受け入れて、レイグルに乗り込みました。
おじいさんは、引き出しからキーボードを取り出しました。
「どうするんです。」ガーネが尋ねました。
「いやなに。コントローラーでも、レーザーを操作出来るのじゃがな。
あらかじめ、プログラミングした方が綺麗に切り取れるでな。」
おじいさんはそう言って、データを打ち込み始めました。
しばらくして、打ち込みが終わったのでしょう。
最後に、そのキーボードの右側にある大きなキーをたたきました。
すると、レイグルに装備された４つのレーザー砲から、ビームが発射されました。
まるで図形を描くように、四角く焼いて切り取っていきます。
やがて、作業が終了したのでしょう。レーザーが止まりました。
「よし。じゃあ、行くぞ。」
「おぅ。」みんな片腕を高く上げました。
「♪♪邪魔する奴らはぶっ潰せ。」「♪♪あたしらいつでも力押し。」
「ドガン。バターン。」
あっけなく壁は内側へ倒れて、レイグルは、中に入る事が出来ました。
そこは、あの緑の間の側面だったのです。
私たちが落ちたあの穴も、ぽっかり開いたままです。
私たちはレイグルを降りて、中を探索しました。
すると、部屋の少し奥に、細長い箱があったのです。
それは、あの地下洞にあった、魔法剣を納めた箱と同じ大きさです。
そのふたも同じように、鍵がかかっておらず、簡単に開ける事が出来ました。

中は空っぽです。ですがそこにも、剣を納めるくぼみがあります。
「もしかしたら。」
ガーネはレイグルからあの魔法剣を持ってきて、そのくぼみに納めました。
すると、どこからか「ガチャ。」と音が聞こえてきたのです。
ガーネの足元を見ると、その箱の側面から、引き出しが現れました。
私は、その引き出しに入っている物を、取り出してみます。
それは、小さな箱でした。あの赤い秘石が入っていたものと同じです。
ただ、向こうは全体が赤色だったにも関わらず、今回は緑がかった色でした。
私たちは、その小箱以外にも何かあるかもと、緑の間を探索してみます。
ですが、他にはお宝はありません。
それ以上奥に行ける、出入り口もありません。
私たちは、その小箱を持って、レイグルに戻りました。
そして例のごとく、私の「出会い鍵」で、その箱を難なく開けたのです。
「あっ、やっぱり。」
そこにも秘石と思われる石が、納められていました。
但し、それは緑色に輝く秘石です。
「また、お宝を発見したようですね。」
私たちは、全員、顔を見合わせて、にっこりとうなずきます。
午前中に引き続き、本日2度目のお宝を手に入れる事が出来たのでした。

第8話「正と邪の女神。」5つめですね。（終）

第8話「正と邪の女神。」5つめですね。（後書き）

今回のお話は、第8話「正と邪の女神。」の第5回です。
今回も、戦いが中心のお話です。

みなさん、体調は如何でしょうか？
暑さはともかく、湿気が多いです。
入力してても、手のひらや腕などから汗が・・・。

こちらは熱中症にもならず、何とか生きていますので、ご安心下さい。

なるだけ、1週間に1回ぐらいは、投稿したいのですがね。
今度はいつ頃になるのでしょうね。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第8話「正と邪の女神。」6つめですね。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第8話「正と邪の女神。」6つめですね。のお話です。
この回では、青の間で、屍人のオーガルと戦います。

第8話「正と邪の女神。」6つめですね。

第8話「正と邪の女神。」6つめですね。

今日はまだ陽も高かったので、再度、大広間の中央に戻りました。

「さて、いよいよ最後の出入り口じゃな。

出入り口が青色である事を考えると、多分青の間がある筈じゃ。

では、行こうとするかの。」

おじいさんはレイグルを走らせ、最後の出入り口の中へ向かいました。

予想通り、通路も青色です。

また他の間と同じように、幾らも経たないうちに別の広間に出る事が出来ました。

太陽の陽射しが、全く射しこまない真っ暗な部屋です。

「ここは、一番不気味な部屋だわ。」私は不安に駆られました。

私の言葉を聞いておじいさんは、レイグルのライトを、全部点灯させます。

部屋中がいきなり、明るくなりました。

「なるほど、確かに青の間ですね。」ガーネはうなずきました。

「見て、あれ。」私は思わず、ガーネの腕にすがってしまいました。

幾つかの石壇の中に、棺が1つ置いてあったのです。

「ここは、お墓なんでしょうか。」ガーネは首をかしげていました。

「ともかく、棺の中をあらためてみましょうか。」

ガーネはそう言って、棺に向かって進んで行きます。

私は、ガーネから離れてレイグルの傍に戻りました。

ガーネと、その肩に乗っているトラちゃんは、私の方を振り向きました。

「レミアお姉ちゃん、どうしたの?」トラちゃんが私に声をかけました。

「だって、それ棺でしょう。私、そう言うの苦手なのよ。」
私は、本音を言いました。
「大丈夫ですよ。出たってゾンビか吸血鬼ぐらいじゃないですか。」
ガーネは事もなげに言います。
「そうよ。大した事無いわ。」トラちゃんも恐ろしい事を言います。
私は今まで、仲間と思っていましたが、やはり少し違うようです。
何か周りにいる人全てが、怖くなってきました。
思わず後ずさりした私に、後ろから声がかかりました。
「おい。痛いじゃないか。」
「ギャアー。」
私は叫び声を上げ、咄嗟に逃げました。
ある程度、離れた後、恐る恐るその声のした方を振り向きました。
「何じゃ、人の足を踏んづけて。何をやっておる。」
私は、その姿を見て、ホッとしました。
それは、私が小さい頃から知っている年寄りでした。
「おじいさん、脅かさないで下さいよ。命が縮まるかと思いました。」
私は、安堵の胸を撫で下ろしました。
「そんな事は、どうでもいい。早く、ガーネたちのところへ行こうぞ。」
おじいさんは、私の背後から両肩に手を置いて、前へと押して行きました。
「ちょっと待って、おじいさん。お願いだから、押さないで。」
かわいい孫の言葉を聞く事も無く、嫌がる私を棺の前に連れて行きました。
「いらっしゃい。」「やっと来たのね。」
ガーネとトラちゃんが、それはにこやかな顔で、出迎えました。
「いやあ、孫が駄々をこねて申し訳ない。」
おじいさんが、わけの判らない謝り方をしていました。
この人たち、仲良すぎ。ひょっとしたら、ぐるなのでは。

もともと、悪魔に魅入られていたんじゃないかしら。
そして私を新しい生贄にして、自分たちの仲間にしようとたくらんでいるのでは。
私は、疑心暗鬼に見舞われました。
「じゃあ、開けますよ。」ガーネが張り切って、棺を開けようとしています。
私は逃げ出そうと、足を後退させました。
「おい、どこに行くのじゃ。」おじいさんが、私の肩をグッと押さえました。
もう駄目です。我慢にも限度があるんです。
私は、両手の拳を握りしめました。
と、その時です。
「あっ、青の小箱だ。」トラちゃんの嬉しそうな声が響きました。
「えっ。」私は思わず、ガーネが開けた棺の中をのぞき込みました。
「うっ。」次の瞬間、私は思わず、口を押さえました。
確かに青の小箱はありましたよ。ええ、ありましたとも。
でも、それと一緒に、死体も寝転んでいました。
心なしか、死臭を吸った気がしたので、思わず叫び声を上げてしまいました。
「ギャアー。」その部屋いっぱいに広がるぐらいの、大きな声でした。
「まずい、逃げるんじゃ。」
私を置き去りにして、全員がレイグルの方へ走って行きました。
「へぇ?」私は恐る恐る棺の方を、振り向きました。
何とそこには、死体が復活して、半身を起していたのです。
その身体は、見かけ上、土と骨に布切れが絡まっているぐらいにしか見えません。
目も潰れています。
そうか。みんなはこれを見て、逃げ出したんですね。私は納得しました。

それにしても、何という薄情な人たちでしょう。この私を身捨てるなんて。

まして、おじいさんは、私と血のつながった肉親だって言うのに。

私は息を、思いっ切り吸い込みました。そして。

「アンデッドだー、ゾンビだー。」

私も気が狂ったように叫びながら、レイグルに向かって走り出しました。

キキキーッ。しかし、私はその途中で、足を止めたのです。

「ガーネ。何をしているの?」私は尋ねました。

ガーネは、レイグルに戻らずに、ボーっと立ちすくんでいたからです。

あの死体に、気を取られているようでした。

「あのー、済みません。何か声みたいなものが聞こえませんでしたか。」

ガーネは私に、そう尋ねてきました。

「えっ、別に何も聞こえないけど、どうかしたの?」

「えっ、いや、別に何でもありません。

そうですね。それじゃあ、私たちもレイグルに戻りましょうか。」

何か、イマイチ判りにくい反応です。

でも、とりあえず、私たちはレイグルへと走り出しました。

ガーネの後に続いて、私もレイグルの中に入りました。

ガシン。私はレイグルのドアを閉めて、ホッとしました。

「ねぇ、これからどうするの。」トラちゃんが、誰ともなしに尋ねました。

「死体が眠っている間に、青い小箱が手に入ればよかったんですけどね。」

ガーネも残念そうでした。

「終わった事は仕方が無い、問題はこれからどうするかじゃな。」

「撤退と言う手もありますよ。

もう秘石だって2個手に入ったし、弓矢や剣もある。
ゾア博士だって、レイグルのテストを、かなりやる事が出来たんじゃないですか。
金銀財宝はこの際、諦めては？」ガーネはそう提案しました。
「そうね。これ以上、無理をして怪我してもつまらないし。」
トラちゃんもガーネの意見に、賛成のようです。
「まぁ、それもいいかもしれんな。」おじいさんも、その気になってきました。
残るは、私1人です。
「ちょっと、心残りな気もしますけれどね。これで終わりとしましょうか。」
私も、賛成する事にしました。
「あっそうそう、帰る前に、あの死体の名前を決めて置きたいんだけど。
今度は、トラちゃんね。決めてちょうだい。」
「えっ、あたしだっけ。そうね。それじゃあ、「オーガル」って事で。
もちろん、適当に付けた名前よ。」
「OK。「オーガル」ね。了解。」私はその名前にしました。
全員の確認を受けて、おじいさんは撤退を決めました。
「じゃあ、帰るとしようかの。」
おじいさんはそう言って、エンジンをかけた時でした。
レイグルが、いきなり停電状態になってしまったのです。
これでは、レイグルの武器が使えず、運転も出来ません。
近代兵器の弱点を、見事に突かれてしまいました。
「なになに。」私は恐る恐る窓から、オーガルの方を見ました。
「ウワァー。」あのオーガルの手には、剣が握られていました。
そして、狂ったように振り回し、電流が撒き散らされていたのです。
レイグルは、この電流をまともに浴びせられてしまったため、停電したのでした。

「いかん。レイグルが動かんぞ。どこかでショートしたらしい。」
おじいさんの焦った声が聞こえました。
オーガルの攻撃は、まだまだ続きます。
今度は電流では無く、突風を生み出していました。
棺の周りにある石壇が、こちらへ飛ばされて来ます。
バン、ガシン。その幾つかがレイグルに直撃し、機体内部にも衝撃が走りました。
「これはたまらん。何とかしないと、レイグルはお陀仏じゃ。」
おじいさんが、不吉な事を言っています。
「でも、ここから出たら、それこそ大変じゃない。」
トラちゃんも頭を抱えて、しゃがみ込んでいました。
全員が、身体を低くして警戒している中。１人だけ突っ立っている人がいます。
ガーネです。やはりオーガルの方をじっと見ていました。
私が話しかけようとした途端、逆に質問されました。
「ねぇ、レミアさん。オーガルが持っているあの剣なんですけどね。私たちが、地下洞で見つけた剣と同じじゃないでしょうか？」
「ええっ、そうなの？」
私とガーネは、保管場所から持って来たあの剣と見比べて見ました。
「本当ね。確かにそうだわ。」私も、ガーネの意見に賛成しました。
「どれどれ。」「よく見せてよ。」
おじいさんとトラちゃんも、寄って来て確認をします。
「間違いないな。」「うん。確かだわ。」
全員が、ガーネの意見に賛成しました。
「とすると、この剣なら、オーガルを倒す事が出来るかも知れませんね。」
ガーネはそう言いました。
「そうかも知れないけど、一体誰がやるのよ。」私は尋ねました。
「この中で剣を使える人は、１人もいませんよね。
だったら、やっぱり一番強い人って事になりますよ。」とガーネ。

「それなら、決まりじゃな。」「ええ決まりです。」
「そうね。間違いないわ。」「まぁ、1人しかいないわね。」
全員がうなずいたので、おじいさんは言いました。
「じゃあ、自分たちが推薦する人を、一斉に指さす事にしようかの。せーの。」
おじいさんのかけ声で、私以外、全員が同じ人を指さしました。
何故か、私を。
「何で、私なんですか?」ちなみに私は、ガーネを指さしたんですけどね。
「お前じゃ。」「あなたを置いて他にはいません。」
「レミアお姉えちゃんに、決まっているじゃない。」
全員が、さも、当然そうに私を決定しました。
明らかにこれは陰謀です。詐欺です。何らかの見えざる手が働いています。
「いいですか。私は女の子ですよ。」私は、改めてそう言いました。
「でも、強い。とても強い。」全員がハモリました。
私は、窓から外を見ました。相変わらず、オーガルは剣を振り回しています。
「あのー、もう一度考え直しませんか?」私は尋ねました。
それに対し、みんなはただ首を横に振るだけです。
駄目だ、こいつらとは付き合いきれん。
私は観念して、テーブルに置いてある魔法の剣に、手を伸ばそうとしました。
その私の手を止める者がいます。
それは、ガーネでした。
「なんて、冗談ですよ。私が行ってきます。」
なんだ、そうだったんだ。私はホッとしました。
でも、他の人の反応は、違っていました。
「いかん、危険じゃ。止めた方がいい。」
「そうよ、あなたにもしもの事があったら、あたし1匹(ひとり)ぼっちよ。」

おじいさんは、必死で止めるし、トラちゃんは、泣きそうになるし。
おかしい。何かおかしい。本来この反応は、私の時になされるべきものでは。
「ねぇ、レミアお姉えちゃんも、止めてよ。」
トラちゃんは、本当に涙ぐんで、私に哀願していました。
「ああっ、もうどうしたらいいのよ。」私は頭を抱えました。

「トラ、そしてみんな。有難う。でも、大丈夫だから、私を行かせてください。」
ガーネのその言葉はとても優しく、誰も何も言い返す言葉がありません。
「ガーネ。」トラちゃんはガーネの手に、鼻をこすっています。
ガーネはトラちゃんの頭を撫でて、大丈夫だよ、って言っていました。
その後、あの魔法の剣を携えて、レイグルを出て行ったのです。
「ガーネ。」追いかけようとするトラちゃんを、私は抱きかかえました。
「ガーネが言っていたでしょう、大丈夫だって。ガーネを信じましょう。」
トラちゃんは私の方を振り向き、私の言葉にうなずきました。

ガーネはゆっくりと、オーガルの方へ向って行きました。
そのオーガルは相変わらず、突風を撒き散らしていたのです。
ですが、近づいてくるガーネの気配に気が付いたのでしょう。
剣を振り回すのを止めて、ガーネの方を振り向きました。
しばらく首をかしげたりしていましたが、やがて咆哮を上げました。
「グォーッ。」力のある咆哮です。部屋中が揺れる程でした。
ですが、ガーネは身じろぎする事無く、オーガルの方へ歩いて行きました。
そして、ある距離まで狭まったところで、足を止めたのです。

何故か、2人とも、対峙したままです。
そのうち、しびれを切らしたのか、オーガルが両手で魔法剣を振り上げました。
そして、ガーネに向って走り出したのです。
そんな状況でも、ガーネはただ、立ったままでした。
私たちは、その様子を瞬きするのも忘れ、見入っていました。
私はふと我にかえって、トラちゃんに声をかけようとしました。
しかし、トラちゃんも身体を微動だにする事無く、見守っています。
ガーネの方だけを、見つめていたのです。
「ガーネが、・・・命を賭けている。」
トラちゃんが放ったその言葉は、レイグルの中に響きました。
そして、私の心にも。
ものすごい緊張感が、このレイグルを包んでいました。

オーガルがガーネとの距離を半分ぐらいにまで縮めた時、それは起こりました。
ガーネが自分の持つ魔法剣の鞘を抜き、それを捨てたのです。
その瞬間、地下洞で見たときと同様、その刃が黄金色に輝きました。
しかし、今回はそれだけではありません。
その黄金色に輝く光は、更に大きく広がり、ガーネ自身すら包み込んだのです。
まるで、ガーネ自身が発光しているような、そんな不思議な光景でした。
この光の威圧感に押されたように、オーガルはその動きを止めました。
そして少しの間、対峙した後、またあの咆哮を上げたのです。
すると、オーガルの刃からも、銀の光が放たれました。
そしてガーネと同様、オーガルの身体もその光に包まれてしまいました。
やがて、オーガルは剣を頭上に振り上げました。

いわゆる上段の構えです。
一方、ガーネは剣を自分の右側に保持し、目の高さに刃を水平に構えました。
いわゆる霞の構えです。
2人は少しずつ、その間合いを詰めました。
まるで、円を描くように少しずつ、その間合いを狭めたのです。
そして2人はその動きを止めました。
2人が静止している中で、時が一刻一刻と、刻まれていきます。
やがて静から動に変わる時が来ました。
オーガルは咆哮を上げながら、助走をつけた後、飛び上がりました。
恐らく、ガーネの真上から斬りかかろうとしたのでしょう。
しかし、ガーネも油断をしていません。
その直後、ガーネもオーガルへ体当たりするように、懐深く飛び込んだのです。
ガーネの刃は、オーガルの心の臓あたりを、深く突き刺しました。
オーガルは振り上げた剣を降ろす事も出来ずに、串刺しにされたのでした。
ガーネは剣を手放し、床の上に降りました。
オーガルの手からは剣が離れて、床へと落ちました。
そして、オーガル自身も刺されたままで、後ろへと仰向けに倒れたのです。
床に落下したオーガルは、青白い炎に全身が包まれていました。
そして、跡形も無く、その姿を消したのです。
私、いや私たちは、この決着を見届けた後、レイグルから飛び降りました。
そして、大急ぎで、ガーネの元に駆け寄ったのでした。
「ガーネ。」トラちゃんはよほど、心配していたのでしょう。
涙ぐみながらも1番にガーネの元に駆け寄り、その胸に飛び込んで行きました。
私とおじいさんも駆けつけて、ガーネが無事な事が判り、ホッとし

ました。
「大丈夫ですよ。もう終わりました。」
ガーネはそう言って、トラちゃんの頭を優しく撫でました。
そして、誰ともなしにこう言いました。
「この人は何かに操られているように、暴れまわっていました。
でも時々、この人から「助けてくれ。」って言う言葉を聞いたんです。
耳からではなく、心で。
だから、ひょっとして、この人はまだ自分の意思を持っているんじゃないか。
そんな風に思えたんです。
だから、彼の魂を閉じ込めているこの屍体から、開放してあげたかったんです。
それで私は命がけで、戦ったんです。
本当にそれが出来たかどうかは、確認する術(すべ)はありません。
でも、そう信じたいです。」
ガーネは悲しそうな声で、そう言いました。
私は、オーガルが消えた跡を見ました。
そこには、あの魔法剣が2つあるだけでした。
でも、その刃からは、光が消えていたのです。
そしてその剣自体が、赤さびて古びたものに変化していました。
「魔法力が、無くなってしまったんですね。」
鞘も同様でした。手に取ると、割れてボロボロになってしまいました。
どちらの魔法剣も同じ状態です。
1つの戦いが終わったんですね。私は、そう思いました。

それから私たちは、吹き飛ばされた石壇の中を歩きました。
オーガルが眠っていた棺は、かろうじて元の位置にありました。
幸い、ふたは閉まった状態です。これなら小箱も飛ばされていない

でしょう。
ガーネがふたを開けると、思った通り、そこに青の小箱が鎮座していました。

この時ふと、私の頭にこんな考えがよぎりました。
もしあの時、私が叫び声を上げなかったら、どうだったでしょう。
多分、オーガルは眠ったままだったんじゃないでしょうか？
そして、青の小箱もとっくに、そして楽に手に入っていたのでは？
ガーネも、決死の覚悟で戦う必要が無かったのでは？
いけない、いけませんね。これはマイナス思考というものでしょう。
自分を暗くするだけです。
ここは1つ、考え方を変えて見ましょう。
私が叫び声を上げた事で、オーガルが目を覚ましたのは事実でしょう。
でも、そのおかげでガーネと戦って、魂は成仏出来たのです。
ガーネも英雄になれました。
私たちも、青い小箱を手に入れる事が出来ました。
苦労はありましたが、それは私たちの結束を更に高めた筈です。
手に入れた宝物にしても、より有り難味が、感じられた筈です。
なんだ、いい事ばかりじゃありませんか。
さっき、少し落ち込みかけていた私は、一体何だったんでしょうか？
私は、えへんと胸を張りたくなりました。
そんな私を、他の人たちが噂しています。
「ゾア博士、あそこに暗くなったり、明るくなったりしている人がいますね。
ひょっとして、お知り合いでは？」とガーネ。まるっきり、他人の振りです。
「いやあ、わしは知らんよ。一体どこから来たのかの。」
こちらもです。おじいさんは、何故かとぼけています。
冗談のつもりなんでしょうか。それともボケが進んだとか。

最後はトラちゃんですね。どんなフォローをしてくれるのでしょうか。
「・・・。」
あれ、何も言いませんね。それどころか何故か私の視線を避けているような。
・・・まぁ、気のせいでしょうね。

その後も探索しましたが、特に宝物も、新たな出入り口も発見出来ませんでした。
まぁ、いろいろありましたが、無事にレイグルに戻りました。
いつものように、私の秘密兵器の針金で、青の小箱を開けました。
そこには、私たちが想像していた通り、青の秘石が入っていました。
私はそれを手に持って、みんなに言いました。
「はい、3個目。
これであの大広間につながっている出入り口の秘石は、全部揃った筈です。」
そう言って、その青の秘石を取り出して、みんなに見せました。
「これからどうしましょうか。」ガーネが誰ともなしに尋ねました。
「判らんな。探せるところは探した筈なんじゃがな。
まだ女神の間がどこにあるのか、皆目検討もつかん。」
おじいさんは、そうこぼしていました。
私は、青い秘石を箱に戻した後、みんなに言いました。
「それじゃあ、いつまでも、このお墓の間みたいな所にいるのは止めない？
とりあえず、大広間に戻りましょうよ。」
私のこの提案に、みんなは賛成しました。

数分後、私たちはレイグルを走らせ、大広間の中央に戻って来ました。
「もう、何回ここに来たんでしょうか。

ここはすっかり、私たちにとって、ベースキャンプになっていますね。」
安心と言うわけではありませんが、何かホッとしている自分がいます。
私たちは、レイグルを降りて、大広間を歩いてみました。
特に何もありません。私たちはあの3つの出入り口にも行ってみたのです。
一つ一つ見て回りましたが、そのうちおじいさんが、こう言い出しました。
「なぁ、変だとは思わんか。
この左から2番目と3番目の間が、何故か不自然に広がっておる。
まるで、もう1つ出入り口があるようにな。」
私たち全員で、その場所を調べてみました。
すると、今まで気が付かなかった事が判りました。
2番目の出入り口の右側に、縦に小さい溝があったのです。
それは2つで、上の方の溝の周りには、赤の模様が描かれていました。
一方、下の方は、緑の模様でした。
3番目の出入り口の左側にも、小さい溝が1つありました。
その溝の周りには、青の模様が描かれていたのでした。
「もしかしたら。」
私はレイグルから、あの3つの秘石を持ち出しました。
それを横にして、その溝に入れてみます。
すると、ちゃんと最後まで、挿入する事が出来たのです。
3つ目の秘石を挿入した時点で、異変が起こりました。
大広場全体に揺れが始まり、それはだんだん大きくなっていったのです。
そして、急に秘石を挿入した壁の内側に亀裂が走りました。
「ダダーン。」突然、壁が崩れました。
大きな音とともに、噴煙が四方に散らばったのです。

しばらくして、その噴煙は納まりました。
私はそこにもう1つ、新たな出入り口が姿を現しているのに、気付きました。
なんだ。この秘石はこの出入り口を開ける鍵だったんですね。
私は、そう思いました。私たちの苦労は、無駄では無かったのです。
その出入り口は、白い色でした。
白の間にでも、つながっているのでしょうか。それとも。
私たちは、期待に胸を躍らせました。
私は、挿入した秘石3個を、引き抜いてみました。
大丈夫。もう、元のように戻る事は無さそうです。
折角、苦労して手に入れた秘石です。手放したく無かったのです。

その頃、すっかりあたりは暗くなっていました。多分、もう夜なのでしょう。
「どうやら、本命の出入り口が見つかったようじゃな。
にしても、もう夜になってしまったようじゃ。
今日の探検は、これぐらいにしておきたいが、どうかな。」
そう言うおじいさんも、今日は疲れ果てた顔をしています。
また、私を含めて全員も同じだったらしく、その意見に賛成しました。
こうして私たちは、ここでもう1泊する事にしたのです。

私たちはレイグルに戻り、夕食として、いつものビスケットを食べました。
ガーネたちは歯を磨いた後、お風呂に入りました。
そしてお風呂から上がった後は、レイグルの外に出て行ったのです。
今夜は大広間で眠ってみたいと、寝袋を借りていきました。
そんなわけで、今夜は久しぶりに、おじいさんと家族水入らずです。
と言っても、おじいさんはめったにベッドでは眠りません。
運転席のリクライニングシートで、１８０度倒して寝ています。

多分、私の来る前から、こんな感じだったのでしょうね。
寝顔は穏やかです。随分、しわも多くなっています。
たまには、家に帰ればいいのに。私は少し、心配しました。
まぁ、そんなこんなで、ベッドルームは私1人です。
今夜は誰にも気がねする事無く、のんびり出来るというものです。
私は、ベッドに置いてある小箱から、赤の秘石を取り出しました。
他の秘石も、決して悪くはありません。
ですが、やっぱり一番最初に見つけた、この秘石が好きです。
この赤く輝く色に、どうしても魅了されます。
私は、赤やワイン色が好きです。服装も、もちろんそうです。
この探検では、典型的なサファリジャケットなので、色はカーキ色です。
茶色がかった黄色と言ったところでしょうか。目立たない、地味な色です。
まぁ、探検にファッションを要求するのは、ちと無理ですかね。
明日はどんな日になるんでしょうか。
金銀財宝を手に入れて、有頂天になっているんでしょうか。
それとも、見つからずにがっかりするだけなんでしょうか。

未来を知りたいと思う事ってありません？
私は時々、ありますよ。
でも、それを知ってしまったら、どうなるんでしょう。
その未来が、自分にとって明るい未来なら、いいかも知れません。
すぐにも、その日が来て欲しいと思うかもしれません。
でも、不幸だとして、それが逃れられないとしたら、どうでしょう。
生きて行くのが辛くなるだけかもしれません。
未来を知ると言う事は、それを確定してしまう事になります。
それは人にとって、大切なものを奪ってしまいます。
その名は「希望」。
希望という言葉を知っていますよね。

この言葉は、未来が判らないからこそ、使える言葉なんじゃないでしょうか。
確定していない未来、どうなるか誰にも判らない未来。
そんな未来だからこそ、不安もあるけど、希望も生まれるような気がするんです。
未来への可能性というものを、どこまでも追及出来るんじゃないでしょうか。
そしてその結果から生まれる、新たな喜びを信じられるんじゃないでしょうか。
だから、私は思うんです。知りたいけど、知りたくないって。
あなたはどう思いますか？

私は、赤い秘石を見ながら、これまで起きたいろいろな事を思い出していました。
楽しかった事もあったし、怖かった事もありました。
でも、全ていい思い出です。
この赤い秘石は、そんな想い出を、いちいち思い出させてくれます。
ここを去った後でも、いつまでもこの探検の事を思い出せるでしょう。
私はこの秘石だけは、いつまでも持っていよう。そう思いました。

明日も早いでしょうから、そろそろ眠りましょうか。
みんなにとっても、大事な日になるかも知れませんし。
寝ぼけまなこで、探検するのは避けましょう。
私はそう思って、赤い秘石を小箱に戻し、眠る事にしました。
私が目を閉じました。
静かな時が、少しずつ流れて行きます。
私は目を開けました。駄目です。眠る事が出来ません。
いよいよ、明日がこの探検の最後かも知れないので、興奮しているのでしょう。

このままでも、いずれ時は過ぎて行きます。
でも何か、すごくもったいないような気がしてなりません。
誰かと、語り合いたいと思い始めました。
おじいさんの運転席へ行ってみます。でも、おじいさんは既に眠っていました。
今日はあのゴーレムに追いかけられて、ずっと逃げ回っていましたからね。
疲れもするでしょう。私は起こさずに、そっとその場を離れました。
私は、窓の外に目をやりました。
ガーネとトラは起きていて、何か話し合ったりしています。
「よし、行こう。」私も寝袋持参で、レイグルの外に出ました。
そして、ガーネたちの元に向かって歩き出したのです。

第８話「正と邪の女神。」６つめですね。（終）

第8話「正と邪の女神。」６つめですね。（後書き）

今回のお話は、第８話「正と邪の女神。」の第６回です。
今回も、戦いが中心のお話です。

みなさん、体調は如何でしょうか？
こちらは熱中症にもならず、何とか生きていますので、ご安心下さい。

なるだけ、１週間に１回ぐらいは、投稿したいのですがね。
今度はいつ頃になるのでしょうね。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第8話「正と邪の女神。」7つめですね。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第8話「正と邪の女神。」7つめですね。のお話です。
この回では、大広間にて、ガーネとトラが、レミアさんのお話を聞きます。
そして、いよいよ、女神の間に向かうのです。

第8話「正と邪の女神。」7つめですね。

第8話「正と邪の女神。」7つめですね。

ガーネとトラちゃんは、大広間の右側の石壇の上にいました。
あの食肉植物アルゴラが植えてあった、花壇の手前です。
そこには、座ったり寝転んだり出来るスペースの石壇がありました。
壁に沿って、平行に幾つか並べてあったので、話し合う事も出来ます。
「今晩は。」私は寝間着姿に、枕と寝袋と水筒を抱えて近づきました。
「あっ、えっ、ええと、あのー、レミアさんですよね。」
何かガーネが戸惑った様子で、尋ねて来ました。
「そうですよ。何をびっくりなさっているんですか?」
「いつも、サファリジャケットの姿しか、見た事が無かったものですから。
ちょっと、驚きました。」
「そうね。あたしも最初、誰かと思って緊張しちゃった。
レミアお姉ちゃんにしては、可愛い格好だったし。」
ガーネとトラちゃんは、私の意表をついた格好に、見とれていました。
ねぇ、トラちゃん。やっぱり、いい女は違うでしょ。
私は内心、してやったりとほくそ笑みました。
私はガーネたちの向かい側に座り、水筒のお茶をコップに注いであげました。
「有難うございます。」「有難う、レミアお姉ちゃん。」
ガーネたちは、口々にお礼を言いました。
私もお茶を少し、口にしました。
「眠れなかったんですか?」とガーネ。

「ええ、何だか寝付かれなくって。」私はうなずきました。
「無理もありませんよ。いよいよ明日が本番みたいなもんですからね。」
「そうね。一体どうなるのかしら。あたしも楽しみ、楽しみ。」
そんな話を続けた後、私は決心しました。
私が今まで、気になってどうしょうも無かった事を、尋ねてみる事にしたのです。
「今更、こんな事を聞くのも何なんですけど。思い切って聞いちゃいますね。
一体、あなた方は、何者なんですか？
どうしてそんな鉄の仮面を、被っているのですか？」
この私の単純かつ素朴な問いに、ガーネたちは、キョトンとした顔をしました。
「ねぇ、トラ。私たちは、この人たちに何も話さなかったんだっけ。」
ガーネは困惑気に、トラちゃんに尋ねていました。
「ええと、そうね。確かに話しをした記憶は無いわね。」
トラちゃんも、意外という感じで、記憶をたどっていました。
この後、ガーネは私にこう話したのです。
「済みません。てっきり、もう話していると勘違いしていました。
今まで、必ず最初に相手から聞かれていたものですから。」
「そうね。うっかりしていたわ。何も聞かれないんだもの。」
ガーネとトラちゃんの反応を見て、なんだか自分が情けなくなりました。
そうですよね。
普通の人なら、見ず知らずの人を、簡単に家に入れたりしませんよね。
レイグルは私たちにとっては、家のような存在です。
今考えれば、なんて不用心なんでしょう。
ガーネたちだったからよかったものの、まかり間違えば面倒な事に。

「世間知らず。」という言葉が、私の頭をぐるぐると回っていました。
「あの、大丈夫ですか？」
私が常識と言うものの重さに苦しんでいるのを見て、ガーネが心配してました。
「ええ、大丈夫です。これくらい、乗り越えて見せます。」
私は、気丈にも、そう言ったのです。
「はぁ？」ガーネは私の言葉の意味を、理解しかねているようでした。
ですが、まぁいいや。と思ったのでしょうね。話を始めました。
「実は私たちは、・・・・。」
ガーネは、自分たちが迷宮の旅人であることや、迷宮についての話をしました。
トラちゃんも、その話の途中で、時々、相づちを打っています。
私は、信じられない思いで聞いていましたが、嘘を言っているとも思えません。
これまで、一緒に探検をした事もあり、とりあえず信じる事にしました。
意外だったのは彼ら自身も、自分たちの事についてよく知らなかった事です。
平気そうな様子ですが、内心、とても不安なんだろうなと思いました。
でも、それをあえて、口にはしませんでしたけどね。
ガーネの話は続きます。
「それで今、私が被っている鉄の仮面の事なんですけどね。実は、・・・。」

ガーネはいつものように、迷宮の道を歩いていました。
「ガーネ。早く来てよ。面白いものが見れるわよ。」

トラが、声をかけてきます。
「はいはい。今、行きますからね。ちょっと待ってて下さい。」
ガーネが今歩いている所は、道と言うよりは階段と言った方がいいでしょう。
高くそびえるその階段を、ガーネは一歩一歩、着実に歩んで行きました。
一方、トラの方はその俊敏性で、あっという間に頂上まで行ってしまったのです。
「それにしても、高い階段ですね。
まぁ、幾ら上っても疲れる事は無いんですが、飽きるんですよね。
この飽きるという感情は、迷宮と言えども消す事が出来ないようです。」
1人ぶつぶつ、つぶやきながら、相方の待っている頂上まで上がって行きました。

「やっと、着いたぞ!!」両腕を高く上げて、ガーネは喜んでいました。
「ねぇ、そんな事より、あれを見てよ。」
無情にもガーネの感動を無視して、トラは自分の気になるものを指さしました。
「あれ、あれは迷宮のドアですよね。
でも、なんでこの階段、下りが無いんでしょう。」
ガーネは首をかしげていました。
ガーネたちが歩いた階段の反対側には、階段がありませんでした。
垂直に切り取られたいたのです。
迷宮のドアはその途中に浮かんでおり、頂上から見ると真正面でした。
ドアは倒れた状態で、浮かんでいたわけです。
「つまり、私たちに高飛び込みをやれと言う事ですね。
確か前にも飛び込みは、やった気が。まぁ、いいですけどね。」

「じゃあ、あたしが先に行くわ。ゼッケン1番、トラ。飛び込みます。」
ヒューッ。トラは見事に吸い込まれるが如く、迷宮のドアへと消えました。
「ゼッケンって、そんな物ありませんけどね。まぁ、ノリなんでしょうね。
だったら、私も付き合いますか。
ゼッケン2番、ガーネ。飛び込みます。」
ガーネは手を上げてそう叫んだ後、トラの後に続きました。

ガーネはドアの中へ、入って行きました。
いつもであれば、周りの景色がすぐに見えてくるのですが、今回は違います。
黒っぽい雲の中をゆっくりと落ちて行きました。
「あれは、何なんでしょうか。」
ガーネの前方から白っぽい色の手が、迫って来ました。
その手はガーネの身体をそっくり包む事が出来るくらい、大きいものです。
ガーネは落下している最中なので、避けようにも、避けられません。
ガーネはその手が近づくにつれて、その真ん中に楕円形のものが見えて来ました。
どんどん近づくにつれて、それが何なのかがガーネにも判ってきました。
それは人の顔をかたどった、仮面の裏側だったのです。
それがガーネの顔まっしぐらに、迫って来ます。
そしてその仮面はガーネの顔に、くっ付いてしまったのです。

やがて黒い雲は消え去り、ガーネはゆっくりと大地に着地する事が出来ました。
先に着いていたトラが、こちらの方に走って来ます。

しかし、途中でその歩みを、止めてしまいました。
「ガーネ?ガーネなの?」トラは首をかしげながら、尋ねていました。
「そうですよ。さっきまで一緒にいた、ガーネです。」
ガーネは、そう答えました。
「ガーネ。何か変な鉄の仮面を被っているけど、どうしちゃったの?」
トラは驚いたように、尋ねました。
「判らないんですよ。
迷宮のドアを抜けて、ここに来るまでに付けられてしまったんです。」
「誰になの?」
「それも、判りません。
何か、大きな白い手が迫ってきて、その真ん中にこの仮面があったんです。
そして落ちて行く私の顔に、これが被さったんですよ。」
「そうだったんだ。大変な思いをしたのね。で、それは外せないの?」
ガーネはトラの言葉を受けて、その仮面を外そうとします。
「あっ、痛い。駄目ですね。これ、なんだか顔にくいこんでいます。
これじゃあ、外せません。」
「困ったわね。どうしたらいいのかしら。」
ガーネとトラは、それからも話し合いましたが、いいアイディアは浮かびません。
「仕方が無いですね。この仮面の件は後で、考える事にしましょう。
ここで、外せても外せなくても、迷宮に戻れば、無くなるんですから。
まぁ、私としては歯が磨ければ、当面は問題ないわけですし。」
「そうね。じゃあ、それはひとまず後回しにしましょう。
さて、これからどうするの。なんか砂嵐が多いとこだけど。」

「本当ですね。まるでトラと始めて出会った、あの世界みたいです。」
「ああ、そうだったわね。もう、あれからどのくらいの時間が経つのかしら。」
ガーネとトラは、ノスタルジックな気分に浸っていました。
と、そこへ1台の車両が走って来たのです。
なんか、いろいろくっ付けている、大きくて頑丈この上ない車両です。
「ねぇ、トラ。あれ、ひょっとしたら。」
「そうね。私たちにとって、救世主になるかもね。」
「じゃあ、行きましょうか?」「ええ、行きましょう。」
ガーネとトラは、砂嵐が舞う中、その車両に向かって行きました。

「と、言うわけなんですよ。レミアさん。」
ガーネは喋って喉が渇いたせいか、お茶を飲み始めました。
それにしても、何でこの人はこんなに、歯磨きにこだわるのでしょう。
1度、じっくり聞いてみた方がいいのかしら。
でも、プライバシーに関わる事なら、追及するのは止めた方がいいかもね。
特におしとやかで可憐な乙女である私としては。
まぁ、それはともかく。
「へぇ、あなた方の事も謎と言えば、謎だけど。その仮面も謎だらけね。
一体、どうすれば外せるのかしら。」
ガーネの顔が見てみたい私としては、とても残念な話でした。
私からの質問が途切れた頃、今度はガーネの方から尋ねて来ました。
「最初に会った頃、聞いたと思うんですが。

ほら、邪神となった魔女ルーディアと王女アイリスとの戦いについて。
ルーディアは、アイリスに刺された後、王子の魂を欲しがったんでしたよね。
確かカミーラって言う名前で、アイリスの許嫁の。」
「はい、そうです。それがどうかしましたか？」
「魔女って言うのは、人の魂を奪って、自分の物にする事が出来るのですか？
自分が死にそうな場合、人の魂を使う事で死なずに済む事が出来るのですか？」
「私が今、借りて読んでいる本には、そう記してありますね。
ただその場合、リスク、つまり危険もあるそうですが。」
「そのリスクとは、一体、何なのでしょうか。」
「魂って言うのは、それを持っていた人の意志が込められているんですよ。
魔女が他人の魂を取り込む場合、まず、その意志を眠らせるんです。
それから自分の魂と融合させて、自分の物にしてしまうわけです。
ただ、この眠らせている筈の意志がですね。
ふとしたきっかけで、目覚める場合があるんですよ。
この場合、１つの身体に２つの意志が、存在してしまう事になります。
すると、その２つの意志のうち、強い意志の方が、弱い意志を押さえこむんです。
強い意志の方が、その身体を占有してしまうんです。
例えば、魔女が他人の魂を取り込んで、死なずに済んだとしますよね。
でも、何らかのきっかけで、その魂の意志が目覚めました。
そしてその意志は、魔女本来の意志より強いものでした。
この場合、魔女の身体は、その取り込んだ魂の意志に乗っ取られてしまうんです。

魔女は、自分を失くしてしまうんです。
それで魂を奪うのは魔女と言えども、慎重にならざるを得ないんです。」
「なるほど。人の魂を自分の物にするのは、魔女でもリスクが大きいと。
あと、1つ聞きたいんですが。魂を失った人間は、すぐに死ぬのでしょうか？」
「いいえ、命のかけらが残っている場合は、大丈夫らしいのです。」
「命のかけら？それって何なのですか？」
「残滓（ざんし）という言い方も出来ます。
生きとし生ける者が、最初に生命が与えられた時、同時に肉体に発生する物。
そんな風に記されていました。
この命のかけらがまだ残っている間は、肉体は生きていると認識するんです。
だから、死後硬直などのような症状は起きず、肉体は保たれたままです。
心臓も脳も寝ている時と、何ら変わらないのです。
この状態でなら、魂を肉体に戻せば、元の状態に戻る事が出来ます。
つまり、普通に生きている状態に戻れるわけです。
ただ、この命のかけらは、非常にもろいものなんです。
魂が奪われてからしばらく経つと、泡のように消えてしまうんだそうです。
だから、元通りにするには、早く魂を戻さなければいけないんです。」
「それって、魂を奪われてから、どの位の時間までなら大丈夫なんでしょうか？」
「個人差があるとか。数分の場合もあるし、数時間の場合もあるそうです。
年齢、健康状態、様々な要因で、それは変わってくるんです。

だから、一概にこれくらいとは、言えないんですよ。」
「そうですか。いや、いろいろと判りました。有難うございます。」
ガーネは、私にお礼を言いました。
私も、いろいろ話せて、とても楽しいです。
もう話もこれくらいかなっと思っていた矢先、トラちゃんから声がかかりました。
「あたしも聞いていい？」「もちろんよ。」
「レミアお姉ちゃんは、以前、言ったよね。
この世界は昔、神族、人族、そして魔族が共存していたって。
でも、今は違う世界に分かれちゃっているって。
どうして、そんな風になっちゃったの？」
トラちゃんの質問は、なかなか鋭いです。
さすが、私が妹分と見込んだ子猫だと、感心しました。
そうですか、判りました。
そんなに知りたいと言うのであれば、このお姉さんがしっかり教えて上げます。
心して聞くように。
「これも、本の受け入れなんですが。
これらの種族が分かれた最大の理由は、「神魔大戦」にあるんです。」
「「神魔大戦」って何？」
「トラちゃん、よーく教えてあげるから、じっくりお聞きなさいね。
じゃあ、始めますよ。「神魔大戦」と言うのはね。」
私は、はるか昔に起きた、伝説とも言われる、神と悪魔の戦いを話し始めました。

神魔大戦（じんまたいせん）
今は昔。
その頃、地上には神族、人族、そして魔族が共存していました。
神族と魔族の領土の間に、人族の領土があったのです。

このように棲み分けはありましたが、互いに交流もあったのです。

神族と魔族の間には、協定がありました。
ですが人族は、その協定を決める交渉の場に、参加する事は出来なかったのです。
人族は力の無き者、あるいは弱きものであり、交渉する立場には無い。
それが、神族と魔族の共通する認識であり、考えだったからです。
でも、その先の考え方には、大きな隔たりがありました。
神族は、だからこそ、人族は庇護すべき者たちだと、考えたのです。
一方、魔族は、だからこそ、人族は自分たちの支配下に置くべき者たち。
すなわち、隷属であると、考えたのです。
神族と魔族による協定は、お互いの争いを回避するために、作られました。
そのため、人族に対する扱いが元で、争いになるのを避ける内容となったのです。

協定は大きく分けて、３つの条項より成り立っています。
１つ目は、自分たちの領土の確定。
これは、各種族の領土の確定のための線引きを、明確にするという内容でした。
人族に関しては、既に人族が使用している土地を、領土として確定したのです。
２つ目は、他の種族への不可侵条約の締結。
これは、他の種族の領土への侵入や迫害を、してはならないとの内容でした。
特に人族が、魔族に迫害を受けないようにと、配慮された項目だったのです。
３つ目は、神族と魔族の２族間における、相互不干渉条約の締結

神族と魔族との間で、必要以上の干渉をしてはならないという内容でした。

神族と魔族は、これらの協定を受け入れ、施行しました。
その結果、人族は、平和に暮らす事が出来たのです。
ですが、人族はその平和が、そんな協定によって、もたらされている。
そんな事など、知る由もありません。
当然、領土の線引きの事も、知らなかったのです。
ある日、人族の1人が魔族の所有する土地で、勝手に田畑を耕しました。
魔族の土地は、肥沃だったのです。
同じ面積の土地でも、たくさんの作物の収穫を、得る事が出来ました。
それを見ていた他の人たちも、次々と魔族の土地の浸食を始めました。
最初は黙認していた魔族もその横暴さに耐えきれず、人族に対し抗議をしました。
それに対し人族は、土地は既に自分たちの所有であると、引きませんでした。
そして何とか、対話の中で事を納めようとしたのです。
人族は、自分たちを、神族や魔族と対等の立場であると思っていたからです。
それに対し魔族は、人族を交渉相手として、認めていません。
魔族は、自分たちの領地に侵入してきた人間を、力で追い払いました。
そして、誰が支配者であるかを判らせるため、人族の領土に侵入したのです。
そして迫害を始めました。

そんな状況下でも神族は、中立を守っていました。
魔族との協定の中にある、相互不干渉条約を守りたかったからです。
しかし、魔族の迫害で、人族の死者が増えていきます。
そのため、ただ見ているだけでは、済まされなくなったのです。
神族は不可侵条約を破ったと言う理由で、人を援護し保護するようになりました。
これに対し、魔族は抗議しました。
先に侵入したのは人間であり、それをこらしめるためにやったと。
そして神族こそ、協定を破って、魔族へ干渉を始めたと。
かくして神族と魔族の間で、いさかいや争いが始まりました。
そして、双方に死者が出始めたのです。
その結果、魔族が宣戦布告を宣告し、神族もこれに応じました。

世に言う、「神魔大戦」の始まりです。

双方に、多数の犠牲者が出ました。
力で言えば、魔族の方が少し上であり、神族は押され気味だったのです。

ここにアスラムとカインという、2人の人間がいました。
それぞれ異なる村の長(おさ)の長男です。
彼らは、魔族の力の象徴とも呼べる、魔殿に侵入しました。
苦労の末、ある大きな広間の中へ、入る事が出来たのです。
そこには赤々と燃えさかる大きな炎が、ゆらめいていました。
「よくここまで来れたね。アスラム。」
「しっ、カイン、もっと小さい声で喋ってくれ。
今、神魔大戦で、双方が全力を出し切っている。
それで警備が、手薄になっているんだ。
それに奴らが警戒しているのは、神族だけだ。
人間なんて、歯牙にもかけていないんだろう。」

「それで、アスラム。これから、どうするんだい。」
「聞いてくれ、カイン。
この大戦の戦場は、人族の領土で行なわれている。
このままではこの戦争のあおりを食らって、人族は全滅だ。
僕は何としても、それは食い止めたい。
聞けばこのアルフレオの炎は、魔族に力を与えるため魔力を放出していると言う。
それは純粋な力のため、他の生命体との干渉を嫌うそうだ。
だから、僕は自分の身をこの炎に投じて、その放出を少しでも防ごうと思う。
魔族の力が弱まれば、神族は勝てる。
神族は人間に対し、好意的だ。きっと、味方になってくれると思う。
カイン、君とはここでお別れだ。よくここまでついて来てくれた。
有難う。
君はこのまま帰って、僕たち人族を守って欲しい。」
アスラムはそう言って、炎の中に身を投じました。
「アスラム!!」涙ながらに、カインは叫びました。
「君とは小さい頃からの仲良しで親友だ。それはいつまでも変わらない。
君が人族を守るため、命を投じるなら、僕もそうしよう。
どちらにしても、このままでは人族は全滅だ。
だったら僕も君と同様、少しでもみんなのお役に立ちたい。
僕も行くよ、アスラム。君1人でなんて行かせはしない。
僕らはいつまでも親友だ。」
カインはそう言って、アスラムと同様、その炎の中に身を投じました。

アスラム達の思惑通り、アルフレオの炎からの魔力の放出は、半減されました。
そしてそれは、前線で戦う魔族たちの力を、弱めていったのです。

神族はこの機を逃さずに勢いを盛り返し、魔族を徹底的に攻撃しました。
その結果、魔族は降伏し、神族はこの大戦の勝者となったのです。

大戦後、神族は事の起こりの発端が、不可侵条約の違反によるものとしました。
その結果、神族は天上の神界へ、魔族は地の底の魔界へと分かれました。
何の力も無い人間には大地の恵みが必要だと、地上に住まわせる事にしたのです。
神族は勝利のきっかけとなった、2人の勇者の行動を褒めたたえました。
そして、2人の魂と肉体を復活させたのです。
神族は2人に、神の力を少しずつ分け与えました。
後に2人はそれぞれ王国を建国し、王族となりました。
そして子々孫々に至るまで、その力は受け継がれていったのです。
また最初に投身したアスラムには、神族はその勇気に対し、敬意を表しました。
神族はアスラムの王国グライアに対し、特別の御加護を与える事にしたのです。
そこで神剣を持つ2人の女神が、グライアに遣わされました。
それが、正神のザイドとラムダです。
大戦後、アルフレオの炎は魔族のものだとして、そのまま魔界へ返還されました。
ですが、地の底は魔族と言えども、厳しい環境でした。
返還されたアルフレオの炎を持ってしても、魔族の弱体化を抑えられません。
そのため、大戦後も、力ある魔族は、地上に姿を現していたのです。
2人の女神は、これらの魔族から、王国や世界を守るため戦いました。

やがて、魔族の力が弱まり、世界に平和が戻って来ました。
2人の女神は、それを見届け、自分たちの役目を終えたとしたのです。
ただ、まだ魔族が、全て滅びたわけではありません。
そのため、自分たちの力の一部や剣をこの王国に残し、天上界にに戻ったのです。

「その力を宿しているのが、女神の石像というわけですね。
いやあ、興味深い話が聞けてよかったですよ。」
「なるほどね。そんな歴史があったんだ。すごいすごい。」
ガーネとトラちゃんが、感激しています。
私が思った以上の反応です。調べたり、話した甲斐がありました。
あのまま、寝ないでよかったなぁ。
「でも、それが真実だとするとよ。
一番悪いのは、最初に魔族の土地に田畑を作った、人族って事になるのね。
許しを得ないで、勝手によそ様の土地を荒らしたわけだし。」
トラちゃんが、私にそう尋ねました。
「そうとは、言えないんですよ。
先ほど説明したように、この協定は神族と魔族しか知らないんです。
人族は一切、関与していないから、全く知らないんです。
もちろん、自分たちの領土が、線引きされている事もです。
だから領土を侵したとは、決して言えないんです。
私が考えるには、この協定作成の際に、人族を同席させなかった。
その事が一番の悪い事だったんじゃないか。そんな風に思えてならないんです。」
私は持論を、ガーネやトラちゃんに話しました。
「協定の際に必要なのは、その影響を受ける当事者が全員揃う事です。

また、あいまいな点を残しておくと、当事者間で解釈が違ってきてしまいます。
これらが、後でトラブルの元になるんですよ。
と言っても、これらを徹底的にやると、協定がいつまで経っても出来ない。
そんな状況が生まれる可能性もあるから、難しいところですね。」
ガーネは私の持論に対し、そんな見解を述べました。
確かにそうね。ガーネの言う通りかも。
魔族や神族に限らず、複数の人たちからなる合意って難しいと思うわ。
だって人によって、置かれた立場が違うし。本当、大変だわね。
「本当、難しい問題なのね。」トラちゃんは、ため息をついていました。
猫の場合はどうなのかしら。わたしはそんな疑問をふと抱きました。
まぁ、今、トラちゃんは1匹狼みたいなものだから。
きっと、聞いても判らないんでしょうね。
「で、この話の後日談みたいなものは、あるんですか？」
ガーネは、身を乗り出して尋ねていました。
「魔族は、地の底に追放された後、そこを魔界と呼ぶ事にしました。
でも、そこは、魔族にとっても、厳しい環境だったらしいんですよ。
アルフレオの炎が返還されていなければ、全滅だったかも知れません。
そういった環境で、生活をしているうちに、魔族に変化が現れたんです。
魔族の数が、次第にに減っていったそうです。
特に強い魔族が、その死を早めたらしい。
また、新たに生まれた魔族も、弱い魔族ばっかりだったとか。
地上にいた時は何でも無かった、陽の光や炎、そして水。
これらが、自分たちの命すら、脅かす存在になったという事です。

前にこの世を支配しようとした、魔女ルーディアのお話をしましたよね。
あの魔女は、国王であるグライアを刺し殺したり、邪神になったりしました。
きっと、それは神族と人族に、恨みを晴らしたいという思いもあったんでしょう。
また魔族を今の状況から、一刻も早く脱出させたかったんでしょうね。
また元のように、魔族が力を揮える世界を望んだに違いないと思うんです。」
「魔族も大変だったわけね。それだけ聞いちゃうと、同情しちゃうな。」
トラちゃんがしみじみと、そう言いました。

「あと、これは余談になるんですけど。
この神魔大戦という呼び名は、神族と人族のものです。
魔族は、魔神大戦（まじんたいせん）という呼び名を、使っているとの事です。」
「へぇ、それは何故なの？」
この質問には、ガーネが答えました。
「トラ、２つの部族又は国の間で、協定なり戦争が起こるとするよね。
この場合、当事者はその名前に、自分の部族名や国名を上に持ってくる。
それがまぁ、不文律とされているんだよ。
プライドからくるものだと言ってもいいと思う。」
「ふーん。そうなんだ。」トラちゃんは納得したようでした。

私は、十分語り尽くしたと言う思いもあって、眠気が出て来ました。
みんなも、うつらうつらし始めています。
今日もいろいろあって、疲れていたのでしょうね。

いつの間にか、私たちは、深い眠りに陥っていきました。

私たちが目を覚ましたときには、もう翌朝になっていました。
朝日が射し込めていて、とてもまぶしいです。
丁度同じぐらいに、やっぱり、朝日に起こされたのでしょう。
ガーネとトラちゃんも、起きてきました。
目をこすったり、欠伸をしたりと、同じような行動をとっています。
「お早う、ガーネ、トラちゃん。」私は朝の恒例の挨拶をしました。
「あー、ええと、あっ、はい、お早うございます。」
「あー、ええ、ええ、あっ、お早う、レミアお姉ちゃん。」
似たような、反応です。
やっぱり、長く一緒にいると、似てくるものなのかしら。
「人間と動物の依存関係の実態」なんて論文、書こうかしらん。
でも、私は考古学専門だからな。きっと却下されるに決まっています。
まぁ、それはそれとして。
「さぁ、今日は待ちに待った記念すべき日なのよ。
張り切って行きましょう。」
私はそう言って、彼らの前に人差し指をビシッとおっ立てていました。
「レミアさんは、いつも元気そうですね。あーあーあっ。」
「そうね。でも朝からよくあんなにハイテンションになれるわね。
大したもんだわ。あーあーあっ。」
まだまだ、ガーネたちは、睡魔から逃れられないようです。
私は彼らのために、レイグルの洗面所に、無理矢理連れて行きました。
水をいっぱい溜めて、そこに顔を突っ込ませました。
「ううむ、ううむ。」「ワブワブワブ。」
何かわけの判らない言葉を、口走っていました。

まぁ、良い頃合では無いかと、ガーネたちの顔を外に引っ張り出しました。
「どう?目が覚めた?」私はそう尋ねました。
「びどびびゃばいでぶか。ぼぶぶぼびでびぶぼぼぼべびだ。」
「ぼうぼ、ぼうぼ。」
何か言っているようですが、さっぱり判りません。
多分、「有難う。」って言っているのでしょうね。
「いえいえ、そんな、お礼には及びません。」
私はそう言って、ガーネたちに親切にもタオルを手渡し、そばを離れました。

私がテーブルについた時、おじいさんは既にそこにいました。
本当に年寄りって、朝早いんですね。
もっとも、昼寝はしっかりとっているので、まぁ、安心ですけどね。
「お早うございます。おじいさん。」
「ああ、お早う。」
おじいさんは、新聞から顔をあげて、挨拶を返してくれます。
「前から、気になってたんですけど、その新聞どこから手に入れるのですか?
日付も今日のようですね。」
「うん。ああ、これか。日付は確かに今日じゃな。だが、西暦は去年だ。
つまり、1年前の今日の新聞を見ているのじゃよ。」
「なるほどねって、一体いつ頃から溜め込んでいるんですか?」
「もう、かれこれ10年分ぐらいには・・・。」
「判りました。
捨ててあげますので、この探検から帰ったら、置き場所を教えてください。」
「そんな。年寄りの数少ない楽しみを。」
おじいさんは朝から何故か、憤慨しています。

もうお年なのに、血圧が高くなっちゃうじゃありませんか。
私は心配してしまいました。
そんな身内同士の心温まる会話の後、ガーネたちがやって来ました。
「お早うございます。ゾア博士。」「お早う、おじいちゃん。」
そう言ってガーネたちも席に着いたので、朝食にすることにしました。
いつも通りのビスケット朝食を済ませた後、ガーネたちは歯を磨きました。
いつもの朝の恒例行事ですが、これも今日までかもしれません。
なんか感慨深いです。ちょっとセンチメンタルな気分になりますね。

「では行くぞ。よいな。」おじいさんはレイグルを走らせました。
レイグルは、昨日開いた白色の出入り口の中へと入って行きます。
これまでとは違い、長い通路で、その途中にいろいろな部屋があります。
私は、古文書に書かれてあった部屋の絵柄と、見比べて行きました。
その結果、ここは謁見の間、ここは剣の間と察することが出来たのです。
「間違いありません。私たちは確実に女神の間に向かっていますよ。」
私はみんなにそう告げました。その私の声も嬉しさに震えています。
そして、ついに最後の部屋に到達する事が出来たのです。
おじいさんはレイグルを、その部屋の外に停めました。
私が降りようとすると、ガーネが声をかけてきました。
「おや、その弓矢も持って行くんですか？」
「ええ、そうする事にしたわ。
この弓矢も多分、魔法の力を備えていると思うから。
ラドムア以降の魔物って、ほら、私たちの攻撃を跳ね返しちゃうじゃない。
だからこれなら、通用するんじゃないかなと思ったってわけ。

それに、ここが私たちの入る最後の部屋になるかも知れない。
魔物も多分、現れるんじゃないかと思うわ。警戒しなくちゃ。」

実は、この弓矢が手に入ってから、遊び半分に使ってたんです。
でも、なかなか飛ばないんですよね。これが。
最近は少しは飛ばせるようになってきました。
だけどね、狙った所にちゃんと飛んでくれないんですよ。
ある日、トラちゃんに「狙っちゃうぞ。」って冗談半分に矢を射る格好をしたの。
そうしたら、じっとして動こうとしないわけ。
怖がっているのかなって思って、聞いてみたわ。
そうしたら、「お姉ちゃんは、動いている方が当たっちゃう。」なーんて言われたの。ふん、妹分の猫にまで、私の腕前は見放されちゃったわ。

私たちは歩いて、その部屋の中に入りました。
その部屋は大広間ほどではありませんでしたが、広い部屋です。
その中央には、もう1つ小さい部屋のようなものがあります。
その正面には石の扉があり、その左右には石像が立っています。
私たちは、その石像を見ました。
いずれも女人が鎧を装着しており、剣を身に着けておりました。
「女神の像です。やっぱりここは女神の間なんですね。」
私たちは今、前人未到の場所にたどり着いたわけです。
やっと来た。その思いがみんなの心に感動をもたらしていました。

さて、いつまでも感動に浸っているわけにはいきません。
私たちは、行動を起こす事にしました。
この探検の最大の目的である、金銀財宝を見つけるため、石の扉を見ました。
「ここは隠し部屋になっているそうです。この中に宝物があるんで

しょう。」
私たちは石の扉を開けようと、手をかけました。
が、駄目です。ピクリとも動きません。
レイグルから、マシンガンやレーザーガンも持ち出していました。
そして、石の扉に向かって、発射したのです。
ところが、あのラドムアのように赤く輝き、跳ね返されてしまいました。
「あっ、危ない。」
私たちは、跳ね返ったビームや弾をかろうじてよける事が出来ました。
「もう、武器を使うのは止めましょう。」
私たちは、かなづちとのみを持って、扉の石を割ろうとしました。
しかし力を込めてたたくと、やはり赤く輝き出してしまいます。
どうしても、割る事が出来ませんでした。
「一体、どうしたらいいんでしょう。」
私たちは、途方にくれました。それで私たちはその扉の周りを見回したのです。
その扉の左右の壁には、妙な出っ張りがありました。
よく見てみると、明らかに壁と同じタイプの石を接着しています。
まるで、何かを隠しているようです。
私はかなづちとのみで、その石を砕いてみました。
すると、その中から、見覚えのあるものが姿を現したのです。
それは白い出入り口の左右にあった、秘石を挿入する溝と同じ物でした。
左側には2個、右側には1個の溝があり、違う色の模様が描かれています。
私は、白い出入り口の時と同じように、そこに秘石を3つ挿入してみました。
「ガクリ。」物々しい響きを立てて、石の扉が左右に開いたのです。
私たちは大急ぎで、扉の中に入って行きました。

「ああ、やっと見つけた。」
そこには、かなり大きい箱がありました。
鮮やかな模様が施されており、いかにも宝箱っていう感じです。
多分、この中に私たちが探していた金銀財宝が入っているのでしょう。
私は、その箱を開けようとしました。
ですが、駄目です。
秘石の入った小箱同様、そのままでは開ける事が出来ません。
いつものように、私の針金で開けたいのですが、鍵穴の大きさが全然違います。
手が出せません。
すると、おじいさんが、レーザーガンをふたの部分に向けていました。
「大丈夫なんですか?もし跳ね返ったら危ないですよ。」
私がそう忠告すると、おじいさんは首を横に振りました。
「多分、大丈夫じゃろ。
実は秘石の入った小箱にも、レーザービームを放射してみたんじゃ。
じゃが、何の反応も示さず、鍵を壊す事が出来た。
宝箱自体には、魔力は込められてはおらぬようじゃ。」
おじいさんはそう言って、レーザービームを放射します。
しばらく放射した後、おじいさんはビームを止めて、ふたに手をかけました。
すると、鍵が壊れたのでしょう。簡単に開ける事が出来たのです。
「やったー。」私たちは、その箱の周りに集まりました。
そして、期待に胸を膨らませて、中をのぞき込んだのです。

「ええっ!!」私たちの間で、驚きと落胆の声が聞こえました。
その大きい箱の中は、空っぽだったのです。
私は、箱の中身をよく調べてみました。

本体は金属で出来ていますが、内部はビロードの厚い布が敷き詰められています。
そしてそこには、擦り切れた跡が多少なりとも付いていました。
だから、確かに何か入っていたのは間違いないと思います。
でも今はありません。そしてそれが、現実でした。

全員、「はぁーっ。」とため息をついたのは、言うまでもありません。
私はしばらく、その現実に呆然としていました。
多分、おじいさんも同じだったんでしょう。あっけにとられた表情です。
一気に年をとったようにも、見えます。
やはり、楽しみだったんでしょうね。お疲れ様でした。
ガーネは、お宝の有無は関係無いと言っていました。
でも、いざ本当に無いとなると、がっかりした様子です。
まぁ、命張って、戦った事もありましたから。
せめて、どんな物なのか、見たかったんでしょうね。
トラちゃんも、ため息をついて落ち込んでいます。
私だって、私だって。
「考古学の母」と呼ばれる計画が消えたのです。
へなへなと床に座り込んでしまいました。
希望が消えた者たちが集まったその隠し部屋で、時が空しく流れて行きました。

でも、こうして事実を知った以上、いつまでもここにいるわけにはいきません。
「夢は終わりました。さぁ、帰りましょう。」私はそう言いました。
全員が私の言葉にうなずき、その隠し部屋を出ました。
そして、女神の間を去ろうとしていたのです。

「えっ。」私たちは驚いてしまいました。
いつの間にか、開いていた女神の間の出入り口が、消えていたのです。
私たちは、部屋の周りを見ました。どこにも出入り口なんてありません。
いきなりの緊急事態で戸惑う私たちに、どこからとも無く咆哮が聞こえました。
すると出入り口があった場所に、黒いシルエットが浮かび上がったのです。
そしてそれは、姿を現しました。
４つ足の動物で、顔の周りには鬣（たてがみ）が生えています。
その目は赤く光り、その身体全体には炎をまとっていたのです。
明らかに、魔物です。
おじいさんは、レーザーを放射しようとしました。
「止めて。おじいさん。」私は慌てて、止めました。
「あれも、ラドムアと同じだと思います。
ビームを放っても、こちらに跳ね返ってくるだけなんじゃないでしょうか。」
「確かに、そうかもしれんな。じゃが、それならどうすればいいのじゃ。」
「私はあの弓矢を持っています。いざとなれば、これを使いましょう。」
私がおじいさんと話し合っている最中、ガーネが声をかけてきました。
「どうでしょう。とりあえず、隠し部屋の中に戻っては？」
私たちは、ガーネのこの提案に、賛成しました。
そして、先ほど出てきた隠し部屋に、戻る事にしたのです。
私は隠し部屋に身体を隠した状態で、あの魔物に弓を射るつもりでした。
私とおじいさんがその中に飛び込んだ後、ガーネも中に入ろうとし

ます。
ですが突然、ガーネの動きが止まりました。
「どうしたの。」私はそう聞いて、ガーネの顔を見ました。
すると、今まで鉄の色をしていた仮面が、赤く輝いていたのです。
「駄目です。身体が動きません。
というか、身体が自分の意思とは関係無しに、動こうとしているんです。」
ガーネはそう訴えています。
私たちは、もう1つ、赤く輝いている物を見つけました。
あの魔物の額の中央が、縦に細長い楕円形にパックリと割れていました。
そして、その中から赤く輝く魔石が現れたのです。
その魔石の輝きは、ガーネの鉄の仮面の輝きと連動しているかのようでした。
「トラ、済みません。
私の肩から降りて、レミアさんの所へ行ってください。
このままでは、多分、あなたも危険に巻き込まれてしまいます。」
「ガーネ。私も一緒にいる。」
トラちゃんは、ガーネにしがみついて、そばから離れようとしませんでした。
「レミアさん。トラをよろしくお願いします。」
ガーネは、私にトラちゃんの事を頼みました。
私はその言葉にうなずいた後、隠し部屋から飛び出しました。
そして、ガーネの肩にうずくまっている、トラちゃんを剥がしたのです。
「有難うございます。レミアさん。
ごめんね、トラ。あなたを守る事が出来なくなってしまいました。」
私は嫌がるトラちゃんを抱きかかえて、隠し部屋へと戻りました。
ガーネは鉄の仮面に導かれるまま、歩いて行きます。
そして魔物の前で立ち止まり、両腕を広げたのです。

「グォー。」魔物は咆哮を上げて、ガーネに飛びかかりました。
そして、その身体を突き抜けたのです。
私たちがガーネを見た時、一見、その身体には何事も起きていないようでした。
怪我をしている様子も無く、服も破れていません。
ですが次の瞬間、ガーネは何を言う事も無く、崩れるように倒れていきました。

私たちはガーネの近くに降り立った、魔物の口の中を見ました。
その上下の牙には青白い炎に包まれた、白く輝く光の玉が咥えられていたのです。

それはガーネの魂（たましい）でした。

第８話「正と邪の女神。」７つめですね。（終）

第8話「正と邪の女神。」7つめですね。（後書き）

今回のお話は、第8話「正と邪の女神。」の第7回です。
今回は、レミアさんのお話がメインです。

みなさん、体調は如何でしょうか？
暑さも湿気も、本格的になりました。
こちらは熱中症にもならず、何とか生きていますので、ご安心下さい。

なるだけ、1週間に1回ぐらいは、投稿したいのですがね。
今度はいつ頃になるのでしょうね。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第８話「正と邪の女神。」８つめですね。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第８話「正と邪の女神。」８つめですね。のお話です。
この回では、女神の間での戦いです。

第8話「正と邪の女神。」8つめですね。

第8話「正と邪の女神」8つめですね。

私たちは、その魔物を隠し部屋からのぞいていました。
その魔物はガーネの魂を奪った後、邪神ルーディアの像の方に歩いて行きます。
そしてガーネの時と同様、その石像を突き抜けたのです。
私たちが再びその姿を見た時には、その口にガーネの魂はありませんでした。
それからまもなく、その石像に異変が起こりました。
生きている者の姿へと、変わっていったのです。
女人のその身に鎧をまとい、腰には剣を差しています。
そして、その顔はあの石像の通り、ルーディアの顔そのものでした。
「フフフフ、ハハハハハ、アハハハハハ。
やった、ついにやったぞ。わらわはついに封印から解き放たれたのじゃ！！」
それは、邪神ルーディアが復活した瞬間でした。

私たちの隠し部屋のすぐ横に、あの邪神の石像があったわけです。
つまり邪神は今、私たちの目と鼻の先にいるのです。
私たちは恐ろしくて、身動き1つする事が出来ません。
邪神は懐かしい物を見るかのように、辺りを見回していました。
「どうやら、かなりの時の流れがあったようじゃな。
さて、どこから手を付けたものかのう」
邪神がそうつぶやいている時、あの魔物が邪神のすぐそばにやって来ました。
邪神はその頭を撫でながら、倒れているガーネの方を振り向きました。

「よくやったぞ、炎ライオン。
お前と、あの鉄の仮面。
ともにわらわが封印される前、この世に残した力じゃ。
だいぶ時間がかかったようじゃが、まぁいい。
これからゆっくりと、この世界を支配してくれようぞ」
邪神はそう言った後、何故か急にあたりを見回しています。
「おかしい、人の気配がする」そうつぶやいたのです。
私たちはのぞくのを止め、大きい宝箱の後ろにしゃがんで隠れていました。
私たちは、じっと息をこらしています。
その私たちの耳に一歩ずつ、近づいて来る足音が聞こえます。
そして、その足音が消えました。
キキーン！　耳をつんざくような音とともに、私たちの視界が開けました。
宝箱がものの見事に、真っ二つに両断されたのです。
私たちは、驚いて立ち上がりました。
その私たちの目の前に、邪神ルーディアの姿があったのです。
「これはこれは。願っても無い御客人である事。まずは、表へ出られよ」
そう言って邪神は、私たちを隠し部屋の外に連れ出しました。
「さてと誠に申し訳ないが、ここは神か王族しか立つ事が許されぬ場所でな。
そなたたちは、その下座へ降りてくれぬか？」
否応もありません。私たちは、出入り口があった場所の近くまで移動しました。
邪神はそんな私たちを見ながら、傍らにいる魔物を撫でています。
そして魔物が何かささやくのを、聞いているようでした。
邪神はそれを聞き終わると、おもむろに私を指さしました。
「これ、そこな女。そなたの名前は何と言うのじゃ」
「わ、私ですか。ええと、私の名前はレミアと言います」

不意に言葉をかけられ、私は少しうろたえながら答えました。
「レミアか。良い名じゃ。
さてと、他でも無いのじゃが、この魔物はな。
名前を炎(えん)ライオンと言ってな。わらわの力の一部で造った魔物じゃ。
その炎ライオンがな、そなたの持っているその弓矢に怯えておるのじゃ。
じゃからの、それを床に放り投げてくれぬか？なるだけ遠くへの」
邪神からそう言われ、私は途方に暮れてしまいました。
この弓矢の力がどの程度のものなのかは、判りません。
ですが、今の私たちには、この弓矢こそ魔族に対抗できる唯一の武器なのです。
安易に手放すわけにはいきません。
でも断って、この邪神の機嫌を損ねたら、その結末は悲惨の一言でしょう。
私はどちらにすべきか、決断に迷っていました。
邪神は私のその煮え切らない態度に、豪を煮やしたようです。
「レミアよ。お前たちは誰の許しを得て、この神殿に来ておるのじゃ。
神もしくは王族に、その許しを得ておるのか。得てはおるまい。
お前たち、本来ならばこの場で命を絶たれても、文句は言えぬ筈じゃ。
それをこうしてわらわとの謁見まで、許されておる。
そんなわらわのささやかな願いさえも、聞き届けぬと言うのか。
レミアよ。お前は、わらわを怒らせるつもりか？」
言葉は丁寧でも、その内容は完全に脅しです。
でも邪神とは言え、相手は神。私たちが、敵う筈もありません。
私は無念の思いをかみしめながら、弓矢を放り投げました。
私のこの行為に、邪神はすこぶる満足をしたようです。
「そうじゃ。それでよいのじゃ。
さてもうお前たちは、ここに用は無かろう。さっさと帰るがよい」

と私たちに帰りを促した後、更に言葉を続けました。
「おお、そうじゃ。忘れておったわ」
邪神はそう言って、ガーネの方を振り向きました。
そして右腕を差し出し、手首を僅かに上に捻(ひね)ったのです。
するとガーネの身体が吹っ飛ばされ、私たちの元に転がってきました。
「ガーネ！」私たちは、その身体へと集まりました。
「中身は確かに頂いた。もう、その容器は必要ない。
お前たちで、持って行くがよかろう」
邪神はそう言って、自分の胸のあたりをまさぐっていました。
そこには、赤く妖しく光る玉があります。
そしてその中央に、青白い炎に包まれた白く輝く光の玉が。
紛れも無く、ガーネの魂が取り込まれていたのです。
「まだ完全には、わらわの魂と一体化しておらぬでな。
このように、輝いておるのじゃ。
じゃが、しばらく経てばこの光も消え、わらわの魂と一体を成す。
その暁には、わらわは己の力を完全に取り戻す事が出来よう。
フフフフ、ハハハハハ、アハハハハハ」
邪神は、高笑いをしました。

その邪神に、「ガーネを返せ」とトラちゃんが私から抜け出そうとしています。
しかし、私はしっかりと押さえて、決して手放しませんでした。
「トラちゃん。ガーネはね、私にあなたをよろしくって言ったの。
だから、ガーネが戻ってくるまでは、私があなたを守りたいの。
だから、今は我慢して。お願いよ」
私がそう言うと、トラちゃんは悲しみの目で私を見ました。
そして、私の目をじっと見ていたのです。
私の必死の願いは、無駄ではありませんでした。
「判った。悔しいけど我慢するわ」

トラちゃんはしばらくした後、そう言いました。

邪神はひとしきり高笑いした後、私たちの方を再び振り向きました。

そして「もう帰るがよかろう」と言ったのです。

右手を前に差し出し、壁にその手をかざしました。

すると、今まで隠れていた出入り口が現れたのです。

私とおじいさんとで、ガーネの身体を担ぎました。

そして無念の思いを抱きながら、その部屋を立ち去ろうとしたのでした。

すると、その私たちの目の前に、炎ライオンが立ちはだかったのです。

炎ライオンは咆哮を上げ、私たちににじり寄って来ます。

私たちは抗議の目で、邪神をにらみつけました。

「いや、申し訳ない。わらわ自身は、そなたたちを帰そうと思っておったのじゃ。

じゃがの。その炎ライオンが、そなたたちをすこぶる気に入ってな。

是非、食（しょく）したいと申すのじゃよ。

良く考えて見れば、この子にはまだ何も食べさせておらぬ。

先ほど得た魂は、わらわが、もらってしまったのでな。

それにこれから、わらわのしもべとなる魔物たち。

この者たちにも、人間の魂や肉体は必要な栄養源となる。

やはり、このまま帰すわけにはいかぬのう」

私たちはその邪神の言葉の意味を察知して、出入り口へ走りだそうとしました。

ですが、その出入り口は、再び隠されてしまったのです。

炎ライオンが、私たちににじり寄ってきました。

私たちはガーネを担ぎながら、とにかく逃げようと部屋の隅へ歩き出します。

その私たちを、炎ライオンがゆっくりと追いかけて来るのです。

部屋の壁に行く手を遮られ、咆哮も真直に聞こえ、私はもう駄目だと思いました。
と、その時です。その咆哮の声色が急に変わりました。
攻撃の声から突然、もがきの声に変わったのです。
私は後ろを振り向きました。
そこには私たちに歩み寄れないでもがいている、炎ライオンの姿があったのです。
まるで、周りを何かの壁に囲まれたように、あがいていました。
「一体、何事じゃ！」邪神もその異常な光景を、理解出来ないようです。
私はガーネを降ろして、すぐに放り投げた弓矢を取りに行きました。
そして、弓矢を携え、戻って来たのです。
私は、もがく炎ライオンの近くで、弓矢をつがえました。
近距離です。幾ら私でも、外す事は考えられません。
「お願いです。どうか当たって下さい」
私は祈るような気持ちで、矢を射ました。
私の弓から放たれた矢は、炎ライオンへと真っすぐに飛んで行きます。
そして、その額にある赤い魔石に吸い込まれていったのです。
次の瞬間。
あの炎ライオンが一瞬で粉々となり、消滅したのです。
「やったぁ！　やりましたよ、ガーネ。あなたの仇はとりました」
私は全身から力が抜け、へなへなと膝を床に付けました。
しかし、その後すぐに気が付きました。
「なんで邪神は、私を攻撃しないの？」
私は恐る恐る、邪神の方を振り向きます。
そこには炎ライオンと同様、動けずにもがいている邪神の姿があったのです。
「何物かは判らぬが、わらわの邪魔をする輩がこの部屋にはおるようじゃ。

誰じゃあ、姿を現わせ。誰じゃあ！！」
その時でした。正神アイリスの石像が輝き出したのです。
そしてその輝きが収まった頃、そこには石像では無く、人の姿がありました。
邪神ルーディアと似たような姿です。
女人のその身にに鎧をまとい、腰には剣を差していました。
しかし、その顔は石像の如く、アイリスそのものだったのです。
正神アイリスが、再びこの世に現れた瞬間でした。

邪神ルーディアは、正神アイリスを見て驚愕しました。
「何故じゃ。何故、そなたがここに。
わらわとの戦いで生き延びたにせよ、こんなに人の命が続くわけはあるまい。
それに、その若さ。わらわと戦った頃と、何も変わっておらん。
一体、どういう事なのじゃ」
この邪神の問いに、正神アイリスは答えました。
「邪神ルーディアよ、お前は私の持つ神剣ラムダに刺され、封印されました。
その後、正神ラムダに命を捧げて、私もまた正神となったのです。
そして、石像の中で眠りに着き、来たるべきお前の復活に備えていたのです」
「なるほどな。そう言う事であったか。それにしても、御苦労な事じゃ。
悠久とも言える時の流れの中を、石像に身をやつしていたとはな。
しかもその理由が、わらわの復活を監視するためだけだったとは。
いや、正神ともあろうお方に、そこまで気を使って頂けるとはな。
むしろ、光栄に思うべきかもしれんて。
ハハハハハ、アハハハハハ」
邪神はそう言って、また高笑いをしました。
「もはや、逃れられません。覚悟を」

正神アイリスは邪神に近づき、神剣を繰り出しました。
しかし、邪神はその神剣をあっさりと、邪剣ザイドで跳ね返したのです。
「ふぅ、どうやらそなたが、わらわにかけたかけた神力の束縛。
それが、薄れつつあるようじゃ。
また、わらわもな。かつての力を取り戻しつつあるようじゃ」
邪神はそう言って、自らの魂のあたりを触っていました。
そこには邪神の魂に包まれている、白き光の玉がその輝きを弱めていたのです。
正神アイリスと、邪神ルーディア。
はるかなる時の流れを経て、今またここに対峙する事になったのです。

戦いの火ぶたが、切って落とされました。
ともに神剣。正剣と邪剣が、激しい戦いの応酬を繰り広げました。
しかし、正神アイリスの方が、剣技に優れていたのでしょう。
徐々に、邪神ルーディアは、押されていったのです。
「ふん」邪神は、素早く剣を横に振りはらいました。
そして正神アイリスがひるんだすきに、後方へ飛んで間合いを確保します。
邪神は、左手のみで剣を持ち、右手を王女の前に差し出しました。
「炎(えん)！」
邪神ルーディアより、業火の炎が、王女に注がれようとしました。
しかし。
「えぃ」
正神アイリスが、正剣を横に振り払いました。
たったその一振りで、炎はあっけなく消滅してしまったのです。
「なんと！」茫然と立ち尽くす邪神に対し、正神アイリスは答えました。
「私は、元は王女ですが、同時に剣士でもありました。

2度と同じ手は通用しません。1度犯した過ちは、2度と起こしません。
ましてや、今の私は正神。お前などには、決して負ける事は無いのです」
この言葉に、邪神はじっと正神アイリスを見つめていました。
そして、口を開いたのです。
「なるほどな。それは面白い物を見せてもらった。礼を言わせてもらおう。
じゃが、ついでじゃ。わらわからも、そなたに見せたいものがあるのじゃ。
今しばし、そこで待つがよかろう」
邪神はそう言って、幻のように消えて行きます。
「待て」
正神アイリスが、声をかけた時、その姿はとうに失せていました。
あたりを見回しても、どこにも邪神の姿は見当たらなかったのです。

私たちは、正神アイリスの元へ歩み寄りました。
「有難うございます。おかげで助かりました」
私は頭を下げて、お礼を言いました。
「かたじけない、助けてもろうて。これこの通りじゃ」
おじいさんもそう言って、手を合わせて拝みました。
「有難う、アイリス様」トラちゃんも頭を下げていました。
「何故、あなたたちがこの地にいるのかは知りませんが、でも無事でよかった」
正神アイリスは、言葉を続けました。
「またあの邪神は、ここに来るでしょう。時間がありません。
あなた方に危険が及ばないうちに、早くここから出て言って下さい」
正神アイリスはそう言って、壁に手をかざしました。
すると、隠れていた出入り口が再び、姿を現したのです。
「有難うございます」「有難うのう」

私たちはそう言ってガーネを担いで、その部屋を出て行こうとしました。
「あっ、待って下さい。その人は置いていって欲しいのです」
正神アイリスは、そう答えました。
「どうしてよ」トラちゃんが抗議します。
「その人の被っている鉄の仮面には、強力な魔力がかけられています。
その人は魂を失っているようですが、その魔力はまだ衰えてはいません。
一緒にいては、あなた方に危険が及ぶとも限らないんです。
どうかここは、私の意見を受け入れて、その人をここに残して下さい」
正神アイリスはそう言って、私たちに頭を下げました。
今まで一緒に行動をともにしてきたガーネと別れるのは、本当に辛い事です。
でも、私たちにはガーネが被っている鉄の仮面を、どうする事も出来ません。
また、危険は出来る事なら避けたいです。
ガーネやトラちゃんには、大変申し訳ないと思っています。
ですが私たちは、ガーネを置いて撤退する事にしました。
「では、後の事はよろしくお願いします」
「あんたもな。くれぐれも気を付けてな」
私たちはそう言って、その部屋から出ようとしました。
その時、私の手からトラちゃんがするりと抜けたのです。
そして、ガーネの身体の上に、飛び乗りました
「レミアお姉ちゃん、おじいちゃん。さようなら。
あたしは、ここに残ります」トラちゃんは、私たちにそう言いました。
「トラちゃん、気持ちは良く判るわ。
でもね。今私たちがここにいても、もうどうにもならないの。

かえってアイリス様に、ご迷惑をおかけするだけだわ。
ねぇ、一緒に行きましょう」
私は、トラちゃんにそう言いました。
「有難う、レミアお姉ちゃん。でもあたしは、あなたたちとは違うの。
あたしはここにいるガーネと、ずっと一緒に旅をしてきたわ。
もちろん、これからもずっといたいと思っている。
でもね。
もしここでガーネが死ぬようなら、少なくとも私はその最後は見届けたいの。
命を賭けても見守りたいのよ。
少なくともあたしには、その権利があると思うわ。
だから行って、二人とも。
私が二人からもらった優しい想い出は、いつまでも大切にするから」
「トラちゃん」
私にはもう何も言えません。
その様子をじっと見ていた正神アイリスは、私に向かって口を開きました。
「確か、レミアさんというお名前でしたね。
お話は先ほどから、聞かせて頂きました。
もし、よろしければ全ての事が済むまで、この子猫を私が預からせて頂きます。
もちろん、私の力が及ぶ限り、この子猫には危害を加える事はありません。
それは、私がお約束しましょう。それで如何でしょうか？」
「はい、よろしくお願いします」私はただ頭を下げるのみでした。
正神アイリスは、トラちゃんの方を見ました。
「トラと言いましたね。あなたもそれで構いませんか？」
「はい、よろしくお願いします。アイリス様」
トラちゃんもその言葉にうなずいて、頭を下げました。

私がガーネから託された「トラをよろしく」の願いのバトン。
それは、私から正神アイリスへと引き継がれたのです。
私たちは、正神アイリスやトラちゃんに別れを告げました。
そして、その部屋を立ち去ろうと、出入り口に向かったのです。

その時、私たちの耳に、足音がかすかに聞こえて来ました。
それは、私たちの目の前にある出入り口の方から聞こえてきます。
そして、だんだんその足音は大きくなってきました。
ここには私たち以外、人間はいない筈です。
では邪神でしょうか？
でも、邪神がわざわざ歩いて、出入り口から来る筈はありません。
私たちの間に、緊張感がみなぎりました。
そしてそれは、ついに、私たちの目の前に現れたのです。
「カミーラ！！」私たちが何か言うより早く、正神アイリスが叫びました。
カミーラと呼ばれたその剣士は、女神の間の中に入って来ました。
カミーラ。私は記憶を巡らせます。
確か、カミーラと言えば、王女アイリスの許嫁でした。
でも、邪神ルーディアに殺された筈です。
それなのに、何故。
私は、わけが判らなくなりました。
それはどうやら、正神アイリスも同じだったようです。
「カミーラ。どうして、あなたがここに」
正神アイリスは、王女の頃に戻ったようでした。
そして、カミーラに近付こうとしたのです。
その正神アイリスに向かって、カミーラは剣を引き抜き、構えました。
「あの剣は！」私は見覚えがあります。
それはあの邪神が持っていた、邪剣ザイドだったのです。
「！」正神アイリスは慌てて、剣を構えました。

そして気が付いたように、つぶやいたのです。
「カミーラ。
そうか。あなたの遺体は、ルーディアの魔力で人形にされてしまったのですね。
何てひどい事を」

その言葉に、私も気が付きました。
私が読んでいた本の中に、魔女の事が書かれていたのです。
魔女は死者の身体に、偽りの魂を埋めて蘇生し、生前の姿の人形を造ると。
そして、その人形を、思い通りに操れると。
これが、その人形なのですね。
邪神ルーディアは神の力では無く、魔女としての力を使ったんでしょう。
私は、古代魔法の神秘に触れたような気がしました。

私のそんな思いとは別に、事態は深刻化していました。
正神アイリスとその許嫁のカミーラの人形が、剣を構えて対峙していたのです。
「カミーラ。私がすぐあなたの身体を解放してあげます」
正神アイリスはそう言って、偽りの魂に剣を突きたてようとしました。
ですが、それをカミーラは、自分の持つ邪剣で、受け止めたのでした。
その時、正神アイリスの顔に変化が起きました。明らかに困惑の表情です。
「何故、何故なの。カミーラ。
どうして、人形である筈のその身体に、あなた自身の命が宿っているの？」
私はそれを聞いて、首をかしげました。

魔女としてルーディアが与えた偽りの魂は、命などではありません。
人形を造るための道具に過ぎない筈です。
私はまたしても、頭が混乱してしまいました。

　そんな私や正神アイリスの思いとは別に、カミーラは剣を繰り出して来ました。
そして、正神アイリスと互角以上に張り合っていたのです。
伝説によれば、アイリスとカミーラは同じ師により、剣を学んだそうです。
だから、剣技が同等以上であるのは、納得出来ない事もありません。
ですが、それはあくまでも、人間だった時の話です。
人形として操られているカミーラに、かつての剣技が使えるものなのでしょうか。
一方、正神アイリスは、明らかに動揺していました。
先ほどの邪神との戦いとは、雲泥の差です。
攻撃をする事が出来ず、守勢に立たされていました。
正神アイリスにとっても、理解不能な事態であったんでしょう。
あの時、ひょっとしてカミーラは死んでいなかったのかも。
そう思っているに違いありません。
そして、それが己の剣に迷いを生じさせたのです。
正神アイリスは、追い込まれていきます。
ただ攻撃を避けよう、守りに徹しようとする彼女へ、カミーラの剣が襲いました。
グサッ！　カミーラの剣は、正神アイリスの右肩に、振り下ろされました。
正神アイリスは、その剣をまともに受け、剣を手放し、床に倒れたのです。
「ウウッ！」うめき声を上げながら、その痛みに身体をよじる正神アイリス。
そのアイリスに、どこからともなく高笑いが聞こえてきました。

「フフフフ、ハハハハハハ、アハハハハハハ」
立ったままの姿勢でいるカミーラの傍らに、邪神ルーディアが現れたのです。

「どうやら、済んだようじゃな」
邪神はそう言って、カミーラから邪剣ザイドを取り上げました。
「どうじゃな。かつての許嫁に斬られた気分は？
さぞかし、心も身体も深く傷ついたであろうな。
フフフフフ、ハハハハハハ、アハハハハハハ」邪神はまた高笑いをします。
正神アイリスは、その痛む身体を押さえながら、邪神の方を向きました。
「一体、お前はカミーラに、何をしたのです」
この正神アイリスの問いに、邪神は笑いをこらえているようでした。
「フフフ。知りたいと言うのであらば、教えて進ぜよう。
そなたも覚えておろう。
わらわがそなたに斬られた後、王子であるカミーラに取り付いたのを。
あの時、既に魂は消えかかっており、使い物にはならなかった。
されど、命のかけらは、まだ幾分残っておったのでな。
それを吸い上げたというわけじゃ。髪の毛1本ほどのな。
じゃがの、そのままでは、命のかけらはすぐに消えてしまう。
神剣ならば、それが持つ力によって、命のかけらはいつまでも保存出来る。
現にお前の父の命のかけらは、今でもこの剣に保存されておるのじゃ。
じゃが、髪の毛ではそうはいかぬ。
それ故、わらわは、その髪の毛に「時（とき）の呪」をかけたのじゃ。
時間の流れを止め、命のかけらが失せるのを防ぐようにの」
正神アイリスの顔は、はっとした表情を見せました。

その様子に満足したのか、邪神は話を続けます。
「先ほどのそなたとの戦いの後、わらわは、墓の間へと降りたのよ。
このわらわを倒すために、そなたとともに戦った、他国の王子カミーラ。
その英雄を、まさか粗末な扱いにはしておるまいと思っての。
案の定、カミーラは墓の間の棺の1つに、英雄として大切に入れられておったわ。
わらわはその棺のふたを開けた後、その躯(むくろ)を利用した。
偽りの魂で人形を造って、その体内に命のかけらを戻したというわけじゃ。
それにしてもな。
念のためにと思って、取っておいた命のかけらが、こんなに役に立つとはのう」
邪神はそう言って、正神アイリスの元に近付きます。
「どうじゃ、正神アイリスよ。
あのカミーラが、実は生きているだと錯覚したのでは無いか。
お前も、正神ザイドも同じじゃ。まんまとわらわにたぶらかされおったわ」
「正神ザイドも。それはどういう意味なのです？」
「フーム。まだ、判っておらなかったと見えるな。
まぁ、そなたとは、もう出会う事もあるまい。
ならば、最後に、これも教えて進ぜよう。
わらわがいかに、この命を捧げたとしてもじゃ。
所詮、一介の魔女に過ぎんわらわなど、正神ザイドが受け入れるものか。
神が受け入れるのは、せいぜい、王族止まりじゃ。
わらわたちなど、歯牙にもかけぬわ。
じゃから、わらわは、まず邪剣を手に入れる事にしたのじゃ。
謁見の間で正剣ザイドを使って、お前の父である王グライアを殺(あや)めた。

そしてその命のかけらを、正剣ザイドにたっぷり吸わせて、邪剣を造ったのじゃ。
わらわはその後、この女神の間にある正神ザイドの石像の前に立った。
そして、邪剣をわらわの心の臓に突き刺したのじゃ。
その結果、わらわの肉体に、お前の父の「命のかけら」が注入された。
そのため、正神ザイドは、わらわを王グライアと誤認したのじゃ。
先ほど、そなたがカミーラを生きていると錯覚したようにな。
そして、わらわに、その力を与えたというわけなのじゃ」
邪神は、正神アイリスのすぐ傍らに来ました。
そして、邪剣の刃の先を下に向けた状態で、その柄(つか)を両手で持ったのです。
邪神は、正神アイリスの心の臓の上あたりに、狙いを定めました。
「正神アイリスよ。ここでそなたを刺しても、正神であるそなたが死ぬ事は無い。
封印されるだけじゃ。じゃが、わらわは絶対にそなたを復活させはしない。
そなたは死ぬ事も許されず、未来永劫、封印という牢獄に閉じ込められるのじゃ。
魔神大戦(まじんたいせん)以降、わらわたち魔族は、地の底に追放された。
魔界と名を付けたものの、その苛酷さは想像以上であった。
返還されたアルフレオの炎の力を使っても、それは変わらなかったのじゃ。
かつて、地上において最強の力を持っていた魔族。
それが神族や人族のせいで、弱体化し、消滅しつつある。
そなたは王族。人であり、かつ神の力を受け継いでおる。
そなたほど、わらわたち全ての魔族の恨みを受けるに、相応しい者は他におるまい。
絶対に許しはせぬ。

さてと。
わらわが、この剣でそなたを刺してから封印されるまで、しばしの間がある。
それが最後の、そなたのこの世の見納めとなろう。
わらわはそなたを刺した後、ここにいる者たちの魂を頂くつもりじゃ。
その様(さま)をその眼に焼き付けながら、封印されるがよかろう。
では、正神アイリスよ。今のうちに言っておこう。さらばじゃ」
邪神ルーディアはそう言って、邪剣を持つ手に、渾身の力を込めました。
そして思いっ切り、正神アイリスの心の臓に突き立てたのです。
「ウッ！」
正神アイリスは刺された直後、目を閉じ、その両腕はぐったりとしました。
その後、再び目を開きましたが、身体はもう幾らも動かないようです。
邪神は正神アイリスから、邪剣ザイドを引き抜きました。
「さてと、そなたももう用済みじゃ。元の躯(むくろ)に戻るがよかろうて」
邪神はそう言って、人形のカミーラの首を刎(は)ねたのです。
人形は躯となり、細かい欠片となって、床に散らばってしまいました。

邪神は邪剣ザイドを鞘に納めると、正神アイリスには、もう目もくれません。
そして、ガーネが倒れている所にいる、トラちゃんを一瞥しました。
ですが、全く意に介さない様子で、私たちに向かって歩いて来たのです。

第８話「正と邪の女神」８つめですね。（終）

第８話「正と邪の女神。」８つめですね。（後書き）

今回のお話は、第８話「正と邪の女神。」の第８回です。
この回では、女神の間での戦いです。
やっと、サブタイトル通りの内容に戻って来ました。
さて、次回はいよいよ、今回のお話の最後となります。

みなさん、体調は如何でしょうか？
こちらは熱中症にもならず、何とか生きていますので、ご安心下さい。

なるだけ、１週間に１回ぐらいは、投稿したいのですがね。
今度はいつ頃になるのでしょうね。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第8話「正と邪の女神。」最後ですね。（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第8話「正と邪の女神。」最後ですね。のお話です。
いよいよ、女神の間にて、最後の戦いです。

第8話「正と邪の女神。」最後ですね。

第8話「正と邪の女神」最後ですね。

邪神は私たちの前で、その歩みを止めました。

「待たせたのう。見ての通り、要らぬ邪魔が入ってな。
では、早速、命を頂くとしようかの。さて、どの者から始めたものか」

邪神はそう言って、まるで値踏みをするかのごとく、私とおじいさんを見ます。

やがて右腕のその細い人差し指を、私に向けました。

「やはり、その若き身体と魂じゃろうな。
魔物たちにとっては、貴重な栄養源じゃ」

邪神は私の方に近付いて来ました。そして私のすぐ目の前に立ったのです。

右手の細い人差し指を私の額に近づけた後、こう言いました。

「案ずる必要はない。痛みなどは起きぬ。
すぐに安らかな死が、お前を包んでくれようぞ」

邪神はそう言って、更に指先を近づけました。

「もう駄目だわ」そう思った時です。

「ウッ」邪神は短い叫び声を上げて、後ろを振り返ったのです。

「まさか、お前が！」そこには、動けなくなった筈の正神アイリスがいました。

そして邪神を、背中から斬ったのです。

しかし、その傷は浅かったのでしょう。

すぐに体勢を立て直し、邪剣を構えます。

「そなたは一体」

邪神が問う間も与えず、激しく舞う剣が邪神に襲いかかりました。

それは先ほどまで見せた剣技とは、全く違うものです。

どちらかと言えば力押しで、斬りつけている感があります。
邪神はかかってくるその剣を払いのけ、こう言いました。
「正神アイリスよ。
心の臓を突かれた筈のそなたが、何故、そんなに動けるのじゃ」
その邪神の問いに対する答えを聞いた時、私は愕然としました。
「正神アイリス？何を言っているのよ。
私はトラ。迷宮の旅猫（たびびと）のトラよ」
トラちゃんの声です。
正神アイリスは邪神に、再び剣を激しく振るい立ち向かったのです。
トラちゃん。あなたに何が起きたの？
多分、私たちが、邪神の相手をしている時だったと思います。
正神アイリスとトラちゃんとの間に、何かあったのでしょう。
姿は、正神アイリスです。でも、その声はトラちゃんです。
私には正神アイリスに、トラちゃんの心が宿ったとしか思えませんでした。

最初は確かに正神アイリス（＋トラちゃん）が、優勢だったと思います。
ですが邪神の方も、その打ちこんでくるタイミングに慣れてきたのでしょう。
だんだん、そのかわし方に余裕を感じられるようになったのです。
やがて邪神は反撃に出ました。
相手の剣をかわしながら、隙をついて斬り込んで来たのです。
その斬りこみに、だんだんと激しさが加わってきます。
正神アイリスは、その剣を受け止めるのが精いっぱい。
防戦状態になってしまったのです。
やがて正神アイリスは、その勢いに押されて後ずさりを始めます。
剣を受け止めるも相手に強く押し返され、後ろへあおむけに転倒しました。
その転倒の際、正神アイリスは正剣ラムダを手放してしまったので

す。
邪神はすかさず、正神アイリスの顔に刃の先を突き付けました。
邪神は一度、ガーネの方を一瞥した後、またアイリスの方に顔をを向けました。
「先ほど、あの容器の近くにいた子猫が見当たらぬな。
そうか、正神アイリスよ。苦し紛れに、あの子猫と同化したというわけか。
悪あがきも、いい加減にするがよい。
このわらわが子猫如きに、倒される筈は無かろう。
まぁ、よい。望むなら何度でも相手をしてやろうぞ。
とりあえず、今回はこれでおしまいじゃ。行くぞ」
邪神はそう言って両手で柄を握り、剣を振り上げました。
そして一気に振り降ろそうとした瞬間。
正神アイリスは目をギュッと閉じ、両手の拳を強く握りしめます。
そして、力いっぱい叫んだのです。

「ガーネ！　助けて！！」

トラちゃんの絶叫が、部屋中を駆け巡りました。

……ドックン　……ドックン

「ウァッ」邪神が唸り声を上げます。
「何故じゃ。何故、身体が動かんのじゃ！！」
邪神はそう叫びながら、身体を震わせていました。
邪神の赤く妖しく輝く魂。
その中で消え失せようとしていた、ガーネの魂の白き光の輝き。
その光が、強く輝きだしたのです。

まぶしいぐらいに輝くその光は、邪神の赤い光さえも凌駕していたのです。
その光に照らされて、正神アイリスにも力が戻っていくようでした。
「おのれ。人間の分際で、このわらわの身体を支配するつもりか」
そう叫ぶ邪神の赤い光も、今までに無い強い輝きを帯び始めました。
まるで邪神の中で、魂同士が争っているか如きの様相を呈しています。
正神アイリスはこの機を逃さず、すぐさま立ち上がりました。
床に転がっていた正剣を拾って、その柄を両手で握りしめます。
アイリスの目は、ガーネの魂の光を潰そうと輝いている邪神の赤い光を見ました。

「あたしのガーネに手を出すな!!」トラちゃんの声がそう叫びました。

正神アイリスは猛然と邪神に駆け寄り、その右肩を深く斬ったのです。
正剣が放つ凄まじい剣圧で、邪神は壁に叩き付けられてしまいました。
「おのれ。たかが子猫の分際で」
邪神は目を見開きました。その眼には狂気の色が、濃く滲み出ていたのです。
再び邪神の魂の赤い光が、強く輝きました。
邪神は体勢を立て直し、両手で剣の柄を握り締めたのです。

「ウオー!!」

邪神は唸り声を上げながら上段の構えで、正神アイリスへかかって行きます。

「ガーネを返せ！！」

正神アイリスも叫びながら右手に正剣を握り、邪神ルーディアへと駆け寄ります。
正神アイリスの正剣と邪神ルーディアの邪剣。
この２つが交差する直前、またガーネの魂が強く輝きました。
またもや赤い光を凌駕したのです。
力無く振り下ろされた邪剣は、いとも簡単に正剣に受け止められしまいました。
正神アイリスは空いている左腕を光らせ、邪神の体内にその腕を伸ばします。
その左腕が引き戻されると、その手の中にはガーネの魂が握られていました。
「お前には、代わりにこれをくれてやる」
正神アイリスは邪神の心の臓に、正剣ラムダを突き刺しました。
そして、邪神を蹴り飛ばしたのです。
邪神はそのまま力無く、床に倒れ伏してしまいました。

「やったー、トラちゃん万歳！！」私とおじいさんは、飛びあがって喜びました。
胸の溜飲が下がる思いでした。

正神アイリスは、もう邪神には目もくれませんでした。
「ガーネ、すぐにこの魂を身体に戻してあげるからね」
大事そうにガーネの魂を両手で抱え、急いでその身体へと向かいます。
私たちも、ガーネの元へ駆け寄りました。
ガーネの身体の元に着いた正神アイリスは、片膝をつきました。
そしてその魂をガーネの心の臓の上あたりに、そっと置いたのです。
すると吸い込まれるようにその魂は、身体の中へと消えていきまし

た。
その後正神アイリスは、ガーネの身体を揺すりました。
「ガーネ、ガーネ」と声をかけたのです。
でもガーネは目を覚ましません。
間に合わなかったのかしら。私は不安になりました。
すると正神アイリス、いやトラちゃんが突然つぶやいたのです。
「アイリス様？」
そして何か話を聞いているように、じっとしていたのです。
やがて話が終わったのでしょう。正神アイリスは動き出しました。
ガーネの顔の近くで、両手と両膝を床に着けたのです。
私はその正神アイリスの顔を見て、あれっと思いました。
正神アイリスは、顔を赤らめていたのです。
その理由はすぐに判りました。
正神アイリスはそのままの格好で、ガーネの顔に自分の顔を近づけました。
そしてその口元に、キスをしたのです。

キスが終わると同時にトラちゃんと正神アイリスの身体は、分離しました。
トラちゃんはガーネの顔の所に行き、前足の肉球でビシバシ叩きました。
「ガーネ、起きてよ。ねぇ、起きて」トラちゃんがガーネに呼びかけます。
少し間をおいてガーネは「アッ、アーッ」とため息をもらしました。
右腕をゆっくりと額に当て、目を覚ましたのです。
しばらくぼんやりとした目でトラちゃんを見ていた後、口を開きました。
「トラ、あなたの声が聞こえたよ」
ガーネはそう言って、トラちゃんの頭を撫でました。
「私を助けてくれたんだね。有難う、トラ」

「ガーネェ！」トラちゃんは、ガーネの身体の上にあがります。
ガーネの両腕にしっかりと抱かれ、目を閉じて丸くなっています。
その顔には、いつもの優しい表情がありました。

これで、ハッピーエンドってわけね。
結局、私はヒロインになれなかったんだな。
そんな私の落ち込みに気が付いている人は、ここには1人もいませんでした。

ところが、まだ事は終わってはいませんでした。
邪神ルーディアがしゃがんだ状態で、正剣ラムダを引き抜いたのです。
そして傍らにある邪剣を握り締めました。
私は何をする気かと警戒しました。
すると意外な事に邪神はその邪剣の刃の先を、自分の方に向けたのです。
「いけません！」
その様子を一緒に見ていたガーネはトラを脇に置いて、いきなり走り出しました。
「ガーネ！」トラちゃんが叫び、私も驚いて走った方向に視線を向けます。
ガーネは、邪神ルーディアの持っている邪剣の柄を蹴り飛ばします。
蹴られた邪剣は、宙へ舞い上がりました。
そんな状況下でも、邪神はガーネには目もくれません。
舞い上がった邪剣だけを目で追って、それに手を伸ばそうとしています。
ガーネはそんな邪神の心の臓へ、再び正剣ラムダを深く突き刺したのです。
「グワァ」
邪神は初めて気が付いたように、ガーネの顔を見たのです。

最初、怒りに駆られたような形相を浮かべていました。
そんな邪神に対し、ガーネは何かを語りかけたようです。
何故か邪神は安らいだ表情になり、次に不思議そうな表情を浮かべました。
そしてガーネの鉄仮面に覆われた頬のあたりを、右手の人差指で触れたのです。
邪神は何かを、つぶやいているようにも見えました。
そしてそれが最後でした。
邪神の身体は白骨化し、音も無く砕け散ります。
私たちが駆け寄った時には、そこにはもう何もありませんでした。
まるで最初から邪神なんていなかったかのように。
ガーネが私たちの方を振り向きます。
その鉄の仮面の頬の部分が、何故か濡れていました。
私は石像が1つ戻っている事に気が付きます。
でもその顔は、あの邪神ルーディアの顔ではありません。
「これが、正神ザイドなのじゃな」おじいさんが、そうつぶやきました。

私たちは、正神アイリスの元に集まりました。
もう既にかなり弱っているようです。
でもその口調は、まだしっかりしています。
正神アイリスは、ガーネを見つめました。
「あなたは、知っていたのですね」
正神アイリスは、そう尋ねました。
「はい。私は邪神の中で、その意識は眠らされていたようです。
でも、ここにいるトラの声のおかげで、目を覚ます事が出来たのです」
ガーネはそう言って、トラちゃんの頭を撫でています。
トラちゃんは、とても気持ちよさそうな顔を浮かべていました。
ガーネは話を続けます。

「目を覚ました途端、いろいろな思いが私の中に入って来ました。
それは邪神、というよりは魔女ルーディアの思いだったんでしょう。
魂を共有すると言う事は、相手の思いも共有するものだと知らされました。
そこで私は知ったのです。事のあらましを。
魔女ルーディアは、正神ザイドを騙して邪神となる事が出来ました。
ですがその命のかけらは王のものであったため、すぐに消えてしまったのです。
ルーディアは、自分では邪神だと言っていました。
でもその力を十分に利用するには、神族か王族の意志が必要だったんです。
元が一介の魔女に過ぎないルーディアの意志では、及びもつかない事でした。
ただ自分の魔力を少しだけ高める事ぐらいしか、出来なかったんです。
後は邪剣にすがるしか、手が無かったんです。

膨大な力が手元にあるのに、それが使いこなせない自分。
ルーディアは自分が邪神になってからも、そのジレンマに悩まされていました。
一方、神族や人族には、並々ならぬ憎しみの感情を抱いていました。
神魔大戦以後、支配者の力を持ちながら地の底の魔界に追放された恨み。
この恨みが、憎しみへと姿を変えていました。
また弱体していく魔族を地上に戻し、元の繁栄を取り戻したい。
そんな願いもあったんです。
そしてこれらの思いがルーディアを支え、こんな行動をとらせたのです。

ですが私が目覚めた事で、その思いが崩壊していきます。

私がルーディアの思いを知ったように、ルーディアも私の思いを知ったのです。
その中で、もう地上が女神や魔族の住む世界で無い事を知ったんです。
もう、どんなに自分が頑張っても、耐えても、元に戻る事は無い。
自分を支えていた大きな支えの1つが、崩れてしまったんです。
あとに残ったのは、神族と人族に対する憎しみだけです。
そしてその矛先は正神、いや、王女アイリス1人に向けられました。
つまり、あなたですね。
王族は、代々、神の力を受け継いだ人間たちです。
しかもあなたは、あのアスラム直系の子孫。
あなたはルーディアにとって、申し分の無い仇(かたき)でした。
だからあなたが生きている限り、自分も生きて復讐してやろうと考えたのです。

今のルーディアの魂には、王の命のかけらはありません。
このまま死ねば封印される事も無く、本当の死が自分に訪れます。
それでは封印されて、この世に残るアイリスに復讐出来なくなる。
だから邪神ルーディアは、自分の心の臓に邪剣を突き刺そうとしたんです。
王の命のかけらを再度自分の肉体に注入し、死を免れようとしたんです。
私は、それを止めてあげたかった。
死ぬ事の出来ない無限の苦しみから、解放させてあげたかったんです。
だから私はルーディアに、告げたのです。
「あなたが死ぬ事で、アイリスもこの世からいなくなる。
それであなたの願いの少なくとも1つだけは、かなえる事が出来ます」って。
ルーディアはそれを聞いた途端、安らいだ顔をしました。

そして私が無意識の内に流した涙を、拭おうとしてくれたんです。
ルーディアは私の仮面の頬の部分に触れて、こう言いました。
「そうか。それならばよい。そなた、いろいろと済まなかったな」
ルーディアはこの言葉を最後に、その長き命を終えました。
私はルーディアが最後に安らぎを得る事が出来た。そう信じたいのです」

正神アイリスは、ガーネの言葉にうなずいた後、話を始めました。
「あなたの言う通りです。
私は石像の中で眠りにつきながらも、事あるごとに目覚めていました。
そして世界の移り具合を見守り続けていたのです。
あなたが仰った通り、もうここは女神が守るべき世界ではありません。
また悪魔が支配出来る世界でも無くなっています。
人間が自分たちの責任の元に守り、そして切り開いていく世界なんです。
邪神ルーディアが滅びた今、私の役目は終わりました。
私もまた人間に戻ります。そしてルーディアのように塵と化すのでしょう。
正神であるザイドとラムダの力も、その役目を終えた事が判っています。
だから天上界にいる、それぞれの女神の元に帰って行く事でしょう。
皆さんには、いろいろとご迷惑をおかけしました。
正神及びこの王国の代表として、あらためてお礼を申し上げます」
正神アイリスは私たちに、お礼の言葉を述べてくれたのでした。

私は最後に一つだけ、最大の関心事を聞いてみました。
「あのー、済みません。大変恐縮なのですが、１つお聞きたい事があるんです。

この隠し部屋にあった、金銀財宝はどうなったんでしょうか？」
私のこの問いに正神アイリスは嫌な顔一つせずに、答えてくれました。
「この王国グライアは長い歴史の中で、不幸な出来事に見舞われました。
天変地異に見舞われ、疫病がまん延したのです。
そのため王国の全ての民が生きる場所を求めて、この地を離れて行きました。
何人かは他国へ移住しましたが、ほとんどは別天地へと旅立ったのです。
ただそこで国家を再建するには、先立つものが必要です。
そこで当時の王族は、この隠し部屋の金銀財宝を持ち出したと言うわけです」
私はあっと、気が付きました。
この件は神殿に着く前に、ガーネたちに私自身が話した出来事だったからです。
何で私はその事に、気が付かなかったんでしょう。
良く考えて見れば、当たり前の事でした。
「でも、でも」私は喰い下がります。
「それなら、何であのようにいろいろな罠を、張り巡らしていたのですか？
持ち出したのなら、そんな必要なんて無かったでしょうに」
そんな私の質問にも、簡単明瞭な回答を与えてくれました。
「あんな金銀財宝を持って長旅をすれば、盗賊に狙われてしまいます。
秘密裏に運び出し、それを悟られないようにする必要がありました。
そこで当時の王族やそれに仕える魔法使いは、策を弄したのです。
周りの国々にはまだ財宝は、神殿に眠っているといいふらしたのです。
またそれが真実であるかのように、細工を元に戻して置いたのです」

そうですか。あれらはみんな、真実を知られないための偽装だったんですね。
はい判りました。もう何の質問もございません。
私は私たちの探検が、今終わった事を知りました。
最後に正神アイリスは、私たちにこう話しました。
「私は正神としての役目を全う出来た事を、嬉しく思います。
この世界はこれからも変わって行くのでしょうね。
もう私には見守る事が出来ませんが、私は信じています。
人間たちがかつての私たち以上に、よりよい未来を造ってくれる事を。
私はもう何も思い残す事はありません。
この神殿の最後に立ち合ってくれたみなさん。
本当に有難うございました。さようなら」
正神アイリスは目を閉じました。
まもなくその身体はルーディアと同様、白骨化して消えていったのです。
私たちは石像が2体になっている事に気が付きます。
あたしたちは新たに出来た石像を見ました。
「これが正神ラムダなのですね」ガーネはそう言いました。

私たちが2つの女神像を見比べている時に、それは起こりました。
その2つの石像が、音を立てて崩れ始めたのです。
そしてあっという間にただの砂や石になって、床に散らばったのでした。
「女神たちの力も、元の所有者の元に帰ったと言う事なのじゃろう」
おじいさんはそう言いました。

私たちは、その神殿を去ろうとしていました。
その時、大きな地響きを立てて、神殿が崩れ始めたのです。
私たちは慌てて、既に姿を現している出入り口から外に出ました。

そしてレイグルに乗り込んだのです。
私たちが出発の準備をしている間も、どんどん崩れていきます。
「ここから出られますか？」ガーネが尋ねます。
「走っては無理じゃろ。仕方がない。飛んでいくか」
おじいさんはそう言って、全速で走らせます。
レイグルの装甲のあちらこちらに、何かがぶつかってきているようでした。
それでも構わず、走らせたのです。
「離陸をするぞ！」おじいさんはそう叫びました。
グイーン。レイグルが翼を広げ、空を飛びます。
崩れゆく神殿の屋根や柱、そして壁。
いろいろな物をかいくぐり、ぶつかりながら、無事に脱出する事が出来ました。
上空から神殿を見ると、神殿が全体的に崩れ落ちて行く様子が見えます。
大きい噴煙が沸き上がっていました。
私たちはその噴煙に巻き込まれない場所まで、飛行を続けたのです。

噴煙が終わった後、私たちはレイグルを着陸させ、そこから降りて見ました。
神殿は完全に崩れ、原形をもはや留めてはいません。
ここにあったと言っても、もはや誰も信じる事は無いでしょう。
「終わりましたね」ガーネは誰ともなしにそう言います。
私はその光景を見ながら、こう言いました。
「２つの女神の石像は、自分たちの役目が終わったとして壊れてしまったわ。
きっと神殿もそうだったのね」
そうつぶやく私の肩を、トントンと誰かが叩きます。
私が振り向くと、そこにはガーネがいました。
「ガーネじゃない。一体、何なのよん」

「あのーですね。
この物語を、綺麗にまとめようとしているところを悪いんですが。
確かに2つの女神の石像に関しては、おっしゃる通りだと思うんですよ。
でも神殿に関しては、違うんじゃないんでしょうか？」
「えっ、それはどう意味なの？」
「神殿が壊れたのは、私たちがあの神殿をぶち壊しながら進んだからですよ。
なんせ王室の住居区以外は、全部壊しながら通ったんですから」
ギクッ。
「そうね。私も柱はほとんど壊れたのを知っているわ。
かろうじて立っている柱も全部、致命的なヒビが入っていたしね」
ギクギクッ
ガーネとトラちゃんが、雀のようにピーチクパーチクさえずっています。
そこへ何故か、おじいさん雀も絡んできたのです。
「言っておくがの。
わしがレイグルで神殿に乗り込んだのは、お前が賛成したからじゃぞ。
そこのところを忘れてもらっては困るぞ」
ギクギクギクッ。
あれ、良く考えて見ると、おかしいわ。
炎ライオンでしたっけ。私はあれを倒した英雄じゃないですか。
その英雄が、なんでこんな言われ方しなくちゃいけないのかしら。
全然判んない。
おじいさんに限らず、みんな、その事を過小評価していません？
私があれを弓矢で倒したからこそ、おじいさんも私も無事なのですよ。
その命の恩人に対してですね。
おじいさん、あなたは何て事を言うのでしょう。

これじゃあ私が遺跡ぶっ壊しの、張本人みたいじゃないですか。
そもそも事の起こりはですよ。
おじいさんが金銀財宝目当てに、始めた事じゃないですか。
それじゃあ責任転嫁ですよ。それが可愛い孫に対する仕打ちですか。
などと心の中で叫んでいました。
ですが赤の他人の前で肉親同士の争いもどうかと思い、止めました。
今回の件に関しては出来うる限り、うやむやにした方が得策というものです。
そう判断した私はにこやかな顔で、小うるさい雀たちに言いました。
「ガーネやトラちゃん。
そんな些細な事にこだわったり、気にするような狭い了見では駄目よ。
それじゃあ決して大きい人間にはなれないわ」
この私の正論に対して、トラちゃんとガーネはこう反論しました。
「あたし子猫だし。このままでいいもん」
「私も背格好は、今のままで十分ですし」
「わしもこれ以上、背は伸びんしな」
それに対し、私はこう答えました。
「誰も身長の話など、しておらんわ！」

こんな他愛も無い？話をした後、私とトラちゃんはレイグルに戻りました。
おじいさんとガーネは、外でレイグルの点検中です。
私は自分とトラちゃんの分の飲み物を用意し、テーブルの椅子に座ります。
私は気になっている事を思い切って、尋ねてみる事にしました。
「ねぇねぇ、さっき、どうやって、正神アイリスと同化出来たの？」
私のその問いに、トラちゃんは次のように答えました
「ああ、あの事ね。
あたしあの時、ガーネと一緒にいたの。

そうしたら、倒れていたアイリス様が目を覚ましたの。
そして、あたしを手招きで呼んだのよ。
それで近くに寄って行ったの。そうしたらね。
「確かトラって、名前でしたよね。
トラさん。あなたにお願いがあります。
このままでは、邪神がこの世にどんな災いをもたらすか、計り知れません。
私は絶対、それを阻止しなければならないのです。
だからトラさん。あなたの魂をしばらく私にお貸し下さい。
私と同化して、あの邪神と闘って欲しいんです」
「あたしは子猫でしかないわ。そんなの無理よ」
「ガーネでしたよね。あの人の名前は。
あなたはあの人の魂を取り戻したいのでしょう？」
「そんな事出来るの？」
「ええ、私にはあの邪神から魂を取り戻す力があるの。
その力を使ってあげるわ。だから協力して欲しいの」
そんな会話をしたのよ。だからあたし、その申し出を受ける事にしたの。
アイリス様は私の頭に手を当てたわ。
そうしたらいつの間にか、あたしがアイリス様になっていたのよ」
「へぇ、そうだったの。知らなかったわ」
私たちが邪神の言葉におびえている間に、そんなドラマがあったなんて。
邪神、邪魔。私はあらためて憤慨しました。
それから私はもう1つの事も尋ねてみました。
どちらかと言えば、こちらの方が私には関心が高い出来事だったもので。
「ねぇ、ガーネの魂を身体に戻した時の事なんだけど。
トラちゃん、ガーネにキスをしたわよね。あれって、どうしてなの？」

この問いに、トラちゃんは「えっ」って言った後、顔を赤らめます。
少しもじもじしていましたが、やがて口を開きました。
「あのね。この事はガーネには内緒にしてね」
トラちゃんはそう前置きしてから、話を続けました。
「ガーネの魂を身体に戻しても、ガーネは目を覚まさなかったでしょ。
そうしたら、アイリス様にこう言われたの。
「既にあなたのおかげで、魂はガーネさんの元に戻っているわ。
後は、ガーネさんを目覚めさせるだけでいいの。
でも、それにはガーネさんを心から思っている者のキスが必要なの。
そして今それが出来るのはトラさん、あなたしかいないわ。
だからあなたが彼に、キスをしてもらいたいの」
あたしはアイリス様からそう言われたの。だから……」
「ガーネの口元にキスをしたってわけね。やるじゃない、トラちゃん」
私はそう言ってトラちゃんの肩をポンとたたきました。
するとトラちゃん。恥ずかしかったのでしょう。
両方の前足で顔を隠して、テーブルの上で転げ回り出していたわ。
トラちゃん。あなたは私より1つ大人の階段を上ってしまったのね。
妹分だと思っていた子猫に追い越されたような、少しさみしい私がいました。

やがておじいさんとガーネが、レイグルの中へ戻ってきました。
「レミアお姉ちゃん、さっきの事は内緒だからね」
「そんな事、判っているわよ」
私とトラちゃんは小さい声でそんな話をした後、2人を出迎えました。
テーブルで少しの間、みんなはお茶を飲みながら休憩をしました。
その後おじいさんは運転席に座り、いろいろチェックをしています。
そして点検が終わったのでしょう。私に話しかけてきました。

「もういつでもレイグルは動かして大丈夫じゃ。
わしはこれで研究所に戻るが、お前も一緒に来るかの？」
おじいさん。あなたは孫をこの砂漠の中で1人置き去りにするつもりですか。
やれやれ。一体、何を考えているのやら。
私は半ば呆れながらもそれをおくびにも出さず、おじいさんに答えました。
「はい。私もそろそろ、お家へ戻ろうと思います。
おじいさん、連れて行ってく下さい」
研究所まで行けば、そこで書き物も出来ますし。
公共の乗り物をついで、自宅にも戻れますからね。
私も、帰り支度を始めました。
しばらくしてそれも1段落した後、ガーネたちに声をかけました。
「ねぇ、どこか行く予定が無いなら、あなた方も研究所に行ってみない？」
ガーネとトラちゃんはその時、レイグルの窓から外を眺めていました。
そして何やら指差して話をしていたのです。
ガーネたちは私の方を振り向きました。
「いいえ、どうやら私たちにもお迎えが来たようです」
ガーネはそう言い、トラちゃんもうなずいています。
私も窓の外を見ましたが、そこには何もありません。
怪訝な顔を向けた私に対し、ガーネは口を開きました。
「レミアさん。あなたはこの世界の人間だから見えないんでしょう。
でも私たちにははっきりと、迷宮のドアが見えています。
私たちはここを去らなければなりません」
ガーネとトラちゃんはそう言って席を立ちました。
そしてレイグルの外へと出て行ったのです。
私やおじいさんも見送るために、外に出ました。
ガーネたちはそんな私たちの方を振り向きました。

「ゾア博士。そしてレミアさん。今まで本当に有難うございました。
私たちにとって、また素晴らしい想い出が1つ出来ました。
どうかいつまでも長生きして、幸せになって下さい」
ガーネとトラちゃんはそうお礼を言って、私たちに頭を下げました。
「さようなら。ガーネ、そしてトラちゃん。
私もいつまでも、あなた方の事は忘れません」
多分、この時、私は少し涙ぐんでいたと思います。
「じゃあな。くれぐれも身体には気を付けるのじゃぞ」
おじいさんもさみしそうです。
結構、仲がよかったみたいでしたから、私より別れ難かったかもしれません。
手を振る私たちにもう一度頭を下げて、ガーネたちは去って行きました。
そのガーネたちから、こんな声が聞こえてきたのです。
「あっ、ガーネ。鉄の仮面が割れたわ」
「本当ですね。やっと仮面が外れました。それにしても、今になってとは。
付けたままでも迷宮に戻れば、直ぐに無くなってしまうんですけどね」
「まぁ、いいじゃない。
この世界で付けられたんだから、この世界で外さなきゃ」
「そんなもんですかね」「そんなもんよ」
私はそれを聞いて、ガーネたちの方へ走り出しました。
私はどうしても、ガーネの顔を見たかったからです。
ですがその時、急に砂嵐が巻き起こりました。
私は目を閉じて顔を腕で覆い、立ち止まざるを得ません。
まもなくその砂嵐は納まりました。
ですが私が目を開けた時には、もうガーネたちの姿はありませんでした。

あれから、どのくらいの時間が過ぎたのでしょう。
私はすっかり、おばあさんになってしまいました。
結婚をして家庭を作り、子供も出来ました。そして今や孫もいます。
おじいさんはもう他界して、この世にはいません。
私は机の引き出しを開けてみました。
私はずっと誰にも話さずに、秘密にしていた事があります。
実はわたしはあの神殿から、１つだけ持ってきた物があります。
それはあの赤い秘石です。私はそれを机の上に置きました。
これも魔法をかけられた石だったようです。
神殿を離れた後、改めて見てみると、ただの赤茶けた石になってしまいました。
念のため調べてもらったのですが、何の変哲も無いただの石だと判りました。
じゃあ何でいつまでも私の手元に、置いているかというとですね。
この石を見る度にあの出来事が、私の脳裏に鮮やかに甦ってくるからです。
探検の事、レイグルの事、そしてガーネとトラちゃん。
あの探検にまつわる様々な想い出。
それがつい昨日の出来事のように、思い出す事が出来るのです。
ガーネが言っていたように、これらの想い出は私にとっても宝物なのです。
もちろんこの石自体は、客観的には何の価値もありません。
でも、私にとっては違います。
これらの事を思い出させてくれる、かけがえの無い貴重な宝物なのです。

私はあの探検の事を、記録に留めて置くことにしました。
最初は、私の心の中にだけ残して、そのままお墓まで持っていくつもりでした。

でも、私の孫やその子孫に、この体験を語り継いでもらいたい。
そう思うようになったのです。
私が生きていた証を、いつまでも残して置きたかったのです。

私はこの石を見る度に、今でも心残りな事が1つあります。
それはガーネの顔を見る事が、出来なかった事です。
あの人たちは、まだ迷宮の旅を続けているのでしょうか。
それとも、自分たちの世界に戻れたのでしょうか。
私はあの日以来、彼らに会う事は2度とありませんでした。

第8話「正と邪の女神」最後ですね。（終）

第8話「正と邪の女神。」最後ですね。（後書き）

今回のお話は、第8話「正と邪の女神。」の最終回です。
ついに、今回のお話の最後となりました。
今回のお話を最初から、お読み頂いた方がいるのでしょうか。
もし、いらっしゃるなら、心からお礼を申し上げます。
楽しんで頂けたのなら、幸いです。

みなさん、体調は如何でしょうか？
こちらは熱中症にもならず、何とか生きていますので、ご安心下さい。

また会える日を、願っています。
でも今は、さよなら。

第１０話「ブリザード」？－１（前書き）

迷宮の旅人である、ガーネと猫のトラが織りなす、別世界での旅のお話です。
第１０話「ブリザード」？－１のお話です。
今回はブリザードが吹き荒れる大地での、物語です。

第１０話「ブリザード」？－１

第１０話「ブリザード」？－１

いつものように、トラとガーネは迷宮をひたすら歩いています。
「なかなか迷宮のドアは現れませんね」
「本当、この前現れたのはいつだったか、もう忘れてしまったわ。一体どうなっているのかしら。ぷんぷん」
「まぁまぁ、イライラしても仕方が無いですよ。いつもの事ですからね。
どうです。だいぶトラも歩いたようですし、ここで休養されては？」
「うーん、そうね。今あたしたちが歩いているこの道は、ずっと平坦なまま延びているけど、見渡す限り、迷宮のドアなんて影も形も無いわ。起きていても無駄かもね。
あーっ、あっと。じゃあ、眠ろうかしら」
トラは欠伸をした後、ガーネの肩からポケットへと移ります。顔と前足をぴょこんと出した状態で、ガーネの顔を見上げました。
「じゃあ、あたし寝るから。うるさくしちゃ駄目よ」
「トラ。私は１人芝居をするタイプではないので、大丈夫ですよ。ゆっくりお休みなさい」
「うん。じゃあ、お休みなさい」
「はい、お休みなさい」
トラはガーネの右ポケットでいつものように、眠りにつきました。
スースースー、スースースー。
何事も無く、穏やかに時が過ぎていきます。やがて十分な睡眠をとったトラは目を覚ましました。
「あーっ、あっ」トラは全ての足を伸ばしながら、欠伸をします。
「さて、どうなっているかな」半分寝ぼけ眼のまま、トラはポケッ

トから這い出して来ます。
「お早う、ガーネ。ムニャムニャ」トラはガーネをよじ登ろうとしたのですが、何分、まだ意識が朦朧としている状態だったので、鉤爪を出すタイミングが狂って、ポケットから落ちて行きます。現在、ガーネが立っている道から逸れて、トラが黒い空間へ落ちて行こうとした時、その落下が急に止まりました。ガーネがかろうじて、腰をかがめながらトラの後ろ足を捕まえる事が出来たからです。
「大丈夫ですか？　トラ」「フム？　何の事？」
　トラはまだ半分おつむが眠っているため、現状把握がなかなか困難なようです。
　やれやれ。ガーネは半分呆れながらも、トラを引き上げようとしました。
「あっ！　待ってよ、ガーネ」トラがはっきりした口調で、ガーネに声をかけます。
「どうしたんですか？」「あれよ、あれを見て」
　ガーネはかがんだ格好で、トラが前足で指す方向を見ます。ガーネが立っている道のはるか真下には、交差するような形で道が延びていました。そしてその脇にあるものに目を止めたのです。
「うん？　あれって迷宮のドアじゃありませんか？」
　トラはそれをじっくりと確認するかのように見つめます。
「本当ね、間違いないわ。じゃあ、あそこまで飛び降りましょう」
「でも、いいんでしょうか？」「何が？」
「この道では無く、あそこに現れていると言う事はいずれ、あそこに誰かが来るから、現れたんじゃないでしょうか？　果たして私たちが行っていいものなんでしょうかね」
「いいんじゃない？　速いもん勝ちって事で。それとも、あれを無視して、この道を歩き続けるつもりなの？」
「まぁ、それは考える余地がありますね。でも、何か良く無い気がするんですが」
「あたしは行くつもりよ。ガーネも行きましょう。この道ではいつ

まで経っても、現れないような気がするの」
「そうですね、行きましょうか」
トラとガーネは今いる階段から下へと飛び降ります。ゆっくりと下降し、無事に下の階段に降り立つ事が出来たのです。
「やりましたね。見てください、迷宮のドアですよ」「ああ、やっと会えたのね」
ガーネとトラは勢い込んでドアのノブを開き、中へと入って行きました。

ヒュー、ヒュー。　雪が吹き荒れています。ブリザードでした。
「さ、さ、寒いですね」「ええ、寒いわ。このままなら確実に凍死するしかないわね」
迷宮のドアを開けてから、すぐにガーネとトラは雪に埋もれてしまいました。
「うわぁ、ぶるぶるぶる」ガーネは慌てて身体に溜まった雪を払い除けます。
「ふぅー、どんなに雪を払ってもまた溜まってきますよ。一体どうしたらいいんでしょうかって、あれ、トラはどこに行ったんでしょうね。どこにも見えませんが」
ガーネがきょろきょろしていると、どこからか声が聞こえてきます。
「あたしはここよ」ガーネは自分のポケットからの声だと気が付きました。
「いつの間に潜り込んだんですか？　まぁ、それはどうでもいいですけど。どうです、ポケットの中は暖かいですか？」
「うー、寒い。寒くてたまらないわ。なんでこんな薄い生地を使用しているのよ」
「別に防寒服ではありませんしね。仕方がありませんよ。それにしてもここで突っ立ってても仕方がありませんね。雪をしのげるところを探しましょうか」

ガーネは意を決して歩き出しました。

ヒュー、ヒュー。あてもなく、ただ当てずっぽうに歩いていきます。

「ガーネ、大丈夫なの。ちゃんと人のいる場所までたどり着けるの？」トラは心配です。

「さぁ？」ガーネの回答は簡単明瞭でした。

トラは気が気で無く、ポケットから顔を出します。ですが、あっという間にトラの顔に雪が積もってしまいました。

「うわぁー！」トラは前足で顔の雪を払い除けて、慌ててポケットの中に潜ります。

「ガーネ、前言撤回。まだこの中のほうがましだわ。あたし、身体を抱きかかえているから、早く暖かい場所に連れてってね」

「私もさっきから、それを願っているんですけどね。現実はなかなかこちらが思ったようにはいかないものです」

ガーネはぼやきながらも、何とかこの場所から逃れる為、歩き続けます。しかし。

ズボッ。雪の中に身体半分が埋まってしまいました。ガーネはクレパスの中に挟まれた事を知ります。

「ねぇ、ガーネ。どうしたのよ。なんかすごい揺れがあったけど。あれ、でもなんかポケットがガタガタ言わないわ。雪をしのぐ事が出来たの？」

「いえ、違います。クレパスの割れ目に挟まって、ポケットの部分が塞がった状態になっているだけです。それにしても危なかったですよ。もし、このクレパスがもっと大きければ、私はこのまま落ちて死ぬところです。足元にはもっと注意しないといけないって事なんですね」

ガーネは両手に力を込めて、身体を持ち上げ、クレパスから這い出しました。

「ふぅー」やれやれと安心する間も無く、激しい雪がガーネを襲い

ます。雪が顔を直撃しないように下向きになりながら、腕で雪を払い、ひたすら歩いて行きました。

こんな苦労の甲斐もあってか、ガーネの前方に小屋が見えてきました。

「はぁ、はぁ、やっと小屋が見つかりました。トラ、トラ。ほら、小屋ですよ」

ガーネはそう言って、ポケットを叩きましたが反応がありません。

「これはまずいかも知れませんね」ガーネは大急ぎで小屋にたどり着きました。

小屋の入り口には鍵がかけられていたので、ガーネは近くにあった大きな石で鍵を壊し、中に入ったのです。

小屋の簡易ベッドに毛布が紐で縛って丸まっていたので、それを解いて広げ、トラをくるんで暖めました。

有り難い事にその小屋は暖をとるのに必要な物が揃っています。ストーブに薪を入れ、着火剤用であろう植物の茎をその上に並べました。

「さてと、火を付けるにはどうしたら」

ガーネはそう言いながらストーブの近くを探すと、床に小石が２つ落ちていました。

「ひょっとして」その小石を互いに打ち合わせてみると、火花が起きます。

「有り難い。火打ち石ですね」

ガーネはストーブの中にある薪の上で火打ち石を打ち合わせます。すると薪の上に載せてあった植物の茎に引火し、薪に火が燃え移ったのです。

しばらく時間が経つと、薪全体に火が回り、小屋中が暖かくなってきました。

ストーブの上に乗っていたポットに雪を入れて、沸かします。し

ばらくすると、湯気が立ち上ってきました。
ガーネがそのお湯を小屋に備えられていたコップについでいると、毛布がごそごそ動き出しました。
「あら、あたし、まだ生きているのね」トラはそう言いながらストーブに近づいて来ます。
「暖かいわぁ」トラは近くにある椅子に腰を降ろして、前足をストーブ内の赤々と燃える火の近くに差し出し、身体ごと暖まっています。トラの姿はストーブの炎に照らされて、オレンジ色に染まっていました。
ガーネはコップのお湯を傍にあったお皿に注ぎます。そのままでは熱かったので、小屋の外で雪を幾らかそのお皿に入れて、温度調整をしました。
「うん、これならいいでしょう」指で温度を確認した後、ガーネはそのお皿をトラの前に差し出します。
「さぁ、飲んでください」「うん、有難う」
トラはそのお湯をペロペロと舐めながら、飲んでいます。
「どうです。熱いですか?」「少し熱いけど、今日はこれくらいの方がいいかも」
どうやら大丈夫なようです。ガーネも安心して、コップのお湯を飲み始めました。
改めて周りを見回すと、ランプやロープがあるくらいで、他に目ぼしいものはありません。

人心地がついた頃、ガーネとトラはガタガタ揺れる窓から外を眺めます。
「相変わらず、激しい降りですね」「本当ね、いつ止むのかしら」
ふぅー。ガーネはため息をつくと、トラと一緒にまたストーブの元に戻りました。
「ねぇ、ガーネ」「はい、何でしょうか?」
「身体は暖まってきたけど、食事はどうなっているの?」

「じゃあ、そろそろ探してみましょうか？　非常食ぐらいあればいいのですが」
　ガーネとトラは小屋の至るところを探して見ましたが、食料は見つかりません。
「ありませんね。このままじゃあ、お湯を飲むのが精一杯ですよ」
　ガーネはそうぼやきながら、床を見ていると、そこに四角い仕切りがあります。
「これは」
「あたしたちが初めて出会った建物にあったのと同じね。多分、地下室に続くハッチじゃないかしら」「はい、私もそう思います」
　ガーネがそのハッチを開くと、案の定、そこには地下室らしき、暗い空間があります。ガーネは灯りが欲しいと思い、先程見つけたランプを手に取ります。それはオイルランプでオイルも少し残っていた為、ガーネは火を灯す事が出来ました。その後、そのランプを持ってトラと一緒に、その中へと降りて行ったのです。
　地下室はランプの灯りの色に染められて、ぼんやりと明るくなっています。ガーネは棚の上にランプを置いて、あたりを探した見ましたが、何もありません。
「トラ、駄目ですね。どうやら食料は無いようです」「本当、がっかりね」
　ガーネも落胆したように、背中を木壁に押し付けようとしました。
「うん？」ガーネは慌てて、壁から離れました。
「どうしたの？　ガーネ」「この壁、なんかおかしいですね」
　ガーネは周りの木壁を叩いて見ます。
「やっぱり、この壁だけは音がおかしい。中は空洞になっているのかも知れません」
　ガーネがその木壁の周りを見てみると、壁と壁の繋ぎ目がずれていて、少し浮き上がっています。ガーネはその隙間に両手の指を差し込んで、片方を引っ張ってみました。
　バリバリバリ　音を立ててその木壁が外れました。中は案の定、

空洞になっており、その中には何かがあります。
「これは何でしょう」ガーネが取り出すと、それは大き目のリュックサックでした。
「うわぁ。何かいい物が入っているといいわね」
「ええ、期待しましょうか」ガーネはそれとランプを持って、トラと共に地上へと戻ったのです。

「何が入っているの？」トラは期待しました。
ガーネは中を開けて、次々と取り出します。
「これはライト、これはタオルと……　ああ、いいものがありましたよ」
ガーネが取り出したのは、地図と何か丸いものです。
「方位磁石ですね。これで現在位置が判るかもしれません。後は……」
中には簡易キャンプ道具一式と、暖かい衣類がありました。
ガーネは一束の箱が透明な包装に包まれている物を幾つか取り出します。その1つを破って、箱の中身を空けてみました。
「トラ、見てください。携帯食料ですよ」
銀紙の包装を破って取り出したのは、ビスケットのようです。
「どうやら、これは栄養価がかなり高いみたいですね。一個食べればかなりのカロリーが摂れると思いますよ」
ガーネはリュックサックにあった携帯皿に中身を出して、トラの前に差し出します。
「ちょっと柔らかくした方がいいですか？」
トラは食べてみます。外はカリカリ、中はぐにゃっとしています。噛めば噛むほど美味しい。そんな風に思いました。
「大丈夫よ。でも、喉が渇くわね」
ガーネはそれを聞くと、お皿に、ポットのお湯と雪で温度調整したものを注ぎます。
「有難う、ガーネ」トラはそれを飲みながら、携帯食料をゆっくり

と味わいました。
ガーネもコップのお湯を飲みながら、そのビスケットをかじっています。ガーネたちはとりあえず、二個ずつ食べました。
しばらくすると、お腹が膨れてきます。
「これはすごい。体力が回復してくるような感じですね」「本当、食事って大切ね」
「節約して食べれば、一週間分ぐらいにはなるでしょうね。いいものが入っていました」
ガーネたちは満足して、食事を終えたのです。

第10話「ブリザード」？ー1（終）

第１０話「ブリザード」？－１（後書き）

今回のお話は第１０話「ブリザード」の第１話前編となります。
いよいよ、新シリーズ開始です。
今回から行数が今までの半分以下になっています。
前書きは省略します。後書きは何か書きたい事が出来た時だけとします。
また出来れば、週一ぐらいのタイミングで出したいと思っています。
この第１０話が終わるのは、来年となる予定です。
ご了承下さい。

お気付きの方もいるかも知れませんが、前回投稿したのは第８話です。
実は今回のお話の前に第９話「湖のある街」（全１２話）があります。
ですが終わって見ると、半分最終回っぽいような内容になってしまったのです。
その他にも諸々の事情により、この作品の投稿は見合わせる事にしました。
いつか投稿する事がありましたら、その時は第９話として投稿したいと思います。

気が向いたら、また続きを書いてみたいと思います。
では、また会える日を。Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ.

第１０話「ブリザード」？－２

第１０話「ブリザード」？－２

「ガーネ、どうなのよ。何か判った？」
ガーネは地下室に再び潜り、リュックサックを見つけた辺りを探っています。
「面白い事が判りましたよ」空洞の中から出て来たガーネがトラに答えます。
「そうなの？　リュックサックが乗っていた木棚とその先にある木壁しか見えないんだけど」
「それ何ですけどね。ほら、この木棚の左右を見て下さい。何か木の出っ張りがあるでしょう。これを左右の手に掛けて、手前に引くんです。すると」
「あら、木棚の真ん中部分が引き出されたわね。その部分がぽっかりと空いちゃったわ。すると、その下には」
「見て下さい。ランプの灯りですが、とりあえず中の様子は判ると思いますから」
「どれどれ」トラは木棚の右側にぴょこんと飛び乗ります。ガーネは右手でランプを持って、その空いた空間を照らしました。
「あら、下に毛布が見えるわね。後、木箱が幾つか見えて……　あっ、その上にランプもあるわ」
「トラの乗っている棚のすぐ下には、木箱で造った階段みたいなものも見えます。じゃあ、降りて見ましょう」
「本当だわ。じゃあ、早速行くわね」
ルンルンルン。トラはリズミカルに階段を降りて、毛布の上に乗ります。
「狭いけど、一応、住めない事は無い……　えっ！　ねぇねぇ、ガーネ。あれはもしかして」

ガーネも毛布の上に降り、トラが顔を向けている方向へ眼をやります

「こ、これは！　すごい量の非常食ですね」

ガーネたちの眼の前には二つの山になっている非常食の箱が積まれていたのです。

ガーネはその山の一つを手に取ります。

「あれ、こっちは空っぽです。すると向こうは」

トラがもう一方の山から箱の一つ咥えました。

「こっちは重いわ。ちゃんと入っているみたい」

「つまり、こっちにあるのは食べ終わった空き箱。トラの方にあるのが未使用って言うわけですね。それにしても半端じゃない量です。一体、いつ頃からここに寝泊まりしていたんでしょうね」

「さっきは美味しいかもって思ったけど、これだけあると見ているだけでうんざりだわ」

「でも、これだけあればかなりの日数、生きていられますね。トラ、どうやら私たちは食事には困らなくて済みそうです」

「なに嬉しがっているのよ。どうせ、この世界はあたしたちの世界じゃないわ。数日ならさっき、リュックサックにあった分だけで十分よ」

「それもそうですね。でもやっぱり、切り札は多い方がいいですよ」

「食糧が大丈夫なのは判ったわ。じゃあ、そろそろここを出ましょう」

「どうしたんです。急に階段を上り始めたりなんかして」

「ガーネ。何か臭うのよ、ここ」トラは鼻に前足をあてて、困っています。

「臭い？　ああ、これはですね。かなりの日数の間、お風呂に入っていない人間から発生する特有の臭いです。それに非常食の香りと……　あとその他諸々が組み合わされているんですね。まさに芸術……」

「さよなら、ガーネ」たまらずトラはこの空間から外に飛び出して

しまいました。
「やれやれ、人間と生活するなら、これくらいの臭いには耐えてもらわないと……　にしても、確かに臭いですね。何か目まいが……
　私も逃げ出す事にしましょう」
トラに続いて、ガーネもその場を離れたのです。

　ガーネは地下室から上がり、ベッドに腰を下ろします。トラは自分の身体の匂いをぷんぷんと嗅ぎ回っていました。
「どうしたんです、トラ」
「うん。何かあの臭いがあたしの身体にこびりついたみたいで、気持ち悪いの」
　トラは嗅ぎ終えるとすぐに身体を舐めまわし、自分臭に戻そうとけなげな努力を始めたのです。
「ご苦労様です」ガーネはトラにそう言った後、ベッドに横たわります。しばらくしてトラも何とか自分を納得させる事が出来たみたいで、ガーネの横にしゃがみ込んだのです。
「トラ」「何、ガーネ」
「何故、このベッドがあるのに、あそこで寝泊まりしていたんだと思います？」
「引っ込み思案だったとか、狭いとこや隅っこが落ち着くとか。待って。ひょっとしたら広所恐怖症ってケースもあるんじゃんないかしら」
「なるほどね。閉所恐怖症があるんですから、広所恐怖症もあるかも知れませんね。ただ、私も確かにだだっ広い部屋で、好きなところで眠っていいって言われたなら、隅っこに布団を敷いて寝ますね」
「でしょう。あたしもそうなの。ちょっと真ん中は落ち着かないな」
「では、普通の人だったから寝ていたと言う事で異議はありませんね」
「ありません！」

「ねぇ、ガーネ」「何です、トラ」
「あそこで寝ていた理由は一応、決着がついたけど、あの膨大な非常食はどうなの？　あれはとてもじゃないけど、リュックサック何かじゃ入らないわ」
「トラ、こう言うのはどうでしょう。例えば、雪山の調査の為に、学者がこの山に車で登って来たって言うのは」
「ふむふむ。それで？」
「長期滞在予定の為、非常食を大量に持参して、この山小屋に置いておいたんですよ。だけど、学者と言っても、あんな場所で寝るくらい普通の人間だった為、雪山の調査中に発生した雪崩を避けきれず、車ごと巻き込まれてしまったんです。おかげでその学者は、ふもとまで墜ちて病院に運ばれたか、あるいは天に召されたか、そのどちらかの運命を辿らざるを得なかった。その為、ここに戻って来る事は出来なかった。どうでしょう。こんなストーリーは」
「いいわね。多分、それが正解よ」
「じゃあ、これで全て解決ですね」「本当、よかったわ」
ガーネとトラは、自分たちの頭の良さに酔いしれていました。

窓の外を見ると、相変わらずブリザードが吹き荒れています。
「なかなか止みませんね。とりあえずこのままここにいて天候の回復を待ちましょう。晴れたらここを出て、周囲を散策するのも悪く無いんじゃないでしょうか」
「そうね。それがいいかもね」
こうしてガーネとトラは火を絶やさないようにしながら、ベッドに横たわります。
部屋も暖かいし、お腹も膨れたので、ガーネたちはいつの間にか眠ってしまいました。

それからどのくらい経ったでしょうか。ガーネとトラは目を覚まします。窓から照りつける陽の光に、起こされたのです。

「どうやら、晴れたみたいですね。じゃあ、外を散策してみましょうか？」

ガーネが声をかけると、トラは首を振ります。

「あたしはもう少し、眠っていたいの。ガーネだけで行って来てくれない？」

「そうですか。多分、寒さが堪えたのでしょうね。判りました。とりあえず、私だけで外を散策してみましょう」

ガーネはそう言いながらテーブルに地図を広げ、その上に方位磁石を置きます。そして腕を組みながら、じっと見つめていました。

それをぼんやりと眺めていたトラは、やがてベッドから這い出して、テーブルの上にしゃがみ込みます。

「どう、ガーネ。今どこにいるか判った？」

「多分ですが、ここだと思います」

ガーネが指し示したのは、地図上にある小屋の1つです。赤いマークが付けられています。

「なるほどね。確かにそうかも知れないわ。で、これからどうするの？　どこに行けばいいのかしら」

「これで見る限り、この辺には何も無いようですね。ただ、これが気になります」

ガーネが指し示したのは、×が付けられている場所です。

「ねぇ、何か意味ありげでしょう。他に近辺には目立ったものがありません。思い切って、ここまで歩いて行った方がいいかも知れません」

トラは地図を覗き込み、ガーネの言葉が正しい事を確認しました。

「そうね。この地図を見る限り、他に行くあては無さそうだわ。

「では、決まりですね。ここへ行ってみる事にします。ああ、後、このリュックサックの持ち主が判りましたよ」

「えっ、誰なの？」「名前は「アレン」と言うみたいですね。ほら」

ガーネがトラに見せたのは身分証明書みたいなもので、名前と写真が載っています。

「男だったのね。しかもごっつい顔をしているわ」
「典型的な山男って感じですね。どう見ても、学者って言う雰囲気じゃ無さそうです。どうやら、さっき考えたストーリーは修正する必要がありそうです」
「ガーネ。偏見はいけないわ。こんな顔だちでも、実は学者だったって言うのは十分に考えられるもの。あたしとしてはさっき、ガーネが話した推論を支持するわ」
「それは嬉しいですね。でも、実際はどうだったんでしょうね。どうですか、トラ。何か他に考えられるケースはありますか？」
トラはしばらく考え込んでいましたが、やがて諦めたような顔をガーネに向けました。
「駄目ね。お手上げだわ」
「とりあえず、アレンさんの事はおいておくとして。今、晴れていますから、チャンスである事は間違いありません。この×点まで、行ってみることにしますよ」
ガーネはストーブの薪を追加します。
「これで当分、火が絶える事は無いと思います。もし火が消えても私が戻らないようなら、毛布にくるまって待っていてもらえますか？」
「判った。待っているわ」
ガーネはリュックサックにあった衣類を羽織ります。
「有り難い。これは防寒服ですね。これなら外に出てもなんとかなるでしょう」
ガーネは中に入っていた荷物を最小限に整理すると、そのリュックサックを背負って、小屋の外へ飛び出します。
「ガーネ、気を付けてね。行ってらっしゃい」
トラはガーネの後ろ姿にそう声を掛けた後、再び眠りにつきました。
ガーネは雪が止んでいる最中、目的地まで歩き出します。雪は積

もっているので、歩きにくくなっていますが、柔らかい事もあり、進むのに支障はありません。まだ周りは寒いので、雪が解けて靴が濡れてしまう事も無さそうです。ガーネは地図と方位磁石を頼りに歩いて行きました。

ガーネは周りを見回します。地図どおり、そこには何もありません。あるのは積もった雪、雲に覆われた空、少しだけ射している陽の光、それぐらいです。

ガーネははぁーっと、息を吐きます。その息は白い煙のようでしたが、風に煽られてすぐに消えてしまいました。

「防寒服とこの僅かな陽射しのおかげで、なんとか歩いていられます。今の内に、早く目的地に見つけられるといいんですが」

そう呟いたガーネの目の前に、何かが動いています。地面に積もった雪の中を飛び跳ねているようです。

「あれは何でしょうか？」ガーネは思わずその生き物の後を追いかけます。しばらくすると、それが立ち止まって、ガーネの方を振り向きました。

それは黒っぽい毛をして、耳が長い生き物です。「野うさぎのような生き物ですね」ガーネがそう呟いていると、野うさぎの周りに、その仲間たちが集まってきます。

「まさか、私を襲うつもりじゃないでしょうね」ガーネは警戒を始めます。と言っても、武器なんかありませんから、逃げるしか手はありません。

ガーネが様子を伺っていると、その野うさぎたちはガーネの方に走ってきて、その周りを囲んでしまったのです。

「肉食なら、私は終わりです」ガーネはその野うさぎの数に圧倒されていました。しかし、その野うさぎの何匹かが、ガーネのパンツを口で咥えて引っ張ろうとしています。あたかも、どこかに連れて行きたいような、そんな態度です。ガーネは好奇心が起こり、野うさぎに引っ張られるまま、その後をついて行く事にしたのです。

野うさぎの行き着いた場所は、洞穴の中でした。
「へぇ、外はこんなに寒いのに、この中は結構、暖かいですね」
洞穴の中は暗いので、ガーネは背負っているリュックサックからライターを取り出し、地面に落ちている枯れ枝に火を点けます。そしてそれを灯り代わりにして、そのまま奥へ入って行きました。しばらく歩くと、何か大きな障害物が立ちはだかっています。ガーネは警戒しながら、その障害物へ近づいて行きました。
「これは……　車ですね」ガーネが灯りを向けると、そこには小型ながらも頑丈そう車体が姿を現しました。タイヤも雪道走行に耐えられる仕様になっているようです。
運転席の車窓から中へ灯りを向けましたが、運転席には誰もいません。
「降りているのかも知れませんね」ガーネは再び、洞穴の奥へと歩いて行きます。

向こうの方が赤くなっています。ぱちぱちと焚き火の音や匂い、そして煙が漂ってきました。
「誰か、人がいますね」ガーネは喜び勇んで走り出します。
焚き火にたどり着きました。そこには人が1人、ガーネに気がつく事も無く、背を向けたまま、焚き火で身体を暖めているようです。
「すみません、私は旅のものです。ちょっとお伺いしたい事があるのですが」
ガーネはそう言って、その人の肩をポンと叩いたところ、そのまま倒れてしまいました。
「もしもーし、大丈夫ですか？　しっかりして下さい」
ガーネは慌てて、その人の身体を揺さぶりながら話し掛けるのですが、応答がありません。
脈や心臓の鼓動を確認したところ、どちらも止まっていました。
「どうして？　焚き火はまだ赤々と燃えて、凍死は考えられないし。それに」

ガーネはそのポケットから、携帯用非常食を取り出しました。
「これがあるのに、餓死は無いですよね」
いつの間にか、野うさぎが集まってきています。
「そうでしたか。この人に会わせたくて、ここに連れて来てくれたんですね。
有難うございました」
ガーネがそう言うと、野ウサギたちは一匹一匹とその場を立ち去り、いつしかいなくなってしまいました。
ガーネは持ち物を調べてみる事にします。首にかけてあったペンダントに「アレン」と言う文字が刻まれています。
「ああ、この人がこのリュックサックの持ち主だったんですね」
ガーネは更に調べると、服の内側に大きなポケットがあり、そこから銀色のケースが出てきたのです。
「これは何なのでしょうね」そのケースを開けてみると、そこには四本の注射器が並んでいて、その中には緑色の液体が既に注入されています。
「薬？　のようですね。この人、何か病気でもしていたんでしょうか？　このケースは注射器1本分が空いています。使用したのかも知れませんね」
ガーネはアレンの周りを見てみると、使用済みの注射器が捨てられており、ガーネの予想が当たっている事を裏付けていました。
ガーネは更に持ち物を探してみましたが、他に目ぼしいものは何もありません。ガーネはその衣服を脱がしてみます。
「これは！」ガーネは唖然とします。裸になったその身体には、幾つか弾丸が貫通した後があったからです。ガーネは改めて衣服を確認すると、そこにも弾丸の為に焼焦げた穴が開いています。
ガーネは遺体の傍を探してみると、ピンセットが落ちているのを見つけます。赤くなった先端に何かを挟んでいたので、ガーネはそれを手に取ってみました。
「弾頭ですね。自分で取ったみたいですが、さぞ痛かったでしょう。

私なんかじゃ、とてもじゃないけど出来ない芸当です」
ガーネは弾頭を手放し、腕を擦ります。弾頭を自分で抉っている場面を想像して、更に寒気を催したからでした。

「この人は誰かに追われてここまで来たんですね。多分、あの山小屋にいて相手に気付かれないように生活していたんでしょう。車は近くにあると見つかってしまうので、ここに隠したのに違いありません。恐らく、アレンは脱出の機会を伺っていたんでしょうけど、このブリザードが吹き荒れる中、動く事も出来ずに何ヶ月もの間、山小屋に留まる事を余儀無くされたんですね。
私たちが山小屋に行く少し前あたりに、何らかの理由で小屋から出て車の方へ行こうとしたんじゃないでしょうか。ところがその途中で追手に見つけられて、撃たれてしまったんでしょう。それでもブリザードのおかげで追手を何とか振り切ってここまで逃れる事が出来た。そんなところじゃないんでしょうか。でも、一体誰が」
ガーネはそんな仮定を考えていましたが、周りに誰もいない状況では、何も証明する事は出来ません。ガーネはとりあえず遺体を片付ける事にしました。

ガーネはその遺体を洞穴の外まで運びました。本来ならば、土を掘って埋めたいのですが、スコップなどはありません。、雪を手で掻き分けて、そこに遺体を置くと、その上から雪を掛けたのです。
「こんな事しか出来ませんが許して下さい。どうか安らかにお眠り下さい」
ガーネは合掌して故人の冥福を祈った後、洞穴に戻り、しばらく暖かな焚き火にあたりながら休んでいました。
ですが、いつまでもここにいるわけにも行きません。ガーネは焚き火の後始末をした後、洞穴から出て行ったのです。

しばらく歩いた後、また吹雪き始めます。

ゴーグルなどは持っていないので、たちまち視界が狭くなります。前方だけに気をとられていたので、足元がおろそかになっていました。

柔らかい雪の上を踏んだので身体のバランスが崩れ、倒れそうになります。ガーネは慌てて足元をみると、近くにはクレパスがあり、その中へ雪が落ちていきました。

「あっ、危ない！」ガーネは何とか踏ん張り、クレパスに落ちるのを回避しました。

「雪山って恐ろしいとこですね。注意をおろそかにすれば、待っているのは死だけなんですから」

さっきまでクレパスの恐ろしさに注意していた筈なのに、つい忘れてしまっていたのです。

ガーネは反省して前方だけではなく、足元にも気を使うようにします。幸いな事に急な斜面を登る事は無さそうなので、何とか身体全体に吹き付けてくる雪を我慢しながら、歩いていました。

「小屋から出たのは、失敗だったかもしれません。とにかくここまで来た以上、目的地に早く着ける様にするしかありません」ガーネはそう呟きながら、地図に従ってひたすら歩きます。少しでも早くこの場所から逃れたい。そんな思いから懸命に歩いていました。

時間が経つにつれて、ブリザードは更に激しさを増します。衣服は防寒でしたが、靴は迷宮から履いているごく普通の靴です。あっという間に歩く事が出来なくなりました。

「残念。後もう少しで、この×の位置まで行けるのに」ガーネは足を何とか持ち上げようとしますが雪の重さに耐え切れず、バランスを崩して倒れてしまいます。

ガーネは立ち上がろうとしましたが、降り注ぐ雪の強さに、どうにもなりません。ガーネは倒れたまま、顔だけ起こして前方を見ました。

すると、ブリザードが激しく舞う中、前方から二つの丸い光がこ

ちらに向かって来ます。

「あれは……　車でしょうか？」ガーネはその言葉を最後に、力尽きて気を失ってしまいました。

第１０話「ブリザード」？ ― ２（終）

第１０話「ブリザード」？－１

第１０話「ブリザード」？－１

ガーネは目を覚ましました。

寝ぼけ眼で天井を見ながら、しばらくの間ぼんやりとしていましたが、それでも時間が経つにつれて次第に意識がはっきりしてきます。

「あーっ、あっと」ガーネは両腕を上げて、欠伸をしました。

その後、ガーネは右手のくるぶし辺りに、何か金属製の腕輪が装着されているのに気が付きます。

「これは何なのでしょう。それにここは一体？」

ガーネは周囲を見回して、自分が病院の一室みたいな場所にいる事が判りました。しかも、その部屋の大部分を占めている巨大な透明カプセルの中に閉じ込められ、その中に置かれてあるベッドの上に横たわっていたのです。

ガーネは起き上がり、ベッドを椅子代わりに腰掛けます。そのベッドの隣にはもう１つベッドが用意されていました。

「誰かいるのでしょうか？」そう思って、ガーネは隣のベッドを覗き込みます。

スースースー　スースースー　眠りこけている一匹の猫がいました。その猫の首にも金属製の首輪が装着されています。

ガーネは幸せそうに眠っている、手のひらタイプの小さな猫に見覚えがあります。

「トラさん、トラさん」ガーネはトラを起こそうと、声を掛けます。

「ううん、もっと食べないと」何か夢をみているみたいです。何か起こすのも悪いと思い、そのままにしておきました。

ガーネはそのカプセル内部にあるドアの一つへ歩いて行き、ノブ

を回してドアを開けようとしますが、びくともしません。
「誰かいますか？　ここから出してください！」
ガーネはドアを叩きながら、声を上げます。すると、その声を聞きつけたのか、カプセル内に別な声が響き渡りました。
「どうやら、目が覚めたようだね。今、そちらに行くので、待っていてくれるか？」
人がいるようですね。ガーネは安心しました。
声が知らせたように、その後まもなくその部屋に三人程、白衣に身を包んだ、医者のような感じを思わせる人たちが入って来ました。
その中でリーダーであろうと思われる人物が、カプセルの外側からマイクを使用して、その中にいるガーネに話し掛け始めました。
「ワタシの名はガイル。この研究所の所長だ。後の二人はワタシの助手で、レイラとパードだ」「アタシがレイラ。よろしくね」「オレがパードだ。仲良くやろう」
三人の挨拶を受けて、ガーネも名乗ろうとしたところ、音がうるさかったのか、隣のベッドからトラがのそのそと這い出してきます。
トラは隣のベッドにいる人の姿を見つけた途端、思いっ切り飛び付いてきました。
「ガーネ、ガーネ。一体何をしていたのよ！　いつまで経っても戻ってこないし、ブリザードは相変わらず吹き荒れているから、あたし、とても不安だったのよ。ストーブの火も消えかかったから、毛布に包まって寝る事しか出来なかったわ」
「それでいいんですよ。それが正解です。でも、いたずらに不安を募らせた事は悪かったと思います。その点は謝らなくちゃいけませんね。どうかこの通り。ごめんなさい」
ガーネはトラに丁重に手を合わせ、謝ります。
「まぁ、いいわ。お互い無事にこうして会えたんだしね。でも、ガーネ。その腕に付いているぴかぴか光っている物は何なの？　こんな場所でどうやって手に入れたの？」トラはキラリと光る腕輪を見

つめています。
「いや、実はトラにも同じような物が首に付いているんですよ。気が付きませんでしたか？」
「えっ！」トラは自分の首筋に前足を当て、何かが付いている事を確認します。
「いや、何よ。これ」トラは転げまわりながら、首輪を何とか取ろうと悪戦苦闘しますが、取る事が出来ません。
「ねぇ、ガーネ。早くこれを取ってよ。あたし、こう言うの、大っ嫌いなの」
「まぁ、待ってください。それが一体何なのか、あの人たちに聞かないと」
「あの人たちって？」トラはその時、初めて自分が異様な場所にいる事に気が付きます。
「何よこの変なとこ。それにあそこにいる変な人たちは何なの？」
「それをこれから聞こうとしたところ、あなたが起きてきたんですよ」

ガーネがトラとそんな話をしていると、カプセルの外側から声が聞こえてきます。
「そちらで猫と内輪もめをするのも結構だが、こちらとの対話も早くしてもらいたいな」
ガイル所長は蚊帳の外に置かれているのに、我慢がならなくなったようです。ガーネに対話の続きを要求しました。
「どうも済みません。では、改めて自己紹介させて頂きます。私の名前はガーネ、この猫の名前はトラと言います。どちらも迷宮の旅人で、この度、この世界に入ってきました。どうぞ、お見知りおきを」ガーネはそう挨拶をした後、頭を下げました。
「あら、あたしは旅猫よ。人じゃないわ」トラが訂正します。
「ああ、そうでしたね。どうも済みません。ごめんなさい」
「いいのよ、判れば。うるさい事は言いたくないし」

「それはそれは。どうも有難うございます」
再び、ガイル所長から声が聞こえてきます。
「済まないが先程も言ったように、内輪での話し合いはしばらく遠慮してくれないか？　話が全然進まないのでね」
「ほら、御覧なさい。トラのせいで怒られちゃったじゃないですか。人との出会いは最初が肝心だって言うのに、悪い印象を持たせてしまいましたよ。一体どうしてくれるんです」
「あら、あたしのせいにするのね。まぁ、あたしは寛大な猫だからどうでもいい事だけれど。でも何、このガイルって人。何か威張りくさっていない。あたしたちを上から目線で見ているみたいね。このカプセルから出たら引っ掻いてやろうかしら」
「それはいい考えですね。私もそれに賛成です」
ブチッ！　何故かいきなり、外との通信が途絶えます。
「あのぉ、もしもし、もしもし」
ガーネの呼ぶ声も空しく、ガイル所長はマイクをオフにして、その部屋からいなくなります。助手の二人も慌てて、その後を追うようにいなくなりました。
「何かあったんでしょうかね」「さぁ、ひょっとしたら食事じゃないかしら」
「食事ですか。迷宮から来た後、非常食しか食べていませんからね。何か美味しい物が出るといいのですが」
「そうね。期待しましょうよ」
ガーネたちは食事を持ってくるのを楽しみに待っています。ですが、幾ら待っても食事が現れる気配がありません。
「一体どうしたのかしら。こんなに待っているって言うのに」
「忘れたんじゃないでしょうか。マイクで呼んでみましょう」
ガーネはマイクに向かって喋り出します。
「もしもし。まだ食事を貰っていないんですが。早くお願いします」
相手から連絡が入ります。
「ガーネだな。こちらはパード。食事って言われてもねぇ……　先

程済ませたばかりで、まだまだ先の話になると思うんだが。ああ、ガイル所長。ガーネたちが、食事が欲しいって」

ブチッ！　外との通信がまた途絶えます。

「あれ、また切れましたね。壊れやすくて困ったものです」

「新しい建物だと思ったけど、見かけ倒しね」

ガーネとトラは、ため息をつきます。

「じゃあ、食事が来るまでどうしますか？」

「寝ているか、このカプセルを壊して外に出るかね。大体何であたしたち、ここにいるの？」

「知りません。そう言えばここの事や、何故私たちがここにいるか、何も聞いていませんでしたね。それを聞く前に、向こうにあるマイクの音が聞こえなくなったんですよ」

「そうだったわね。このまま眠りに着くのもいいけど、出来れば暴れたいな。このカプセルを壊してみましょうよ」「了解です」

カプセルの中であるものと言ったら、ベッドと医療器具を置いてある机ぐらいです。ベッド台の上に乗っかっているものを全てどけた後、その台に手をかけました。

「うーん」

唸り声を上げながら、ベッドを持ち上げようとしたのですが、持ち上がりません。

「駄目です。全然動きませんよ。他にはこの机だけですね」

机の上にある医療器具らしき物をどけた後、その机を持ち上げました。

「行きますよぉ！」ガーネは力一杯、その机をカプセルにぶつけます。

しかし、カプセルが壊れる事はありませんでした。また弾力がある素材で出来ているらしく、物音もごく僅かです。

「駄目ですね。これじゃあ、自分の肉体をぶつけてみても変わらないでしょう」

「困ったものね。本当にどうしたらいいか……　そうだ、この変な首輪や腕輪を使ったら」
「それはいい考えですね。早速、やってみましょう」
ガンガン！　ガーネはその腕輪をカプセルに打ち続けました。すると。
「待て。止めろ。すぐに止めるんだ」再びガイル所長の声が聞こえてきます。
「どうやら、また直ったようですね。やれやれです」「本当ね。努力は無駄では無かったわ」
ガーネとトラは自分たちの叡智を褒め称えます。
「判った。話し合いを再開しょうじゃないか」とガイル所長。
「あれっ、少しは物判りが良くなったような言い方じゃない。ほっとしたわ」
「ええ、やった事は正解でした」
ガーネとトラは早速、お願いをする事にします。
「何で私たちがここにいるのかは知りませんが、早くここから出して下さい。後、お腹が空いていますので食事の用意もお願いしますね。
じゃあ、まず最初にここのドアを開けて下さい。」
ガーネたちが、これでやっと出られると思ったのも束の間、ガイル所長はその願いを拒否します。
「駄目だ。君たちをここから出すわけには行かない」
「だって。じゃあ、ガーネ」「判りました」
ガンガン！　ガーネは腕輪壊しを始めます。さすがに、これにはガイル所長も困ったようです。
「判った判った。出来るだけ、言う通りにしよう。だが、このカプセルから出るのは少し待ってくれないか？　理由はちゃんと話すから」
「ですって。トラ、どうします？」
「うーん。そうね、とりあえず理由ぐらいは聞いてあげてもいいわ

ね」

「では、決まりです。でも、それより先に食事をしたいんですが」

「もちろんよ。お腹ぺこぺこだもの」

ガーネはマイクに向かって、食事を要請します。

「判った。すぐに君たちの食事をその中に差し入れよう」

しばらくすると、ビーッと音が鳴り、カプセル内部にあるランプが二つ点灯します。そのランプの下には各々シャッターが取り付けられており、下の方には取っ手らしきものが付いています。ガーネがその取っ手を手に持って、上に引き上げてみると、中にはトレイに入ったお食事が用意されていました。もう一つのシャッターを開けてみると、その中にもトレイが置かれてあり、猫が食べ易いようなお皿二つに、飲み物と食べ物が入っていたのです。

「トラ、お食事ですよ」「わーい」ガーネとトラは久しぶりの食事に大喜びです。ですが、早速食べてみようと顔を近づけた途端、ガーネとトラは自分たちの期待が脆くも崩れ去った事を理解したのです。

「ええっ！」「何だ。これなの！」ガーネとトラは心の底からがっかりしました。出された食べ物は、あの非常食を砕いて柔らかくしたような物です。飲み物もただのお湯に塩が少し入っただけのものである事を知りました。

「何でこんなものしかないのよ！　ぷんぷん！」トラが怒ります。

「残念だが、ここで用意出来る食事はそれだけだ。我々も毎日朝と夕方にそれを食べている。調味料を加えて味を少し変えてはいるがな。それでも栄養バランスがいい。安心して食べれる食事だ」

「だそうですよ、トラ。ここではそれしか食べられないみたいですね。と言っても何も食べないよりはましだと思います。頂きましょうよ。絶対に食べられない味って訳でも無いじゃないですか」

ガーネはそう言ってスプーンで食事を始めます。トラもそれを見て抗議するのを諦めたのか、大人しく食べ物を口に入れ始めます。

「まぁ、安心出来る味と言えば味ですね」「でも、毎回これを食べるのは苦痛だわ」

ガーネとトラは愚痴をこぼしながらも、お皿の食べ物を全て食べ尽くします。その後、その食器はシャッターの中に戻しました。

ガーネはベッドから離れて、カプセル内にあるドアへと向かいます。、そのドアは先程開けられなかった、入り口に通じるドアとは別のドアです。今度はノブが回り、ドアが開きました。

「なるほど。こちらには水周りの設備があるんですね。おトイレと洗面所と、後シャワー室もあります。洗面所には……　おお、歯磨きセットが。これはいい。トラ、では早速、歯磨きを」

「ガーネ。歯磨きセットを見たぐらいで、何でそんなに大喜びを」

「だってだって」

久しぶり旧友に会えたかのような感動に、打ち震えながら、涙ぐんでいるガーネ。

「これが日常と言うものですよ。さぁ、早く早く」ガーネはトラに手招きをします。

「やれやれ」トラはガーネと洗面所に行き、歯磨きをして貰いました。

おトイレも済み、とりあえず一休みしようとベッドに転がった時、声が聞こえて来ます。

「では、いいかね。話し合いを再開したいのだが」

「ああ、その件がまだ残っていましたね。いいでしょう。こちらも伺いたい事がありますし。では、先にお話を伺いましょう。トラも異存ありませんね」

「うるさくしなければいいわ……　スースー」

「あれ、眠ってしまったようですね。仕方がありません。私だけでもお話を伺いましょう。では、先にどうぞ」ガーネはガイル所長に話を促しました。

「君が先程言った自己紹介について、少し質問があるのだが」

「どうぞどうぞ。何でも聞いて下さい」
「迷宮から来たなどと言っていたが、それはどこの国の事かね」
「いいえ、国ではありません。そういう世界があるのです」
ガーネは迷宮がこの世界とは違う空間にある事、そこは道や階段のみが存在する空間である事などを説明します。また自分たちがどうやって迷宮に来たか、あるいは自分たちが何者であるかを判らない事なども話したのです。

第１０話「ブリザード」？－１（終）

第１０話「ブリザード」？－２

第１０話「ブリザード」？－２

その説明を終わった後、しばらくは無言の状態でしたが、やがて声が聞こえました。

「不思議だ。そんな事は信じられない。君は本当に我々にそれを信じろと言うのか？」

「信じてくれなどとは言いませんよ。私自身、他の人からこの説明を聞いたら、やはり変に思うでしょうからね。でも、この話は真実です。だからこれ以上の説明は出来ないのです」

「我々にはどうしても真実を話しているとは思えない。一体何を隠しているんだ。何故、そんな根も葉も無い作り話を、我々に聞かせる必要があるのだ」

「もし、この話が作り話ならば、もっと、もっともらしい話をこさえる事は幾らでも出来るでしょう。でも、あなた方は私たちを助けて頂いた恩人でもあります。だから真実をそのまま、お話しました。後それをどう受け止めるかはあなた方次第です。もうこれ以上、私が付け加える事は何もありません」ガーネは相手の出方を待つ事にしました。

その後応答が途絶えましたが、しばらくすると、その部屋の中にさっきの三人組が現れました。ガーネは先程と同様、カプセル越しではありますが、面と向かって対話する事が出来るようになったのです。

ガイル所長がマイクに出ました。

「実は君が今、装着しているその腕輪は、体温、血圧、脈拍などを含め、あらゆる身体状態を確認出来る装置なんだ。その結果は絶えず、データとしてこちらへ送られ、モニタリングする事が出来るよ

うになっている。それは嘘発見器などにも応用出来るのだ。しかしながら、君が今喋った時のモニターグラフを見てみると、真実を話しているとの表示がなされている。
とても信じられないが、結果はこの通りだ。とりあえず君を信じる事にしよう」
「そうですか。信じて貰えてなによりです」
「さてと、それでは話を進めよう。まずは君たちの方からだ。我々に対して何か質問があるんじゃないかな。遠慮なく話して見たまえ」
「では、お伺いします。何故、私たちはこんな場所に監禁されているのですか？　いつ出して貰えるのでしょうか？」
「よろしい。では、お話しよう。我々は広範囲で生命反応を捕らえる事が出来る装置を所有している。これまでこの近くでは何も反応が無かったのに、急に二つの反応が現れたのだ。一つは山小屋、もう一つはこの研究所近くでだ。
そこで探索したところ、山小屋にはそこにいる猫が眠っていた。また研究所近くには雪に埋もれて倒れていた君がいたのだ。だから双方とも回収し、ここに保護したと言う訳だ。特に君は肺炎を起こしかけていたのでね。急いでその部屋で治療を行っていたという訳だ」
「そうでしたか。それは有難うございます。でもそれなら、治療の必要があるのは私だけではありませんか？　何故、トラもここにいるのですか？　後何故、私たちはこんな腕輪や首輪を装着されなければならないのでしょうか？」
「うむ。それなんだが。実はここ数日の間に、この場所からある病原菌がこちらの不注意で外部に漏れてしまったのだ。その為、この区域は今、立ち入り禁止状態になっている。そこへ君たちがどうやってかは知らないが侵入して来た。だから慌てて回収し、この場所に隔離したという訳だ。君たちが装着している腕輪や首輪が何なのかは既に説明した筈だ。君たちが今それを装着しているのは他でもない、その病原菌に感染しているかどうかをチェックする為に必要だからだ」

ガイル所長を含め、その三人は、自分たちの右腕をガーネの方に向けます。そこにはガーネと同じような腕輪が装着されていました。

「そうだったんですか。いや、やっと判りました。この場所にいなければならない理由も理解出来ましたよ。ところで、その感染の有無とやらはいつ判るのですか？　また感染していたとして、ワクチンは既に完成しているのでしょうか？」

「感染は十二時間以上経たないと、その有無は判らない。また、そのワクチンを開発するのが目的で、我々はこうして今、研究しているのだ」

「ここで開発って、一体ここは何なのですか？」

「そうか、まだ言っていなかったな。ここは微生物研究所。細菌などの生物を分析、そのワクチンを開発する為に設けられた施設なんだ」

「そうだったんですか」

「では、詳細は今話した通りだ。君はその猫を説得して、ここに、後数時間留まっていてくれ。感染していない事が確認出来れば、すぐにここから出られる。後はどこでも好きなところに帰るがいい」

「もし、感染していたとしたら」

「我々がワクチンを完成するのを祈るしかない事になる。それが出来ない時は、君たちに待っているのは死だけだ」

「そんなに恐ろしい病原菌なんですか」

「そうだ。ほっておけば全人類を皆殺しにしかねない恐るべき病原菌だ。

この病原菌に対し、我々は「プルート」と名付けた。

我々のここでの目的はただ一つ、「プルート」に対抗するワクチンを造り出し、全人類をその脅威から救う事だ」ガイル所長は拳を握り締めながら、そう語ったのです。

ガイル所長はその後引き続き、ガーネの質問を待っていたのですが、他に質問があるような様子では無さそうなので、自分から確認

してみる事にしたのです。
「君の質問に関しては今話した通りだが、何か他に尋ねたい事はあるかね」
「いえ、とりあえず今は何も」
「それはよかった。では次はこちらから質問したいが構わないかな」
「えっ、あ、はい、どうぞどうぞ」
ガイル所長は手元に、リュックサックと防寒服を置きました。
「君の傍らに寝ている猫が山小屋にいた時、その近くに、このリュックサックが置いてあった。また君がここに来た時、着ていたこの服。そのどちらもが、実は、この研究所にいた我々の仲間の物だったんだよ。一体、どうやって手に入れたんだね？」
「あなた方の？　という事はアレンはあなたの助手だったんですか？」
「何！　何故、君はアレンの事を知っているんだ！」
「アレン」の名前を聞いた途端、ガイル所長の顔から今までのような、温和な表情が消え、幾らか気色ばんだものとなっていました。
その後ろにいる助手たちも明らかに、動揺しているようです。特に、パードと呼ばれている助手の顔には、他の者以上に表情の変化が色濃く出ているのを、ガーネは見逃しませんでした。
「簡単な事です。そのリュックサックに付いているネームプレートに、その名が刻まれていましたから」
「何？　ネームプレートだと？」ガイル所長は、リュックサックにぶら下がっているネームプレートを見つけ、その名前を確認します。
「そうか、そうだったか」
ガーネは、そう呟いているガイル所長やレイラが、ついさっきまでとは打って変わって、安心したような表情を浮かべている事に気が付きました。ただ、その中でパードだけが何か、がっかりしたような、そんな感じを受けたのです。
「私とトラがあの非難小屋の地下室を探ったところ、それがあったのですよ。中に地図や非常食、そしてその防寒服があったので助か

りました」
「あの非難小屋の地下室に……　なるほど、あそこにあったのか」
　ガイル所長は合点がいったように頷きます。
「で、アレン自身には会ったのかね。また他に見つけたものは？」
「何も無かったわよ」トラが起き出しました。
「あっ、トラ、起きたんですか。お早うございます」
「ちょっと眠ったんだけどね。何かうるさくて起きちゃったのよ」
「それは済みません。お互いにいろいろと聞きたいことがあったもので」
「まぁ、いいわ。それでそのリュックサックの事でしょう。緊急避難用の物ばかりだったわ。非常食なんかがあったから、あたしたちにはとても有り難かったけどね。後は特に気を引くようなものは何も入っていなかったわよ。それにアレンって人もいなかったわ」
「本当かね、ガーネ君」「ええ、トラの言う通りです」
「あら、あたしの言う事、信用しないつもり？　ぷんぷん」
「トラさん、ここはちょっと穏便に。状況が状況ですし」「判ったわよ」
「ガイル所長。そのアレンって言う人の事なんですが。何か、お心当たりはありますか」
「うん？　ああ、アレンはワタシの助手で、ここに勤務していた。だが、数ヶ月前から不意に姿を消していたので心配していたんだ。車が一台無くなっている事から、どこかへ出掛けたと思うんだが、君も知っている通り、ここはほとんど一日中、ブリザードが吹き荒れている。どこに行ったのか、皆目見当も付かない。また、こんな状況では探し出そうにも、ままならかったんだ」
「で、その後、捜索はどうなっているのでしょうか？」
「時折、研究の合間を見ては捜索しているのだが、何せ、このブリザードだからな。捜索範囲は狭められてしまっているんだ」
「外部へ救助の要請は？」
「あるいは麓まで既に降りているのかも知れん。怪我の為、病院に

入院しているが、何等かの理由で連絡が取れないって事もある。もうしばらく経って、何の連絡も無いようであれば、要請するつもりだ」

「でも、既に数ヶ月も経っているんですよね。リュックサックも見つかったし、ひょっとすると、事故を起こして、車ごと雪の中で埋もれている可能性があります。手遅れかも知れませんが、直ちに要請すべきじゃないでしょうか？」

「そうだな、考えておこう。だが、アレンに関してはこちらもいろいろとやっている。外部者である君が、わざわざ心配する必要は無い」

ガイル所長はそう言ってアレンに関するガーネの質問を打ち切らせます。

その後、ガイル所長は何やら考え込んでいましたが、問題無いと思ったのか、それで質問は終わりました。

それでは、またしばらくしたら会おう、と、ガイル所長と助手のレイラは部屋の外に出て行きました。後に残った助手のパードは、ガイル所長がさっきまで座っていた椅子に腰掛け、装置の点検にかかっています。

「あのぉー、すみません」ガーネはマイク越しにパードに話し掛けます。

「うん？　何だ？」

「忙しいところ済みません。もし暇が出来ましたら、少しお伺いしたい事があるんですが」

「ああ、そうなんだ。オレでいいなら、後しばらくしたら伺うよ」

それから少しの間、パードは装置にかかりっきりでしたが、まもなく点検も終わったのか、ガーネに声を掛けます。

「ガーネ、いいよ。何でもどうぞ」

「この研究所の事なんですが、何でこんなところにあるのですか。不便でしょうに。もっとも、そのおかげで私たちは助かったんです

けれどね」
「ああ、確かに不便だな」パードは笑いながら、話を続けます。
「でも細菌の中には、寒さの中ではその増殖活動を抑えるものが結構あるんだよ。だから万が一の事も考えて、ここに建てられているという訳さ。特に今回のケースでは、ここで作業するのが一番無難という事で選ばれたらしい」
「その今回のケースについてなんですが……　そのプルートっていうのは、どこで発生したのですか？」
「発生自体はここからだいぶ離れた熱帯の方だよ。だが……」
「だが、何です？」
「いや、それ以上はちょっと説明出来ないんだ。君たちは外部者だし、それに身分も不詳とくるからね」
「判りました。無理強いするつもりはありません。でももう1つ、気になることがあるんですが」
「ふーん、で、それは何だい？」
「先程、アレンの話をした時、あなたは他の誰よりも、驚愕の表情を露わにしていました。ひょっとしたら、アレンさんって言う人とあなたとは何か特別な関係でもあるんですか？」
　ガーネのその問いに、パードは一瞬、ギョッとした顔つきになりましたが、しばらくすると、また落ち着いた様子に戻りました。
「別に……　それはガーネの気のせいだよ」
「そうですか。多分、私の勘違いだったんでしょう。いや、済みませんでした」
　ガーネの言葉を受けて、パードは席を立ちます。
「じゃあ、オレはこれで自分の席に戻るから。何かあればマイクで知らせてくれればいい。多分、いつでも誰か一人はいる筈だから」
「判りました。では、そうしましょう。いろいろな質問に応えて頂いて、有難うございました」
　パードはガーネの言葉に軽く会釈をして、その部屋を出て行きました。

ガイル所長たちがいなくなった後、ガーネはトラにガイル所長たちとの話の内容を、最初から話しました。
トラはいちいち頷きながら聞いていましたが、最後のアレンの話になったところで、首をかしげます。
「ねぇ、ガーネ。何か……」
トラが何かを言おうとした時、ガーネは口元に人差し指を立てました。
「トラ、ちょっと洗面所に行きましょう」
「えっ、でも、歯はさっき磨いたばかりよ」
「まぁ、いいじゃないですか」
ガーネはトラを洗面所に連れて行きます。そのドアを閉めた後、トラの近くに接近して小さい声で話を始めました。
「トラ、これくらいの声で聞こえます？」
「うん、聞こえるけど。一体どうしたの？　ガーネ」
「多分なんですが、あの部屋は盗聴されていますね。ここもそうかも知れませんが。カメラも付いているし、プライバシーは守られそうもありません」
「微生物研究所だって言うし、細菌も扱っているって言うから、ひょっとしたら、外部には機密にしておかなければならない事もあるのかもね。だから、それくらいの設備はあってもおかしくはないんじゃない。でも、それがどうしたの？　何かあの人たちに知られたくない事でもあるの？」
「はい。さっき、パードって言う人が何か言い淀んでいたのをトラも見ていましたね。あれをどう思います？」
「うーん。細菌の説明に関してなら、部外者に話せないって言うのは判るわね。それに専門的な話なら、あたしたちが聞いても手に負えないし」
「それはそうですね」ガーネは苦笑いをしました。
「でも、アレンの事を尋ねた時には、パードの様子はおかしかった

ような気がするわ」
「ええ、明らかに動揺していました。あれは確かに自分以外の者に対して、知られたく無いみたいな感じでしたね。そう言えばアレンに関しては、他の者も何だか妙な反応をしていましたよ」
「調べてみたいわね。でもここじゃあ、何も出来ないわ。お手上げよ」
「そうですね。やるとしても、検査結果が出て、感染が無い事を確認してからでいいでしょう。じゃあ、それまでは」
「それまでは？」「一眠りしましょう。起きているだけ無駄です」
「ガーネ」「何です？　トラ」
「何だか、あなたもだんだんあたしに似てきたみたい。猫になる日も近いのかもね」
「じゃあ、私が猫になったら、一緒にねずみでも捕まえましょうか？」
「何言っているのよ。あたしがねずみが怖いって知っているくせに。本当に意地悪ね」
「ハハハハハ。済みません、トラ。でも、冗談は抜きにして一眠りしませんか？」
「そうね、それがいいわね」
ガーネとトラは洗面所を出てベッドに転がると、しばらくの間、ぼーっとしていましたが、やがて、うつらうつらし始め、深い眠りへと落ちたのです。

それから更に時間が過ぎました。別室では、ガーネとトラの様子を観察している、レイラとパードの姿があります。
ガーネの腕輪とトラの首輪には、微量ながらも特殊な電流と放射線を、装着者の体内に流す機能が装備されており、これらは遠隔操作によってコントロールされています。
二人はこの機能を利用して、絶えずガーネたちの様子を確認していたのです。

パードのモニターには、ガーネたちの身体状況をグラフ化しているものが表示されています。
「どうだ、その後は？」ガイル所長はパードに声を掛けます。「別に何もありません。この表示を見ても判る通り、どちらも熟睡状態になっています」
「それで、あれはどうなっているのか？」
今度はレイラの見ているモニターに近づき、尋ねます。
レイラのモニターには、体内の一部をスキャンされた映像が表示されています。
「正常ですね。何のトラブルも無いようです」
「そうか。では今から数時間後、次の段階に移るとしよう。二人共、これからがこの研究の正念場だ。しっかりと頼むぞ」
「はい、判りました」二人は同時に答えました。

レイラの見ているモニターには何かが、ゆっくりと蠢いていました。

第１０話「ブリザード」？－２（終）

第１０話「ブリザード」？－１

第１０話「ブリザード」？－１

トラはダイニングにいました。大きくて綺麗なテーブルに、自分が好きな食べ物や飲み物が所狭しと並べられています。

「さぁ、トラ様。お食事の用意が出来ました。どうぞ、お召し上がり下さい」

白い前掛けを着けたトラは、ナイフとフォークを持ち、椅子に座っています。

「うん、判ったわ」給仕の言葉を合図にトラはお食事を始めました。大好きなお肉の塊にフォークを刺し、ナイフで切ります。

「まぁ、なんて柔らかいんでしょう！」感動に身を悶えさせながら、トラはその一片を口へと運びます。

「ふむ。もぐもぐもぐ」口の中で、ジュワーッと溢れ出す肉汁。その美味しさにトラは失神しそうです。

「ここにあるのは全て、我が国が誇る最高のシェフが作り出した、自信作の料理でございます。トラ様。如何です。お味の程は？」

「この得も言われんばかりの美味しさ。さすがとしか言いようが無いわね」

「そうでございますか。それを聞いて、シェフもさぞかし満足でございましょう。どうか、ごゆるりとお食事をお楽しみ下さい」

「もちろんよ」

トラは肉を次々と平らげ、ワインを飲み干し、「ほら、早くついで。後、お料理も追加をお願いね」と給仕に声を掛けます。

「はい、ただ今」トラの求めに応じ、次々と食べ物や飲み物がやって来ます。それをトラは休む間も無く、無我夢中で口に入れていきました。

「わぁ、すごいわね。しかもどの料理もあたしの舌を唸らせるもの

ばかりじゃない。ほら、あれも、これも」
　食べるのに夢中になってしまったトラは、「もう、面倒だわ」とばかり、ナイフとフォークをおっぽり出して、テーブルの上にあがり、お皿から直接、ガツガツと食べ始めます。
「トラ様。それは幾らなんでも、下品なのでは？」
「うるさいわね。猫はこの食べ方が一番なのよ。お前は全然判っていないんだから」
「しかし……」
「楽しい食事中だってのに、本当に頭にくるわね。お前なんかこうしてやる」
　ガブッ　トラは給仕に噛み付きました。
「トラ様、痛いです。放してください！」「駄目だわ。お前にはお仕置きが必要なのよ！」
「トラ、痛いですよ！　放してください」「トラって何よ！　給仕の分際で、主を呼び捨てにしたりなんかして！」
「給仕？　トラ、それって何のことですか？」「えっ！」
　トラはやっと眼が覚めました。そこは眠る前と同様、カプセルの中だったのです。

　気が付くと、トラはしっかりとガーネの手に噛み付いています。
トラは慌てて、口を開き、ガーネに謝りました。
「ごめん、ごめんね。ガーネ。でも、あたし、何でガーネのベッドにいるのかしら」
　トラは隣にある自分のベッドを見ながら、ガーネに尋ねます。
「トラが夜中に、「ガーネ、おトイレ」って、私を起こしたんですよ。その後、用を足して戻って来たら、私のベッドに潜り込んですぐに眠っちゃったんです。
　それで、トラのベッドに寝かせようと思ったら、私の服に噛み付いて、「美味い、美味い」なんて言っているじゃありませんか。何か可哀想になってきましてね。そのまま一緒に寝ていたと言う訳な

んです。トラはやっぱりお腹が空いていたんでしょうね。無理もありません」

「そうか……　あれ、全部夢だったんだ……　まだ一杯残っていたのにな……　くすん」

トラは下を向いて眼をうるうるさせながら、ため息をついています。

「トラ、まだ眠いんですか？　どうせ、ここから出られないんですから、もう少し寝ていたらどうです？」

「ううん、もういいわ。起きる事にする」

「そうですか。じゃあ、改めて。お早う、トラ」「うん、お早う、ガーネ」

ガーネとトラは洗面所で顔を洗いました。

「あっ、お早う。どうです、気分は？」

洗面所から出てきたガーネとトラに、いつの間に来たのか、パードが声を掛けます。

「気分はいいですが、その後、どうなんです。まだ検査は終わらないんでしょうか？」

「えっ、検査って？　ああ、そうでしたね。うん、もう少しだと思いますよ」

何か歯切れの悪い言い方です。

「ひょっとして、忘れていたとか？」「まさか、そんな」

トラの言葉にパードは慌てて、手を振りました。

「忘れていましたね」「そうみたいね」ガーネとトラは頷きました。

しばらくして、ガイル所長と、もう一人の助手であるレイラが入って来ました。

「どうかね。ガーネ、トラ。気分は？」

「いいですよ。助手が検査をしているのを忘れるぐらいですからね。早く出して下さい」

ガーネがそう言うと、ガイル所長はパードをにらみつけます。パードは慌てて「そんな事はありません」と弁解します。
ガイル所長はゴホンと咳払いをした後、ガーネの方を振り向きました。
「検査は後数時間程度で、予定通り終わりにするつもりだ。それまでは辛抱して欲しい」
ガイル所長はそう言うと、マイクをオフにして、パードを連れて部屋から出て行きます。
後に残ったレイラはパードがいた席に座り、計器を調べています。
「OKね。何も問題は無いみたいだわ」レイラはそう言うと、カプセルの方を振り向きます。
「どう、調子は？　後、もう少しで出られると思うけど、何か欲しいものはある？」
「朝食が欲しいんですけど」
レイラはガーネの要請に対し、にっこりと微笑みます。
「いいけど、あの朝食よ。それでも構わないの？」
「いいって訳じゃないけど。我慢するわ。ねぇ、レイラさんだっけ。レイラさんも同じ物を食べているの？」
「ええと、確かトラさんだったわね。その通りよ、ここにはあれしかないもの。だけどアタシは飽きちゃってね。朝はこれだけにしているわ」
レイラはトラの言葉を受けて、自分のコップを高く上げます。
「何が入っているの？」「カフェラッテ。結構、美味しいわよ」
「へぇ、あたしも飲めるかな」「猫には、コーヒーはきついかもよ」
「でも、とりあえず、作ってみてよ。飲めなければガーネに上げるから」
「なるほどね。それはいいかも」
「トラ、私はあまりコーヒーは」
「大丈夫よ、ガーネ。このカフェラッテはそんなにコーヒーの味は濃く無いの。じゃあ、二人分作ってくるわね」

レイラは部屋を出て行きます。
「トラ。幾らお腹が空いたと言っても、コーヒーは無理なんじゃないかと」
「ガーネ。たまには冒険も必要よ。もっとも、どうしても飲めないようなら、後はガーネにお願いするわね」
「先程も言いましたが、あんまりコーヒーは」
「まぁ、実際に飲んでみましょうよ」

やがて、レイラはお盆にコーヒーカップを二つ乗せて、運んで来ました。その一つは猫でも飲み易いように、大き目なものとなっています。
「ガーネ、いいわよ。シャッターを開けても」
レイラの言葉に従い、シャッターを開けると、そこには先程のコーヒーカップが置かれています。
ガーネはコーヒーカップや一緒に置かれてあった物を手に取ると、ベッドの横に据え付けられている台の上に載せます。
「はい、お望みのコーヒーですよ。トラ、どうぞ」
「有難う、ガーネ。レイラも有難う」
カプセルの外にいるレイラにお礼を言った後、トラはそれを舐めてみました。
「どうです。お味は?」「ちょっと苦い感じがしない事も無いけど、ミルクでうまく中和されているわね。でも出来れば、もっと甘さが欲しいんだけど」
「甘さと言っても……　あっ、ひょっとして、これでは」
ガーネは一緒に置かれてあった物に眼を向けます。
一つはスプーンで、もう一つは紙で包装されている細いスティック状の物です。ガーネは後者の端を手で切り、中に入っていた白い粒をちょっと指に載せて、舐めてみました。
「やっぱり。これは甘味料ですね」
ガーネはスティック状の物をコーヒーカップに傾けて、白くて細

かい粒をカップへと流し込み、用意されていたスプーンでかき混ぜます。
「じゃあ、どうぞ」「有難う。頂きます」トラは恐る恐る舐めてみました。
「うん？　いいわね、これなら。美味しいわ。熱さもこのくらいなら大丈夫よ」
トラは嬉しそうに、ペロペロ舐め始めます。
「よかったですね、トラ。レイラさん、有難うございました」
「どういたしまして」
レイラはにっこり微笑んで、盛んに舐めているトラを見つめています。
ガーネも躊躇いながら、カフェラテに口をつけてみました。
「うん、ミルクたっぷりです。これなら美味しいですね」
「ねっ、ガーネもそう思うでしょ」トラもミルク味に満足のようです。
「ガーネ。あなたって、甘党なのかもね」
レイラがガーネに声を掛けると、ガーネはにっこりと微笑んで、それに応じました。
「そうかも知れません」
カプセル越しではありましたが、みんなで向き合ってカフェラテを楽しんだのです。

コーヒータイムの最中、レイラはガーネたちの事を尋ねました。
「ねぇ、ガーネ。あなた方は自分たちの事を、迷宮の旅人だって言ってたわね」
「あっ、はい。そうですが」
「あなた方は迷宮から来たって言ってたけど、どうやってここに来られるの？」
「ああ、それなら、私たちは「迷宮のドア」を通って来たのですよ」
「「迷宮のドア」って？」

「前にも話したと思いますが、迷宮にあるのは道だけなんです。その道の脇に「迷宮のドア」と呼ばれるドアが立っている事があるんです。その中に入る事で、そのドアに繋がっている世界へ入ることが出来るという訳です」

「ふーん、そうなの。で、その「迷宮のドア」は自分が好きな場所に行けるの？」

「いえ、違います。あくまでもそのドアに繋がっている世界に行けるだけです。私たちが選べる訳じゃないんです」

「じゃあ、例えば気に入った場所があったとするわね。その場合、いつまでもそこにいる事が出来る訳？　又そこから一旦出たとして、また同じ場所に戻ることも出来るの？」

「いいえ、その世界が本当に自分の世界ならともかく、そうでないなら、数日後には「迷宮のドア」が現れるので、すぐに迷宮に戻らなければなりません。そうしないと」

「そうしないと？」

「「迷宮のドア」が現れた瞬間から、私たちの身体は徐々に消えていきます。もし、戻らなければ、多分、そのまま、消滅してしまうでしょう。もちろん、今までは身体が完全に消える前に、ドアの中に入れたので、実際にどうなるか体験した事はありませんがね」

「当たり前よ。そんな事試してみたいとも思わないわ」トラはむきになって口を挟みます。

「なるほどね」レイラは頷きました。

「後、迷宮に戻ると、そのドアは消えてしまいます。戻った場所は入った時とは違う場所なので、同じ世界に行く事は出来ません。旅を続けていれば、偶然起こる可能性も無くは無いと思いますが、少なくとも今まで、私たちにそういう事が起きた事は無いんですよ」

「あっちゃ困るわ。戻って来たって事は、そこがあたしたちの世界じゃ無かったって事でしょ。早く自分たちの世界に戻りたいのに、違う世界と判っている場所へ何回も行きたいとは思わないわね」

「そうですね。確かに」ガーネはカフェラテを啜りながら、トラに

同意しました。
「つまり、「迷宮のドア」を使えても、自分たちが望む世界には行けないし、同じ世界に戻りたくても戻れないって訳ね。それって随分と不便なシステムね」
「楽しい旅行をしている訳じゃないんですよ。多分、「迷宮」自体も私たちの本当の世界は判らないんでしょうね。だから、迷宮のドアを使って、いろいろな世界に導くんでしょう。私たちが自分たちの世界に戻れるまではね」
「本当に不思議な話なのね。その迷宮もそのドアも」
「全くです。私たちもそう思います」ガーネは苦笑しながら、答えました。

レイラからの質問が途切れたので、今度はガーネが質問を始めました。
「ところで、レイラさんはどうしてこんな不便なところに来たんですか？」
「えっ、アタシ？　そうねぇ。アタシは別な仕事をしていたんだけど、たまたま自分の知人から、あの博士を紹介されてね。ここの作業を手伝う事になったって訳なの。とは言っても、最初はもっと国の中央の方にいたんだけど、博士がドジをやったものだから、安全の為に、こっちへ飛ばされちゃったって訳。本当、迷惑な話よね」
「はぁ。それでそのドジって言うのは？」
「プルートに関することなんだけど。ごめんなさいね、これ以上は機密とかで教える事が出来ないのよ」
「それなら、無理に言う必要はありません。どうせ、暇つぶしに聞いているだけですからね。じゃあ、レイラさんも生物学者だって考えていいんでしょうか？」
「ガーネ。確かにアタシはガイル所長の助手だけどね。アルバイトに過ぎないの。パードもそうなのよ」
「えっ、でも、プルートは機密って言ってましたよね。それを扱っ

ているのに、アルバイトなんですか？」
「今回やっている仕事の身分上はね。ただアタシもパードも大きな声じゃ言えないけど、普段は政府関連のお仕事に携わっているの。だからこの作業を手伝えるって訳よ」
「へぇ、で、あなたとパードは、本当はどんな身分なんですか？」
「パードについて話せるのは、ガイル所長と同じ役所から来ているって事ぐらいかしら。でも、アタシ自身についてはね」
レイラはそう言いながら、人差し指を立てて、口元に引き寄せます。
「聞かない方がいいわ。あなた方に迷惑を掛けてもいけないしね」
レイラはそう言って、微笑みました。

その後は話題を変え、今、この世界で話題になっている事など取り留めの無い話を、レイラはガーネたちに喋っていました。その話が尽きようとした頃、レイラは腕時計で現在時刻を確認して、立ち上がります。
「じゃあ、ワタシはそろそろ行くわ」
レイラはガーネたちから、飲み終わったコーヒーコップを回収後、部屋を出て行きました。
ガーネはレイラが部屋のドアを閉じた後、小さい声でトラに尋ねます。
「どうです。レイラさんは？　どんな風に感じましたか？」
「うーん、カフェラテをご馳走してくれたり、話している時も物腰が柔らかそうで、全体的には優しい人に見えたわね。だけど……」
「だけど、どうかしましたか？」
「ガーネが「迷宮のドア」について話始めた途端、眼が光ったわね。ガーネが喋る言葉の一つ一つを吟味するように、注意深く聴いていたわ。それにガーネがレイラさんの身分の事に言及した時、顔は微笑んでいたけど、眼は決して笑ってはいなかったわ。むしろ冷酷さ

を湛えていて怖くなっちゃったぐらいよ」
「これはこれは。さすがトラですね。そのご慧眼から導き出されたお答え。私も的確な回答だと思います」ガーネはそう言って、トラの言葉を賛辞しました。
「ところで、この部屋。盗聴されているんでしょ？　こんな話をして大丈夫なの？」
「どうせ、見張られているんです。構わないでしょう。それにそれを気にしていたら、何にも言えなくなりますよ」「それもそうね」
「まぁ、それで相手が気分を害したら、その時はその時で対処するしかありません」
ガーネの少し投げやりな言い方に、トラはその精神を気遣います。
ひょっとしたら、見掛け以上に、精神的には参っているのかも知れないわね。やがて発狂して、ここの食事を出しても、「こんなのいつまでも喰えるか！」って、台ごとひっくり返し、あたしを焼いて食べようとするんじゃないかしら。きっと、そうよね。そうに決まっているわ。あたしはそんな場合に備えて、「あたしは食べても骨ばかりよ」って、それとなくアピールしておく必要があるかも。あたし、危うし。
トラは今後の、自分の「身の振り方」について、真剣に考え始めたのです。

第１０話「ブリザード」？―１（終）

第１０話「ブリザード」？－２

第１０話「ブリザード」？－２

それから一時間ぐらい経った後でしょうか。トラがガーネの行動をを警戒している最中に、あの三人組がぞろぞろと部屋の中に入ってきました。

トラはガーネを合わせたその四人組に、「ああ、ついにあたしは今夜の夕食になってしまうんだわ」と嘆き、よしんばそうだとしても、このまま、奴らの思い通りにはならないと覚悟を決めたのです。トラは自分の前足をベッドの下に隠し、人知れず鉤爪を剥き出しにして、いつでも全力で攻撃可能な状態のまま待機しておりました。

ガイル所長がマイクをオンにして、ガーネたちに語り掛けます。「検査がやっと終わった。どうやら、君たちは感染を免れているようだ。まだ数時間経たなければ、最終結論は出ないが、まぁ、大丈夫だと思う。直ぐにここから出してやろう」

パードはガイル所長の指示に頷いて、手元のボタンを操作します。すると、密閉されていたカプセル内の金属壁にある、閉じた状態になっていたドアが開きました。

カプセルの外側からパードが声を掛けます。

「はい、ご苦労様でした。無罪放免ですよ」おどけたような口調で喋るパードに促され、ガーネとトラは予定時間通りに、カプセルの外へ出る事が出来たのです。

「やれやれ、やっとカプセルから出る事が出来ましたね」「そ、そうね」

トラは恐る恐るガーネの方に振り向きます。その顔はいつも通りの穏やかな表情だったので、トラは「これなら、食べられちゃう事は無いわね」と安堵の胸を撫で下ろしたのです。

ガーネとトラがカプセルから出ると、パードがガーネたちをその部屋から連れ出し、休憩所らしき部屋に案内しました。
「カプセルに長い間閉じ込めて済まなかったな。さぁ、遠慮なく座ってくれ」
ガイル所長に促され、ガーネたちはテーブルの座席に並んで座りました。その向かい側にはガイル所長とレイラが座り、しばらくするとパードがやって来て、みんなにコーヒーを配り始めたのです。
パードも席に着いたのを確認すると、ガイル所長は立ち上がり、ガーネたちの方を振り向きます。
「検査に時間が掛かり、君たちには随分と迷惑を掛けてしまったな。だが、やっと検査結果が出た。君たちにプルートの感染は無いようだ。だから、安心して構わない」
「はぁ、そうですか。それはどうも有り難うございました」ガーネは頭を下げます。
「さて、これからの事だか、君たちはどうやって、この山から出て行くつもりなのかね？」
「それなんですが……」ガーネはトラと顔を見合わせて頷いた後、再びガイル所長の方を振り向きました。
「私たちは前にも話した通り、迷宮の旅人です。ここから迷宮に戻るには「迷宮のドア」が現れるまで待たねばなりません。と言っても、ここは研究所なので、外部者がいつまでも居るのはまずいでしょう。なので、出来れば私たちを、あなた方がトラを見つけたあの山小屋まで連れて行って貰えませんか？　あそこなら寒さも防げますし、非常食もありますから、ドアが現れるまで待機出来ると思うのです」
「「迷宮のドア」ね」ガイル所長は鼻で笑う様な仕草の後、ガーネを見つめていましたが、やがて口を開きます。
「まぁ、いいだろう。ところでだ。他に何もやる事が無いのだったら、ワタシたちの作業を手伝ってくれると有り難いんだが」
「遠慮します。それより山小屋に連れて行って下さい」

ガイル所長とガーネは、しばらくにらみ合っていましたが、やがてガイル所長が諦めたようにため息をつきます。
「そうか。ならしょうがない。君たちを山小屋に帰そう。送っていくよ」
ガイル所長はそう言った後、一旦、部屋を出て行きます。
「ガーネ。何とかここから、おさらば出来そうね。ほっとしたわ」
「ええ。トラもあの山小屋で構いませんよね」
「もちろん。ここなんかよりずっとましだわ。ストーブに薪をくべれば暖かくなるし、食べる物も同じなんだし。何よりあっちの方が気が楽だものね」「私も同感です」
ガーネはトラと話しながら、ガイル所長が戻ってくるのを待っていました。思っていた以上に時間が掛かったものの、やがて所長はガーネたちの前に姿を現わしたのです。
「大変申し訳ない。出掛ける準備をしていたが、予想外に手間取ってしまったんだ。だが、もう大丈夫だ。さぁ、一緒に行こう」
ガイル所長はガーネたちを連れて、駐車場まで歩いて行ったのです。
「さぁ、この中へ入りたまえ」
ガイル所長がそう言って、乗るように促したのは、その駐車場で、もっとも大きく、かつ頑丈そうな車でした。これなら、このブリザードでも走り切る事が出来るでしょう。ガーネたちは安心して、乗り込んだのです。
「じゃあ、出発しますね」運転席についたパードが声を掛けます。
「あれっ、レイラさんは」
「留守番だ。研究所を無人にしておくのは、出来るだけ避けたいからな」
ガーネたちが乗った車が発進します。外に出るとブリザードがまだ続いており、雪もかなり積もっていましたが、車の走行には何の支障もありませんでした。ブリザードのせいでしょうか、かなり遅い速度で慎重に走らせていましたが、それでも一時間ぐらいで山小

屋が見えて来ました。
「やっと戻って来ましたね」「もう、ドアが現れるまで、ここで大人しくしていましょう。薪も十分あるし、毛布にくるまれば暖かく眠れるわ」トラはほっとした口調で返事をしました。

後、もう少しで山小屋に辿り着くと言うところまで来た時、ガーネたちは意外な光景を目の当たりにします。ガーネたちが戻る筈だった山小屋が炎上していたのです。
ガーネたちは思わず車を出て、燃え盛る炎を見ながら唖然としました。
「何故？　一体どうして！」ガーネは呟きます。そんなガーネたちの傍らへ、いつしかガイル所長が来ていました。
「やれやれ。どうやら、ストーブで焚いていた火の後始末が不完全だったようだ。山小屋ごと燃えてしまったな」
「そんなぁー！」トラはがっかりした後、急に寒さを感じてきたらしく、ガーネの腕から這い出て、服の中に潜り込みました。
「ガーネ。これからどうするつもりかね」ガイル所長の言葉を受けて、ガーネは向き合います。
「こうなってしまっては、他に行くところがありません。もし、もうしばらく研究所に居させて貰えるなら、そうしたいのですが」
「いいだろう。じゃあ、研究所へ戻るか。一緒に来たまえ」
ガーネたちは再び車に乗り込み、研究所へと戻って行きます。
パードとガイル所長が前部座席にいるのを見つめながら、トラは小声でガーネに話し始めました。
「ねぇ、ガーネ」「うん？　何です、トラ」
「ちょっと怪しいと思わない？」「何がですか？」
「あの火事よ。あの火の広がり方は、あたしたちが着く数分前に燃え出したって感じじゃない。こんな偶然有り得ないわ」
「でしょうね」「えっ！　じゃあ、ガーネも怪しいと思っているの？」

「レイラさんがいませんよね」「えっ、だってレイラさんは研究所だって」
「でも、レイラさんなら、先回りする事も出来た筈ですよ」
「そうね。だけど……」「まぁ、駐車場に行けば判るでしょう」「えっ？」
やがて、ガーネたちを乗せた車は、研究所の駐車場に戻って来ました。車から降りると、ガーネはトラに囁きます。
「ほら、トラ。あそこを見てください」「えっ、どこ？」「あそこ、あそこ」
ガーネが指し示す方向には、車が一台停まっています。
「ええと、あの車がどうしたの？」
「さっき、乗り込む時に、あそこに車は無かったんですよ」
「えっ、それじゃあ！」
ガーネは口元に人差し指を立てます。
「それに」ガーネはその車に近づき、トラをボンネットの上に載せました。
「トラ、どうです」
「まだ暖かいわ。ここに停めてから、まだ幾らも経っていないみたいね」
ガーネはトラに笑みを浮かべます。
「そういう事です。それに見て下さい。タイヤがまだ濡れているじゃないですか。まず間違いないでしょうね。じゃあ、トラ。研究所に戻りましょう」
ガーネとトラはガイル所長の後を追って、研究所の中へ入って行ったのです。

ガイル所長たちと休憩室に戻ったガーネたちは、コーヒーを飲んでいたレイラさんに声を掛けられます。
「あら、ガーネ。山小屋に帰ったんじゃなかったの？」
「それがですね……　山小屋が炎上していまして」

「まぁ、それは大変。でも、よかったわね。火事に巻き込まれなくて」
「ええ、確かに」
レイラにガイル所長が声を掛けます。
「すっかり、身体が冷えてしまった。申し訳ないがワタシたちにも、そのコーヒーを作っては貰えないかね」
「あっ、オレもお願いします」
二人の言葉にレイラは頷きます。
「そうね。気が付かなくてごめんなさい。これから作る事にするわ。ねぇ、ガーネ。あなたたちも飲む？」
ガーネはトラと頷き合った後、「じゃあ、お願いします」と返事をしました。
レイラはその言葉を受けて、にっこりと微笑んだ後、その部屋を出て行ったのです。
「ガーネ。まだコーヒーから湯気が立っているわよ」
「ええ、淹れてからまだ幾らも経っていないって事でしょう。それに見ましたか。手を擦り合わせていましたよ。寒いところから帰って来たばかりだからなんでしょうね。鼻の頭もまだ薄っすらと赤みを帯びていますしね」
ガーネたちは小声で話し合い、この研究所に対する疑惑を深めました。

コーヒーが運ばれ、お茶の時間を楽しんだ後、ガイル所長がガーネたちに話し掛けます。
「山小屋に行く前にも言ったと思うが、数日間、ここに居るつもりなら、是非、君たちにも手伝って貰いたい事があるんだ。どうだ。やって貰えないだろうか？」
「と言いましても。私たちには微生物の事なんて、皆目判らないんですが」
「そんな専門的な仕事をさせようと言うんじゃない。実はプルート

のワクチンを作るに際して、ある鉱物の成分がどうしても必要なんだ。だから、それをワタシたちと一緒になって採掘して欲しい。とまぁ、こういう訳だ」

「採掘……ですか。でも、このブリザードですよ。一体、どうやって」

「採掘現場までのルートは決まっている。途中まではさっき乗った車で走らせる事が出来るが、後は徒歩となる。全行程の往復は、うまくいけば一日強ぐらいで済む筈だ。研究所内の作業と違い、遂行するのは大変だが、どうしても手に入れなければならないものだ。是非、やって貰いたい」

ガーネはトラと顔を見合わせていましたが、どちらからともなく頷くと、ガイル所長に答えました。

「判りました。では協力しましょう。ただ、トラまで参加する必要は無いと思います。研究所に残しておく訳にはいきませんか？」

「残念だが、研究所の人間が全員出て行くので、最小限の電力しか使えないようにしておかなければならない。灯りも非常灯しか点かないし、暖房も止める。また部屋の出入りも出来なくなるんだ。ワタシたちと一緒に行った方がいい」

「そうなんですか。トラ、どうしますか？」

「大丈夫。心配しないで。あたしも一緒に行くわ。ここで閉じ込められたら、身動きとれないもの」

トラの意見を受け入れ、ガーネは一緒に行く事にしました。

再び、ガーネたちは駐車場に停めてある大型車のドア付近まで歩いて行きました。

「それにしても、大きくて頑丈そうな車ですね。市販されているんですか？」

「いや、これは特注の車両だ。研究所に不測の事態が発生した時は、速やかに、ここへ避難する事になっている。また、この中で実験の再開も可能だ。第二研究所と言えるぐらいの設備を備えた為、これ

だけの大きさになってしまったんだよ」
ガーネの問いに、少し自慢げな様子で、ガイル所長は答えました。

全員が車に乗り込んだのを確認した後、パードは車を走らせます。前部座席にはパードとガイル所長が、後部座席にはレイラと、膝にトラを乗せたガーネが座っています。
「それにしても、本当にすごいブリザードですね。車が立ち往生しないといいんですが」
「軍から調達した除雪機能付きの車だからな。かなりの雪でも大丈夫と言う話だった。それにしても本当に良く降る。途中から徒歩だからな。出来ればもう少し小康状態になって欲しいものだが」
ガイル所長とパードは天候を気にしていました。
「あのぉー、レイラさん」「何？　ガーネ」
「さっき話しにあった採掘現場まで、かなり掛かるのでしょうか？」
「そうね。ここからだと、後、一時間ってとこかしら。山奥にあるし、このブリザードだから、そんなにスピードも出せないのよ。どうしても、それくらいは掛かるわね」
「このブリザードのせいで、道に迷うなんて事は無いの？」
「トラさん、それは心配しなくてもいいわ。道が枝分かれしているところもあるけど、道幅が大きい方の道を辿って行けば間違いなく目的地に着くわ。それよりも、もっと大きな問題があってね」
「それは何なの？」
「あたしたちが、これから行こうとする採掘現場は森の中にあるんだけど、そこには「雪狼」が生息しているのよ」
「「雪狼」って？」
「四足の獣で、素早い動きと鋭い牙や爪で相手を倒し、食べてしまうの」
「じゃあ、あたしみたいなのね」
レイラはきょとんとした顔をしましたが、やがて笑い出します。
「確かにそうね。トラさんが大きくなって、この毛色が黒くなった

ら、そう見えるかも。ああ、でも、もうちょっと獰猛な感じも無いと駄目ね」

「ふーん、獰猛ねぇ。例えば、こんな」「止めて下さい。人の膝にちょっこんと座りながら、うーうー唸るのは。鉤爪や牙を剥き出しにしようと身構えているのも感心出来ませんね。私が怪我をしたら、どうするんです」

「だって、レイラさんが見たいって」「言っていません」

「ガーネ、トラさん。あなたたちって、本当に仲がいいのね」

レイラは笑いながら、そう言いました。

車はやがて、森にさしかかります。その入り口のところにある駐車場へ車を停車しました。

「このブリザードが吹き荒れる中、こんな駐車場があるなんて！」

ガーネが驚くのも無理はありません。その駐車場はガーネたちの車が複数入っても、十分な広さの屋根付き建築物だったからです。

「ここは軍が管理している採掘現場だからな。これくらいの設備は当然の事だ」

ガイル所長はそう言いながら、車を降ります。他のみんなもその後に続きました。車の後部ドアを開くと、そこには掘削器具が複数置いてあります。

「じゃあ、パードとガーネは、これを持って採掘現場に向かってくれ」

ガイル所長は一人一人に、採掘器具を手渡します。ですが、所長自身は持とうとしません。

「ガイル所長も来るんですよね」ガーネが念を押すように尋ねたその言葉に、ガイル所長は首を横に振ります。

「いや、ワタシはここで待機して、君たちの連絡を待つ事にする。車を無人にしておく訳にいかないし、君たちに何かあったら、すぐ外部にそれを連絡する必要があるからも知れないからな」

「外部との連絡なら、レイラさんに任せればいいんじゃない？」と

トラ。
「いや、レイラには他にやって貰う事があるからな。君たちと同行する」
「レイラさん。本当ですか？」「ええ、ガーネ。その通りよ」
「でも、確かさっき、この森には「雪狼」が居るから危険だって言ってましたよね。大丈夫なんですか？」
「だからよ。その為に同行するの」
と言うと？　と首を傾げるガーネに、レイラは微笑んだ後、その肩を叩きました。
「さぁ、お喋りはそのくらいにして、出発しましょう」
パードやガーネは、レイラに促されて、駐車場を後にします。
「あたし、寒いのって大嫌いだわ」トラはガーネが着ている防寒服の内ポケットに潜り込みました。

ガーネたちは、ブリザードが吹き荒れる中、「雪狼」が住むと言う、森の中へと入って行ったのです。

第１０話「ブリザード」？―２（終）

第１０話「ブリザード」？－１

第１０話「ブリザード」？－１

森の中に入ったガーネたちは、急いでこの森を抜けようとするのですが、思うようにいきません。このブリザードと足元に積もっている雪が、その歩行を阻み、三人が前へ進むのを邪魔していたからです。

ガーネたちは頭に、マイク・イヤホーンとゴーグルを内蔵したヘルメットを被っています。

「おい、ガーネ、レイラ。ちゃんと声が聞こえるか？」

「ええ。ちゃんと聞こえます」「もちろんだわ」

「ゴーグルの雪対策機能をオンにしてくれ。少しでも、視界が雪でさえぎられるのを防ぎたいんだ」

ガーネはゴーグルに付着した雪を掃った後、レイラに教えて貰いながら、言われた通りのセッティングにしました。効果があったせいでしょうか、ガーネはゴーグルに付着する雪の量が減ったように感じたのです。

ボスッ、ボスッ。積雪に足を取られながらも、ゆっくりと進んで行きました。しばらく歩くと、どこからか、獣の遠吠えらしき声が聞こえてきます。

「レイラさん、あの声。もしかして、あれが」「そうよ。「雪狼」の雄叫びだわ」

木々を通り抜けているガーネたちの先頭にいた、パードの歩みが止まります。

「どうしたんですか？」ガーネが声を掛けました。

「しっ、奴らが近くまで来ている」パードは立てた人差し指を口元に引き寄せ、ガーネを黙らせます。

パードは警戒しながら再び前進を始めますが、すぐに立ち止まっ

てガーネたちの方を振り向き、「あいつらも、ついて来ている」と、小声で知らせました。

ガーネが辺りを見回すと、自分たちの周りのあちらこちらで、キラリと光る物を確認しました。

「奴らの眼だ。困ったな。どうやら複数で遠巻きにしながら、オレたちを囲んでいるようだ」

いつ総攻撃が来るか、気が気でなりません。ガーネたちは用心しながら歩いて行ったのです。

それは突然始まりました。直ぐ近くで咆哮が聞えた途端、何頭もの「雪狼」がガーネたちの目の前に姿を現したのです。

「逃げろ！」パードの叫び声に応じて、ガーネたちは雪に足をとられながらも、懸命に走り出します。

パーン！　パーン！　銃声の音が森の中を響きます。パードとレイラが、ガーネを守るように囲みながら、突破しようとしていました。

必死で撃ち続けるも、パードが放った弾丸は、なかなか「雪狼」に命中しません。一時的に追っ払うのがやっとのようです。それに引き換え、レイラは着実に一匹一匹と、迫り来る相手を射殺していきました。

「すごい……」ガーネはその射撃の腕前に感心しますが、見とれている暇なんてありません。次々と襲ってくる「雪狼」を避けながら、ガーネたちはひたすら前へ前へと走って行きました。

「ほら、見ろ。採掘現場への入り口だ！」

ガーネがパードの指し示す方向に眼を向けると、そこには洞穴があり、その入り口は扉で閉められていました。

「やっと、着きましたね」ガーネはほっとしながら、扉を開けて中へ入ったパードに続こうと、その入り口へ近づいた時です。頭の上から咆哮と共に、何か黒いものがガーネに飛び掛かって来ました。

「「雪狼」！」ガーネはその勢いに身動き一つ取れず、立ちすくし

てしまいます。
もう駄目でしょうね。ガーネがそう観念して目を閉じると、背後から銃声が。
パーン！　ガーネが恐る恐る眼を開けると、そこには額を打ち抜かれて倒れている「雪狼」の姿がありました。
呆然とした状態で屍体を見つめているガーネの腕を、レイラが掴んで走り出します。
「ほら、ガーネ。ここじゃあ、危ないわ。今の内にあの中へ！」
レイラの言葉に我に返ったガーネは、何とか無事に洞穴の中へ逃げ込む事が出来たのです。

ぜいぜいと息を切らしながら、ガーネが洞穴の中にある大きな岩に手を掛けて休んでいると、そこへレイラとパードがやって来ました。
「どうだ、ガーネ。随分、スリルがあったろう？」「あんな目に会わせて、ごめんなさいね。でも、ここに着くにはどうしても、あそこを通らなくちゃいけないのよ」
ガーネはしばらくして呼吸を整えた後、レイラにお礼を言います。
「レイラさん、有難うございます。おかげで助かりました」
「えっ、ああ、別に気にしなくていいのよ。アタシたちがここに連れて来たのが、そもそもの原因なんだしね。命を守るのは当然だわ」
「でも、大丈夫なんでしょうか？　この洞穴の中に「雪狼」が入って来たら……」
「その心配は無いさ。気が付いているかい、ガーネ。この洞穴に広がる匂いに」
「匂い？」ガーネは鼻をひくひくさせ、辺りに漂う異様な臭気を嗅ぎ取ります。
「この匂いは一体？」「変な匂いだろう。この先に行けばもっと強くなっていくんだ」
「匂いの正体はすぐに判るわ。それより、予定の時間はとっくに過

ぎているの。ぐずぐずしてはいられないわ。先を急ぎましょう」
レイラに促され、一行は洞穴の奥へと進んで行きました。やがて、下方へと続いている石積みの階段が見えて来たのです。
「実際にオレたちが採掘するのは、ここよりもっと下なんだ。さぁ、行こうか。ここを降りれば、この匂いの原因もすぐに判るよ」
パードはそう言うと、先頭を切って降りて行きます。それに続いてガーネ、レイラも、その後について行きました。
階段を降りるに従い、匂いはきつくなります。やがて、その匂いが下から湧き上がってくる緑っぽい煙からのものだと判りました。それと同時に、ガーネは周りがだんだんと暖かくなっていくのにも気が付いたのです。
「匂いの正体はこれだったんですね。この煙は下の方から吹き出ていて、しかも熱を帯びています」
「その通りだよ、ガーネ。岩石に含まれている成分が、地中からの熱い蒸気を伴い、煙となって流出しているんだ。まともにこの煙を喰らったら、気を失って倒れてしまうから、気を付けた方がいいぞ」
「えっ、そうなんですか？」
気が付けばパードやレイラは、さっきからハンカチで口を覆っています。ガーネも慌てて口を手で塞ぎました。パードはそんなガーネを見て笑いながら、話しを続けます。
「もっとも、この匂いのおかげで、あいつら「雪狼」は、この中に入って来られないのさ。どうやら、この匂いが苦手らしい。それに「雪狼」は、嗅覚が人間とは比較にならない程優れているからな。入口付近程度の匂いでも、決して近寄ろうとはしないんだよ」
やがて階段が終わり、地の底に辿りついたのですが、匂いはきつくなっています。パードたちはそれをなるだけ吸わない様に注意しながら、走ってその場を離れたのです。
しばらくしてパードはその歩みを緩めると、ガーネに話し掛けてきました。
「ガーネ。口から手を離しても、もう大丈夫だ。ここら辺りまで来

れば、匂いが人体に与える影響は少ないからな」
　ガーネは恐る恐る息を吸ってみました。確かに、匂いは先程までとは打って変わって、少なくなっているようです。ガーネはモクモクと湧き上がっている煙から遠ざかる事が出来たので、ほっと胸を撫で下ろしたのです。
　パードに連れられ、前方へと進んでいったガーネは、やがて通路の脇に、地底に広がる水面を目撃します。しかも、その水面は湯気を立てているようでした。
「パードさん。これは一体？」
「ここは天然の温泉だ。地下水が周りの熱によって温められて、噴出しているんだ」
　パードがその説明をしている最中に、ガーネの内ポケットがモグモグと動き出しました。
「どうしたんだ、ガーネ？」
「どうやら、家の眠り姫が目覚めたようです。トラ、お早うございます。ご機嫌は如何でしょうか？」
「ふぁーい、あーあっ」トラは内ポケットに半身を入れた状態で、大きな欠伸をしました。
「ここはどこだったかしら？」トラはそんな事を呟きながら、のそのそと内ポケットから這い出ると、ガーネの肩にべったりと張り付きます。しばらくの間、寝ぼけ眼で周りをきょろきょろと見回していましたが、やがて意識がはっきりしてきたのでしょう、ガーネに話し掛けてきたのです。
「ガーネ、すごいじゃない。とても暖かいわよ。少し匂うけど」
「大丈夫ですか？　匂いは我慢出来るでしょうか？」
「うん。楽勝よ。気にする程じゃないわ」「それはよかったです」
「でも、何でこんなところにいるの？」「ここが採掘現場のある、洞穴の中なんですけどね」
「ふーん」トラはガーネの肩から降りて、湯気を出している湖に足を入れます。

「あ、あちちちぃ！」トラは思わず転げ回ります。
「大丈夫ですか？」ガーネは慌てて、トラを拾い上げました。
「ああ、熱かったぁー。一体、何なのよ。ここは？」
「温泉らしいですよ」「ふーっ、ふーっ。温泉？　なるほどね。でも、ちょっと熱すぎるわね。これじゃあ、入浴を楽しむって訳には行かないわ」トラは残念そうです。
「そこは熱いんだよ。こっちに来てごらん。こっちだと多分、適温だよ」
　パードが温泉に手を突っ込んで確認します。
「どれどれ」ガーネも真似をして温泉に手を入れます。
「うん。トラ、これなら大丈夫みたいですよ」
「ふーっ、ふーっ、本当に？」トラは少し眼を潤ませた状態で、前足に息を吹き掛けながら尋ねます。
「本当です。トラも試してみてください」
　トラは少しの間、迷っていましたが、温泉の魅力には勝てないのか、再びガーネから降りて、今度は反対側の前足を温泉に突っ込みました。
「おおおーっ！」感嘆の叫びを上げます。「こ、これよ！　あたしが捜し求めていたのは」
　トラはそう言うなり、そのまま温泉にザブンと浸かりました。
「ううん、いいお湯だわ。あっ、いけない！」トラは叫びます。
「どうしました？」
「ねぇ、ガーネ。何か手拭いみたいな物は無い？　それが無いと気分が出ないの」
「ああ、それなら」レイラは自分のポケットから取り出したハンカチを引き千切って、その断片をトラに差し出します。
「これぐらいの大きさなら丁度いいんじゃないかしら」「有難う、レイラさん」
　トラはレイラからハンカチの断片を手渡されると、それをタオルのように首に巻き、気分よさげに鼻歌を歌い出しました。

「今のトラは典型的なおっさんですね」「ああ、おっさんだな」「ええ、おっさんだわ」

もちろん、三人はトラに気付かれない様に、喋ったのです。

「じゃあ、レイラ。オレはガーネを連れて現場に行くから、あんたはここで、その猫がのぼせないように見張っててくれ」

「判ったわ。じゃあ、パード。ガーネを頼むわね。ガーネも頑張ってね」

「ああ」「じゃあ、行って来ます」パードはガーネを引き連れ、その場を離れました。

ガーネたちは幾らも歩かない内に、また下方へと続く階段に辿り着きます。

「また階段ですか？」「ああ、だが、ここが最後だよ。この下が正真正銘の採掘現場だ」

階段を降りていく途中で、ガーネはパードに尋ねます。

「ここはさっきの場所と違って、暖かくありませんね」「まぁ、採掘現場だからな。近くにあっても、向こうとは違った地層なんだろう。本当はもっと暖かい方が、オレとしても嬉しいんだが」

階段を底まで降りて、少し歩いたガーネたちは、抉られた地層を目の当たりにします。

「ここでしょうか？」

「そうだ、ガーネ。ここで採掘するんだ。さぁ、採掘工具を取り出すか」

パードはリュックサックから、工具を取り出し、組み立て始めます。ガーネもそれに見習いながら、組み立てを始めました。

「これが削り取る岩石の大きさを設定するスイッチ。こっちはその種類を選別するスイッチだ。設定はこのままでいい。電源ボタンはここだ。これをオンにして、このレバーを握れば、自動的にこの工具は作動してくれる」

パードはガーネに工具の使い方を説明します。その後、実際にそ

れを操作してみせました。
「ガーネ、これだよ。この黄色い岩盤の鉱石が、俺たちが欲しがっている物なんだ」
パードはそう言って、その工具を動かし、岩盤を削り取っていきます。削り取られた岩石の内、パードたちが必要とする鉱石のみが次々と、工具に繋がっている袋に取り込まれ、それ以外は捨てられていきました。
「なるほど。そうやるんですね」ガーネも見様見真似でやってみます。
最初の内は、岩石を削り取る際の振動や岩石を排出する勢いで、思うように操作出来ませんでしたが、それもやがて慣れてきたのか、少しずつ採掘量が増えていったのです。
作業は順調でしたが、目的の量を採掘するには、まだまだ時間が掛かりそうです。ガーネたちは長時間の作業に耐えれるよう、作業の合間に一定の休憩時間を設ける事にしたのです。

最初の休憩時間がやって来ました。二人は工具を足元に置き、傍にある岩の上に腰を降ろします。
「どうだ、ガーネ。採掘の感想は？」
「器具の振動とかそういうものに慣れれば、操作そのものは大した事は無いみたいなんですが……　それにしても見掛けほど、含有量は少ないみたいですね。ほら、袋の量に比べて足元に捨てられた石屑の方が圧倒的に多いですよ」
「そうなんだ。オレも最初は楽勝と思っていたんだがな。実際やってみると、そんなに多く無いんだ」
「一体、どのくらい掛かるんですか？」
「そうだな。オレの経験から言えば、後、数時間ぐらいだと思う。だが、のんびりとやっている訳にはいかないんだ。帰りにはまたこの森を抜けなきゃいけないからな。夜になれば俺たちより夜目が利く「雪狼」が圧倒的に有利になるから、ここを抜け出すのが困難に

なってしまうんだ」
　ガーネたちは早めに休憩を済ませ、足元に捨てられた石屑を片付けた後、先程と同じ単調な作業に戻ります。作業と休みを繰り返し続け、やがて、二人の工具に繋がっている袋は、採取した岩石で一杯になりました。

　パードは自分とガーネの工具に繋がっていた袋を外して、採取した鉱石の総重量を確認しました。
「よし。これだけ採れれば、当分は困らない筈だ。ガーネ、これで作業を終わりにして、レイラたちのところへ戻るとするか。とは言っても、ここを撤退する前に、後片付けをしておかないといけないな。後で見つかったら、うるさいんだ。だから、早くやってしまおう」
　パードの言葉に従って、ガーネもパードと一緒に、足元に散乱している石屑を脇の方に片付けます。その作業が済むと、ガーネたちは採取した鉱石の入っている袋をリュックサックに収納しました。
「これだけでも、だいぶ重いですが、この採掘工具も持って帰るのですか？」
「いいや、それは置いていっていい。定期的に軍がここにやって来て、それを回収してくれるからな」
「それはよかった。助かりましたよ。これも持って、あの森を脱出するのは不可能に近いですからね」「全くだ」
　ガーネとパードはリュックサックを背負って、採掘現場を後にしました。

第１０話「ブリザード」？―１（終）

第１０話「ブリザード」？－２

第１０話「ブリザード」？－２

二人は階段を上がりました。上にあがると、あの異様な臭気が、また鼻につきます。

「さてと。あいつらは、どこにいるのかな」

パードはそう呟きながら歩き、その後にガーネが続きました。さっき、トラたちと別れた温泉場へ近づくと、その岩場にトラとレイラの姿が見えて来ました。二人とも真っ赤な顔と、ぐったりとした様子で、その身体を大きな岩の上に横たえていたのです。

ガーネは地の底から吹き出ている蒸気と匂いに、二人ともやられたんじゃないかと考え、慌ててトラの元に駆け寄りました。

「トラ、一体、これは？」

「ガーネ。あたし、もう駄目。のぼせたぁー」

「さっきから、ずっと入っていたんですか？」

「ううん。出たり入ったり。楽しかったんだけどね」

「そうですか。ほっとしましたよ。それで、レイラさん。レイラさんはどうしたんですか？」

「……トラさんが気持ち良さそうに入っているのを見たら、アタシもつい……　ねっ」

今でこそ服をちゃんと着ていますが、どうやらレイラさんも温泉に入ったみたいです。

二人の言葉に、ガーネは何でも無い事を知って、ほっとしました。ですが……

「レイラさーん。酷いじゃないですか。オレと二人っきりで、ここに来た時は、いつも足湯だけで済ますのにぃー」

パードは不満気に言いながらも、嬉しそうな顔をしています。

「へへへへへ、レイラお嬢さん。ご気分が悪いようですね。ここは

一つ、オレが介抱して差し上げましょう」
パードがもみ手をしながらレイラへと、にじり寄ります。そして今まさに、その身体に手を触れようとした、その時。
あんなに気だるそうな感じだったレイラの眼がカッと見開きます。次の瞬間、その綺麗な足を振り上げ、パードの顔面を蹴り飛ばしました。パードは、いきなりの攻撃に顔が変形し、足元がふらついていましたが、こんな貴重な機会を逃してたまるもんかと、半ば無意識の中、再びレイラに接近します。
そんなパードに対し、レイラは危機を感じたのでしょう。素早く立ち上がり、続けざまに蹴りを入れます。
「うっ！」レイラの攻撃をまともに喰らい、引っくり返ったパードでしたが、なんのこれしきと、幾らも経たない内に立ち上がり、レイラへと向かって行ったのです。
レイラは拳を振るい、パードの顔面へ、その一撃を放ちました。パードはその力に思わず上体を仰け反らせ、倒れそうになりますが、先程の蹴りよりは破壊力に乏しかったのでしょう。また直ぐに体勢を整え、向かって行ったのです。

そんな二人の様子を、トラとガーネは、ぼーっと眺めていました。最初は「あの二人、何か楽しい事をやっているな」ぐらいにしか思っていなかったのです。
ですが、ずっと見ている間に、ガーネの心に変化が生じました。やられてもやられても、突き進んでいくパードの「不屈の闘志」に感銘を受けたのです。出来る事なら自分も手伝って、パードの思いを叶えさせてやりたいとすら思ったのです。ですが、パードのぼこぼこにされた顔を見ると、どうしても行動に移る事が出来ず、「ごめんなさい」と心の中でパードに詫びるしかありませんでした。
一方、トラはレイラが撃ち出す一撃一撃に喝采を送っていましたが、しばらくするとレイラの攻撃が弱くなっている事に気が付いたのです。

「お風呂上がりのせいで眠気を催して、身体が思うように動けなくなっているのね。これ以上、この状態が続けば、確実にレイラが危なくなるわ」そう判断したトラは、ガーネに囁きます。
「ねぇ。もうそろそろ、止めさせた方がいいんじゃない？」
ガーネはその言葉を聞いて「やっぱり、トラもパードのあの姿に、心を打たれたのに違いない」と思いました。「確かに、このままではパードが壊れてしまうかも知れません」ガーネの心の中では、その懸念が膨らんでいったのでした。
トラとガーネの思いは完全にすれ違っていましたが、止めさせよう、という点では同じでした。ガーネはパードにとって辛い事になるであろう行動を、泣く泣く起こす決心をしたのです。

「レイラさーん。イッヒッヒッヒッ」
力が弱まって来たようですね。もうこれまでですよ、と勝利宣言を上げんばかりに舌舐めずりしながら、妙な手つきでパードはレイラへと歩み寄ります。
レイラは恐怖で思わず右手を懐の中に入れます。「雪狼」を倒した、あのガンを引き出そうとしたその時、ガーネがパードに声を掛けてきました。
「さぁ、パードさん。私たちも温泉でしばし寛ぐことにしましょう」
ガーネはパードの耳を引っ張って、奥へと連れて行きます。
「こら、ガーネ。離せ、離すんだ。お前、判っているのか。こんな機会はもう二度と……　こ、こら、そう引っ張るな」
「さぁ、早く入りましょう。温泉が私たちを待っていますよ」
「待て、ガーネ。男同士で入ったってつまらないじゃないか。は、早く、離せ！」
ガーネは、もがきながら哀願するパードを無視して、どこへとも無く消えて行きました。
レイラは、しばらくその光景をきょとんとして眺めていましたが、やがて、トラの方を振り向きます。

「ねぇ、トラさん。ちょっと聞いていいかしら」
「うん？　何なの、レイラ」
「アタシのところのパードはあの通りの人だけど、あなたのところのガーネは随分とドライね。女性に興味は無いのかしら」
「別に。普通だと思うわ。ただ、あの人の一番の関心はあたしだからら」
「ふーん。猫マニアなのかしら」
「いいえ。多分、あなたより、あたしの方が魅力的だからじゃないかと思うの」
「へぇ……　あっ、そう」
レイラの頭が痛くなったのは、単にここの環境のせいだけでは無いようでした。

一方、ガーネとパードは頭にタオルを乗せた状態で、並んで温泉に入っていました。
「いやあ、やっぱり、寒い場所は温かい温泉が一番ですね」ガーネは嬉しそうです。
「そうかい。オレは、隣がレイラなら最高だったんだがね」パードは不満そうです。
そんな会話をしている二人に、レイラとトラが近づいて来ます。
「ああっ！　やっぱり、オレの気持ちが通じたんだ。ほら、ガーネ。彼女がやって来る」
「いや、着替えを持って来たようです。帰るための支度でしょう」
「なんだ。つまらん」
それでもパードは一抹の望みを託し、レイラに混浴を求めましたが、レイラはパードの頭を掴んで、温泉の中に沈ませます。
パードは苦しさのあまり手を上げてもがいていましたが、やがてその手もガクッと温泉の中に消えていきます。ですが直ぐに身体全体が、うつ伏せの状態で、ぷかぷかと浮いてきたのです。
「まだ、生きているのかしら」トラが自分の近くへと漂って来た、

その身体をツンツンと前足で小突きます。
「どれどれ」ガーネは、その脈を調べます。「ええ。残念ですが、まだ生きていますよ」
「どう？　今の内に、殺っちゃわない？」レイラが嬉しそうに提案します。
「いえ、帰りも「雪狼」に出会うんですよ。戦力を減らすわけにはいかないでしょう」
「それもそうね。ちぇっ、運がいい奴」レイラはガーネの答えに下唇を噛んで悔しがります。
　知らない人が聞いたら、悪党たちが会話しているんだとしか思えない内容でした。
「こんな悪党がのさばっているから、いつまで経っても良い世の中にならないんだわ」この会話の締めくくりとして、トラは自分がその悪党みたいだなどと、これっぽっちも認識する事無く、パードをなじっていました。
　結局、パードは呼吸が苦しくなって自分で目を覚ますまで、温泉の水面上に浮かんでいたのです。

　レイラは目の前の仲間に、持ってきた水筒からコーヒーを入れて手渡します。
「さぁ、どうぞ。トラさんのは薄めにしてあるから、飲める筈よ」
「レイラさん、有難うございます」「レイラ、有難う」「よっ、済まんな」
　温泉での一件など、何事も無かったかの様に穏やかな感じがするその中で、三人と一匹は談笑し合っています。
「ところで、レイラさん」「何？　ガーネ」
「さっき、「雪狼」に襲われた時」「えっ、ガーネ。そんな事があったの？」
　トラが不思議そうに尋ねてくるので、ガーネは首を傾げていましたが、やがて気が付きました。

「そう言えば、トラは、森の中では私の内ポケットに居たんでしたね」「うん、眠ってた」

それはそれは羨ましい。と、ガーネは愚痴をこぼした後、話を続けました。

「あの時、レイラさんがガンで「雪狼」を撃ってくれたので、私やトラは事無きを得ましたが、あの射撃の腕前は相当なものでしたね。何しろ「雪狼」の額を貫通していたんですから。一体、いつから、あんな風に撃てる様になったんですか？」

「ああ、あれね」レイラはコーヒーを一口啜ります。

「この国の人は、学生から社会人になる前の数年間、国へのご奉仕と称して、軍隊に勤務しなければならないのよ。その期間が終わった後、その軍隊から要望されたり、あるいは自分から志願した場合は、そのまま軍隊に入隊する事が出来るの。それ以外は自分で職を探す事になるわね。アタシの場合、そこで射撃訓練した事が今になって生かされているって訳よ」

「だけどな。オレも確かに軍隊に行っていたけどよ。そんなにうまくはならなかったな。第一、その期間だけなら射撃訓練なんか、そう度々受ける機会なんて無かった筈だがな。他にやる事も一杯あるし。雑用とかな」

「人によるんでしょ」レイラはさり気なく言います。

「それと、アタシの場合は軍隊勤務が終了した後、射撃に興味を抱くようになっていた時期があってね、その時、銃所持の免許を取得したの。今でも個人的に練習をする事があるし、うまくなったのは、きっと、そのせいじゃないかしら」

「へぇ。それじゃあ、いずれ何等かの大会に出て、優勝でもしようかとか思っているの？」

トラがそう言うと、レイラの眼が輝きます。

「そうね、それもいいわね。トラさん、有難う。いいアドバイスを貰ったわ」

「トラ、よかったですね。トラのおかげで一人の人間が、その将来

へと繋がる目標を決める事が出来ましたよ」
ガーネはトラを賞賛しました。
「ええーっ、そんなぁ。あたしはただ言ってみただけよ」
とは言うものの、トラは二人に褒められて、まんざらでも無さそうに、頭を掻いて照れています。
「一体、なんなんだ。こいつら」パードは仲間外れにされたような気持ちになって、僻んでいました。

目的の作業も無事に終わり、温泉にも入れる事が出来た三人と一匹は、いつ、ガイル所長と合流しても構わない状況でした。ですが、その場にいる誰もが、これから起きる「雪狼」との再戦や、あの陰気な所長との合流に、躊躇してしまって言い出す事が出来ません。
ガーネは少しでも時間を稼ごうと、別の質問をぶつけてみることにしました。
「この前、レイラさんから、ここに来た理由を教えて貰ったんですが、パードさんはどうして、あのガイル所長の手先、いや助手になったんですか？」
「オレは国の役所の一つで働いていたんだが、その上司から頼まれたんだ。しばらくの間、この教授の助手をしてくれないかってな。今、あの研究所は軍の管理下にあるが、本来はうちの役所が管理している建物だったんだよ」
「ふーん。だけど、ガイルって人、微生物研究所の所長さんなんでしょう？　という事は二人もその関連の勉強をしていたの？」
トラは「レイラは判るのよ、でも、パードはどうなのかしら」と疑っていたのです。でも、実際はその逆でした。
「ああ。オレたち兄弟は生物学を専攻していたしな」「えっ、ご兄弟がおられるんですか？」
「ああ、弟がな。まぁ、オレよりはましかもな」パードは謙遜の意味を込めて言いました。
「それはよかったですね」とガーネ。

「本当、運がいいのね」とトラ。
「ええ、本当に。あなたに似なくてよかったわね」とレイラ。
「お前等。何かオレに恨みでもあるのか？」再び疎外感を覚えるパードでした。
「それで、レイラさんは？」ガーネは、これ以上、パードを追い詰めるのはまずいと判断して、レイラに言葉を振ったのです。
「あ、アタシ？　あたしは……　そう言った勉強はしていないわね。パードに較べれば、やっぱり、アタシはただのバイトでしか無いのよ。知人の紹介を断われなくてここに来ているだけ。だから、ここでは素人さんでも出来る事をやっているのに過ぎないわ」
なるほど。見掛けとは違ってパードさんの方が、この研究所に相応しい人材って事ですね。レイラさんはバイトに過ぎないと。ですが……
ガーネは考え込みました。
レイラの言葉を鵜呑みにすれば、そう言えなくもありません。ですが、ガーネの心の中では、それを強く否定するものがあります。レイラが、この仕事に対して、時折見せるその表情や、その言動には、パードとは桁外れに強い目的意識を感じさせるものがあったからです。もっとも、この時のガーネには、それがどうしてなのかは知る由もありませんでした。

やがて時が経ち、いつまでも、そこに居られなくなりました。
「じゃあ、そろそろここを出ましょうか？　これ以上長居をすると、「雪狼」の数が増えていく一方だわ」
それを聞いたガーネは、ここに来た時、尋ねた質問に対する答えをまだ聞いていなかった事を思い出します。
「あっ、ここを出る前にちょっと尋ねたい事があるんですか？」
「えっ、何なの？」レイラが尋ねます。
「さっきも尋ねたと思いますが、何で、「雪狼」はこの中に入って来られないのでしょう？」

「ああ、その事か。そう言えば、その質問の途中だったな」パードは思い出します。
「奴らが来られないのは、この匂いのせいだよ。単に嫌いとかじゃなくて、弱いらしいんだ。この匂いは奴らの身体に、大きなダメージを与えてしまうらしい」
「なるほど、そうだったんですか。じゃあ、こうしたらどうです？　ここの温泉水を被ってみると言うのは？　匂いの為に近づけないんじゃないでしょうか？」
「おいおい、ガーネ。この外がブリザードだって事、忘れたんじゃないだろうな。そんな事をしたら、あっという間に身体全体が氷に覆われてしまうぞ。匂いだって、すぐに消えてしまだろうな」
「そうね。残念だけど、迎撃態勢を取って、このまま進むしか無いわ」
　パードとレイラは口を揃えて否定しました。
「ガーネ。やっぱり、駄目だと思うわ。さてと。それじゃあ、あたしは温泉でまだ眠いから、寝る事にするわね。じゃあ、ガーネ。内ポケットに、あたしを入れて頂戴」
　トラはガーネに、そうせがみました。
「判りました。では、どうぞ」ガーネはトラが手に乗った事を確認すると、自分の内ポケットへと滑り込ませます。
「じゃあ、みんな。後はよろしくね」この言葉を最後に、トラは内ポケットの中で深い眠りへと誘われていったのです。
「本当にいい身分だなぁ。あの猫は」「本当、羨ましいわ」
　パードとレイラはため息を付いて、ガーネに言います。
「それはそうでしょう。トラはお姫様猫ですから」ガーネは満足そうに納得していました。
「その猫もアレだが、お前もお前だ」
　ガーネの言葉に聞いて、再びパードとレイラは、ため息を付くのでした。

表ではそんなガーネたちの思いとは別に、「雪狼」の咆哮が幾つも聞こえてきます。
「まずいな。もう、かなりの数がここにいるみたいだ」
「そうね。多分、もうガンだけでは、ここを切り抜けるのは無理みたいだわ」
レイラはそう言って、自分が抱えていた重そうなリュックサックを肩から降ろします。レイラは、そのチャックを開け、中から大きな機材を二つ取り出しました。
「もう、これに頼るしかないわね、はい、パード」レイラはそう言って、その内の大きい方をパードに放り投げます。またレイラも、パードに渡した物より小型ではありますが、同じタイプと思われる物を手に取って構えたのです。
「ええと。ひょっとして、それは」ガーネは恐る恐る尋ねてみました。
「もちろん、サブマシンガン。自動機銃だ。もうこれでしか、あいつらに対抗出来ない」
「そうね。ガーネも、覚悟してよ。一気に走り抜けるつもりだから」
パードとレイラはサブマシンガンを片手に、ガーネにそう告げたのです。

第10話「ブリザード」？ー2（終）

第１０話「ブリザード」？－２（後書き）

これで第１０話「ブリザード」の前半が終了です。今まで、お読み下さった方、深く感謝します。

今年の五月ぐらいから、このサイトにて書き始めましたが、少なからずお読み下さる人も居るので安心しました。今、流行ってるタイプのお話しでは決してありませんが、暇な時、このサイトに立ち寄って、お読み頂けるのであれば幸いと思っています。

さて、年内投稿は今回を持って終わりとします。次回からの後半部分は、二月ぐらいからスタートする予定です。その際はまた、よろしくお願いします。

現在、午前０時を過ぎて、今日は２０１１年１２月２４日です。メリークリスマス。さて、今日はクリスマス・イブですね。みなさんがケーキを食べるのは今日２４日でしょうか？　それとも、明日２５日でしょうか？　いずれにしても、楽しいクリスマスのひとときをお過ごしください。

年内最後と言う事で、下記のメッセージを持って、今年最後の投稿を締めくくらせて頂きたいと思います。

良いお年を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1614t/

トラ・オブ・ラビリンス

2011年12月24日00時49分発行